独立行政法人国立文化財機構年報

平成３０年度

独立行政法人
国立文化財機構

平成 30 年度

新収品図版　〔東京国立博物館〕

購　　入

重要美術品
山水図押絵貼屏風

上衣・括袴　萌黄地向獅子丸龍卍蜀江文模様錦

青花人物図面盆

石室寺経塚出土品（銅製経筒）

能面　増女

寄　　贈

明賢集扇帖

ヘーヴァジュラ曼荼羅型

雛人形および雛道具

染付龍涛文壺
初代宮川香山作

白衣観音・山水図
狩野探幽筆

平成 30 年度

新収品図版　〔京都国立博物館〕

購　　入

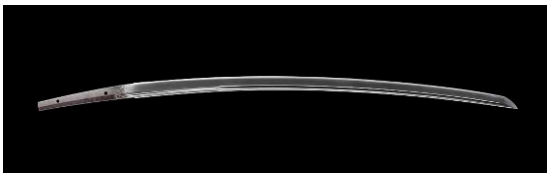
霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風　狩野永納筆

暮山図・澤瀉鶺鴒図扇面　橋本雅邦筆

松石図　葉文舟筆

濃茶麻地花車
杜若文様染繡帷子

梨撫子蒔絵楊弓箱



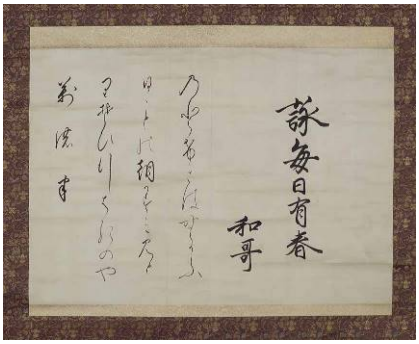
重要文化財　太刀　銘国吉

重要美術品
龍虎獣帯鏡

寄　　贈

蜆子和尚図　海北友松筆

夕顔蒔絵象嵌料紙・硯箱　笠翁銘



東山天皇宸翰和歌懐紙
（詠毎日有春和哥）

平成 30 年度

新収品図版　〔奈良国立博物館〕

購　　入

紙本墨画春日名号曼荼羅

絹本著色春日宮曼荼羅

法華経　巻第四残欠

金銅装説相箱

金銅鬼面五鈷杵

盛装男子埴輪

寄　　贈

般若心経(隅寺心経)

大般若経　巻第三百十六(断簡)

刺繍種子地蔵菩薩像

平成 30 年度

新収品図版　〔九州国立博物館〕

購　　入

国宝　刀　無銘則房

如来坐像

牡丹螺鈿長方盆

白地立木文様更紗掛布

東大寺関係文書

霰地真形釜欠風炉

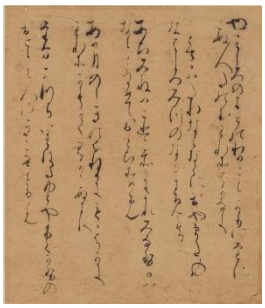
深鉢形土器
（伝茨城県下妻市出土）

長崎港図　川原慶賀筆

列祖図冊　逸然性融筆

寄　　贈

大坪流馬術印可状及び馬術図



古今和歌集切「やましろの」
伝寂蓮筆

染付秋草文輪花皿

驥子麟児　青山杉雨筆

金箔押輪花天目台

平成３０年度　年報　目次

平成30年度新収品図版

Ⅰ　30年度自己点検評価報告書　評定状況・・ 1

Ⅱ　30年度自己点検評価報告書　個別表・・・ 13

ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承

①博物館の施設設備の整備・・ 18

②有形文化財の収集等

1)有形文化財の収集・・ 22

2)寄贈･寄託品の受入れ等・・ 26

③有形文化財の管理・保存・修理等

1)有形文化財の管理・・ 30

2)有形文化財の保存・・ 38

3)有形文化財の修理

3)-1計画的な修理及びデータの蓄積・・ 42

3)-2科学的な技術を取り入れた修理・・ 46

4)文化財修理施設等の運営・・ 51

（２）展覧事業

①平常展・・ 54

②特別展等

1)特別展・・・ 59

2)海外展・・・ 80

③観覧環境の向上等

1)快適な観覧環境の提供・・・ 82

2)来館者の満足度調査等の実施､サービスの改善等・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87

（３）教育・普及活動

①教育活動の充実等

1)学習機会の提供・・・ 91

2)ボランティア活動の支援・・ 102

3)大学との連携事業等の実施・・ 106

4)国内外の有形文化財の保存･修理に関する人材育成への寄与・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 110

5)博物館支援者増加への取組・・ 114

②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実

1)有形文化財に関する情報の発信・・ 118

2)資料の収集と公開・・ 122

3)広報活動の充実

3)-1広報計画の策定と情報提供・・・ 126

3)-2マスメディアや近隣施設との連携強化等による広報活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131

3)-3広報印刷物､ウェブサイト等の充実・・・ 135

（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究

外部資金を活用した調査研究・・・ 139

①有形文化財の展覧事業･教育普及活動等に関連する調査研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140

②その他有形文化財に関連する調査研究・・ 204

③国内外の博物館等との学術交流等・・ 221

④調査研究成果の公表・・ 225

（５）国内外の博物館活動への寄与

①国内外の博物館等への有形文化財の貸与・・・ 229

②国内外の博物館等への援助・助言等・・・ 233
２．文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施
調査研究の評価軸及び評価指標等・・・ 239
（１）新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究
1)我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究・・・ 244
2)建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究・・・ 248
3)歴史資料・書跡資料に関する調査研究・・・ 249
②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査及び研究
1)重要無形文化財の保存・活用に関する調査研究等・・・ 250
2)重要無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究等・・・ 251
3)無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集等・・・ 252
③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究
1)史跡・名勝の保存・活用に関する調査研究・・・ 253
2)古代日本の都城遺跡に関する調査研究・・・ 255
3)重要文化的景観等の保存・活用に関する調査研究・・・ 265
4)全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究・・・ 266
5)水中文化遺産に関する調査研究・・・ 269
（２）科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
①文化財の調査手法に関する研究開発の推進
1)デジタル画像の形成方法等の研究開発・・・ 270
2)埋蔵文化財の探査・計測方法の研究開発・・・ 271
3)年輪年代学を応用した文化財の科学的分析方法の研究開発・・・ 272
4)動植物遺存体の分析方法の研究開発・・・ 273
②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究
1)生物被害の予防と対策に関する調査研究・・・ 274
2)文化財の保存環境と維持管理に関する調査研究・・・ 275
3)可搬型分析機器を用いた文化財の材質・構造、及び保存状態に関する調査研究・・・ 276
4)屋外文化財の劣化対策に関する調査研究・・・ 277
5)文化財の修復技法及び修復材料に関する調査研究・・・ 278
6)考古遺物の保存処理法に関する調査研究・・・ 279
7)遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究・・・ 280
8)建造物の彩色に関する調査研究・・・ 281
9)近代文化遺産の保存・修復に関する調査研究・・・ 282
10)高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究・・・ 283
（３）文化遺産保護に関する国際協働
①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進
1)文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信・・・ 286
2)文化遺産保護協力事業の推進・・・ 288
3)文化遺産の保存・修復に関する人材育成等・・・ 291
②アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する調査研究・・・ 294
（４）文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
①文化財情報基盤の整備・充実・・・ 295
②調査研究成果の発信・・・ 298
③展示公開施設の充実・・・ 302
（５）地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
①文化財に関する研修の実施・・・ 304
②文化財に関する協力・助言等・・・ 306
③平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力・・・ 319
④連携大学院教育の推進・・・ 324
⑤文化財等の防災・救援等への寄与
1)体制づくり・・・ 326
2)調査研究等の実施
ア　文化財等の防災・救援に関する調査研究と、情報の収集・発信・・・ 327
イ　保存科学等に基づく被災文化財等の劣化診断、保存環境、安定化処置及び修理等に関する研究・・ 328
ウ　無形文化遺産の防災と被災後の継承等に関する研究・・・ 328
3)人材育成等の実施・・・ 329
【受託研究】・・・ 330

ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置
１．業務改善の取組
（１）組織体制の見直し･････････････････････････････････ 379
（２）人件費管理等の適正化･･･････････････････････････････ 380
（３）契約・調達方法の適正化･･････････････････････････････ 381
（４）共同調達等の取組の推進･･････････････････････････････ 382
（５）一般管理費等の削減
①　機構内の共通的な事務の一元化による業務の効率化････････････ 383
②　計画的なアウトソーシング･･････････････････････････ 384
③　使用資源の減少･･････････････････････････････････ 385
２．業務の電子化･････････････････････････････････････ 386
３．予算執行の効率化･･･････････････････････････････････ 387

ⅲ　財務内容に関する目標を達成するためにとるべき措置
１．自己収入拡大への取組････････････････････････････････ 388
２．固定的経費の節減　･･････････････････････････ (p. 383～385と同じ)
３．決算情報・セグメント情報の充実等･････････････････････････ 396

ⅳ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画
１．予算（中期計画の予算）････････････････････････････････ 397
２．収支計画･･････････････････････････････････････ 397
３．資金計画･･････････････････････････････････････ 397

ⅴ　その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置
１．内部統制･･････････････････････････････････････ 398
２．その他
（１）自己評価････････････････････････････････････ 399
（２）情報セキュリティ対策･･････････････････････････････ 400
３．施設設備に関する計画････････････････････････････････ 401
４．人事に関する計画
（１）中長期的な人事計画の策定････････････････････････････ 402
（２）評価制度の導入･････････････････････････････････ 402
（３）能力や適性に応じた採用・人事の実施･･････････････････････ 403
（４）女性の活躍の推進････････････････････････････････ 403
（５）職員のキャリアパス形成のための研修･･････････････････････ 404

Ⅲ　施設概要･･ 405

Ⅳ　財務諸表
１．平成３０年度財務諸表････････････････････････････････ 409
２．平成３０年度決算報告書･･･････････････････････････････ 437
３．平成３０年度事業報告書･･･････････････････････････････ 439

Ⅴ　評価
１．独立行政法人国立文化財機構の平成３０年度における業務の実績に関する評価･･････････ 461
２．独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価
外部評価委員会報告書･･････････････････････････････････ 503

Ⅵ　日誌
１．法人全体及び７施設共通事項･････････････････････････････ 563
２．文化財活用センター･････････････････････････････････ 564
３．文化財防災ネットワーク推進室････････････････････････････ 565
４．東京国立博物館･･･････････････････････････････････ 566
５．京都国立博物館･･･････････････････････････････････ 569
６．奈良国立博物館･･･････････････････････････････････ 572
７．九州国立博物館･･･････････････････････････････････ 575

８.東京文化財研究所…………………………………………………………………… 579
９.奈良文化財研究所…………………………………………………………………… 582
10.アジア太平洋無形文化遺産研究センター………………………………………… 584

Ⅶ　運営委員・評議員・外部評価委員名簿及び組織図・役職員名簿
運営委員･評議員･外部評価委員名簿…………………………………………………… 585
独立行政法人国立文化財機構組織図…………………………………………………… 592
独立行政法人国立文化財機構役職員名簿……………………………………………… 598

附属資料　：３０年度自己点検評価報告書 統計表

Ⅰ　平成３０年度　自己点検評価報告書　評定状況

自己点検評価報告書　評定状況　補足説明

○年度計画の評定及び中期計画の評定について、定性的観点、定量的観点に留意しつつ以下の基準で総合的に評価している。

Ｓ：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている
Ａ：所期の目標を上回る成果が得られている
Ｂ：所期の目標を達成している
Ｃ：所期の目標を下回っており、改善を要する
Ｄ：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する
※Ｂ評定が標準となる

平成30年度自己点検評価報告書　評定状況について

	30年度	30年中期	29年度	29年中期
S評定	9	3	9	2
A評定	81	53	73	51
B評定	243	261	296	312
C評定	0	0	1	1
D評定	0	0	0	0

全事業件数　333

（自己点検評価報告書）事業名	処理番号	施設名	自己評価 年度	自己評価 中期	頁	備考
Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置						
1.有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信						
（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　年度:B評定　中期:B評定		S評定	1	1		
		A評定	3	2		
		B評定	32	33		
事業件数　36		C評定	0	0		
①博物館の施設設備の整備			B	B		
	1110A	東博	B	B	18	
	1110B	京博	B	B	19	
	1110C	奈良博	B	B	20	
	1110D	九博	B	B	21	
②有形文化財の収集等			A	B		
1)有形文化財の収集	1121A	東博	B	B	22	
	1121B	京博	A	B	23	
	1121C	奈良博	B	B	24	
	1121D	九博	B	B	25	
2)寄贈・寄託品の受入れ等	1122A	東博	B	B	26	
	1122B	京博	A	A	27	
	1122C	奈良博	B	B	28	
	1122D	九博	S	S	29	
③有形文化財の管理・保存・修理等			B	B		
1)有形文化財の管理	1131A1	東博	B	B	30	
	1131A2	東博	B	B	31	
	1131B1	京博	B	B	32	
	1131B2	京博	B	B	33	
	1131C1	奈良博	B	B	34	
	1131C2	奈良博	A	A	35	
	1131D1	九博	B	B	36	
	1131D2	九博	B	B	37	
2)有形文化財の保存	1132A	東博	B	B	38	
	1132B	京博	B	B	39	
	1132C	奈良博	B	B	40	
	1132D	九博	B	B	41	
3)有形文化財の修理						
3)-1計画的な修理及びデータの蓄積	1133-1A	東博	B	B	42	
	1133-1B	京博	B	B	43	
	1133-1C	奈良博	B	B	44	
	1133-1D	九博	B	B	45	
3)-2科学的な技術を取り入れた修理	1133-2A1	東博	B	B	46	
	1133-2A2	東博	B	B	47	
	1133-2B	京博	B	B	48	
	1133-2C	奈良博	B	B	49	
	1133-2D	九博	B	B	50	
4)文化財修理施設等の運営	1134B	京博	B	B	51	
	1134C	奈良博	B	B	52	
	1134D	九博	B	B	53	

(2)展覧事業	年度:B評定　中期:B評定		S評定	5	0		
			A評定	7	2		
			B評定	25	19		
	事業件数　37		C評定	0	0		
① 平常展				B	B		
1)平常展(来館者数・展示替え件数)	1211A	東博		A	A	54	
	1211B	京博		B	B	55	
	1211C	奈良博		B	B	56	
	1211D	九博		B	B	57	
2)平常展(満足度調査)	1212ABCD	4館		B	B	58	
② 特別展等				A	B		
1)特別展(開催回数)	1220アABCD	4館		B	B	59	
1)特別展(満足度調査)	1220イA	東博		B	B	60	
	1220イB	京博		A	B	61	
	1220イC	奈良博		B	B	62	
	1220イD	九博		B	B	63	
ア 「アラビアの道－サウジアラビア王国の至宝」	1221Aア	東博		B	ー	64	
イ 創刊記念『國華』130 周年・朝日新聞 140 周年 特別展「名作誕生―つながる日本美術」	1221Aイ	東博		B	ー	65	
ウ 特別展「縄文-1 万年の美の鼓動」	1221Aウ	東博		S	ー	66	
エ 特別展「京都 大報恩寺 快慶・定慶のみほとけ」	1221Aエ	東博		B	ー	67	
オ 東京国立博物館・フィラデルフィア美術館交流企画	1221Aオ	東博		B	ー	68	
カ 特別企画「中国近代絵画の巨匠　斉白石」	1221Aカ	東博		B	ー	69	
キ 特別展「顔真卿　王羲之を超えた名筆」	1221Aキ	東博		S	ー	70	
ク 特別展「東寺展」							
ア 特別展「池大雅　天衣無縫の旅の画家」	1221Bア	京博		B	ー	71	
イ 特別展「京のかたな　匠のわざと雅のこころ」	1221Bイ	京博		S	ー	72	
ア 創建1250年記念特別展「国宝　春日大社のすべて」	1221Cア	奈良博		S	ー	73	
イ 修理完成記念特別展「糸のみほとけ-国宝　綴織當麻曼荼羅と繡仏-」	1221Cイ	奈良博		B	ー	74	
ウ 特別展「第70回　正倉院展」	1221Cウ	奈良博		A	ー	75	
ア 特別展「王羲之と日本の書」	1221Dア	九博		A	ー	76	
イ 特別展「至上の印象派展　ビュールレ・コレクション」	1221Dイ	九博		S	ー	77	
ウ 明治150年記念　特別展「オークラ　コレクション」(古今の美を収集した、大倉父子の夢)	1221Dウ	九博		A	ー	78	
エ 特別展「京都・醍醐寺―真言密教の宇宙―」	1221Dエ	九博		B	ー	79	
2)海外展							
江戸絵画名品展	1222Aア	東博		A	B	80	
縄文―日本における美の誕生	1222Aイ	東博		B	B	81	
③観覧環境の向上等				B	B		
1)快適な観覧環境の提供	1231A1	東博		B	B	82	
	1231A2	東博		B	B	83	
	1231B	京博		A	A	84	
	1231C	奈良博		B	B	85	
	1231D	九博		B	B	86	
2)来館者の満足度調査等の実施、サービスの改善等	1232A	東博		B	B	87	
	1232B	京博		B	B	88	
	1232C	奈良博		B	B	89	
	1232D	九博		B	B	90	

(3) 教育・普及活動	年度:B評定 中期:B評定		S評定	0	0		
			A評定	11	4		
	事業件数 48		B評定	37	44		
①教育活動の充実等				B	B		
1)学習機会の提供	1311H	本部		B	B	91	
	1311A1	東博		B	B	92	
	1311A2	東博		A	B	93	
	1311A3	東博		A	A	94	
	1311B1	京博		A	B	95	
	1311B2	京博		A	B	96	
	1311C1	奈良博		B	B	97	
	1311C2	奈良博		B	B	98	
	1311D1	九博		B	B	99	
	1311D2	九博		A	B	100	
	1311D3	九博		B	B	101	
2)ボランティア活動の支援	1312A	東博		A	B	102	
	1312B	京博		B	B	103	
	1312C	奈良博		B	B	104	
	1312D	九博		B	B	105	
3)大学との連携事業等の実施	1313A	東博		B	B	106	
	1313B	京博		B	B	107	
	1313C	奈良博		B	B	108	
	1313D	九博		B	B	109	
4)国内外の有形文化財の保存・修理に関する人材育成への寄与	1314A	東博		B	B	110	
	1314B	京博		B	B	111	
	1314C	奈良博		B	B	112	
	1314D	九博		B	B	113	
5)博物館支援者増加への取組	1315A	東博		B	B	114	
	1315B	京博		B	B	115	
	1315C	奈良博		B	B	116	
	1315D	九博		B	B	117	
②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実				B	B		
1)有形文化財に関する情報の発信	1321HA	活用ｾﾝﾀｰ・東博		B	B	118	
	1321B	京博		B	B	119	
	1321C	奈良博		A	A	120	
	1321D	九博		B	B	121	
2)資料の収集と公開	1322A	東博		A	B	122	
	1322B	京博		B	B	123	
	1322C	奈良博		A	A	124	
	1322D	九博		B	B	125	
3)広報活動の充実							
3)-1広報計画の策定と情報提供	1323-1H	本部		B	B	126	
	1323-1A	東博		B	B	127	
	1323-1B	京博		B	B	128	
	1323-1C	奈良博		B	B	129	
	1323-1D	九博		B	B	130	
3)-2マスメディアや近隣施設との連携強化等による広報活動	1323-2A	東博		A	B	131	
	1323-2B	京博		B	B	132	
	1323-2C	奈良博		B	B	133	
	1323-2D	九博		B	B	134	
3)-3広報印刷物、ウェブサイト等の充実	1323-3A	東博		B	B	135	
	1323-3B	京博		A	A	136	
	1323-3C	奈良博		B	B	137	
	1323-3D	九博		B	B	138	

(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究　年度:B評定　中期:B評定			S評定	2	1		
			A評定	17	14		
			B評定	71	75		
事業件数　90			C評定	0	0		
外部資金を活用した調査研究	1400ABCD	4館	B	B	139		
①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究			B	B			
1)収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究							
ア a.特別調査(「法隆寺献納宝物」(第40次))	1411Aｱ-1	東博	B	B	140		
ア b.特別調査(「書跡」第16回)	1411Aｱ-2	東博	A	B	141		
ア c.特別調査(「工芸」第10回)	1411Aｱ-3	東博	B	B	142		
ア d.特別調査(「彫刻」第8回)	1411Aｱ-4	東博	B	B	143		
ア e.特別調査(「絵画」第3回)	1411Aｱ-5	東博	A	A	144		
イ 関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査研究	1411Aｲ	東博	B	B	145		
ウ 油彩画の材料・技法に関する共同調査	1411Aｳ	東博	B	B	146		
エ 仏教美術等の光学的手法による共同研究	1411Aｴ	東博	A	A	147		
オ 東洋民族資料に関する調査研究	1411Aｵ	東博	B	B	148		
カ 「上杉家伝来の能面・能装束」ほか特集に関連する調査研究	1411Aｶ	東博	A	A	149		
キ 科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金等外部資金を活用した調査研究	1410ABCD	東博					
(ア)日本染織コレクションの形成とその美術史的価値観の確立に関する研究	1410ABCD	東博					
(イ)絵巻を中心とした古代・中世絵画の伝来に関する研究	1410ABCD	東博					
(ウ)近世狩野派を中心とした図様継承と絵画制作システムに関する研究	1410ABCD	東博					
(エ)平等院鳳凰堂空間の荘厳と機能に関する総合的研究	1410ABCD	東博					
(オ)日本刀における連続と変容の表現に着目した歴史的展開の考察に関する研究	1410ABCD	東博					
(カ)大小摺物(絵暦)の美術史及び文化史に関する総合的研究	1410ABCD	東博					
ク 「明治150年記念　書と絵が語る明治」に関連する調査研究	1411Aｸ	東博	B	B	150		
ク 特集「岡野繁蔵コレクション―インドネシア由来の染織と陶磁器」に関連する調査研究	1411Aｹ	東博	B	B	151		
ケ 特集「ワヤン―インドネシアの人形芝居―」に関連する調査研究	1411Aｺ	東博	B	B	152		
コ 特集「京都御所 飛香舎(藤壺)の調度」に関連する調査研究	1411Aｻ	東博	B	B	153		
サ 特集「白磁の誕生と展開」に関連する調査研究	1411Aｼ	東博	B	B	154		
シ 特集「ラファエル・コランと黒田清輝」に関連する調査研究	1411Aｽ	東博	B	B	155		
ス 特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」に関連する調査研究	1411Aｾ	東博	B	B	156		
ア 京都周辺出土の考古遺物に関する調査研究	1411Bｱ	京博	B	B	157		
イ 訓点資料としての典籍に関する調査研究	1411Bｲ	京博	B	B	158		
ウ 陶磁に関する調査研究	1411Bｳ	京博	A	A	159		
エ 近畿地区社寺文化財の調査研究	1411Bｴ	京博	B	B	160		
オ 世期に作成された、書画の「極書」に関する基礎的研究	1410ABCD	京博					
カ 代陶磁器の生産技術に関する自然科学的研究	1410ABCD	京博					
キ 思渓版大蔵経刊行実態の解明－目録と遺例による実証的研究	1410ABCD	京博					
ク 特集展示「美麗を極める中国陶磁」に関する調査研究	1411Bｸ-1	京博	A	A	161		
ク 特集展示「百萬遍知恩寺の名宝」に関する調査研究	1411Bｸ-2	京博	A	B	162		
ク 特別企画「日中平和友好条約締結40周年記念　中国近代絵画の巨匠　斉白石」に関する調査研究	1411Bｸ-3	京博	B	B	163		
ク 特集展示「初公開！天皇の即位図」に関する調査研究	1411Bｸ-4	京博	A	A	164		
ク 特集展示「雛まつりと人形」に関する調査研究	1411Bｸ-5	京博	B	B	165		
ア 復元模写制作に伴う仏教絵画の調査研究	1411Cｱ	奈良博	B	B	166		
イ 古代の写経と聖教に関する基礎的研究	1411Cｲ	奈良博	B	B	167		
ウ 仏教工芸・上代工芸の総合的調査	1411Cｳ	奈良博	B	B	168		
エ 墳墓出土品の調査研究	1411Cｴ	奈良博	B	B	169		
オ 南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究	1411Cｵ	奈良博	S	A	170		
カ 東京文化財研究所との共同による仏教美術の光学的調査研究	1411Cｶ	奈良博	B	B	171		
キ 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術―特集　大宿所―」に関する調査研究	1411Cｷ	奈良博	A	A	172		
ク 特別陳列「覚盛上人770年御忌　鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興」に関する調査研究	1411Cｸ	奈良博	B	B	173		
ケ X線CTスキャナ等による彫刻・漆工・考古資料などの文化財に関する構造技法の調査研究	1411Cｹ	奈良博	B	B	174		
ア X線CTスキャナ等による文化財の構造技法解析に関する調査研究	1411Dｱ	九博	B	B	175		
イ 近世キリスト教に関する研究	1411Dｲ	九博	B	B	176		
ウ 高等学校が所蔵する歴史資料に関する研究	1411Dｳ	九博	B	B	177		
エ 特集展示「国宝　銅鐸絵画」に関する調査研究	1411Dｴ-1	九博	B	B	178		
エ 特集展示「全国高等学校考古名品展2018」に関する研究	1411Dｴ-2	九博	B	B	179		
オ インドネシアの装飾古墳に関する調査研究	1411Dｵ	九博	B	B	180		
水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業	1411Dｶ	九博	B	B	181		

	2)特別展等の開催に伴う調査研究					
	ア 特別展「京都 大報恩寺 快慶・定慶のみほとけ」に関する調査研究	1412Aア-1	東博	B	B	182
	ア 特別展「マルセル・デュシャンと日本美術」に関連する調査研究	1412Aア-2	東博	A	A	183
	ア 特別企画「中国近代絵画の巨匠 斉白石」に関連する調査研究	1412Aア-3	東博	B	B	184
	ア 特別展「顔真卿 王羲之を超えた名筆」に関連する調査研究	1412Aア-4	東博	A	A	185
	ア 特別展「国宝 東寺-空海と仏像曼荼羅」に関連する調査研究	1412Aア-5	東博	A	B	186
	ア 特別展「三国志」に関連する調査研究	1412Aア-6	東博	A	A	187
	ア 特別展「京のかたな 匠のわざと雅のこころ」に関する調査研究	1412Bア-1	京博	S	S	188
	ア 特別展「時宗二祖上人七百年御遠忌記念 国宝 一遍聖絵と時宗の名宝」に関する調査研究	1412Bア-2	京博	A	A	189
	ア 修理完成記念特別展「糸のみほとけ－国宝 綴織當麻曼荼羅と繡仏－」に関する調査	1412Cア-1	奈良博	B	B	190
	ア 特別展「第70回 正倉院展」に関する調査研究	1412Cア-2	奈良博	B	B	191
	ア 特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展」に関する調査研究	1412Cア-3	奈良博	B	B	192
	ア 特別展「明治150年記念 オークラコレクション」に関する調査研究	1412Dア-1	九博	B	B	193
	ア 特別展「新安沈船展（仮）」に関連する調査研究	1412Dア-2	九博	B	B	194
	3)文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究					
	ア レプリカやVR等先端技術を使った、文化財の活用についての調査・研究	1413AHア	本部	B	B	195
	ア 博物館環境デザインに関する調査研究	1413Aア	東博	B	B	196
	イ 博物館教育に関する調査研究	1413Aイ	東博	B	B	197
	ウ 凸版印刷と共同で実施するミュージアムシアターにおけるコンテンツの開発に関する調査研究	1413Aウ	東博	B	B	198
	エ ICTを利用した博物館見学ガイドの開発に関する調査研究	1413Aエ	東博	B	B	199
	ア 博物館教育及びボランティアに関する調査研究	1413Bア	京博	A	A	200
	ア 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究	1413Cア	奈良博	B	B	201
	ア NHKと共同で実施する高精細画像を活用したスーパーハイビジョンシアターにおけるコンテンツの開発に関する調査研究	1413Dア	九博	B	B	202
	イ 特別展のテーマに則した解説パネル・冊子・ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムに関する調査研究	1413Dイ	九博	B	B	203
②その他有形文化財に関連する調査研究				B	B	
	1)有形文化財の保存環境・保存修復並びに科学技術を活用した分析等に関する調査研究					
	ア 博物館の環境保存に関する調査研究	1421Aア	東博	B	B	204
	イ 美術品・輸送機関・梱包資材の振動特性情報を集積した安全輸送のためのシステム構築	1421Aイ	東博	B	B	205
	ア 修復文化財に関する資料収集及び調査研究	1421Bア	京博	B	B	206
	イ 文化財の製作・技法等に関わる材質構造調査・研究	1421Bイ	京博	B	B	207
	ウ 非破壊分析手法とその分析精度に係る調査研究	1421Bウ	京博	B	B	208
	ア 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境が文化財に与える影響等に関する調査研究	1421Cア	奈良博	B	B	209
	イ 文化財修理の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究	1421Cイ	奈良博	B	B	210
	ウ 保存科学の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究	1421Cウ	奈良博	B	B	211
	ア 文化財の材質・構造等に関する共同研究	1421Dア	九博	B	B	212
	イ 博物館における文化財保存修復に関する研究	1421Dイ	九博	B	B	213
	ウ 博物館危機管理としての持続的IPMシステムの研究	1421Dウ	九博	B	B	214
	エ 文化財に使用された彩色材料に関する面的調査法の検討	1421Dエ	九博	B	B	215
	日タイにおける文化財調査と資料集成	1421Dオ	九博	B	B	216
	2)博物館情報、文化財情報に関する調査研究					
	ア 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究	1422Aア	東博	B	B	217
	イ 創立150年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究	1422Aイ	東博	B	B	218
	ア 文化財情報に関する調査研究	1422Bア	京博	B	B	219
	ア 文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究	1422Cア	奈良博	A	A	220
③国内外の博物館等との学術交流等				B	B	
		1430A	東博	B	B	221
		1430B	京博	A	B	222
		1430C	奈良博	B	B	223
		1430D	九博	B	B	224
④調査研究成果の公表				B	B	
		1440A	東博	B	B	225
		1440B	京博	B	B	226
		1440C	奈良博	B	B	227
		1440D	九博	B	B	228

(5) 国内外の博物館活動への寄与　年度:A評定　中期:A評定			S評定	1	1	
			A評定	1	0	
事業件数　10			B評定	8	9	
①国内外の博物館等への有形文化財の貸与				A	A	
	1510A	東博	S	S	229	
	1510B	京博	B	B	230	
	1510C	奈良博	B	B	231	
	1510D	九博	B	B	232	
②国内外の博物館等への援助・助言等				B	B	
	1520H-1	機構	B	B	233	
	1520H-2	活用ｾﾝﾀｰ	B	B	234	
	1520A	東博	B	B	235	
	1520B	京博	A	B	236	
	1520C	奈良博	B	B	237	
	1520D	九博	B	B	238	
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施						
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究　年度:A評定　中期:B評定			A評定	13	10	
事業件数　26			B評定	13	16	
①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究				A	B	
1)我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究						
文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究	2111Eｱ	東文研	A	A	244	
日本東洋美術史の資料学的研究	2111Eｲ	東文研	B	B	245	
近・現代美術に関する調査研究と資料集成	2111Eｳ	東文研	A	A	246	
美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開	2111Eｴ	東文研	B	B	247	
2)建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究						
歴史的建造物および伝統的建造物群の保存・修復・活用の実践的研究	2112F	奈文研	A	B	248	
3)歴史資料・書跡資料に関する調査研究						
近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究	2113F	奈文研	A	B	249	
②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査及び研究等				A	A	
1)重要無形文化財の保存・活用に関する調査研究等						
無形文化財の保存・継承に関する調査研究及び無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化	2121E	東文研	A	A	250	
2)重要無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究等						
無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	2122E	東文研	A	A	251	
3)無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集等						
無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集	2123E	東文研	B	B	252	
③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究				B	B	
1)史跡・名勝の保存・活用に関する調査研究						
我が国の記念物に関する調査・研究(遺跡等整備)	2131Fｱ	奈文研	B	B	253	
我が国の記念物に関する調査・研究(庭園)	2131Fｲ	奈文研	B	B	254	
2)古代日本の都城遺跡に関する調査研究						
平城宮東院地区の発掘調査(平常第595次調査)	2132Fｱ-1	奈文研	A	B	255	
平城宮東院朝堂院東門の発掘調査	2132Fｱ-2	奈文研	A	A	256	
東大寺東塔院の発掘調査	2132Fｱ-3	奈文研	A	A	257	
藤原宮大極殿院地区の発掘調査	2132Fｱ-4	奈文研	A	A	258	
飛鳥地域等の発掘調査	2132Fｱ-5	奈文研	A	A	259	
飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	2132Fｲ-1	奈文研	A	A	260	
平城宮・京出土遺物・遺構の調査・研究	2132Fｲ-2	奈文研	B	B	261	
東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究	2132Fｳ	奈文研	B	B	262	
中国との共同研究	2132Fｴ-1	奈文研	B	B	263	
韓国との共同研究	2132Fｴ-2	奈文研	B	B	264	
3)重要文化的景観等の保存・活用に関する調査研究						
文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	2133F	奈文研	B	B	265	
4)全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究						
遺跡データベースの作成と公開	2134Fｱ	奈文研	B	B	266	
古代官衙・集落遺跡等に関する研究集会の実施、報告書の刊行	2134Fｲ-1	奈文研	B	B	267	
古代瓦に関する研究集会の実施、報告書の刊行	2134Fｲ-2	奈文研	B	B	268	
5)水中文化遺産に関する調査研究						
水中文化遺産に関する調査研究	2135F	奈文研	A	A	269	

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究　年度:A評定　中期:B評定			S評定	0	0	
			A評定	7	5	
事業件数　16			B評定	9	11	
①文化財の調査手法に関する研究開発の推進				A	B	
1)デジタル画像の形成方法等の研究開発						
文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究	2211E	東文研		A	B	270
2)埋蔵文化財の探査・計測方法の研究開発						
埋蔵文化財の探査・計測方法の研究開発	2212F	奈文研		A	B	271
3)年輪年代学を応用した文化財の科学的分析方法の研究開発						
年輪年代学研究	2213F	奈文研		A	A	272
4)動植物遺存体の分析方法の研究開発						
動植物遺体の調査研究	2214F	奈文研		B	B	273
②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究				B	B	
1)生物被害の予防と対策に関する調査研究						
文化財の生物劣化の現象解明と対策に関する研究	2221E	東文研		A	A	274
2)文化財の保存環境と維持管理に関する調査研究						
保存と活用のための展示環境の研究	2222E	東文研		B	B	275
3)可搬型分析機器を用いた文化財の材質・構造、及び保存状態に関する調査研究						
文化財の材質・構造・状態調査に関する研究	2223E	東文研		A	A	276
4)屋外文化財の劣化対策に関する調査研究						
屋外文化財の劣化要因と保存対策に関する調査研究	2224E	東文研		B	B	277
5)文化財の修復技法及び修復材料に関する調査研究						
文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究	2225E	東文研		A	A	278
6)考古遺物の保存処理法に関する調査研究						
考古遺物の保存処理法に関する調査研究	2226F	奈文研		B	B	279
7)遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究						
遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究	2227F	奈文研		B	B	280
8)建造物の彩色に関する調査研究						
建造物の彩色に関する調査研究	2228F	奈文研		B	B	281
9)近代文化遺産の保存・修復に関する調査研究						
近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究	2229E	東文研		B	B	282
10)高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究						
高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究	2230Eア	東文研		B	B	283
高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究	2230Fア	奈文研		A	A	284
古墳壁画の恒久的保存に関する調査研究	2230Fイ	奈文研		B	B	285
(3) 文化遺産保護に関する国際協働　年度:A評定　中期:B評定			A評定	4	2	
事業件数　9			B評定	5	7	
①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進				B	B	
1)文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信						
文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信	2311Eア	東文研		A	B	286
イギリスセインズベリー日本藝術研究所との共同研究	2311Fイ	奈文研		B	B	287
2)文化遺産保護協力事業の推進						
アジア諸国等文化遺産保存修復協力	2312E-1	東文研		A	A	288
保存修復技術の国際的応用に関する研究	2312E-2	東文研		A	A	289
カンボジア・西トップ遺跡の調査と修復	2312Fア	奈文研		B	B	290
3)文化遺産の保存・修復に関する人材育成等						
在外日本古美術品保存修復協力事業	2313E-1	東文研		B	B	291
国際研修	2313E-2	東文研		B	B	292
ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)等が行う研修への協力	2313F	奈文研		B	B	293
②アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する調査研究				A	B	
アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する調査研究	2320G	IRCI		A	B	294

(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用　年度:A評定　中期:A評定			**A評定**	**7**	**4**	
事業件数　9			**B評定**	**2**	**5**	
①文化財情報基盤の整備・充実 **1)文化財に関するデータベースの充実・アーカイブ機能の更新及び拡張** **2)被災文化財関連情報に関するデータベースの充実・アーカイブ機能の更新及び拡張** **3)文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供の充実**				**A**	**A**	
専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	2411E	東文研	**A**	**B**	**295**
文化財に関するデータベースの充実	2411F	奈文研	**A**	**A**	**296**
図書の収集・整理・公開・提供	2413F	奈文研	**A**	**A**	**297**
②調査研究成果の発信 **1)定期刊行物の刊行** **2)公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等** **3)ウェブサイトの充実・学術情報リポジトリ・なぶんけんブログ**				**A**	**B**	
定期刊行物の刊行	2421E	東文研	**B**	**B**	**298**
定期刊行物の刊行、公開講演会・現地説明会等の開催、ウェブサイトの充実	2421F	奈文研	**A**	**A**	**299**
平成30年度オープンレクチャー(調査・研究成果の公開)	2422E	東文研	**B**	**B**	**300**
文化財情報基盤の整備・充実	2423E	東文研	**A**	**B**	**301**
③展示公開施設の充実			**A**	**A**	
1)特別展・企画展					
平城宮跡資料館・飛鳥資料館・藤原宮跡資料室における展示公開	2431F	奈文研	**A**	**B**	**302**
2)平城宮跡解説ボランティア研修					
平城宮跡解説ボランティアの研修内容の充実及び運用改善	2432F	奈文研	**A**	**A**	**303**
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等　年度:B評定　中期:B評定			**A評定**	**9**	**8**	
事業件数　26			**B評定**	**17**	**18**	
①文化財に関する研修の実施 **1)文化財の担当者研修、博物館・美術館等の保存担当学芸員研修の実施** **2)研修体系の整理及び研修受講生及び派遣元自治体へのアンケート調査**				**A**	**A**	
博物館・美術館等保存担当学芸員研修	2511E	東文研	**B**	**B**	**304**
文化財担当者研修	2511F	奈文研	**A**	**A**	**305**
②文化財に関する協力・助言等			**B**	**B**	
1)地方公共団体等への文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等					
文化財の収集、保管に関する指導助言	2521E-1	東文研	**B**	**B**	**306**
無形文化遺産に関する助言	2521E-2	東文研	**B**	**B**	**307**
文化財の虫菌害に関する調査・助言	2521E-3	東文研	**B**	**B**	**308**
文化財の修復及び整備に関する調査・助言	2521E-4	東文研	**B**	**B**	**309**
文化財の材質・構造に関する調査・助言	2521E-5	東文研	**B**	**B**	**310**
美術館・博物館等の環境調査と援助・助言	2521E-6	東文研	**B**	**B**	**311**
文化財の保存環境に関する相談対応・助言、協力	2521E-7	活用センター	**A**	**B**	**312**
地方公共団体等の要請による発掘調査等への協力・援助	2521F-1	奈文研	**B**	**B**	**313**
地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区の発掘調査への援助	2521F-2	奈文研	**A**	**A**	**314**
地方公共団体等が行う史跡の整備、復原事業等に関する技術的助言	2521F-3	奈文研	**B**	**B**	**315**
2)他機関等との共同研究及び受託研究					
他機関等との共同研究及び受託研究を実施	2522E	東文研	**B**	**B**	**316**
他機関等との共同研究及び受託研究	2522F	奈文研	**B**	**B**	**317**
3)地震・水害等により被災した地域の復旧・復興事業に伴う、地方公共団体等が行う文化財保護事業への支援・協力					
被災した地域の復旧・復興事業に伴う地方公共団体等への支援・協力	2523F	奈文研	**A**	**A**	**318**
③平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力			**B**	**B**	
1)文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力					
文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡の整備・管理等への協力	2531F-1	奈文研	**B**	**B**	**319**
平城宮復原整備研究	2531F-2	奈文研	**B**	**B**	**320**
国土交通省が行う平城宮いざない館の建設への協力	2531F-3	奈文研	**B**	**B**	**321**
文化庁が行うキトラ古墳壁画保存管理施設の管理・運営と古墳壁画の公開事業への協力	2531F-4	奈文研	**A**	**A**	**322**
2)NPO法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動への協力					
NPO法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動への協力	2532F	奈文研	**B**	**B**	**323**
④連携大学院教育の推進			**B**	**B**	
1)東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育等の推進					
東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進	2541E	東文研	**B**	**B**	**324**
京都大学・奈良女子大学との間での連携大学院教育の推進	2541F	奈文研	**B**	**B**	**325**

⑤文化財等の防災・救援等への寄与			A	A		
1)体制づくり	2551	機構	A	A	326	
2)調査研究等の実施	2552ア	機構	A	A	327	
	2552イウ	機構	A	A	328	
3)人材育成・事業啓発活動等の実施	2553	機構	A	A	329	
Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置		A評定	0	0		
事業件数 9		B評定	9	9		
1.業務改善の取組 年度:B評定 中期:B評定						
(1) 組織体制の見直し	6110	本部	B	B	379	
(2) 人件費管理の適正化	6120	本部	B	B	380	
(3) 契約・調達方法の適正化	6130	法人全体	B	B	381	
(4) 共同調達等の取組の推進	6140	法人全体	B	B	382	
(5) 一般管理費等の削減						
①機構内の共通的な事務の一元化による業務の効率化	6151	本部	B	B	383	
②計画的なアウトソーシング	6152	法人全体	B	B	384	
③使用資源の減少	6153	法人全体	B	B	385	
2.業務の電子化 年度:B評定 中期:B評定						
業務の電子化	6200	本部	B	B	386	
3.予算執行の効率化 年度:B評定 中期:B評定						
予算執行の効率化	6300	本部	B	B	387	
Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置		A評定	2	2		
事業件数 17		B評定	15	15		
1.自己収入拡大への取組 年度:B評定 中期:B評定						
(1) 自己収入拡大への取組	7110	法人全体	A	A	388	
(2) 外部資金の獲得	7120	法人全体	A	A	389	
(3) 保有資産の有効利用の促進	7130A	東博	B	B	390	
	7130B	京博	B	B	391	
	7130C	奈良博	B	B	392	
	7130D	九博	B	B	393	
	7130E	東文研	B	B	394	
	7130F	奈文研	B	B	395	
2.固定的経費の節減 年度:B評定 中期:B評定						
(Ⅱ 1.(5) と同じ)						
3.決算情報・セグメント情報の充実等 年度:B評定 中期:B評定						
決算情報・セグメント情報の充実等	7300	本部	B	B	396	
Ⅳ 予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画						
1.予算、2.収支計画、3.資金計画 年度:B評定 中期:B評定						
予算、収支計画、資金計画	8000	本部	B	B	397	
Ⅴ その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置						
1.内部統制 年度:B評定 中期:B評定						
内部統制	9100	本部	B	B	398	
2.その他 年度:B評定 中期:B評定						
(1) 自己評価	9210	本部	B	B	399	
(2) 情報セキュリティ対策	9220	本部	B	B	400	
3.施設設備に関する計画 年度:B評定 中期:B評定						
施設設備に関する計画	9300	本部	B	B	401	
4.人事に関する計画 年度:B評定 中期:B評定						
(1) 中長期的な人事計画の策定	9410	本部	B	B	402	
(2) 評価制度の導入						
(3) 能力や適性に応じた採用・人事の実施	9420	本部	B	B	403	
(4) 女性の活躍の推進						
(5) 職員のキャリアパス形成のための研修	9430	本部	B	B	404	

Ⅱ　平成３０年度　自己点検評価報告書　個別表

自己点検評価報告書「書式Ａ（事業系）」　様式補足説明

○【定量的評価】

目標値は、中期計画・年度計画で目標値を定めた項目のみ記載している。

○【定量的評価】

評価は、以下の評定区分を使用している。

Ｓ：達成率 120％以上かつ質的に顕著な成果
Ａ：達成率 120％以上
Ｂ：達成率 100％以上 120％未満
Ｃ：達成率 80％以上 100％未満
Ｄ：達成率 80％未満
※Ｂ評価が標準となる

○【年度計画に対する総合評価】及び【中期計画に対する総合評価】

評価は、以下の評定区分を使用している。

Ｓ：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている
Ａ：所期の目標を上回る成果が得られている
Ｂ：所期の目標を達成している
Ｃ：所期の目標を下回っており、改善を要する
Ｄ：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する
※Ｂ評定が標準となる

○【判定根拠、課題と対応】

「判定根拠」は記載を必須とし、「課題と対応」は必要に応じて適宜記載している。

自己点検評価報告書「書式Ａ（特別展）」　様式補足説明

○【定量的評価】、【年度計画に対する総合評価】、【判定根拠、課題と対応】
「書式Ａ（事業系）」と同様

○【成果】
各項目については次のような観点・論点を踏まえて記載している。

企画構成・展示作品
・企画構成（コンセプト、展示配列・組合せ等）の意図について
・展示品の概要（質、分野、初出品、規模等）について
・企画構成や展示方法の独創性や新規性、工夫について
・地域連携（巡回・地方の文化財や文化の紹介）や国際交流等の側面について
・時機、社会的関心、話題性等の観点について

学術的意義
・学問的重要度の高さについて
・新知見や新たな観点の提供、新発見の紹介等について
・図録での論文・解説等について（内容が充実している、本数が多い等）
・今後の研究への発展性や新規寄託の獲得等について
※研究の詳しい内容は「書式Ｂ（博物館研究系プロジェクト）」で記載

教育普及
・来館者の興味を喚起する取組や理解を助ける取組（解説の工夫・パネル設置・リーフレット作成・ハンズオン等）の実施について
・講演会、シンポジウム、ギャラリートーク等の開催について
・教育的イベント（子供向け等）の実施について

その他（運営・広報・サービス等）
・動線の工夫や待ち列対応等の混雑対策について
・関連する平常展示の実施について
・音声ガイドについて
・広報活動の展開（交通広告・ネット・SNS）について
・特別内覧会等の関連事業の実施について
・関連映像上映について

自己点検評価報告書「書式Ｂ（博物館研究系プロジェクト）」　様式補足説明

○【年度計画に対する総合的評価】の評定及び【中期計画の実施状況の確認】の評定について、定性的観点、定量的観点に留意しつつ以下の基準で総合的に評価している。

Ｓ：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている
Ａ：所期の目標を上回る成果が得られている
Ｂ：所期の目標を達成している
Ｃ：所期の目標を下回っており、改善を要する
Ｄ：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する
※Ｂ評定が標準となる

自己点検評価報告書「書式Ｃ」　様式補足説明

１　「年度計画評価」＞「定性評価」について

下記の５つの観点から、当該研究プロジェクト等に応じた観点を４つ以上選択の上記載し、それぞれ評定（Ｓ～Ｄ）を付している。

【観点の考え方】

・適時性：需要・必要性、公共性、国際性、緊急性、公開性
・独創性：オリジナリティ、発想・着想、新規性、卓越性
・発展性：応用性・汎用性、影響性、多様性
・効率性：時間、人員、設備等
・継続性：期間、質・内容、量、基礎性

【観点の判定基準】

Ｓ：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている
Ａ：所期の目標を上回る成果が得られている
Ｂ：所期の目標を達成している（標準）
Ｃ：所期の目標を下回っており、改善を要する
Ｄ：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する

２　「年度計画評価」＞「定量評価」について

当該事業の実績データのうち、中期目標・計画上の評価指標となっているものは、「実績値」として以下の基準で定量評価を行っている。なお、その他の実績データについては、「参考値」として掲載している（定量評価対象とはしていない）。

（評価指標の対象となるもの：文化財に関するデータベースの公開件数、定期刊行物等の刊行件数、公開施設における特別展・企画展の開催件数　等）

Ｓ：達成率 120％以上かつ質的に顕著な成果
Ａ：達成率 120％以上
Ｂ：達成率 100％以上 120％未満（標準）
Ｃ：達成率 80％以上 100％未満
Ｄ：達成率 80％未満

３　「年度計画評価」＞「評定理由」について

定性評価の判定理由を記述している。また、定量評価がある場合は、その判定状況を併せて記述している。

４　「年度計画評価」について

２の定性評価及び３の定量評価の各観点の評定（Ｓ～Ｄ）を下記にて数値化（５～１点）し、平均値を四捨五入して評定を算出している。

Ｓ＝５点、Ａ＝４点、Ｂ＝３点（標準）、Ｃ＝２点、Ｄ＝１点
（例１）Ａが３つ、Ｂが２つの場合
（４点×３＋３点×２）÷５＝　３．６　≒　４　→評価　Ａ
（例２）Ａが２つ、Ｂが３つの場合
（４点×２＋３点×３）÷５＝　３．４≒　３　→評価　Ｂ

５　「中期計画評価」について

１の【観点の判定基準】と同様の基準で評価している。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1110A

大項目	Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承①博物館の施設設備の整備

【年度計画】
（4館共通）
1)収蔵・展示施設及びこれらに関連する設備に関するメンテナンスサイクルの確立に向けた検討を引き続き行う。
（東京国立博物館）
1)　本館については収蔵・展示施設の改修と拡充に関する基本計画を引き続き策定する。

担当部課	総務部環境整備課	事業責任者	課長　城山美香

【実績・成果】
（４館共通）
1)収蔵・展示施設及びこれらに関連するメンテナンスサイクルの確立に向け、一部既存建物の調査を実施した。

（東京国立博物館）
1)本館の収蔵施設の拡充については、管理棟（仮称）建設を着工し、工事を実施している。
2)本館リニューアル計画について、環境整備委員会の審議を経て新規にワーキンググループを発足し、文化財保護法の一部改正に伴う保存活用計画策定の方針について検討を始めた。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 本館の収蔵庫環境の改善策として着工した管理棟（仮称）新営工事は、30年度末の出来高が60％を超え、工程表のとおり進行している。 管理棟（仮称）竣工後のからし期間後の本館の収蔵品の移転計画についても検討を開始した。 本館保存活用計画策定に向けて30年度は約半数の部屋の調査を行い、報告書をまとめた。

【中期計画記載事項】
施設設備の点検・診断を実施し、その結果に基づき、収蔵・展示施設の老朽化、耐震対策及びセキュリティの強化に計画的に取り組む。これらの取組を通じて得られた施設の状態や対策履歴等の情報を記録し、次期点検・診断等に活用するという「メンテナンスサイクル」を平成32年度までに構築し、継続的に発展させる。
（東京国立博物館）
開館後約 80 年が経過した本館の空調設備、収蔵・展示施設について、建物が重要文化財に指定されていることに配慮し、2019 年 ICOM 京都大会及び 2020 年東京オリンピック･パラリンピック競技大会も視野に入れつつ、改修等計画を推進する。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 本館の保存活用計画策定に向けて、調査を依頼するなど、順調に事業を実施できた。 本館及び資料館のセキュリティの強化に際し、カードキー等の現状と更新案について調査し改善準備を進めることができた。

【書式A】　施設名　京都国立博物館　処理番号　1110B

大項目	Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　①博物館の施設設備の整備

【年度計画】
（４館共通）
1)収蔵・展示施設及びこれらに関連する設備に関するメンテナンスサイクルの確立に向けた検討を引き続き行う。
（京都国立博物館）
1)仮設収蔵庫（東収蔵庫）の減築工事を引き続き行う。
2)明治古都館（本館）の免震補強ほかの改修に向けた準備として、基本計画に基づき準備を進める。

担当部課	総務課	事業責任者	課長　數馬厚人

【実績・成果】
（４館共通）
1)収蔵・展示施設及びこれらに関連する設備に関するメンテナンスサイクルの確立に向け、外壁や防水等建築にかかる劣化損傷調査（予備調査）を行った。
（京都国立博物館）
1)　東収蔵庫改修工事が完了した。
2)　明治古都館免震改修他工事に向けた埋蔵文化財発掘調査を実施し、30年度は建物外周部の調査を行った。

【補足事項】

東収蔵庫

埋蔵文化財発掘調査

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
東収蔵庫改修工事（減築、内外装改修等工事）を年度計画通り完了した。
本館改修基本計画を基に京都市と協議を行い、調査範囲の指導を受けた発掘調査について、30年度は予定範囲である建物外周部の調査を完了した。

【中期計画記載事項】
施設設備の点検・診断を実施し、その結果に基づき、収蔵・展示施設の老朽化、耐震対策及びセキュリティの強化に計画的に取り組む。これらの取組を通じて得られた施設の状態や対策履歴等の情報を記録し、次期点検・診断等に活用するという「メンテナンスサイクル」を平成32年度までに構築し、継続的に発展させる。
（京都国立博物館）
京都国立博物館本館（明治古都館）の改修に当たっては、重要文化財に指定された建造物としての保存とともに展示施設としての活用に配慮した改修計画及び観覧環境の再整備計画を進める。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
32年度構築予定のメンテナンスサイクルについては建築領域に関する予備調査を実施するなど、これまでに引き続き順調に事業を実施できた。
本館（明治古都館）の改修については、建物外周部の発掘調査を実施し、重要文化財建造物と地下遺構の関係を把握することで、それらの保存とともに展示物の保存・観覧環境を向上させる改修計画のための資料を得ることができた。

【書式A】　施設名　奈良国立博物館　処理番号　1110C

大項目	Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承①博物館の施設設備の整備

【年度計画】
（４館共通）
1)収蔵・展示施設及びこれらに関連する設備に関するメンテナンスサイクルの確立に向けた検討を引き続き行う。
（奈良国立博物館）
1)構内バリアフリー及びエントランス拡張整備に向けた検討を引き続き行う。

担当部課	総務課	事業責任者	課長　臣守常勝

【実績・成果】
（４館共通）
1)
・各種設備に関するメンテナンス更新計画に基づき概算要求を行った。
・ボイラー設備の更新を実施した。
・直流電源装置用蓄電池の更新を実施した。
・池水ろ過装置の更新を実施した。
（奈良国立博物館）
1)構内バリアフリー及びエントランス拡張整備計画の検討を行った。

【補足事項】
（４館共通）
1)
・各種設備のメンテナンス更新計画及び状況調査に基づき概算要求を行った。
・展示室の適正な温湿度管理のため、なら仏像館のボイラー設備の一部更新を行った。
・老朽化したなら仏像館、直流電源用蓄電池の更新を行った。
・東西新館前、池水の除鉄ろ過装置の更新を行った。
（奈良国立博物館）
1)
・エントランス拡張整備計画の図面上の見直しを行った。
・構内バリアフリー対策として側溝蓋の改修を行った。

一部更新したボイラー設備

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	28
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 メンテナンスサイクルの更新計画に基づき概算要求を行うとともに、緊急度の高い機器については一部、運営費補助金で更新を行った。

【中期計画記載事項】
施設設備の点検・診断を実施し、その結果に基づき、収蔵・展示施設の老朽化、耐震対策及びセキュリティの強化に計画的に取り組む。これらの取組を通じて得られた施設の状態や対策履歴等の情報を記録し、次期点検・診断等に活用するという「メンテナンスサイクル」を平成32年度までに構築し、継続的に発展させる。
（奈良国立博物館）
構内のバリアフリー化やエントランスの拡張等観覧環境等の改善及び展示施設の改修等を図るとともに、奈良における文化財の調査研究等の拠点として必要な研究設備を整備する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 構内バリアフリー化については一部改修を実施し、また、狭隘なエントランスの拡充、空調設備機器、展示並びに収蔵スペースの整備について、29年度に引き続き検討を行った。 29年度に策定したメンテナンスサイクル更新計画に基づき老朽化した設備機器の計画的な更新を引き続き進めていくとともに、31年度以降も継続的に更新計画の見直しを行っていく。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1110D

大項目	Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　①博物館の施設設備の整備

【年度計画】
（4館共通）
1)収蔵・展示施設及びこれらに関連する設備に関するメンテナンスサイクルの確立に向けた検討を引き続き行う。
（九州国立博物館）
1)開館から12年が経過し、施設設備備品に老朽化がみられるため展示施設の維持管理を目的とした改修及び拡充を行う。

担当部課	学芸部文化財課 学芸部企画課 総務課 広報課	事業責任者	課長　原田あゆみ 課長　白井克也 課長　國谷勝伸 課長　田中正一

【実績・成果】
（4館共通）
1)収蔵・展示施設及びこれらに関連する設備に関するメンテナンスサイクル計画の作成を行った。

（九州国立博物館）
1)
・特別展示室第1,2室に設置されている展示ケースのパッキンを交換した。
・施設の10年整備計画について、より精度を向上させるため、計画作成の見直しを検討した。
・老朽化が著しく、緊急度・重要度の高い監視カメラ及び空調機器（プレート式熱交換器）の一部改修工事を行った。
・開館から13年（年度計画時は12年）が経過していることから、施設･設備について、法定耐用年数の超過、部品製造の終了、故障頻度の増加等に備えて、各施設･設備の維持管理・改修・更新・長寿命化等を計画的に実施していくために、九州国立博物館個別施設計画を策定した。

【補足事項】
（九州国立博物館）
1)展示ケース開口部のパッキンは経年劣化により隙間が生じていた。また、壁とガラスの境にあるコーキングは経年劣化により柔軟性が失われていた。今回の交換作業により見栄えだけではなく、温湿度管理上も改善が図られた。既存のガラス飛散防止フィルム除去・クリーニングを行った。改めて飛散防止効果を有する低反射フィルムを施工し、これによりガラス面への映り込みが低減し、展示効果が大きく高まった。

パッキンおよび低反射フィルムに交換した壁付展示ケース

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 3階特別展示室第1,2室の展示ケース改修を行うなど、年度計画どおり、展示施設の維持管理を目的とした改修及び拡充を行った。

【中期計画記載事項】
施設設備の点検・診断を実施し、その結果に基づき、収蔵・展示施設の老朽化、耐震対策及びセキュリティの強化に計画的に取り組む。これらの取組を通じて得られた施設の状態や対策履歴等の情報を記録し、次期点検・診断等に活用するという「メンテナンスサイクル」を32年度までに構築し、継続的に発展させる。
（九州国立博物館）
開館から10年が経過しており、監視カメラ・空調システム等の施設設備備品に老朽化がみられる。よって展示施設の維持管理を目的とした改修等計画を推進する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 施設設備の点検・診断を実施し、緊急度、更新時期等の再調査を行い、10年整備計画の見直しを行った。 また、監視カメラや空調機器等の改修工事を実施したほか、九州国立博物館個別施設計画を策定した。 31年度以降は、照明設備などについて、設備や器具の更新を行いたい。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1121A

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　②有形文化財の収集等　1)有形文化財の収集

【年度計画】
（東京国立博物館）
日本を中心として広くアジア諸地域の文化の体系的収集及び展示を目指し、絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料の中から重点的に購入する。

担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長　救仁郷秀明

【実績・成果】
（東京国立博物館）
・購入件数 31件　内訳：絵画1件、書跡1件、彫刻1件、染織23件、考古3件、歴史資料1件、東洋陶磁1件
・決算額　146,840,000円

30年度は、絵画1件 重要美術品「山水図押絵貼屏風」、書跡1件 「和歌屏風」、彫刻1件 「能面　増女」、染織23件「上衣・括袴　萌黄地向獅子丸龍卍蜀江文模様錦」ほか蜂須賀家伝来武家装束、考古3件 「石室寺経塚出土品（銅製経筒）」ほか石室寺経塚出土品、歴史資料1件 「簠斎蔵封泥拓本冊」、東洋陶磁1件 「青花人物図面盆」の計31件を購入した。

【補足事項】
・絵画購入品の重要美術品「山水図押絵貼屏風」は、久隅守景の山水図の代表的作例として極めて重要であり、当館所蔵の近世狩野派コレクションの一層の充実を図ることができる作品である。
・染織購入品の蜂須賀家伝来武家装束は、武家服飾の中でもとりわけ華麗なデザインで他に類を見ないことから、展示効果が高い。また、伝来の明らかな武家装束がまとまった形で遺される例は極めて稀であり、その点からも意義が大きい。
・歴史資料購入品の簠斎蔵封泥拓本冊は、清朝金石学の研究上大変貴重であるうえ、拓影が収載された封泥の大半は現在当館の所蔵となっているため、当館が所蔵するのにふさわしい資料である。
・東洋陶磁購入品の「青花人物図面盆」は、在銘の万暦官窯の青花として稀少であるとともに、万暦特有の重厚さを備えた一級品であり、展示活用や研究のより一層の充実が期待できる。

［購入品］上衣・括袴　萌黄地向獅子丸龍卍蜀江文模様（蜂須賀家伝来）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
収蔵品件数	119,064件	－	－		116,268	116,932	117,190	117,460
うち国宝	89件	－	－		87	87	88	89
うち重要文化財	644件	－	－		634	634	636	643
収集件数	1,606件	－	－		615	664	199	268
うち購入件数	31件	－	－		9	16	11	12
うち寄贈件数	72件	－	－		100	148	44	84
うち編入件数	1,503件	－	－		5,069	500	144	172
文化財購入費	146,840千円	－	－		139,686	225,880	662,350	252,720

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	蜂須賀家伝来の武家装束並びに当館所蔵封泥の拓本でほぼ構成されている「簠斎蔵封泥拓本冊」など、収蔵する機会が稀である貴重な作品を多く購入することができた。特定の分野に偏ることなく、年度計画に記載される複数分野からバランスよく購入することができた。

【中期計画記載事項】
体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。
（東京国立博物館）
日本を中心として広くアジア諸地域等にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	蜂須賀家伝来の武家装束や「簠斎蔵封泥拓本冊」など日本を中心にアジア諸地域で制作された美術、考古資料及び歴史資料を収集し、中期計画に沿った成果を上げることができた。31年度も引き続き情報収集に努め、適時適切な収集を図る。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1121B

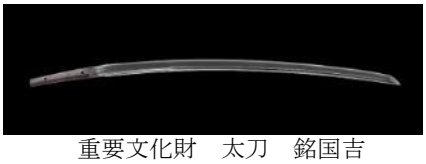
中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　②有形文化財の収集等　1)有形文化財の収集

【年度計画】
（京都国立博物館）
京都文化を中心とした絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料等の中から重点的に購入する。

担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　羽田聡

【実績・成果】
（京都国立博物館）
・購入件数12件　内訳：絵画3件、金工1件、漆工2件、染織1件、考古5件
・決算額　106,340,000円

【補足事項】
30年度は、「霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風　狩野永納筆」、「暮山図・澤瀉鶺鴒図扇面」、「松石図（指頭画）　葉文舟筆」、「重要文化財　太刀　銘国吉」、「梨撫子蒔絵楊弓箱」、「ドミティアヌス帝の模擬海戦場図蒔絵プラーク」、「濃茶麻地花車杜若文様染繍帷子」、「重要美術品　龍虎獣帯鏡」、「流雲文方格神人霊獣画像鏡」、「金銀平脱鸞鳳宝相華文方」、「羽状地文四山」、「夔鳳雷文鏡　洛陽金村出土」を購入した。


重要文化財　太刀　銘国吉
（特別展「京のかたな」に出品）

霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風　狩野永納筆
（特集展示「初公開！天皇の即位図」にて公開）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
収蔵品件数	8,075件	−	−	経年変化	7,109	7,532	7,794	7,977
うち国宝	29件	−	−		27	28	28	29
うち重要文化財	196件	−	−		180	183	198	202
収集件数	98件	−	−		388	423	265	184
うち購入件数	12件	−	−		9	18	14	12
うち寄贈件数	86件	−	−		379	405	251	172
うち編入件数	0件	−	−		0	0	0	0
文化財購入費	106,340千円	−	−		227,452	797,790	130,088	291,808

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：A	30年度特別展「京のかたな」で公開された重要文化財1件、特集展示「初公開！天皇の即位図」にて公開された作品を含む12件の京都に関わりの深い作品を購入することが出来た。これまでの調査研究の成果を活かし、重要文化財や即位図などの時機にかなった作品を購入し、展示や調査研究に活用できたことは所期の目標を上回る成果であった。

【中期計画記載事項】
体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。
（京都国立博物館）
京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	30年度も、展示・研究に役立てることが出来る、京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等について他分野にわたりバランスよく購入することができた。 今後も当館の展示・研究において十分に活用が期待できる作品の購入を順次行っていく予定である。

＊30年度、京都国立博物館については、指定品件数を再確認し、過誤修正を行った。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1121C

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　②有形文化財の収集等　1)有形文化財の収集

【年度計画】
（奈良国立博物館）
仏教美術及び奈良を中心とした絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料等の中から重点的に購入する。

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　内藤栄

【実績・成果】
（奈良国立博物館）
30年度に購入した文化財は以下の6件である。
・紙本墨画春日名号曼荼羅　1幅　　・金銅装説相箱　1口
・絹本著色春日宮曼荼羅　1幅　　・金銅鬼面五鈷杵　1口
・法華経　巻第四残巻　1巻　　・盛装男子埴輪　1軀
決算額：101,564,000円

【補足事項】
購入文化財のうち法華経 巻第四残巻 1巻は、平安時代末（12世紀）の作と推定されるもので、装飾料紙に書写された1巻の『法華経』から切り出された断簡3片を貼り継いだものである。残存するのは105行分。料紙の装飾は、大小に切った銀箔を用いた華麗なもので、そこに金の截金で界線を引き、経文を墨書する。銀箔による料紙装飾はオモテ面だけでなく文字のないウラ面にも施される。こうした装飾経の遺例は多いが、料紙装飾に金箔を一切用いず、銀箔に特化している点が珍しい。

法華経巻第四（残巻）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
収蔵品件数	1,908 件	－	－		1,877	1,883	1,886	1,893
うち国宝	13 件	－	－		13	13	13	13
うち重要文化財	113 件	－	－		111	112	112	113
収集件数	15 件	－	－		15	6	3	7
うち購入件数	6 件	－	－		15	4	2	6
うち寄贈件数	9 件	－	－		0	2	1	1
うち編入件数	0 件	－	－		0	0	0	0
文化財購入費	101,564千円	－	－		261,960	140,400	5,040	550,000

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	仏教美術を中心とする文化財を多数収集することができた。購入は絵画、書跡、工芸、考古の3分野にわたる6件で、限られた予算のなか、バランス良く実施できている。今後もこの方針を継続し、さらに幅広く文化財の収集を心がける。

【中期計画記載事項】
体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。
（奈良国立博物館）
仏教美術及び奈良を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	仏教美術及び奈良を中心とする収集方針は一貫している。体系性の観点では、28年度は書跡、29年度は彫刻・絵画、30年度は絵画・書跡・工芸・考古と、分野のバランスもとれており、体系的な収蔵品の蓄積が実現できている。今後も、一貫した調査・研究・収集の方針に基づいて文化財収集を継続する。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1121D

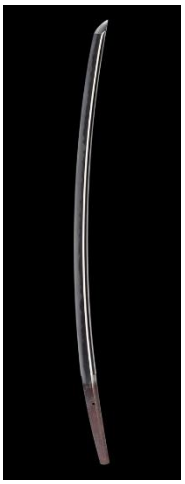
中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　②有形文化財の収集等　1)有形文化財の収集

【年度計画】
（九州国立博物館）
　日本とアジア諸国との文化交流を中心とした絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料等の中から重点的に購入する。

担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長　原田あゆみ

【実績・成果】
・購入件数 105 件。
　内訳：絵画 2 件、書跡 1 件、彫刻 1 件、金工 1 件、刀剣 1 件、陶磁 15 件、漆工 1 件、染織 6 件、考古 72 件、歴史資料 5 件。
・決算額　907,943,600 円
　当館の展示テーマである、日本とアジア諸国との文化交流を示す作品を中心に収集した。国宝「刀　無銘則房」や「如来坐像」、「長崎港図」などの優れた文化財を 105 件購入した。

【補足事項】
・絵画分野では2件を購入した。川原慶賀筆と考えられる「長崎港図」は、安政2年(1855)に来日したリンデン伯爵ヨハン・マウリッツ(1807-64) が所持していたもの。黄檗宗の開祖・隠元の深い関与がうかがわれる「列祖図冊」は、黄檗宗の日本での展開を象徴する作例として意義深い。長崎や黄檗をテーマとした作品は、開館以来、収集を継続し、30年度も購入によりコレクションの充実を図ることができた。
・彫刻分野では1件を購入した。「如来坐像」は平安時代後期木彫仏の特徴が顕著であり、半丈六の大きさをほこる。こうした作品が市場に出ることは稀であり、展示効果もきわめて高い。
・刀剣分野では1件を購入した。国宝「刀　無銘則房」は、備前国の福岡を拠点に作刀を行った一文字派の代表的刀工、則房の作と極められた貴重な作例である。華やかな刃文で知られる一文字派のなかでも白眉と言える名刀であり、当館を代表するコレクションとなった。
・考古分野では72件を購入した。「鉢形土器」は縄文時代早期に広域展開した押型文土器の典型例で、当時の交流を考える上で重要な土器である。「深鉢形土器」は縄文時代前期の東北北部に分布する円筒下層式土器の典型例で、類品が中国東北部で出土しており、この時代の対外交流を考える上で貴重である。「ローマンガラス器」はおもに吹きガラス技法による実用的な容器類であるが、多彩な装飾技法や器形がみられ、展示効果も高い。
・歴史資料分野では 5 件を購入した。「豊臣秀吉朱印状」は、宗義智(1568-1615)宛の豊臣秀吉(1537-98)朱印状であり、義智から贈られた歳暮の祝儀に対して礼を述べたもの。宗家から流出した秀吉関係文書を構成する一部として重要な史料である。
・これらの多くが日本と大陸の文化交流を物語る作例であり、あるいは時代の美意識や工芸技術の高さを示す優品である。


国宝 刀 無銘則房

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
収蔵品件数	1,164件	－	－	経年変化	512	525	583	878
うち国宝	4件	－	－		3	3	3	3
うち重要文化財	41件	－	－		29	34	37	39
収集件数	286件	－	－		19	13	58	295
うち購入件数	105件	－	－		14	5	36	34
うち寄贈件数	181件	－	－		5	8	22	261
うち編入件数	0件	－	－		0	0	0	0
文化財購入費	907,943千円	－	－		727,228	609,288	640,412	640,636

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
　所蔵者との信頼関係に支えられ、30年度も収集件数を大きく伸ばすことができた。当館として収蔵するべき文化交流を端的に示す作品のほか、国宝「刀　無銘則房」や「如来坐像」など、時代の美意識を示す作品とをバランスよく収集した。

【中期計画記載事項】
　体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。
（九州国立博物館）
　日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした、美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
　中期計画3年目の30年度も、日本とアジア諸国との文化交流を中心とした絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料を多数購入、寄贈を受けることにより、貴重な作品を多数収集することができた。今後も、購入、受贈に努め、より一層のコレクションの充実を図りたい。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1122A

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　②有形文化財の収集等　2)寄贈・寄託品の受入れ等

【年度計画】
（４館共通）
寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかける。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努める。また、展示に必要な文化財の寄贈を受け入れる。

担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長　救仁郷秀明

【実績・成果】
（４館共通）
寄贈
・新規寄贈品件数　72件
　内訳：絵画 11件、書跡 9件、彫刻 2件、金工 1件、陶磁 3件、染織 3件、東洋絵画 15件、東洋書跡 18件、東洋金工 6件、東洋染織 1件、東洋考古 3件
寄託
・新規寄託品件数　45件
　内訳：絵画 18件、彫刻 1件、金工 2件、刀剣 20件、東洋陶磁 4件
・寄託品は新規に45件を受け入れた。返却24件のうち4件は寄贈品として受理し、1件は登録美術品として受け入れた。

【補足事項】
寄贈
・作品の寄贈については23人の所蔵者から、72件の文化財を受け入れた。
・「染付龍涛文壺」は、ヨーロッパ向け輸出品として伝わる初代宮川香山の作品であるが、当館収蔵品とあわせて展示することで、初代宮川香山の時代順や技法、釉法別に展覧することが可能である。
・「明賢集扇帖」は、明・清時代の様々な名家の旧蔵資料としても貴重であり、展示活用が期待される。
・「雛人形及び雛道具」は、江戸時代に江戸の地において制作された雛飾り一式として極めて貴重な作品である。また、これまで当館に収蔵されてきた雛人形には、江戸の地で制作された作品がほとんどなく、その欠を埋める重要なコレクションである。毎年3月に実施している雛人形の展示では、京都産の作品を中心に行ってきたが、今回の寄贈品は江戸の雛人形として今後の展示に大いに活用できる。

［寄贈品］明賢集扇帖

寄託
・作品の寄託については2機関2個人から、45件の文化財を新規に受け入れた。
・寄託品のうち、重要文化財は「柿本人麻呂像」など、絵画2件、彫刻1件である。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
新規寄贈品件数	72件	－	－		100	148	44	84
寄託品件数	3,130件	－	－		3,064	3,072	3,075	3,109
うち新規寄託品件数	45件	－	－		604	31	37	71

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	重要文化財の新規寄託3件を含め、寄贈、寄託ともに、展示を充実させることができる作品を収集することができた。寄託品件数も順調に推移している。また、登録美術品についても、寄託品から1件を受け入れた。

【中期計画記載事項】
収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	中期計画に基づき寄贈・寄託品の受け入れをバランスよく行った。個人コレクターからのまとまった寄贈を積極的に受理した。寄託についても、公益財団法人常盤山文庫から重要文化財 2 件を含む良質なコレクションを受け入れ、展示の充実を図ることができた。31 年度も、寄託者との信頼関係を維持・拡大し、寄贈・寄託の推進に努める。 なお仏像については、寄託者側の保管施設の充実化に伴い、当館への寄託メリットを高めなければ減少傾向に歯止めがかからないため、何らかの対策が求められる。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1122B

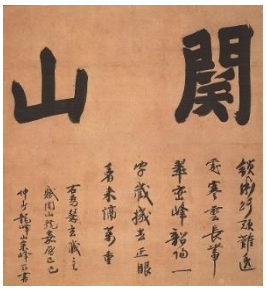
中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　②有形文化財の収集等　2)寄贈・寄託品の受入れ等

【年度計画】
（4館共通）
　寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかける。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努める。また、展示に必要な文化財の寄贈を受け入れる。

担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　羽田聡

【実績・成果】
（4館共通）
・寄贈
　新規寄贈品件数86件
・寄託
　新規寄託品件数232件
　　内訳：国宝「大燈国師墨蹟　関山字号（嘉暦己巳仲春）」、重要文化財「短刀　銘長谷部国重」等

【補足事項】
　30年度は、下記の2点をはじめとした新規寄託品を網羅的に収集することができた。



国宝「大燈国師墨蹟　関山字号（嘉暦己巳仲春）」

重要文化財「短刀　銘長谷部国重」

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
新規寄贈品件数	86件	－	－		379	405	251	172
寄託品件数	6,434件	－	－		6,001	6,112	6,189	6,235
うち新規寄託品件数	232件	－	－		162	232	227	79

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：A	展示に活用できる寄贈品及び寄託品（国宝1件、重要文化財1件を含む）を多分野にわたりバランス良く受け入れることができた。31年度の特殊展示「新収品展」をはじめ、今後の当館の展示において十分に活用が期待できる。

【中期計画記載事項】
　収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：A	国宝1件、重要文化財1件を含む多様な文化財の寄託・寄贈を受け入れ、収蔵品を順調に増加することができた。 また、特別展等において既存の寄託品を展示に活用するとともに、22年から29年3月までに受け入れた寄贈品の一部を30年度の特集展示「新収品展」で公開、29年度の廣海家寄贈顕彰に続き、大型寄贈を顕彰する特集展示「松井コレクション受贈記念　美麗を極める中国陶磁」などの積極的な公開を心掛けており、収集のみならず活用の面でも大きな成果を上げた。。

＊30年度、京都国立博物館については、寄託品数を再確認した結果、過誤修正を行った。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1122C

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　②有形文化財の収集等　2)寄贈・寄託品の受入れ等

【年度計画】
（4館共通）
　寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかける。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努める。また、展示に必要な文化財の寄贈を受け入れる。

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　内藤栄

【実績・成果】
（4館共通）
寄贈
30年度に寄贈を受けた文化財は以下の9件である。
・絹本著色山越阿弥陀図　1幅　・絹本著色阿弥陀二十五菩薩来迎図　1幅
・般若心経（隅寺心経）　1幅　・大般若経　巻第三百十六（断簡）　1幅
・刺繍種子地蔵菩薩像　1幅　・百万塔　附　無垢浄光経陀羅尼　1基
・木内半古　七ヶ條ノ事　1紙　・紅牙撥鏤撥　模造　村松親月作　附　撥鏤参考資料　1枚
・古瓦（故原田良雄氏コレクション第3回分）　3点

寄託
寄託を受け入れた文化財は以下の18件である。
・彫刻1件：奈良県指定文化財「木造大日如来坐像」1軀（十市町自治会）
・絵画2件：重要文化財「絹本著色仏涅槃図」1幅（汾陽寺）他1件
・工芸7件：重要文化財「木造天蓋　附属　飛天像　琵琶」1軀（法隆寺）他6件
・書跡8件：「古今和歌集　上・下」2帖（個人）他7件

【補足事項】
寄託
・彫刻部門で受け入れた「木造大日如来坐像」は、類例の少ない半丈六の大日如来像で、近年の保存修理により平安時代（12世紀）の当初の姿が甦ったため展示効果が期待される品である。
・絵画部門では重文指定品の仏涅槃図を受け入れた。平安時代（12世紀）に遡る涅槃図の大幅は現存例が少なく極めて貴重な作品である。
・工芸部門は三幅一対として伝来した刺繍作品で、南北朝から室町時代（13～14世紀）に遡る稀少かつ優れた作品であり高い展示効果が期待される。さらに金工品として優れた作行きをみせる蓮華文磬を受け入れた。これは鎌倉から南北朝時代（13～14世紀）に位置づけられる稀少な遺品で、展示の充実化への貢献が期待される。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
新規寄贈品件数	9件	－	－	経年	0	2	1	1
寄託品件数	1,974件	－	－	変化	1,984	1,956	1,958	1,962
うち新規寄託品件数	18件	－	－		7	7	37	12

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	寄贈品、寄託品とも極めて質の高い逸品を受け入れることができた。特に寄託品は重要文化財指定品を含み、それ以外も指定品相当の高い評価が与えられる作品である。寄贈品は例年を上回る数を受け入れることができ、展示への活用、充実が大いに期待されるところである。

【中期計画記載事項】
　収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	重要文化財指定品クラスの寄贈・寄託品の受け入れは、社寺やコレクターとの深い信頼関係のもとで成り立つことであり、奈良国立博物館の目立たぬ「財産」である。30年度はこれを絵画、書跡、工芸、彫刻、考古のすべての部門で受け入れを達成している。中期計画に対する取り組みは順調である。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1122D

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　②有形文化財の収集等　2)寄贈・寄託品の受入れ等

【年度計画】
（４館共通）
　寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかける。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努める。また、展示に必要な文化財の寄贈を受け入れる。

担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長　原田あゆみ

【実績・成果】
■寄贈
・大阪在住のコレクターである阿形哲夫氏より139件の大型寄贈を受け入れた。
　内訳：絵画1件、陶磁23件、考古115件。
　寄贈品のうち、もっとも充実した分野は考古と陶磁で、「深鉢形土器」は縄文時代中期の日本列島全域に展開したキャリパー形の土器であり、特に装飾が過剰であった北辺部の状況を知る上で貴重である。また、中国・宋時代の磁州窯製品と見なされる「白磁碗」や中国陶器からの影響を受けて掻き落としの手法で製作されたペルシャ製「鳥獣文鉢」をはじめ、縄文～奈良時代の土器や中近世の陶磁、中国陶磁、ローマンガラスやイスラム陶器など多岐にわたる。
・阿形コレクション以外では42件の寄贈を受け入れた。
　内訳：書跡34件、漆工4件、染織1件、考古3件。
　「古今和歌集切『やましろの』」は新出の断簡で、鎌倉時代前期のかなの特徴を充分に備え、展示効果も高い。

深鉢形土器

■寄託
・7件の新規寄託があった。
　内訳：絵画1件、刀剣4件、考古2件。
　古墳時代の金銅製馬具や黄檗画家の先駆と言える喜多道矩（？-1663）による頂相など、いずれも日本とアジア諸国との文化交流をテーマとする当館での活用が見込まれる作品の寄託を受け入れた。

【補足事項】
　阿形コレクションのうち、考古を中心とした作品を文化交流展示室で31年度に陳列予定である。また、29年度受贈した作品は、30年度秋より文化交流展示室内において開室した寄贈者顕彰室において紹介し、寄贈者を顕彰した。
　共同運営の福岡県立アジア文化交流センターは30年度に、小郡カンツリー倶楽部から、当館の展示に活用できる江戸時代を中心とした陶磁器176件の寄贈を受けた。（福岡県立アジア文化交流センター所蔵の文化財総件数394件）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
新規寄贈品件数	181件	－	－		5	8	22	261
寄託品件数	931件	－	－		795	885	893	934
うち新規寄託品件数	7件	－	－		12	97	44	45

【年度計画に対する総合評価】
評定：S

【判定根拠、課題と対応】
　当館がテーマとする文化交流を基軸に据えた寄贈品・寄託品の受け入れを、分野のバランスよく行うことができた。特に139件もの大型寄贈である阿形コレクションは質量ともに充実した内容を誇る一群であり、当館のコレクションの核となるものである。

【中期計画記載事項】
　収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。

【中期計画に対する評価】
評定：S

【判定根拠、課題と対応】
　当館がテーマとする文化交流を基軸に据えた寄贈品・寄託品の受け入れを、分野のバランスよく行うことができた。受け入れにあたっては、できるだけ迅速に多分野の研究員による事前調査を行い、当館への寄託、寄贈につなげるべく交渉を行った。その結果、特に考古分野は、縄文土器の優品や古墳の副葬品、中国の彩陶など多彩である。また、陶磁器分野では、当館のテーマにふさわしい宋代の白磁碗をはじめ、文化交流展示に大いに活用できる資料が加わった。29年度の大型寄贈に引き続き、多数の寄贈を受け入れたことで、コレクションが飛躍的に充実した。30年度末から31年度にかけて、阿形コレクションの考古を中心とした作品を、31年6月から、その他の新収品を「新収品展」として展示する予定である。今後も寄贈・寄託品の受け入れと活用を積極的に行っていきたい。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1131A1

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 1)有形文化財の管理　1/2

【年度計画】
(4館共通)
ア　収蔵等に必要な施設設備の充実、改善に向けた検討を行う。
イ　定期的に寄託品の所在確認作業を行う。
(東京国立博物館)
ア　収蔵品及び一時預品の情報調査を継続して行う。
イ　古写真・ガラス乾板･館史資料等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入活用･公開するための作業を進める。

担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長　救仁郷秀明

【実績・成果】
(4館共通)
ア　収蔵等に必要な施設設備の充実、改善に向けた検討を行った。
イ　定期的に寄託品の所在確認作業を行った。
(東京国立博物館)
ア　収蔵品及び一時預品の情報調査を継続して行った。
イ　古写真・ガラス乾板･館史資料等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入活用･公開するための作業を進めた。

【補足事項】
(4館共通)
ア　本館改修工事に伴って列品を移動し収納するため新規収蔵庫の棚、扉、床、セキュリティ等の仕様を検討した。また、黒田記念館収蔵庫の絵画ラック設置、東洋館収蔵庫の棚板増設、刀剣収蔵庫の棚のゴムパッキンの劣化に伴う改修を行った。
(東京国立博物館)
ア　未整理、未登録の法隆寺献納宝物1件、考古資料2件について作品調査を行い、列品として編入した。
イ　1,500件の写真資料を整理し、列品として編入した。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
収蔵施設の収容率	133.8%	－	－		－	－	180%	180%

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 年度計画に基づき、順調に成果をあげている。未整理、未登録等の法隆寺献納宝物、考古資料、写真資料について列品への編入を行った。

【中期計画記載事項】
国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品等の管理を徹底し、特に収蔵品等の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品等の現状を確認の上、(中略) 展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。(略)

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に基づき順調に成果をあげている。特に、収蔵等に必要な施設設備の充実、改善に向けた検討を滞りなく進めることができた。また、今後、数か年に及ぶとみられる写真資料の編入を開始することができた。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1131A2

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 1)有形文化財の管理　2／2

【年度計画】
（４館共通）
ウ　収蔵品・寄託品等に関し、新規にデジタル撮影した画像等を蓄積し、それらに関する基本情報のデータ化及びデータ整備を引き続き推進する。
エ　文化財情報システム（業務システム）の運用を継続し、収蔵品データを更新する。
（東京国立博物館）
ウ　外部への公開を見据えた「列品管理プロトタイプデータベース」（学芸業務支援システム protoDB）の構築を進め、博物館機能の充実を図る。
エ　列品にかかる統計業務の精度を高め、効率化をはかるべく、列品台帳のデジタル・アーカイブ化と情報の利活用向上に向けたシステム導入に向けて取り組む。
オ　収蔵品の和古書・洋古書のデジタル化を前中期目標の期間の実績の年度平均以上実施し、公開を推進する。
カ　ガラス乾板・未整理のブローニー・スライド・写真カード等のデジタル化について引き続き検討する。

担当部課	学芸企画部博物館情報課 学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長　田良島哲 課長　救仁郷秀明

【実績・成果】
（４館共通）
ウ　収蔵品・寄託品に関し、新規にデジタル撮影した画像は画像管理システムに随時登録し、データ整備を推進した。
エ　・「列品管理プロトタイプデータベース」（学芸業務支援システム　protoDB）の運用を継続し、収蔵品データを更新した。
（東京国立博物館）
ウ　「列品管理プロトタイプデータベース」について、作品に関連する文献データを管理する機能を実装した。
エ　収蔵する美術品台帳について113,049件のデジタル撮影を行った。また、美術品台帳のデジタル画像から12,386件分のテキストデータ化を行った。「収蔵品データ管理システム」のデータ整備を推進した。
オ　収蔵する和古書・漢籍（戦前の展覧会目録を含む）について25,575件のデジタル撮影を行った。
カ　未整理のブローニーフィルムのデジタル化に向けて、引き続き検討した。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数	25,575件	24,471件	B		36,811	30,013	25,334	26,972
和古書・漢籍	25,575件	－	－		25,911	13,924	20,224	19,002
洋古書	0件	－	－		10,820	16,089	5,110	7,970

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 順調に成果を挙げている。デジタル撮影した画像の登録、及び「列品管理プロトタイプデータベース」における文献データの管理により業務、調査研究の効率化を図ることができた。

【中期計画記載事項】
（略）収蔵品等の現状を確認の上、管理に必要なデータ（画像データ、テキストデータ等）を整備して、展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。なお、収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に基づき順調に成果を挙げている。画像データを継続的に蓄積するとともに、文献データなどの文字データの整備を推進し、業務や調査研究に役立てた。和古書のデジタル化も前中期目標の期間の実績以上とすることができた。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1131B1

中項目	1． 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 1)有形文化財の管理　1/2

【年度計画】
（4館共通）
ア　収蔵等に必要な施設設備の充実、改善に向けた検討を行う。
イ　定期的に寄託品の所在確認作業を行う。

担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　羽田聡

【実績・成果】
（4館共通）
ア　30 年度は、陶磁収蔵庫の改善を実施すべく、陶磁作品を収納するためのボテ箱を 6 個作成した。これにより、比較的小さいサイズの作品を収蔵庫内で効率よく収蔵することが出来るようになり、収蔵スペースの確保に繋げることができた。
イ　毎年度 2 回行う寄託品の期間継続手続きにあわせて、寄託品の所在確認作業を行った。また、収蔵品・寄託品に関し、必要に応じて文化財情報システムを適宜修正した。

【補足事項】
ア　陶磁収蔵庫における収納効率を上げるためのボテ箱の作成前後の様子

改善前

改善後

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
収蔵施設の収容率	100%	－	－		－	－	100%	100%

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 30年度は陶磁収蔵庫において、作品収納用のボテ箱を製作することで、収蔵スペースの確保を達成し、施設設備の充実と改善を計画的に実施、大量の寄託の受け入れに対応することができた。 寄託品の所在確認作業も予定通り2回実施することができた。

【中期計画記載事項】
国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品等の管理を徹底し、特に収蔵品等の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品等の現状を確認の上、（中略）展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。（略）

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 30年度も環境モニタリング等のデータを活用し、展示・調査研究等の業務に活かすことができた。また、収蔵スペース確保のために、外注で陶磁作品収納用のボテ箱を製作し、収蔵庫内に効率よく収蔵出来るようにした。今後も、各分野の収蔵状況を考慮したうえで収蔵庫スペースの確保に向け検討を進めていく。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1131B2

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 1)有形文化財の管理　2/2

【年度計画】
（４館共通）
ウ　収蔵品・寄託品等に関し、新規にデジタル撮影した画像等を蓄積し、それらに関する基本情報のデータ化及びデータ整備を引き続き推進する。
エ　文化財情報システム（業務システム）の運用を継続し、収蔵品データを更新する。
（京都国立博物館）
ア　収蔵品写真等のガラス乾板・マイクロフィルム・カラーフィルム・等のデジタル化を実施する。

担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　羽田聡

【実績・成果】
（４館共通）
ウ　収蔵品・展覧会出品作品等の新規撮影は、デジタル撮影を6,520件（カット）行った。
エ　収蔵品のデジタルデータを作成し、文化財情報システムへ登録した。(30年度登録件数：30,506件)
・購入、寄贈、寄託等に伴い、文化財情報システムの収蔵品データを適宜更新し、展示・調査研究に役立てた。
（京都国立博物館）
ア　収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を継続し、3,380件実施した。以下、内訳を記す。
＊館内のフィルム用スキャナを運用しつつ、外部委託による既存フィルムのデジタル化を進め、30年度は3,307枚のデジタル化を行った。
＊継続してマイクロフィルムのデジタル化を進めており、30年度は73リール（49,033コマ）のデジタル化を行った。

【補足事項】
（４館共通）
ウ　当館の展覧会出品作品の撮影は、特別展 「京のかたな」(9月29日～11月25日)、特別展「時宗二祖上人七百年御遠忌記念　国宝 一遍聖絵と時宗の名宝」(31年4月13日～令和元年6月9日)、特別展「流転100年 佐竹本三十六歌仙絵と王朝の美」(令和元年10月12日～11月24日) を対象として進めた。

太刀 銘粟田口一竿子忠綱彫同作 宝永六年八月吉

・特集展示「美麗を極める中国陶磁」(12 月 18 日等、ポスター・チラシ・リーフレット・図録作成のため、作品の撮影を行った。
・松井宏次氏寄贈作品（松井コレクション)・須磨コレクション等を含めた収蔵品の撮影を継続して行った。
・調査研究事業「近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究　河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」について、29 年度に引き続いて観心寺を調査し、作品の撮影を行った。(処理番号 1411B エ参照)
・科学研究費助成事業による研究報告書作成のための撮影を行った。
（京都国立博物館）
ア　外部委託とともに当館職員によるスキャニング作業を積極的に行い、費用削減を図りながら、フィルムのデジタル化を促進した。
・ガラス乾板の整理作業は、京都造形芸術大学の協力の下、全てのデジタル化を終了した。今後は、調査データの入力及び、デジタル化したデータの整理作業を行う。
・原板フィルムの保存状態改善のため、保存に適した収納箱への移し替えを継続して行った。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数（既存フィルム）	3,380件	3,816件	C	経年変化	5,536	5,966	5,820	4,444

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	29年度に比べ、デジタル化件数が減少している理由は、ガラス乾板のデジタル化が終了し、整理に移行したためである。31年度以降はマイクロフィルムと既存フィルムのデジタル化を積極的に進めていく。

【中期計画記載事項】
（略）収蔵品等の現状を確認の上、管理に必要なデータ（画像データ、テキストデータ等）を整備して、展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。なお、収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	ガラス乾板のデジタル化が終了し、30年度はデータの整理に入ったことから、デジタル化件数自体は減少した。また、マイクロフィルムも来年度には全てデジタル化を終える予定であり、31年度も引き続きデジタル化件数は減少すると予想される。今後はデジタル化した画像を活用できるように整理を進めつつ、既存フィルムのデジタル化を積極的に進めていく。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1131C1

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 1)有形文化財の管理　1/2

【年度計画】
（4館共通）
ア　収蔵等に必要な施設設備の充実、改善に向けた検討を行う。
イ　定期的に寄託品の所在確認作業を行う。

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　内藤栄

【実績・成果】
（4館共通）
ア
・青銅器館ホールの窓サッシ部の結露対策改善のため空調設備を設置し、隣接した展示室（収蔵品）の温湿度の改善を行った。
・施設設備の充実、改善に向けた検討を行う、環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループを毎月1回（計12回）開催した。
イ　寄託継続証の発行作業を通じて、各部門に収蔵状況の確認を勧め、さらに証書の発送・通知により寄託者の異動（宗教法人代表役員の交代や名義人の転居、死亡・相続等）を把握し、信頼関係のもとに寄託が継続するよう取りはからった。

【補足事項】
（4館共通）
ア　学芸部の書籍・絵画・彫刻・工芸・考古の各部門と施設担当部署で構成するワーキンググループを開催し、展示室、収蔵庫等施設の維持管理、充実・改善に向けた検討を行った。

結露対策改善のため空調機設置

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
収蔵施設の収容率	99%	－	－		－	－	99%	99%

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 毎月1回、環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループを開催し、施設の維持管理、充実・改善に向けた検討を行った。ワーキングにより問題等を確認し、改善に向けた検討を行うことで、施設設備の充実、改善のほか収蔵庫保存環境の改善が図られた。

【中期計画記載事項】
国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品等の管理を徹底し、特に収蔵品等の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品等の現状を確認の上、（中略）展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。（略）

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 青銅器館ホールの空調設備設置により適切な温湿度管理を行うことができ、収蔵品の保存環境改善が図られた。 また、中期計画に沿って、寄託品の所在確認および寄託者の異動把握は順当に進められた。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1131C2

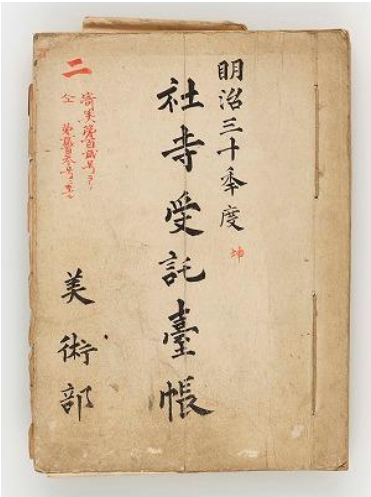
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 1)有形文化財の管理　2／2

【年度計画】
（４館共通）
ウ　収蔵品・寄託品等に関し、新規にデジタル撮影した画像等を蓄積し、それらに関する基本情報のデータ化及びデータ整備を引き続き推進する。
エ　文化財情報システム（業務システム）の運用を継続し、収蔵品データを更新する。
（奈良国立博物館）
ア　収蔵品について情報の整備を継続して実施し、収蔵品データベースの充実を図る。
イ　画像データベースの個別データを追加更新する。
ウ　修理記録・古写真・ガラス乾板等の整理とデジタル化を推進し、運用方法について引き続き検討する。
エ　収蔵品写真等の既存の白黒フィルムのデジタル化を進める。

担当部課	学芸部	事業責任者	資料室長　宮崎幹子

【実績・成果】
（４館共通）
ウ　収蔵品・寄託品等に関し、新規にデジタル撮影した画像等を蓄積し、それらに関する基本情報のデータ化及びデータ整備を引き続き推進した。
エ　文化財情報システム（業務システム）の運用を継続し、収蔵品データを更新した。
（奈良国立博物館）
ア　収蔵品について情報の整備を継続して実施し、収蔵品データベースの充実を図った。
イ　画像データベースの個別データを追加更新した（4,671 件）。
ウ　修理記録・古写真・ガラス乾板等の整理とデジタル化を推進し、運用方法について検討した。
エ　収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を実施した（3,047件）。

【補足事項】
写真（フィルム、ガラス乾板）のデジタル化、デジタル撮影を多数行うとともに、収蔵品データベース並びに画像データベースの更新を適宜行なった。
30年度より明治28年（1895）の開館以降の館蔵品・寄託品の状況を明らかにすべく、館史史料の整理に着手し、一部の目録作成と撮影を実施した。この結果、明治30（1897）年の「古社寺保存法」の制定を契機に社寺から多くの寄託品の受け入れがあったことが判明し、その成果を論文として発表した（山口隆介・宮崎幹子「明治時代の興福寺における仏像の移動と現所在地について－興福寺所蔵の古写真をもちいた史料学的研究－」『MUSEUM』676号、10月）。
31年度以降この作業を本格化させ、開館前後の文化財保護をめぐる社会的状況や、館蔵品・寄託品の内容、仏教美術専門館としての性格付けの契機などを史料に基づいて解明し、新たな歴史像の形成に向けて努力するとともに、文化財保護における博物館の役割と歴史的意義についても内外に向けて積極的に発信していきたい。



「明治三十年度　社寺受託台帳」

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数（既存フィルム）	3,047件	5,373件	D		5,154	3,875	3,081	3,017

【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 定量的評価の目標値は前中期期間における既存カラーフィルムのデジタル化実績件数の平均値から算出しており、同フィルムのデジタル化は28年度で完了した。29年度よりモノクロフィルムのデジタル化件数を実績値としてあげており、単純に目標値との比較はできないが、29年度より上回る件数となり、順調に成果をあげている。

【中期計画記載事項】
（略）収蔵品等の現状を確認の上、管理に必要なデータ（画像データ、テキストデータ等）を整備して、展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。なお、収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。

【中期計画に対する評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 カラーフィルムのデジタル化が28年度で完了したことにより、当初の目標は達成されている。現在はモノクロフィルムのデジタル化を進めており、それを実績としているが、「デジタル化」の主流は既にデジタル撮影に移行して久しく、今後の指標としては、スキャニング作業だけでなくデジタル撮影の件数についても判定に加えていくことが相応しい。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1131D1

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 1)有形文化財の管理　1/2

【年度計画】
（４館共通）
ア　収蔵等に必要な施設設備の充実、改善に向けた検討を行う。
イ　定期的に寄託品の所在確認作業を行う。

担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長　原田あゆみ

【実績・成果】
ア
・施設設備に関しては収蔵庫10か所の扉の点検を行うとともに、非常時における収蔵庫の開閉について職員一同に周知を行った。
・福岡市美術館の耐震補強改修を受け、28年12月から古美術品を中心とした約4,000点を当館にて保管し、展示活用してきたが、30年11月に無事返還が終了し、当該収蔵庫のモニタリング及び清掃を行った。
イ　年2回行う寄託品の継続手続きに合わせて、所在確認作業を実施した。また、開館当初の大量寄贈品である民族資料（金子コレクション）の保管方法について見直し、所在確認作業とあわせて中性箱による保管作業を行った。

【補足事項】

福岡市美術館所蔵作品の保管状況
（担当者が最終確認をする様子）

福岡市美術館所蔵作品を当館から搬出している様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
収蔵施設の収容率	80%	－	－		－	－	80%	85%

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
　福岡市美術館の作品の受入、保管、返還を無事終了した。それまで使用していた収蔵庫は、モニタリングと清掃を行い、特別展等で搬入された作品の保管場所として活用した。

【中期計画記載事項】
　国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品等の管理を徹底し、特に収蔵品等の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品等の現状を確認の上、（中略）展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
　計画通り、所定の民族資料の所在確認と保管見直し作業を達成した。定期的な寄託品の所在確認を行うとともに、31年度以降計画している棚卸しのための準備作業を進めた。
　31年度から収蔵品や長期借用品の棚卸しを3か年の期間で実施する。あわせて収蔵品データベースの拡充を図る予定である。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1131D2

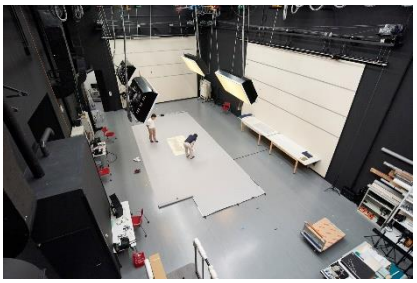
中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 1)有形文化財の管理　2/2

【年度計画】
（４館共通）
ウ　収蔵品・寄託品等に関し、新規にデジタル撮影した画像等を蓄積し、それらに関する基本情報のデータ化及びデータ整備を引き続き推進する。
エ　文化財情報システム（業務システム）の運用を継続し、収蔵品データを更新する。
（九州国立博物館）
ア　文化財情報（収蔵品データベース、寄託品・借用品データベース、陳列案管理データベース、画像データベース）の一元的管理が可能な業務システム構築を進める。

担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長　原田あゆみ

【実績・成果】
（４館共通）
ウ　専任撮影技師による 3,820 件（カット）の収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データを整備した。
エ　文化財情報システムの運用を継続し、1,224 件の収蔵品データを新規登録した。
（九州国立博物館）
ア　列品・寄託品・借用品などの有形文化財情報と陳列・画像・修復などの情報を一元管理するシステムを継続的に運用し、また、同システムの改修・整備を進めた。

【補足事項】
（４館共通）


大型平面資料の撮影風景

仏像の撮影風景

30 年度納入の複写装置下部台

（九州国立博物館）
ア　30年度は、これまで独立して管理していた修復情報を、業務システムへ統合し、同システム上で閲覧可能とした。これにより、有形文化財に関する情報へのアクセシビリティを飛躍的に向上させることができた。引き続き、基盤強化と情報統合の作業を進め、博物館活動を支援する体制の構築を目指す。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
収蔵品等に関する資料等のデジタル化件数（既存フィルム）	（完了）	－件	－	経年変化	－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	新規のデジタル撮影を例年と同様に達成した。また「九州国立博物館文化財情報システム」の充実を図った。さらに、画像データベースの整備を進め、内外へ公開することで利便性を向上した。

【中期計画記載事項】
（略）収蔵品等の現状を確認の上、管理に必要なデータ（画像データ、テキストデータ等）を整備して、展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。（略）

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	計画通り、収蔵品等の情報を集中的に管理し、展示や調査研究に活用していくための核となるシステムを整備した。また、外部に文化財情報を発信し、博物館活動の活性化に供した。 31年度以降は30年度に収集した作品（独法九博：286件、福岡県アジア文化交流センター：184件）の新規撮影を進めるとともに、収蔵品全体の画像をポジフィルムに替えて高精細カメラにて再撮影する。30年度同様に2,000カット以上の撮影が見込まれており、専任技師による撮影が必要不可欠である。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1132A

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等　2)有形文化財の保存

【年度計画】
（４館共通）
ア　収蔵品等の生物被害等を防止するため IPM（総合的有害生物管理）の徹底を図る。
イ　収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。
（東京国立博物館）
ア　本館収蔵庫の整備計画の根拠となる環境情報の収集、解析、評価を行う。
イ　収蔵品等の保存と展示に関する環境について全館的視野にたって調査研究を進め、環境データの解析・蓄積を行う。
ウ　収蔵・展示施設における地震対策に関わる調査研究を行う。
エ　収蔵・展示施設の温湿度、空気汚染物質など保存環境に関する年次報告を整備する。
オ　輸送中の文化財に生じる振動及び衝撃に関する計測と調査を実施する。

担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長　冨坂賢

【実績・成果】
（４館共通）
ア　夏季に収蔵庫等72か所を対象に生物生息調査および害虫防除のための防虫薬剤設置を実施した。新規収蔵品に対して燻蒸を1回実施した。修理室1か所の除塵防黴処置を実施した。
イ　収蔵品を中心とした保存カルテを1,460件作成した。
（東京国立博物館）
ア　本館収蔵庫の温湿度環境情報を収集し、それらの解析と評価から、収蔵環境の特性把握を行なった。
イ　収蔵庫及び展示室361か所の温湿度を計測し、11か所の空気汚染物質の濃度について計測を行い、データを蓄積した。
ウ　機構の異なる免震装置の性能を調査・比較した上で、常設展示に用いる免震装置付きの展示ケースを新規作製した。
エ　収蔵庫及び展示室246か所の温湿度、11か所の空気汚染物質に関する年次報告を整備した。
オ　文化財の貸借に伴う輸送中に生じた振動及び衝撃の計測を実施し、海外輸送時の5つの計測データを収集した。また、考古資料の館内輸送を想定した防振機能付き台車を試作した。

修理室の除塵防黴処置

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	館内保存環境の現状把握のために、生物生息、温湿度、地震対策、空気環境、輸送中の振動に関する調査を実施した。解析によって改善点を導き出すために必要な情報量を獲得できた。

【中期計画記載事項】
適切な展示・保存環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	29年度に引き続き、文化財の保存・展示・輸送環境に関する調査研究は比較的順調に事業を実施できた。大規模災害に対する館全体の防災レベルに関しては、今後も重点的に事業を継続することで徐々に向上させていきたい。

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1132B

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等　2)有形文化財の保存

【年度計画】
（４館共通）
ア　収蔵品等の生物被害等を防止するため、IPM（総合的有害生物管理）の徹底を図る。
イ　収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。
（京都国立博物館）
ア　平成知新館の展示環境及び長期的な保存環境の維持管理に関わる調査研究を行う。
イ　明治古都館の改修計画に役立てるため、各種環境データの収集などを行う。
ウ　フィルム保管庫、資料棟、文化財修理所、外部収蔵庫（KICK）も含めた、包括的な環境管理体制の構築を目指し、各種環境データの計測を継続する。

担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　羽田聡 保存科学室長　降幡順子

【実績・成果】
（４館共通）
ア　館内外の保存科学担当者をはじめとする関係者との連携を強化し、IPMの徹底を図った。
イ　収蔵品の保存カルテを131件作成した。
（京都国立博物館）
ア　平成知新館では専用LAN経由環境モニタリングシステムを構築し継続的な温湿度調査を実施している。また定期的に全館を網羅した昆虫類の生息調査、検知管による吸気環境調査を実施している。
イ　明治古都館では収蔵庫および限定的使用を実施した展示室について、温湿度調査（通年）、昆虫類生息調査を継続して実施した。また東収蔵庫は改修工事にともない、一時的にモニタリングを中止しているが、工事終了後に温湿度調査、精密清掃、昆虫類生息調査を再開する予定である。
ウ　各施設の温湿度データ、昆虫類生息調査、浮遊菌類調査等を実施し、外部収蔵庫（KICK）では現地管理者と毎月打ち合わせを実施するなど連携強化を図ることができた。またKICKの緊急対応として一時避難させた京都建仁寺塔頭両足院収蔵品は、31年3月に搬出され、本事案は終了した。

【補足事項】
外部収蔵庫（KICK）の防災対応
（落下飛び出し防止ネット設置状態）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：Ｂ

【判定根拠、課題と対応】
貸与に伴う点検時を主体として行っている収蔵品の保存カルテを継続して行い、131 件作成した。
展示・収蔵施設の温湿度環境モニタリング・昆虫類生息調査等の実施とそのデータ解析結果をもとに、包括的な環境管理体制の構築を目指し、各施設の施設整備関連部署との連携強化をより進めることができた。外部収蔵庫（KICK）では、年間と通して温湿度のモニタリング・昆虫類生息調査等を実施し、受け入れ文化財の適切な保管管理を実施した。今後は解析結果のフィードバックとその迅速な対応を実施するための体制をより強固にしていく必要があると考える。

【中期計画記載事項】
適切な展示・保存環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。

【中期計画に対する評価】
評定：Ｂ

【判定根拠、課題と対応】
適切な展示・保存環境の保持のための地震等への対策として、外部収蔵庫(KICK)では、棚内収蔵品の落下防止対策に一部着手することができた。展示・収蔵施設の温湿度管理は、所管7か所の建物内について通年モニタリングを実施しデータの蓄積を図るとともに、それらの解析結果を受けて、より適切な展示・保存環境の保持に向けて建物毎の対応策を検討することができた。今後も継続してモニタリング活動を進めるとともに、他館との情報交換などを実施し、より適切な環境保持に対する調査研究に繋げていきたい。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1132C

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等　2)有形文化財の保存

【年度計画】
（４館共通）
ア　収蔵品等の生物被害等を防止するため、ＩＰＭ（総合的有害生物管理）の徹底を図る。
イ　収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。
（奈良国立博物館）
ア　展示施設及び展示ケースの温湿度管理について、無線ＬＡＮによるデータ管理システムを更に充実させる。
イ　展示ケース内の温湿度・粉塵量などを継続的に計測し、ケースの調湿性能や気密性能の向上を図る。
ウ　収蔵・展示施設の適正な温湿度管理の徹底を図る。

担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長　鳥越俊行

【実績・成果】
（４館共通）
ア　館内における文化財害虫の生息状況を把握するため、文化財の保管および展示に関わる箇所を中心に昆虫調査用トラップを設置しモニタリングを実施した。トラップは約 2 か月に 1 度交換し、調査結果を蓄積するとともに傾向を分析することによりＩＰＭを推進した。文化財害虫の生息リスクのある古い展示ケースには防虫シートを設置し、収蔵場所のほこり対策には防塵マットを定期交換するなど、展示･収蔵環境の衛生保持に努めた。
イ　保存修理指導で作製した文化財の写真添付が可能な作製フォームを用いて、103 件の保存カルテを作成・保管した。
（奈良国立博物館）
ア　無線ＬＡＮによるリアルタイム温湿度管理システムを運用し、正倉院展のような多数の観覧者がもたらす展示環境の変化について、監視並びに即時の対応を実施した。無線式温湿度センサーは展覧会の都度設置しており、展示終了後にはデータの分析を行い今後の参考資料とするとともに、蓄積した温湿度測定データを館内環境の改善に役立てた。
イ　展示ケース内の粉塵調査を正倉院展終了後の11月13日に実施した。また劣化した展示ケースのシール部分を交換・修理し、気密性の向上を図った。
ウ　展示室の無線ＬＡＮ温湿度管理システムによる24時間モニタリングと展示室入口のエアカーテンを適切に運用することで館内温湿度負荷の低減を図り、年間を通じて安定した温湿度環境を維持した。

【補足事項】
（４館共通）
ア　館内の展示室･収蔵庫や文化財保存修理所等150か所に設置している文化財害虫調査用トラップを、学芸部研究員が当番制で2か月に1回設置・回収を行った。回収したトラップに捕獲された害虫の同定は外部業者に委託し、種類や捕獲数に関する情報の蓄積を行うとともに、害虫被害が懸念される箇所を中心に対策を実施した。併せて害虫発生を防ぐための清掃等による衛生環境の改善・保持などＩＰＭの実践につなげた。
（奈良国立博物館）
ア　機械式自動調湿装置を内蔵した展示ケースを使用することで、多数の観覧者によるケース内の急激な温湿度変化を緩和し安定した展示環境を保つことができた。

収蔵場所の入口に防塵マットを設置

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
29年度に引き続き、当初の予定通りに温湿度の管理、文化財害虫への対策等が実施でき、文化財の管理・保存が図られた。必要に応じて展示ケースのシール部分の交換や修理等を進め、展示環境の向上を図った。

【中期計画記載事項】
適切な展示・保存環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
管理・保存のために、温湿度・生物生息等に対する計画的な対策を実施でき、中期計画は順調に進んでいる。31年度以降も展示・保存環境の把握に努め、適切に対応することにより文化財の維持・管理に努める。

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1132D

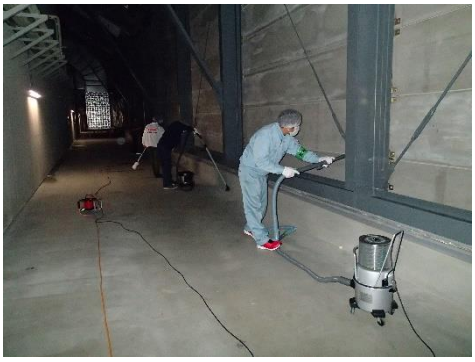
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等　2)有形文化財の保存

【年度計画】
（４館共通）
ア　収蔵品等の生物被害等を防止するため、ＩＰＭ（総合的有害生物管理）の徹底を図る。
イ　収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。
（九州国立博物館）
ア　館内の温湿度・空気質・生物生息など保存環境に関するデータを蓄積する。
イ　全館的視野に立った収蔵品等の展示・保存環境に係る調査研究を進め、環境データの蓄積・解析を行う。

担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長　木川りか

【実績・成果】
（４館共通）
ア　昆虫トラップ調査結果をもとに、徹底清掃などの方策を講じた。
イ　収蔵品及び修理完了資料を中心に保存カルテを 101 件作成した。
（九州国立博物館）
ア　温度・湿度モニタリング機器を活用して展示室・収蔵庫の温度・湿度データを蓄積した。粘着シートによる昆虫トラップを収蔵庫、展示室、諸室等約440か所に設置し、2週間ごとに交換・観察した。この調査により、文化財害虫の進入経路等を速やかに把握でき、文化財害虫対策をより徹底して行うことができた。
イ　展示室や収蔵庫の周辺の機械室等における、文化財害虫の発生状況を確認した。文化財が置かれる場所の周辺環境を把握し、展示室や収蔵庫の環境保全に努めた。

【補足事項】
ア
・展示ケース内に温度・湿度のデータロガーを個別に配置し、文化財に合わせた適切な温度・湿度管理をすることができた。年間1,000件を超える数多くの展示替えがあるが、データの管理、解析によって、展示環境を安全に管理することができた。
・館内収蔵庫、展示室、諸室等に約440個の粘着トラップを設置・回収し、月ごとのモニタリング結果をもとに、速やかな防虫対策を講じることができた。また、これまで行ってきたように、害虫侵入箇所と館内の害虫の生息状況を早期に発見し、対処する体制を維持することができた。
・地元のNPO法人（ミュージアムIPMサポートセンター）や市民ボランティアとの連携を進めた。市民ボランティアには、展示室など一般来館者エリアでのトラップ交換、NPO法人には、文化財を移動する導線の周辺エリアのメンテナンス、館内のトラップの観察など、環境保全に両者の協力を得た。


展示室周辺の機械室の徹底清掃の様子

イ　文化財を置いている場所だけでなく、その周辺の機械室等の場所において、文化財害虫の発生が懸念されたため、隅々まで徹底清掃した。その後、通常の粘着トラップよりも面積の広い捕虫粘着シート（虫ペチャシート）を設置し、文化財害虫の発生状況を確認した。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
殺虫殺黴処置	26件	－	－		9	12	58	35
保存カルテ作成件数	101件	－	－		75	91	81	102

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	文化財が置かれている場所の温度・湿度データを常にしっかりと計測し、数多くの展示替えに合わせて、文化財の材質・状態に対し適切な展示環境を整備できた。また、展示室や収蔵庫の周辺における文化財害虫の発生状況を確認し、文化財が置かれる場所への侵入を防ぐよう努めた。

【中期計画記載事項】
適切な展示・保存環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	適切な展示・保存環境の保持のため、展示ケース・展示室・収蔵庫の温度・湿度をモニタリングし、適切な温度・湿度で展示・保管することができた。展示室・収蔵庫だけでなくその周辺エリアでの文化財害虫の生息状況をモニタリングし徹底清掃を行い、中期計画を順調に実施した。今後も30年度の手法をベースに館内の環境保全を進め、着実な取り組みを実施する。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1133-1A

中項目	１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 3)有形文化財の修理　3)-1計画的な修理及びデータの蓄積

【年度計画】

（東京国立博物館）

ア　文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努めるとともに、劣化の著しい絵画、書跡、染織、考古の収蔵品を中心に緊急性の高いものから本格修理を実施する。特に 27 年度より実施している国宝「医心方」の修理に継続して取り組む。

イ　引き続き国宝・重要文化財の中長期的修理計画を策定する。

ウ　保存修復関係資料（前年度修理実施分）のデータベース化を図る。

担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長　冨坂賢

【実績・成果】

(東京国立博物館)

ア　保存修復課に彫刻や工芸品など立体の修理技術者および装こう関連修理技術者として書画の修理技術者の2人の修理技術アソシエイトフェローを配置し（うち立体担当1人は9月1日付で研究員として採用された）、館内で実施する館蔵品の応急(対症)修理を行なった。作品の劣化予防のために422件の応急修理を実施した。

イ　修理計画立案に向け、国宝・重要文化財を含む250件の作品に関して修理仕様の検討を行ない、中長期修理計画策定を進めて、26件の本格修理を実施した。

ウ　データベース構築のために、29年度に修理が完了した43件の修理内容についてデジタル化を実施し、その成果をもとに『東京国立博物館文化財修理報告書XVIII』を刊行した。

【補足事項】

・国宝「医心方」（平安～江戸時代）独立行政法人国立文化財機構文化財保存活用基金により、修理を継続した。

・国宝「国宝　埴輪挂甲武人」（土製 古墳時代・6世紀 群馬県太田市飯塚町出土)はバンク・オブ・アメリカからの寄附金により修理を実施した（29年3月着工、工期28か月）。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
修理件数（本格修理）	26件	－	－		77	86	68	69
修理のデータベース化件数	98件	－	－		86	90	61	47

【年度計画に対する総合評価】
評定：Ｂ

【判定根拠、課題と対応】
緊急性の高い本格修理及び対症修理、計画立案のための事前調査を計画的に実施した。運営交付金による修理費が伸び悩む中、寄附金の獲得に努め、国宝3件、重要文化財1件を含む修理を実施した。なお、本格修理の件数が減少しているのは、29年度からの継続事業に修理費をあてたこと、また考古資料相互貸借経費による修理が事業内容の見直しに伴いいったん休止したなどによるためで、中期修理計画は予定通りに運用している。応急修理件数は29年度より増加しているが、これは貸与促進事業等に貸し出す作品の応急修理件数等が増えたことも要因である。

【中期計画記載事項】

修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。

【中期計画に対する評価】
評定：Ｂ

【判定根拠、課題と対応】
中期計画に従い、事前調査、対症修理、本格修理の各段階で保存科学と修理技術が連携して保存修理事業にあたり、博物館活動に対して最適な作品修理を行うことができた。今後常駐する修理技術者を増員し、文化財の安全な活用を担保できる環境を整えたい。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1133-1B

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 3)有形文化財の修理　3)-1計画的な修理及びデータの蓄積

【年度計画】
（京都国立博物館）
ア　文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努めるとともに、緊急性の高いものから本格修理を実施する。
　特に重要文化財「大手鑑（八十葉)」の修理に継続して取り組む。
イ　引き続き収蔵品の中長期的修理計画の策定を検討する。
ウ　修理資料のデータベース化を図る。

担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　羽田聡 保存修理指導室長　大原嘉豊

【実績・成果】
（京都国立博物館）
ア
・「廬山高図」等の応急修理を行い、劣化の予防に努めた。
・28年度より4か年計画の3年目となる重要文化財「大手鑑（八十葉)」の修理を継続して行った。
イ　収蔵品の中長期的修理計画の策定の検討を行った。
ウ
・30年度は149件の新規修理文化財搬入がありデータベース化を行うとともに、過去のデータに関して1,972回追加、更新を行った。
・保存修理所創設以来の非電子化修理報告のPDF化に着手し、30年度は119件の修理記録のPDF化を行った。

【補足事項】
ア　緊急性の高い作品を優先に、17件の本格修理を行った。
　（絵画5件、書跡3件、金工5件、漆工1件、染織2件、考古1件）

重要文化財「大手鑑（八十葉)」修理風景

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
修理件数（本格修理）	17件	-	-		11	12	14	11
修理のデータベース化件数	149件	-	-		113	113	151	180

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 30年度も多分野にわたって、緊急性の高い収蔵品から計画的に修理を行うことができた。また、4か年事業の重要文化財「大手鑑（八十葉)」の修理についても順調に継続修理がなされている。 金工修理作品のうち「槍　銘△長谷部国信」、「刀　銘立命館義一作／乙酉年二月日」は、修理完了後に30年度特別展「京のかたな」にて公開した。

【中期計画記載事項】
修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 30年度も多分野にわたり、列品管理室、保存修理指導室、保存科学室、各担当者が連携し、緊急度の高い作品から順に修理を行い、修理業者とも相談しながら、順調に成果を上げることができた。

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1133-1C

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 3)有形文化財の修理　3)-1計画的な修理及びデータの蓄積

【年度計画】
（奈良国立博物館）
ア　文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努めるとともに、劣化の著しい彫刻、絵画、書跡、漆工や考古の収蔵品を中心に緊急性の高いものから本格修理を実施する。特に重要文化財「絹本著色親鸞聖人像」等の修理に取り組む。
イ　引き続き収蔵品の中長期的修理計画を策定する。
ウ　修理資料のデータベース化を図る。
エ　寄託の継続を図る必要性の高い寄託品について修理を実施する。

担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長　鳥越俊行

【実績・成果】
（奈良国立博物館）
ア
・館蔵品本格修理6件のうち、新規4件、28年度からの継続事業1件、29年度からの継続事業1件を実施した。
　内訳　絵画3件
　　彫刻1件
　　書跡1件
　　考古1件
・年度内に5件が完了した。
イ　22年度に策定した館蔵品の長期修理計画に基づき、館蔵品修理を計画通りに実施した。
ウ　『文化財保存修理所修理報告書』の刊行に向け準備を進め、修理報告資料を整理しデータベース化に努めた。
エ　寄託所蔵者と協議を行い、寄託品3件について当館の推薦による財団からの助成を受けて修理を実施した。

【補足事項】
（奈良国立博物館）
ア
・収蔵品の修理を目的とした募金箱について、従来の設置場所以外に特集展示「新たに修理された文化財」の期間中、展示会場に設置した。
・寄託品修理として、新規に法隆寺所蔵　木造釈迦如来坐像と元興寺町共和会所蔵　木造大日如来坐像の2件着工し、唐招提寺所蔵　絹本著色行基菩薩像は30年度末に修理が完了した。京都・聖護院所蔵 絹本著色役行者八大童子像は住友財団の助成により29年度から2か年継続で修理を行っており30年度末に修理が完了した。奈良・達磨寺所蔵 絹本著色玄奘三蔵十六善神像と奈良・談山神社所蔵　金沃懸地平文太刀は出光文化福祉財団の助成により30年度末に修理が完了した。

特集展示「新たに修理された文化財」期間中に設置された募金箱

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
修理件数（本格修理）	6件	―	―		9	11	7	6
修理のデータベース化件数	63件	―	―		77	66	62	69

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 28年度及び29年度から実施している継続事業による修理のほか、新規事業による修理にも着工でき、計画的に修理が実施できている。また、本格修理及びデータベース化の件数は、概ね予定通り進行した。

【中期計画記載事項】
修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 財団助成や寄附金、募金等を活用し、緊急性の高いものから順次修理を実施することができた。また、当館保存担当研究員と文化財保存修理所の修理技術者が連携し、X線CTやX線透過撮影、蛍光X線分析などを実施することで、適切な修理の基礎資料とした。中期計画は順調に進んでいる。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1133-1D

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 3)有形文化財の修理　3)-1計画的な修理及びデータの蓄積

【年度計画】
（九州国立博物館）
ア　文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努めるとともに、緊急性の高いものから本格修理を実施する。特に重要文化財「対馬宗家関係資料」等の修理に継続して取り組む。

担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長（兼環境保全室長）　木川りか

【実績・成果】
（九州国立博物館）
ア
・館蔵品を中心に、損傷状況や展示計画等を勘案し、緊急性の高い文化財41件（本格40件、応急1件）の修理を実施した。
・当館文化財保存修復施設使用者等の協力を得て、館蔵品、寄託品、九州所在の地方公共団体・社寺等所蔵品の保存状態調査を行うことができたため、効率的な調査の実施と現実的な修理計画の策定、適切な処置へとつなげることができた。

【補足事項】
・館費による修理件数41件(本格40件、応急1件）の内訳：
絵画4件(本格4件)、書跡2件(本格1件,応急1件)、金工24件(本格24件)、刀剣1件(本格1件)、陶磁2件(本格2件)、染織1件(本格1件)、考古1件(本格1件)、歴史資料6件(本格6件)
・重要文化財「対馬宗家関係資料のうち箱19巻1～7」(当館所蔵)は、鉄媒染で染色されたと考えられる表紙裂が使用されており、酸化により強度が著しく低下し、取り扱いが困難な上、美観を損ねていた。当館文化財保存修復施設で修理が実施されたことにより、修理の進行状況の頻繁な確認と協議を行うことができ、安定性の高い化学染料を用いて同色・同模様の表紙裂を新調した。修理は2か年計画（31年度まで）で継続中である。
・当館文化財保存修復施設使用者の協力を得て、福岡・千眼寺の本尊、釈迦如来坐像ほかの保存状態調査を行った。
・29 年度に一括寄贈を受けた茶釜 211 口（当館所蔵）について、緊急性の高い 24 口の修理を行った。特に、茶釜の修理は当館では初めての事例であったため、実体顕微鏡観察等による事前調査を行い、修理方針・修理方法について充分協議した上で修理を実施した。修理後、一部の作品を特集展示「坂本五郎コレクション受贈記念　北斎と鍋島、そして」において公開した。

重要文化財「対馬宗家関係資料のうち箱 19 巻 1～7」の表紙裂の修理前（上）と修理後（下）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
修理件数（本格修理）	40件	－	－		23	22	18	19
修理のデータベース化件数	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 当館文化財保存修復施設使用者等の協力を得て、保存状態調査を行っただけでなく、重要文化財「対馬宗家関係資料」を含む40件の本格修理を計画的に実施することができた。また、修理後は当館で展示活用を図ることで、修理の成果を一般に公開することができた。

【中期計画記載事項】
修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿い、機構内外の研究員や修復技術者と連携し、伝統技術に科学技術を取り入れながら計画的に修理を実施できた。調査研究設備については、正確で安定した分析値を取得できるよう、保守を行った。今後も、緊急性が高い作品から本格修理を実施し、継続的に修理を行うとともに、修理を終えた作品は展示に活用し、広く公開していきたい。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1133-2A1

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 3)有形文化財の修理　3)-2科学的な技術を取り入れた修理

【年度計画】
（4館共通）
ア　紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
イ　修理前あるいは修理中に、蛍光Ｘ線分析、Ｘ線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。

担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長　冨坂賢

【実績・成果】
（4館共通）
ア　修理前作品 TJ-4834-11「河口慧海蒐集遺品」からの検体（本紙、補紙）など 2 件の紙質検査を行って修理方針を決めた。
イ　C-439「神鹿」、J-36697「埴輪　挂甲の武人」など 105 件（654 箇所）の蛍光Ｘ線分析による材質の調査を行い材質調査、修理方針の決定などに寄与した。透過Ｘ線撮影は A-12101「葡萄図」の軸に仕込んである鉛の確認、特別展「顔真卿」展では八双の状態調査を展示前に行い、その後の作業の参照とした。
　Ｘ線関連以外では N-4「文王呂尚図」の赤外線撮影調査を行い、劣化状況の確認と材料、描画技術の調査研究を行った。

【補足事項】

所蔵仏画のX線撮影の様子

X線を用いた展示前状態調査の様子

蛍光X線分析による技法材料調査の様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：Ｂ

【判定根拠、課題と対応】
　所蔵作品の修理前中にしか行えない調査や所蔵品調査、展示前に行う作品の状態で成果を上げている。当館の装置では大きさなどで対応できない文化財もあり、今後は可搬型装置や固定支持具の改良を行ってより多くの作品の調査に寄与できるようにする。

【中期計画記載事項】
　修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。

【中期計画に対する評価】
評定：Ｂ

【判定根拠、課題と対応】
　現在保有している機器の性能を活かした特殊撮影や調査分析、機構内の保存科学研究員と共同した調査研究は目標水準を達しているものと考える。また、機構内外の修復技術担当者と連携した修理前、修理中における調査分析についても目的を達成できている。今後は、現在使用している機器では捉え切れていない「有機質材質の特定」「濃度測定」を行える測定機器を計画的に導入し、また木材の調査においては機構内外の他分野の職員と連携して解析精度を上げていくことが必要である。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1133-2A2

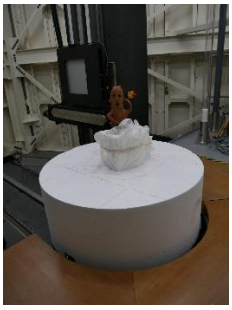
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 3)有形文化財の修理　3)-2科学的な技術を取り入れた修理

【年度計画】
（東京国立博物館）
ア　X線CTスキャナを運用し、研究の進展を図り、より適切な修理方法を引き続き検討する。

担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長　冨坂賢

【実績・成果】
（東京国立博物館）
ア　大型垂直X線CTスキャナではC-20菩薩立像など67件（列品56件、特別展関連1件、外部依頼10件）。大型水平X線CTスキャナではTE-801ナーガなど24件（列品10件、特別展関連4件、外部依頼10件）。微小部X線CTスキャナではC-1818酔胡従など72件（列品42件、特別展関連3件、外部依頼27件）の撮影を行い、修理前、修理中の状態調査ほか、作品の技法などの調査研究を行った。特別展関連(縄文展)では安全な移動梱包作業に向けて担当者とCT画像を見ながら固定する場所などの確認を行った後に輸送梱包を行い、無事に作品を輸送した。

【補足事項】



図左、中：修理前X線CT調査の様子

図右：縄文展　輸送前X線CT調査の様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 調査件数の実績、並びに国内様々の他機関との連携などに活用できたことは十分に評価できる。30年度は29年度に比して特別展関連のX線CT撮影調査は減少したが、本来的な活用方法である所蔵品の修理事業や調査研究が進んだ。

【中期計画記載事項】
修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 X線撮影調査は作品の安全を第一に運用していることから、件数の推移は順調といえる。29年度は特別展関連の作品の撮影が多かったことによる収蔵品の調査が少なかったことを改善し、30年度は中長期的な修理計画に向けた撮影件数が伸びた。今後も特別展、通常業務のバランスを取って撮影を行っていく。

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1133-2B

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 3)有形文化財の修理　3)-2科学的な技術を取り入れた修理

【年度計画】
（４館共通）
ア　紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
イ　修理前あるいは修理中に、蛍光Ｘ線分析、Ｘ線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
（京都国立博物館）
ア　修理作品に関する材質・構造調査を、X線CT撮像、蛍光X線分析等の非破壊的な手法を用いて実施し、より安全な修理計画立案に資する情報を修理者等と共有する。

担当部課	学芸部	事業責任者	保存科学室長　降幡順子

【実績・成果】
（４館共通）
ア　博物館と模写修理事業者（六法美術）とによって、当館館蔵若狭国鎮守神人絵系図の復元模写を 5 か年計画で実施しており、30 年度は 2 か年目である。高精細画像を用いた上げ写しを継続しておこなっている。7 月に原本の料紙の調査をおこない、それをもとに料紙の作成・加工を進めている。
イ　30 年度、所蔵者の協力を得て文化財修理所内工房と実施した科学分析調査は、作品の内部構造調査として、I.P を用いた X 線透過撮影 13 回、X 線 CT 撮像 3 件を実施した。作品の材質調査としては蛍光 X 線分析調査 23 件、微細構造調査としてはデジタルマイクロスコープ撮影 1 件である。
（京都国立博物館）
ア　修理所工房からの依頼による調査として、絹本・紙本の絵画資料の彩色材料調査を実施している。修理中に想定される彩色材料へ与える影響を最も少なくするため、彩色材料の種類に関する情報を修理技術者と分析調査を通じてその場で共有できることは、修理の安全性に対して有用であるといえる。また彫刻や埋納物調査ではX線CT撮影を修理技術者とともに実施することにより、内部構造等を迅速に検討し、修理方針の立案に貢献することが可能となっている。

【補足事項】

国宝「大手鑑」の調査

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 30年度は、若狭国鎮守神人絵系図修理事業の2か年目として実施することとなった。また、従来から実施している展示前状態調査や文化財修理所各工房からの修理前・後調査依頼を受け入れ、透過X線撮影、X線CT撮像、顕微鏡観察、蛍光X線分析等の共同調査をおこなった。修理前調査では、文化財の構造調査、材料調査を実施し多くの情報を修復技術担当者と共有することができ、修理方針の策定などに役立てた。今後も継続を図りたい。

【中期計画記載事項】
修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 修理事業者を含めて綿密な調査、検討を重ね、文化財の保存と公開のため、参考となる情報を蓄積するなど、有形文化財に関連する調査研究について順調に成果を上げている。27年に始めた復元模写事業は研究や一般啓蒙上の効果が高いため継続事業化を進めており、当館蔵「若狭国鎮守神人絵系図」の一部の復元模写を実施している。

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1133-2C

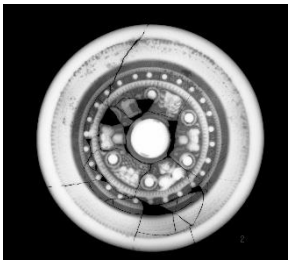
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 3)有形文化財の修理　3)-2科学的な技術を取り入れた修理

【年度計画】
（４館共通）
ア　紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
イ　修理前あるいは修理中に、蛍光Ｘ線分析、Ｘ線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
（奈良国立博物館）
ア　木造文化財について、木材樹種同定の調査を行い、文化財の材料の解明及び修理指針の検討に役立てる。
イ　古墳出土の甲冑片、武具等鉄製品、木造彫刻などのＸ線撮影及び実測図作成を順次進め、材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。

担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長　鳥越俊行

【実績・成果】
（４館共通）
ア　紙文化財の修理を行っている当館文化財保存修理所の文化財保存と共同で修理文化財の紙質調査を行い、修理方針の検討資料とした。
イ　館蔵品や寄託品の修理の際に、当館が保有する光学機器を用い、当館研究員と文化財保存修理所工房職員が共同で赤外線撮影や蛍光Ｘ線分析、Ｘ線ＣＴ等を実施するとともに、修理方針の検討資料とした。
・絵画作品の修理の際に、詳細な観察を行うため赤外線撮影を実施した。（実施計7回）
・修理方針に反映させるため、絵画作品の蛍光Ｘ線分析を実施した。（実施計1回）
・彫刻や工芸作品の修理について、内部構造を調査するためＸ線ＣＴを実施した。（実施計4回）
（奈良国立博物館）
ア　文化財保存修理所で修理を行った木造彫刻作品について、29年度に引き続き京都大学生存圏研究所と連携し樹種同定調査を行った。同定結果は修理に活用している。（実施計3件）
イ　古墳出土の鉄器を中心とする館蔵考古資料の修理に際し、Ｘ線撮影等による構造調査などを行い、製作技術の解明や修理方針の検討資料とした。（実施計1回）

【補足事項】
（４館共通）
イ　当館の館蔵品や寄託品の修理に際して、文化財保存修理所の各工房と当館研究員が共同で文化財調査を実施し、データの収集・共有化に努めた。これらの調査を円滑に実行するため、当館に設置されている光学機器(高精細デジタルカメラ、近赤外線カメラ、蛍光Ｘ線分析装置、Ｘ線透過撮影装置、Ｘ線ＣＴ装置など)を積極的に利用し活用を図った。


修理前の鏡のX線写真

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	彫刻作品の修理中にＸ線透過撮影やＸ線ＣＴを実施し、適切な修理に役立てるとともに、修理の基礎資料とした。このほか29年度に引き続き京都大学と連携して樹種同定調査を行うなど、16回の調査を実施し、修理所との連携を進めている。今後も必要に応じ調査を実施することで、よりよい修理のためのデータ取得と活用を図る。

【中期計画記載事項】
修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	保存科学担当者と修理技術者が、修理前や修理中の文化財に対して繊維同定や樹種同定などの科学分析を行うことで、適切な修理のための基礎資料とするとともに、その成果をふまえ計画的な修理を実施した。Ｘ線ＣＴ装置を構造調査や修理に活用することにより、文化財の修理指針の検討に役立てた。

【書式Ａ】　施設名　九州国立博物館　処理番号　1133-2D

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 3)有形文化財の修理　3)-2科学的な技術を取り入れた修理

【年度計画】
（４館共通）
ア　紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
イ　修理前あるいは修理中に、蛍光Ｘ線分析、Ｘ線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
（九州国立博物館）
ア　修理作品の状態を、実態顕微鏡観察を基本としてＸ線スキャナ、Ｘ線透過撮影等の各種光学的調査も駆使して正確に判定し、修理指針の策定に資する。

担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長　木川りか

【実績・成果】
（４館共通）
ア　29 年度に引き続き、重要文化財「対馬宗家関係資料」（当館所蔵）等の紙本文化財の繊維同定を行い、文化財ごとに適切な補修紙を作成した。
イ
・「花鳥図巻」（当館所蔵）の過去の修理に用いられた接着剤について、実体顕微鏡観察および赤外分光分析を行い、酢酸ビニール系の接着剤が使用されていることを明らかにし、修理手法の検討に役立てた。
・31 年度に修理予定の「霰真形釜」（当館所蔵）等について、Ｘ線ＣＴスキャナにより、損傷状態の調査を行った。
（九州国立博物館）
ア　国宝「婚礼調度類〈徳川光友夫人千代姫所用〉のうち書棚」（徳川美術館所蔵）のＸ線ＣＴスキャン及びＸ線透過撮影、及び重要文化財「木造東陵永璵禅師倚像」（熊本・雲巌禅寺所蔵）、黒漆山水楼閣葡萄沈金中央卓（浦添市美術館所蔵）などのＸ線ＣＴスキャンを実施し、修理に必要な構造調査を行った。

【補足事項】
・修復施設1・2・3では、修理工房宰匠が館費修理品8件のほか、国宝「琉球国王尚家関係資料」文書記録類（那覇市所蔵）など、合計37件の修理を実施した。
・修復施設4(～9月)では、国宝修理装潢師連盟が重要文化財「細川家舟屋形天井画」（永青文庫所蔵）１件の修理を実施した。
・修復施設4(10月～)では、美術院が重要文化財「木造十一面観音立像」（福岡・普門院所蔵）など、合計3件の修理を実施した。
・修復施設5では、芸匠が館費修理品3件のほか、重要文化財「広田遺跡出土品のうち貝製品」（鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵）など、合計4件の修理を実施した。
・修復施設6では、大西漆芸修復スタジオが国宝「婚礼調度類〈徳川光友夫人千代姫所用〉のうち書棚」（徳川美術館所蔵）など、合計4件の修理を実施した。
・当館所蔵品の館外修理は、岡墨光堂が重要美術品「星曼荼羅」など5件、小宮光敏が「脇差」１件、八木鋳金が重要美術品「梅竹の図真形釜」など24件、合計30件を実施した。

「梅竹の図真形釜」（当館所蔵）の修理協議の様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	当館修復施設を九州等所在文化財49件の修理に活用した。また、伝統的な紙や近時修理の接着剤の材質分析等を行い、修理方針を検討することができた。伝統的な修理に科学調査の結果を取り入れ、適切な修理を実施することができた。

【中期計画記載事項】
修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	当館所蔵品については、修復施設使用者と連携しながら作品の状態調査を行い、当館以外の九州所在文化財については、修復施設使用者、所蔵者、管内教育委員会等と連携し、適切な修理計画を策定することができた。修理着手前には、Ｘ線ＣＴによる構造調査、修理中には紙繊維の同定、接着剤の分析等の科学調査を行い、伝統技術に科学技術を取り入れた修理を計画的に実施できた。 新しい科学技術を取り入れる等により、31年度以降も文化財の状態調査を行い修理指針の策定に役立てるだけでなく、文化財の材料・技術の解明に資したい。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1134B

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 4)文化財修理施設等の運営

【年度計画】
（京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館）
ア　文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行う。
（京都国立博物館）
ア　文化財保存修理所の設備等の改修について引き続き国と協力して検討を行う。
イ　文化財保存修理所及び仮工房等の施設を計画的に運用し、文化財の積極的な保存修理を図る。

担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長　數馬厚人 保存修理指導室長　大原嘉豊

【実績・成果】
（京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館）
ア　文化財保存修理所の整備・充実のため、定期的に工房との修理者協議会を開催した。
（京都国立博物館）
ア　文化財保存修理所運営委員会を開催し、文化財保存修理所の運用について審議した。
イ
・経年により老朽化した雨水配管について、内部にライニング加工を施し、配管を強化するとともに耐久年数を向上させた。
・経年により老朽化した天井クレーンについて、更新を行うべく仕様を決定し発注を行った。
・雨水排水管等の老朽諸設備の改善を行った。
・既存消防設備に加え、各工房に二酸化炭素消火器を任意設置した。
・防災体制の充実をはかるため、文化財保存修理所での防災訓練を実施した。

【補足事項】
・30年度夏季は関西地区に風水害が連続したことにより、設備の老朽化による不具合が顕在化し、その対策に追われた。

文化財保存修理所運営委員会

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
文化財保存修理所運営委員会及び修理者協議会を予定通り開催した。
老朽設備の改善を適時適切に行った。文化財保存修理所において、文化財の適切な保存修理環境を維持するため、雨水排水管の再生工事を完了し、また修理の際使用する天井クレーンについて更新を行うべく仕様の決定及び発注を行う等、設備等の改修を実施できた。

【中期計画記載事項】
文化財保存修理所等については、文化財防災も視野に入れながら、国と協力して整備充実を図る。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
国や工房と協力しながら文化財保存修理所の整備を進めており、雨水排水管再生工事や天井クレーン更新等設備の整備充実を実施できた。
設備面での老朽化は目立つものの、足りない部分を防災訓練や新たに二酸化炭素消火器を設置など、色々な方法で補うように努力を続けている。今後も中期計画の達成に向けて引き続き、整備・充実を進めていく。

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1134C

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 4)文化財修理施設等の運営

【年度計画】
（京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館）
ア　文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行う。
（奈良国立博物館）
ア　文化財保存修理所を円滑に運用して、文化財の積極的な保存修理を図る。

担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長　鳥越俊行

【実績・成果】
（京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館）
ア　文化財保存修理所のブラインドが故障したため、部品交換を実施した。また、空調機が劣化してきたため、予防保全の観点から部品を交換した。
（奈良国立博物館）
ア　文化財保存修理所運営委員会を6月4日に開催し、修理所の円滑な運用に努めた。修理に従事する公益財団法人美術院、株式会社文化財保存、北村工房の3工房代表者と当館学芸部で文化財保存修理所協議会を開催（1回目は9月10日に開催、2回目は31年2月28日に開催）。各工房における修理事業の実施状況、修理所施設の維持・管理、工房内の温湿度をはじめとする保存環境の改善に関する課題などを討議した。
・館長以下博物館職員が定期的に文化財保存修理所各工房の修理実施状況を視察する修理所巡回を３回実施した。

【補足事項】
・12月26日から31年1月20日まで、当館西新館北第1室において特集陳列「新たに修理された文化財」を開催し、29年度に文化財保存修理所各工房などで修理が完了した当館収蔵品・寄託品を修理解説パネルとともに展示(9件)することで、文化財修理技術を広く一般に理解してもらう機会とした。
・文化財保存修理所の施設や事業の概要を紹介する案内パンフレットを、修理所公開や国内外の修理専門技術者による修理所視察などの機会に配布した。
・31年1月10日に文化財保存修理所一般公開を開催し、修理の取り組みや修理所各工房の活動を広く知ってもらう機会とした。

特集展示「新たに修理された文化財」の様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 運営委員会及び所内3工房代表者との協議会を開催し、修理の実施状況の確認及び保存環境の改善について協議するなど、情報の共有に努め、文化財保存修理所を円滑に運営することができた。

【中期計画記載事項】
文化財保存修理所等については、文化財防災も視野に入れながら、国と協力して整備充実を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 文化財保存修理所を円滑に運用するとともに、Ｘ線ＣＴによる修理への応用や文化財被災時に修理技術者と連携できるように意見交換を行った。その成果を踏まえた文化財に対する積極的な保存修理を実施することができ、中期計画は順調に進んでいる。

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1134D

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承　③有形文化財の管理・保存・修理等 4)文化財修理施設等の運営

【年度計画】
（京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館）
ア　文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行う。
（九州国立博物館）
ア　文化財保存修復施設及び調査分析室を運営し、文化財の保存修理に積極的に活用する。

担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長　木川りか

【実績・成果】
（京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館）
ア
・文化財保存修復施設1の書跡や歴史資料の修理に使用する補修紙や吸水紙を乾燥するための紙干棚について、修復技術者の使いやすさや、バックヤードツアー見学者の視界を妨げることがないよう、天井を利用した可動式の棚を設計し、設置した。
（九州国立博物館）
ア
・当館文化財保存修復施設にて当館経費による修理11件及び所有者負担による修理38件、合計49件の修理事業を実施した。その他、館外で当館経費による30件の修理事業を実施した。
・保存修復諸室を活用し、当館所蔵品及び寄託・借用品等12件の構造調査等を行い、その結果を保存管理に役立てた。

【補足事項】
　文化財保存修復施設1の紙干棚については、書跡や歴史資料の修理案件が増加しており、修理に使用する補修紙や吸取紙の乾燥場所の確保が課題となっていた。29年度は、天井に吊り下げて昇降できる可動式の棚を設計し、30年度に施工した。作業時は人の手の届くところまで下ろし、乾燥中は天井近くまで上げることにより、修復技術者と修復施設見学者双方の利便性を確保できた。

文化財保存修復施設１に新設した紙干棚

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 　文化財保存修復施設内に昇降可動式紙干棚を新設したことで、修復技術者と見学者の利便性を両立できた。 　修理事業や分析調査事業については、当館所蔵品だけでなく、九州所在の教育委員会・社寺等所蔵品に対しても実施しており、九州の文化財修理・調査の拠点として活動できた。

【中期計画記載事項】
　文化財保存修理所等については、文化財防災も視野に入れながら、 国と協力して整備充実を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 　中期計画に対し順調に成果をあげることができた。特に限られたスペースを有効に活用できる設備を導入することで、バックヤードツアー見学者の視界を妨げることなく、より多くの作品を効率的に修理することが可能となった。開館より10年以上がたち、経年劣化や修理件数の増加により、修理やメンテナンスが必要な設備が増えてきている。当該設備のメンテナンスを継続的に行い、文化財を適切に修理・分析できる設備を整備していきたい。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1211A

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（2）展覧事業　①平常展

【年度計画】
①平常展
（4館共通）
1)平常展来館者数・展示替件数について、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績の年度平均以上を目指す。
（東京国立博物館）
1)「日本美術の流れ」を中心とする本館の日本美術、平成館の日本考古、東洋館の東洋美術、黒田記念館の近代洋画など、各種展示の更なる充実を図る。
2)特集
テーマ性を持った展示を各種実施し、調査研究成果を公開するとともに、平常展の更なる充実を図る。
・上野動物園・国立科学博物館との連携企画「親と子のギャラリー サルのひろば」（4月17日～5月20日）
・「平成29年度新収品展」（6月19日～7月29日）
・「親と子のギャラリー　なりきり日本美術館(仮)」（7月24日～9月9日）
・「江戸の仏像から明治の彫刻」（7月10日～9月30日）
・「岡田繁蔵旧蔵　陶磁コレクション」（9月4日～12月25日）
・正月恒例の「博物館に初もうで」（31年1月2日～1月27日）
・「ラファエル・コランと黒田清輝」（31年1月22日～4月14日）
・「東京国立博物館コレクションの保存と修理」（31年3月12日～4月7日）等
3)文化庁関係企画
「平成30年　新指定　国宝・重要文化財」（4月17日～5月6日）にて、30年新たに国宝・重要文化財に指定される文化財を展示する。

担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長　救仁郷秀明

【実績・成果】
（4館共通）
1)平常展来館者数は989,503人と目標値を上回り、展示替件数は5,981件と目標値をわずかに下回った。
（東京国立博物館）
1)定期的な展示替を実施し、5,981件の展示替を行った。展示総件数は9,139件である。
2)24件の特集を実施した。
3)「平成30年　新指定　国宝・重要文化財」を実施し、また、新指定の重要文化財となった彫刻の一部を、本館11室においても展示した。

【補足事項】
本館の展示室に、展示の趣旨や文化的背景を補足説明するコーナー解説を約60箇所増設した。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
平常展の来館者数	989,508人	512,186人	A		587,528	747,944	761,709	1,030,180
平常展の展示替件数	5,981件	6,009件	C		5,506	6,930	8,538	6,616
平常展の展示総件数	9,253件	－	－		8,161	8,911	10,918	10,223

【年度計画に対する総合評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
特別展に関わる展示や、明治150年記念の特集、世界文化遺産登録記念の特集など時宜を得た特集、新規寄託を契機とする特集、また毎年恒例の「博物館でアジアの旅」や「博物館に初もうで」など、充実した展覧事業を行った。その結果、リピーターや新規来館者の獲得につながり、目標値を上回る来館者があった。

【中期計画記載事項】
平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域等の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を行い、展示に関する説明の充実、多言語化に取り組み、国内外からの来館者の増加を図る。
なお、平常展の来館者数、展示替件数及び来館者アンケートの満足度については、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績以上を目指す。

【中期計画に対する評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
最新の研究成果に基づいた展示を行い、また本館の展示解説については、展示趣旨や文化的・歴史的背景に関わる説明を展示室に新たに60箇所追加するなど、来館者の増加に向けて努力している。今後は本館以外の展示室についても見直しを行い、展示解説の充実を図っていきたい。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1211B

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　①平常展

【年度計画】
（４館共通）
1)平常展来館者数・展示替件数について、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績の年度平均以上を目指す。
（京都国立博物館）
1)明治古都館改修に伴い、平常展示館として計画された平成知新館において特別展も開催するための平常展展示計画を策定し、平常展を行う。
2)平成知新館において、部門を超えた特別企画、特集展示を行う。
特別企画
・日中平和友好条約締結 40 周年記念「中国近代絵画の巨匠　斉白石」(31 年 1 月 30 日～3 月 17 日)(予定)
特集展示
・「新収品展」(6 月 12 日～7 月 16 日)
・「謎解き美術！最初の一歩」(7 月 21 日～9 月 2 日)
・「百萬遍知恩寺の名宝」(8 月 7 日～9 月 9 日)
・「亥づくし―干支を愛でる―」(12 月 18 日～31 年 1 月 27 日)
・「京の冬景色」(12 月 18 日～31 年 1 月 27 日)
・「美麗を極める中国陶磁」(12 月 18 日～31 年 2 月 3 日)
・「初公開！天皇の即位図」(31 年 1 月 30 日～3 月 10 日)
・「雛まつりと人形」(31年2月13日～3月17日)

担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長　山川曉

【実績・成果】
（４館共通）
1)平常展来館者数については146,314人と目標値を上回った。展示替件数は1,021件であり目標値を上回った。
（京都国立博物館）
1)特別展覧会前後の準備・撤収のため、名品ギャラリー閉室期間を設けるための展示計画を策定した。
2)年度計画に基づき、1件の特別企画、8件の特集展示を実施した。

【補足事項】
（京都国立博物館）
・旧平常展示館建替等の理由で22年以降途絶えていた「新収品展」を再開した。7年に渡り収集した多くの文化財が展示室6室分を埋め尽くした。
・「百萬遍知恩寺の名宝」は、当館が行った悉皆調査の成果を基にしたもので、分野を超えた構成で同寺が所蔵する文化財を紹介した。
・「美麗を極める中国陶磁」では、個人蒐集家から24年に寄贈を受けた中国陶磁や青銅器などの優品計74件を展示した。
・「中国近代絵画の巨匠　斉白石」においては、日中平和友好条約の締結から40周年を記念して中国・北京画院が所蔵する斉白石の名品を展示するとともに、隣接する展示室で当館が収蔵する関連作品を展示し、理解を深める工夫をした。
・名品ギャラリーにおいても「夏のきもの 単衣と帷子」（7月19日～9月2日）や「神々の伝説－北野・厳島－」（12月18日～31年1月27日）など、季節を意識した展示を実施した。

「新収品展」展示風景

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
平常展の来館者数	146,314人	141,041人	B		265,719	205,526	186,162	136,862
平常展の展示替件数	1,021件	919件	B		693	1,145	943	973
平常展の展示総件数	1,038件	－	－		980	1,438	1,068	978

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
29年度の来館者水準を維持し、目標値を上回った。来館者が減少しがちな冬期の特集展示に工夫を凝らすとともに、無料開館日を設けて来館者から好評を得たことが大きい。
展示替件数の目標達成に寄与した「新収品展」や「美麗を極める中国陶磁」では、複数年にわたって蓄積した調査研究の結果を一挙に発表する絶好の機会となった。

【中期計画記載事項】
平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域等の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を行い、展示に関する説明の充実、多言語化に取り組み、国内外からの来館者の増加を図る。
なお、平常展の来館者数、展示替件数及び来館者アンケートの満足度については、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績以上を目指す。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
中期計画に則り、30年度は「美麗を極める中国陶磁」、「中国近代絵画の巨匠　斉白石」の特別企画等と「中国の仏像」、「中国と日本の銅鏡」のテーマを設けた平常展を同時開催した。とりわけ中国の伝統文化の理解促進に大きく貢献した。
また、多言語解説を付した「初公開！天皇の即位図」、「雛まつりと人形」は、日本の文化を分かりやすく諸外国からの来館者に伝えることに繋がった。
中期計画4年目も引続き平常展来館者数を達成することや、平常展の活性化に取り組んでいきたい。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1211C

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　①平常展

【年度計画】
（４館共通）
1)平常展来館者数・展示替件数について、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績の年度平均以上を目指す。
（奈良国立博物館）
1)下記のとおり各展示施設において、最新の研究成果を取り入れた名品展（平常展）を実施する。また、収蔵品の中からテーマを選んで特集展示を適宜実施する。
・西新館　絵画、書跡、工芸、考古　　・なら仏像館　彫刻　　・青銅器館　中国古代青銅器
2)分野の枠を超えた特別陳列を実施する。
　独創的な研究テーマ及び地域に密着した研究テーマによる特別陳列の充実
・「お水取り」（31年2月8日～3月14日）等

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　内藤栄

【実績・成果】
（４館共通）
1)
・来館者数は、目標値を達成した。
・展示替件数は、目標値（前中期計画期間の平均値）の 73.9%であった。
（奈良国立博物館）
1)下記のとおり名品展を実施し、また特集展示を１件開催した。
・名 品 展「珠玉の仏教美術」　会場：西新館　開催期間：12月11日（火）～31年3月14日（木）
・名 品 展「珠玉の仏たち」　会場：なら仏像館 開催期間：4月1日（日）～31年3月31日（日）
・名 品 展「中国古代青銅器」　会場：青銅器館　開催期間：4月1日（日）～31年3月31日（日）
・特集展示「新たに修理された文化財」 会場：西新館　開催期間：12月26日（水）～31年1月20日（日）
2)下記の通り特別陳列を開催した。
・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術 ―特集 大宿所―」
　会場：東新館　開催期間：12月11日（火）～31年1月20日（日）
・特別陳列「お水取り」　会場：東新館　開催期間：31 年 2 月 8 日（木）～3 月 14 日（木）
・特別陳列「覚盛上人 770 年御忌　鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興」　会場：西新館　開催期間：同上

【補足事項】
・名品展の展示替件数は、前中期計画期間の平均値には達していないが、特別展の会期が全般的に長くなり、名品展「珠玉の仏教美術」の開催日数が限られている現状に鑑みれば、妥当な件数である。

名品展「珠玉の仏教美術」（西新館）
会場風景

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
平常展の来館者数	140,829人	118,173人	B		92,147	95,208	145,676	135,776
平常展の展示替件数	232件	314件	D		208	286	427	210
平常展の展示総件数	462件	－	－		675	620	664	548

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
来館者数は前中期計画期間の平均値を上回り（119%）、目標を達成した。展示替件数は前中期計画期間の平均値に達してしないが、上記のとおり名品展の開催期間・面積が限られる傾向にあるなか、29年度よりも件数自体は増えている。各展示館での名品展は計画どおりに実施できており、今後も引き続き、展示内容を充実させ、来館者の満足度向上に努める。

【中期計画記載事項】
平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域等の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を行い、展示に関する説明の充実、多言語化に取り組み、国内外からの来館者の増加を図る。
なお、平常展の来館者数、展示替件数及び来館者アンケートの満足度については、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績以上を目指す。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
30年度も、特別展や特別陳列との展示会場の棲み分けをしながら、着実に名品展を開催することができた。さらに、展示解説を充実させる一環として、西新館での名品展「珠玉の仏教美術」におけるコーナー解説パネルに、中国語（簡体）と韓国語を追加し、4言語表記とした。今後も利用者の意見を収集しつつ、名品展会場における解説文の充実と多言語化に努める。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1211D

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　①平常展

【年度計画】
（４館共通）
1)平常展来館者数・展示替件数について、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績の年度平均以上を目指す。
（九州国立博物館）
1)特別展示によって、独創的なテーマ及び地域に密着したテーマで研究成果を公開する。
・「災害に学ぶ・備える～熊本地震と文化財レスキュー～」（3 月 13 日～5 月 6 日）
・「茶の湯を楽しむⅧ　博多文琳と黒田家の茶道具」（4 月 10 日～6 月 3 日）
・「京都・仁和寺観音堂の千手観音像とその仲間たち」（開催日未定）
・「国宝　銅鐸絵画」（7 月 10 日～9 月 2 日）
・「全国高等学校考古名品展 2018」（7 月 21 日～9 月 9 日）
・「大宰府研究調査50周年記念　大宰府研究の歩み」（9月12日～12月23日）
・「坂本五郎コレクション受贈記念　北斎と鍋島、そして(仮)」（9月12日～10月21日）
・「平戸松浦家伝来の伊能図」（10月30日～12月23日）
・「徳川美術館所蔵　国宝　初音の調度」（31年1月1日～1月27日）
・「玉 - 古代を彩る至宝 - (仮)」（31年1月1日～2月24日）

担当部課	学芸部企画課	事業責任者	課長　白井克也

【実績・成果】
（４館共通）
1)前中期目標期間の実績の年度平均以上を目指して、平常展は展示替えを1,779件行い、来館者数は349,114人であった。
（九州国立博物館）
　計画に従って特集展示・特別公開を実施し、研究成果を公開するとともに、図録の刊行、シンポジウムの実施等により、成果の普及を図った。

【補足事項】
・「京都・仁和寺観音堂の千手観音像とその仲間たち」では、観音像等の配置だけでなく須弥壇正面壁画を撮影したパネルを設置するなど、仁和寺の観音堂を再現した展示を行った。また、撮影可能としたことも含め、観覧者アンケートで大変好評であった。
・「平戸松浦家伝来の伊能図」では、九州を描いた「伊能図」を展示し、松浦家に伊能図が伝来した背景について、また、平戸藩主と忠敬との交流の様相についての研究成果を公開した。
・実施を予定していた「徳川美術館所蔵　国宝　初音の調度」は、所蔵者からの作品借用の条件となっていたＣＴ調査が、機器の更新のために実施できなかったため、借用と特集展示を取りやめた。

坂本五郎コレクションの図録表紙

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
平常展の来館者数	349,114人	387,744人	C		357,362	412,621	393,590	350,848
平常展の展示替件数	1,779件	1,253件	A		1,027	1,513	1,654	1,594
平常展の展示総件数	1,995件	－	－		1,904	2,628	2,208	1,894

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	多彩な特集展示と定期的な展示替えを、ほぼ目標どおり実施できた。ただし、平常展の来館者数については、30年度の特別展開催日数が少なかったこともあり、目標には達しなかった。

【中期計画記載事項】
　平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域等の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を行い、展示に関する説明の充実、多言語化に取り組み、国内外からの来館者の増加を図る。
　なお、平常展の来館者数、展示替件数及び来館者アンケートの満足度については、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績以上を目指す。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	中期計画の通り、最新の研究成果を基に、特集展示等を実施した。アジア的な視点から日本文化の形成を捉えるというコンセプトから、基本展示の充実と多彩な特集展示の実施に努めている。31年度以降もこれらの努力を継続するとともに、より読みやすく、わかりやすい多言語解説などにも取り組んでいきたい。

【博物館】　施設名 ４館　処理番号 1212ABCD

中項目	１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　①平常展

【年度計画】
（４館共通）2)満足度調査等を実施し、その結果を展示内容等の改善に活かす。

担当部課	東京国立博物館学芸研究部列品管理課 京都国立博物館学芸部 奈良国立博物館総務課 九州国立博物館学芸部企画課	事業責任者	課長　救仁郷秀明 企画室長　山川曉 課長　臣守常勝 課長　白井克也

【実績・成果】
（東京国立博物館）
・総合文化展のアンケートを実施し、集計結果を基に観覧環境改善に努めた。また、記述式要望書やウェブサイトの意見欄によって、当館への質問や意見を収集し、外部委託業者を含めて館内全体で共有、改善に努めるとともに、回答が必要なものについては担当部署に確認し、回答を行った。
（京都国立博物館）
・日本語・英語に加えて、29年度に導入した中国語・韓国語のアンケート内容を適切に把握する体制を構築した。
・多言語にてホームページで発信する内容を充実させた。
（奈良国立博物館）
・館内に常設のアンケート記入場所を設け、記述式アンケートを通年で実施した。アンケートの結果は集約のうえ、関係部署で共有し、改善に努めた。また、ウェブサイトを通じた当館への意見等も同じく改善に向けて共有した。
（九州国立博物館）
・研究成果に基づく特集展示や、様々な広報･教育普及の取り組みにより、平常展（文化交流展）に目標値を超える高い満足度を得た。

【補足事項】
（東京国立博物館）
・アンケート回収率向上のため、定期的にお客様へアンケートご協力のお声がけ、アンケート設置場所を工夫するなどし、結果29年度以上の回収率、回数数を達成することができた。
（京都国立博物館）
・複数の展示室を用いて実施する特集展示では、展示室パネルへのフロアマップを併記し、わかりやすい導線とした。
（奈良国立博物館）
・中国人来館者からの要望に応え、新たな電子マネー（Alipay、WeChatPay）の利用を可能とした。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
平常展の来館者アンケート満足度				経				
東京国立博物館	89.2%	74%	A	年	77	82	71.0	87.3
京都国立博物館	89.7%	79%	B	変	74	83	75.0	84.4
奈良国立博物館	92.5%	79%	B	化	81	78	88.9	90.1
九州国立博物館	73.6%	67%	B		62	72	73.8	77.8

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 総合文化展のアンケートについては目標を上回る満足度を達成することができた。また、指摘事項や回答内容をもとに展示内容や解説の改善を行うことでアンケートの結果を活用することができた。引き続き、アンケートやウェブサイトを通じて寄せられる来館者の意見を参考にしつつ満足度の向上を目指す。また、今後はさらに回収率を上げるための方策も引き続き検討していきたい。

【中期計画記載事項】
平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域等の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を行い、展示に関する説明の充実、多言語化に取り組み、国内外からの来館者の増加を図る。
なお、平常展の来館者数、展示替件数及び来館者アンケートの満足度については、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績以上を目指す。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 29年度に引き続き、来館者アンケート満足度は前中期目標の期間の実績以上を達成することができた。31年度以降も来館者から寄せられる意見等を通じて、引き続き満足度の向上に向けて取り組んでいく。併せて、各館共通のアンケート項目に対する回答を参考に、展示内容等の改善について4博物館が活用できるよう努めていく。

【書式Ａ】　施設名 ４館　処理番号 1220アABCD

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（４館共通）
ア　中期計画で定めた開催回数の達成を目指す。

担当部課	東京国立博物館学芸企画部 京都国立博物館学芸部 奈良国立博物館学芸部 九州国立博物館学芸部	事業責任者	部長　富田淳 企画室長　伊藤信二 部長　内藤栄 部長　小泉惠英

【実績・成果】
（東京国立博物館）特別展を9回開催した。内訳：当館開催7回、海外展2回
（京都国立博物館）特別展を2回実施した。
（奈良国立博物館）特別展を3回開催した。
（九州国立博物館）特別展を4回実施した。

【補足事項】
（東京国立博物館）
　開催した特別展は以下のとおり。
アラビアの道－サウジアラビア王国の至宝、創刊記念『國華』130周年・朝日新聞140周年　特別展「名作誕生―つながる日本美術」、特別展「縄文―1万年の美の鼓動」、特別展「京都 大報恩寺　快慶・定慶のみほとけ」、東京国立博物館・フィラデルフィア美術館交流企画　　特別展「マルセル・デュシャンと日本美術」、日中平和友好条約締結40周年記念特別企画「中国近代絵画の巨匠　斉白石」、特別展「顔真卿　王羲之を超えた名筆」、「江戸絵画名品展」（プーシキン美術館）、海外展　ジャポニスム2018「縄文―日本における美の誕生」（パリ日本文化会館）
（京都国立博物館）
　開催した特別展は以下のとおり。
　特別展「池大雅　天衣無縫の旅の画家」、特別展「京のかたな　匠のわざと雅のこころ」
　約2か月にわたり重要文化財である明治古都館を活用した特別展の関連展示を行った。
（奈良国立博物館）
　開催した特別展は以下のとおり。
創建1250年記念特別展「国宝 春日大社のすべて」、修理完成記念特別展「糸のみほとけ―国宝 綴織當麻曼荼羅と繡仏―」、「第70回 正倉院展」
（九州国立博物館）
　開催した特別展は以下のとおり。
特別展「王羲之と日本の書」、特別展「至上の印象派展　ビュールレ・コレクション」、明治150年記念　特別展「オークラコレクション」、特別展「京都・醍醐寺－真言密教の宇宙－」

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
特別展の開催回数（海外展含む）								
東京国立博物館	9回	年3～4回	A		8	6	13	7
京都国立博物館	2回	年1～2回	B		3	2	3	2
奈良国立博物館	3回	年2～3回	B		3	3	4	3
九州国立博物館	4回	年2～3回	A		5	5	4	5

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	4館とも目標値を上回る回数の特別展を実施した。また、時期に適った企画や地域文化に深く関わる展示内容を展開する等、質的にも我が国の中核拠点にふさわしい事業を展開することができた。併せて、ロシアおよびフランスで海外展を開催することで、日本美術を広く国外へ紹介することができた。

【中期計画記載事項】
　特別展等については、積年の研究成果を活かしつつ、国民の関心の高い時宜に適った企画を立案し、国内外の博物館と連携しながら我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。
　特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を年度計画において設定する。また、特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとし、各施設の工事等による影響を勘案しつつ、その達成に努める。
（東京国立博物館）年 3～4 回程度（京都国立博物館）年 1～2 回程度
（奈良国立博物館）年 2～3 回程度（九州国立博物館）年 2～3 回程度

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	国内外の博物館と連携した質の高い特別展を開催し、順調に中期計画を進めることができた。31年度以降も、国民に話題を提供する契機となる企画を行い、展覧会の質の高さを保ちながら目標を上回る特別展を開催する。

※東京国立博物館で開催の「アラビアの道－サウジアラビア王国の至宝」は、会期が 1 月 23 日～5 月 13 日のため 30 年度の実績とする。
※九州国立博物館で開催の特別展「王羲之と日本の書」は、会期が 2 月 10 日～4 月 8 日のため 30 年度の実績とする。
※東京国立博物館で開催の特別展「国宝 東寺―空海と仏像曼荼羅」は、会期が 31 年 3 月 26 日～6 月 2 日のため 31 年度の実績とする。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1220イA

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（2）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（4館共通）
イ　満足度調査等を実施する等広く意見を求め、満足度の高い特別展となるよう努める。

担当部課	総務部総務課 学芸企画部企画課	事業責任者	課長　竹之内勝典 課長　浅見龍介

【実績・成果】
（4館共通）
イ
　各特別展において、タッチパネルアンケートまたは記述式アンケートを実施し、来館者のご意見を把握し、共催者や外部委託業者を含めて、関係者全体で共有するなど、来館者のご意見・ご要望を次回の特別展に反映する取り組みを行っている。アンケート調査の結果は、当館のホームページにおいて公開すると共に、質問等を提出された来館者には可能な限り速やかに回答を行っている。

【補足事項】
　外国人来館者に対する解説を充実するため、外国語の音声ガイド（英語・中国語・韓国語）を29年度に引き続き作成し、特別展の満足度向上を図った。また、未就学児の来館が増えた特別展では、保護者向け、子供向けの注意事項を記載した用紙を配布し、混雑する特別展では、屋外での待ち時間が長くならないよう、館内休憩スペースに待機列を作るなど、来館者に寄り添った対応に努めた。

博物館からのお願い
保護者の方へ

子供向けの注意事項

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
特別展の来館者アンケート満足度	84.2%	71%	B	経年変化	67	75	87.9	86.4
アラビアの道－サウジアラビア王国の至宝	91.4%	－	－		－	－	－	－
名作誕生－つながる日本美術	84.4%	－	－		－	－	－	－
縄文－1万年の美の鼓動	88.2%	－	－		－	－	－	－
マルセル・デュシャンと日本美術	74.0%	－	－		－	－	－	－
京都 大報恩寺	86.3%	－	－		－	－	－	－
中国近代絵画の巨匠 斉白石	－	－	－		－	－	－	－
顔真卿	81.1%	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	年間を通じて高い満足度を達成することができた。特に猛暑にもかかわらず30万人以上の入館者数であった「縄文－1万年の美の鼓動」では、満足度も高いものとなった。9年ぶりの自主展となった「マルセル・デュシャンと日本美術」については「デュシャンと日本美術の共通項があるという視点が斬新で新たな発見となった」など、展示に対する好意的な意見が多く見受けられた。今後も来館者により分かりやすい展示構成となるよう努める。

【中期計画記載事項】
　特別展来館者アンケートを実施し、その満足度については前中期目標の期間の実績以上を目指し、常に展示内容等の改善を図る。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	30年度も目標値を超える満足度を得ることができた。引き続きアンケート結果を館内で共有し、観覧環境も含めより良い展覧会の実現に努める。

「中国近代絵画の巨匠 斉白石」は特別企画としたため、来館者アンケート満足度は総合文化展の満足度に含める。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1220イB

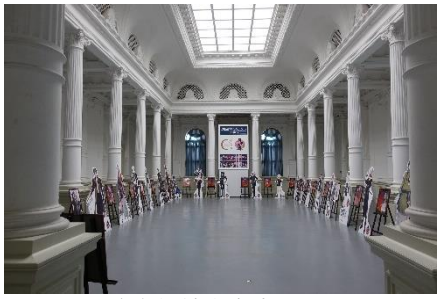
中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（2）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（4館共通）
イ　満足度調査を実施するなど広く意見を求め、満足度の高い特別展となるよう努める。

担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長　數馬厚人 企画室長　山川曉

【実績・成果】
（4館共通）
イ
・特別展毎に、監視スタッフ向けに留意事項、接遇の基本、業務内容等に関する説明会を行った。
・展示会場での滞留が予想された京のかたな展においては、展示構成、展示室レイアウト、音声ガイド作品などについて関係者にて十分に協議し、クレームを最小限に抑えながら、満足度を向上するよう努めた。
・特別展の公式ツイッターを設け、展覧会情報の拡散と生の声の即時収集を行った。
・池大雅展は、当館として初めて全ての作品に英語・中国語・韓国語で作品名等の表示を付した特別展となった。

【補足事項】
イ　京のかたな展で行った対策について
・絵巻等を最初の展示室に集約することで、導入部をわかりやすくするとともに、次の展示室から延びる観覧のための待ち列を吸収する空間を設けた。
・主要な刀剣においては、最前列で作品を鑑賞するための動線と行列に並ばずに後方から眺める動線を設け、満足度の向上に貢献した。
・環境保全上の理由によりウォータークーラー付近に限られていた水分摂取可能区域を、運用を工夫することで大幅に拡大し、ロビー等の休憩スペースでの摂取を可能とした。
・刀剣をモチーフにしたゲームキャラクターの等身大パネルの設置、関連グッズの販売及び復元模造刀剣の展示を明治古都館内で行った。文化財とその派生品を分けて展示することにより、不用意な干渉や混雑を回避し、双方の観覧環境を適切に維持した。


明治古都館中央室活用状況

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
特別展の来館者アンケート満足度	94.6%	89%	B		88	87	78.1	81.9
池大雅	90.2%	－	－		－	－	－	91.3
京のかたな	97.7%	－	－		－	－	－	78.3

【年度計画に対する総合評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
29年度に顕在化した課題を検証し、展示及び会場構成に反映させることで満足度の向上に結び付けることができた。
特に京のかたな展は通常の展覧会と客層が異なったことから、常にアンケート結果に目を通し、来館者の目線に立った微調整を行うことで、混雑したにも関わらず高い満足度を達成することができた。また、客層を考慮して明治古都館で行ったパネル展示や関連グッズ販売も好評を博し、満足度を押し上げた。
これまでの経験を活かし、新たな取組も問題なく対応できたことは高い成果を上げたと言える。

【中期計画記載事項】
特別展来館者アンケートを実施し、その満足度については前中期目標の期間の実績以上を目指し、常に展示内容等の改善を図る。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
29年度に引続き、会場内の混雑緩和や水分摂取可能区域の拡大など、よりよい観覧環境を実現すべく常に改善を図り、様々な工夫を行った。中期計画3年目として、31年度以降の特別展運営等に資する取り組みを充分に行うことができた。引続きアンケート結果の速やかな回覧等にて、満足度を向上させるための取組を行っていきたい。

【書式A】　施設名　奈良国立博物館　処理番号　1220イC

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（４館共通）
イ　満足度調査を実施する等広く意見を求め、満足度の高い特別展となるよう努める。

担当部課	総務課	事業責任者	課長　臣守常勝

【実績・成果】
（４館共通）
イ
・館内で実施する記述式アンケートや対面アンケートの集計結果、またウェブサイトを通じた当館へのご意見等を関係部署で共有し改善に努めた。
・特別展「糸のみほとけ」、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」及び「お水取り」「覚盛上人770年御忌　鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興」では、ボランティアによる対面アンケートを行い、回収率を上げて幅広く意見を聞くことができた。
・展覧会毎に監視要員に対して、接遇の基本、業務内容、要員配置、留意事項、期間中のイベント、販売券種及び割引対象等について説明会を行い、適切な来館者応対が可能となるように努めた。

【補足事項】
・来館者対応業務を委託する外部業者と常に情報共有や意見交換を図りながら、来館者対応の改善に努めた。
・正倉院展において従前よりトイレの不足が課題となっているため、館外に女性用の仮設トイレを設置した。

特別展「糸のみほとけ」
対面アンケートの様子

「第 70 回正倉院展」
女性用仮設トイレ

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
特別展の来館者アンケート満足度	89.8%	80%	B	経年変化	79	79	86.4	88.1
国宝　春日大社のすべて	87.7%	－	－		－	－	－	94.4
糸のみほとけ　−国宝　綴織當麻曼荼羅と繍仏−	95.9%	－	－		－	－	－	92.0
第70回正倉院展	85.9%	－	－		－	－	－	78.0

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	ボランティアによる対面アンケートを複数回行い、来場者の声を直接聞くとともに回収率の増加に努めた。寄せられた意見については、内容を検討のうえ順次改善を図った。

【中期計画記載事項】
特別展来館者アンケートを実施し、その満足度については前中期目標の期間の実績以上を目指し、常に展示内容等の改善を図る。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	30年度に開催した特別展における満足度は、29年度に引き続き前中期目標の期間の実績以上の数字となった。31年度以降も引き続きアンケートを実施し、来館者の意見を参考にしながら改善を図って満足度の向上に努める。

【書式Ａ】　施設名　九州国立博物館　処理番号　1220ｲD

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（４館共通）
イ　満足度調査を実施する等広く意見を求め、満足度の高い特別展となるよう努める。

担当部課	学芸部企画課	事業責任者	課長　白井克也

【実績・成果】
（４館共通）
イ
30年度実施した特別展「王羲之と日本の書」、「至上の印象派展　ビュールレ・コレクション」、「明治150年記念　オークラコレクション」、「京都・醍醐寺　真言密教の宇宙」について、来場者を対象に満足度調査を実施した。各特別展において、目標値に近い満足度を得ることができた。

・特別展「王羲之と日本の書」では、菅原道真と王羲之をキャラクター化し、「楽しみま書」と題した解説パネルを設置するなど、教育普及の要素を取り入れた展示が人気を博した。
・特別展「至上の印象派展　ビュールレ・コレクション」では、目玉展示の一つであるルノワールの≪イレーヌ・カーン・ダンヴェール嬢（可愛いイレーヌ）≫や、モネの≪睡蓮の池、緑の反映≫を撮影可としたところ、大変好評であった。撮影された写真を掲載したSNSでの拡散により、来館者増にもつながった。
・特別展「明治150年記念　オークラコレクション」では、大倉集古館の幅広い主要作品を展示したこと、私財を投じて文化財を保護し、海外へ発信した大倉親子の業績について紹介したことが高い満足度につながった。
・特別展「京都・醍醐寺　真言密教の宇宙」では、国宝・薬師三尊像をかつての安置状況を再現した空間で展示したほか、彫刻や絵画など迫力の密教美術を数多く紹介したことが高い満足度となった。また、一般にはあまり馴染みのない「密教」について深く理解するための、イラストを中心とした分かりやすいパネルが好評を博した。

【補足事項】

特別展「京都・醍醐寺　真言密教の宇宙」
国宝・薬師三尊像の展示風景

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
特別展の来館者アンケート満足度	86.7%	86%	B	経	85	88	85.9	87.2
王羲之と日本の書	89.6%	－	－	年	－	－	－	－
ビュールレ・コレクション	84.8%	－	－	変	－	－	－	－
オークラコレクション	83.5%	－	－	化	－	－	－	－
京都・醍醐寺－真言密教の宇宙－	89.0%	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	各展覧会で目標値に近い満足度を得るとともに、「王羲之と日本の書」では目標を超えた90%近い満足度を達成した。

【中期計画記載事項】
特別展来館者アンケートを実施し、その満足度については前中期目標の期間の実績以上を目指し、常に展示内容等の改善を図る。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	特別展は高い満足度を維持している。今後も特別展来館者アンケートを継続実施して来館者の反応を把握するとともに、アンケート結果を分析して満足度の更なる向上に努めたい。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1221Aア

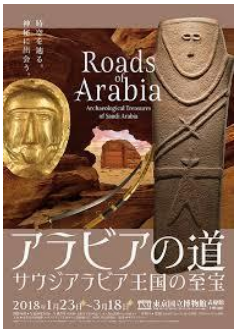
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
ア　特別展「アラビアの道－サウジアラビア王国の至宝」（30年1月22日～3月18日）
　サウジアラビアが所属する旧石器時代から近代までの考古遺物と美術作品を展示する。（目標来館者数10万人）

担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部調査研究課考古室長　白井克也

【実績】

展覧会名	アラビアの道－サウジアラビア王国の至宝
会　　期	30年1月23日（火）～5月13日（日）（99日間）
会　　場	表慶館
主　　催	東京国立博物館、サウジアラビア国家遺産観光庁、NHK、朝日新聞社
作品件数	424件
来館者数	250,100人(達成率250.1%)　※会期延長のためあくまで参考値
入場料金	無料
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度　91.4%



告知ポスター

【成果】

企画構成 展示作品	アラビア半島は、古代より交易路が張り巡らされ、人々と諸文明が行き交った。本展は、その躍動的な歴史と文化を示すサウジアラビア王国の至宝を日本で初めて公開する。100万年以上前にさかのぼるアジア最初の石器、5000年前に砂漠に立てられた人形石柱、ヘレニズム時代やローマ時代の出土品、イスラームの聖地メッカのカァバ神殿で17世紀に使われた扉、サウジアラビア初代国王の遺品（20世紀）など、アラビア半島の知られざる歴史を紹介した。
学術的意義	古代オリエント関連諸学の伝統において、アラビア半島の歴史と文化は、その重要性に見合うほどの注目を浴びてこなかったといえる。サウジアラビアの考古資料や伝来品を網羅的に紹介した本展覧会は、多くの研究者がアラビア半島の古代史に目を向ける契機となった。また、本展覧会のカタログでは、多くのデータ（年代、属性、サイズ、材質など）が更新され、厳密な色校正を経た写真が掲載されている。研究資料としての活用が期待される。
教育普及	表慶館前において、アラビア体験テントを設置した。テント内では、各実施日の先着1,000名に対してアラビックコーヒーとナツメヤシを無料配布し、参加者にアラビア遊牧民の伝統的生活を体験していただいた。
その他 (運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等)	報道内覧会：1月23日実施　92媒体、122人出席。ポスター、チラシ各種制作。駅大型ボード、東京メトロ電飾看板などを出稿。新聞：朝日新聞、雑誌：「Pen」1月号、「サライ」2月号　テレビ：ＮＨＫ「日曜美術館アートシーン」。インターネットメディア：インターネットミュージアム、東京アートビートなどで報道。
補　足	サウジアラビア政府の申し入れにより、3月18日までの会期を5月13日まで延長した。

会場風景１

会場風景２

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	250,100人	100,000人	A

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 本展は国際巡回であるが、直近に開催された中国国家博物館、韓国国立中央博物館の展示の調査を行ったため、理解しやすい作品解説の執筆や、安全で効率的な展示作業をすることができた。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1221Aイ

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（東京国立博物館）
イ　創刊記念『國華』130周年・朝日新聞140周年　特別展「名作誕生―つながる日本美術」（4月13日～5月27日）
日本美術の名作誕生のドラマを紹介する。（目標来館者数12万人）

担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部保存修復課保存修復室主任研究員　瀬谷愛

【実績】

展覧会名	創刊記念『國華』130周年・朝日新聞140周年　特別展「名作誕生―つながる日本美術」
会　　期	4月13日（金）～5月27日（日）　（40日間）
会　　場	平成館
主　　催	東京国立博物館、國華社、朝日新聞社、テレビ朝日、BS朝日
作品件数	130件
来館者数	173,995人（達成率：145.0%）
入場料金	一般1,600円、大学生1,200円、高校生900円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度　84.4%

告知ポスター

【成果】

企画構成展示作品	日本美術史上に輝く「名作」たちは、さまざまなドラマをもって生まれ、受け継がれ、次の名作の誕生へとつながった。本展では、作品同士の影響関係や共通する美意識に着目し、地域や時代を超えたさまざまな名作誕生のドラマを、国宝・重要文化財含む約130件を通してご紹介した。
学術的意義	一つの作品が成立する背景の追及や紹介は、美術史にとって重要な作業で、写真によって比較検討ができる書籍ではしばしば行われるが、実作品で、しかも多くの作品について行うことは困難である。本展覧会では、一つの名作の成立を関連する実作品を使って紹介する画期的な企画である。
教育普及	・記念講演会を2回開催した。第1回は4月14日の講演「日本美術鑑賞への誘い」を行い、参加者数344人であった。第2回は4月21日の講演「つながる雪舟 つながる若冲」を行い、参加者数363人であった。 ・小・中・高等学校の教員を対象とした研修会を開催し、展示内容の解説と見学を行い、参加者数140人であった。 ・ボランティアを対象とした解説会を開催し、参加者数67人であった。
その他（運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等）	報道内覧会：4月12日実施　158媒体、219人出席。ポスター、チラシ各種制作。JR駅大型ボード、京王線駅貼り、東京メトロ車内ステッカーなどを出稿。新聞：朝日新聞　文化面特集、雑誌：「一個人」4月号、「サライ」4月号　テレビ：BS朝日「壇蜜の日本美訪～つながる名作誕生のドラマ～」、NHK「日曜美術館」アートシーン、BS日テレ「ぶらぶら美術博物館」などを報道。またSNS広告を実施。
補　足	 会場風景１ 会場風景２

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	173,995人	120,000人	A

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 古代から近代にいたる日本美術の中から、一つの名作が生まれる背景にいろいろな切り口から迫ることができた。伊藤若冲や長谷川等伯といった近年人気の高い作家についても取り上げたことによって多くの入場者があった。また、図録は第60回全国カタログ展（日本印刷産業連合会）にて、実行委員会奨励賞を受賞した。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1221Aｳ

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（東京国立博物館）
ウ　特別展「縄文―1万年の美の鼓動」（7月3日～9月2日）
日本美術の源流ともいえる縄文時代の作品を紹介した。（目標来館者数10万人）

担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部調査研究課考古室長　品川欣也

【実績】

展覧会名	特別展「縄文―1万年の美の鼓動」
会　　期	7月3日（火）～9月2日（日）　（55日間）
会　　場	平成館
主　　催	東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション、朝日新聞社
作品件数	207件
来館者数	354,259人（達成率：354.2%）
入場料金	一般1,600円、大学生1,200円、高校生900円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度　88.2%

告知ポスター

【成果】

企画構成 展示作品	縄文時代の人びとが狩猟や漁撈、採集などの日々の暮らしのなかで工夫を重ねて作り出したさまざまな道具には、力強さと神秘的な魅力にあふれている。本展では「縄文の美」をテーマに、約1万年間続いた縄文時代の日本列島の各地で育まれた優品を一堂に集め、その形に込められた人びとの技や思いに迫った。 縄文時代の国宝6件すべてが出品されるのは本展が初めての機会。これに重要文化財63件を加えた総数207件を出品。
学術的意義	縄文時代の出土品を考古資料としてではなく、造形美に着目して再評価を促したことに学術な意義がある。縄文時代の日本列島に広がる造形美の多彩さと豊かさを展示して紹介し、約1万年の間に移り変わる造形美の変遷、同時代の欧州やアジア各地の造形美との比較を行うことで、縄文時代の造形美を相対的に評価し位置づけた。
教育普及	・記念講演会「縄文の美を楽しむ」を7月28日に行い、参加者数264人であった。 ・トークイベント「縄文・日本美術・岡本太郎」を7月22日に行い、参加者数347人であった。 ・小・中・高等学校の教員を対象とした研修会を開催し、展示内容の解説と見学に260人の参加があった。 ・ジュニアガイドを編集し、50,000部を刊行した。 ・ボランティアを対象とした解説会を実施し、96人の参加者があった。 ・平成30年度戦略的芸術文化創造推進事業「高校生ニッポン文化大使」へ協力した。
その他 （運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等）	報道内覧会：7月2日実施　176媒体、254人出席。ポスター、チラシ各種制作。JR駅大型ボード、京王線駅貼り、東急線ドア横ポスターなどを出稿。新聞：朝日新聞　文化面特集、雑誌：「芸術新潮」7月号、「和楽」8～9月号　テレビ：BS日テレ「ぶらぶら美術館・博物館」、NHK「日曜美術館」、NHK「歴史秘話ヒストリア」、NHK「びじゅチューン　夏休みスペシャル」、フジテレビ「めざましテレビ」ほか多数報道あり。また、書店での縄文フェアを実施。
補　足	 会場風景１ 会場風景２

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	354,259人	100,000人	S

【年度計画に対する総合評価】
評定：Ｓ

【判定根拠、課題と対応】
縄文時代の国宝全６件を含む、全国各地の縄文時代の重要作品を展示し、日本美術の源流ともいえる縄文時代の魅力を紹介することができた。また、適切かつ分かりやすい展示を実現することができ、目標人数を大きく上回る来館者を得られたとともに、満足度も高く、年度計画における目標を達成することができた。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1221Aｴ

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（東京国立博物館）
エ　特別展「京都 大報恩寺　快慶・定慶のみほとけ」（10月2日～12月9日）
京都・大報恩寺所蔵の鎌倉彫刻を紹介するもの。（目標来館者数12万人）

担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸企画部企画課長　浅見龍介

【実績】

展覧会名	特別展「京都 大報恩寺　快慶・定慶のみほとけ」
会　　期	10月2日(火) ～12月9日(日)　(60日間)
会　　場	平成館　3・4室
主　　催	東京国立博物館、読売新聞社
作品件数	47件
来館者数	197,004人（達成率：164.2%）
入場料金	一般1,400円、大学生1,000円、高校生800円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度　86.3%

告知ポスター

【成果】

企画構成 展示作品	京都・大報恩寺は、鎌倉時代初期に開創された古刹で、鎌倉時代の仏師、行快作の釈迦如来坐像、快慶の十大弟子立像、運慶の弟子で、行快とほぼ同じ世代である肥後定慶作の六観音菩薩像など鎌倉彫刻の名品が伝わる。本展覧会では関連する作品と合わせて鎌倉彫刻の名品を紹介した。
学術的意義	彫刻作品については事前に調査、写真撮影を実施し、その成果を踏まえて図録の執筆や図版の掲載をすることができた。また、六観音像についてはX線断層写真（CT）の撮影を実施し、今後の研究の貴重な資料を作成することができた。
教育普及	・記念講演会を2回開催した。第1回は10月12日の講演「千本釈迦堂・大報恩寺の歴史」を行い、参加者数292人であった。第2回は11月18日の講演「大報恩寺のみほとけ　運慶次世代の仏師と京都」を行い、参加者数325人であった。 ・「JAZZと声明の夕べ」を10月5日に2回開催した。第1回は310人、第2回は250人計560人の参加があった。
その他 （運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等）	記者発表会：4月25日実施　45媒体、59人出席。報道内覧会：10月1日実施　198名出席。ポスター、チラシ各種制作。駅大型ボード、東武日比谷線乗り入れドア横などを出稿。新聞：読売新聞　文化面特集、雑誌：「日経おとなのOFF」7月号、「芸術新潮」8月号テレビ：NHK「日曜美術館アートシーン」、BS日テレ「ぶらぶら美術・博物館」、日本テレビ「バケット」などで報道。また、展覧会公式Twitterにて十大弟子総選挙を行うほど、幅広い広報活動を行った。
補　足	 会場風景１ 会場風景２

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	197,004人	120,000人	A

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 出品作品の調査・研究成果をふまえて、大報恩寺の鎌倉時代の彫刻を紹介することができた。また、六観音像は会期の途中で光背を外して像の背面が見えるようディスプレイの変更する工夫をした。目標人数を大きく上回る来館者を得られたとともに、満足度も高く、年度計画における目標を達成することができた。

【書式A（特別展）】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1221Aオ

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（2）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（東京国立博物館）
オ　東京国立博物館・フィラデルフィア美術館交流企画　　特別展「マルセル・デュシャンと日本美術」（10月2日～12月9日）
　フィラデルフィア美術館が所蔵するマルセル・デュシャンの作品と日本美術と対比して、両者の持つ意味や価値観を浮き彫りにする。（目標来館者数5万人）

担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	文化財活用センター企画担当課長　松嶋雅人

【実績】

展覧会名	東京国立博物館・フィラデルフィア美術館交流企画　　特別展「マルセル・デュシャンと日本美術」
会　　期	10月2日（火）～12月9日（日）　（60日間）
会　　場	平成館　1・2室
主　　催	東京国立博物館、フィラデルフィア美術館
作品件数	152件
来館者数	80,191人（達成率：160.4%）
入場料金	一般1,200円、大学生900円、高校生700円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度　74.0%

告知ポスター

【成果】

企画構成 展示作品	マルセル・デュシャン（1887－1968）は、伝統的な西洋芸術の価値観を大きく揺るがし、20世紀の美術に衝撃的な影響を与えた作家である。本展覧会の第1部「デュシャン　人と作品」では、フィラデルフィア美術館のデュシャン・コレクションより、油彩画、レディメイド、関連資料及び写真を含む計152点によって、創作活動の足跡を紹介した。第2部「デュシャンの向こうに日本がみえる。」では、もともと西洋とは異なった社会環境のなかで作られた日本の美術をデュシャンの作品と比べることによって、その意味や価値観を浮かび上がらせ、日本の美の楽しみ方を新たに提案した。
学術的意義	フィラデルフィア美術館所蔵のデュシャン作品が、この規模でまとまって展観されるアジア初の機会であり、マルセル・デュシャンの芸術活動の足跡を辿ることができる大変貴重な機会となった。また、当館の日本美術作品による展示を併催し、デュシャンを通して日本美術を再発見するこれまでにない斬新な試みとなった。
教育普及	・記念講演会「デュシャンの本質」を10月6日に開催し、参加者数292人であった。 ・トークショー「デュシャンの向こうに日本がみえる。」を10月16日に開催し、参加者数320人であった。
その他 （運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等）	記者懇談会にて概要説明：3月13日実施　報道内覧会（『大報恩寺展』と同時開催）152媒体、202人出席。ポスターB1、B2、プレチラシA4、本チラシA4を制作したほか、公式WEBサイト、応援Twitterアカウントを開設・運用した。交通広告では、JRおよび東京メトロの駅サイネージ、駅貼り広告を実施。また。J-WAVE、TBSラジオとのタイアップによる広報活動を実施。朝日新聞、産経新聞ほか中央各紙文化面、BS日テレ「ぶらぶら美術・博物館」などで報道された。GINZA SIX内蔦屋書店での店頭キャンペーンを実施、これまでにない来館者層に向けた広報を展開、奏功した。
補　足	会場風景1　 会場風景2

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	80,191人	50,000人	A

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	フィラデルフィア美術館所蔵のデュシャン作品の大規模な展観はアジア初の機会であり、貴重な作品を紹介した。展示デザインは当館が担当し、見やすい展示とすることができた。目標人数を大きく上回る来館者を得られたとともに、話題性も高く、年度計画における目標を達成することができた。当館特別展では馴染みのない展示であったため、満足度が低い傾向になったと考えられる。来館者満足度を高める展示手法、解説の手法を今後、検討したい。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1221Aヵ

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（東京国立博物館）
カ　日中平和友好条約締結40周年記念特別企画「中国近代絵画の巨匠　斉白石」（10月30日～12月25日）
中国でもっとも著名な画家、斉白石の作品を紹介するもの。（目標来館者数2.5万人）

担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸企画部企画課出版企画室研究員　植松瑞希

【実績】

展覧会名	日中平和友好条約締結40周年記念特別企画「中国近代絵画の巨匠　斉白石」
会　　期	10月30日（火）　～12月25日（火）（50日間）
会　　場	東洋館8室
主　　催	東京国立博物館、北京画院、朝日新聞社
作品件数	126件
来館者数	62,405人（達成率：249.6%）
入場料金	総合文化展観覧料
ｱﾝｹｰﾄ結果	―

告知ポスター

【成果】

企画構成 展示作品	日中平和友好条約の締結40周年を記念し、中国近代絵画の巨匠・斉白石の人と芸術を紹介する展覧会を開催した。斉白石（1864～1957）は、農家に生まれたが、画譜や古画を学び、写生に励んで画家として大成し、北京画院の初代名誉院長となった。現代中国では最も有名かつ人気のある画家の一人である。本展では斉白石の作品126件を展示した。
学術的意義	中国有数の斉白石コレクションである北京画院の所蔵品を日本で初公開した。また斉白石研究機関として著名な同院の研究員と協力し、斉白石の画業全体が見通せること、および日本とのかかわりを紹介することを留意しながら作品を選定、展示し、研究成果を図録やギャラリートークで発表した。
教育普及	・ギャラリートークを2回開催した。第1回は11月9日に「斉白石作品鑑賞入門」を開催し参加者数163人。第2回は12月11日に「斉白石の魅力」を開催し、参加者数170人であった
その他 （運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等）	報道内覧会：10月29日実施　22媒体、26人出席。ポスター、チラシ各種制作。新聞：朝日新聞広告記事、雑誌：「Pen」12月号、「月刊美術」12月号、「芸術新潮」12月号、「ミセス」1月号など。
補　足	会場風景１　 会場風景２

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	62,405人	25,000人	A

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 出品作品の調査・研究成果をふまえて、本邦初公開となる斉白石の書画を紹介した。また、適切かつ分かりやすい展示を実現することができ 、目標人数を大きく上回る来館者を得られたとともに、満足度も高く、年度計画における目標を達成することができた。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1221Aキ

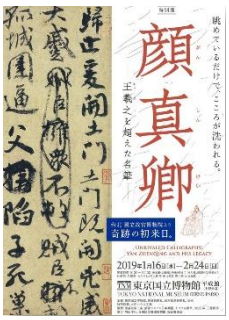
	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（東京国立博物館）
キ　特別展「顔真卿　王羲之を超えた名筆」（1月16日～2月24日）
　中国唐時代に活躍した顔真卿の書を紹介する。（目標来館者数6万人）

担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸企画部長　富田淳

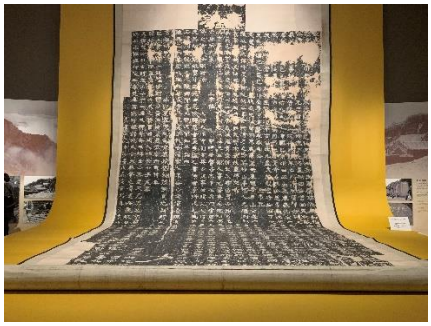
【実績】

展覧会名	特別展「顔真卿　王羲之を超えた名筆」
会　　期	2019年1月16日(水) ～2月24日(日)　(35日間)
会　　場	平成館
主　　催	東京国立博物館、毎日新聞社、日本経済新聞社、NHK
作品件数	177件
来館者数	198,920人（達成率：331.5%）
入場料金	一般1,600円、大学生1,200円、高校生900円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度81.1%



告知ポスター

【成果】

企画構成 展示作品	中国唐時代に活躍した顔真卿は、前世代の虞世南、欧陽詢、褚遂良という初唐の三大家の伝統を継承しながら、顔法と称される特異な筆法を創出し、後世にきわめて大きな影響を与えた。本展では、書の普遍的な美しさを法則化した唐時代に焦点をあて、顔真卿の人物や書の本質に迫った。また、後世や日本に与えた影響にも目を向け、唐時代の書の果たした役割を検証した。
学術的意義	中国の歴史上、東晋時代と唐時代は書法が最高潮に到達した。本展は平成25年(2013)の「書聖王羲之」展を受けて開催されるもので、中国書法史を概観しつつ、日本初来日となる國立故宮博物院「祭姪文稿」「自叙帖」、香港中文大学文物館「九成宮醴泉銘」「集王聖教序」「李思訓碑」「麻姑仙壇記」や、数々の名品を一挙に展示する。
教育普及	・席上揮毫＆トーク「古典を受け継ぐ現代の書－世代をつなぐ筆墨の美－」を1月27日に開催し、参加者数321人であった。 ・記念講演会「顔真卿　王羲之を超えた名筆」を 2月9日に開催し、参加者数309人であった。 ・本展開催にあわせて本館で「書体験」を開催した。 ・ボランティアを対象とした解説会を実施し、100人の参加者があった。
その他 (運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等)	記者発表会：7月26日実施　58媒体、83人出席。報道内覧会：30年1月15日、134媒体、170人出席。ポスター、チラシ各種制作。駅大型ボード、上野駅サイネージ、毎日新聞社電飾看板などを出稿。新聞：毎日新聞　特集、日本経済新聞　社告　雑誌：「和楽」1月号、「サライ」1月号、「日経おとなのOFF」1月号、「墨」1月号、「婦人画報」1月号　テレビ：NHK「美の壺」などで報道。
補　足	  会場風景

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	198,920人	60,000人	S

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：S	出品作品の調査・研究成果をふまえて顔真卿の作品を咀嚼してその魅力を伝えることができた。あわせて、中国、日本の関連作品も展示することによって書道史における顔真卿の位置も伝えることができた。目標人数を大きく上回る来館者を得られたとともに、国外からの来館者も多く、年度計画における目標を達成することができた。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1221Bｱ

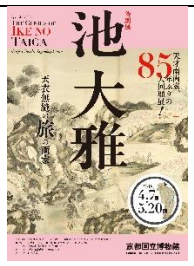
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（京都国立博物館）
ア　特別展「池大雅　天衣無縫の旅の画家」（4月7日～5月20日）
　与謝蕪村とともに「南画の大成者」と並び称される池大雅。初期から晩年にいたる代表作を一堂に集め、その画業の全体像を紹介する。（目標来館者数7万人）（38日間）

担当部課	学芸部	事業責任者	美術室研究員　福士雄也

【実績】

展覧会名	特別展「池大雅　天衣無縫の旅の画家」
会　　期	4月7日（土）～5月20日（日）（38日間）
会　　場	平成知新館
主　　催	京都国立博物館、読売新聞社
作品件数	162件（うち国宝3件、重要文化財15件）
来館者数	67,399人（達成率：96.3%）
入場料金	一般1,500円、大学生1,200円、高校生900円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度　　90.2%



告知ポスター

【成果】

企画構成 展示作品	第1章　天才登場―大雅を取り巻く人々、第2章　中国絵画、画譜に学ぶ、第3章　指墨画と様式の模索、第4章　大雅の画と書、第5章　旅する画家―日本の風景を描く、第6章　大雅と玉瀾、第7章　天才、本領発揮―大雅芸術の完成、以上の7章の構成で各テーマの画業を代表する作品162件を展示した。 ・【第1章】「池大雅像」福原五岳筆（当館蔵）、「与池野氏又次郎童子偈」杲堂元昶筆（京都府蔵）など ・【第2章】『芥子園画伝』（個人蔵）、「腕底煙霞帖」李珩筆（個人蔵）など ・【第3章】「柳渓渡渉図」池大雅筆（千葉市美術館蔵）、「密林草堂図」池大雅筆（個人蔵）など ・【第4章】「五君咏図」池大雅筆（個人蔵）、「騰雲飛濤図」池大雅筆（個人蔵）など ・【第5章】重文「陸奥奇勝図巻」（九州国立博物館蔵）、「浅間山真景図」池大雅筆（個人蔵）など ・【第6章】「大雅・玉瀾旧居図」伝月峰筆（個人蔵）、「松壑仙境・梅岳帰隠図」池大雅・徳山玉瀾筆（敦井美術館蔵）など ・【第7章】国宝「楼閣山水図屏風」池大雅筆（東京国立博物館蔵）、重文「洞庭赤壁図巻」池大雅筆（当館蔵）など
学術的意義	・大雅の代表作をほぼすべて網羅し、さらに新発見作品や長らく公開されることのなかった作品をこれに加えることで、画家の全貌を示すことができた。 ・大雅作品のみならず、大雅の交友関係を示す他作家の作品、史料を展示することで、大雅の幅広い人脈とその意義を明らかにした。 ・大雅が数多く行った旅に注目し、その制作活動における意義を検証した。 ・大雅作品の重要な領域である真景図について、旅との関わりだけでなく同時代における蘆園派詩人たちの動向と関連付けて考察し、大雅が絵画史上に果たした先駆的な役割を明らかにした。
教育普及	記念講演会（5回） 　4月7日「自由な魂を求めて－池大雅の憧れた文人的世界－」／4月14日「西湖への憧れ－大雅の名勝図を体感する－」／4月21日「旅する画家の絵」／4月28日「池大雅の絵画－あるいは卵の殻と黄身との関係－」／5月12日「大雅と蕪村－十便十宜図を中心に－」 　ワークショップ「指で描こう！指墨画にチャレンジ」を実施。
その他 （運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等）	・運営：高い密度で作品を展示したが、滞留を発生させることなく快適な観覧環境を維持した。 ・広報等：NHK日曜美術館（4月29日）にて放映、WEB動画・ニコニコ生放送（5月8日）にて放映、その他多種多様のメディアにて広報した。 ・俳優の松平健氏を特別展のアンバサダーとし、記念撮影会やトークイベントを実施することで重点的に集客と広報を図った。 ・サービス：すべての作品にキャッチコピーと視認性の高い多言語キャプションを付すことで、日本人のみならず海外からの来館者に対するサービスも充分であった。
補　足	

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	67,399人	70,000人	C

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	池大雅の過去最大規模の回顧展であり、大雅の国宝・重要文化財がすべて展示されるという記録に残る特別展であった。目標来館者数にはわずかに至らなかったものの、現代では難解なイメージでと捉えられがちな「文人画家」の実像と魅力を、作品を通して多くの来館者と共有することに成功した。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1221Bイ

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
（京都国立博物館）
イ　特別展「京のかたな　匠のわざと雅のこころ」（9月29日～11月25日）
　　現存する京都＝山城系鍛冶の作品のうち、国宝指定作品のほぼ全てと、著名刀工の代表作を中心に展示する。（目標来館者数8万人）（50日間）

担当部課	学芸部	事業責任者	工芸室主任研究員　末兼俊彦

【実績】

展覧会名	特別展「京のかたな　匠のわざと雅のこころ」
会　　期	9月29日(土)～11月25日(日)(50日間)
会　　場	平成知新館
主　　催	京都国立博物館、読売新聞社、NHK京都放送局、NHKプラネット近畿
作品件数	200件(うち国宝21件、重要文化財71件)
来館者数	253,003人（達成率：316.3%）
入場料金	一般1,500円、大学生1,200円、高校生700円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度97.7%

告知ポスター

【成果】

企画構成 展示作品	京都国立博物館の特別展として初の刀剣を主テーマとする展覧会。館の所在地である京都＝山城国で製作されてきた刀剣の代表作品を網羅することで、「刀から京都の歴史を紐解く」ことを目的とし、平安時代末期12世紀から21世紀までのおよそ800年に渡る京都のかたなを通史的に展示した。現在東京国立博物館所蔵となっている国宝「太刀　銘三条（名物三日月宗近）」をはじめ、数百年ぶりに京都へ戻った作品も多く、日本史研究の視点だけではなく美的優品鑑賞の点からも画期的な企画であった。
学術的意義	・京都で製作された刀剣を通史的に時代・作者・工房・流派ごとに揃え、作家性の問題や技術系譜、時代背景のもたらす変化などを日本の歴史とリンクさせ､大局的な視点で分析を行う初の試みとなった。 ・事前調査によって、詳細が不明であった祇園祭長刀鉾町に伝わる大薙刀の伝来と天文法華の乱における洛中の被害、滋賀県蒲生郡に集住した刀工集団石堂派の実態など多くの新知見を得た。 ・図録に所載された作品の写真についても可能な限り新規撮影を行い、また全作品の詳細な法量を計測し掲載することで、今後の刀剣研究の基礎資料として永く耐えうる研究書とした。図録の販売冊数は5万部に達し、この種の研究書として異例の発行部数となった。 ・従来、集客力に劣るとされていた刀剣をテーマとする展覧会として過去最大の動員数を獲得した。特に来館者の大半を若年女性層が占め、今後の文化財保存や日本文化への入り口として博物館教育ならではの成果を出すことに成功した。
教育普及	・記念講演会（7回） 9月29日「京のかたな」／10月6日「京のかたなⅠ―古刀―」／10月13日「京鍛冶の黄金期―粟田口から来派へ―」10月20日「日本刀の源流―日本の原始古代刀―」／10月27日「京のかたなⅡ―新刀―」／11月3日 対談「『京のかたな』総まとめ」／11月10日「合戦絵巻と武器・武具の研究」 ・ワークショップ「まぢかで見よう！はじめての刀」 ・多言語による特別展「鑑賞ポイント」の作成
その他 （運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等）	・特に人気のある作品については、最前列で鑑賞するための待ち列を設け、混雑対策を行った。 ・高校生料金を通常より安価に設定することで若年層の誘客を図った。 ・「日曜美術館」､「歴史秘話ヒストリア」､「英雄たちの選択」等の訴求力のある番組に協力し、刀剣の魅力を紹介するとともに、WEB媒体で記者発表や展覧会紹介番組の動画生配信を実施し集客を図った。 ・オンラインゲームと連携し、人気のある声優を起用した特別版の音声ガイドを作成し好評を博した。 ・多数のオリジナルグッズを制作することで、満足度の向上と売上に貢献した。
補　足	・明治古都館において、関連展示を実施した。

【定量的評価】項目	年度実績	目標値	評定
来館者数	253,003人	80,000人	S

【年度計画に対する総合評価】
評定：　S

【判定根拠、課題と対応】
　一般的には集客に難がある分野にも関わらず、地上波、衛星放送、雑誌、WEB、SNS 等の多様なメディアを複合的に活用し刀剣ブームを鑑賞へと結び付けた。即時性を意識した運営及び広報展開の成功は、今後の事業の手本となるものであった。
　展覧会の計画から実施の面においては多くの課題を内包していたが、若年層の動員数や新知見を満載した図録の販売数を勘案すると、本展覧会の刀剣研究及び文化財活用への貢献は、欠点を補って余りあるものであった。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1221Cア

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
ア　創建1250年記念特別展「国宝　春日大社のすべて」（4月14日～6月10日）
　平成30年に創建1250年となる長い歴史を持つ春日大社の沿革を辿りながら、信仰の精髄ともいえる古神宝、奉納品に注目し、その魅力に迫る。（目標来館者数5万人）

担当部課	学芸部	事業責任者	工芸考古室長　清水健

【実績】

展覧会名	創建1250年記念特別展「国宝 春日大社のすべて」
会　　期	4月14日(土)～6月10日(日)（51日間）
会　　場	奈良国立博物館　東・西新館
主　　催	奈良国立博物館、春日大社、朝日新聞社、ＮＨＫ奈良放送局、ＮＨＫプラネット近畿
作品件数	224件（うち国宝57件、重要文化財47件）
来館者数	95,950人（達成率：192.0%）
入場料金	一般1,500円、高校・大学生1,000円、小・中学生500円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度　87.7%

告知チラシ

【成果】

企画構成 展示作品	春日大社の創建1250年に当たって、国宝に指定される本宮御料古神宝類、若宮御料古神宝類を始めとする春日大社の伝来の社宝、全国に展開した春日信仰に関わる品々を網羅的に収集し、信仰の原点と広がりを提示して、「春日大社のすべて」に迫ることを企図した。 展示は9章構成で、第1会場の東新館に「第1章　平安の正倉院」、「第2章　神宝」を充て、多数の国宝がひしめく春日大社伝来の社宝の数々によって観覧者を圧倒した。第2会場の西新館は、1250年の歴史と信仰の拡大を追う構成とし、「第3章　春日大社の創建」では出土品や文献史料、第一殿の祭神を祀る鹿島神宮から直刀・黒漆平文大刀拵（国宝）を、第二殿の祭神を祀る香取神宮から海獣葡萄鏡（国宝）をそれぞれ借用し、創建の謎に迫った。「第4章　国の護り、氏社」、「第5章　春日曼荼羅の世界」、「第6章　春日権現験記絵の世界」では、藤原氏とともに発展していった春日大社の古代・中世像を、多くの造形美術を通じて紹介した。「第7章　春日大社の神と仏」では、仏像や経厨子などの仏教美術を展示し、神仏習合の有様を示した。「第8章　春日大社の祭礼」、「第9章　春日信仰の広がり」では、春日大社の祭礼に関わる品や全国の春日神社に伝わった宝物、春日講ゆかりの品々を通じて信仰の広がりが1250年の祈りを支えたことを改めて提示した。
学術的意義	春日大社に留まらず、春日信仰の全体像に迫る内容となり、さながら百科全書のような展示を構成することができた。美術史学、文学、歴史学等の最新の成果を踏まえ、研究の最前線を示せたものと自負している。殊に多数の春日曼荼羅を体系的に展示し、比較研究を可能にした点や、伸長著しい春日権現験記絵研究の前線を示した点、大規模な展覧会で取り上げられることのなかった春日講という民間信仰に踏み込んだ点は特筆されてよいであろう。また春日大社所蔵鼉太鼓の修理の成果や知見、古神宝類の復元模造の成果や知見をこの機会に披露することができた点も十分な意義を有すると考える。加えて、当館がかつて春日東西塔の建っていた場所に位置することを強調し、展示を通じて春日大社の歴史を観覧者が体感できるよう誘った点も、今後有形無形に意義を生み出すことであろうと期待している。
教育普及	会場には簡潔に要点をまとめたコーナー解説や題箋、理解を助けるための写真パネルや地図、補助パネルを多数掲示し、理解の促進に努めた。また、共催のＮＨＫプラネット近畿の協力を得て、ドローンによる撮影映像を交えた展示映像を作成し、春日大社の全体像の提示を補完した。 会期中に公開講座を4回実施し、「神仏習合」をテーマとする関連フォーラムも実施した。加えて、共催のＮＨＫ奈良放送局の協力を得てジュニアガイド「かるたで遊ぼう　春日大社のすべて」を作成し、奈良市内の小学校に配布するなど学童への普及にも努めた。なお、雨天により春日大社学芸員・当館研究員と境内・参道・当館敷地（旧境内）を回るウォーキングイベントが中止になったのは痛恨であった。
その他 （運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等）	幅広い世代に浸透を図るため、シカグッズ等を持参した来館者に対する割引（「シカ割引」）を実施した。また、鹿と藤をモチーフにした公式キャラクター（「鹿藤きょうだい」）の設定などを行い、当館ツイッターに加えて展覧会の公式ツィッターも開設し、広報に努めた。さらに、春日大社境内への看板の掲出、割引券の配布を行い、参拝者の誘客に努めた。一方、春日大社への誘導を促すために参道の見所を記した参道マップを作成し、館内で配布した。
補　足	展覧会図録の執筆には春日大社学芸員も参画し、さらに第一線の研究者の寄稿も得て、非常に充実した内容となった。後日春日大社における1250年記念式典の記念品としても配付された。

【定量的評価】項目	年度実績	目標値	評定
来館者数	95,950人	50,000人	S

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｓ	【判定根拠、課題と対応】 春日大社、春日信仰の全体像を、周辺の環境を含めて提示することができ、展覧会名に恥じない春日大社展の決定版とすることができた。殊に神社の展覧会にして、神仏習合像を赤裸々に示した意義は小さくないと思われる。また、様々な広報・普及の展開等によって、目標を超える多数の来館者に繋がり、かつ高い満足度を得、加えて収益を生み出したことは、展覧会として総合的に成功であったといえるであろう。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1221Cイ

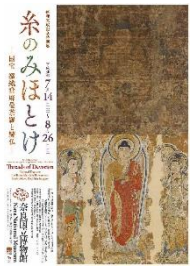
中項目	１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
イ　修理完成記念特別展「糸のみほとけ-国宝　綴織當麻曼荼羅と繡仏-」（7月14日～8月26日）
国宝　綴織當麻曼荼羅の修理完成を記念し、古代から近世にかけての繡仏、綴織による仏像の名品を一堂に集め、糸のみほとけの世界を展観する。（目標来館者数5万人）

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　内藤栄

【実績】

展覧会名	修理完成記念特別展「糸のみほとけ-国宝　綴織當麻曼荼羅と繡仏-」
会　　期	7月14日(土)～8月26日(日)（40日間）
会　　場	奈良国立博物館　東新館・西新館
主　　催	奈良国立博物館、読売テレビ、日本経済新聞社
作品件数	138件（うち国宝9件、重要文化財35件）
来館者数	45,175人（達成率：90.4%）
入場料金	一般1,500円、高校・大学生1,000円、小・中学生500円
ｱﾝｹｰﾄ結 果	満足度　95.9%



告知チラシ

【成果】

企画構成 展示作品	第1章　飛鳥時代―日本最初の造像は繡仏だった　（国宝・天寿国繡帳〔中宮寺〕、重文・繡仏裂〔東京国立博物館〕） 第2章　綴織當麻曼荼羅―鬼籍の綴織　（国宝・綴織當麻曼荼羅〔當麻寺〕、綴織當麻曼荼羅復元模造〔川島織物〕） 第3章　奈良時代―巨大繡仏の時代　（刺繍霊鷲山釈迦如来説法図〔大英博物館〕、国宝・刺繍釈迦如来説法図〔当館〕） 第4章　平安時代から鎌倉時代へ―美麗の繡仏　（重文・刺繍阿弥陀三尊像〔西念寺〕、重文・刺繍大日如来像〔細見美術館〕） 第5章　中国の繡仏―多彩かつ緻密　（重文・刺繍九条袈裟貼屏風〔知恩院〕、刺繍十六羅漢像図〔三井記念美術館〕） 第6章　浄土に続く糸―刺繍阿弥陀来迎図　（重文・刺繍阿弥陀三尊来迎図〔徳川美術館〕、刺繍當麻曼荼羅〔真正極楽寺〕） 第7章　髪を繡い込む―種子と名号　（重文・刺繍種子阿弥陀三尊図〔輪王寺〕、刺繍阿字図〔正智院〕） 第8章　近世の繡仏―繡技の到達点　（刺繍仏涅槃図〔妙国寺〕、刺繍聖徳太子摂政像〔叡福寺〕）
学術的意義	繡仏（刺繍の仏像）と織成像（綴織の仏像）を体系的に集めた特別展である。同様の内容の展示は半世紀前に当館で開催されて以来であり、繡仏と織成像が仏像、仏画と並ぶ重要な造像技法であり、多くの名品を生み出していることに大きな衝撃を与えることができた。展示では飛鳥時代から江戸時代に至る繡仏と織成像の歴史をたどり、日本人の信仰、とりわけ女性信仰、死者の供養との関連に注目した。従来、個々の作品の製作年代については一定した基準がなかったが、本展ではそのものさしを提示できたと思う。また、これまで唐製とする説が強かった当館の国宝・刺繍釈迦如来説法図を、飛鳥時代後期の作とする新説を提示するなど、学問的にも大きな貢献を果たした。とりわけ、大英博物館より敦煌伝来の刺繍霊鷲山釈迦如来像を借用できたことは学術的な意義が大きく、日中の主要繡仏作品を網羅することができた。また、刺繍技法を刺繍工芸家に、綴織技法については川島織物セルコンの技師に学び、復元模造を製作するなど技法面にも配慮した。従来、刺繍技法の名称は不統一であったが、同展で一つの方向性を示すことができた。この成果は展覧会目録に発表した。
教育普及	・講演会3回（7月21日、8月4日、8月11日） ・夏季講座（8月22、23、24日、8講座） ・川島織物セルコンの技師による綴織実演と解説（7月22日） ・刺繍工芸家、樹田紅陽氏によるワークショップ（8月5日） ・親子向けワークショップ「織ってみよう！糸のみほとけ」（7月29日） ・こども無料日（7月28日〔土〕、29日〔日〕） ・オリジナル手芸作品展示コーナー（一般の人から手芸作品を応募してもらい、当館地下回廊に展示）
その他 (運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等)	展示会場において４Ｋ撮影の映像を３本（刺繍技法に関する映像、綴織當麻曼荼羅の復元に関する映像、真正極楽寺の刺繍當麻曼荼羅の細部を鑑賞する映像）を上映した。また、iPadを使用し、主要作品の部分拡大、技法解説を学ぶことのできるコンテンツを作成し、会場に４台設置した。
補　足	通常であれば、ケースのガラス面から1mほど離れた位置での展示となるところ、本展ではほとんどの作品に対して、15cmほどの近さで鑑賞できるように配慮した。アンケートやＳＮＳには近くで鑑賞できることに対する高評価が多く見られた。3,4時間かけて鑑賞する人も少なくなく、快適な環境でじっくりと作品を鑑賞するという、博物館のあるべき姿勢を提供できた。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	45,175人	50,000人	C

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
猛暑の時期であり、また染織品の展覧会であるため会期が短く、目標人数には手が届かなかったが、日本を代表する繡仏・織成像の国宝３件（天寿国繡帳〔中宮寺〕、綴織當麻曼荼羅〔當麻寺〕、刺繍釈迦如来説法図〔当館〕）を同時に展示し、さらに大英博物館より刺繍霊鷲山釈迦如来説法図を借用、日本での初公開を行うなど、質が高く充実した内容の展示を行うことができた。また、来場者が間近で作品を鑑賞できるよう、展示品をケースのガラス面に近づけるなどの工夫を行ったことにより、アンケート結果では95.9%という非常に高い満足度が得られたこと等を加味し、Ｂ判定とした。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1221Cｳ

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展		
【年度計画】 ウ　特別展「第70回　正倉院展」（予定） 正倉院に伝わる宝物約70件を展示。（目標来館者数18万人）			
担当部課	学芸部	事業責任者	工芸考古室長　清水健

【実績】

展覧会名	第70回　正倉院展
会　　期	10月27日(土)～11月12日(月)（17日間）
会　　場	奈良国立博物館　東・西新館
主　　催	奈良国立博物館
作品件数	56件
来館者数	245,832人（達成率：136.6%）
入場料金	一般1,100円、高校・大学生700円、小・中学生400円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度　85.9%

告知チラシ

【成果】

企画構成 展示作品	天平文化の精華を広く国民に公開する秋恒例の展覧会。70回目となった30年度は、正倉院宝物が概観できる器物、染織品、文書・経巻など初出陳10件を含む56件が出陳された。今回は、第1会場（東新館）を北倉伝来の聖武天皇・光明皇后ゆかりの宝物から始め、儀式用具から法会と供養に関する宝物へと繋げた。第2会場（西新館）は法会で行われた音楽と舞踊に関わる宝物を筆頭に、楽器で繋ぐかたちで新羅の文物と交易に至り、華厳経論帙を媒介に経典に関する宝物という観点で聖語蔵経巻の展示に展開させた。さらに仏教の繋がりで奈良時代の仏教荘厳について紹介し、正倉院文書で締め括った。全体としては、奈良時代の宮廷の暮らしから、貴顕の祈り、祈りの場を彩った楽舞の世界へと進み、新羅との交流を示す部分を挟んで、仏教への祈りが生み出した美の世界を提示し、それらを支えた社会生活についての展示で締め括るという構成であった。
学術的意義	正倉院宝物を大規模に公開するほぼ唯一の機会であり、とりわけ初出陳の宝物は、一般に公開されるのが史上初めてであることから、本展が開催されること自体が大きな学術的意義を持つと考えられる。また今回は、最新の麻製品に関する調査を踏まえた内容となった点や、朝鮮半島の新羅の文物がまとまって出陳され､遣唐使ばかりに目が行きがちな奈良時代の国際交流に一石を投じられた点が特筆される。 図録には多くの新写や初公開を含む多数のカラー図版を掲載し、最新の知見を踏まえた解説を、用語解説を付して収録し、成果の普及及び理解の促進に努めた。また最新の知見を含む小論文（「宝物寸描」）も掲載し、研究の最前線を提示した。
教育普及	会場には宝物毎に簡潔な解説を付した題箋を設置した。また正倉院宝物の概要や、上記の構成に添ったコーナー毎の見所を記したパネルや部分拡大図、技法解説などを随所に配置して、理解の促進を図った。そのほとんどは日・英・中（簡体字）・韓の4言語とし、国際的な理解の促進に注力した。 会期中には公開講座3回､「新羅」をテーマとした学術シンポジウム、解説付きの親子鑑賞会を各1回実施した。また1日4回（公開講座の日は会場の都合で2回）、ボランティア解説員による見所解説を講堂にて行った。さらに、会期前には大学1校で、研究員による出前授業を実施した。
その他 (運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等)	特別協力者（新聞社）の協力を得て、29年度に続いて東京でも報道発表を行い、また新聞広告・交通広告を大規模に展開し、周知に努めた。さらに、特別協力者と協力して新聞の特集紙面を構成し、会場でも配布したほか、奈良県内の学校等へも送付した。 館内に予約制の託児室を設け、観覧環境の充実に努めた。また待ち列部分で映像を流し、観覧環境の向上や観覧マナーについて啓発及び注意喚起を行った。加えて、29年度に続いて手荷物預かり所を設置し、コインロッカーを増設して、観覧環境の向上を促した。 会場は自由動線とし、壁沿いの展示をできるだけ減らすなど混雑緩和を図った。また29年度に初めて実施した車椅子でみやすい高さの展示を拡充し、西新館第1・2室で行った。混雑との相関はあまり認められなかったことから、拡充について今後一層検討したい。 学芸部で監修した日・英・中（普通話）・韓・子ども用の音声ガイドを有料で貸し出した。
補　足	【公開講座】公開講座の日時、テーマ、講師は以下の通り。 10月27日（土）「鳥兜様の楽帽の復元について」山片唯華子氏（宮内庁正倉院事務所） 11月4日（日）「月借銭のしくみ―古代の官営高利貸―」栄原永遠男氏（大阪市立大学名誉教授） 11月10日（土）「正倉院三彩10話―正倉院に伝わる二彩・三彩陶器の特徴と謎―」吉澤悟（当館）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	245,832人	180,000人	A

【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 29年度より来館者が大幅に増加したにもかかわらず満足度も増加しており、経験値を活かした良質な展示情報の提供、過度のストレスのかからない観覧が概ね達成できたものと評価される。一方展示の高さや題箋の文字及び掲示位置、照明に関する不満は解消されておらず、一層努力を重ねたい。なお、一部の照明に関しては現在正倉院事務所と協議を重ねており、31年度には改善に漕ぎ着けたい。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1221Dｱ

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
ア　特別展「王羲之と日本の書」（2月10日～4月8日、50日間）
　王羲之が日本の書の展開に与えた影響をたどりつつ、近世・中世以降の多彩な書の美に光を当てる当館初の、書を取り上げた展覧会。（目標来館者数4万人）

担当部課	学芸部企画課	事業責任者	前文化財課資料登録室長　丸山猶計

【実績】

展覧会名	特別展「王羲之と日本の書」
会　　期	30年2月10日(土)～4月8日(日)（50日間）
会　　場	九州国立博物館 特別展示室
主　　催	九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、ＴＮＣテレビ西日本
作品件数	116件（うち国宝26件、重要文化財18件）
来館者数	70,110人（達成率：175.3%）
入場料金	一般1,600円、高大生1,000円、小中生600円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度　89.6%

告知ポスター

【成果】

企画構成 展示作品	・手で文字を書くことが激減した今日、かつて身近にあった書の文化の魅力に光をあて、日本語を手で書く意義を再確認し、筆跡に親しむ方法を呼びさますことを目的とした。 ・展示は4章で構成した。第1章「王羲之へのあこがれ」は王羲之や唐時代の中国書法を範とした平安初期の遺品を展示し、第2章「和様の書と平仮名の完成」は平安中期の和様の書と平仮名の諸相を紹介し、第3章「和漢の書の新展開」は中世の和様と禅宗とともに中国からもたらされた唐様の書の諸相を示し、第4章「書の娯しみと花開く個性」は平和が到来した近世社会において、より広範な人々が和漢の書法を自在に揮毫し個性や表現を競った時代として紹介した。
学術的意義	・活字との違いを念頭に、個々の作品の魅力を書のもつさまざまな特質に結び付けて紹介した。図録の作品解説では、文字を読んでわかることと目で文字を見てわかることを併記する体裁をとった。 ・名品ほど読まれることと同時に見られることも意識して揮毫しているため、見るだけで書の魅力を享受できることを、会場の教育普及パネル等で説明した。 ・国内にある双鉤填墨本の王羲之尺牘４件が揃い、嵯峨天皇宸翰「光定戒牒」（国宝、滋賀・延暦寺所蔵）が通期で展示されるなど、質の高い作品が集められた。
教育普及	・古い書跡に親しむための基礎知識と、本展で提案する書の見方について、「書の神様」菅原道真と王羲之をキャラクター化し、「楽しみま書」と題して、パネルを展開させた。 ・漢字仮名交じり文は、縦書きによって高い実用性と美を両立したことを、平仮名の連綿を例に説明した。タブレット端末を用い、平安中期の平仮名の典型作である「高野切」の連綿箇所を縦書きと横書きで書き比べる体験コーナーを設けた。 ・筆線の中の、命毛の軌跡と、潤渇や濃淡の変化を高低差であらわし、このモデルに基づき、「伊達政宗自筆書状」を用いて、三次元プリンターで出力し、筆跡のハンズオン展示を行った。三次元化した筆の軌跡に触れると、濃淡の変化が高低差として触診でき、離れて見ると視覚的な遠近感がわかり、来館者の理解を深めることができた。
その他 （運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等）	・講演会を2回、現代作家による席上揮毫会を2回行い、研究と実技の両面から古今にわたる書の文化的価値を紹介した。 リレー講座「王羲之と日本の書」「王羲之愛好と書の魅力」館長　島谷弘幸（2月10日）、リレー講座「王羲之と日本の書」「古い筆跡たちのささやき」学芸部文化財課資料登録室長　丸山猶計（2月17日） 第1回席上揮毫会　出演：黒田賢一氏、陣軍陽氏、岩田海道氏（2月11日）、第2回席上揮毫会　出演：髙木聖雨氏、吉田成美氏、吉村宣枝氏（2月18日）
補　足	・図録購入率は、来館者の2%台が通例であるが、本展では9%台に上った。 ・西日本新聞で本展の教育普及活動が注目され、4回連載のコラムとして紹介された。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	70,110人	40,000人	A

【年度計画に対する総合評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
　客足の遠のきがちな寒い時期にもかかわらず、来場者数と図録の売行きが予想以上に好調であった。
　SNS 等の書きこみから、本展では教育普及の要素を多く取り入れた展示手法が好評を博し、リピーターが多く醸成されたことが窺え、新しい書の愛好者を開拓することができたと考えられる。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1221Dｲ

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
イ　特別展「至上の印象派展　ビュールレ・コレクション」（5月19日～7月16日、55日間）
　スイス・チューリヒにあるビュールレ・コレクション美術館から印象派を中心とした名品を紹介する。（目標来館者数12万人）

担当部課	学芸部企画課	事業責任者	学芸部特任研究員　臺信祐爾

【実績】

展覧会名	至上の印象派展　ビュールレ・コレクション
会　　期	5月19日(土)～7月16日(月・祝)（54日間）＊7/7は大雨のため休館。
会　　場	九州国立博物館　特別展示室
主　　催	九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、NHK福岡放送局、NHKプラネット九州
作品件数	64件
来館者数	198,489人（達成率：165.4%）
入場料金	一般 1,600 円、高大生 900 円、小中生 500 円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度　84.8%

告知ポスター

【成果】

企画構成 展示作品	・ドイツに生まれ、スイス・チューリヒで実業家として成功を収めたエミール＝ゲオルク・ビュールレ（1890－1956 年）が集めた印象派とポスト印象派を中心とする世界的プライベート・コレクションを紹介する特別展。16～18 世紀のオランダやヴェネツィア派の絵画、フォーヴィスム、キュビスムやモダン・アートの名作もあわせて展示した。 ・主な作品は、ルノワールの《イレーヌ・カーン・ダンヴェール嬢（可愛いイレーヌ)》、セザンヌ《赤いチョッキの少年》、ファン・ゴッホ《種まく人》、ゴーギャン《贈りもの》や、モネ《睡蓮の池、緑の反映》など。約半数が日本初公開。 ・2020 年に、本コレクション全点が増築後のチューリヒ美術館に寄託されることになっており、その全貌をわが国で見る最後の機会であった。
学術的意義	印象派・ポスト印象派を中心とするプライベート・コレクションとして世に名高い本コレクションは、現地でしか見ることができない幻のコレクションであった。我が国を巡回した本展覧会は、17～20世紀に及ぶヨーロッパ絵画の歴史について学ぶ、またとない機会となった。
教育普及	・大人向けの4か国語音声ガイドに加え、こども向けの音声ジュニアガイド（日本語のみ）を作成した。また、冊子のジュニアガイドを作成し、来館した小学生や近郊の小学校で配布した。 ・本展ゲスト・キューレーターの深谷克典名古屋市美術館副館長が、記念講演「印象派の至宝を楽しむ。ビュールレ・コレクションの名画の数々」を行った。 ・NHK Eテレの番組「ガールズ・クラフト」のスペシャルワークショップでイレーヌの肖像画に触発された髪飾り作りを開催した。同じくEテレの番組「びじゅチューン」、「井上涼の印象派ライブin福岡」を実施した。
その他 （運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等）	・館外に待ち列ができないよう、エントランス及びミュージアムホールに来場者用の滞留場所を確保し、展示室内の鑑賞環境が快適なものとなるようエスカレーター前で入場者数を緩やかに制限した。ルノワール《イレーヌ・カーン・ダンヴェール嬢（可愛いイレーヌ)》とモネ晩年の大作《睡蓮の池、緑の反映》について、写真撮影可とした。SNSでの拡散により、来館者の増大につながった。 ・来館者に好きな作品を挙げてもらう「64作品人気投票」を実施し、結果を西日本新聞にて発表した。 ・セザンヌ、ファン・ゴッホとゴーギャンの映画上映にあわせて、映画館で本展を紹介するなど積極的に広報に努めた。
補　足	7月上旬の大雨（30年7月豪雨）のため、7月6日には太宰府市に避難勧告が発令され、当館も同日午後より臨時閉館し、翌日も終日臨時休館となった。そのため、当初計画の会期55日が54日（実際は53日と半日）となった。

《可愛いイレーヌ》撮影の様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	198,489人	120,000人	S

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：S	我が国でも人気が高い印象派とポスト印象派の名品に加え、ヨーロッパ絵画の歴史を学ぶ得難い機会であった。また、1990-91 年の横浜展の来日以後、鑑賞の機会が 2018 年以後現地でもなくなってしまったビュールレ・コレクションを実際に見ることができた来館者の満足度は極めて高く、SNS などでの拡散により、来館者の順調な伸びにつながったものと思われる。

【書式A（特別展）】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1221Dウ

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（2）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
ウ　明治150年記念　特別展「オークラ　コレクション」（古今の美を収集した、大倉父子の夢）（10月2日～12月9日、60日間）
　現存では日本初の私立美術館として開館した大倉集古館の日本美術、東洋美術の名品コレクションを紹介する。
（目標来館者数4万人）

担当部課	学芸部企画課	事業責任者	文化財課主任研究員　山下善也

【実績】

展覧会名	［明治150年記念］　特別展　オークラコレクション
会　　期	10月2日(火)～12月9日(日)（59日間）＊10/6は台風のため休館。
会　　場	九州国立博物館　特別展示室
主　　催	九州国立博物館・福岡県、西日本新聞社、TVQ九州放送
作品件数	112件（うち国宝3件、重要文化財10件、重要美術品16件）
来館者数	63,069人（達成率：157.7%）
入場料金	一般1,500円、高大生1,000円、小中生600円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度　83.5%

告知ポスター

【成果】

企画構成 展示作品	第1章「日本美術の王道」(1.祈りのかたち、2.国宝の輝き、3.やまと絵から琳派へ、4.室町水墨から狩野派へ、5.多彩な近世絵画、6.日本工芸の美)、第2章「アジアに開いた眼」(1.中国、2.朝鮮、3.タイ、ミャンマー、インド)、第3章「日本から世界へ―珠玉の近代絵画」(ローマ日本美術展)。国宝の「古今和歌集序」「随身庭騎絵巻」「普賢菩薩騎象像」の展示他、日本・東洋美術で構成。
学術的意義	大倉財閥を築いた大倉喜八郎・喜七郎親子が明治・大正・昭和にわたって収集した日本・東洋の美術品コレクション（大倉集古館が保管・展示－同館は改修工事のため休館中）を通じ、喜八郎が行った文化財保護の志、喜七郎による海外への日本文化発信といった歴史的意義を紹介するとともに、アジア諸国の多様なコレクションに光を当てることを目的とした。
教育普及	特別講演会2回開催：「大倉集古館の近世絵画-狩野派、琳派など魅力の作品群をめぐって-」学芸部文化財課主任研究員　山下善也　10月8日(月・祝)、「大倉集古館 － 日本最初の美術館はなぜできた？ -」、学芸部長　小泉惠英　10月13日（土)。 関連イベント：「オークラウロ・コンサート」小湊昭尚氏ほか3人によるカルテット、11月4日（日)。 展示室における自在置物「蟷螂」(拡大模造を館内で製作）のハンズオン展示、各コーナーで教育普及展示パネルを制作し、収集家の人物像や時代背景の理解を助けた。
その他 (運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等)	開幕後最初の土曜日に台風に見舞われ、臨時休館を余儀なくされたが、ポスター・ちらし・インターネット・新聞広告・各種ミニコミ誌・テレビ取材・出張講座等の効果が徐々に表れ、右肩上がりに観覧者は増加した。
補　足	

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	63,069人	40,000人	A

【年度計画に対する総合評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
目標人数を達成した。明治維新以降の文化財保護及び収集の歴史の具体例を、質の高い美術品群によって示した本展覧会は、「明治 150 年記念」という我が国の施策とも呼応した事業であり、大きな成果を挙げたと言える。また、来館者アンケートによる満足度について、「とてもよかった」および「よかった」との回答割合が、展覧会の内容については 94%、解説文については 77%が、展示方法については 85%と高かった。これは、展覧会の意義を観覧者に充分に伝え得たことの表れと判断できる。

【書式Ａ（特別展）】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1221Dｴ

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　1)特別展

【年度計画】
エ　特別展「京都・醍醐寺―真言密教の宇宙―」（31年1月29日～3月24日、48日間）
　真言密教の拠点として平安時代以来発展してきた醍醐寺の寺宝を、開基聖宝、修法、法脈の継承、江戸期の再興といった視点から紹介する。（目標来館者数7万人）

担当部課	学芸部企画課	事業責任者	文化財課資料登録室主任研究員　森實久美子

【実績】

展覧会名	特別展「京都・醍醐寺―真言密教の宇宙―」
会　　期	31年1月29日(火)～3月24日(日)（48日間）
会　　場	九州国立博物館　特別展示室
主　　催	総本山醍醐寺、九州国立博物館・福岡県、ＴＶＱ九州放送、西日本新聞社、日本経済新聞社、ＢＳテレビ東京
作品件数	104件（うち国宝32件、重要文化財49件）
来館者数	74,748人（達成率：106.8%）
入場料金	一般1,600円、高大生1,000円、小中生600円
ｱﾝｹｰﾄ結果	満足度89.0%

告知ポスター

【成果】

企画構成 展示作品	真言密教の古刹として知られる京都・醍醐寺に伝わる15万点もの寺宝から、開創から近世に至るまでの各時代の名品を展示し、多くの人々の篤い信仰と千年以上にわたる激動の歴史を概観した。展示室では、国宝・薬師三尊像をかつての安置状況を再現した空間で展示したほか、彫刻や絵画など迫力の密教美術を数多く紹介した。
学術的意義	膨大な寺宝のなかから選りすぐった104件（うち国宝32件、重要文化財49件）の展示を通して、千年以上にわたり法灯を伝えてきた小野流の拠点寺院としての醍醐寺の重要性をあらためて認識させる展示となった。とくに、大型作品のため機会の限られる「薬師三尊像」や「太元帥法本尊像」の展示は貴重であり、本展の意義を一層高めるものとなった。
教育普及	一般の方にはあまり馴染みのない「密教」について深く知ってもらうため、不動明王をモデルとした「不動明王（ふどうあきお）」をナビゲーターとする解説パネルを10枚程度作成した。イラストを中心とした分かりやすいレイアウトと平易な文章によって、子どもだけでなく大人にも楽しんでもらえる内容として好評を得た。 ・リレー講座「醍醐寺展をより楽しむための醍醐味講座」　展示課長　楠井隆志、学芸部文化財課資料登録室主任研究員　森實久美子　31年2月9日（土）
その他 （運営・広報・ｻｰﾋﾞｽ等）	国宝の薬師如来坐像をメインビジュアルとした広報物を作成したほか、展示作品の多彩さと重厚さを伝えるテレビＣＭを流し、早くから各方面の注目を集めた。 展覧会会期中には多彩なイベントのほか、テレビ出演や動画公開など、展示室以外でも展覧会の魅力を伝えた。会期中には、以下の講演会・イベントを開催して、展覧会の普及につとめた。 ・総本山醍醐寺　声明コンサート　出演：総本山醍醐寺　31年1月29日（火） ・トークショー「ニッポンの力」　出演：ラグビー選手　五郎丸歩氏、学芸部文化財課資料登録室主任研究員　森實久美子　31年2月16日（土）
補　足	

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定
来館者数	74,748人	70,000人	B

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 当館では初めてとなる真言密教をテーマとした特別展となった本展は、インパクトの強い五大明王像や薬師堂本尊薬師如来坐像などをメインビジュアルとした広報印刷物の効果もあり、高い注目を集め、目標人数を上回る来館者を得られた。展示室の天井高を生かした薬師三尊像の再現展示は迫力のある空間を生み出すことに成功し、来館者の満足度は非常に高かった。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1222Aア

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　②特別展等　2)海外展

【年度計画】
（東京国立博物館）
ア　海外展「江戸絵画の名品」（仮称）（9月3日～10月28日（予定））（会場：プーシキン美術館、文化庁共催）
　本展はロシアにおける初めての大規模な江戸絵画展で、国宝・重要文化財を含む狩野派・琳派・やまと絵・文人画・浮世絵といった幅広いジャンルの名品を精選し、豊饒な江戸絵画の世界を紹介する。

担当部課	学芸研究部	事業責任者	部長　田沢裕賀

【実績・成果】
ア
・展覧会名　＜海外展＞江戸絵画名品展
・会　　期　9月4日～10月28日（55日間）
・会　　場　ロシア連邦・プーシキン美術館
・主　　催　東京国立博物館、文化庁、プーシキン美術館
・作品件数　135件
・来館者数　126,948人

30年度が「ロシアにおける日本年」であることから、文化庁と東京国立博物館の所蔵品を中心に、千葉市美術館、板橋区立美術館、およびロシア所在の優品を加えて「江戸絵画名品展」を開催した。幕府御用絵師として江戸絵画の基調を確立した狩野探幽をはじめとする狩野派の作品、江戸時代中期の円山応挙、さらに浮世絵や琳派の作品を含む名品を展示した。ロシアにおける初の本格的な江戸時代絵画展。

日本からは、国宝、重要文化財指定作品を含む116件が出品され、江戸時代初期から幕末までの絵画史の流れを通覧することのできる機会をロシア国民に提供することができた。また、事前調査の成果としてプーシキン美術館所蔵の肉筆浮世絵の優品を確認し、3点を展覧会で初公開することが出来た。

【補足事項】
・来館者に対してアンケートを取り、満足度98.0％と高い評価を得ることができた。
・プーシキン美術館において、講演会1回、ギャラリートーク2回を行った。

プーシキン美術館入口

展示室風景

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
来館者数	126,948人	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ａ	ロシアに日本の伝統文化を紹介する貴重な機会を提供し、多くの来館者を集めることができた。満足度も高く、ロシア国内の日本文化紹介する雑誌“Kimono”で日本美術を紹介する展覧会の部門で最高賞を受賞するなど高い評価を得ることができ、年度計画における目標を達成することができた。

【中期計画記載事項】
海外からの要請等に応じて、海外において展覧会等を行うことにより、日本の優れた文化財をもとにした歴史と伝統文化を紹介する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	ロシア側からの要請に応じて、29年度より関係諸機関との調整等準備をはじめたことにより、展示環境の安定性が確保され、当館以外の作品を加えることで展覧会のテーマに沿った優品で展覧会を構成することができた。日本文化を紹介する質の高い展覧会として、予想をはるかに超える多くの来館者を集めることができ、来館者の満足度も非常に高いものとなった。その結果、日本の伝統文化に対する理解を高めることができた。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1222Aイ

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（2）展覧事業　②特別展等　2)海外展

【年度計画】
（東京国立博物館）
イ　海外展　ジャポニズム2018「縄文」（10月16日～12月8日(予定)）(会場：パリ市日本文化会館、文化庁共催)
　　国宝6件を含む、日本美術の源流と位置づけられる土偶、縄文土器をはじめとした縄文時代の造形美を展示する。

担当部課	学芸企画部企画課	事業責任者	学芸研究部調査研究課考古室長　品川欣也

【実績・成果】
（東京国立博物館）
イ
・展覧会名　＜海外展＞縄文―日本における美の誕生
・会　　期　10月17日～12日8日（38日間）
・会　　場　フランス共和国・パリ日本文化会館
・主　　催　東京国立博物館、文化庁、国際交流基金
・作品件数　64件
・来館者数　14,806人

本展は日仏友好150周年を記念して行われたジャポニスム2018の公式企画の一つであり、平成10(1998)年以来20年ぶりにパリで本格的な縄文文化を紹介した。
展覧会は3章構成。第1章「縄文土器の造形美の移り変わり」、第2章「祈りの美、祈りの形」、第3章「暮らしの道具と装身具に宿る美」とし、日本美術のはじまりとも言われる縄文の造形美がもつ力強さや美しさをたどることで、縄文時代の文化や社会への理解を深められるように構成した。会場ではグラフィックを用いることでヨーロッパやアジアとは異なった縄文文化のユニークさを提示した。出品作品は「火焔型土器」や土偶「縄文のビーナス」をはじめとした縄文時代の国宝6件、重要文化財33件など縄文時代の造形美を代表する計64件。日本美術の原点とも呼べる縄文の造形美を通して日本文化への理解を促した。

【補足事項】
・来館者を対象に行ったアンケートにおいて、満足度99％という高い評価を受けた。
・レセプションでは報道内覧会38社、一般内覧会297人参加。フランス国内では日刊紙14件(Le Mondo紙など)、雑誌43件(Téléramaなど)、テレビ3件(Museum TVなど)、ラジオ2件(France Cultureなど)、ウェブ64件、日本国内では新聞123件(朝日新聞など)、雑誌6件(家庭画報など)、テレビ7件(NHKなど)、ラジオ1件、ウェブ91件)、フランス・日本をのぞく海外（イギリスなど計7件)で報道された。また安部晋三内閣総理大臣、オドレー・アズレーユネスコ事務局長など要人多数が来訪。
・記念講演会計2回(第1回128人、第2回126人)、子ども向けワークショップ計2回、映画上映「縄文にハマる人々」計2回、パフォーマンス「縄文太鼓」1回、ギャラリートーク計4回、パリ市内の小中学生ガイドツアー計16回を行った。パリ日本文化会館で開催した特別展での音声ガイドの製作は初、また当館の海外展ではかつてない規模で教育普及活動を展開した。

展示風景

安部晋三内閣総理大臣視察

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
来館者数	14,806人	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	縄文時代の国宝指定作品すべてが海外展に出品されるのは本展が初めての機会である。また47都道府県のうち21都道府県の出土作品を展示紹介することで、海外では極めて機会の少ない日本の地域文化の魅力を発信する一助となった。黄色いベスト運動やストラスブールでのテロのため来館者数は伸び悩んだが、アンケートの満足度(99%)という結果は、本展が日本文化の発信に果たした役割の大きさを十分に物語っている。

【中期計画記載事項】
海外からの要請等に応じて、海外において展覧会等を行うことにより、日本の優れた文化財をもとにした歴史と伝統文化を紹介する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	来館者の満足度が極めて高かった一方で、来館者数が伸び悩んだ。海外展における現地での広報活動は、今後現地に合わせた戦略・体制の準備があらかじめ必要である。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1231A1

中項目	１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　③観覧環境の向上等　1)快適な観覧環境の提供　1/2

【年度計画】
（4館共通）
ア　平常展及び特別展における、題箋および解説等並びに音声ガイドについて、4言語（日・英・中・韓）にて情報提供を行い、来館者に対するサービスの向上を図る。
イ　館内の施設のバリアフリー化、ユニバーサルデザイン化を推進し、来館者等の利用に配慮した快適な観覧環境の提供を行う。
（東京国立博物館）
ア　多言語による案内及び誘導サイン等を順次整備する。また、本館改修に向けてサイン計画を策定する。
イ　より快適な観覧環境を構築するため、展示照明を順次整備する。

担当部課	総務部総務課	事業責任者	課長　竹之内勝典
	総務部環境整備課		課長　城山美香
	学芸企画部企画課		特別展室長　丸山士郎
	学芸企画部企画課		デザイン室長　矢野賀一
	学芸企画部企画課		国際交流室長　楊鋭
	列品管理課		課長　救仁郷秀明

【実績・成果】
（4館共通）
ア　特別展及び平常展において、外国語のパネルを増設し、外国人へのサービス向上を図った。また、特別展での音声ガイド貸し出しを引き続き行った。
イ　館内施設の和式便器を洋式便器(温水洗浄便座付)に更新し、ユニバーサルデザイン化を推進した。
（東京国立博物館）
ア
・券売機のインターフェイス及び総合文化展音声ガイド並びに特別展示室入口の観覧注意サインの多言語化を行った。
・平成館へのアプローチ部分に該当を増設し、照明設備を整備した。
イ
・正門から平成館への動線上に外灯を増設し、夜間開館に適した環境整備を実施した。
・正門プラザ内に設置していたインフォメーションカウンターを来館者がまず目に付く正門正面に移動し、来館者が利用しやすいようお客様サービスの向上を図った。
・本館13室甲冑展示ケースを刷新し最新の高演色LED照明器具を導入した。
○老朽化が進んだ休憩用の屋外椅子とテーブルを更新した。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
音声ガイド貸出台数	200,637台	―	―		261,241	223,331	177,522	282,187

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 夜間開館の拡充に合わせて敷地内の照度を上げるとともに、来館者サービスの要ともいえるインフォメーションカウンターを正門プラザ内から正門正面に移動し、サインを大きく出すことで、より来館者がアプローチしやすい形とした。

【中期計画記載事項】
博物館内の施設の多言語化、バリアフリー化、ユニバーサルデザイン化並びに各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人、乳幼児連れの来館者等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 国内外の博物館・美術館の多言語化、バリアフリー化、ユニバーサルデザイン化等の取り組みを調査するとともに、来館者のアンケート調査を活用し、高齢者、障がい者、外国人、乳幼児連れの来館者等の利用に配慮したきめ細やかな取り組みを実行している。特に日本史や日本文化の知識が少ない外国人等の展示理解・補助を目的として、時代背景や用途等を記した解説パネルを各展示室に増設した。（３月予定）

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1231A2

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　③観覧環境の向上等　1)快適な観覧環境の提供　2/2

【年度計画】
（東京国立博物館）
ウ　総合文化展におけるスマートフォンアプリを用いたガイド「トーハクなび」(日本語版・英語版)の公開を引き続き実施する。中国語版、韓国語版については、音声ガイドを充実させ、「トーハクなび」の端末とともに貸出しサービスを継続する。また、4 言語による新システムの開発に着手する。
エ　講座・講演会の会場へのヒアリンググループの設置・管理、スマートフォンアプリを用いた音声認識サービスの運用、ユニバーサルデザインの触知図による対応の継続等、障がい者のための環境整備を充実させる。
オ　「総合案内パンフレット」(7 言語（8 種）：日、英、中(簡体字・繁体字)、韓、仏、独、西）を制作・配布する。
カ　本館 2 階「日本美術の流れ」の展示を外国人に理解してもらうために、より基礎的な解説を盛り込んだ、3 言語（英、中、韓）のパンフレットを継続して制作・配布する。
キ　育児中の来館者が快適に観覧できるよう託児サービスを提供する。

担当部課	総務部総務課 学芸企画部博物館教育課 学芸企画部広報室	事業責任者	課長　竹之内勝典 教育普及室長　藤田千織 室長　鬼頭智美

【実績・成果】
（東京国立博物館）
ウ　アプリ「トーハクなび」を継続して提供した。また、「トーハクなび」のログ解析を継続し、利用者の使用動向の調査・研究を行った。さらに、来館者への貸出サービスとして、日本語・英語は「トーハクなび」の iPod 端末を、中国語・韓国語はアプリのコンテンツの一部を翻訳し、インストールした音声ガイド端末の貸出を行った。音声ガイドについては、一点作品解説提供の範囲を東洋館、法隆寺宝物館へも拡大した。
エ　ユニバーサルデザインの触知図の設置、ギャラリートーク、講演会会場へのヒアリングループの設置や音声認識ソフトによるコミュニケーション支援・会話の見える化アプリ（UD トーク）の導入など、障がい者のための環境整備を実施した。
エ　点字を併記した総合案内パンフレットの印刷と無料配布を継続した。
カ　本館 2 階「日本美術の流れ」の 3 言語（英、中、韓）のパンフレットを継続して制作・配布した。
キ　8月5日にキッズデーを開催し、子育て世代の来館促進と、博物館体験の充実を図った。

【補足事項】
（東京国立博物館）
ウ　各アプリの 30 年度のダウンロード件数および貸出件数は以下の通りである。
・Android 版「トーハクなび」2,847 件（累計 19,403 件、24 年 4 月 18 日公開）
・iOS 版「トーハクなび」6,993 件（累計 44,027 件、25 年 9 月 26 日公開）
・iOSアプリ「法隆寺宝物館30分ナビ」25件（累計28,116件、23年1月20日公開）
※「法隆寺宝物館30分ナビ」は公開を終了してはいないが、iOS9以降に対応していないため、最新の端末で新規にDL、使用することはできない
・貸出件数　34,691件（累計54,161件）（日英中韓の総計）

アプリ端末・音声ガイド貸出サービス窓口正門プラザ

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 公開中のアプリ「トーハクなび」は9,840件のダウンロード実績をあげた。貸出サービスにおいては、アプリ端末および音声ガイド端末合わせて年間34,691件貸出した。音声ガイドの作品解説提供範囲も拡大している。ほかに障がい者のための環境整備、7言語の「総合案内パンフレット」の制作・配布、3言語の「日本美術の流れ」のパンフレット制作・配布、託児サービスの提供等、年度計画は順調に達成されている。一方で、貸出サービスでのメディアや内容が日英と中韓で異なる点など、来館者サービスの面で不十分な点が残されている。

【中期計画記載事項】
博物館内の施設の多言語化、バリアフリー化、ユニバーサルデザイン化並びに各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人、乳幼児連れの来館者等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 パンフレットの制作・配布、ガイドアプリの公開・貸出による多言語化、聴覚障がい者向けの設備の充実、託児サービスやキッズデーによる子ども連れの来館者への配慮など、一定の成果はあげている。引き続き幅広い来館者の利用に配慮した快適な観覧環境の提供のための施策を推進したい。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1231B

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（2）展覧事業　③観覧環境の向上等　1)快適な観覧環境の提供

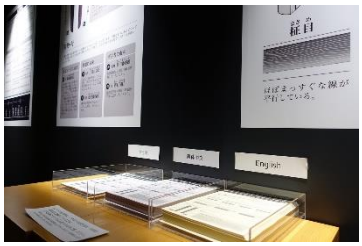
【年度計画】
（４館共通）
ア　平常展及び特別展における、題箋および解説等並びに音声ガイドについて、4言語（日・英・中・韓）にて情報提供を行い、来館者に対するサービスの向上を図る。
イ　館内の施設のバリアフリー化、ユニバーサルデザイン化を推進し、来館者等の利用に配慮した快適な観覧環境の提供を行う。
（京都国立博物館）
ア　館内案内リーフレット（7 言語(8 種)：日、英、中、韓、仏、独、西）を継続して配布する。
イ　デジタルサイネージやSNSを活用し、効果的な情報発信を図る。

担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長　數馬厚人 企画室長　山川暁

【実績・成果】
（４館共通）
ア　平常展及び特別展において、題箋及び解説等並びに音声ガイドを用いて情報提供を行った。継続して4言語（日・英・中・韓）に対応した。
（京都国立博物館）
ア　30年3月に納品された中国語(繁体字)、ドイツ語が追加された館内案内リーフレットを積極的に配布した。
イ　SNSを活用して、災害時の臨時閉館情報等を効果的に発信した。

【補足事項】
（京都国立博物館）
ア
・京のかたな展では英語・中国語・韓国語でイラストを多用した鑑賞ガイドを作成した。
　外国人に敬遠されがちな刀剣鑑賞の一助とし、日本文化の普及に貢献した。
イ
・特別展開催時にTwitterを使用して混雑状況を発信した。
・災害を原因とする臨時閉館の際は、4言語（日・英・中・韓）で情報を発信した。
・デジタルサイネージを用い、関心のある展示室にいつでも赴けるよう案内した。
・名品展（常設展）閉室案内サインについて多言語化を行った。
音声ガイド利用台数　計104,463台
・特別展覧会「池大雅」(4言語：日、英、中、韓)　6,498台
・特別展覧会「京のかたな」(4言語：日、英、中、韓) 84,889台
・名品ギャラリー(4言語：日、英、中、韓)　13,076台

京のかたな展音声ガイド



京のかたな展鑑賞ガイド

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
音声ガイド貸出台数	104,463台	－	－		76,671	109,167	36,584	128,728

【年度計画に対する総合評価】 評定：　A	【判定根拠、課題と対応】 30年度は題箋及び解説等の4言語対応に関して、視認性を高め、内容を充実させることができた。特別展の音声ガイドについては人気声優を起用した特別版を制作し利用者の増加と満足度の向上を図った。名品ギャラリー（常設展）閉室案内サインについて多言語化を行うことで、ユニバーサルデザイン化を推進した。

【中期計画記載事項】
博物館内の施設の多言語化、バリアフリー化、ユニバーサルデザイン化並びに各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人、乳幼児連れの来館者等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 中期計画3年目に当たる30年度は、各種表示の多言語化を重点的に行い、外国人来館者に対する観覧環境を大きく向上させた。これを基礎とし、31年度は幅広い層に満足してもらえる環境の整備に努めたい。名品ギャラリー（常設展）閉室案内サインについて多言語化を行うことで、外国人の利用配慮した観覧環境の提供を行った。

【書式A】　施設名　奈良国立博物館　処理番号　1231C

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　③観覧環境の向上等　1)快適な観覧環境の提供

【年度計画】
（４館共通）
ア　平常展及び特別展における、題箋および解説等並びに音声ガイドについて、4言語（日・英・中・韓）にて情報提供を行い、来館者に対するサービスの向上を図る。
イ　館内の施設のバリアフリー化、ユニバーサルデザイン化を推進し、来館者等の利用に配慮した快適な観覧環境の提供を行う。
（奈良国立博物館）
ア　快適な観覧環境を提供するための計画的な整備を行う。
イ　誘導サイン等の一層の整備を図り、より快適な観覧環境を確保する。
ウ　正倉院展の際に託児室を設置するとともに、混雑状況・待ち時間の速報を行う。
エ　館内案内リーフレット（7言語：日、英、中、韓、仏、独、西）を継続して制作する。
オ　多言語による案内について充実を図る。

担当部課	総務課	事業責任者	課長　臣守常勝

【実績・成果】
（４館共通）
ア　名品展（平常展）「珠玉の仏たち」（なら仏像館）においては、解説パネル、題箋のうち主要作品3割を解説文まで4言語（日・英・中・韓）化した。特別展でも主要作品約20点については、解説文まで4言語とした。名品展（平常展）「珠玉の仏たち」、特別展では、4言語の音声ガイドを提供した。題箋の作品名、技法、時代等の情報については、名品展、特別展ともに全て4言語を提供した。
イ　館外の誘導サイン等の見直しを行い、より快適な環境を提供するように努めた。
（奈良国立博物館）
ア　展示室の適正な温湿度管理のため、なら仏像館のボイラー設備の一部更新を行った。
イ　誘導サインの多言語化整備を行い、観覧環境の改善並びに外国人観覧者への対応の充実を図った。
ウ　正倉院展の会期中に無料託児室を開設し、保育士2人が常駐して1歳児から未就学児までの預かりを実施した。また、案内看板、ウェブサイト、ハローダイヤルを通じて適宜周知を図った。
エ　館内案内リーフレット（7言語：日、英、中、韓、仏、独、西）を継続して制作し、中国語版にいたっては、簡体字版に加え、繁体字版も制作した。
オ　総合案内に外国語（英語、中国語）対応可能なスタッフを常時配置し、外国人来館者への応対の充実を図った。

【補足事項】
（４館共通）
ア　特別展「国宝 春日大社のすべて」「糸のみほとけ－国宝 綴織當麻曼荼羅と繡仏－」「第70回正倉院展」、名品展（平常展）「珠玉の仏たち」において、パネル、題箋（解説文は「正倉院展」以外は一部分のみ）、音声ガイドを全て4言語（日・英・中・韓）で提供した。
（奈良国立博物館）
ウ　正倉院展の会期中の無料託児室は関西圏をはじめ全国から託児数93人の利用があった。また、託児室内に授乳やオムツ替え用のスペースも設置し、32人の利用があった。
オ　中国人来館者が増える時期（8月・夏休み、2月・春節）に外国語スタッフ（中国語）を増員配置して対応した。

託児室（西新館）

総合案内

誘導サインの多言語化

【定量的評価】項目	年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
音声ガイド貸出台数	63,299台	－	－		55,466	49,546	42,210	63,751

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
無料の託児室設置については利用者から好評の意見が寄せられている。混雑が予想される展覧会においては、誘導サインの増設や待ち時間の速報を行うことで来館者への情報提供を図り、快適な観覧環境の維持に努めた。

【中期計画記載事項】
博物館内の施設の多言語化、バリアフリー化、ユニバーサルデザイン化並びに各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人、乳幼児連れの来館者等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
託児室を設けることで、幼児連れの来館者にも安心して正倉院展を観覧していただけた。保育士の確保が難しくなっている現状もあるが、引き続き託児サービスを提供できるように努力する。今後もより多くの方々に博物館を楽しんでいただけるように、快適な観覧環境の提供に努める。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1231D

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（2）展覧事業　③観覧環境の向上等　1)快適な観覧環境の提供

【年度計画】
（4館共通）
ア　平常展及び特別展における、題箋および解説等並びに音声ガイドについて、4言語（日・英・中・韓）にて情報提供を行い、来館者に対するサービスの向上を図る。
イ　館内の施設のバリアフリー化、ユニバーサルデザイン化を推進し、来館者等の利用に配慮した快適な観覧環境の提供を行う。
（九州国立博物館）
ア　快適な観覧環境を保持するため、サインや照明等の空間デザインを工夫し、満足度の高い展示の実現を目指す。
イ　展示室の年間カレンダーを見やすいものに更新し、分かり易い情報発信に努める。
ウ　館内案内リーフレット（7言語：日、英、中、韓、仏、独、西）を継続して制作する。
エ　新しい音声ガイドシステムならびに解説システムを導入する。

担当部課	学芸部企画課 展示課 総務課	事業責任者	課長　白井克也 課長　楠井隆志 課長　國谷勝伸

【実績・成果】
（4館共通）
ア　平常展において、開館以来、要望が強かった日本語版音声ガイドの提供を5月22日より開始した。来館者の選択肢が増え、好評を得た。特別展においては、継続して、4言語（日・英・中・韓）にて情報提供を行った。
イ　総合案内所での車イス及びベビーカーの貸出を実施し、案内等の多言語化表記等、館内施設のバリアフリー化、ユニバーサルデザイン化を推進した。
（九州国立博物館）
ア　平常展のテーマ解説パネルについて文面・デザインを再検討し、来館者の動線に配慮し、かつ視認性に優れたものに更新した。
イ　平常展特集展示の案内を展示室外の館内各所に設置し、認知度の向上と観覧者の増加に努めた。季刊情報誌「アジアージュ」においては、平常展を継続して取り上げ、広報に努めた。
ウ　館内案内リーフレットを継続して7言語（日・英・中・韓・仏・独・西）で制作し、配布した。
エ　新解説システム検討の参考とするため、Wi-Fiを利用する動画・音声ファイルの提供システムについて業者からヒアリングを行った。展示室内で使用するグループガイド機器の更新を行った。
○30年度よりスーパーハイビジョンシアターにおいて多言語視聴システム（英・中・韓）の運用を開始した。さらに、利用者の動向を考慮し、改良を行った。

【補足事項】
（4館共通）
ア
平常展音声ガイド貸出数
日本語：2,268台、英語：2,502台、中国語：4,299台、韓国語：4,661台

特別展音声ガイド貸出数
・王羲之と日本の書：2,365台
・至上の印象派展　ビュールレ・コレクション：28,580台
・オークラコレクション：7,303台
・京都・醍醐寺―真言密教の宇宙―：13,189台

○スーパーハイビジョンシアター多言語視聴機器貸出数
英語：1,972台、中国語：3,291台、韓国語：1,494台

展示室内での音声ガイド使用の様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
音声ガイド貸出台数	65,167台	－	－		67,665	70,955	98,845	52,425

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 平常展の日本語版音声ガイドの運用を開始し、スーパーハイビジョンシアターの多言語化を実施したことで、国内外の来館者に新たなサービスを提供できた。 平常展のパネル類の更新によって、より読みやすくわかりやすい解説を実現した。

【中期計画記載事項】
博物館内の施設の多言語化、バリアフリー化、ユニバーサルデザイン化並びに各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人、乳幼児連れの来館者等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画の達成に向けて順調に推移している。音声ガイドの導入により、国外のみならず国内からの来館者に対するサービスについても向上させることができた。31年度以降も引き続き、来館者サービスの向上と快適な観覧環境の提供に努めていく。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1232A

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　③観覧環境の向上等　2)来館者の満足度調査等の実施、サービスの改善等

【年度計画】
（４館共通）
ア　展覧事業等に関する満足度調査等に加え、観覧環境に関する来館者アンケート及び多言語表記に関する外国人アンケート等の各種調査を実施し、観覧環境やサービスの改善に努める。
イ　ミュージアムショップやレストランの利用者等の意見を把握し、関係者との協議のうえ、オリジナルグッズの開発や展覧会に応じた商品を提供するなど、サービス向上に努める。
ウ　年間を通じて、来館者の利便性や周辺行事等に合わせて、特別展も含めた夜間開館の拡充を実施する。
エ　夜間開館の拡充に合わせて、来館者の夜間開館に対するニーズを把握するために、夜間開館時にアンケート調査を実施する。
（東京国立博物館）
ア　特別展等に合わせて軽食販売を行う等、サービスの向上に努める。

担当部課	総務部総務課	事業責任者	課長　竹之内勝典

【実績・成果】
（４館共通）
ア　年間を通じて総合文化展アンケートは4言語（日・英・中・韓）及び特別展のアンケートは2言語（日・英）で実施し、外国人からの意見聴取に努めた。
イ　ミュージアムショップやレストランにおいては、アンケート等による利用者の意見把握に努め、運営業者との定例会を通じ問題点を共有し、サービス向上に努めた。
ウ　年間を通じ、金・土曜21時までの夜間開館を実施した。SNSでの発信、また上野駅地下鉄動線にて夜間開館実施のポスターを掲出するなど、周知を図った。
エ　夜間開館時にアンケート調査を実施し、夜間における来館者の意見や要望を把握した。アンケート内容を夜間におけるサービスの充実に繋げた。
（東京国立博物館）
ア　特別展毎に、平成館ラウンジにおいて軽食販売を行った。また、通年で敷地内にてキッチンカーおよび軽食販売を実施した。さらに、春と秋の庭園開放時にも軽食販売を実施し、サービス向上に努めた。
ア　特別展「顔真卿」では、中国からの来館者が多かったため、日・英のアンケートに加えて、中国語によるアンケートを実施した。

【補足事項】
公式キャラクター「トーハクくん・ユリノキちゃん」を使用したノベルティグッズとして、野外シネマやビアナイトに適したレジャーシートを制作した。また、若年層向けに、本館の外観を配した文房具（キーホルダー、マグネット、リングノート、クリアファイル、ボールペン、エコバック、トートバッグ）や公式キャラクターを使った卓上カレンダー、手に取りやすい食品のお土産として和三盆干菓子（見返り美人図、風神・雷神図屏風パッケージ）を開発した。

新商品の和三盆干菓子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
観覧環境に関する来館者アンケート満足度	71.3%	80%超	C		－	－	70.4	68.1
多言語表記に関する外国人アンケート満足度	72.7%	－	－		－	－	69.7	74.8

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	夜間開館時の利用率の向上を図るため、来館者ニーズの適切な把握に努める。来館者の意見を把握し、来館者のニーズに沿った開館時間となるよう調査分析を進める。

【中期計画記載事項】
来館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に実施する。これらの調査結果を踏まえ、事業、管理運営についての見直しや改善を行う。特に開館時間の延長、混雑時の対応、ミュージアムショップやレストランとサービスの改善等、来館者に配慮した運営を行い、観覧環境に関する来館者アンケートの上位評価が80%を超えることを目指す。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	複数の来館者アンケート調査の結果、専門家の批評やSNS等による意見を基に、定例会や日常的な事業の中でミュージアムショップやレストランと情報を共有し、恒常的なサービス向上に取り組んでいる。多言語化表記に関するアンケートについては、外国人向けのわかりやすい展示コーナー解説の新設や展示室解説の刷新に併せて、重要課題として実施を計画する。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1232B

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　③観覧環境の向上等　2)来館者の満足度調査等の実施、サービスの改善等

【年度計画】
（４館共通）
ア　展覧事業等に関する満足度調査等に加え、観覧環境に関する来館者アンケート及び多言語表記に関する外国人アンケート等の各種調査を実施し、観覧環境やサービスの改善に努める。
イ　ミュージアムショップやレストランの利用者等の意見を把握し、関係者との協議のうえ、オリジナルグッズの開発や展覧会に応じた商品を提供するなど、サービス向上に努める。
ウ　年間を通じて、来館者の利便性や周辺行事等に合わせて、特別展も含めた夜間開館の拡充を実施する。
エ　夜間開館の拡充に合わせて、来館者の夜間開館に対するニーズを把握するために、夜間開館時にアンケート調査を実施する。
（京都国立博物館・奈良国立博物館）
ア　特別展等に関し、専門家の展覧会評を求め、広報誌等に掲載する。

担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長　數馬厚人 企画室長　山川曉

【実績・成果】
（４館共通）
ア　日本語・英語に加えて、中国語・韓国語による来館者アンケートを実施し、幅広い意見の把握に努めた。
イ　オリジナルグッズを開発し、展覧会に応じた関連商品等を取り揃えた。また、レストランでは館限定のオリジナルメニューを提供した。
ウ　平常展及び特別展開催中の金曜日、土曜日に午後8時まで夜間開館を実施した。なお、7～9月は午後9時まで開館を延長した。
エ　夜間開館時に来館者アンケートを実施した。
（京都国立博物館）
ア　アンケートの意見等を受け、ショップ及びレストランに接客対応改善の連絡や新規企画の提案を行った。また、『博物館だより200号』に多摩美術大学教授　木下京子氏による特別展「池大雅」の展覧会評を掲載した。

【補足事項】
（４館共通）
イ
・当館公式キャラクター「トラりん」使用規則を制定し、広く利用に供した。
新たに特別展コラボグッズや書籍、菓子等に使用され、キャラクターを活用した情報発信に繋がった。
・レストランと協力し、「トラりん」をモチーフとした飲料の提供等を行った。
エ　屋外の看板や沿線の鉄道に掲出する電照看板に夜間の風景を使用し、夜間開館の浸透を図った。
（京都国立博物館）
ア　京のかたな展期間中、庭園で飲料提供の要望に応えるため、レストランと協議し、喫茶ブースを設置した。

京阪電車京橋駅（大阪市）に掲出

京のかたな展コラボグッズ

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
観覧環境に関する来館者アンケート満足度	73.1%	80%超	C		－	－	40.2	63.4
多言語表記に関する外国人アンケート満足度	82.9%	－	－		－	－	69.3	73.5

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 観覧環境に関するアンケート満足度は目標値をやや下回ったが、28年度、29年度と次第に向上している。文化財保護のための空調・照明管理に関する情報が次第に来館者に浸透してきたことによると考えられる。 多言語表記に関する外国人アンケートの満足度は、実施内容に比例するように大幅に上昇した。

【中期計画記載事項】
来館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に実施する。これらの調査結果を踏まえ、事業、管理運営についての見直しや改善を行う。特に開館時間の延長、混雑時の対応、ミュージアムショップやレストランのサービスの改善等、来館者に配慮した運営を行い、観覧環境に関する来館者アンケートの上位評価が80%を超えることを目指す。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画3年目として、多言語表記を充実させる等の観覧環境の改善を進めることができた。満足度は徐々に向上しており、目標を達成できるように取り組んでいく。また、30年度は既存業者契約満了により、レストラン及びショップの運営業者が更新されることから、引き続き連携を密にしてサービスの改善に努めたい。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1232C

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（２）展覧事業　③観覧環境の向上等　2)来館者の満足度調査等の実施、サービスの改善等

【年度計画】
（４館共通）
ア　展覧事業等に関する満足度調査等に加え、観覧環境に関する来館者アンケート及び多言語表記に関する外国人アンケート等の各種調査を実施し、観覧環境やサービスの改善に努める。
イ　ミュージアムショップやレストランの利用者等の意見を把握し、関係者との協議のうえ、オリジナルグッズの開発や展覧会に応じた商品を提供するなど、サービス向上に努める。
ウ　年間を通じて、来館者の利便性や周辺行事等に合わせて、特別展も含めた夜間開館の拡充を実施する。
エ　夜間開館の拡充に合わせて、来館者の夜間開館に対するニーズを把握するために、夜間開館時にアンケート調査を実施する。
（京都国立博物館・奈良国立博物館）
ア　特別展等に関し、専門家の展覧会評を求め、広報誌等に掲載する。
（奈良国立博物館）
ア　アンケート等の意見を参考にレストランメニューの改善や工夫に努める。
イ　ミュージアムショップにおいて展覧会関連グッズの開発や仏教美術に関する図書の充実を図る。

担当部課	総務課	事業責任者	課長　臣守常勝

【実績・成果】
（４館共通）
ア　年間通じて記述式のアンケートを実施するとともに、対面によるアンケートを複数回実施した。外国人を含む来館者から寄せられた展示・観覧環境・多言語表記等に関する意見は館内で共有し精査のうえ改善に努めた。
イ　アンケート等で寄せられるミュージアムショップやレストランの利用者等の意見をふまえ、関係者と協議のうえ、新たなオリジナルグッズの開発や展覧会に応じた商品を提供するなど、サービス向上に努めた。
ウ　金曜日、土曜日をはじめ、周辺地域のイベント等を考慮して、夜間開館を実施した。
エ　夜間開館に対する意見を収集するため、夜間の開館時もアンケート調査を実施した。
（京都国立博物館・奈良国立博物館）
ア　白鶴美術館顧問 山中理氏に「『糸のみほとけ展』の展示評」を寄稿いただいた。展示について高評価をいただき、『奈良国立博物館だより』107 号（30 年 10 月発行）に掲載した。
（奈良国立博物館）
ア　アンケート等の意見を参考にレストランメニューの改善や工夫に努め、また、敷地内の移動販売車数を１台増やし、観覧者へのサービス及び館内への誘引を図った。
イ　ミュージアムショップにおいて展覧会関連グッズの開発や仏教美術に関する図書の充実を図った。

【補足事項】
（奈良国立博物館）
ア　特別展にちなんだメニューやお正月には干支にちなんだメニュー（しし汁）を展開した。
イ　当館の建物をデザインした手ぬぐい等のオリジナルグッズや、30年度の正倉院展で展示される宝物等をモチーフにしたグッズ等をミュージアムショップで販売した。

特別展「糸のみほとけ」
蓮麺とはす茶のセット料理

当館及び正倉院展
オリジナルグッズ

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
観覧環境に関する来館者アンケート満足度	75.8%	80%超	C		－	－	68.0	70.5
多言語表記に関する外国人アンケート満足度	79.8%	－	－		－	－	67.7	69.7

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
観覧環境は、29年度に引き続き満足度が上昇する結果となったが、依然として目標値を下回っている。実際の回答内容では、低評価ではなく、普通という評価が多い。また、ミュージアムショップやレストランを利用していないというコメントも多いため、館内外でわかりやすい案内誘導を心がけて利用者の増加にも努めたい。多言語表記についても満足度が向上したため、引き続き多言語表記の充実に向けて努力する。

【中期計画記載事項】
来館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に実施する。これらの調査結果を踏まえ、事業、管理運営についての見直しや改善を行う。特に開館時間の延長、混雑時の対応、ミュージアムショップやレストランのサービスの改善等、来館者に配慮した運営を行い、観覧環境に関する来館者アンケートの上位評価が80%を超えることを目指す。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
来館者対象のアンケートは通年の設置式に加え、特別展及び特別陳列期間中に複数回、対面回収によるアンケートを実施した。これにより、回収率が上がり、広く来館者の意見を集めることが出来た。アンケートの集計結果は、館内で共有し適宜対応をとるとともに、ミュージアムショップやレストランに関係する内容についても回覧し館全体で共有、改善に取り組んだ。観覧環境に関する満足度は依然として目標に達していないため、31年度以降も引き続き課題として改善に努める。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1232D

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（2）展覧事業　③観覧環境の向上等　2)来館者の満足度調査等の実施、サービスの改善等

【年度計画】
（4館共通）
ア　展覧事業等に関する満足度調査等に加え、観覧環境に関する来館者アンケート及び多言語表記に関する外国人アンケート等の各種調査を実施し、観覧環境やサービスの改善に努める。
イ　ミュージアムショップやレストランの利用者等の意見を把握し、関係者との協議のうえ、オリジナルグッズの開発や展覧会に応じた商品を提供するなど、サービス向上に努める。
ウ　年間を通じて、来館者の利便性や周辺行事等に合わせて、特別展も含めた夜間開館の拡充を実施する。
エ　夜間開館の拡充に合わせて、来館者の夜間開館に対するニーズを把握するために、夜間開館時にアンケート調査を実施する。
（九州国立博物館）
ア　レストラン利用者にアンケート調査を行い、サービス向上に努める。
イ　アンテナショップ「九州国立博物館ミュージアムショップ参道」での情報発信、オリジナルグッズの提供に努める。

担当部課	学芸部企画課 展示課 広報課 総務課	事業責任者	課長　白井克也 課長　楠井隆志 課長　田中正一 課長　國谷勝伸

【実績・成果】
（4館共通）
ア　展覧事業、観覧環境等に関する来館者アンケート調査を、中国語と韓国語を新たに作成して4言語（日・英・中・韓）で実施し、観覧環境やサービスの改善に努めた。
イ　ミュージアムショップにおいて、オリジナルグッズの開発を行ったほか、特別展、特集展示に合わせた期間限定商品の導入に努めた。
ウ　平常展・特別展ともに、金曜日、土曜日は午後8時まで夜間開館を実施した。その他、太宰府天満宮のイベントにあわせ、臨時の夜間開館を実施した。
エ　文化交流展示室内で実施する夜間開館イベント、「夜の博物館たんけん隊」や「夜のミュージアムトーク」、「スケッチしナイト」等、特に土曜日の夜間に家族で楽しめる多彩なイベントを企画・実施し、高い満足度を得た。

（九州国立博物館）
ア　レストラン利用者からのメニューに対する要望などを把握し、サービス向上に努めた。
イ　アンテナショップ「九州国立博物館ミュージアムショップ参道」では、館内ショップでは取り扱わないオリジナル商品を販売するほか、特別展にあわせてバナーを店頭に掲出し、告知に努めた。

スケッチしナイト実施の様子

【補足事項】
（九州国立博物館）
ア　レストランの評価については、「ふつう」を含めた肯定的な評価は全体の97.5%にのぼっている。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
観覧環境に関する来館者アンケート満足度	61.6%	80%超	D		－	－	77.2	63.7
多言語表記に関する外国人アンケート満足度	78.1%	－	－		－	－	78.8	84.6

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
夜間開館の実施日に、ミュージアムショップ及びカフェを夜間開館時間に合わせて営業することで、サービスの拡充に努めた。アンテナショップが情報発信基地として機能し、年度計画のとおり、サービスの向上に寄与することができた。

【中期計画記載事項】
来館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的に実施する。これらの調査結果を踏まえ、事業、管理運営についての見直しや改善を行う。特に開館時間の延長、混雑時の対応、ミュージアムショップやレストランのサービスの改善等、来館者に配慮した運営を行い、観覧環境に関する来館者アンケートの上位評価が80%を超えることを目指す。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
中期計画のとおり、事業、管理運営についての見直しを行った。観覧環境に関する来館者アンケート満足度については、館内スタッフの対応についての上位合計は72.2%であり、また、レストラン、ショップについては「ふつう」との回答が4～5割で肯定的な評価は95%以上となっており、一定の評価は得られている。さらに上位の評価を得るために、オリジナルグッズの開発についても、引き続きミュージアムショップと協議を進めたい。31年度以降は目標値を超える来館者満足度となるよう努めていきたい。

【書式A】　施設名 文化財活用センター　処理番号 1311H

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等　1)学習機会の提供

【年度計画】
（４館共通）
イ　文化財活用センターが中心となり、企業等との連携を図りつつ、先端技術を駆使し、文化財に親しむためのレプリカやVR等映像コンテンツの開発・提供に取り組む。

担当部課	本部文化財活用センター企画担当	事業責任者	課長　松嶋雅人

【実績・成果】
（４館共通）
イ
・企業等との連携や共同研究プロジェクトの締結を行い、高精細画像撮影等の先端技術を用いて、高精細複製屏風や映像コンテンツ等の開発を行った。
・開発したコンテンツを体験型展示に活用することで文化財への理解を深める機会を提供したほか、企業等への高精細複製品貸出事業や、教育機関を対象とした複製品による教育プログラム事業の開発を開始し、全国の人々が文化財に親しむ機会の創出に寄与した。

【補足事項】
（４館共通）
イ
・「国宝 洛中洛外図屏風（舟木本）」の高精細複製品及び「国宝 聖徳太子絵伝」の高精細画像を使用した映像による作品鑑賞コンテンツを制作したほか、「法隆寺献納宝物 伎楽面 迦楼羅・呉女」、「伎楽装束　裳・袍」並びに、着付け体験用の小袖・振袖（「見返美人図　菱川師宣筆」に描かれるきものと帯、「重要文化財　小袖 白綾地秋草模様　尾形光琳筆」、「重要文化財　振袖 白綾地衝立鷹模様」）の復元模造、「重要文化財　風神雷神図・夏秋草図屏風」「国宝　花下遊楽図屏風」「見返り美人図」の高精細複製品制作を開始した。

「高精細複製品によるあたらしい屏風体験『平家物語 一の谷・屋島合戦図屏風』」会場の様子

・展示「高精細複製品によるあたらしい屏風体験『平家物語　一の谷・屋島合戦図屏風』」（10月23日～12月2日）を開催し、来館者アンケートによる満足度調査では91.8%から「とてもよい/よい」の評価を得た。（来館者数カウントなし）
・企画展示「8Kで文化財　国宝『聖徳太子絵伝』」（11月27日～12月25日）を開催し、3,614人がコンテンツを体験した。満足度調査では90.8%から「とてもよい/よい」の評価を得た。
・展示「高精細複製品によるあたらしい屏風体験『国宝　松林図屏風』」（31年1月2日～2月3日）を開催し、95,177人が参加した。満足度調査では87.2%から「とてもよい/よい」の評価を得た。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
体験型プログラム等実施回数※	91回	－	－		－	－	－	－
体験型プログラム等参加者数	98,791人	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 企業等との連携により、文化財に親しむための新たな複製品の制作やコンテンツ開発を着実に実施しており、展示への活用においては来館者満足度が約90%であるなど、年度計画を十分に達成したといえる。

【中期計画記載事項】
講演会、ギャラリートーク、 スクールプログラム、ワークショップ及び職場体験等による学習機会を提供する。その際、対象やテーマに応じて学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿って順調に、文化財のレプリカや映像コンテンツを用いた学習機会の提供、学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を推進している。

※平成28年度より、一定期間通して実施した事業については、期間の日数＝回数としてカウントする。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1311A1

中項目	1．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等　1)学習機会の提供　1/3

【年度計画】
（4館共通）
ア　講演会等の開催回数については、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績の年度平均以上を目指す。
（東京国立博物館）※イ、ウは後述
ア　文化財について分かりやすく理解するための月例講演会・記念講演会・連続講座・ギャラリートーク・教育普及イベント等を継続して実施する。
エ　障がい者や外国人など多様な来館者を対象とした教育普及事業のあり方について検討する。

担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	教育普及室長　藤田千織 教育講座室長　丸山猶計 ボランティア室長　鈴木みどり

【実績・成果】
（4館共通）
（東京国立博物館）
ア　「博物館でお花見を」「博物館でアジアの旅」では、来館経験の少ない人が当館に対して抱きがちな「敷居が高い」というイメージを払拭すべく親しみやすくわかりやすい内容のガイドツアーを企画した。月例講演会やギャラリートークにおいても展示に即した内容のほかに、博物館アーカイブや資料館の活用など、所蔵作品以外のテーマも加え、文化財について多面的に理解を深められるような学習機会を提供した。
ア、エ 29年度より、外国人来館者をメインターゲットとした体験型プログラム「日本文化との出会い」を企画運営している。外部スタッフの協力を得て、運営を円滑にし、参加者の体験をより豊かにするためスタッフ研修も実施した。参加者の満足度は非常に高く、展示作品に対する関心を高めることにも寄与できた。
エ　聴覚障がい者がプログラムに参加できるよう、大講堂・東洋館ミュージアムシアター・レクチャースペースにヒアリングループを設置し運用を行った。また音声認識アプリ UD トークを、3月の「博物館でお花見を」関連事業から正式に運用した。

【補足事項】
（4館共通）ア及び（東京国立博物館）ア
・講演会23回　参加者数6,249人
　内訳　①月例講演会12回、参加者数2,822人　②記念講演会7回、参加者数2,189人
　③シンポジウム1回、参加者数250人　④テーマ別講演会3回、参加者数988人
　⑤その他講演会0回、参加者数0人
・列品解説（ギャラリートーク等）64回、参加者総数5,108人
　内訳　①ギャラリートーク39回、参加者総数4,076人
　②特別展関連ギャラリートーク1回、参加者総数218人
　③東京藝術大学大学院インターンシップによるギャラリートーク24回、参加者総数814人
・連続講座1回（2日）参加者総数728人
・公開講座5回、参加者総数121人
・その他展示に関連する事業66回、参加者総数14,142人
ア、エ
日本文化との出会い「書体験」　36回(36日間)、参加者数4,788人（うち外国人3,620人）
日本文化との出会い「きもの体験」8回(8日間)、参加者数267人（うち外国人222人）
日本文化との出会い「浮世絵摺り実演」4回(2日間)225人 英語通訳実施（うち外国人141人）

月例講演会

日本文化との出会い

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
講演会等の開催回数	93回	128回	D		127	146	160	125
講演会等の参加者数	12,206人	－	－		14,419	18,080	21,453	21,692

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 講演会、列品解説、講座等、順調に開催されている。これらは開催回数としては目標に満たなかったものの、ほかにも「その他展示に関連する事業」として各種ツアーや伝統芸能の上演、日本文化体験といった多様な教育普及イベントを積極的に実施した。これらは計66回実施し、14,142人の参加者より好評を得ていることから、総合的にはB評定と判断した。

【中期計画記載事項】
講演会、ギャラリートーク、 スクールプログラム、ワークショップ及び職場体験等による学習機会を提供する。その際、対象やテーマに応じて学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 「上野の山でサルめぐり」、「博物館でアジアの旅スペシャルツアー」、「保存と修理のツアー」「日本文化との出会い」など、テーマに応じて外部の社会教育関係団体や博物館等との連携協力を行い、さまざまな形式で講演会、ギャラリートーク、ワークショップ等を順調に開催した。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1311A2

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等　1)学習機会の提供　2/3

【年度計画】
（東京国立博物館）
イ　日本の歴史・文化及びアジア諸地域の歴史・文化の理解促進を図るための教育普及の先導的事業を実施する。本館地下、19 室のみどりのライオン、東洋館 2 室、6 室のオアシス等を教育普及スペースと位置づけ、さらに、大講堂、小講堂やミュージアムシアター等も活用し、対象と内容に応じた事業を展開する。
(ア)ファミリー向け教育普及的展示企画「親と子のギャラリー」の実施
・特集「親と子のギャラリー　サルのひろば」(4 月 17 日～5 月 20 日)
・特集「親と子のギャラリー　トーハク×びじゅチューン！なりきり日本美術館」(7 月 24 日～9 月 9 日)
(イ)総合文化展の活性化を目的とした総合イベント「博物館でお花見を」(3 月 13 日～4 月 8 日)、「博物館でアジアの旅」(9 月 4 日～9 月 30 日)、「博物館に初もうで」(31 年 1 月 2 日～1 月 27 日)において、講演会、ギャラリートーク、体験型プログラム等の教育普及事業を実施する。
(ウ)体験型プログラムの実施
・特集「親と子のギャラリー」ほか、総合文化展に関連した一般向け・ファミリー向け体験型プログラムを実施する。
・本館19室・本館地下みどりのライオン・東洋館オアシスで展開する教育普及スペースで、ワークショップやハンズオンアクティビティなどの体験型プログラムを実施する。

担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	教育普及室長　藤田千織 教育講座室長　丸山猶計 ボランティア室長　鈴木みどり

【実績・成果】
（東京国立博物館）
イ　総合文化展を中心とした展示や、作品に関連したプログラム等を通じ、来館者の鑑賞体験を深め、歴史・文化の理解促進や伝統文化への興味関心を高めることを目的とした教育普及事業を展開した。
(ア)特集「親と子のギャラリー　サルのひろば」では、サルをテーマにした文化財を展示するほか、映像など補助的な解説パネルを使用し、題箋に記載する名称や解説には平易な言い回しを取り入れた。また三館園をめぐるツアーを実施し、サルの文化史や生態に対する子どもたちの理解を促した。
特集「親と子のギャラリー　トーハク×びじゅチューン！なりきり日本美術館」では、描かれた人物や作者に「なりきる」ことをテーマとし、複製や映像、IT技術を活用した参加型展示を実施した。博物館における日本美術の新しい鑑賞方法を提案した。また、ワークシート、ハンズオンプログラムやイベントを通じ、来館者の体験と理解をさらに深めることを目指した。
(イ)講演会、ギャラリートーク、ガイドツアー及びぬりえ、衣装体験、ヨガなどの体験型プログラム、各国の伝統芸能公演などの文化イベントを実施し、総合文化展の活性化に寄与した。
(ウ)本館19室では伝統模様のスタンプを使った体験型プログラム、作品の工程見本の展示、IT技術を使って作品を知る体験コーナーを、東洋館オアシスではアジアの文化を知る体験コーナーを、平成館考古展示室ではレプリカを用いたハンズオンコーナーを継続運営した。本館地下、東洋館オアシスやシアターでは各種体験型プログラム、ギャラリートーク等を実施した。

【補足事項】
・親と子のギャラリー「トーハク×びじゅチューン！なりきり日本美術館」には103,320人の入場者があった。会場ではワークシート40,000部を配布。ワークショップ「なりきり日本美術館★なりきりガイド」（2回57人）を実施した。
・「博物館でお花見を」では「花見で一句」として俳句を募り727件の応募のうち一般の部6句、小学生以下の部2句が入選した。
・体験型プログラムとして、本館19室（171,976人）および東洋館でのハンズオン展示(27,496人)、ワークショップ(33回5,154人)、親と子のギャラリー(74回、103,320人※回数は2企画の合計、人数は「なりきり日本美術館」のみカウント)を実施した。
・夏休み期間の8月5日に総合文化展(本館、考古展示室)で、子どもとその保護者のためのイベント「キッズデー」を開催し、未就学児、小中生合計1,955人が参加した。

「親と子のギャラリー　なりきり日本美術館」会場の様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
体験型プログラム等実施回数※	702回	－	－		－	1,042	827	703
体験型プログラム等参加者数	309,901人	－	－		－	198,393	199,167	272,867

【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 体験型プログラムを702回実施(309,901人参加)し、年度計画を順調に達成している。加えて今年度夏休み時期の親と子のギャラリーは入場者が10万人を超え、メディアに多く取り上げられた。参加体験型展示に関する調査研究という点でも良い事例となった。

【中期計画記載事項】
講演会、ギャラリートーク、 スクールプログラム、ワークショップ及び職場体験等による学習機会を提供する。その際、対象やテーマに応じて学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿って順調に、外部団体との連携協力を行いながら講演会、ギャラリートーク、ワークショップ等の学習機会を提供している。これまでの経験を生かしてより充実した事業を目指したい。

※平成28年度より、一定期間通して実施した事業については、期間の日数＝回数としてカウントする。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1311A3

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等　1)学習機会の提供　3/3

【年度計画】
（東京国立博物館）
ウ　学校との連携事業を推進する。
・スクールプログラム（鑑賞支援・体験型プログラム等）を継続して実施する（小・中・高校生対象）。
・職場体験の受け入れを継続して行う（中・高校生対象）。
・教員を対象とした研修等を継続して実施する。
エ　障がい者や外国人等多様な来館者を対象とした教育普及事業のあり方について検討する。

担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	教育普及室長　藤田千織 ボランティア室長　鈴木みどり 教育講座室長　丸山猶計

【実績・成果】
ウ
・30 年度も学校との連携事業を計画通り実施した。スクールプログラムは学年、人数、目的に応じた 15 のコースを設け、パンフレット、ウェブサイト、教員研修の場で告知し、ウェブサイト、ファックスで申込を受け付けた。児童・生徒の鑑賞体験の充実に寄与し、日本・アジアの伝統文化への関心を高め、理解を促した。
・職場体験においては、通信制高校や特別支援学級などの参加もあり、参加する学校の幅も広がった。
エ
・外国人来館者をメインターゲットとした体験型プログラム「日本文化体験」を継続的に企画運営した。外部スタッフの協力を得て、運営を円滑にし、参加者の体験をより豊かにするためスタッフ研修も実施した。参加者の満足度は非常に高く、展示作品に関する関心を高めることにも寄与できた。
・聴覚障がい者がプログラムに参加できるよう、レクチャースペースでヒアリングループの運用を行った。また音声認識アプリ UD トークの導入を行った。

【補足事項】
ウ　スクールプログラム　228校、8,895人（小学校30校904人、中学校128校4,778人、高校68校3,191人、盲学校2校22人）
教員研修　5回、465人
職場体験は中学校11校、高校9校、63人、延べ日数50日間受け入れをした。
エ　日本文化体験「書体験」　36回(36日間)、参加者数4,788人（うち外国人3,620人）
日本文化体験「きもの体験」8 回(8日間)、参加者数267人（うち外国人222人）
日本文化体験「浮世絵摺り実演」4回(2日間)225人 英語通訳実施（うち外国人141人）

スクールプログラム実施風景

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
スクールプログラム実施回数	228回	－	－		－	211	227	273
スクールプログラム参加者数	8,895人	－	－		－	8,261	7,910	10,056
職場体験実施回数	20回	－	－		－	19	19	20
職場体験参加者数	63人	－	－		－	60	63	63
教員を対象とした研修実施回数	5回	－	－		－	6	6	6
教員を対象とした研修参加者数	465人	－	－		－	585	235	513
印刷物	177,000部	－	－		－	42,000	30,000	37,000

【年度計画に対する総合評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
228回のスクールプログラム、20回の職場体験の受入れ、5回の教員を対象とした研修など、学校との連携事業を幅広くかつ順調に実施し、年度計画を達成している。教員研修のうち一回は東京都教職員研修センターとの共同開催で社会科の教員を対象にしたものを開始するなど、教科の幅を広げることに成功している。

【中期計画記載事項】
講演会、ギャラリートーク、 スクールプログラム、ワークショップ及び職場体験等による学習機会を提供する。その際、対象やテーマに応じて学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を行う。

【中期計画に対する評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
学校や東京都等との連携協力の下、スクールプログラム、職場体験、教員研修などの学習機会の提供を行い、中期計画に順調に取り組んでいる。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1311B1

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等　1)学習機会の提供　1/2

【年度計画】
（４館共通）
ア　講演会等の開催回数については、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績の年度平均以上を目指す。
（京都国立博物館）
ア　歴史や文化についてわかりやすく理解してもらうため、講演会・土曜講座・夏期講座等を継続して実施する。

担当部課	学芸部	事業責任者	教育室長　永島明子

【実績・成果】
（４館共通）
ア　京都国立博物館においては、37回の講演会等を開催した。

記念講演会
（館長佐々木丞平）

（京都国立博物館）
ア
・「記念講演会」（4月7日、講師：館長　佐々木丞平）ほか、（12回・1,884人）を実施した。
・「土曜講座」（6月16日、講師：美術室長（兼列品管理室長）羽田聡）ほか、（19回・1,969人）を実施した。
・「夏期講座（名品を旅するⅢ）」（7月27日～28日、講師：サントリー美術館　学芸副部長　土田ルリ子　ほか5名）（1回・198人）を実施した。
・「社会科教員のための向上講座」（8月28日、講師：研究員　水谷亜希）（1回・39人）を実施した。
・「ギャラリートーク「特集展示＜謎とき美術！最初の一歩＞」」（8月19日、講師：研究員　水谷亜希）（2回・92人）を実施した。
・研究発表と座談会「仏像とその工房をめぐる諸問題」（9月2日、連携協力室長　淺湫毅ほか）（1回・76名）を開催した。
・国際特別講演会・日本人研究者との座談会（31年1月26日、一郷韓国美術史研究院長　姜友邦ほか）（1回・99人）を実施した。

【補足事項】
（京都国立博物館）
ア
・特別展期間中の講座を「記念講演会」として12回実施した。
・土曜講座は大正時代から連綿と続く歴史ある普及活動で、参加者から高い評価を得ている。
・ギャラリートーク「特集展示＜謎とき美術！最初の一歩＞」は子どもを対象として研究員との対話形式で実施した。
○その他、本実績には含めていないが、キャンパスメンバーズ限定講演会を実施した。（処理番号1313B参照）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
講演会等の開催回数	37回	26回	A		36	39	45	32
講演会等の参加者数	4,357人	－	－		4,596	4,845	5,132	4,014

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：A	土曜講座は、館内外の専門家（15人）を講師として、目標値以上の事業を実施できた。 20代から30代の各種講座への参加者はこれまで2割程度であったのに対し、特別展「京のかたな」期間中の記念講演会では約6割を占めた。これまであまり多くなかった若い年代の参加者を増やすことができたのは、大きな成果だと言える。

【中期計画記載事項】
講演会、ギャラリートーク、 スクールプログラム、ワークショップ及び職場体験等による学習機会を提供する。その際、対象やテーマに応じて学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を行う。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	10年前より継続してきた「社会科教員のための向上講座」はリピーターも多く、教員に定着しており、30年度は特集展示「謎とき美術！最初の一歩」の見学を通して、博物館の利用方法や作品の鑑賞に関する教員の積極的な議論が見られた。また、ギャラリートークは想定の2倍以上の参加者があり、概ね好評であった。31年度以降も継続してこれらの事業を実施し、内容の充実に努める。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1311B2

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等　1)学習機会の提供　2/2

【年度計画】
（京都国立博物館）
イ　京文化を核としながら、日本及び東洋の歴史・文化に対する理解促進を図るために教育普及事業を実施する。
・展覧会鑑賞ガイド・ワークシート（小中学生向けを含む）などを発行する。
・京博ナビゲーターによるミニワークショップ等、文化財への一般の関心を高める体験型イベントを実施する。
・分かりやすい展示作品解説シート「博物館ディクショナリー」を発行し配信する。
・ハンズオン教材を設置し、京博ナビゲーターが常駐する「ミュージアム・カート」を展開する。
ウ　教育諸機関等との連携事業を推進する。
・京都市内の小中学生を対象とする訪問授業「文化財に親しむ授業」を実施する。
・京都市内４美術館・博物館（京都国立博物館、京都国立近代美術館、京都文化博物館、京都市美術館）で組織する「京都市内　4館連携協力協議会」での連携協力を図る。
・教員のための講座を開講する。
・他の博物館や教育諸機関と協力した教育普及事業を実施する。

担当部課	学芸部	事業責任者	教育室長　永島明子

【実績・成果】
（京都国立博物館）
イ
・「さわって発見！ミュージアム・カート」（145日・概算28,710人参加）を実施した。
・特別展関連ワークショップ「指で描こう！指墨画にチャレンジ」（38日・5,427人）、「まぢかで見よう！はじめての刀」（49日・11,741人）を実施した。
・「博物館Dictionary」（8回・33,500部（増刷分1回・9,250部を含む））を発行した。
・特集展示「謎とき美術！最初の一歩」（38日・41,712人[注]）を実施した。関連シート「謎ときにチャレンジ」及び答え（1回・20,000部・4言語）を発行した。

「謎とき美術！最初の一歩」ギャラリートークの様子

ウ
・「文化財に親しむ授業」（7回・537人）、「おしゃべり鑑賞会」（3回・72人）を実施した。
・「長岡京市立神足小学校教員研修」（1回・20人）、「文化財を教室に！－複製を活用した事例紹介と交流会―」（1回・25人）、「社会科教員のための向上講座」（1回・39人）を実施した。
・スクールプログラム、来館学校団体等への対応（15回・120人）を行った。
・「ミュージアム・キッズ！全国フェアin京都2018」（こども☆ひかりプロジェクト主催）（2回・956人）に参加した。
・「第54回小中学生記者の文化財取材コンクール」（公益財団法人京都古文化保存協会主催）（1回・74人）に協力した。

【補足事項】
・ワークショップ「まぢかで見よう！はじめての刀」は安全面への配慮から整理券方式とし、1日132人と限定した。整理券のない来館者は京博ナビゲーターによる刀の紹介を見学できるようにした。整理券による参加は6,306人、見学のみ参加は5,435人であった。
・博物館Dictionaryのうち、29年度に配付した198号（『仏像は何からつくられているの？』）は好評のため9,250部を増刷した。
・第54回小中学生記者の文化財取材コンクールでは、京都市内の小中学生による「博物館のしごと」をテーマとした取材を受け入れ、インタビュー等に協力した。また、京都国立博物館賞を小中学生3人に授与した。

【定量的評価】項目	年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
体験型プログラム等実施回数※	482回	－	－		－	268	553	467
体験型プログラム等参加者数	47,198人	－	－		－	16,200	21,333	282,014
スクールプログラム実施回数	15回	－	－		－	10	7	9
スクールプログラム参加者数	120人	－	－	経年変化	－	378	344	93
文化財ソムリエによる訪問授業実施回数	7回	－	－		－	7	7	7
文化財ソムリエによる訪問授業参加者数	537人	－	－		－	658	931	626
教員を対象とした研修実施回数	3回	－	－		－	12	3	3
教員を対象とした研修参加者数	84人	－	－		－	1,080	106	92
印刷物	53,500部	－	－		－	70,000	41,300	116,000

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：A	特別展関連ワークショップでは、看板類や解説プリントを4言語で作成することで、29年度実施のワークショップに比べ、海外からの来館者の参加を約1.5倍に増やすことができた。また、年度計画にはない教育普及を目的とした特集展示「謎とき美術！最初の一歩」を実施し、研究員によるギャラリートークでは、92名の参加者があった。4言語の謎ときシートを用いて作品を鑑賞することで、子どもだけではなく、普段日本の古美術に馴染みのない方や海外からの来館者が古美術を楽しむきっかけに繋がった。

【中期計画記載事項】
講演会、ギャラリートーク、スクールプログラム、ワークショップ及び職場体験等による学習機会を提供する。その際、対象やテーマに応じて学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を行う。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	文化財ソムリエによる「文化財に親しむ授業」は、事業開始から9年目を迎え、ノウハウが蓄積されたことで年々授業の質が向上している。また、京博ナビゲーターの活動は、第2期の活動が2年目を迎え、安定した活動を行うことができている。 課題としては、複製文化財の貸出事業において、年々希望が増加しており、従来の対応が難しくなってきている。31年度以降はより明確な方針を定めていく必要がある。

※平成28年度より、一定期間通して実施した事業については、期間の日数＝回数としてカウントする。
注）一部のプログラムでは当該期間の入館者数で参加者をカウントしているため、それについては年度実績の合計値には含めない。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1311C1

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等　1)学習機会の提供　1/2

【年度計画】
（４館共通）
ア　講演会等の開催回数については、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績の年度平均以上を目指す。
（奈良国立博物館）
ア　講座等の開催
・仏教美術等に関するサンデートークを定期的に実施する。
・特別展等に際してシンポジウム、フォーラム及び公開講座等を開催する。
・一般向け教育普及事業として夏季講座を開催する。
・特別陳列に因み、伝統的行事を体験する催しを実施する。
・文化財保存修理所の一般公開を行い、文化財保存の意義についての認知度向上に努める。
・展覧会において親子を対象とした講座やワークショップを実施する。

担当部課	学芸部	事業責任者	教育室長　谷口耕生

【実績・成果】
（４館共通）
ア　30年度は講演会等を27回実施した。
（奈良国立博物館）
ア　講座等の開催
・サンデートークは毎月第3日曜日に12回実施。計1,238人の参加があり、アンケート結果で平均満足度88%を得た。
・公開講座は3つの特別展及び3つの特別陳列の会期中に14回実施。計1,853人の参加があり、平均満足度88%を得た。「正倉院学術シンポジウム2018　正倉院宝物と新羅」を11月3日に実施。227人の参加があり、平均満足度96%を得た。
・夏季講座は「素材から探る仏像のひみつ」と題し、奈良県文化会館を会場に8月22日～24日の3日間実施。講師は8人、478人の参加があった。
・特別陳列「お水取り」では、東大寺の協力のもと、『お水取り「講話」と「粥」の会』を31年2月11日に実施し、36人の参加があった。
・特別陳列「覚盛上人770年御忌鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興」では、関連イベントとして親子ワークショップ「オリジナルうちわ作り」を実施し、計25人の参加があった。
・文化財保存修理所の特別公開を31年1月10日に3回実施し、計124人の参加があった。
・第70回正倉院展では、10月28日に「親子鑑賞会」を実施し、160人の参加があった。

【補足事項】

夏季講座「素材から探る仏像のひみつ」会場風景

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
講演会等の開催回数	27回	28回	C		27	28	26	26
講演会等の参加者数	3,569人	－	－		3,525	3,974	3,518	3,437

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
講演会等の開催回数が目標値を若干下まわっているが、ほぼ当初の予定通り各種の講座及び講演会を実施することができ、夏季講座・正倉院シンポジウムの募集に導入したインターネット予約システムが軌道に乗り、大きなトラブルも無く例年どおり多数の参加者数を得ることができた。さらに29年度同様アンケートにみる満足度も高かったことから左記の評定とした。

【中期計画記載事項】
講演会、ギャラリートーク、 スクールプログラム、ワークショップ及び職場体験等による学習機会を提供する。その際、対象やテーマに応じて学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を行う。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
特別展等に関連した公開講座、当館研究員の多彩なテーマによるサンデートーク、小学生等を対象としたワークショップ・親子講座を開催し、特に夏季講座・公開講座は高い満足度を達成でき、仏教美術のコアなファンから初心者の方まで各々に応じた学習機会を提供できた。また『お水取り「講話」と「粥」の会』では東大寺の協力により歴史・伝統文化に触れられる機会を提供することができ、中期計画は順調に進んでいる。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1311C2

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等　1)学習機会の提供　2/2

【年度計画】
（奈良国立博物館）
イ　小中学校との連携
・奈良県内の小中学校にメールマガジンを配信する。
・奈良市内の公私立小中学校に博物館だよりを送付する。
・世界遺産学習を小学校高学年を中心に実施する。
・中学生の職場体験学習を受け入れる。
ウ　奈良市教育委員会及び奈良教育大学と連携してＥＳＤ(持続発展教育)プログラムの開発を引き続き行う。
エ　地下回廊の学習端末機で名品のハイビジョン映像等を引き続き公開する。
オ　地下回廊で仏像模型及びパネルを用いて、文化財に関する情報を引き続き公開する。

担当部課	総務課	事業責任者	課長　臣守常勝

【実績・成果】
（奈良国立博物館）
イ
・奈良県内の小中学校にメールマガジンを配信した。
・奈良市内の公私立小中学校に博物館だよりを送付し、定期的な博物館情報の提供を行った。
・世界遺産学習事業を、奈良市内の公立小学校5年生（26校1,791人）に対して実施した。
・中学校の職場体験で1校3人(2年生)を受け入れた。
ウ
・奈良市教育委員会との連携事業による世界遺産学習の一環として、仏像館見学や仏像クイズを通じて地域の文化遺産について親子で学ぶＥＳＤ（持続発展教育）プログラム「親子で学ぼう奈良の仏像」を7月25日・26日に実施した。
・修理完成記念特別展「糸のみほとけ―国宝 綴織當麻曼荼羅と繡仏―」に関連した事業として、親子ワークショップ「織ってみよう！糸のみほとけ」を奈良教育大学との連携事業として7月29日に実施した。
エ　地下回廊のタッチパネル式学習端末機で、収蔵品の中から名品の画像を公開した。
オ　地下回廊で仏像模型とパネルを引き続き設置し、文化財に関する情報を公開した。

【補足事項】
オ　地下廻廊に設置したパネルは文章の多言語化に対応し、写真撮影も可能としており、外国人観光客の仏像理解を促進出来るよう配慮した。

仏像解説パネル

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
体験型プログラム等実施回数※	28回	－	－		－	23	21	26
体験型プログラム等参加者数	436人	－	－		－	380	384	399
スクールプログラム実施回数	13回	－	－	経	－	8	24	20
スクールプログラム参加者数	747人	－	－	年	－	390	1,701	1,001
職場体験実施回数	1回	－	－	変	－	4	3	3
職場体験参加者数	3人	－	－	化	－	9	7	6
世界遺産学習実施学校数	26校	－	－		－	37	25	32
世界遺産学習参加者数	1,791人	－	－		－	2,440	1,542	2,022
音声ガイド	1,221台	－	－		－	816	770	1,010

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
29年度に引き続き、奈良市教育委員会との連携事業であるＥＳＤプログラムや特別展に関連したワークショップ等を実施することにより、幅広い年代が楽しく学ぶことができる学習機会を提供し、地域の文化遺産や仏教美術等についての理解促進に寄与することができた。

【中期計画記載事項】
講演会、ギャラリートーク、 スクールプログラム、ワークショップ及び職場体験等による学習機会を提供する。その際、対象やテーマに応じて学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を行う。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
講演会、学校団体へのプログラム、並びに他機関と連携協力した各種ワークショップ等を実施し、様々な内容の学習プログラムを提供することができ、中期計画は順調に進んでいる。

※平成28年度より、一定期間通して実施した事業については、期間の日数＝回数としてカウントする。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1311D1

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等　1)学習機会の提供　1/3

【年度計画】
（４館共通）
ア　講演会等の開催回数については、各施設の工事等による影響を勘案し、前中期目標の期間の実績の年度平均以上を目指す。
（九州国立博物館）　※エ、オは後述
ア　特別展記念講演会を開催する。
イ　シンポジウムを開催する。
ウ　ミュージアムトークを継続的に実施する。
カ　文化交流展（平常展）に関連した教育普及事業を実施する。
・夜間開館時の教育普及活動を実施する。
・潜在的利用者獲得のための活動「きゅーはく女子考古部」を実施する。
キ　特別展に関連した教育普及事業を実施する。
ク　文化施設等へ講師を派遣する。

担当部課	学芸部企画課 交流課	事業責任者	課長　白井克也 課長　山野孝

【実績・成果】
（4館共通）ア　講演会を18回開催した。全国各地の高校生による歴史学研究の成果を対外的に発信する場として「全国高等学校歴史学フォーラム2018」を開催し、パネルセッション・ワークショップを実施するとともに、参加生徒相互の交流を促進した。
（九州国立博物館）ア　特別展記念講演会を2回開催した。
イ　大宰府史跡発掘50年記念・文化交流展「たたいて削って青銅器－東アジアの響銅－」関連シンポジウム「響銅でつながる大宰府と東アジア」等、シンポジウムを6回開催した。
ウ　展示への理解を深めることを目的として、ミュージアムトーク（展示解説）を日中と夜間に週変わりで行った。「夜のミュージアムトーク」では、ハンズオンの資料等を用い、様々な年齢層に親しみやすいものとしたことでファミリー層の参加が増加した。（実施回数：62回、参加人数：昼1,460人、夜715人）
カ・夜間開館イベントとして、毎月第1土曜日の18時より「夜のバックヤードツアー」を実施した。博物館の重要な機能である「守る」・「運ぶ」・「展示する」を伝えるため、クイズ等を取り入れながら探検形式で行った。（実施回数：10回、参加人数：690人）
・夜間開館時に展示作品をスケッチする「スケッチしナイト☆」を3回実施した。研究員による解説も行った。（実施回数：3回、参加人数：合計73人）
・弥生時代の米作りを演劇で紹介する「弥生人現る!!～101回目の米作り」を文化交流展示室内で実施した。
・文化交流展（平常展）に関連した教育普及事業として、潜在的利用者獲得のための活動「きゅーはく女子考古部」を実施した。
○弥生時代～平安時代までの衣装を着る体験ワークショップ「Back to the KODAI」を実施した。
○特集展示「全国高等学校考古名品展2018」にあわせ、なりきり考古学者体験ワークショップを2回実施した。
キ　特別展で、わかりやすい解説パネルや体験コーナー等を設置した。
ク　特別展開催時に、筑紫野市歴史博物館、アクロス福岡等に講師を派遣し、特別展に関する講演を行った。

【補足事項】
（九州国立博物館）
カ・文化交流展2テーマ「稲づくりから米づくり」の小テーマ「農耕社会の出現」で展示されている弥生時代の農具の使い方などを演劇で紹介。2部構成で、第1部は展示されている文化財の前で当館研究員扮するお米博士が縄文時代と弥生時代の稲作の違いや、農具について解説した。第2部では、縄文時代の稲作しか知らない主人公が弥生時代の米作りを成功させるストーリーの演劇。劇団員2人と当館研究員1人、計3人で演じた。2日間、6回（昼間4回、夜間2回公演（参加者：2日間計約400人）

演劇「弥生人現る!!」の一場面

・今年で4年目となるきゅーはく女子考古部は、募集定員20人に対し、61組66人の応募があった。毎月1回考古学に関する活動を実施。5月から8月までは九博主導の活動を実施、9月から1月は部員による自主企画として、古代アクセサリー作り、古代食作り、発掘体験などを行った。3月には活動成果の発表として一般の人を対象としたイベント「古代の宴へようこそ！」を実施した。また、30年に引き続き他自治体とのコラボ企画として「ひろかわ古墳まつり」（福岡県八女郡広川町）に参加し、ワークショップやファッションショー等を行った。さらに、活動を記録した冊子「女子的考古学のススメ」を作成し、「古代の宴へようこそ！」の参加者及び考古関係機関に配布した。（参加者：約300人）
○貫頭衣、古墳時代の衣装、平安初期の衣装を着るワークショップを5月3日、4日に実施した。年齢を問わず人気で、外国人の参加者も多数見られた。（参加者：約100人）
○ワークショップは平板測量を実施。（参加者：2日間計18人）
キ・「オークラコレクション」展、「京都　醍醐寺」展において教育普及プログラムを実施した。どちらもイラストを交えたわかりやすい解説パネルを設置した。「オークラコレクション」展では、「自在蟷螂置物」のレプリカを制作し、自在の動きをさわって体感するコーナーを設けた。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
講演会等の開催回数	80回	90回	C		82	87	77	84
講演会等の参加者数	4,491人	－	－		4,694	6,212	5,369	6,299

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 講演会等の開催回数については、特別展開催数の減少により目標値を達成できなかったが、例年どおり講演会、シンポジウム、ミュージアムトーク等を実施できた。文化交流展示室内では、展示解説及び職員参加の演劇を組合せての斬新な教育普及事業が実施できた。

【中期計画記載事項】
講演会、ギャラリートーク、 スクールプログラム、ワークショップ及び職場体験等による学習機会を提供する。その際、対象やテーマに応じて学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画のとおり、学習機会を提供できた。今後も、様々な展示テーマに応じた新たな教育普及の手法を開拓したい。31年度は移動博物館車両が導入されるため、アウトリーチ活動を充実させていく予定である。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1311D2

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等　1)学習機会の提供　2/3

【年度計画】
（九州国立博物館）
エ　博物館における体験型事業の充実を図る。
・教育普及ゾーンで活用する様々な教育キットを開発する。
・幅広い層に向け体験活動の促進を図るため、教育活動の場を提供する。
・アジア諸国の文化を理解する様々な体験学習プログラムを開発する。

担当部課	交流課 学芸部企画課	事業責任者	課長　山野孝 課長　白井克也

【実績・成果】
（九州国立博物館）
エ
・「なりきり考古学者（拓本）体験」「なりきり考古学者（実測図作成）体験」「なりきり学芸員体験」「ガムランワークショップ」「馬頭琴ワークショップ」など各種ワークショップを館内で実施したほか、「きゅーはくきゃらばん」と名付けたアウトリーチ活動を継続的かつ積極的に行い、子ども達を中心に幅広い層に向けて体験活動の機会を提供した。

なりきり考古学者体験

なりきり学芸員者体験

・体験型展示室「あじっぱ」では、アジア諸国の文化を紹介するとともに、アジア諸国の文化の類似性や相違性について理解を深める体験学習プログラムを行った。また体験資料であるBOXキットにおいては、「韓服を作ろう」「韓国のお面を作ってみよう」「ワヤンクリの乾拓」など新しいキットを開発・作成した。

【補足事項】
・アウトリーチ活動として「きゅーはくきゃらばん」を26回実施した。当館所有の体験型コンテンツを中心に、新規に開発したプログラムを提供した。福岡県立少年自然の家「玄海の家」や大野城市立心のふるさと館、鹿島市民図書館やゆめ佐賀大学佐賀校、京都市みやこめっせや横浜タカシマヤ、南相馬市体育館や熊本県立装飾古墳館などでワークショップを行った。

ディスプレイ展示

あじっぱ夏祭り

・7月29日（日）に実施した公開型ワークショップ「行こうよ！あじっぱ夏祭り」は、台風の影響で開催時間を1時間短縮したものの、632人が参加。「アジアの民族楽器にふれてみよう」「拓本体験しよう」「花文字を描こう」「世界のコマであそぼう」の4つのワークショップを提供した。
・あじっぱ入口横ディスプレイでは2回の特集展示を実施した。（「青と白の陶磁器」「国々の装い」）
・あじっぱ内では10回の展示替えを実施した。（「昔話と切手」「アジアの民族衣装を着てみよう」「モンゴルの生活」「針聞書の世界」「張子と達磨」など）
・文化交流展示室内で「弥生人現る～101回目の米作り」と題した参加体験型の学習プログラムを2日間で計6回実施し、高い満足度をえた。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
体験型プログラム等実施回数※	1,873回	－	－		－	639	2,143	2,041
体験型プログラム等参加者数	4,914人	－	－		－	8,860	7,796	8,651

【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 「弥生人現る」「なりきり考古学者体験スペシャル」など、展示室内での参加体験型の学習プログラムを複数回実施し、多くの方に参加いただくことができた。31年度以降も継続的に「九博らしい」プログラムを企画・運営していきたい。

【中期計画記載事項】
講演会、ギャラリートーク、 スクールプログラム、ワークショップ及び職場体験等による学習機会を提供する。その際、対象やテーマに応じて学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 東日本大震災後、被災地支援の一環として、東北地方のこども達に様々な参加型の体験活動プログラムを提供している「こども☆ひかりプロジェクト」と連携して、複数のワークショップを実施してきた。8月に京都市勧業館みやこめっせで行われた“ミュージアムキッズ！全国フェア”には全国から40のミュージアムが参加し、こども達に各種ワークショップを提供した。また、あじっぱのコンテンツを利用して実施するワークショップ「きゅーはくきゃらばん」は、県内外のミュージアムや学校で計26回実施した。31年度も他館との連携協力を深めていく予定である。

※28年度より、一定期間通して実施した事業については、期間の日数＝回数としてカウントする。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1311D3

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等　1)学習機会の提供　3/3

【年度計画】
（九州国立博物館）
オ　学校教育との連携事業を実施する。
・職場体験（中学生）の受け入れを実施する。
・ジュニア学芸員(高校生)事業を実施する。
・博物館活用の促進を図るため、教員研修の場を設置する。
・学校貸出キット「きゅうぱっく」の貸し出しを実施する。
・きゅーはくきゃらばん(移動博物館事業)の活動の充実を図る。
・福岡県教育委員会及び（公財）九州国立博物館振興財団と連携して、小中学校を招き、様々な学習プログラムを体験させる学校教育活動支援事業を実施する。

担当部課	交流課	事業責任者	課長　山野孝

【実績・成果】
(九州国立博物館)
オ
・職場体験（中学生)を18校、82人(のべ34日間)受け入れた。
・高校生を対象としたジュニア学芸員体験事業を3月3日、10日、17日、24日の4日間で実施し、なりきり学芸員体験や接客体験など全4講座を開講した。
・福島県や栃木県、岐阜県など10校の高校生を招き、歴史学研究の成果を対外的に発信する場として「全国高等学校歴史学フォーラム2018」を開催した。パネルセッションや打製石器を使った調理実験を行うと共に、参加生徒の相互交流を図った。
・学校貸出キット「きゅうぱっく」は、40件・62パックの貸し出しを行った。
・学校教育活動支援事業は、47校・3,452人の児童生徒に対して実施した。

学校教育活動支援事業
博物館ガイダンスの様子

【補足事項】
・27年度から始まった全国高等学校歴史学フォーラムは、考古学から歴史学へと内容を変え、またステージ発表からパネルセッションへと形式を変えながら実施してきた。歴史系の部活動は全国的な発表の機会が少なく、これが歴史系の部活動の衰退の一因となっている。九博主催でフォーラムを継続することで、主体的に歴史を学ぶ高校生の情報発信の場を確保するとともに、高校生のキャリア教育の一助としたい。
・学校貸出キット「きゅうぱっく」も製作から13年目となり、破損のため貸出できないパックが増えてきた。31年度は、破損したコンテンツを修復・補充し、より効率的な貸出を行う予定である。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
学校教育活動支援事業実施回数	47校	－	－	経年変化	－	13	18	27
学校教育活動支援事業参加者数	3,452人	－	－		－	1,251	625	1,612
出前講座実施回数	5回	－	－		－	6	6	6
出前講座参加者数	151人	－	－		－	370	179	104
職場体験等の実施回数	18校	－	－		－	32	17	20
職場体験等の参加者数	93人	－	－		－	117	87	92
教員を対象とした研修実施回数	3回	－	－		－	12	4	4
教員を対象とした研修参加者数	25人	－	－		－	167	73	25
「きゅうぱっく」貸出件数	40件	－	－		－	47	47	33
印刷物	20,000部	－	－		－	175,000	145,000	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
学校教育活動支援事業では学校担当者とプログラムの紹介･打ち合わせを密に行い行い、予定どおり実施することができた。
歴史学フォーラムではパネルセッションの形を導入したことにより、参加生徒の主体的な活動をサポートすることができた。
教員研修に関してはさらに参加者が増加するよう、広報と内容検討に努力していきたい。

【中期計画記載事項】
講演会、ギャラリートーク、 スクールプログラム、ワークショップ及び職場体験等による学習機会を提供する。その際、対象やテーマに応じて学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等との連携協力を行う。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
学校教育活動支援事業は、29年度より20校増やし、小中学校合わせて47校･3,452人が参加した。博物館ガイダンスだけでなく、バックヤードツアーやガイド付きの展示室観覧などのコンテンツで、児童生徒に博物館を楽しんでもらうことができた。31年度は移動博物館車「きゅーはく号」によるアウトリーチ活動と並行しながら、進めていきたい。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1312A

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等　2)ボランティア活動の支援

【年度計画】
（東京国立博物館）
ア　館内案内、各種事業の補助活動等の充実を図る。
イ　点字パンフレット、触知図、盲学校対応プログラム等による視覚障がい者対応、手話やコミュニケーションボード等による聴覚障がい者への博物館案内等、バリアフリー活動を継続して実施する。
ウ　自主企画グループによる各種ガイドツアー等を継続して実施する。
エ　スクールプログラムの一部をボランティアにより実施する。
オ　ボランティアデーなど、ボランティアの企画立案によるプログラムの充実を図る。

担当部課	学芸企画部博物館教育課	事業責任者	ボランティア室長　鈴木みどり

【実績・成果】
（東京国立博物館）
ア　外国人来館者に対しての「日本文化体験」補助や、親と子のギャラリーの「浮世絵擦り体験」など、期間限定のプログラムに対しても、積極的にご案内や体験の補助などを行った。
イ　さまざまな障がいをもつ来館者への意識を高め、通常の活動やバリアフリー班の活動を通して実施した。
ウ　自主企画グループは、引き続き16グループが活動した。
エ　スクールプログラム「はじめての東博」を引き続きボランティアが実施した。
オ　「ボランティアデー」「留学生の日」「キッズデー」「博物館でアジアの旅」「博物館でお花見を」では、各自主企画グループが対象や内容にあわせ、いつものガイドとは違った工夫を凝らしてガイドツアーを行った。

【補足事項】
ア　ボランティアに対する研修を行った。(55回、解説会3回)
イ　点字パンフレット制作7冊、盲学校対応2回、バリアフリー班36人
ウ　「近代の美術」グループが人数不足のため7月から9月まで休止し、10月から再開した。以降、安定した運営を行っている。
　ボランティアによる総ガイド回数363回、参加人数13,739人
エ　ボランティアによる対応数29校。
オ・「博物館でアジアの旅」では「考古グループ」が初参加し、平成館考古展示室から東洋館に場所を移して「アジアの考古」の案内をした。
　・「留学生の日」では、英語やわかりやすい日本語ガイドに加え、中国語圏の留学生や来館者が増えていることから、東京国立博物館では初めての中国語による「浮世絵ガイド」を行い、好評を博した。
　・「博物館でお花見を」にも「考古グループ」が初参加し、考古展示室の桜や花に関連する作品紹介にあわせ、館内通路からみられる桜の紹介をした。

「留学生の日」のガイドの様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
ボランティアの受入人数	149人	－	－		173	173	169	151

【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 年度計画に従い、ボランティアへの活動支援を行った。 また、ボランティアによる自主性や創造性を重んじ、各自の工夫や挑戦を奨励したことで、新規内容のガイドツアーを実施することができた。特に、増加する中国語圏の来館者のために、初の中国語によるガイドツアーを実施に導き、盛況を得た。

【中期計画記載事項】
教育活動の充実及び来館者サービスの向上、さらに、生涯学習活動に寄与するため、ボランティアを育成し、その活動を支援する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 多様な来館者を対象とした教育活動や来館者サービスのために、ボランティアによる外国人対応、学校対応、障がい者対応のための研修や活動の機会を増やし、順調に中期計画を進めている。今後も、ボランティアの特性を生かし、来館者に合わせたきめ細やかな対応ができるよう、ボランティアの活動支援を進めていく予定である。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1312B

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等　2)ボランティア活動の支援

【年度計画】
（京都国立博物館）
ア　教育普及補助ボランティア（京博ナビゲーター）活動の充実を図る。
イ　調査・研究補助ボランティアを受け入れ、各種事業活動の充実を図る。
ウ　文化財に親しむ授業講師（文化財ソムリエ）として大学生・大学院生ボランティアを育成し、小中学校への訪問授業を実施する。
エ「京都・らくご博物館」において、大学生をボランティアとして起用する。

担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長　數馬厚人 教育室長　永島明子

【実績・成果】
（京都国立博物館）
ア
・ワークショップ実施のため、京博ナビゲーターを対象とした研修会（4回）を実施した。
・京博ナビゲーターに対して普段の活動の意欲向上と相互に交流を深めることを目的とした感謝会を実施した。(1回)
・京博ナビゲーター（202人）が下記の活動を行った。
　①平成知新館内のミュージアム・カートやレファレンス・コーナーにおける活動（145日・概算28,710人）
　②特別展「池大雅」ワークショップ「指で描こう！指墨画にチャレンジ」(38日・5,427人)
　③特別展「京のかたな」ワークショップ「まぢかで見よう！はじめての刀」(49日・11,471人)
イ
・収蔵品調査及び社寺調査の補助のため、調査・研究補助ボランティアを受け入れた。(28人)
ウ
・文化財ソムリエを対象としたスクーリングを実施した。(20回)
・文化財ソムリエ（19人）が以下の活動を行った
　①京都市内の小中学校への訪問授業(7回)
　②京都市中学校総合文化祭における「おしゃべり鑑賞会」(3回)
　③「文化財を教室に！－複製を活用した事例紹介と交流会―」での事例発表（1回）
　④「ミュージアムキッズ！全国フェアin京都2018」への参加（2回）
エ
・「京都・らくご博物館」において、大学生をボランティアとして起用した。(15人)

翔鸞小学校での訪問授業

【補足事項】
ア　京博ナビゲーターはそれぞれ月1回程度来館し、平成知新館内のミュージアム・カートやレファレンス・コーナーにて活動を行っている。ミュージアム・カートでは、玉眼模型や銅鐸複製などのハンズオン教材に触れることができ、来館者アンケートやナビゲーターへの声掛けでも大変好評なコメントが集まっている。また、特別展「池大雅」、「京のかたな」では、関連ワークショップを毎日実施し、合計17,168人の参加があった。
ウ　文化財ソムリエとして登録している大学生・大学院生のボランティア（19人）に対して、当館研究員がスクーリングを20回実施した。文化財や教育普及の手法についてレクチャーを行い、授業案や教材を作成する際には議論を促し、指導・助言を行った。小中学校への訪問授業だけでなく、教員との交流会、学校への複製貸出・助言、他館活動の調査なども精力的に行った。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
ボランティアの受入人数	264人	－	－		210	214	215	270

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 年度計画に基づき教育普及補助活動の充実を図ることができた。その他、ボランティア活動の充実を進め、育成等も実施した。ボランティアは29年度と同程度の人数を受け入れた。京博ナビゲーターは29年9月に第2期を受け入れて、30年度で活動2年目となった。活動時間内外でナビゲーター同士の積極的な交流が見られ、ナビゲーター自身の成長にもつながっている。一方、土日祝日など教育室の目が届かない時の対応など、活動開始当初からの課題が残されている。 31年度は第3期ナビゲーターの受け入れの準備が始まるため、この課題について解決策を模索していきたい。

【中期計画記載事項】
教育活動の充実及び来館者サービスの向上、さらに、生涯学習活動に寄与するため、ボランティアを育成し、その活動を支援する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 京博ナビゲーターの活動は、教育活動の充実及び来館者サービスの向上に寄与しており、京博ナビゲーター自身の生涯学習にも繋がっている。また、文化財ソムリエの活動は、小中学生への教育普及及び文化財ソムリエ自身の成長に寄与している。今後もこれらの活動を継続して進めていくとともに、活動内容の質の向上を図りたい。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1312C

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等　2)ボランティア活動の支援

【年度計画】
（奈良国立博物館）
ア　ボランティア新制度３期目の初年度として、ボランティアの各グループ（世界遺産グループ、解説グループ、サポートグループ）の活動の円滑化を図る。
イ　ボランティアの資質向上を目的に、定期的に研修を実施する。
ウ　勉強会や見学会等によって、ボランティア同士のグループ別学習の充実を図る。
エ　ボランティアが自主的に実施するガイドツアー等のプログラムの支援を行う。

担当部課	ボランティア室	事業責任者	室長（兼副館長）　湊公夫

【実績・成果】
（奈良国立博物館）
ア　ボランティア新制度3期の初年度にあたり、世界遺産グループ（52人）、解説グループ（56人）、サポートグループ（51人）の3つがそれぞれ充実した活動を行った。世界遺産学習として奈良市の小学5年生（26校1,791人）のほか、学校プログラムとして県内外の幼稚園～高校生の生徒を受け入れた（13校747人）。奈良市教育委員会と共催で「親子で学ぼう 奈良の仏像」を夏休みに実施した（2日間）。この事業では、ボランティアが半年間の打合せと練習を行った。また、名品展（平常展）では、要所にデスクを設け、年間を通じて、質問の対応等を行った（合計1,602回）。また、「なら仏像館」ツアー解説を7月より、マイクやイヤホン等の機器を使用する新たな形態での実施を開始し、開館日の毎日基本2回実施した（417回、2,128人）。さらに上記の案内の活動に加え、講座やイベント等の補助業務を担当した（77回）。3つのグループ合同で、正倉院展会期中に、講堂ボランティア解説を実施した（17日、77回）。この事業に関しては、教育室がスライド資料と原稿を作成し、ボランティア室が約1か月間の練習立会と指導をした。
イ　ボランティアに対して、名品展研修を行う（17回）とともに、特別展、特別陳列の開催ごとに展覧会担当者による展示内容の研修を実施した（5回）。
ウ　ボランティアのグループ別に、毎月の勉強会を実施した（25回）。スキルとチーム力の向上を目指し、毎月テーマを設けて指導した。解説グループでは、オブザーバーとして各分野の担当研究員が立会、指導した（7回）。
エ　ボランティアによる自主企画として当館敷地内の茶室庭園の案内散策ツアーを実施した。また、ボランティア通信誌を発行してボランティア間の情報共有に努めた。

【補足事項】
ア
・奈良市教育委員会との共催事業「親子学ぼう 奈良の仏像」は、2日間で50組の親子が参加（118人）。
・なら仏像館ツアー解説は、開館日毎日11時と14時に実施した（417回）。
・特別陳列「お水取り」のツアー解説を31年3月に実施した（27回）。
・年間を通じ、講座及びイベント等の館事業の支援･補助を行った（77回）。
・第70回正倉院展の講堂ボランティア解説は17日間77回で、聴講者数は11,039人であった。ボランティアの活動人数は89人であった。
イ　ボランティアと博物館の意思疎通をはかるため、ボランティア会議を定期的に実施した（9回）。
エ
・ボランティア通信誌「ブリッジ」を3回発行した。
・庭園散策ツアーを11月に、仏教美術資料研究センター見学会を3月に、合計4回実施した。庭園散策ツアー並びに仏教美術資料研究センター共に2日間に渡り実施し、庭園散策ツアーの参加者は69人、仏教美術資料研究センターの入場者数は1,926人であった。
・ボランティア親睦会を12月に実施した（参加は職員含む131人）。

奈良市世界遺産学習の実施風景

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
ボランティアの受入人数	159人	－	－		110	157	150	143

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
新ボランティア制度の3期目の初年度にあたる30年度は、159人のボランティアを受け入れ、研究員による名品展（平常展）研修（17回）、特別展・特別陳列研修（5回）を実施するなど、ボランティア事業の資質の向上を図るための取り組みを計画通り実施した。また、ボランティアにより、世界遺産学習（26校1,791人）、名品展デスクにおける質問対応（延べ1,602回）、正倉院展解説（17日間77回）等を実施する等、ボランティア事業を年度当初計画の通り、進める事が出来ているものと考えられる。

【中期計画記載事項】
教育活動の充実及び来館者サービスの向上、さらに、生涯学習活動に寄与するため、ボランティアを育成し、その活動を支援する。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
ボランティアによる、世界遺産学習、ツアー解説、庭園ツアー、正倉院展解説等はそれぞれの参加者から高い評価を得ている。また、奈良市教育委員会との共催親子向け講座「親子で学ぼう 奈良の仏像」は29年度に実施した同内容の親子向け講座「親子で学ぼう 博物館」と比較して、参加者が増加する等、好評を博すものとなり、教育活動の充実に貢献している。加えて、ボランティア自主企画による庭園見学ツアーも参加者が69人に上る等、人気を得る行事となり、来館者サービスを向上させる一つの要因となっていると考えられる。今後も引き続き、こうした事業を計画・実施し、教育活動の充実を図る。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1312D

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等　2)ボランティア活動の支援

【年度計画】
（九州国立博物館）
ア　ボランティアの自主的活動を支援し、それぞれの部会（展示解説・教育普及・館内案内（日本語、英語、中国語、韓国語）・環境・イベント・資料整理・サポート・学生・フィールド・手話）の活動の充実を図る。また、内外から講師を招聘し、ボランティアとしての自覚を促し、責任感を高める研修や、所属する部会の専門性を高める研修を行う。

担当部課	交流課	事業責任者	課長　山野孝

【実績・成果】
（九州国立博物館）
ア
1)第5期ボランティア（2年目）を中心とした主体的な活動を重視することによって、来館者サービスのための自主研修会が積極的に行われ、館内案内時の提示資料やボランティア主催のワークショップのコンテンツが充実した。
2)部会の垣根を越えた研修や交流会を取り入れたことで、ボランティア同士の交流を深めることができた。
3)ボランティア主催のイベントやワークショップ等においては、館の規則や方針を十分伝えたうえで、企画したボランティアの主体性・自主性を尊重するよう努めた。

【補足事項】
1)5期ボランティア（2年目）と、4期ボランティア（5年目）の登録数はほぼ半々であるが、活動日等、バランスよく配置したことで来館者対応に余裕が生まれている。また30年度は九州国立博物館振興財団が支援するグループ活動（ボランティア部会の枠を超えた研修グループ）に「ワークショップ開発グループ」が新たに創設され、古代文字スタンプづくりなどの新たなコンテンツが生み出された。
・各期ボランティア数
第4期ボランティア（25年4月より活動）数　143人（任期制ではない手話部会含む）
第5期ボランティア（29年4月より活動）数　152人（同上）
・通常の活動においては、1日平均30～50人、1か月平均のべ1,000人前後のボランティアが、主に午前と午後に分かれて活動。約6割のボランティアが週1回程度で活動。
・日常の活動は、館内案内、あじっぱ（体験型展示室）における活動のサポート、文化交流展示室の解説案内、博物館内のIPM（総合的生物管理）活動や、土日を中心とした手話通訳による案内。
〔ボランティア対応数〕（事前申込・当日受付の総数）
展示解説：8,542人　館内案内（含手話）：10,545人　バックヤード：3,651人

ボランティア主催ワークショップの様子

2)活動の活性化・発展・創造やボランティアの資質向上を目的に、ボランティア自身の意向に沿った研修や館外研修（視察・交流等）を実施した。
〔主な研修〕
障がい者接遇、館内案内多言語講座、古代韓国歴史講座、IPM関連講座、救命救急講習等
〔主な館外研修先〕
北九州市立いのちのたび博物館、武雄市図書館、田川市石炭・歴史博物館、西南学院大学博物館、行橋歴史資料館 等

他館への視察研修の様子
（北九州市立いのちのたび博物館）

3)ボランティア主催イベントにおいては、他館への視察で得たヒントをもとに、さまざまな分野でのワークショップを開発した。アウトリーチ活動（「きゅーはくきゃらばん」）と併せ、多くの児童生徒たちに好評を博している。
〔実施したイベント等〕
「エコエコワークショップ」（8月11日、11月23日、31年2月10日）、「伝統手芸ワークショップ」（9月16日）「折り紙イベント」（10月14日）、「第11回九博子どもフェスタ（12月22日）」「どんぐりクエスト」（11月3日）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
ボランティアの受入人数	295人	－	－		352	352	307	313

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	ボランティアの自主的活動を支援するというスタンスのもと、各種研修を企画・実施したことで、ボランティアとしての資質の向上を図ることができた。また、30年度も九州国立博物館振興財団支援事業のグループ活動を継続したことで、部会の枠を超えたつながりを意識した活動が増えている。 毎月開催のボランティアの定例会議で、先々の館のスケジュールを提供したことで、自主的かつ積極的に活動に参加するボランティアが増えている。

【中期計画記載事項】
教育活動の充実及び来館者サービスの向上、さらに、生涯学習活動に寄与するため、ボランティアを育成し、その活動を支援する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	30年度は、学校との連携事業（学校教育支援事業など）の受け入れが29年度よりも増加し、ボランティアが来館者に関わる機会がより多くなった。31年度には移動博物館車が導入される。一つひとつの派遣依頼に十分対応できるよう、「職員対応の事案」「ボランティア対応の事案」の住み分けを行うとともに、職員とボランティアが連携を密にし、余裕をもった対応策を構築していきたい。また、他県の施設や他館で活動するボランティアとの交流会についても継続させ、31年度以降も様々な視点からのボランティア活動が展開できるよう支援していきたい。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1313A

中項目	１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等　3)大学との連携事業等の実施

【年度計画】
（４館共通）
ア　キャンパスメンバーズ（学校法人会員制度）による大学等との連携を継続して実施する。
（東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館）
ア　インターンシップを継続して実施する。
（東京国立博物館）
ア　キャンパスメンバーズを対象とした「博物館講座」、「博物館セミナー」を実施する。
イ　東京藝術大学との連携事業を継続して実施する（大学院生対象）。

担当部課	総務部総務課 学芸企画部博物館教育課	事業責任者	課長　竹之内勝典 課長　伊藤信二

【実績・成果】
（４館共通）
ア　加入校数 56 校（内訳　法人：3、大学：46、専門学校：2、学部：5）が本制度を利用し、20,944 人の学生、643 人の教員が総合文化展を観覧した。なお、特別展割引については、11,029 人の学生が利用した。
（東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館）
ア　博物館学芸員を目指す学生の学習意欲の喚起及び職業意識の育成を目的として、大学院生を対象にインターンシップを募集し、11 部署で 10～30 日の活動を行い、18 大学 22 人が修了した。
（東京国立博物館）
ア・キャンパスメンバーズ加入校の学生を対象に、博物館の役割、運営、保存修復、博物館情報、教育普及事業等について実践を交えた「博物館セミナー」を実施した。また、キャンパスメンバーズ加入校の学芸員志望学生を対象として、作品の取り扱いなど博物館実務全般の実習機会を提供する「博物館学講座」を開催した。
・日本大学芸術学部と共同で柳瀬荘アートプロジェクトを実施。
イ　東京藝術大学大学院インターンシップを 30 年度も採用し、総合文化展のギャラリートークを実施した。
○　大学、専門学校からの団体見学申込に対し、自由見学前にレクチャーを提供し、13 校 482 人に対応した。

【補足事項】
（東京国立博物館）
ア・キャンパスメンバーズ加盟校の学生を対象とした博物館セミナー(9 月 5 日、参加　26 大学・88 人)
・キャンパスメンバーズ加盟校の学芸員志望学生を対象とした博物館学講座(9 月 3 日～7 日、参加　19 大学・33 人)
・日本大学芸術学部　柳瀬荘アートプロジェクト（11 月 15 日～12 月 1 日）テーマ「仮構の空間／仮像の彫刻」
参加アーティスト 23 人、来場人数 470 人

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
キャンパスメンバーズ加入大学数	56校	－	－	経年変化	44	48	52	53
インターンシップ参加者数	22人	－	－		－	23	22	26
見学対応実施回数	13回	－	－		－	12	14	22
見学対応参加者数	482人	－	－		－	275	480	571
その他事業実施回数	1回	－	－		－	1	1	1
その他事業参加者数	88人	－	－		－	37	36	27

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 キャンパスメンバーズ(56校)及びインターンシップ(22人)による大学等との連携を継続して実施しているほか、東京藝術大学等との連携事業に順調に取り組んでいる。

【中期計画記載事項】
インターンシップ、キャンパスメンバーズ制度、大学との連携事業等の実施を通じて人材育成に寄与する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 インターンシップやセミナー等、大学との連携事業を通じて人材育成に寄与しており、今後も継続していく予定である。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1313B

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等　3)大学との連携事業等の実施

【年度計画】
（４館共通）
ア　キャンパスメンバーズ（学校法人会員制度）による大学等との連携を継続して実施する。
（京都国立博物館）
ア　京都大学大学院人間・環境学研究科の歴史文化社会論講座を担当する。

担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長　數馬厚人 上席研究員　宮川禎一

【実績・成果】
（４館共通）
ア　キャンパスメンバーズ制度を継続し、大学等との連携を図り、以下の取組などにより新規に3校が加入した。
・30年度より新たに教職員を特典の対象に加え、また、29年度よりも特別展観覧料の割引額を大きくした。
・会員を対象とした講演会を新規に実施した。
・公式キャラクター「トラりん」が加入校を回り、制度の特典を広報した。

キャンパスメンバーズ
限定講演会

（京都国立博物館）
ア　京都大学大学院人間・環境学研究科の教員として、宮川禎一（考古）、山川曉（染織）、淺湫毅（彫刻）、大原嘉豊（宗教絵画）の4人が大学院生（修士・博士課程在籍者）に対して、博物館内で文化財をテーマに講義・ゼミを行った。受講学生はのべ12人である。

【補足事項】
（４館共通）
ア　「特別展『京のかたな』キャンパスメンバーズ限定講演会」（10月19日、11月16日　講師：主任研究員　末兼俊彦）（2回・319人）
（京都国立博物館）
ア
・学芸部研究職員は客員教授2人（宮川・山川）、客員准教授2人（淺湫・大原）の体制で研究指導を行った。また、修士・博士課程1人にいついては、論文作成の指導を適宜行った。
・京都大学留学生のための文化財講座を31年1月9日に開催した。午前中に会議室で座学、午後は展示場で作品解説付きで見学した。参加者18人。（宮川）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
キャンパスメンバーズ加入大学数※	32校	－	－		29	29	27	29
インターンシップ参加者数	1人	－	－	経	－	2	3	2
連携講座参加者数	6人	－	－	年	－	6	6	6
見学対応実施回数	1回	－	－	変	－	2	2	3
見学対応参加者数	25人	－	－	化	－	41	35	40
その他事業実施回数	23回	－	－		－	1	22	22
その他事業参加者数	349人	－	－		－	22	52	27

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
キャンパスメンバーズについては、利用者にとってより有意義な制度となるよう教職員を特典に加え、会員対象の講演会を開催するなど、特典の見直しや広報活動を行い、新たに3校の加盟校を増やすことができた。
京都大学連携講座による大学院生に対しては、文化財の実物教育を行うことで、博物館ならではの研究指導を行うことができた。
京都大学の留学生に対して文化財学習の講座を開催し、日本文化の理解を促進することができた。

【中期計画記載事項】
インターンシップ、キャンパスメンバーズ制度、大学との連携事業等の実施を通じて人材育成に寄与する。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
キャンパスメンバーズは加入校が増え、計画通りに大学等との連携ができている。今後も継続して制度の広報や見直しを図り、より多くの学生・教職員に利用される制度を目指す。
京都大学連携講座については、引き続き協定に基づき計画的に研究指導を行い、文化財に関わる人材育成に貢献していく。

※奈良国立博物館との共通加入校含む

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1313C

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等　3)大学との連携事業等の実施

【年度計画】
（４館共通）
ア　キャンパスメンバーズ（学校法人会員制度）による大学等との連携を継続して実施する。
（東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館）
ア　インターンシップを継続して実施する。
（奈良国立博物館）
ア　奈良女子大学及び神戸大学との連携講座を継続して実施する（大学院生対象）。
イ　大学、高校において正倉院展に関する特別授業を実施する。

担当部課	総務課	事業責任者	課長　臣守常勝

【実績・成果】
（４館共通）
ア　キャンパスメンバーズへの入会の勧誘及び更新を積極的に進めてきた結果、30年度までで入会校数は28校となり、加入大学とは連携を継続した。
（東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館）
ア　立命館大学にてインターンシップの募集を行ったが、30年度は希望する学生がおらず、実施することができなかった。
（奈良国立博物館）
ア
・奈良女子大学大学院人間文化研究科の連携講座（日本アジア文化情報学講座）に学芸部研究員1人を客員准教授として派遣し、日本アジア古典資料論の講義を行った。受講生は前期1人、後期1人であった。
・神戸大学大学院人文学研究科の連携講座（文化資源論講座）に、学芸部の研究員2人を客員教授と客員准教授として派遣し、文化資源論の講義を行った。受講生は、修士課程、博士課程の大学院生6人であった。
イ　京都美術工芸大学にて正倉院展に関する出前授業を実施した。(10月1日)

【補足事項】
（４館共通）
ア　キャンパスメンバーズ加入校である奈良教育大学と連携し親子向けワークショップ「織ってみよう！糸のみほとけ」を実施した。(7月)
（奈良国立博物館）
ア
・奈良女子大学大学院人間文化研究科
　野尻忠企画室長「日本アジア古典資料論Ⅰ・Ⅱ」
・神戸大学大学院人文学研究科
　岩井共二情報サービス室長、吉澤列品室長「文化資源論講座」
イ　京都美術工芸大学
　内藤栄学芸部長「正倉院展　出前授業」

「織ってみよう！糸のみほとけ」

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
キャンパスメンバーズ加入大学数※	28校	－	－		27	27	25	27
インターンシップ参加者数	0人	－	－		－	3	3	2
連携講座参加者数	8人	－	－		－	10	10	12

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	29年度に引き続き、大学と連携し、研究員による講座を実施し、歴史・伝統文化の発信に努め、また、キャンパスメンバーズ加入校である奈良教育大学との連携事業において、親子向けワークショップを実施するなど、若年層向けの教育普及活動を行うことができた。

【中期計画記載事項】
インターンシップ、キャンパスメンバーズ制度、大学との連携事業等の実施を通じて人材育成に寄与する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	キャンパスメンバーズ制度は、加入校を増やすことができ、大学との連携事業においては計画どおりに実施することができた。親子向けワークショップの実施についても、参加者及び大学側双方に教育的効果があり、人材育成に貢献することができた。以上のことから中期計画に対し順調に成果を上げている。なお、インターンシップの募集について、31年度は改めて検討する予定である。

※京都国立博物館との共通加入校を含む。

【書式A】　施設名　九州国立博物館　処理番号　1313D

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等　3)大学との連携事業等の実施

【年度計画】
（４館共通）
ア　キャンパスメンバーズ（学校法人会員制度）による大学等との連携を継続して実施する。
（東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館）
ア　インターンシップを継続して実施する。
（九州国立博物館）
ア　大学生の博物館実習の受け入れを実施する。
イ　放送大学の面接授業を実施する。

担当部課	学芸部博物館科学課 交流課 総務課	事業責任者	課長　木川りか 課長　山野孝 課長　國谷勝伸

【実績・成果】
（４館共通）
ア　キャンパスメンバーズ（学校法人会員制度）による大学等との連携を継続して実施した。
（東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館）
ア　文化財保存修復施設を利用して地域大学との連携を図る短期インターンシップを実施した。
（九州国立博物館）
ア　博物館実習生を13大学17人、計10日間受け入れた。（うちキャンパスメンバーズ校は5大学8人）
イ　放送大学の面接授業を実施した。（2日間、39人受講）

【補足事項】
（４館共通）
ア　大学等との連携を継続するため、30年度も募集・実施し、各教育機関（大学・高等学校）が継続して加入した。（30年度加入校内訳：大学13校、短期大学2学、専門学校1校、高等学校6校、高等専修学校1校）
（東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館）
ア　装潢技術に関する短期インターンシップ「文化財保存修復研修」を実施した。
研修期間は8月27日～8月31日の5日間。広島市立大学4人、九州産業大学2人、佐賀大学1人、別府大学1人の計4大学8人が参加した。屏風の下貼り製作を通じて、修理の基本となる作業を体験できる貴重な機会を提供した。
（九州国立博物館）
ア　博物館実習
・実習実施期間：8月22日～9月3日（10日間）（合計13大学17人）
・実習内容：博物館の各機能に関するレクチャー、実習（来館者対応、学芸員体験、体験型展示室「あじっぱ」用工作キット製作・展示プラン作成）を行った。また、30年度より収蔵品の情報管理と公開をテーマにした「博物館と情報システム」の講義を行った。

「文化財保存修復研修」研修風景

博物館実習（文化財写真についての実習風景）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
キャンパスメンバーズ加入大学数	23校	－	－		24	25	25	25
インターンシップ参加者数	8人	－	－		－	7	4	3
見学対応実施回数	3回	－	－		－	7	6	3
見学対応参加者数	140人	－	－		－	450	243	140
その他事業実施回数	14回	－	－		－	12	11	8
その他事業参加者数	264人	－	－		－	86	136	105

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
インターンシップをはじめとする大学等と連携した事業を継続して実施した。「文化財保存修復研修」においては、大学における学習や進路選択において参考となる貴重な体験を提供できた。
また、13大学から17人の博物館実習生を受け入れ、館内各部門と連携・協力しながら10日間の実習を実施できた。放送大学の面接授業についても、大学担当者と内容を検討し、計画どおり実施できた。

【中期計画記載事項】
インターンシップ、キャンパスメンバーズ制度、大学との連携事業等の実施を通じて人材育成に寄与する。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
当館が対応でき得る適切な数の実習生・研修生の受入を行い、中期計画どおり、人材育成に寄与できた。引き続き、広報周知を行い、大学との連携事業を推進していきたい。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1314A

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等4)国内外の有形文化財の保存・修理に関する人材育成への寄与

【年度計画】
（4館共通）
保存修理従事者を対象とした人材育成に係る事業の実施又はインターンの受け入れや保存修理従事者と協力した事業を開催する。

担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	保存修復課長　冨坂賢

【実績・成果】
（4館共通）
・筑波大学大学院1名、共立女子大学大学院1名の都合2名のインターン生を、延べ10日間受け入れた。作品の点検調書、カルテなどの電子化作業、特別展展示作業、X線CT撮影の見学、測定サンプルつくりなど科学調査の現場作業、修理作業周辺の関連作業を行ってもらい、最終日には作業の報告会を行った。
・特定非営利活動法人　文化財保存支援機構主催の「平成30年度文化財保存修復を目指す人のための実践コース」を共催者として支援した。

写真1，2「平成30年度文化財保存修復を目指す人のための実践コース」（左）とインターン活動における綿布団制作（右）の様子

【補足事項】
「保存修理事業者を対象とした研修会」の開催日数、参加者数は黒田記念館において講義形式で行われたものを記入している(他に現地見学会が3回あった)。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
保存修理事業者を対象とした研修会				経				
開催日数	3回	－	－	年	2	1	1	3
参加者数	29人	－	－	変	37	18	23	39
インターン受入人数	2人	－	－	化	2	4	4	2
大学院生のための研修会参加人数	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 インターン制度に関しては2名から4名を想定しており、最低限の人数に対する受け入れを行えたと考える。保存修復課の日常業務を経験してもらい、大学教育を補完できる教育活動が行えた。

【中期計画記載事項】
保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした人材育成に係る事業を関係機関と連携しながら検討、実施する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 日常業務における受け入れ可能人数において30年度も中期計画記載の目標を達成することができた。29年度と同様2名であったが、内容も幅広くこなせた上、作業や知識の深さも十分な活動ができたと考える。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1314B

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等4)国内外の有形文化財の保存・修理に関する人材育成への寄与

【年度計画】
（4館共通）
保存修理従事者を対象とした人材育成に係る事業の実施又はインターンの受け入れや保存修理従事者と協力した事業を開催する。

担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長　大原嘉豊

【実績・成果】
（4館共通）
・毎月1回文化財保存修理所内工房を当館研究員が巡回し、文化財の修復状況を確認するとともに、修理技術者に指導・助言を行った。また、2か月に1回、修理技術者と当館との定例会議を開催した。（巡回9回・会議9回）
・当館開催の特別展覧会において修理技術者に対する定例の研修会を実施した。（計2回・113人）
4月16日「池大雅　天衣無縫の旅の画家」（52人）
10月9日「特別展　京のかたな　匠のわざと雅のこころ」（61人）
・文化財修復に係わる大学院生（1人）のインターンシップ実習（8月20日～8月31日、9月10日～9月21日）を実施し、12月10日に口頭よる報告会を開催し（出席者24人）、報告書を作成した。
・保存修復技術を専攻する大学院生のための研修会を9月7日に実施した。（参加者11人）
・国内外博物館における保存科学、修復の専門家等による文化財保存修理所の視察を受け入れ、情報交換等を行った。（計19回・116人）
9月20日　多摩美術大学　フィラデルフィア美術館東洋美術部、京都歴史資料館、大阪大学、清水寺（4人）
10月25日　大英博物館　平山スタジオ・日本東洋絵画修復（2人）
10月4日　ボストン美術館修復部、他（2人）、他16回
・10月27日にシンポジウム「文化財の保存と修理」を主催し、研究者・技術者双方の視点から文化財修理の重要性を再認識するとともに、幅広い理解を得る機会とした（参加者120人）。

【補足事項】
・文化財保存修理所巡回に際して、技術者より文化財の修復状況について説明を受け、当館研究員が専門的な立場から指導・助言を行った。
・修理技術者に対する定例の研修会においては、実際の修理現場を体験することにより、修理技術の習得や向上に資することができた。
・文化財修復を学ぶ大学院生をインターンシップとして受け入れ、実習を行ったことは、今後の若手技術者育成という点でも大きな意義がある。
・保存修復技術を専攻する大学院生のための研修会は、多くの学校から意欲ある学生の参加があった。関係教育機関において当該研修会が一定の認知度を得るようになった結果といえる。実際の修理現場を体感する研修を行うことで、学生の意欲や目的意識の向上を図ることができた。

保存修復技術を専攻する大学院生のための研修会（30年9月7日）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
保存修理事業者を対象とした研修会								
開催回数	2回	－	－		2	2	2	2
参加人数	113人	－	－		87	126	96	129
インターン受入人数	1人	－	－		1	2	3	2
大学院生のための研修会参加人数	11人	－	－		19	22	13	9

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
29年度とほぼ同等の事業を遂行し、インターンの受け入れ事業を実施した。研究者・技術者双方の視点から文化財修理の重要性を再認識するとともに、幅広い理解を得る機会としたシンポジウム「文化財の保存と修理」には多くの参加者が来場し、博物館関係者のみならず一般に対する修理事業の普及啓発活動としても意義深いものとなった。

【中期計画記載事項】
保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした人材育成に係る事業を関係機関と連携しながら検討、実施する。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした人材育成に係る事業の目標を順調に達成した。文化財修理の重要性を再認識するとともに、幅広い理解を得る機会としたシンポジウム「文化財の保存と修理」には多くの参加者が来場し、博物館関係者のみならず一般に対する修理事業の普及啓発活動としても意義深いものとなった。技術者との連携事業としても評価されるべきものと考える。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1314C

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等 4)国内外の有形文化財の保存・修理に関する人材育成への寄与

【年度計画】
（4館共通）
保存修理従事者を対象とした人材育成に係る事業の実施又はインターンの受け入れや保存修理従事者と協力した事業を開催する。

担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長　鳥越俊行

【実績・成果】
（4館共通）
・保存修理技術者に対する研修会を31年1月25日に開催した。
・海外の修理技術者等の視察を6回受け入れ、各工房技術者との間で情報交換を行った。
4月 9日：ロシアブリヤート共和国モンゴル学・仏教学・チベット学研究所研究員らによる視察（2人）
4月17日：韓国国立文化財研究所の学芸研究官らによる視察（4人）
5月 8日：韓国国立文化財研究所長と韓国国立民俗博物館職員らによる視察（4人）
6月12日：韓国国立慶州博物館職員による視察（1人）
6月12日：韓国国立扶餘博物館職員と韓国国立公州博物館職員らによる視察（3人）
10月16日：中国南京博物館職員による視察（3人）

【補足事項】
・文化財保存修理所技術者研修会
31年1月25日に文化財保存修理所の各工房修理技術者を対象とする研修会を開催した。
北村工房代表者からの修理に関する報告（「漆工品修理と模造制作をふりかえって」）と討議を行った。参加者は45人。

30 年度研修会での工房担当者による報告

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
保存修理事業者を対象とした研修会								
開催日数	7回	－	－		4	6	4	8
参加者数	62人	－	－		67	74	51	77

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 視察の回数や人数は年により増減があるが、30年度はロシア、韓国、中国3か国の専門家が文化財保存修理所を見学した。日本美術の修理技術や修理の考え方を広く伝えることができたことから、計画通り事業を遂行することができた。引き続き31年度も継続して取り組む。

【中期計画記載事項】
保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした人材育成に係る事業を関係機関と連携しながら検討、実施する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 海外修理技術者の視察等を受け入れ、文化財保存修理所の修理技術者と海外の技術者の交流を継続して行っている。また、保存修理所技術者研修会を通じて修理所内の各工房に在籍する技術者間の交流が図られた。これらの活動を通じて文化財の保存・修理に関する人材育成に寄与できおり、中期計画は順調に進んでいる。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1314D

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　①教育活動の充実等4)国内外の有形文化財の保存・修理に関する人材育成への寄与

【年度計画】
（４館共通）
　保存修理従事者を対象とした人材育成に係る事業の実施又はインターンの受け入れや保存修理従事者と協力した事業を開催する。

担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長　木川りか

【実績・成果】
（４館共通）
・インターンの受け入れや保存修理事業者と協力した研修会を行った。（計3回・32人参加）
・文化財保存、ＩＰＭ（総合的有害生物管理）普及のための講座・研修を開催した。（計5回、合計260人参加）

【補足事項】
　保存修理事業者と協力した研修会
　・短期インターンシップ「文化財保存修復研修」
　　日程：8 月 27 日～8 月 31 日（5 日間）　参加人数：8 人
　　対象：関西以西の大学・大学院で保存修復を学ぶ学生
　・「古文書保存基礎講座」
　　日程：31 年 1 月 25 日、26 日　参加人数：24 人
　　対象：福岡県内を中心とする地域の博物館・美術館・文化財関連機関
　　　の古文書等の担当者
　　主催：九州国立博物館・福岡県教育委員会・筑紫野市歴史博物館
　　協力：国宝修理装潢師連盟

文化財保存修復研修の様子

○ＩＰＭ普及のための研修会
　・「ＩＰＭ館内研修」
　　日程：5月23日
　　参加人数：21人
　　対象：国立文化財機構・館内関係者
　・「環境調査報告会」
　　日程：5月29日
　　参加人数：30人
　　対象：館内環境整備関係者
　・「ＩＰＭセミナー・ＩＰＭ研修」
　　ＩＰＭセミナー：10月24日、ＩＰＭ研修：10月25日、26日
　　参加人数：延べ209人
　　対象：全国の博物館、美術館等の学芸員

ＩＰＭ研修における実習の様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
保存修理事業者を対象とした研修会				経年変化				
開催回数	8回	－	－		9	7	6	9
参加者数	292人	－	－		175	179	473	533
インターン受入人数	8人	－	－		－	－	－	3

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	文化財修理に関するインターンの受け入れやＩＰＭ研修等の教育普及事業を計8回実施することができた。30年度はシンポジウムを実施しなかったため参加者数は平年並みに戻った。

【中期計画記載事項】
　保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした人材育成に係る事業を関係機関と連携しながら検討、実施する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	中期計画に従い、修理技術者、ＩＰＭ従事者、地元の教育委員会等と連携しながら、実習を積極的に取り入れたプログラムで実践的な研修を実施し、保存・修理に関わる人材育成に寄与した。今後も実践的な研修を継続していく予定である。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1315A

中項目	1． 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3） 教育・普及活動　①教育活動の充実等　5)博物館支援者増加への取組

【年度計画】
（4館共通）
企業との連携及び会員制度の活性化を図る。
ア　会員制度によるリピーターの拡大に努める。
イ　会員制度利用者を対象とした事業を実施する。
ウ　企業等と連携し、広報活動やイベントによる博物館の認知度向上に努める。
エ　展覧会事業の協賛企業から各種支援（協賛・協力）を募る。
オ　2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた日本文化を発信する各種事業を検討する。
（東京国立博物館）
ア　賛助会等の会員制度を通して、リピーター獲得の促進を図る。
イ　上野文化の杜新構想実行委員会に参画し、上野地区の文化施設等と連携した各種事業を主体的に実施することで、認知度向上に努める。

担当部課	総務部総務課	事業責任者	課長　竹之内勝典

【実績・成果】
（4館共通）
ア　29年度より新会員制度へ移行し、会員総数は21,914人となった。
イ　友の会と賛助会会員を対象に、講演会を実施した。また、賛助会会員を対象に感謝会・内覧会を実施した。
ウ　株式会社みずほ銀行等の賛助会会員と協同で、認知度の向上に資するイベントを実施した。
エ　特別展「縄文―１万年の美の鼓動」において、三菱商事株式会社と共催で障がい者向けの「特別鑑賞会」を実施した。
オ　各種事業のbeyond2020への登録や、文化庁が主催する高校生ニッポン文化大使2018に参画した。
（東京国立博物館）
ア　29年度から新たな会員制度として導入した「国立博物館メンバーズパス（4館共通）」及び東京国立博物館オリジナル制度「メンバーズプレミアムパス」「友の会」の加入者増加に向けた取り組みを促進した。
イ　上野「文化の杜」新構想に基づき、上野全体の共通入場券「UENO WELCOME PASSPORT」の発行やコンサート等を実施した。

【補足事項】
ア　賛助会会員数621人の内訳は個人549人（プレミアム5人、特別17人、維持527人）、団体72団体（特別22団体、維持50団体）である。
イ　メンバーズプレミアムパス・友の会の会員については、特別展を割安で観覧する目的での入会者も多く、30年度については開催された特別展と来館者のニーズが合わず減少となった。
ウ　会員制度については、現在の料金での維持が厳しくなってきており、抜本的な制度改正が今後必要となる。

30年度賛助会感謝会の様子
（事業報告会）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評価	経年変化	26	27	28	29
賛助会等支援組織の会員数	21,914人	－	－		23,899	23,451	28,939	25,244
賛助会会員数	621人	－	－		414	464	455	559
友の会会員数	2,939人	－	－		2,145	2,041	2,337	2,967
メンバーズプレミアム(国立博物館メンバーズパスを含む)会員数※28年度までのパスポートとベーシックに相当	18,354人	－	－		21,340	20,946	26,147	21,718

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
会員制度は、特別展の内容が大きく左右するため会員数は減少となったが、賛助会は、個人・団体ともに増加している。企業等と連携することで賛助会等の制度について認知度を高めるとともに、展覧会における企業との連携による事業も継続して実施することができた。「上野ウェルカム・パスポート」については好評を得ており、時事に合わせたデザインや特典を盛り込み使用率が向上している。

【中期計画記載事項】
企業との連携や会員制度の活性化等により博物館支援者の増加を図る。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
会員数は展覧会の内容などにより増減している。特別展の観覧券を目的とする入会者が多いプレミアムメンバーズパスについては、特にその傾向が顕著に出ている。一方で、寄附による博物館の支援を目的とした賛助会員は個人・団体ともに堅調に推移しており、全体としての会員数は減少しているものの、博物館の支援基盤の充実という意味では、中期計画に沿った業務遂行が行われているといえる。2020年の開館150周年に向けて会員制度のあるべき姿を検証し、支援者の増加に努めたい。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1315B

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等　5)博物館支援者増加への取組

【年度計画】
（4館共通）
企業との連携及び会員制度の活性化を図る。
ア　会員制度によるリピーターの拡大に努める。
イ　会員制度利用者を対象とした事業を実施する。
ウ　企業等と連携し、広報活動やイベントによる博物館の認知度向上に努める。
エ　展覧会事業の協賛企業から各種支援（協賛・協力）を募る。
オ　2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた日本文化を発信する各種事業を検討する。
（京都国立博物館）
ア　支援団体等が行う文化財の鑑賞会・見学会等に協力する。
イ　ミュージアムパートナー制度及び文化財保護基金制度を活用し、企業等との連携を図る。

担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長　數馬厚人 企画室長　山川曉

【実績・成果】
（4館共通）
ア　「国立博物館メンバーズパス」は発売初年度（29年度）の需要には及ばず会員数は減少したが、券売所に申込書記入台を設ける等会員数の拡大に取り組んだ。
イ　当館発行の「国立博物館メンバーズパス」について、29年度に引き続き近隣文化施設との相互割引等の特典を付与した。
ウ
・タクシー乗務員向けの特別鑑賞会を実施し、広報協力を得ることができた。
・特別展共催者や旅行会社等が企画する特別展の団体貸切鑑賞会を受け入れた。
・(株) 三越伊勢丹と連携し、国立博物館コラボレーションギフトに参加した。
エ　特別展の協力企業である（株）日本香堂が提供するラジオ番組で展覧会のPRを行った。新たに平常展の一環である特別企画「中国近代絵画の巨匠　斉白石」の広報面での協力にこぎつけた。
オ　「beyond2020」に特別展「京のかたな」をはじめとする多くの事業を登録した。
（京都国立博物館）
ア　支援団体(一般社団法人清風会)が行う鑑賞会(4回)・見学会(4回)・会報(4回)の解説・執筆及び総会の開催に協力した。
イ
・ミュージアムパートナー制度では、29年度の全てのパートナーより30年度も継続して支援を得られた。
・文化財保護基金では企業等からの寄付金を引き続き受け入れたほか、雑誌とのコラボレーション商品を新たに開発する等、支援者の拡大を図った。

【補足事項】
（4館共通）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
賛助会等支援組織の会員数	1,597件	－	－	経年変化	6,873	7,476	5,855	2,266
清風会及びミュージアムパートナー会員数	485件	－	－		351	368	370	452
国立博物館メンバーズパス会員数	1,112件	－	－		－	－	－	1,814
パスポート会員数※	－	－	－		6,522	7,108	5,493	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 「国立博物館メンバーズパス」については会員数が伸び悩んでいるため、継続して周知・広報を行い、リピーター獲得に努めたい。企業等との連携においては、貸切鑑賞会に係る制度を新設することで特別な観覧環境を提供できるようになったため、企業の顧客等の従来とは異なる客層からの認知に繋げていきたい。その他の事業については29年度に引き続き計画どおりに遂行した。

【中期計画記載事項】
企業との連携や会員制度の活性化等により博物館支援者の増加を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 企業等との連携及び会員制度は全体としては拡大傾向にあると言える。個々の事業について活性化すべく、継続した事業運営及び必要に応じた見直し等を図りたい。

※パスポート制度は29年3月31日で廃止

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1315C

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等　5)博物館支援者増加への取組

【年度計画】
（4館共通）
企業との連携及び会員制度の活性化を図る。
ア　会員制度によるリピーターの拡大に努める。
イ　会員制度利用者を対象とした事業を実施する。
ウ　企業等と連携し、広報活動やイベントによる博物館の認知度向上に努める。
エ　展覧会事業の協賛企業から各種支援（協賛・協力）を募る。
オ　2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた日本文化を発信する各種事業を検討する。
（奈良国立博物館）
ア　支援団体等との連携により施設を活用したイベント等を実施し、博物館支援の輪を広げる。
イ　支援団体等と連携し、展覧会の充実を図る。
ウ　賛助会員制度の継続・拡充を図る。
エ　地域、企業との連携を推進する。

担当部課	総務課	事業責任者	課長　臣守常勝

【実績・成果】
（4館共通）
ア　入会案内チラシの配布、企業への訪問等、広報及び営業活動を行い賛助会員の新規獲得を図った。
イ　賛助会員、奈良博プレミアムカード会員を対象とする研究員による解説付きの特別鑑賞会を実施した。
ウ　大手百貨店と連携してコラボレーションギフトの作製を行い、自己収入の増加と博物館の認知度向上を図った。
エ　他の主催者と連携し、企業等からの協賛・協力を募った。
オ　東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として実施される「日本博」の趣旨に合わせた展覧会の検討を行った。
（奈良国立博物館）
ア　支援団体等が主催する展覧会の解説付き鑑賞会の実施に協力した。
イ　特別展の実施に際して企業等からの協力金を得て特別展の充実を図った。
ウ　賛助会員93件（特別支援会員：4団体、特別会員4団体、一般会員（団体）：17団体、一般会員（個人）：68人）
エ　地元自治体と連携して観光イベントを実施することにより、博物館の認知度向上と顧客層の開拓に努めた。

【補足事項】
（奈良国立博物館）
ウ　三越伊勢丹と連携してコラボレーションギフトの作製・販売を行った。商品カタログへの情報掲載や、PRイベントの実施を通じて広報を行い、博物館の認知度向上に繋げた。

コラボレーションギフト

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
賛助会等支援組織の会員数	1,499人	－	－	経	3,235	3,665	3,812	1,740
賛助会会員数	93件	－	－	年	73	74	73	76
奈良博プレミアムカード会員数	1,185人	－	－	変	－	－	－	1,347
国立博物館メンバーズパス会員数	221人	－	－	化	－	－	－	317
パスポート会員数※	－	－	－		3,126	3,591	3,739	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
奈良博パスポートを28年度で終了し、29年度より国立博物館メンバーズパス及び奈良博プレミアムカードを販売開始したが、優待内容が大きく変わったことにより、会員数が減少したと思われる。今後は優待内容を充実させるため、奈良博だけの入館に留まらず、他館他機関の入館においても優待できるよう改善したい。また、賛助会員においては会員を新規獲得するため、個人会員向けの入会案内チラシを積極的に配布したり、地元企業を訪問して団体会員へ勧誘する等、広報及び営業活動を強化した。29年度に比べて特別会員1団体、一般会員（団体）2団体、一般会員（個人）14人増となる十分な成果をあげることができた。

【中期計画記載事項】
企業との連携や会員制度の活性化等により博物館支援者の増加を図る。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
新規会員獲得に向けた活動を積極的に行うとともに、既存会員に対しては、これまでに引き続き特別鑑賞会を実施する等支援の継続を図った。
また、特別展の実施に際して企業から協賛金を獲得したり、大手百貨店と商品の共同開発をしたりする等、企業との連携を強化して、自己収入の増加と博物館の認知度向上に繋げた。

※パスポート制度は29年3月31日で廃止

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1315D

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　①教育活動の充実等　5)博物館支援者増加への取組

【年度計画】
（4館共通）
企業との連携及び会員制度の活性化を図る。
ア　会員制度によるリピーターの拡大に努める。
イ　会員制度利用者を対象とした事業を実施する。
ウ　企業等と連携し、広報活動やイベントによる博物館の認知度向上に努める。
エ　展覧会事業の協賛企業から各種支援（協賛・協力）を募る。
オ　2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた日本文化を発信する各種事業を検討する。
（九州国立博物館）
ア　賛助会員制度の拡充を図る。

担当部課	交流課 広報課 総務課	事業責任者	課長　山野孝 課長　田中正一 課長　國谷勝伸

【実績・成果】
（4館共通）
ア　「九州国立博物館友の会」、「九州国立博物館メンバーズプレミアムパス」及び「国立博物館メンバーズパス」の会員制度を継続し拡充を図った。
イ　「九州国立博物館友の会」会員を対象に、季刊情報誌『アジアージュ』、特集展示チラシ等を送付した。
ウ　古都太宰府ナイトエリア創出委員会、福岡県観光局等と連携したイベントを実施し、広報活動の充実を図った。
エ　企業より、展覧事業について各種支援（協賛・協力）を得た。
オ　30年度に実施した特集展示及び特別展の一部について、beyond2020プログラムの事業認証を受けた。
（九州国立博物館）
ア　賛助会員の広報に努め、新規会員の獲得を図った。30年度の新規加入数は20団体、25人であった。

【補足事項】
（4館共通）
ア　「九州国立博物館友の会」「九州国立博物館メンバーズプレミアムパス」「国立博物館メンバーズパス」「九州国立博物館賛助会」の会員制度について、当館ウェブサイト、リーフレット、チラシによる広報を行った。
ウ
・西日本新聞社及び公益財団法人九州国立博物館振興財団との共同事業として、国指定重要無形民俗文化財で28年にユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」の1つに登録された「博多祇園山笠」の飾り山を、開館以来連続してエントランスに展示した。
・支援団体である九州国立博物館を愛する会及び近隣市町の小学校と連携し、子どもたちを対象にしたワークショップイベントを開催した。近隣市町の中学校美術展を開催した。
・福岡女子短期大学と連携して館内のカフェで定期コンサートを実施した。
オ　beyond2020プログラム事業認証　11件
（九州国立博物館）
ア　賛助会員（プレミアム会員（個人）3人、特別会員（個人）2人、維持会員（個人）20人、プレミアム会員（団体）1団体、特別会員（団体）3団体、維持会員（団体）16団体）

賛助会感謝会（31年3月）での当館館長による特別展室の展示解説の様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
賛助会等支援組織の会員数	5,332人	－	－	経年変化	5,182	5,777	6,016	5,193
賛助会会員数	45人	－	－		－	－	－	2
友の会会員数	73人	－	－		192	206	268	83
メンバーズプレミアムパス会員数	5,181人	－	－		－	－	－	5,082
国立博物館メンバーズパス会員数	33人	－	－		－	－	－	26
パスポート会員数※	－	－	－		4,990	5,571	5,748	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 各種イベントの実施や、賛助会員制度の広報・拡充等により、企業との連携及び会員制度の活性化を図り、年度計画を実行できた。 ウェブサイトやパンフレット・チラシ等を用いて各会員制度の広報に注力し、5,000人を超える会員数を獲得することができた。今後も当館の活動への理解を深めていただけるよう広報の充実を図り、支援者の増加に努めたい。

【中期計画記載事項】
企業との連携や会員制度の活性化等により博物館支援者の増加を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 賛助会制度や各会員制度の広報など、企業との連携や会員制度の活性化等による博物館支援者の増加を図る取り組みを実施し、中期計画を順調に進めている。今後も活性化を図りたい。

※パスポート会員制度は29年3月31日に廃止。

【書式A】　施設名 文化財活用センター・東博　処理番号 1321HA

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　1)有形文化財に関する情報の発信

【年度計画】
（4館共通）
ア　文化財活用センターが中心となり、収蔵品のデジタル画像による来館者への情報提供及びウェブサイト等での公開を継続して行う。4館共通所蔵品データベース「国立博物館所蔵品統合検索システム　ColBase」については、中国語版、韓国語版を公開するとともに掲載画像を増やし、その充実を図る。
イ　文化財活用センターが中心となり、収蔵品の国宝・重要文化財について、5言語（日、英、中、韓、仏）の説明を付したデジタル高精細画像（e国宝）を継続して公開する。

担当部課	本部文化財活用センターデジタル資源担当 東京国立博物館博物館情報課	事業責任者	課長　田良島哲

【実績・成果】
（4館共通）
・文化財活用センター発足以降、ColBaseの運用を引き継ぎ、不具合の修正や画像の追加を行った（画像追加7,029枚）。12月に中国語、韓国語の所蔵品データを追加した（中国語8,073件、韓国語8,539件）。
・文化財活用センター発足以降、e国宝の運用を東博より引き継ぎ、維持管理を行った。

【補足事項】

ColBase 韓国語データの画面

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 文化財活用センターで管理・運用することとなったColBase及びe国宝を適切に維持管理した。31年度は所蔵品データの修正や内容の追加、画像の追加を継続するとともに、システムの維持・改修を行う必要がある。 e国宝についても、現システム運用開始後10年が経過するので、利便性やデータの品質改善を含めたシステムの更新を行う必要がある。

【中期計画記載事項】
ウェブサイト等において、文化財その他の関連する資料の情報を公開する。公開データの件数は継続的に増加させる。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 文化財その他関連する資料の公開についてウェブ上でさまざまな公開手段を設けるとともに公開データの件数を継続的に増加させた。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1321B

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実 1)有形文化財に関する情報の発信

【年度計画】
（4館共通）
ア　文化財活用センターが中心となり、収蔵品のデジタル画像による来館者への情報提供及びウェブサイト等での公開を継続して行う。4館共通所蔵品データベース「国立博物館所蔵品統合検索システム　ColBase」については、中国語版、韓国語版を公開するとともに掲載画像を増やし、その充実を図る。
イ　文化財活用センターが中心となり、収蔵品の国宝・重要文化財について、5言語（日、英、中、韓、仏）の説明を付したデジタル高精細画像（e国宝）を継続して公開する。
（京都国立博物館）
ア　収蔵品の国宝・重要文化財・その他名品について6言語（日、英、中、韓、仏、西）の説明を付した国宝重要文化財・名品 高精細画像閲覧システムを継続して公開する。
イ　平成知新館レファレンスコーナーの情報閲覧システムにて、収蔵品の画像等を公開する。

担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　羽田聡

【実績・成果】
（4館共通）
ア　「国立博物館所蔵品統合検索システム　ColBase」の充実を図るため、館蔵品の原板フィルムデジタル化を積極的に行った。
イ　収蔵品の国宝・重要文化財について、5言語（日、英、中、韓、仏）の説明を付したデジタル高精細画像（e国宝）を継続して公開した。
（京都国立博物館）
ア　京都国立博物館所蔵国宝重要文化財・名品高精細画像公開システム（KNM GALLERY）については、立ち上げから9年が経過し、セキュリティ対策上の問題も確認されたことから公開停止することとした。以後の画像高精細化・多言語化は、文化財活用センターを中心に推進しているe国宝・ColBaseに統合することで、より多くの人に可能なようにしていく。また、当館ウェブサイト上の館蔵品データベースを引き続き公開し、館蔵品情報を提供した。
イ　館蔵品データベースにおいて画像や解説等を適宜更新し、平成知新館2階レファレンスコーナーの情報閲覧システムを通じ継続して公開した。

【補足事項】
（京都国立博物館）
イ　館蔵品データベースの公開データを487件増加させた。

レファレンスコーナー

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	京都国立博物館所蔵国宝重要文化財・名品高精細画像公開システム「KNM GALLERY」はセキュリティの観点から公開を停止したが、e国宝・ColBaseによる公開や平成知新館レファレンスコーナーやデジタルサイネージを通して、来館者に対する効果的な情報発信を図るとともに、館蔵品データベースの充実を積極的に行い、広報の充実に努めた。

【中期計画記載事項】
ウェブサイト等において、文化財その他関連する資料の情報を公開する。公開データの件数は継続的に増加させる。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	30年度もウェブサイト等を通じて、画像や解説を継続して公開した。館蔵品データベースについても公開データを増加し、中期計画に基づき順調に事業を実施しており、31年度以降も継続していく。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1321C

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　1)有形文化財に関する情報の発信

【年度計画】
（4館共通）
ア　文化財活用センターが中心となり、収蔵品のデジタル画像による来館者への情報提供及びウェブサイト等での公開を継続して行う。4 館共通所蔵品データベース「国立博物館所蔵品統合検索システム　ColBase」については、中国語版、韓国語版を公開するとともに掲載画像を増やし、その充実を図る。
イ　文化財活用センターが中心となり、収蔵品の国宝・重要文化財について、5 言語（日、英、中、韓、仏）の説明を付したデジタル高精細画像（e 国宝）を継続して公開する。
（奈良国立博物館）
ア　仏教美術情報の公開・普及を図る。
イ　収蔵品データベース及び画像データベースで公開している画像について、引き続き非商業目的での使用に無償ダウンロードで提供する。

担当部課	学芸部	事業責任者	資料室長　宮崎幹子

【実績・成果】
（奈良国立博物館）
ア　仏教美術情報の公開・普及を図るべく、既存フィルムのデジタル化や新規撮影を行い、関連データを整備して、インターネットで公開した。ガラス乾板データベースを6月1日から仏教美術資料研究センターにて公開した。
イ　収蔵品データベース及び画像データベースで公開している画像について、引き続き非商業目的での使用に無償ダウンロードで提供した。

【補足事項】
30年度に続き、モノクロ原板のデジタル化とガラス乾板の整理（クリーニング並びに保存箱への封入）を実施した。26年度から行っているガラス乾板の整理は30年度中に完了し、保存棚も新たに設置した。ガラス乾板の整理作業と並行して、ガラス乾板約17,000枚のデジタルデータを登録したデータベースを構築し、6月1日から仏教美術資料研究センターにて公開した。このデータベースとガラス乾板の紹介文を『奈良国立博物館だより』（第106号）に掲載し、好評を得た。
ガラス乾板は博物館黎明期からの歴史資料として、また初期の文化財写真の実例として大変貴重なものであり、昨今大きな注目を集めている。30年度は明治時代の館史史料（列品録）の一部も撮影を実施したが、ガラス乾板との照合により、明治30年（1897）以降の寄託品受け入れの状況も明らかになりつつある。今後とも、保存環境に配慮した資料の整備、館史資料の調査、ならびに情報公開を見据えたデジタル化に向けて、尽力していきたい。

『奈良国立博物館だより』第 106 号

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
デジタル撮影（6,973件）、既存原板のデジタル化（3,047件）、データベースへの登録件数（4,671件）ともに例年に準じた成果をあげており、年度計画を達成したといえる。ガラス乾板の整理とデジタル化及びデータベース公開も実施し大きな成果をあげた。

【中期計画記載事項】
ウェブサイト等において、文化財その他関連する資料の情報を公開する。公開データの件数は継続的に増加させる。

【中期計画に対する評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
各事業の数値が例年に準じたものとなるだけに留まらず、情報の発信についても新たな試みを継続するなど、機能・サービスの強化を図っている。特に近年各所で史料としての意義が注目されているガラス乾板の整理を終え、情報公開が叶ったことも評価される。今後もより豊富な情報の発信につながるよう事業を進める予定である。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1321D

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実 1)有形文化財に関する情報の発信

【年度計画】
（4館共通）
ア　文化財活用センターが中心となり、収蔵品のデジタル画像による来館者への情報提供及びウェブサイト等での公開を継続して行う。4館共通所蔵品データベース「国立博物館所蔵品統合検索システム　ColBase」については、中国語版、韓国語版を公開するとともに掲載画像を増やし、その充実を図る。
イ　文化財活用センターが中心となり、収蔵品の国宝・重要文化財について、5言語（日、英、中、韓、仏）の説明を付したデジタル高精細画像（e国宝）を継続して公開する。
（九州国立博物館）
ア　収蔵品に関する基本情報「収蔵品ギャラリー」を継続して公開する。
イ　対馬宗家文書、装飾古墳、郷土人形データベース等の効率的な運用を検討し、実施する。

担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長　原田あゆみ

【実績・成果】
（4館共通）
ア　4館共通所蔵品データベース「国立博物館所蔵品統合検索システム　ColBase」に新収品を含むデータ342件、新規画像344件を追加で公開した。また、中国語版、韓国語版を公開した。
イ　収蔵品の国宝・重要文化財について、5言語（日、英、中、韓、仏）の説明を付したデジタル高精細画像（e国宝）を継続して公開中である。
（九州国立博物館）
ア　収蔵品ギャラリーは、文化財の基礎情報に加えて展示情報をあわせて提供を続け、収蔵品に関する情報の普及を一層推進するとともに利用者の利便性を向上させている。
　画像データベースを整備し、内外に公開することで利便性とサービスの向上を図った。
イ
・対馬宗家文書のデータベースは公開運用しつつ、公開画像を増やし、利用者の利便性やサービスの向上を高めた。
・装飾古墳データベースは、引き続き公開運用を続けた。
・郷土人形データベースでは、ボランティア・資料整理部によるデータ作成を引き続き実施し、約2,000件のデータを登録した。すべての郷土人形データの整理が完了した。

ColBase 韓国語ページ

資料整理・データ作成の様子

【補足事項】
（九州国立博物館）
ア　30年度はウェブサイト公開用の画像の整理・加工を進め、約1,000件の画像を追加公開した。収蔵品ギャラリーを29年度に公開した画像検索データベースと連動させ、利便性とサービスの一層の向上を図った。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	ColBaseおよび収蔵品ギャラリーにおいてコンテンツを追加公開し、発信する収蔵品情報を充実させた。対馬宗家文書データベース、装飾古墳、郷土人形データベースを引き続き公開した。

【中期計画記載事項】
ウェブサイト等において、文化財その他関連する資料の情報を公開する。公開データの件数は継続的に増加させる。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	情報の充実・拡充を図るなど、中期計画の3年度目としての実績を着実に上げつつある。特に郷土人形データベースは30年度で完成し、これまで外部サーバによる段階的な公開を行っていたが、内部サーバに移行し完全版を公開することができた。これにより31年度以降は外部サーバの借用料等を削減することができた。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1322A

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　2)資料の収集と公開

【年度計画】
（東京国立博物館）
ア　調査研究・教育等博物館の機能全般に関わる情報及び関係資料を収集・蓄積し、広く一般に公開する。
イ　博物館における情報資源の活用に向けて、各種資料のデータ整備を推進し、レファレンス機能とサービスの充実を図る。
ウ　資料館の機能の拡充に向け、施設・設備の見直しを含めた、利用計画を策定する。

担当部課	学芸研究部博物館情報課	事業責任者	課長　田良島哲

【実績・成果】
（東京国立博物館）
ア
・資料館における美術史等の情報・資料の公開のため、11,975 件の図書及び逐次刊行物の収集・整理を行った。
・画像管理システムに画像データ 12,542 件を登録し、既存データ 2,466 件を修正して正確な情報の提供に努めた。
・当館以外で開催された戦前の展覧会カタログ 186 冊のデジタル撮影を行った。また研究情報アーカイブズのデジタルライブラリーおよび「シーボルト旧蔵本デジタル・アーカイブ」において昨年度までにデジタル撮影した洋古書の情報を更新した。
・資料の閲覧、複写及びレファレンスサービスを継続した。（入館者 4,616 人）
・資料の保存のため、和雑誌についての合冊製本を行った。（新規分 448 冊　遡及分 292 冊）
・前年度に続き、図書館システム導入前に整理された和雑誌について、製本単位での所蔵データの作成とバーコード貼付を 4,198 件実施した。
イ
・東京国立博物館の列品を収載している図書について列品番号調査と収載図書データへの列品番号入力を継続して実施した。
・protoDB における文献情報への入力準備として、展覧会カタログ及び当館刊行図書・雑誌に掲載された当館所蔵品の列品番号情報と表示用書誌情報 40,762 件を作成した。
ウ
・2018 年 4 月より ILL（図書館間相互利用）サービスによる文献複写サービスの受付（館内外）を開始し、7 月からは NACSIS-ILL の複写料金相殺サービスに参加した。
・資料館利用案内（右図）を改訂し、10 月の図書館総合展において配布するとともに、ALC（Art Library Consortium）参加の美術館・博物館図書室に送付した。
・特別展関連図書コーナーの設置、新着資料案内等をライブラリーニュースにて発信した。

資料館　利用案内

【補足事項】
ア　新規受入図書　5,508 冊（ロシア語・特殊言語の図書整理外注を含む）
　　既存図書の遡及入力　3,352 冊（主に 1987 年以前の展覧会カタログ複本）
　　逐次刊行物の新規受入　3,115 冊
イ　当館開催展覧会カタログ　20,868 件　他館開催展覧会カタログ　1,595 件
　　当館刊行図書　16,499 件　当館刊行雑誌　1,800 件

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ａ	【判定根拠、課題と対応】 外部の大学図書館等の間での文献複写サービスを新規に導入し、館内外における利便性が向上した。また収蔵品情報に文献情報を追加することにより研究支援サービスを強化できた。

【中期計画記載事項】
美術史学・考古学・歴史学・博物館学・保存科学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、その情報の発信と充実に努める。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 計画に定められた趣旨に則って、適切に資料の収集整理と公開を継続して行い、時宜に応じたサービスの改善を図っている。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1322B

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　2)資料の収集と公開

【年度計画】
（京都国立博物館）
ア　資料・画像・蔵書等の各研究支援データベースや研究情報ストレージについて整備を継続して実施し、資料の保守・管理や検索性を向上させる。

担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　羽田聡

【実績・成果】
ア　29年度に引き続き、文化財情報システムについて、館内業務に適応するため、登録、検索及び管理項目等の改修を行い、作業効率の向上を図った。
・画像ストレージ（研究系ストレージ群）の増強を行った。
・調査、研究、教育等に資するため、図書資料においては、新規図書3,162冊、逐次刊行物1,211冊を収集し、データベースへの登録を行った。

【補足事項】
ア　原板フィルムのスキャニング事業が順調に進んでいるため、当初の画像ストレージ整備計画を見直し、約20TBから48TBに増強を図ることとした。

ラック実装状況

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	文化財情報システムの改修を行い、資料の管理や検索性が向上された。また、画像ストレージを増強することにより、今後フィルムのデジタル化を促進する体制を整えた。

【中期計画記載事項】
美術史学・考古学・歴史学・博物館学・保存科学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、その情報の発信と充実に努める。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	29年度に引き続き、展覧会関連の調査・研究等を中心として基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料を計画通りに蓄積することができた。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1322C

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　2)資料の収集と公開

【年度計画】
（奈良国立博物館）
ア　図書情報システム及び写真情報システムによる資料整備と情報蓄積を推進し、内外の利用者に対してサービスの充実を図る。

担当部課	学芸部	事業責任者	資料室長　宮崎幹子

【実績・成果】
（奈良国立博物館）
ア　図書情報システム及び写真情報システムによる資料整備と情報蓄積を推進し、仏教美術資料研究センターでの資料公開を継続した。
　図書については内外の利用者に対してサービスの充実を図るべく、仏教美術に関連する図書資料の収集を積極的に行い、システムに登録した（和書2,587冊、漢書46冊、洋書36冊、計2,669件）。写真については、デジタル撮影（6,973件）、既存原板のデジタル化（3,047件）、システムへの登録（4,671件）を行った。

【補足事項】
　博物館における調査研究成果の公表や一般への情報公開をさらに促進させるため、かねてより検討していたリポジトリを構築し、10月10日よりインターネットでの公開を行った。リポジトリでは、当館研究紀要『鹿園雑集』に掲載の論文や『奈良国立博物館だより』に掲載の記名原稿あわせて約600件と、館蔵品の報告書などを提供している。
　リポジトリの公開にあたっては、美術史研究に不可欠である画像の公開を十全に行うべく、文化財所有者に事前に承諾を得るなどして、できるかぎり誌面と同様の情報が公開できるように努力した。
　リポジトリの構築から諸手続、登録作業を経て公開にいたるまでの経緯について『アート・ドキュメンテーション通信』（119号）や『読売新聞』（7月10日）に記事を執筆するなど、情報の共有や広報にも努めた。
　リポジトリの公開は、国立博物館では初めての試みであり、大方の好評を得ることができた。今後とも情報サービスの充実に尽力したいと考えている。

奈良国立博物館リポジトリ

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
　資料の収集・蓄積、仏教美術資料研究センターの利用者ともに例年に準じた数値をあげており、所期の目標を達成したとみなされる。また、国立博物館では初めての試みとなったリポジトリの公開も特筆されるべき成果である。

【中期計画記載事項】
　美術史学・考古学・歴史学・博物館学・保存科学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、その情報の発信と充実に努める。

【中期計画に対する評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
　数値的に当初の目標を達成しているだけにとどまらず、リポジトリの公開を実現させるなど、情報の発信と充実に多方面から取り組んでいる。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1322D

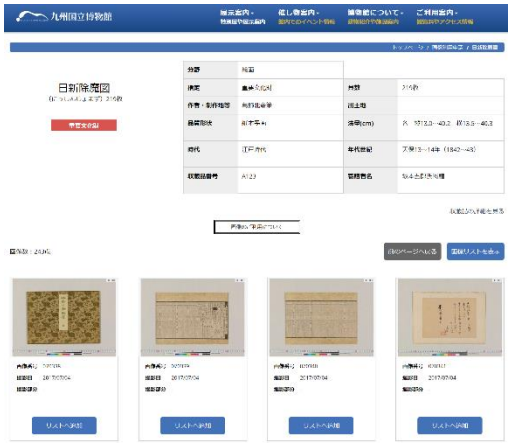
中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　2)資料の収集と公開

【年度計画】
（九州国立博物館）
ア　画像管理システムにおけるデータベースの充実・構築に努め、内外の利用に供する。

担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長　原田あゆみ

【実績・成果】
（九州国立博物館）
ア
蔵書管理
・新規に図書1,190点、雑誌993点、図録・報告書2,993点を購入又は受贈し、蔵書管理システム（日本事務器製ネオシリウス）に登載した。
・蔵書管理システムへの書誌・所蔵データ登録を継続し、登録冊数の総数は190,874点となった。
・福岡県古賀市に別置していた図書70,312点について、蔵書管理システムにおけるデータの点検・整理を実施し、より適切な情報利用環境を整えた。
画像管理
・文化財情報システムの一部として運用している画像管理システムに画像を14,856点追加登録し、館内での文化財情報の利活用を促進した。
・29年度に公開した画像検索システムに1,981点の画像を新規に追加し、文化財画像の利用に係るサービスを向上させた。

画像管理システム



画像検索システムで新規に公開した画像

【補足事項】
（九州国立博物館）
ア　画像利用申請のうち5割以上が、29年度に公開した画像検索システムを活用して申請書が作成されている。申請件数も増加傾向であり、資料情報の発信及びその情報の利活用の促進に寄与している。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	新規に図書1,190点、雑誌993点、図録・報告書2,993点を購入または受贈し、蔵書管理システムに登録している蔵書データの整備を着実に実施した。画像管理システムは、収蔵品管理システムと連動させつつ、内容の充実を図った。

【中期計画記載事項】
美術史学・考古学・歴史学・博物館学・保存科学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、その情報の発信と充実に努める。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	中期計画3年度目にあたり、当館の蔵書データ一般公開のための基盤整備（図書データの書誌・目録整備を遂行）を推進した。画像管理システムは内容の充実を図り、より使いやすいシステムとして整備を進めた。 31年度以降も図書目録整備を進める。画像に関しては、収蔵品の新規撮影を進め、年々増加している画像利活用のため公開できる画像を増やしていく。

【書式A】　施設名 本部　処理番号 1323-1H

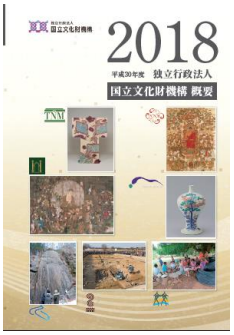
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実　3)-1 広報計画の策定と情報提供

【年度計画】
（機構本部）
ア　機構の概要、年報を作成する。
イ　機構本部ウェブサイトを運用し、機構に関する情報の提供を行う。
ウ　文化財活用センターウェブサイトを開設し、センターに関する情報の提供を行う。

担当部課	本部事務局総務企画課 本部文化財活用センター企画担当	事業責任者	課長　伊藤進吾 課長　松嶋雅人

【実績・成果】
（機構本部）
ア
・『独立行政法人国立文化財機構概要　平成30年度』（日本語版・英語版）を6月に発行し、PDF版を機構本部ウェブサイト（https://www.nich.go.jp/）に掲載した。
・『独立行政法人国立文化財機構年報　平成29年度』を31年1月に発行し、PDF版を機構本部ウェブサイトに掲載した。
イ
・機構本部ウェブサイトの運用を継続した。掲載情報の追加更新を行い、広く一般に向けた法人情報の提供を行った。
・組織改編に伴い、ホームページ構成のリニューアル及びバナーの設置を行った。
・ウェブサイトのTLS化を行った（31年1月8日）ほか、必要なセキュリティ対策を随時実施した。
ウ　文化財活用センターウェブサイトを開設し、センターに関する情報の提供を行った。

【補足事項】
ア
・『独立行政法人国立文化財機構概要　平成30年度』は、日本語版と英語版を別冊子に分けて作成した。（日本語版2,200部、英語版：900部。いずれもカラー28ページ。）
・『独立行政法人国立文化財機構年報　平成29年度』：210部、カラー 4ページ・モノクロ959ページ。
ウ
・文化財活用センターウェブサイト（https://bkc.nich.go.jp/）を7月1日に開設した。
・ウェブサイトの内容や機能性についてセンター発足後に改めて検討を行い、より効果的なサイトへのリニューアルに着手した。



『独立行政法人国立文化財機構
概要　平成 30 年度』（日本語版・英語版）

文化財活用センターウェブサイト

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 年度計画どおり、概要、年報を作成し、ウェブサイトの運用を行った。 また、文化財活用センターウェブサイトの開設により、機構の新たな活動について広く一般に向けた情報提供を行うことができた。

【中期計画記載事項】
広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、並びにマスメディアや上野「文化の杜」新構想実行委員会の加盟機関をはじめとする近隣施設との連携強化等により、積極的な広報を行う。
ウェブサイトの運用においては、アクセス件数の向上を図り、各施設の工事等による影響を勘案しつつ、前中期目標の期間の実績以上を目指す。さらに、時宜的なニーズに応じたウェブサイトの構築等について、一層の改善を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿って、印刷物の作成、ウェブサイトの運用による情報提供を行うことができた。31年度以降も引き続き、ロゴマークの活用、印刷物の見直しと改善、ウェブサイト等の適時適切な更新等、多方面での積極的な広報に努める。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1323-1A

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実　3)-1 広報計画の策定と情報提供

【年度計画】（４館共通）ア　年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行う。
（東京国立博物館）総合文化展の活性化に重点をおいた広報活動を行う。
ア　広報・宣伝制作物の企画・制作・配布等を行う。
イ　「博物館でお花見を」、「博物館に初もうで」を軸とした総合文化展の広報の企画・運営を行う。
ウ　公式キャラクターを活用した広報活動を行う。

担当部課	学芸企画部広報室	事業責任者	室長　鬼頭智美

【実績・成果】
（４館共通）
ア　30年度年間スケジュールリーフレット（「東京国立博物館　展示・催しのご案内」2018.4-2019.3）を配布した。29年度同様体裁をA3二つ折とし、館内配布するとともに旅行社、メディア各社等に送付、周知を図った。また、31年度年間スケジュールリーフレットを90,000部制作した。
（東京国立博物館）
ア・『東京国立博物館ニュース』(隔月刊・50,000部)を作成、配布した。また、隔月でマスコミ等300件余に「定期情報」を送付、主な事業については別途プレスリリースを作成、配信会社も活用しより広く適切なメディアに対してのアプローチを行った。また各事業の特性に合わせて1,200件程度学校、ホテル等にチラシ・ポスターのDM発送を行った。周知にあたってはWEBサイト、SNS(Twitter、Facebook、Instagram)も活用した。
・29年度に夜間開館PRチラシ・ポスターを作成したが、さらなるPRのため、英語、中国語（簡体字)、韓国語の情報を追記して再版した。
イ　「博物館でお花見を」、「博物館でアジアの旅」、「博物館に初もうで」及び特別企画「斉白石」では、ポスター・チラシを作成、館内配布及びDM発送を行ったほか、プレスリリースをマスコミ等に発送・配信した。
ウ　広報大使として公式キャラクター「トーハクくん」「ユリノキちゃん」を活用し、キッズデーなどイベント開催時を中心に登場して館内で来館者と触れ合うほか、博物館外でのイベントに参加、広報活動に努めた。

【補足事項】（東京国立博物館）
ア　『東京国立博物館ニュース』は6・7月号より部数を増やし、館内外で積極的に配布した。
ウ　群馬県藤岡市で開催された「群馬古墳フェスタ2018」に登場したほか、「世界キャラクターさみっと in羽生」に参加、東京国立博物館のブースを展開、ワークショップを行うなど、館の広報に寄与した。

『東京国立博物館ニュース』
2018年6・7月号

世界キャラクターさみっと
in羽生

夜間開館ポスター

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	計画通り定期刊行物及び定期的な情報を発信、総合文化展関係でのマスコミ報道を獲得した。また、夜間開館のPRを実施した。公式キャラクターについては、キッズデー、国際博物館の日など適正な時機に登場し、来館者が博物館に親しんでいただけるよう活動した。また、30年度は新たに「群馬古墳フェスタ」イベントに登場するなど、公式キャラクターを活用した広報活動についても充分に行うことができた。

【中期計画記載事項】展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容及び学術的な意義並びに各種アンケート等分析結果も踏まえて戦略的な広報計画を策定し、情報提供を行う。また、広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、並びにマスメディアや上野「文化の杜」新構想実行委員会の加盟機関をはじめとする近隣施設との連携強化等により、積極的な広報を行う。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	中期計画どおり個々の企画、対象等を考慮し、広報印刷物・ウェブサイト・SNSなど自主媒体を活用した広報活動を展開し、一般及びメディア媒体への認知度は年々着実に浸透力を高めている。30年度は部数を増刷した『博物館ニュース』を館内外で積極的に配布し、自主媒体の充分な活用ができた。中期計画の達成を目指し、今後も自主媒体を活用するなど、積極的な広報活動を展開していきたい。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1323-1B

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実 3)-1広報計画の策定と情報提供

【年度計画】
（4館共通）
ア　年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行う。
（京都国立博物館）
ア　広報・宣伝制作物の企画・製作・配布等を行う。
イ　文化大使を引き続き任命し、広報活動を行う。
ウ　公式キャラクターを活用した広報活動を行う。

担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長　數馬厚人 企画室長　山川曉

【実績・成果】
（4館共通）
ア　30年度年間スケジュールリーフレットの配布及び31年度分の製作（40,000部）を行った。
（京都国立博物館）
ア
・新春特集展示のポスター（2,000部）、チラシ（115,000部）の製作・配布を行い、他に特集展示等のポスター、チラシの製作・配布を行った。
・新たに京都国立博物館パンフレット2019（10,000部）を制作・配布した。
イ　文化大使を引き続き任命し、広報活動を行った。
ウ　PR大使として、公式キャラクター「トラりん」を活用し、広報活動を行った。

トラりん YouTube チャンネル

【補足事項】
（京都国立博物館）
ア
・新春特集展示のポスター、チラシに12月～31年2月に実施した新春特集展示「亥づくし」、特集展示「京の冬景色」、特集展示「美麗を極める中国陶磁」の情報を掲載した。
・特別企画「中国近代絵画の巨匠　斉白石」においてはポスター・チラシを製作し、特集展示「謎解き美術！最初の一歩」、「百萬遍知恩寺の名宝」、「初公開！天皇の即位図」、「雛まつりと人形」においてはチラシ・リーフレットを配布した。
・京都市内のホテルを中心に外国語を用いた展示を紹介するアートカードを設置し、外国人観光客の誘致を行った。

ホテルフロントへの
アートカード設置

イ
・博物館の活動の周知とイメージアップを図り、当館が幅広い年齢層に受け入れてもらえるよう、引き続き文化大使として俳優の竹下景子氏、井浦新氏、藤原紀香氏を任命した。文化大使は特別展開会式に登壇し、ブログ等により展覧会の広報を行った。
ウ
・トラりんのブログやツイッター、フェイスブックに加えて新たにYouTubeチャンネルを開設し、展覧会や博物館の情報を発信した。
・トラりんを最大毎週3日、1日5回（展覧会により異なる）館内に登場させ、来館者と触れ合うことで親しみやすい博物館のイメージの浸透を図った。
・埼玉の全国的なキャラクターイベントや京都、大阪、広島の他の博物館にトラりんを出張させ、キャラクターを通じて幅広く当館をPRした。
・キャンパスメンバーズ加入校をトラりんが回り、キャンパスメンバーズの特典を広報し、特別展への来館を促した。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 定期刊行物の作成及び年間スケジュール、展覧会チラシの製作・配布を充分に行うことができた。また、外国人観光客を意識した有料広告を掲出したり、公式キャラクターを活用して各種イベントへ出演、YouTubeチャンネルを開始したりするなど、当館に馴染みのない層へのPRに着手できた。以上のことから、年度計画を充分に達成することができた。

【中期計画記載事項】
展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容及び学術的な意義並びに各種アンケート等分析結果も踏まえて戦略的な広報計画を策定し、情報提供を行う。また、広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、並びにマスメディアや（中略）近隣施設との連携強化等により、積極的な広報を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画3年目として、広報印刷物の製作及び当館ウェブサイト上の公式ツイッターや公式キャラクターなどの多様な媒体を活用し、積極的な広報を行うことができた。31年度についても媒体の形態に囚われることなく、積極的に広報活動を行いたい。

【書式Ａ】　施設名　奈良国立博物館　処理番号　1323-1C

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実 3)-1広報計画の策定と情報提供

【年度計画】
（４館共通）
ア　年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行う。
（奈良国立博物館）
ア　広報・宣伝制作物の企画・制作・配布等を行う。
イ　文化大使を引き続き任命し、広報活動を行う。
ウ　写真・映像の撮影等に場所を提供し、協力することにより博物館の認知度を高める。

担当部課	総務課	事業責任者	課長　臣守常勝

【実績・成果】
（４館共通）
ア　年間スケジュールリーフレットの制作・配布を年2回行った。また、当館ウェブサイトからもダウンロードができるサービスを継続して実施した。
（奈良国立博物館）
ア
・各展覧会の特性や意義に応じた広報の方針を議論する広報戦略委員会を3回実施した。
・インバウンド対策として、特別展の割引券を4言語表記で作製し、近隣の宿泊施設や観光案内所等に配布した。
・特別展「春日大社のすべて」において、「春日大社参道マップ」を作製し、近隣の宿泊施設や寺社に配布した。
・特別展「春日大社のすべて」の鑑賞の手引きとして、小・中学生を対象に「かるたで学ぼう-春日大社のすべて-」を作製した。
イ　笑い飯・哲夫氏（よしもとクリエイティブ・エージェンシー）を文化大使に任命し、出演するテレビやラジオ等で博物館のPRをしていただいた。
ウ　当館の認知度を高めるために、CMの撮影場所として仏教美術資料研究センター関野ホールを提供した。

【補足事項】
（奈良国立博物館）
ア
・特別展「春日大社のすべて」において、名所・旧物を訪ねながら参道を散策できるイラストマップを作製し、博物館の認知度向上に繋げた。
・小中学生が楽しみながら展覧会を学べるように「かるたで学ぼう-春日大社のすべて-」を作製した。

春日大社参道マップ

かるたで学ぼう-春日大社のすべて-

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 文化大使である笑い飯・哲夫氏によって、親しみやすく博物館や展覧会の紹介していただくことで、博物館のイメージアップに繋げることができた。 4言語（日・英・中・韓）表記での割引券を近隣社寺や観光案内所に配布する等、外国人観光客を取り込むための対策を実施した。

【中期計画記載事項】
展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容及び学術的な意義並びに各種アンケート等分析結果も踏まえて戦略的な広報計画を策定し、情報提供を行う。また、広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、並びにマスメディアや（中略）近隣施設との連携強化等により、積極的な広報を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 館内委員会や共催者との会議において、展覧会毎に広報計画を策定し、企画の目的や内容、対象者に応じた効果的な情報発信を行うことを図った。小中学生を対象としたかるた付きジュニアガイドのような特徴のある印刷物を作製する等、積極的な広報活動を行った。

【書式Ａ】　施設名　九州国立博物館　処理番号　1323-1D

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実 3)-1広報計画の策定と情報提供

【年度計画】
（４館共通）
ア　年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行う。
（九州国立博物館）
ア　特別展の実施に伴う広報・宣伝材料を制作する。
イ　現在及び過去や将来の展示リストを検索・紹介し、展示情報を発信するためのウェブデータベースの整備を継続する。
ウ　ポスター・チラシ・ウェブコンテンツを活用し、文化交流展示室からの積極的な情報発信を図る。
エ　アンテナショップ「九州国立博物館ミュージアムショップ参道」での情報発信を継続する。

担当部課	学芸部企画課 広報課	事業責任者	課長　白井克也 課長　田中正一

【実績・成果】
（４館共通）
ア　年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行った。(31,000部)
（九州国立博物館）
ア　特別展の実施に伴い、担当研究員によるテレビ、ラジオ番組への出演や、地元の新聞やフリーマガジン等への展覧会内容の掲載を行うなど、マスコミによる広報・宣伝を行った。
イ　ウェブデータベースの整備を継続し、当館ウェブサイトから詳細な展示品情報を提供した。
ウ　文化交流展室で開催した特集展示のポスター・チラシを作成し、情報発信を図った。また、特集展示の PR 動画を制作し、ウェブサイト上で公開した。
エ　太宰府天満宮参道にあるアンテナショップ入口に特別展バナーを設置し、参拝客への展覧会PRを図った。

【補足事項】
（九州国立博物館）
ア・参道フラッグの設置など太宰府観光協会と連携した広報活動を実施した。
　・商工団体へ「展示・イベント案内ちらし」を毎月、季刊情報誌『アジアージュ』を年4回送付し、会員等への周知を依頼した。
ウ　ポスター・チラシ・ウェブコンテンツのほか、参道フラッグやアンテナショップの日除け幕等を活用し、文化交流展示室からの積極的な情報発信を図った。

動画配信による特集展示の PR

アンテナショップでの日除け幕の活用とフラッグ掲出の様子

【定量的評価】項目	29年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 リーフレット、ポスター・チラシなどの制作や活用を行うほか、展示替えの情報や、敷地内の紅葉や季節の花などの自然環境の細かな情報等をSNS（ツイッター）によって発信することで、来館者の関心を高めるよう努めた。

【中期計画記載事項】
展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容及び学術的な意義並びに各種アンケート等分析結果も踏まえて戦略的な広報計画を策定し、情報提供を行う。また、広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、並びにマスメディアや（中略）近隣施設との連携強化等により、積極的な広報を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 中期計画のとおり、企画の目的や内容等を考慮し、多様なメディアを用いて幅広い広報を実施することができた。今後も様々な媒体を通じた広報を戦略的に実施していきたい。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1323-2A

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実　3)-2 マスメディアや近隣施設との連携強化等による広報活動

【年度計画】
（4館共通）
ア　マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開する。
（東京国立博物館）
ア　報道発表会、内覧会、懇談会等を通じ、主要メディアの文化担当記者をはじめとしたマスコミとの連携を強化する。
イ　上野「文化の杜」新構想実行委員会の加盟機関をはじめとする近隣施設と連携したイベントの実施及び広報活動の充実を図る。

担当部課	総務部総務課 学芸企画部広報室	事業責任者	課長　竹之内勝典 室長　鬼頭智美

【実績・成果】
（４館共通）
ア　マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開した。
（東京国立博物館）
ア　特別展・特集展示及び教育事業についてマスコミ向けに情報を送付するとともに、記者発表会を6回、報道内覧会を7回開催した。
イ　上野「文化の杜」新構想実行委員会に加盟し先導的な役割を果たすとともに、社会的包摂プロジェクト「UENOYES バルーン DAYS 2018」やコンサートを開催した。また、イベント時の託児施設の開放など、地域との連携交流事業等を実施した。

【補足事項】
（4館共通）
ア　29年度に実施した成田国際空港会社・スリーエム ジャパン株式会社との連携事業である、成田国際空港第１ターミナルでの当館収蔵品画像を使った壁面・天井装飾に、新たに壁面・天井装飾エリアを増設した。空港利用者の視覚に訴えかけるような装飾で収蔵品を紹介することによって、当館への送客を図った。
（東京国立博物館）
ア　特別展に加え、親と子のギャラリー「トーハク×びじゅチューン！　なりきり日本美術館」(7月23日)においても報道内覧会を実施するとともにプレスリリースを発信、新聞主要紙・美術系番組制作者等に適時性を持って情報を提供し新聞・テレビなどで紹介された。

成田国際空港第１ターミナル壁面装飾（12 月増設分）

「トーハク×びじゅチューン！ なりきり日本美術館」報道内覧会

イ　上野「文化の杜」新構想実行委員会のウェブサイトや台東区文化芸術総合サイト等へイベント情報の広報を積極的に実施した。また、「UENOYES バルーン DAYS 2018」の一環として、旧博物館動物園駅の公開イベントに協力するとともに、アクセシビリティ向上事業として、イベント時の託児施設の開放や、上野地区のバリアフリーマップの作成・公開に協力した。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ａ	【判定根拠、課題と対応】 特別展の記者発表会や報道内覧会には毎回150名～200名程度の記者が出席、各展覧会の広報を効果的に行うことができた。また、親と子のギャラリー「トーハク×びじゅチューン！　なりきり日本美術館」では、総合文化展内の企画であったが、多くの報道を得た。 上野「文化の杜」新構想実行委員会においても各施設と連携して効果的な事業を実施するとともに、台東区等の地域と連携した広報活動によって相乗的な周知を図った。 また、成田国際空港第１ターミナルの壁面装飾を拡充することができ、当初の計画以上に十分な広報活動を行うことができたといえる。

【中期計画記載事項】（略）広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、並びにマスメディアや上野文化の杜新構想実行委員会の加盟機関をはじめとする近隣施設との連携強化等により、積極的な広報を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 中期計画どおり広報印刷物・動画サイトや新規ツールも含めたSNS運営などの実施により、一般及びメディア媒体への認知度は年々着実に浸透力を高めている。また、成田国際空港第１ターミナルの壁面装飾を拡充することなど、積極的な広報活動を展開できている。今後も自主媒体及び外部の媒体を活用し、時機にかなった話題を提供し、広報活動を充実させたい。 上野「文化の杜」新構想実行委員会のウェブサイトの作成や広報活動への先導的な役割を果たすなど、台東区等の地域と連携した積極的な広報を行った。

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1323-2B

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実 3)-2マスメディアや近隣施設との連携強化等による広報活動

【年度計画】
（４館共通）
ア　マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開する。
（京都国立博物館）
ア　地域等が主催する各種委員会に参加・連携し、広報活動を展開する。
イ　京都市内4美術館・博物館（京都国立博物館、京都国立近代美術館、京都文化博物館、京都市美術館）で連携し、共通の展覧会情報パンフレットを制作・配布する。

担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長　數馬厚人 企画室長　山川曉

【実績・成果】
（４館共通）
ア
・特別展「京のかたな　匠のわざと雅のこころ」において、JR東海と連携して特別な旅行プランを企画した。また、JRが持つ広報媒体を活用し特別展イメージの露出を増大させた。
・31年度特別展の首都圏向け記者発表を共催者と連携して実施した。「流転100年 佐竹本三十六歌仙絵と王朝の美」の記者発表は東京国立博物館(応挙館)を会場とした。

応挙館での記者発表の様子

（京都国立博物館）
ア
・周辺寺社及び商店街等で構成される東山南部地域活性化委員会に参加し、9月29日、30日に開催を予定していた同委員会主催の「第5回太閤祭り」（於：豊国神社）に協力した。（祭りは台風のため中止）
・当館が立地する地域は古くから陶磁器生産が盛んなことから、陶磁器組合と連携して当館で4日間にわたって陶磁器マルシェを開催し、およそ2,500名の参加者があった。
イ
・京都市内4美術館・博物館で組織する「京都市内4館連携協力協議会」での連携協力として、合同パンフレットを作成し、4館を巡るスタンプラリーを実施した。
○　その他、行政や近隣施設、大学等と連携し、広報活動を実施した。

【補足事項】
（４館共通）
ア
・記者発表を合わせて７回行った。
・特別展「京のかたな」の初回記者発表の様子はインターネットで生配信し、マスメディアに加え特別展に関心を持つ一般の方々の話題も集めた。
・東京国立博物館を会場とした記者発表は、当該特別展の広報に繋がることはもとより、東京国立博物館の宣伝という相乗効果を伴うものであった。
○その他、行政や近隣施設、大学等との連携内容は以下の通り
・文化庁創立50周年及び国際博物館会議（ICOM）京都大会開催1年前を記念して9月30日に記念オリジナルグッズを4,000部配付し、当館との繋がりをPRした。
・ロケ地情報サイトや京都文化交流コンベンションビューローと連携し、当館のユニークベニューの情報を発信した。
・京都市内のタクシー会社と連携し、タクシー会社向けの解説付き特別展内覧会を開催して乗客への広報を依頼した。
・京都女子大学学生によるファッションショー及びプロジェクションマッピングに協力し、当館を会場として実施した。開催中の特別展に合わせたモチーフが披露され、特別展の広報に加え大学との連携・地域活性化に貢献した。

京都女子大学ファッションショー
＆プロジェクションマッピング

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 従来の広報活動に加え、行政や近隣施設、大学とも連携を強化して活動を行うことができた。また、マスメディアや地域と連携した広報活動を十分に行い、特別展の集客へと結実させた。記者発表自体に新たな試みを盛り込むなど広報を意欲的に行い、年度計画を十分に達成することができた。

【中期計画記載事項】
（略）広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、並びにマスメディアや（中略）近隣施設との連携強化等により、積極的な広報を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 中期計画3年目として、行政や近隣施設、大学との連携強化による積極的な広報活動を充分に行うことができた。引続き京都という立地を生かした広報を展開し、集客へと繋げていきたい。

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1323-2C

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実 3)-2マスメディアや近隣施設との連携強化等による広報活動

【年度計画】
（４館共通）
ア　マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開する。
（奈良国立博物館）
ア　近隣社寺・博物館等との連携により、集客増に繋がる広報活動を展開する。
イ　展覧会、博物館活動への理解・促進を図るため、マスコミへの情報提供を行うとともに取材を積極的に受け入れる。
ウ　地域の自治体・商工団体・観光団体等と連携した広報活動の展開を図る。
エ　近隣社寺等において展覧会チラシの配布など広報協力を依頼する。

担当部課	総務課	事業責任者	課長　臣守常勝

【実績・成果】
（４館共通）
ア　特別展においては、主催者である新聞社と連携し積極的に紙面広告を掲載することで展覧会の広報を行った。また、公共交通機関とタイアップした社内吊り広告や駅貼ポスターの掲出や、地下鉄駅構内の有料広告スペースへのポスターの掲出により展覧会に関する情報発信を行った。
（奈良国立博物館）
ア　奈良トライアングルミュージアムズ（奈良国立博物館・奈良県立美術館・入江泰吉記念奈良市写真美術館）として、PR イベントや相互割引を実施し、博物館の認知度向上及び集客増を図った。また、特別展「春日大社のすべて」について、JR 東海と協力して、近隣社寺との共通拝観券を販売した。
イ　文化財の展示公開に際し、マスコミ向けの内覧を特別展で 3 回、特別陳列で 2 回、特集展示で 1 回、その他で 2 回開催した。そのほか個別の報道機関からの取材依頼にも、可能な限り応じた。
ウ　30 年度文化庁「地域の美術館・歴史博物館クラスター形成支援事業」に採択され、地元自治体と連携して観光イベントを行う等、博物館を含めた奈良公園全体の活性化に繋がる事業を実施した。
エ　期間限定の無料観覧券を周辺関連社寺において配布し、展覧会の広報と博物館の認知度アップに繋げた。

【補足事項】
（奈良国立博物館）
ア　JR東海の個人型旅行商品「うまし　うるわし　奈良」キャンペーンと連携して、特別展「春日大社のすべて」「春日大社国宝殿」「興福寺国宝館」「円成寺」の共通拝観券を販売し、集客増に繋げた。
ウ　特別展「春日大社のすべて」において、近隣商店街各店舗の店頭で展覧会PR用のフラッグを掲出したり、有名かき氷店とタイアップ企画を実施したりする等、近隣商店街と協力して広報を行った。

共通拝観券

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 特別展においては主催者であるマスメディアと協力して情報発信に努めた。また、公共交通機関とタイアップしての広報活動も行うことができた。更に、30年度は近隣商店街や関係社寺との連携を強化してPRイベント実施する等、地域に根ざした広報活動を展開して集客増に繋げた。

【中期計画記載事項】
（略）広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、並びにマスメディアや（中略）近隣施設との連携強化等により、積極的な広報を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 自主媒体を活用した情報発信、マスメディアと協力した広報活動を実施できている。次年度以降も「地域の美術館・歴史博物館クラスター形成支援事業」を通じて、地元自治体や近隣社寺との連携を更に強化し、奈良公園全体を範囲とした共通観覧券を作製する等、積極的な広報活動を展開していく。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1323-2D

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実 3)-2マスメディアや近隣施設との連携強化等による広報活動

【年度計画】
（4館共通）
ア　マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開する。
（九州国立博物館）
ア　報道発表会、内覧会、懇談会等を通じ、主要メディアの文化担当記者をはじめとしたマスコミとの連携を強化する。
イ　地域の自治体・商工団体・観光団体・公共交通機関等と連携した広報活動を展開する。
ウ　九州観光推進機構等を通じた海外への広報・営業活動を展開する。
エ　近隣地域の諸団体や支援団体等と連携したイベントの実施及び広報活動の充実を図る。

担当部課	広報課 総務課	事業責任者	課長　田中正一 課長　國谷勝伸

【実績・成果】
（4館共通）
ア　マスコミ各社を対象とする懇談会を3回実施した。(7月18日、31年2月27日、3月15日)
（九州国立博物館）
ア
・ポスター、チラシ、「展示・イベントスケジュール」、参道フラッグの設置など太宰府観光協会と連携した広報活動を実施した。
・商工団体へ「展示・イベントスケジュール」、季刊情報誌『アジアージュ』を送付し、会員等への周知を依頼した。
イ
・福岡県が運営するポップカルチャー配信サイト「アジアンビート」に博物館情報を掲載した。
・九州観光連盟が主催するアジア各地での旅行会社を対象としたインバウンドイベントで当館のチラシを配布した。
ウ　古都太宰府ナイトエリア創出委員会や九州国立博物館を愛する会との地域連携イベントを実施し、広報活動の充実を図った。
エ　太宰府天満宮等の協力を得て、九州国立博物館広報番組「太宰府 九博 散歩道」を製作し、年6回放映した。

【補足事項】
（4館共通）
ア　31年度開催の特別展「室町将軍」の記者発表および懇親会を東京で行い、在京のマスコミ関係者との交流を図った。

地域連携イベント　太宰府秋の夜祭り（11 月 16～17 日）

太宰府古都の光（9 月 25 日）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 29年度に引き続き、ポスター・チラシなどの制作や活用を行ったほか、夜間開館に合わせ、古都太宰府ナイトエリア創出委員会によるイベントを実施した。近隣地域の諸団体と連携したイベントを実施したことで、夜間開館の周知を図ることができた。

【中期計画記載事項】
（略）広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、並びにマスメディアや（中略）近隣施設との連携強化等により、積極的な広報を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 29年度に引き続き、中期計画のとおり、広報印刷物やウェブサイト等を活用し、近隣施設や団体と協力して広報を実施することができた。また、夜間開館について、近隣地域の諸団体と連携した新たなイベントを打ち出すことができた。31年度以降も諸団体と連携しながら積極的に広報を行いたい。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1323-3A

中項目	１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実　3)-3 広報印刷物、ウェブサイト等の充実

【年度計画】
（４館共通）
ア　ウェブサイトによる情報提供を行う。また、各施設の工事等による影響を勘案しつつ、ウェブサイトのアクセス件数の向上を目指す。
イ　メールマガジンを配信する。
（東京国立博物館）
ア　『東京国立博物館ニュース』の編集・発行・配布を行う。（年６回）
イ　ウェブサイトでは、ブログ等博物館の顔が見えるコンテンツを継続して発信する。
ウ　SNS（Twitter、Facebook、Instagram を含む）を活用した情報発信を継続して行う。

担当部課	学芸企画部博物館情報課 学芸企画部広報室	事業責任者	課長　田良島哲 室長　鬼頭智美

【実績・成果】
（４館共通）
ア　ウェブサイト、モバイルサイトによる情報提供を行った。また、毎週の展示替え情報を一覧で確認できるウェブページを30年11月に追加した。
イ　メールマガジンを配信した（26回）。
（東京国立博物館）
ア　『東京国立博物館ニュース』を隔月（年6回）で各50,000部を制作、配布・送付した。
イ　ブログ88エントリー、投票・ツイッターアンケート7回により、展示・催しもの、またキャラクターの活動等について紹介し、博物館に親しんでもらえるよう努めた。
ウ　SNS（Twitter、Facebook、Instagram等）により適時性のある情報を発信し、利用者から好意的な反応を多く得た。

【補足事項】
（東京国立博物館）
ウ　Twitter：フォロワー66,652件(29年度は59,732件)、Facebook：いいね！29,217件（29年度は26,498件）。以上を見れば分かる通り、29年度より着実に数を伸ばしている。また、28年8月30日アカウント開設以来、Instagramではフォロワー8,223件を獲得し、31年度はさらに多くのフォロワー獲得が期待される。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化 ※1･2		26	27	28	29
ウェブサイトのアクセス件数※1	7,679,851件	5,380,118件	A		①	4,248,437	6,724,460	6,433,867	7,014,006
					②	4,929,191	7,427,419	7,427,419	

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 ウェブサイトのアクセス件数は目標値以上の成果を達成し、SNSのフォロワー数も充分に確保できている。 今後は特にTwitter、Instagramのフォロワー数を増やすとともに、ツイッターのクイズ機能等を活用し、新たなユーザー開拓を図りたい。

【中期計画記載事項】
（略）広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、（中略）等により、積極的な広報を行う。
ウェブサイトの運用においては、アクセス件数の向上を図り、各施設の工事等による影響を勘案しつつ、前中期目標の期間の実績以上を目指す。さらに、時宜的なニーズに応じたウェブサイトの構築等について、一層の改善を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用は計画通り実施している。 ウェブサイトについて、アクセス件数は順調に増加しており、前中期目標の期間の実績を超えている。さらに、時宜的なニーズやユーザー層に応じたコンテンツを充実できるように一層の改善を図る。

※1　29,30 年度実績は、本体サイト及び研究情報アーカイブズのアクセス件数。
※2　上段①の数値は、本体サイトのみのアクセス件数。下段②の数値は、本体サイト及び研究情報アーカイブズのアクセス件数。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1323-3B

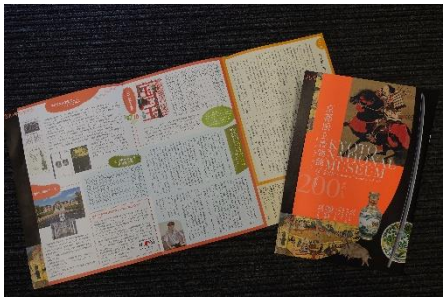
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（３）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実 3)-3広報印刷物、ウェブサイト等の充実

【年度計画】
（４館共通）
ア　ウェブサイトによる情報提供を行う。また、各施設の工事等による影響を勘案しつつ、ウェブサイトのアクセス件数の向上を目指す。
イ　メールマガジンを配信する。
（京都国立博物館）
ア　『京都国立博物館だより』、『Newsletter』（英文）の編集・発行・配布を行う。（年４回）
イ　博物館ディクショナリーを発行し、新刊をメールマガジンにて配信する。
ウ　収蔵品貸与情報をウェブサイトにて公開する。
エ　SNS（ツイッター）による情報発信を継続して行う。

担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長　山川曉

【実績・成果】
（４館共通）
ア　ウェブサイトアクセス件数は4,382,078件であり目標値を上回った。
イ　メールマガジンを12回配信した。(145～156号)
（京都国立博物館）
ア　『京都国立博物館だより』(198～201号)、『Newsletter』(137号～140号)の発行を行った。
イ　博物館ディクショナリー(208～214号)を発行し、新刊をメールマガジンにて配信した。
ウ　収蔵品貸与情報を「館外での作品公開」として、ウェブサイトにて公開した。
エ　当館公式ツイッター、トラりんツイッター、トラりんフェイスブックにて情報発信を行った。

【補足事項】
（４館共通）
（京都国立博物館）
ア　『京都国立博物館だより』200号記念号では増ページを行い、これまでの歩み、歴代特別展の観覧者数ランキング、研究員インタビュー、明治古都館のいま 等の魅力的な特集を掲載した。
その他
・WEB媒体を使用して展覧会見どころ紹介の生放送を行い、放送直後には担当研究員の氏名が、Twitterのトレンド（話題となっている単語）入りを果たした。
・「京都国立博物館パンフレット2019」を作成し、ウェブサイトでも公開した。


京都国立博物館だより 200 号

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
ウェブサイトのアクセス件数	4,382,078件	2,274,464件	A		2,964,705	3,172,381	3,334,335	5,788,678

【年度計画に対する総合評価】 評定：A	（判定根拠、課題と対応） 国宝展を擁した29年度には及ばなかったものの、ウェブサイトアクセス件数は目標値を大きく上回った。また、ウェブサイトの定期的な更新、メールマガジンの配信、SNSを活用した情報発信などに加え、定期刊行物の記念号の発行や「京都国立博物館パンレット2019」の作成などの新規取り組みも行い、年度計画を超える成果をあげることができた。

【中期計画記載事項】
（略）広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、（中略）等により、積極的な広報を行う。
ウェブサイトの運用においては、アクセス件数の向上を図り、各施設の工事等による影響を勘案しつつ、前中期目標の期間の実績以上を目指す。さらに、時宜的なニーズに応じたウェブサイトの構築等について、一層の改善を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 ウェブサイトアクセス件数は29年度に引き続き目標値を大幅に上回り、中国語(簡体字、繁体字)、韓国語のウェブサイトを設け情報発信を行うなど、中期計画3年目として計画を上回る成果を着実に達成している。今後も適宜ウェブサイトの改善を行い、アクセス件数の向上を図っていきたい。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1323-3C

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実 3)-3広報印刷物、ウェブサイト等の充実

【年度計画】
（4館共通）
ア　ウェブサイトによる情報提供を行う。また、各施設の工事等による影響を勘案しつつ、ウェブサイトのアクセス件数の向上を目指す。
イ　メールマガジンを配信する。
（奈良国立博物館）
ア　特別展及び名品展の情報を掲載した『奈良国立博物館だより』の編集・発行・配布を行う。（年4回）
イ　ウェブサイトのほか、メールマガジン、SNS（ツイッター）による情報発信を行う。
ウ　季刊誌『奈良国立博物館だより』のPDF版をウェブサイトに掲載する。
エ　英語による展覧会チラシを作成し、外国人観光客誘致のための情報発信を行う。

担当部課	学芸部	事業責任者	情報サービス室長　岩井共二

【実績・成果】
（4館共通）
ア　特別展・講座・イベント等の情報を随時更新し、ウェブサイトのアクセス件数が1,316,654件となった。
イ　メールマガジンは、毎月末に約7,000人に発信。定期的な情報提供を行った。
（奈良国立博物館）
ア　名品展や特別展の紹介に加え、展覧会情報、イベント情報等を掲載した季刊誌『奈良国立博物館だより』の編集・発行・配布を行った。（年4回）
イ　名品展や特別展の紹介に加え、イベント情報等をウェブサイトに掲載。さらにSNS（ツイッター）でフォロワー約17,000人に発信し、より迅速かつ効率的な情報発信を行った。
ウ　季刊誌『奈良国立博物館だより』のPDF版をウェブサイトに掲載した。
エ　特別展、正倉院展、なら仏像館について、外国語チラシを作成し、外国人観光客への情報発信を行った。

【補足事項】
（奈良国立博物館）
ア　『奈良国立博物館だより』は館内にて無料配布のほか、希望者には送付を行った。
イ　公式ツイッターのフォロワー数は、30年度中に17,000件を超えており、29年度から2,000件ほど増加となった。

奈良国立博物館公式ツイッター

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
ウェブサイトのアクセス件数	1,316,654件	953,946件	A		1,196,669	1,112,057	1,167,926	1,385,404

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	29年度に引き続き、ウェブサイト及び広報刊行物を通じて広く情報提供を行うことができた。ツイッターフォロワーは昨年から2,000件増加し、ウェブサイトアクセス件数については30年度と大きく変化はないが、当館から発信される情報に対する関心の高さは維持されており、成果は大きいといえる。

【中期計画記載事項】
（略）広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、（中略）等により、積極的な広報を行う。
ウェブサイトの運用においては、アクセス件数の向上を図り、各施設の工事等による影響を勘案しつつ、前中期目標の期間の実績以上を目指す。さらに、時宜的なニーズに応じたウェブサイトの構築等について、一層の改善を図る。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	ウェブサイトアクセス件数は目標値を大きく上回っており、29年度同様高い水準を維持している。公式ツイッターによる情報提供については、迅速かつこまめな情報発信により、フォロワーが定期的に増加しており、時宜的なニーズにかなった広報として効果を上げている。特別展における外国人観光客の来館者も増えており、外国人への情報発信に一定の効果が見られる。

【書式A】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1323-3D

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（3）教育・普及活動　②有形文化財に関する情報の発信と広報の充実　3)広報活動の充実 3)-3広報印刷物、ウェブサイト等の充実

【年度計画】
（4館共通）
ア　ウェブサイトによる情報提供を行う。また、各施設の工事等による影響を勘案しつつ、ウェブサイトのアクセス件数の向上を目指す。
イ　メールマガジンを配信する。
（九州国立博物館）
ア　ウェブサイトで提供する博物館情報の充実を図るとともに、利用者の利便性を考慮した情報の発信に努める。
イ　『九州国立博物館季刊情報誌アジアージュ』の編集・発行・配布を行う。（年4回）
ウ　太宰府市と連携し、スマートフォンに対応した文化情報発信サイトにより情報発信を行う。
エ　SNS（ツイッター）による情報発信を継続して行う。

担当部課	広報課 総務課	事業責任者	課長　田中正一 課長　國谷勝伸

【実績・成果】
（4館共通）
ア　リアルタイムな展示情報の提供や、駐車場の混雑対策のため、ウェブサイト、ツイッターにて駐車場空き情報を継続して提供した。
イ
・メールマガジンを配信した（月2回）。
・メールマガジン登録数は毎月平均50人ずつ増えており、また、平均開封率が10%といわれている中、約35%と高水準を維持している。
（九州国立博物館）
ア　ウェブサイトの4言語（日・英・中・韓）化について、言語毎に情報の出し方を変えるなど、充実させた。
イ　九州国立博物館季刊情報誌『アジアージュ』の編集・発行・配布を行った。（年4回）
ウ　太宰府市と連携した文化情報発信サイトによる情報発信を行った。
エ　SNS（ツイッター）を活用した情報発信を継続して行った。また、ツイッターのフォロワーは順調に増えてきており、新たな広報ツールの効果が出ている。

【補足事項】
・メールマガジン登録数：6,874件
・ツイッターのフォロワー数：8,824人、月平均増加数：238人
・ウェブサイトのアクセス件数：1,752,803件

英・中・韓のウェブサイト

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
ウェブサイトのアクセス件数	1,752,803件	1,696,500件	B		1,827,152	2,217,391	2,117,092	1,607,401

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	ウェブサイトの多言語化をより充実させた。また、ツイッターにより、駐車場の満車状況をリアルタイムに案内することができた。その他、メルマガ登録数の増加及び開封率も高い状態を保っており、利用者に対するツイッターやメルマガの効果は実感できた。30年度は人気の高い美術展の開催に伴い、アクセス件数が向上した。

【中期計画記載事項】
（略）広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用、（中略）等により、積極的な広報を行う。
ウェブサイトの運用においては、アクセス件数の向上を図り、各施設の工事等による影響を勘案しつつ、前中期目標の期間の実績以上を目指す。さらに、時宜的なニーズに応じたウェブサイトの構築等について、一層の改善を図る。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	中期計画に記載のとおり積極的な広報活動を順調に行った。 ブログ、ツイッター等を活用し、展示情報やレストラン、ショップ等観覧環境についての情報をリアルタイムに更新するなど、広報活動を積極的に行った。 31年度以降も館内に設置する広報委員会において広報計画を策定し、広報活動を展開していく。

【書式Ａ】　施設名 ４館共通　処理番号 1400ABCD

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究

【年度計画】
科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金等外部資金を活用した調査研究

担当部課	東京国立博物館学芸研究部 京都国立博物館学芸部 奈良国立博物館学芸部 九州国立博物館学芸部	事業責任者	部長　田沢裕賀 部長　朝賀浩 部長　内藤栄 部長　小泉惠英

【実績・成果】
外部資金を活用した調査研究を下記件数実施した。
（東京国立博物館）
・科学研究費補助金：8件
・学術研究助成基金：9件
・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：1件
（京都国立博物館）
・科学研究費補助金：1件
・学術研究助成基金：7件
・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件
（奈良国立博物館）
・科学研究費補助金：1件
・学術研究助成基金：5件
・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件
（九州国立博物館）
・科学研究費補助金：3件
・学術研究助成基金：4件
・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件

【補足事項】
本項詳細は統計表c-⑦参照。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
東京国立博物館	18件	－	－		26	26	22	22
京都国立博物館	8件	－	－		3	3	7	11
奈良国立博物館	6件	－	－		2	3	3	5
九州国立博物館	7件	－	－		10	10	8	8

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 外部資金を活用した文化財に関する調査研究を行った。調査研究の実施においては、各博物館での文化財の収集・保管・展示、教育普及活動等事業と一体的に取り組み、順調に成果を挙げている。

【中期計画記載事項】
文化財に関する調査研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次代への継承及び我が国の文化の向上に寄与する。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 文化財に関する調査研究実施に際し、外部資金を獲得し活用することで、文化財の保存と活用の推進の一助とした。31年度以降も外部資金活用による調査研究の活性化を図る。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aｱ-1

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　a.特別調査（「法隆寺献納宝物」（第 40 次））（(4)-①-1)）

【事業概要】
当館では、昭和 54 年より、法隆寺献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	課長　今井敦

【主な成果】
(1)29 年度に引き続き、「文王呂尚･商山四皓図屏風」の調査を実施し、報告書を刊行した。
･「文王呂尚図屏風」(8 月 10 日、9 月 19 日、9 月 27 日～28 日、11 月 26 日）と、当初収められていた法隆寺舎利殿（12 月 20 日）の調査を行った。(外部調査員・村重寧、東野治之、松原茂、相澤正彦、朝賀浩、大原嘉豊、井並林太郎、森實久美子)。
報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報 39　文王呂尚･商山四皓図屏風 1』を刊行した。
･31 年度報告書の刊行に向け、「文王呂尚･商山四皓図屏風」の調査を行った（31 年 1 月 30 日～31 日、2 月 12 日)。

(2)通年にわたって法隆寺献納宝物の染織品調査及び法隆寺宝物館保管の上代裂について調査を行い、法隆寺宝物館で保管する上代裂のうち、「双鳥円文木綿裂」と「裳」「袍」について、本格修理を行っている。

【備考】
(1)　「商山四皓･文王呂尚図屏風」調査日数　9 日
報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報 39　文王呂尚･商山四皓図屏風 1』(31 年 3 月 29 日発行)
(2)染織品の修理　3 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆献納宝物の各種作品に関して、継続的な調査と修理を実施することができた。また、「文王呂尚･商山四皓図屏風」については、計画どおり概報を刊行できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺献納宝物の絵画、書跡、金工の各種作品を様々な観点から調査し、得られた新たな知見を概報刊行等により継続的に公表するなど、中期計画に沿った取組を順調に進めている。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411A ｱ-2

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　b.特別調査「書跡」第 16 回（(4)-①-1)）

【事業概要】

本事業は平成 17 年度から始まり、当館収蔵品及び寄託品にかかる書跡・典籍、古文書について、古写経、和様の書、古文書など対象テーマを設定し、1 年に 1 ないし 2 回、機構内の関係職員を招聘し、実施しているものである。このうち古写経の調査は、当館収蔵品について一区切りついたことから、28 年度より奈良国立博物館の収蔵品を対象に実施し、比較検討を行いながら調査研究を行った。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	書跡・歴史室長(兼保存修復課長)冨坂賢

【主な成果】

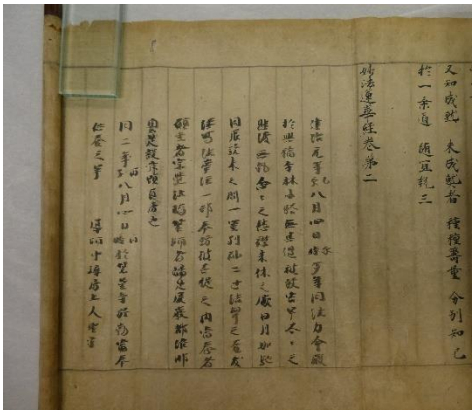
(1)調査概要

古写経は名称、制作年代、形状、寸法、奥書等、出典、料紙などの調査を行う。今回は、64 件の古写経を対象に調査を行い、また古文書も 3 件調査した。

(2)調査の成果(30 年度調査の内容)

展示中のものを除き、奈良時代の古写経を 1 件、平安時代の古写経を 27 件、鎌倉時代の古写経 23 件、南北朝から室町時代の古写経 13 件、そのほか古文書も 3 件あわせ、調査を行った。今後も京都国立博物館などで調査を継続することで、当館の収蔵品との関連を明らかにし、研究を進めて、展示・公開の向上に寄与する予定である。

特別調査の様子



調査対象資料の内
「法華経（建治二年東大寺僧宋性願経）巻第二」

【備考】

調査件数:古写経 64 件、古文書 3 件
調査日数: 31 年 2 月 14 日、15 日の 2 日間
調査人員:延べ 31 名(東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、奈良文化財研究所)
調書作成:67 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	参加者が多く、29年度を大きく上回る件数の調査ができた。また、文化財機構内各機関の同一分野研究員が集まることで、最新の研究成果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。他館の収蔵品をまとまって調査する機会はないため、文化財機構所蔵文化財横断検索システム(ColBase)への反映、今後の研究の推進及び展示・公開に寄与するところが大きい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、計画通りに作品調査を実施することにより、研究を推進し、展示・公開の向上に寄与するという所期の目標に向けて順調に推移している。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411A ｱ-3

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　c.特別調査「工芸」第10回（(4)-①-1)）

【事業概要】

当館における文化財のうち、金工・刀剣・陶磁・漆工・染織等工芸分野の特別調査。独立行政法人国立文化財機構の国立博物館4館及び文化庁の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示内容の向上に結びつけることを目的とする。なお、担当研究員の体調や他業務を鑑み、30年度は陶磁・染織の調査会を行うこととした。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	工芸室長　竹内奈美子

【主な成果】

(1) 陶磁（2月1日　1日間）

出席者　伊藤嘉章、酒井田千明（九博）、降矢哲男（京博）、今井敦、三笠景子（東博）

当館所蔵品のうち、未活用であった楽茶碗のG-152黒楽梯子文茶碗　道入作、G-76黒楽茶碗　一入作など、30年度に新収品となったG-5882備前三耳壺、G-5884染付龍涛文壺　宮川香山作など、ほかに寄贈候補、購入候補作品などについて、意見を交わしながら調査を行なった。また、各館所蔵作品について、展示予定や各館の展示の性格などを鑑みて、長期管理換などの方法で31年度より相互に活用していくことを確認した。

(2)染織（①6月20日～22日　3日間、②2月19日　1日間）

①大倉集古館寄託能装束調査

出席者　原田あゆみ（九博）、奥石英里子、佐々木智子（以上、大倉集古館）、小林彩子（文化庁）、菊池理子（東京文化財研究所）、小山弓弦葉、三田覚之、四戸菜穂（以上、東博）

東博に寄託されている大倉集古館所蔵能装束（備前藩池田家伝来）について、江戸時代中期から後期における能装束の特徴や仕立て替えなどの留意しながらその制作年代や技法について調査した。これらの調査は、30年度に開催された九博での大倉集古館展のほか、31年度以降の当館や大倉集古館での展示に活用される。

②上代裂調査

出席者　田中陽子（正倉院事務所）、山川曉（京博）、沢田むつ代、小山弓弦葉、三田覚之、四戸菜穂（以上、東博）

法隆寺に伝来した上代裂のうち、修理が必要な「古幡（I-335)」について熟覧し、今後の修理方針について協議した。また、29年度に調査した上代裂のうち、未登録の袍1件について、法隆寺宝物館で保管される共裂に関する協議を行った。これらの調査は、今後の上代裂修理に有効に活用されるほか、修理後には、初公開作品として当館において展示される予定である。

【備考】陶磁調査作品約10件、能装束調査作品33件、上代裂作品調査5件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各機関の陶磁・染織の専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究推進及び展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く、相当数の作品を調査することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	陶磁調査では、おもに東京国立博物館が新たに収蔵した作品について、知見の交換を行うとともに、今後の相互活用を含めて検討することができた。染織調査でも、寄託中の大倉集古館所蔵の能装束調査を通して大名家における能の実態について様々な知見を得た。これらの成果を工芸史研究ならびに当館の展示に反映させるべく、中期計画の「収蔵品・寄託品をはじめとする文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究」に沿った調査を実施することができた。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aｱ-4

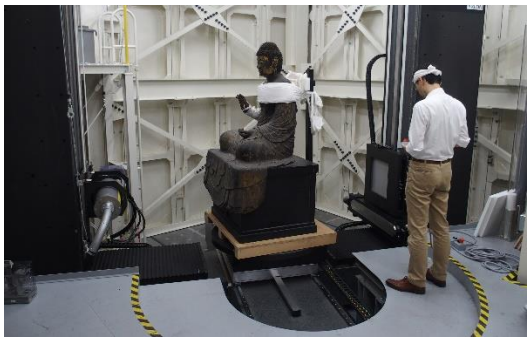
業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　d.特別調査「彫刻」第８回（(4)-①-1)）

【事業概要】
社寺等所蔵の仏像、神像、肖像彫刻等を調査し研究報告論文活動に結び付けあるいは寄託増加特別展等の企画につなげて示質向上を図る。31 年度は、大型の館蔵品及び寄託品に対して、X 線 CT 撮影並びに新規の写真撮影を実施し、分析研究を行った。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課長　浅見龍介

【主な成果】
1)次のとおり調査を行った。
・10 月 16 日　C-318 薬師如来坐像(X 線 CT 撮影・X 線撮影)
C-20 菩薩立像、浄瑠璃寺(寄託)広目天立像(写真撮影)
以上、参加人数 5 人
・11 月 20 日　大田区(寄託)十一面観音菩薩立像(X 線 CT 撮影)
C-318 薬師如来坐像、法隆寺(寄託)阿弥陀如来坐像(写真撮影)
以上、参加人数 4 人
・31 年 2 月 18 日　大倉集古館（寄託）普賢菩薩騎象像（X 線 CT 撮影）
以上、参加人数 7 人
2)X 線 CT 撮影においては、作品の構造や保存状態が明らかとなった。写真撮影においては、あわせて実査を行うことによって作品の表面仕上げや保存状態等に関してさまざまな新知見が得られた。
3)研究成果は、逐次作品解説等において報告を行うとともに、CT 活用の報告を行う特集展示に反映させる。


10 月 16 日の X 線 CT 撮影

11 月 20 日の写真撮影

【備考】
調査回数：3 回
調査作品数：7 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近年、非破壊による文化財調査が進むなか、X線CT撮影は作品の内部を観察する上で不可欠となっている。このたび、大型作品のCT撮影と写真撮影に伴う調査が実施できたことで、乾漆を用いた重要な遺品の内部構造や表面仕上げ、保存状態といった点について、新たな知見が得られた。これにより、おおむね所期の目的は達成できたと思われる。今後は、さらにデータの解析を進めることで、仏像作品における構造技法の特色について研究を進め、逐次その成果を展示や刊行物等によって紹介したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品など文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができた。引き続き調査を進め、逐次その成果を展覧会の企画や出版物のなかで広く一般に発信していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411A ｱ-5

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　e.特別調査「絵画」第３回

【事業概要】

列品調査・研究の一環として、東博所蔵の絵画作品についてテーマを設けて、機構内各絵画担当者、およびテーマごとに関係のある機構外協力者で集中的に調査を行い、対象の列品について知見・理解を深めようとするもの。30 年度は儒教関係の絵画というテーマで実施。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長　沖松健次郎

【主な成果】

当館の儒教関係作品では漆工分野で登録されている湯島聖堂由来の「歴聖大儒像」(H-1342) が著名であるが、絵画の主題として儒教関係という枠組みを設けて調査・研究はされてこなかった。そこでまずはどのような作品があるか全容を知る絶好の機会とすることができた。

今回は筑波大学助教の水野裕史氏を機構外協力者として招き、機構内では九州国立博物館・山下氏、畑氏、京都国立博物館の大原氏、および当館・鷲頭、高橋、大橋、土屋（貴）、瀬谷、沖松が参加した。

A-10	重要文化財	先徳図像	1 巻	
A-11967	重要文化財	孔子像	1 幅	
H-1342		聖賢図	15 幅	狩野山雪筆
A-76		賢哲肖像	2 巻	狩野常信筆
A-283		聖賢図	3 巻	狩野探幽筆
A-1013		聖賢図屏風　8 曲 2 双		住吉広行筆
A-9548		儒者道統絵	1 幅	筆者不詳
A-6928		聖賢障子下絵	3 巻	模者不詳
A-6786		聖賢障子下絵	27 点	模者不詳
A-5612		孔子一世縦跡図	1 帖	模者不詳
A-9223		帝舜像	1 幅	平貫雄模

等 26 件を調査した。

その中で、

A-9548	儒者道統絵	1 幅	筆者不詳
A-6928	聖賢障子下絵	3 巻	模者不詳
A-6786	聖賢障子下絵	27 点	模者不詳
A-9223	帝舜像	1 幅	平貫雄模

以上の作品は今まで内容等ほとんど紹介されてこなかったもので、「歴聖大儒像」をはじめ、近世の儒者像の形成を考える上で様々な示唆を含んだ作品であることがわかった。

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	儒教関係の絵画作品は、今まで体系だてて研究されていない分野であったが、近年筑波大学で科研テーマとして儒教美術に関するものが成果を上げられており、その中には元来、当館の列品と一連のものである作品も含まれているため当館での体系的な調査研究の必要性があった。それを今回、全体像を把握する一歩となる調査ができ、館内でも認識されていなかった作品などをリスト化することができた

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	31 年度以降、より詳細かつ本格的な調査・研究をするための基礎データを整備できた。将来的に特集展示あるいは特別展に成果を反映できるようにしていく足がかりを作ることができた。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	イ　関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査研究（(4)-①-1)）

【事業概要】

当館では 29 年度より関東地域の社寺に伝存する文化財の悉皆調査を開始した。30 年度は 29 年度に引き続き天真寺（東京都港区）所蔵文化財の調査を行ったほか、祐天寺（東京都目黒区）所蔵文化財の調査に着手した。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	課長　今井敦

【主な成果】

10 月 9 日、10 月 12 日、11 月 20 日に天真寺（東京都港区）において所蔵文化財の調査を行った。漆工は膳椀と供養具が多く、中でも天保 6 年の箱書がある「春慶塗木具膳」は本膳形式で 28 基の大部に渡っている。陶磁は天保 3 年の箱書のある宮川長造作の赤楽・黒楽の数天目を確認できた。彫刻は、寛文 12 年箱書の誕生仏を確認できた。書跡は港区指定文化財である松平不昧・月潭書状の調査を行った。

また、31 年 2 月 13 日に祐天寺（東京都目黒区）所蔵の彫刻作品 31 件の予備的な調査を行った。

天真寺での調査風景

祐天寺での調査風景

【備考】

調査日数：5 日
調査点数：絵画 19 件、書跡 34 件、彫刻 32 件、工芸 126 件
延べ参加人数：16 名

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査を、29年度に引き続いて行った。30年度は天真寺（東京都港区）を対象として所蔵文化財の調査を計画し、3日間4分野に関して行うことができ、悉皆調査を完了した。また、新たに祐天寺（東京都目黒区）所蔵の文化財の調査に着手し、1日間1分野に関して行うことができた。調査した文化財の中に、貴重な遺品が含まれていることを確認することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、文化財の基礎的調査を関東地域の社寺に広げて行うこととした。2年度目にあたる30年度は、天真寺（東京都港区）の調査を完了し、祐天寺（東京都目黒区）の調査に着手した。31年度も祐天寺の継続調査を行うことを計画している。以後も、毎年新規寺院の調査を行う体制を確立している。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aウ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ウ　油彩画の材料・技法に関する共同調査（(4)-①-1)）

【事業概要】

本研究は東京藝術大学との共同研究で 20 年度から開始し、続行している。当館所蔵の油彩画約 150 件の中から、明治期を中心とした作品を調査対象としている。東京藝術大学大学院油画保存修復研究室は、これまで大学所蔵の明治期油彩画について、調査研究を続け、多数の成果を公表している。本共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタル X 線写真、蛍光 X 線分析などの科学的調査を通し、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行ない、これまで東京藝術大学が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国の初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものと考える。

【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長　土屋裕子

【主な成果】

(1)①A-12220 松岡寿筆「ダリヤ」、② A-12215 松岡寿筆「初春」、③A-12216 松岡寿筆「微雨の熱海」、④A-12214 松岡寿筆「自画像（39 歳)」、⑤A-12217 松岡寿筆「自画像（80 歳)」の状態調査、普通光、側光、紫外線、赤外線写真撮影を行なった。

(2) 松岡寿作品は遺族より平成 10 年に寄贈を受けた作品であるが、上記作業時に行った状態調査により、②③において絵具に浮きが発見されたため、その後館内で応急処置を行った。また、①のように額に装丁されていないものもあり、こうした作品に関する詳細な調査は、これまで展示されなかった作品が公開・活用するための準備にもなりえる。

調査風景

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	油彩画の光学調査は東京藝術大学でそのデータの蓄積が行われており、それに続く質と量をもつ当館の油彩画資料の基礎データ蓄積は、今後の油彩画研究において重要な情報をもたらすことになる。この点において、この作業を続けることにより、確実にデータを蓄積しているため、当該評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまで行った調査で、基本的なデータの蓄積は進めてきたが、今後はこれをまとめて活字にする必要がある。5年計画の後半では、これまで行った調査を『MUSEUM』などの研究誌への掲載を目標とする。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aｴ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	エ　仏教美術等の光学的手法による共同研究（(4)-①-1)）

【事業概要】
当館所蔵の仏教美術について高精細カラー撮影、近赤外撮影、蛍光撮影、蛍光Ｘ線撮影、Ｘ線透過撮影を行い、材質や技法についての調査・研究を行う。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長　沖松健次郎

【主な成果】
A-10498 虚空蔵菩薩像の分割カラー撮影、近赤外撮影、蛍光撮影、蛍光Ｘ線分析、蛍光Ｘ線分析箇所のマクロ撮影、A-1 普賢菩薩像の蛍光Ｘ線分析箇所のマクロ撮影、A-10506 千手観音像の蛍光Ｘ線分析、蛍光Ｘ線分析箇所のマクロ撮影、A-11529 孔雀明王像の蛍光Ｘ線分析箇所のマクロ撮影を行った。

【備考】
調査３回（1 回につき 3～4 件、分析箇所 40 箇所程度)、検討会２回
成果発表：『東京国立博物館所蔵　国宝　平安仏画　－光学調査報告書－』　B4 判　264 ページ（平成 31 年 3 月 31 日発行）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	30年度までで、当館所蔵の国宝の平安仏画4件の調査が終了できた。ここまでの調査を通し、従来、表現技法がはっきりわかっていなかった背景の表現に、群青と銀、特に銀が特徴的に使用されていることを知ることができた。これは、この調査で用いた特殊な照明の方法で撮影した高精細画像による細部の拡大観察と、それを基にターゲットを絞った綿密な蛍光X線分析による元素の存在の確認とによって知りえたものであり、今後の平安仏画の理解や調査研究の上で重要な視点を与えるものといえる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	年度計画で書いたように、背景処理における銀の使用など、従来知られていなかった表現、技法が明らかになったことを受け、31年度以降の調査・分析における指針を得ることができた。今後の調査では、特に銀の使用についてのデータを収集することを一つの目安として、当館所蔵の残りの平安仏画や寄託品の平安仏画について調査を進め、銀の使用が平安仏画の表現においてどのような意義を持っていたのかを明らかにしていくことを計画している。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aオ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	オ　東洋民族資料に関する調査研究（(4)-①-1)）

【事業概要】
東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族列品を対象として調査研究を行い、展示を充実させる。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室主任研究員 猪熊兼樹

【主な成果】
(1) 調査概要
インドネシアのジョグジャカルタの宮廷・博物館にてクリス（短剣）の用途・分類に関する調査、ソロ郊外にてヒンドゥー教寺院に関する調査、ソロの宮廷およびジャカルタの国立博物館にてインドネシア工芸資料に関する調査を行った。
(2) 調査の結果得られた知見
・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にインドネシアのクリス（短剣）の分類や展示活用に資する知見を得た。
・東京国立博物館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にヒンドゥー教関係資料の分類や展示活用に資する知見を得た。
(3) 調査研究の成果
・ジョグジャカルタやソロにはインドネシアの宮廷があり、伝統文化が集積されている。ソロ郊外にはヒンドゥー教の寺院があり、古代文化の遺跡がある。ジャカルタには国立博物館があり、インドネシアの伝統工芸資料が収蔵・展示されている。これらの場所を調査し、当館が所蔵する東洋民族列品のうち特にインドネシア関係資料に関する有意義な知見を得ることができた。その成果は 30 年度の東洋館企画「博物館でアジアの旅　海の道　ジャランジャラン」の一環としてクリスの展示に反映した。また今後の平常展示「アジアの民族文化」の参考とする。

ソロ郊外のヒンドゥー教寺院スクー寺

クリスの展示（東京国立博物館　東洋館 13 室）

【備考】
クリス展示：東京国立博物館　東洋館 13 室　7 月 18 日～10 月 14 日
館外調査：インドネシア（ジョグジャカルタ、ソロ、ジャカルタ）　8 月 1 日～ 8 月 10 日

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・28年度の南山大学・天理参考館・早稲田大学、29年度の兵庫県立考古博物館の調査に引き続き、今年はインドネシアの宮廷・博物館・工房・寺院などの調査を行うことで、東洋民族列品のうちインドネシア関係資料に関する基礎的な情報を充実させた。 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にインドネシアのクリス（短剣）の分類や展示活用に資する知見を得た。 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にヒンドゥー教関係資料の分類や展示活用に資する知見を得た。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・当館が所蔵する東洋民族列品については、南洋資料・台湾先住民族資料・その他から構成されている。東洋館の平常展示「アジアの民族文化」では、インドネシアのワヤンクリ（影絵人形劇）やクリス（短剣）に関する特集陳列を定期的に行っており、そのための分類整理を進めている。 ・従来、ほとんど展示活用されていなかった東洋民族列品については、東洋館リニューアル以降、東洋館の平常展示「アジアの民族文化」に展示活用されて、展示内容が着実に充実してきている。 ・31年度以降は特集陳列「朝鮮王朝の宮廷文化」を行い、また当館所蔵の東洋漆工の図版目録を作成する計画があるため、中国・韓国の資料の調査に取り組みたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aカ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	カ　「上杉家伝来の能面・能装束」ほか特集に関連する調査研究（(4)-①-1)）

【事業概要】当館が所蔵する米沢藩上杉家伝来の能面・能装束について調査研究し、特集展示、図録でその成果を公表する。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課長　浅見龍介

【主な成果】

29 年度、米沢市上杉博物館で調査した際に撮影をした米沢藩の能楽関係資料と、上杉家関係史料とを照らし、精査することによって、能面・能装束等能道具の収集・管理について新知見を得た。

また、当館所蔵の上杉家伝来品の調査を行い、上杉家の伝承に基づいていた従来の名称・作者・制作年代について、近年蓄積してきた研究成果を反映した内容に改めることができた。

これらを発表し、かつ今後の研究に寄与するために図録を刊行した。上杉家の歴史を踏まえつつ、能道具についてまとめた初の資料である。

能面・能装束の撮影も行ない、特に能面は全点新規撮影した。従来、表と裏の画像のみであったが、左右斜め、左右側面を撮影し、研究資料として活用するための基礎を固めた。

図録「上杉家伝来の能面・能装束」表紙

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	上杉家旧蔵の能面・能装束は当館が一部をまとまって所蔵するほかは散逸しており、当館の研究と公開が長く望まれていた。本研究は、米沢藩の歴史を伝える基礎史料として刊行されている『上杉家御年譜』と、米沢市上杉博物館保管の米沢藩能楽関係資料と照らし合わせたうえで、実際の能道具について考察する初めての研究である。能楽史だけでなく、上杉家の歴史にもかかわる能面・能装束等能道具の収集・管理についての新知見を得ることができた。大名家の能楽に関する研究は備前池田家、彦根藩井伊家、尾張徳川家などまだ一部に過ぎない中で、米沢藩上杉家という大名家のの能楽研究に関して一つの視点を提示したともいえる。また、本研究にあたり行った画像や法量など基礎資料の整備は、今後の研究の発展に寄与するものであり、当館でしか成しえないことでもある。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館は良質な仮面を多数所蔵していることで定評があるが、制作年代や作者に関する情報の精査は不十分であった。所蔵品の情報の正確な発信という観点で前進することができた。 『東京国立博物館図版目録　仮面篇』の増補改訂版刊行の作業の一環としても位置付けられる。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aｸ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク　特集「明治 150 年記念 書と絵が語る明治」に関連する調査研究		
【事業概要】　特集「明治 150 年記念 書と絵が語る明治」の開催準備に当たって、出品予定の作品や関連する文献を調査し、成果を展示に反映する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館情報課長 田良島哲
【主な成果】 ・これまで注目されることが少なかった明治前期の書跡・洋画について調査を行い、新たな知見を得ることができた。（例：「七言絶句」大久保利通筆（B-1080）の制作年代と成立事情）。 ・7 月 10 日から 9 月 2 日まで本館特別 1，2 室で展示を行った。併せて図録『明治 150 年記念　書と絵が語る明治』を刊行した。			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査を通じて、館蔵品に関する学術的情報を充実することができた。 展示によって、これまで比較的知られることが少なかった明治前期の書作品や洋画について、その存在や歴史的意義を周知することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画が求める「収蔵品・寄託品をはじめとする文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究」の一環として成果をあげることができ、また、「調査研究成果の公表」についても展示図録というわかりやすい形で公表することができた。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aヶ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ケ　特集「岡野繁蔵コレクション―インドネシア由来の染織と陶磁器」に関連する調査研究

【事業概要】
東洋館の年間企画である「博物館のアジアの旅」にかかる特集「岡野繁蔵コレクション―インドネシア由来の染織と陶磁器」「ワヤン―インドネシアの人形芝居―」及び「インドネシアの染織」のための調査研究を行い、展示やワークショップ、ディスプレイなどを充実させる。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室長（兼貸与特別観覧室長）　小山弓弦葉

【主な成果】
(1) 調査概要
・ジャカルタのインドネシア国立博物館にて、インドネシア染織・陶磁器の展示方法を調査した。
・チルボン・プカロガンのバティック工房でインドネシア染織の製作工程を調査した。
・ソロのダナル・ハディ・バティック美術館にて、バティックの展示方法や歴史について調査した。
・ジョグジャカルタの宮廷・博物館・工房、ソロの宮廷、ジャカルタのワヤン博物館にてワヤン（影絵人形劇）の実演・分類・製作に関する調査を行った。
(2) 調査の結果得られた知見
・当館が所蔵するインドネシア染織の製作工程とその発展の歴史について知見を得た。また、ワヤンの分類・展示活用に資する知見を得た。
(3) 調査研究の成果
・インドネシアにおける専門の博物館での展示を調査することによって、インドネシア染織や陶磁器に関する有意義な知見を得ることができた。また、インドネシア染織の製作を調査することによって、ワークショップに活かすことができた。その成果は特集「岡野繁蔵コレクション―インドネシア由来の染織と陶磁器」「ワヤン―インドネシアの人形芝居―」および「インドネシアの染織」に反映した。また、今後の「アジアの染織」での展示にも有効に活用できる。
・ジョグジャカルタのワヤンの劇場や博物館、ジャカルタのワヤン博物館での調査によって、ワヤンに関する有意義な知見を得ることができた。その成果は30年度の東洋館の特集展示「ワヤン―インドネシアの人形芝居―」に反映した。また今後の平常展示「アジアの民族文化」の参考とする。

プカロガンのバティック工房の様子

【備考】
特集展示：東京国立博物館　東洋館 12室　9月4日～12月25日/東洋館13室　7月3日 ～ 9月30日
館外調査：①インドネシア（ジャカルタ、チルボン、プカロガン、ソロ、ジョクジャカルタ）7月18日～7月25日
②インドネシア（ジョグジャカルタ、ソロ、ジャカルタ）8月1日～ 8月10日

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・インドネシアの博物館・工房・宮廷などを調査することによって、インドネシア美術・民族に関する列品の知識や情報を深めることができた。 ・インドネシア染織に関しては、工程の画像や動画などの資料も入手し、観覧者に展示室内でわかりやすく紹介することが可能となった。また、教育普及事業であるワークショップにも有効に活用できる。 ・インドネシアには、各地域における特徴的な工芸があり、当館にも所蔵されている。31年以降は、今回調査した地域以外にも調査範囲を広げ、より充実した調査研究を目指したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・東洋館においては、例年「アジアの旅」で列品をテーマにした企画が行われ、企画に沿った調査研究が進められている。博物館事業の幅を広げ、列品を有効に活用していく上で非常に意義のある事業となっている。 ・31年度に開催される「アジアの旅」に向けて、列品を精査し、来館者が満足すると同時に、列品の調査研究も充実するような計画を立て、実行したい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aコ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	コ　特集「ワヤン―インドネシアの人形芝居―」に関連する調査研究

【事業概要】
東洋館企画「博物館でアジアの旅」の特集展示のためワヤン（影絵人形劇）の調査研究を行い、展示を充実させる。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室主任研究員 猪熊兼樹

【主な成果】
(1) 調査概要
インドネシアのジョグジャカルタの宮廷・博物館・工房、ソロの宮廷、ジャカルタのワヤン博物館にてワヤン（影絵人形劇）の実演・分類・製作に関する調査を行った。
(2) 調査の結果得られた知見
・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にインドネシアのワヤンの分類・展示活用に資する知見を得た。
(3) 調査研究の成果
・ジョグジャカルタにはワヤンの劇場や博物館があり、ジャカルタにはワヤンを専門的に収蔵・展示するワヤン博物館がある。これらの場所を調査し、当館が所蔵する東洋民族列品のうち特にインドネシアのワヤンに関する有意義な知見を得ることができた。その成果は今年度の東洋館の特集展示「ワヤン―インドネシアの人形芝居―」に反映した。また今後の平常展示「アジアの民族文化」の参考とする。

ワヤンの上演風景
（ジョグジャカルタのソノブドヨ博物館）

ワヤン（影絵人形）の展示
（東京国立博物館　東洋館 12 室）

【備考】
特集展示：東京国立博物館　東洋館 12 室　9 月 4 日～12 月 25 日
館外調査：インドネシア（ジョグジャカルタ、ソロ、ジャカルタ）8 月 1 日～ 8 月 10 日

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・インドネシアの宮廷・博物館・工房などの調査を行うことで、東洋民族列品のうちワヤン関係資料に関する基礎的な情報を充実させた。 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にインドネシアのワヤンの分類や展示活用に資する知見を得た。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・当館が所蔵する東洋民族列品については、南洋資料・台湾先住民族資料・その他から構成されている。東洋館の平常展示「アジアの民族文化」では、インドネシアのワヤン（影絵人形劇）やクリス（短剣）に関する特集陳列を定期的に行っており、そのための分類整理を進めている。 ・従来、ほとんど展示活用されていなかった東洋民族列品については、東洋館リニューアル以降、東洋館の平常展示「アジアの民族文化」に展示活用されて、展示内容が着実に充実してきている。 ・31年度以降は特集陳列「朝鮮王朝の宮廷文化」を行い、また当館所蔵の東洋漆工の図版目録を作成する計画があるため、中国・韓国の資料の調査に取り組みたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411A サ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	サ　特集「京都御所 飛香舎（藤壺）の調度」に関連する調査研究

【事業概要】
当館が所蔵する列品のうち、京都御所の飛香舎で用いた調度一式を対象とする調査研究を行い、展示を充実させる。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室主任研究員 猪熊兼樹

【主な成果】
(1) 調査概要
・当館が所蔵する列品のうち京都御所の飛香舎で用いた調度一式の調査、宮内庁書陵部が所蔵する京都御所関係史料の調査を行った。
(2) 調査の結果得られた知見
・当館が所蔵する列品のうち、京都御所の飛香舎で用いた調度の分類・用途や展示活用に資する知見を得た。
(3) 調査研究の成果
・当館には京都御所の飛香舎で用いられていた調度一式が収蔵されている。また、宮内庁書陵部には京都御所の飛香舎に関する史料がある。これらを調査し、東京国立博物館が所蔵する飛香舎調度に関する有意義な知見を得ることができた。その成果は今年度の特集陳列「京都御所 飛香舎（藤壺）の調度」の展示に反映した。また、今後の宮廷関係資料の展示の参考とする。

飛香舎調度の展示
（東京国立博物館　本館 14 室）

松喰鶴蒔絵螺鈿二階棚
（飛香舎調度のうち）

【備考】　特集展示：東京国立博物館　本館 14 室　10 月 2 日～12 月 25 日
館外調査：宮内庁書陵部　7 月 18 日～19 日

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・当館が所蔵する列品のうち、京都御所の飛香舎の調度一式に関する基礎的な情報を充実させた。 ・当館が所蔵する列品のうち、京都御所の飛香舎の調度の分類や展示活用に資する知見を得た。 ・特集「京都御所 飛香舎（藤壺）の調度」の展示に伴い、リーフレットの刊行、月例講演会、ギャラリートークを行い、一般の方々に対する普及に努めた。 ・31年度以降も当館所蔵品をはじめとする宮廷関係資料の調査に取り組みたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・当館が所蔵する宮廷関係資料は、漆工・染織・金工・その他から構成されているが、それぞれの関係性が不透明な状況にある。従って、平常展示や特集展示などの機会を通じて、それら宮廷関係資料の分類整理を進めて、有機的な関連付けを行う必要がある。 ・29 年度をもって当館に管理替が確定した宮内省旧蔵の宮廷関係資料は、従来、展示活用される機会が少なかった。この度、特集「京都御所 飛香舎（藤壺）の調度」の展示を行ったのを契機とし、当館が所蔵する宮廷関係資料に関する調査・展示を充実させてゆく。 ・31 年度以降も引き続き、これまでの調査研究を通じて得た知見に基づき、更なる調査研究を重ねて宮廷関係資料を活用した平常展示や特集を工夫してゆく。

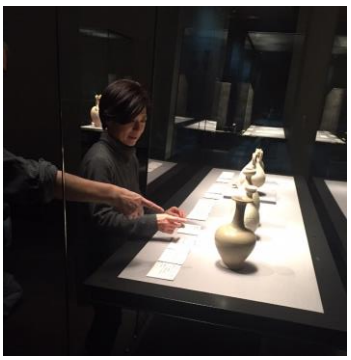
【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aシ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	シ　特集「白磁の誕生と展開」に関連する調査研究		
【事業概要】　特集「白磁の誕生と展開」に関連する調査研究			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員　三笠景子

【主な成果】

公益財団法人常盤山文庫の協力のもと、中国隋から初唐の頃に華北地方で生産された白磁を調査し、これまで研究史上、おもに唐白磁と位置づけられてきたそれらを、あらためて古墓出土資料との比較によって隋時代までさかのぼることを明らかにした。その成果は、公益社団法人常盤山文庫と当館の所蔵品を使って、31 年 1 月 2 日～4 月 21 日まで東洋館 5 室にて特集「白磁の誕生と展開」と題して展示公開した。



特集「白磁の誕生と展開」の展示風景

【備考】　公益財団法人常盤山文庫所蔵品 30 点、当館所蔵品 3 点の白磁作品を調査した。
ほかに天理参考館 5 点、大和文華館 2 点、黒川古文化研究所 4 点の調査を行なった。
常盤山文庫中国陶磁研究会より研究紀要 7『初期白磁』（30 年 12 月 14 日）刊行。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまでその位置づけが明瞭ではなかった隋～初唐の白磁について、国内に所蔵されている主な作品を実見した点、また中国国内の古墓出土資料との比較によって器種器形ごとに生産時期をより狭めて考えることができるようになった点において先進的な研究ができたと考える。また、その成果を特集で展示公開できたことは評価に値する。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今回の調査研究は、基本的に現在までに報告されている中国古墓出土資料の内容に基づく。今後は新しい発掘報告や新資料の出現がなされることを前提に、本研究を礎に、白磁の誕生に大きな影響を及ぼしたと推測される6～7世紀の金銀器やガラス器などの研究にも視野を広げて調査につとめたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1411Aｽ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ス　特集「ラファエル・コランと黒田清輝」に関連する調査研究

【事業概要】

特集「ラファエル・コランと黒田清輝」（黒田記念館黒田記念室、31 年 1 月 22 日～4 月 14 日）に関連する調査研究。29 年度に寄託を受けたフランスの画家ラファエル・コランの作品 13 点、および東京文化財研究所が所蔵する黒田清輝関係資料の調査を行った。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部（兼東京文化財研究所文化財情報資料部近・現代視覚芸術研究室長） 塩谷純

【主な成果】

(1)調査とその成果

29 年度に寄託を受けたフランスの画家ラファエル・コランの作品 13 点の調査を行った。あわせて東京文化財研究所が所蔵する黒田清輝関連の写真資料を調査、黒田の画室を撮影した写真に寄託作品のうちの 1 点である「三人の女下絵」（作品①）、および久米美術館が所蔵するコランの「夏の野」が写っていることが判明した(作品②)。

画室で撮影された黒田のポートレート

(2)成果の公開

特集「ラファエル・コランと黒田清輝」（黒田記念館黒田記念室、31 年 1 月 22 日～4 月 14 日）を行い、コランと弟子の黒田の作品を通して、その交流の様子を紹介した。また同特集鑑賞の手引きとなるリーフレットを作成した。

【備考】

調査作品数：13 点

展示：特集「ラファエル・コランと黒田清輝」（黒田記念館黒田記念室、31 年 1 月 22 日～4 月 14 日、展示作品件数 23 件）

刊行物：特集「ラファエル・コランと黒田清輝」リーフレット（A3 判二つ折り、31 年 1 月 22 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館へ寄託されたラファエル・コランの作品の展示は、11年から12年にかけて全国の美術館を巡回した「ラファエル・コラン展」以来、19年ぶりの公開となった。国内外からコランの作品を一堂に集めた同回顧展の成果に、今回の特集展示も負うところが大きかったが、一方で東京文化財研究所所蔵の写真資料を調査し、寄託品が黒田清輝の愛蔵品であったことが同時代の資料から改めて裏付けられたのは、大きな収穫であった。黒田清輝の作品を展示公開してその画業を顕彰する施設である黒田記念館だが、コランのような黒田周辺の作家の作品もあわせて展示することで、黒田への理解がより深められるよう、今後も調査研究に努めていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	寄託品も含めた収蔵品に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができた。引き続き調査を進め、逐次その成果を展覧会の企画や出版物を通して広く一般に発信していきたい。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 1411Aセ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	セ　特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」に関連する調査研究（(4)-①-1）

【事業概要】

東京国立博物館が手がける文化財保存と修理の役割と成果をわかりやすく広く一般に紹介するため、近年解体を含む根本的な修理を終えた作品を修理過程で得られた情報とともに展示公開し、理解を促進する。

【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	課長（兼書跡・歴史室長）　冨坂賢

【主な成果】

(1) 調査概要

30 年度は近年、本格修理を行うことにより取り扱いや保存上の安全性が向上した作品や、鑑賞性が向上して展示活用が可能となった作品を対象として、一般の鑑賞者が、博物館における保存修復への理解向上につながる作品の選定、処置内容の解説方法について調査と検討を行った。

(2) 調査の結果得られた知見

対象としたのは、本格修理の場合、9 月 30 日までに修理が完了した作品で、修理後十分な期間を置いて状態が安定したことが確認できた作品とした。

展示作品のうち「南蛮屏風」（列品番号：A -11128）の主な損傷問題は、骨木地の変形、白い点や液ダレのような茶色の付着物、また膠の濃度が原因と考えられる著しい黒い絵の具の剥落、そして椽木と金具の構造による作品画面の擦れや凹みであった。特に茶色の付着物は東京文化財研究所の分析により「膠」と判明し、旧修理の処置が原因であることが分かった。また、黒い絵の具の剥落部は、濃い膠を使用したため表面が膠によって硬く引き攣れを起こしていたことが原因であった。そのため、東京文化財研究所の指導の下、タンパク質を溶解する有機溶媒「アセトニトリル」を用いて塗膜を軟化させ剥落止めを施し、安定した結果を得た（今後、経過観察が重要となる）。このように作品に使用された材料に対する分析とその結果や処置事例は、修理処置や材料の選択の判断材料としても、より良い修理を行う上で大変重要な知見の蓄積となった。

(3) 調査研究の成果

「濃紺ヴェルヴェット地花弁文様金銀糸刺繍」（列品番号：TI-418-1）や夢窓疎石筆の「杜甫詩」（列品番号：B-3474）など 10 件は、オリジナル部分や旧修理部分の損傷や劣化により安全に展示することが困難な作品であった。特に「杜甫詩」は虫損による損傷が著しい状態であったが、修理により安定した展示が可能になった一例である。

今回の展示では、修理処置だけでなく「修理で使用した特殊な材料」、「東博の保存修復の仕事」に関し、鑑賞者の理解を深める工夫をとして処置材料や画像を多用した解説パネルを作成し、鑑賞者の関心を得た。

会期中、一般向けにバックヤードツアー、ギャラリートークを行い、多くの参加者が熱心に鑑賞、聴講した。

バックヤードツアーの様子

【備考】

展示
・特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」平成館企画展示室、31 年 3 月 12 日～4 月 7 日、展示作品件数 10 件。
教育普及事業
・バックヤードツアー　31 年 3 月 15 日、参加者 60 名。
・ギャラリートーク　31 年 3 月 19 日参加者 73 名、3 月 26 日参加者 121 名、計 2 回参加者のべ 194 名。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	保存修復課ではより専門的な内容を含む詳細な修理報告を別途『東京国立博物館文化財修理報告』として刊行しており、一般向けの平易な展示として特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」を毎年、年度末に行っている（30 年度で 19 回目）。修理を終え展示が可能になる作品はその都度変わるため、それにあわせた展示の工夫が例年の課題である。 30 年度は本格修理を中心に、使用した修理材料や当館の保存修復の仕事についても紹介した。修理前後の様子や使用した材料など紹介することで、修理技術の素晴らしさや博物館の文化財保存のありかたについて、来館者の方々への理解促進につなげることができた。31 年度に向け、さらに博物館内での保存修復事業の重要性を一般の人々へ分かりやすく伝えるための視点も意識し、修理技術者とともに修理時の資料情報や材料の収集を継続する。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	装こう修理は、外部技術者を招き修理対応を継続。30 年度、立体作品の修理は専門の研究員、調査分析室には専門職員が配置された。館内での分析診断、応急修理の対応が安定的に可能になったことで、本特集で紹介できる案件の分野や研究の視点が広がっている。様々な文化財保存の専門技術者が館内の保存修理事業に長期的に関わることで、修理で得られる知見の蓄積と技術進歩、また保存管理の安定化が図られてきている。 保存修復課の活動と成果が本特集によって臨場感を持って来館者に伝わり、文化財保存に関する興味関心と理解の向上へつながるよう、毎年新しい視点で鑑賞できるテーマを設け事業を展開する。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411Bア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧会事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　京都周辺出土の考古遺物に関する調査研究（(4) -①－１）

【事業概要】
館蔵品を中心に京都周辺の考古遺物に関する調査研究を実施して、その成果を当館における展示、講演、論文などの博物館の事業に還元する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員　宮川禎一

【主な成果】

(1)古く昭和 30 年代に京都国立博物館に収蔵された京都府相楽郡和束町原山古墳から出土した鉄製武具のうち衝角付冑を調査し、その研究成果を反映し、元興寺文化財研究所で保存処理及び損傷部分の修復を行い、修理を完了した。

(2)新たに寄贈された中国唐代の銀鍍金狩猟文杯に関して科学的に製作技法を検討するために当館の CT を用いて断面映像を撮影し、その製作過程を検証した。

(3)重要文化財「画文帯四仏四獣鏡（伝河内金剛輪寺伝来)」の由来を文献的に調査して、金剛輪寺旧蔵の他の考古遺物を現在所蔵する神戸市の白鶴美術館において青銅馬具類の調査を行った。

(4)館蔵の呉王伍子胥鏡（後漢）を検討するために、大阪市立美術館において類似の呉王伍子胥鏡の調査を行った。

銀鍍金狩猟文杯 CT 調査画像
（垂直断面画像）

【備考】
京都とその周辺の考古遺物を対象とするが、館の収蔵品の性質から日本全体・東アジアに及ぶ考古遺物についても調査対象としている。さらに科学機器による分析も着実に進める。
(1)31 年度に展示公開予定。
(2)(3)研究成果は論文として公刊を予定。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵品で唯一の鉄製短甲と衝角付冑の調査から、古墳時代中期の武具の一端を検証できたことに加え、衝角付冑の修理を進めて公開を目指すことができた。 唐代の銀杯の検討のためにCT調査を行って、その内部構造や製作技法の検証を行うことができた。 出土状況が不明な大型鏡の画文帯四仏四獣鏡について、その歴史的な伝来経緯や共伴遺物と推定される銅製馬具の調査を行った。 考古展示場は撤収展示が頻繁であり、時間的・人的な制約もあることから研究の量的には充分とはいえないが、そのなかでも最新の科学機器も活用しつつ、新たな知見の発見や展示に繋がる作品の保存修理を行い、研究の質としての成果は確保できたことから、順調に成果をあげたといえる。 31年度以降も計画的に作品の調査研究・修理などを行い、科学機器も積極的に活用して新知見を広げていくこととしたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、京都文化を中心とした有形文化財の調査・研究として、館蔵品を中心とする京都周辺および関連する考古遺物の調査研究を行った。 31 年度以降、さらに研究の量的な面を確保するために、夏期・冬期の考古展示場での展示作業と調査研究のバランスを考慮しながら計画的な作品調査と報告を着実に行う。加えて調査においては博物館に備わる最新の科学調査機器を積極的に活用し、科学的側面からの研究と報告を行うこととする。

【書式Ｂ/博】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411Bイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	イ　訓点資料としての典籍に関する調査研究((4)-①-1))

【事業概要】

漢文を訓読するために施された、「訓点」と呼ばれる読みを表すための記号は、時代や地域によりかなりの多様性があり、その大半は経典・漢籍・和書などの典籍にみられる。これらに付された訓点により、当時の日本人がどのように本文を訓読していたか、あるいは日本語の有り様が判明する。当館では、「守屋コレクション」に代表される、国内外の良質な古典籍を数多く収蔵することから、それらを中心とする調査研究を行うことにより、得ることの出来た成果を展示や講演、又は刊行など、博物館における事業へと還元する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長（兼　列品管理室長）　羽田聡

【主な成果】

(1) 典籍の研究には、その特質に応じた専門の学識者が不可欠であるため、アソシエイトフェローの上杉智英（仏教学）のほか、調査スタッフに大阪大谷大学教授の宇都宮啓吾氏（日本語学）を客員研究員として迎え、計８回の調査を実施した。

平成知新館調査室での調査風景

(2) 調査作品は、重要美術品「根本説一切有部忞薭尼毘奈耶巻第九（五月一日経)」や国宝「世説新書巻第六残巻」(以上、館蔵品)、重要文化財「開元釈経録巻第十八残巻」(文化庁長期貸与品）など 18 件に及び、今後の研究にも資するよう全巻撮影を行った。

(3) 調査対象作品のうち、「根本説一切有部忞薭尼毘奈耶巻第九（五月一日経)」は、正倉院文書中に見える料紙の種類や筆者の記載と、顕微鏡などによる観察結果から得られた知見を同種の作品とともに展示し、あわせて講演を行った。

(4) また、「色紙金字観無量寿経」は、特別展「国宝 一遍聖絵と時宗の名宝」(会期：31 年 4 月 13 日～6 月 9 日）の開催にあたり、重要美術品「色紙金字阿弥陀経」(清浄光寺蔵）と一具で作成された可能性が高いことが判明し、その見解を刊行される図録に反映させた。さらに、「涅槃経疏」は、紙背に記された説話の解題と翻刻を当館紀要に掲載することが決定している。

【備考】

・調査回数　　8 回
・調査件数　　18 件
・撮影コマ数　約 150 カット
・成果の公開（展示）　1 回　平成知新館名品ギャラリー「五月一日経」(7 月 18 日～9 月 2 日）
・成果の公開（講演）　1 回　上杉智英「奈良写経の魅力―五月一日経―」(土曜講座、7 月 21 日）
・成果の公開（刊行）　1 件　宇都宮啓吾「京都国立博物館蔵『大般涅槃経疏』紙背の説草資料について」(『学叢』41、31 年 5 月発行予定）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業の大きな目的である作品の調査研究及び成果の公開に照らし、【備考】欄に記載した調査回数や件数、あるいは公開などの数値を 29 年度と比較すると、回数こそ減じているが、ほかは同等かそれ以上の成果をあげることが出来ているため、所期の目標を達成していると判断した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。年度計画における実績値は、29年度とほぼ同等であるため、順調に進捗し、所期の目標は達成していると判断する。無理のない継続性に基づき、文献学的な手法では着実に成果を積み上げて来ている。一方、蛍光X線など科学的手法による調査は、いまだ未着手であるため、31年度はその対象となる作品を選定し、実験的に取り組むことを視野に入れたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411Bｳ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ウ　陶磁に関する調査研究((4)-①-1))

【事業概要】
主に日本国内に伝わる陶磁器（出土品も含む）について、総合的に調査を実施し、博物館の所蔵品・寄託品の充実を図ると共に、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室研究員　降矢哲男

【主な成果】
(1)調査
・4 月 22 日～28 日にサンフランシスコ・アジア美術館所蔵の日本陶磁について調査、写真撮影を行い、その所蔵の状況や傾向などについて検討を行った。
・29 年度に引き続き、近畿地方の江戸時代から続く旧家の所蔵品や観心寺所蔵の陶磁器の調査を行い、調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。（詳細は処理番号 1411B4 及び 1411B5 参照）。
・韓国・全羅南道地域を中心として、高麗青磁、粉青沙器の窯跡や窯跡出土資料を調査した。調査により、茶の湯の茶碗に用いられる粉引茶碗の製作窯の特定ができた。
・個人コレクションの陶磁器の調査を行い、写真撮影等を行った。

サンフランシスコ・アジア美術館調査風景

(2)成果内容
・29 年度に引き続き、旧家や寺院、そして個人コレクションの調査を行い、それぞれの様相を把握することができた。そこから、陶磁器流通の状況やコレクション形成の過程について、新たな知見を得ることができた。
・個人コレクションの調査により、作品の寄贈を受け、さらに今後、作品の寄託を受けることとなった。それによって、館蔵品で網羅されていない時期や産地の作品の展示をすることができ、より充実した内容の展示を行うことが可能となった。
・これまでに蓄積した研究成果をもとに、公刊図書の発行、学会での発表、学会誌等への論文公開を行った。

【備考】
(1)調査回数 30 回
(2)主な成果
・学会発表：降矢哲男「座敷飾りにみえる陶磁器の使用状況とその在り方について」家具道具室内史学会 2018 年度大会・シンポジウム、5 月 26 日
・公刊図書：降矢哲男『中国朝鮮の陶磁器』（全 248 頁）淡交社、9 月 5 日
・論文：降矢哲男「座敷飾りにみえる陶磁器の使用状況とその在り方について」『家具道具室内史』第 10 号、家具道具室内史学会、5 月 26 日

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本プロジェクトの主眼は、基礎データを蓄積し、研究を進めることにある。29年度に引き続き、複数の事例の調査を行い、30年度は海外調査も行うことができた。こうした基礎データの蓄積を継続的に行えたことは大きな成果である。30年度もこれまでのデータの蓄積を活かして、国内外において学会発表等を行うなどしたこととともに、特に公刊図書として、その成果を広く一般に公表できたことは、年度計画を上回ったといえる。また、調査の過程で展示を拡充できるだけの寄託品を受け入れられることとなったことも大きな成果であり、大規模な展覧会や講演会などの博物館事業の内容の充実に繋がることが期待できる。本事業は31年度以降「旧家伝来の工芸品に関する調査研究」の枠組みの中で行うこととなるが、当該事業にも十二分に寄与できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。今中期計画の 3 年目として、着実に調査を進め、多くの基礎データの蓄積を行った。その成果をもとに行った公刊図書の公表や国内外における研究発表や展示を通じて、研究成果を研究者、一般に広く還元できた。また、本調査研究の基礎データの収集を通じて、館蔵品や寄託品の充実を図ることができたことは、当初の想定を越える成果であったと言える。本事業は 31 年度以降、「旧家伝来の工芸品に関する調査研究」に移行するが、引き続き基礎データの蓄積を継続して進めていくとともに、従来の蓄積データを照らし合わせながら研究を行い、さらなる成果の結実に結び付けていきたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411Bｴ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	エ　近畿地区社寺文化財の調査研究　((4)-①-1))

【事業概要】
京都国立博物館では長年にわたり、京都を中心とした近畿地区の社寺に伝存する文化財の悉皆調査行ってきた。28 年度からは、4 年計画で科学研究費補助金による助成を受け「河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」というテーマのもと、大阪・河内地域に存在する社寺の文化財を中心に調査を併せて行う。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長　淺湫毅

【主な成果】
(1)河内地域の社寺調査
・30 年度は 4 年計画の 3 年目にあたり、河内長野市に所在する観心寺において第 2、第 3 回目の悉皆調査を行った。また、同市金剛寺において一部の分野では補足調査及び撮影を行った。
　観心寺悉皆調査　6 月 19 日～22 日（※当初計画では 18 日からの予定であったが、地震の影響で延期。）
　金剛寺補足調査　31 年 2 月 8 日
　観心寺悉皆調査　31 年 2 月 18 日～22 日

(2)過去の社寺調査成果の公表等
・28、29 年度行った金剛寺における社寺調査の成果の一部を、『社寺調査報告 29 金剛寺（彫刻編)』として公表した。
・過去に行った京都市内の社寺調査のうち、建仁寺塔頭及び永観堂禅林寺に関して、報告書刊行に向け、これまでに作成した調書の分類・整理を継続して行った。

観心寺調査風景

【備考】
科学研究費補助金基盤研究(A)「河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」の 4 年計画の 3 年目
(1)
・調査回数 3 回
・本調査の最終成果は、科研の最終年度である 31 年度末に報告書にて公表予定。
(2)
・『社寺調査報告 29　金剛寺（彫刻編)』31 年 3 月 31 日刊行

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は、河内長野市の観心寺において蔵に収められている文化財の調査・撮影、金剛寺において金堂に29年度修理を終えてそろった大日・不動・降三世の三尊について補足調査と撮影を行った。今回の調査で、観心寺が所蔵する文化財ついては過半数を超える文化財に関し調査を行うことができた。また、金剛寺においては報告書刊行に向けての調書作成及び写真撮影を一部の分野を除いて終えることができ、最終年度である31年度に発行予定の報告書刊行に向けての調書作成及び写真撮影をすることができた。あわせて、これらの情報をデジタルデータとして入力し、資料の整理を行った。以上のことから、年度計画の所期の目標を達成した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究の一環として、河内地域の仏教文化と歴史に関して科学研究費助成事業に申請し、それに基づく調査研究を実施した。本事業は4年計画であり、初年度から3年度にかけては年度毎に1ヶ所以上の寺院を当該地域から選択し（28年度は金剛寺、29・30年度は観心寺)、全研究員参加による悉皆調査を行う計画であった。30年度は当初の予定どおり、金剛寺の補足調査と、観心寺の悉皆調査を2回行い、100件を越える多数の文化財を調査し資料を収集できた。31年度についても引き続き観心寺の悉皆調査を行うとともに、教興寺等で安置仏の調査を行う予定である。 過去に行った調査寺院の補足調査に関しては、河内地域の調査に重点を置いていたため十分には行うことができなかったものの、調書の整理等に関しては継続して行い、データベースへの入力も順調に進んでいる。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411B ｸ-1

業務実績書

中期計画の項目	（4）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ク　特集展示「美麗を極める中国陶磁」に関する調査研究

【事業概要】
特集展示「美麗を極める中国陶磁」（30 年 12 月 18 日～31 年 2 月 3 日）の開催のため、寄贈作品の松井コレクション及び関連作品の調査を行った。併せて、図録掲載のための写真撮影も行った。

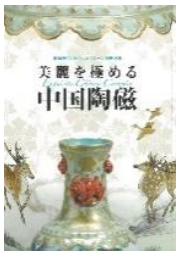
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室研究員　降矢哲男

【主な成果】
(1)24 年に中国陶磁を中心に美術品の蒐集していた松井宏次氏から、陶磁 59 件、考古 13 件、彫刻 2 件、計 74 件の寄贈があった。この寄贈を顕彰するため、受贈作品全点を分野毎に調査、写真撮影をし、基礎資料の収集を行った。作品調査により、個々の作品の年代や来歴等が明らかとなり、寄贈以降に分かってきた新知見を鑑みながらそれぞれの作品についての解説文を執筆した。特に寄贈作品の中心をなす中国陶磁については、その歴史的背景から松井コレクションがどのような年代に作られた作品で、どのような意図を持って集められたかなどの詳細についての考察を行った。

特集展示「美麗を極める中国陶磁」展示風景

(2)特集展示については視覚的、効果的に作品の状況や研究成果が観覧者にも分かり易くなるように、ライティングや解説文にも注意して作成し、概ね好評を得た。また、図録を作成し、上記の研究成果を収録した。特に写真図版については、全点カラー図版で掲載を行い、愛好家や研究者にも研究資料として用いられるように鮮明なものとするとともに、所蔵品目録としても長く活用されるように基礎データについても収録した。
(3)本研究の成果は特集展示の関連土曜講座や論文でも発表した。

【備考】
(1)
・調査件数　約 150 件（＊寄贈作品と比較検討を行うために行った作品調査数を含む。）
・撮影コマ数　約 300 カット
(2)特集展示「美麗を極める中国陶磁」（12 月 18 日～31 年 2 月 3 日）平成知新館 1 階（全 2 室）
図録『特集展示　松井コレクション受贈記念「美麗を極める中国陶磁」』12 月 18 日刊行
(3)
・土曜講座：降矢哲男「美麗を極める中国陶磁」31 年 2 月 2 日
・論文：降矢哲男「美麗を極める中国陶磁」『陶説』第 789 号、12 月 1 日



展覧会図録

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	それぞれの分野において作品調査を実施し、最新の研究成果との比較検討などを行った。その成果を展示や解説にも活かし、一般にも見やすく分かり易い展示を心掛けた。 特に松井コレクションの中核をなしている中国陶磁については、その歴史的な流れのなかでのコレクションの位置付けや、日本における中国陶磁の価値観などについても考察することができた。こうした成果は、展示や図録などの成果物にも反映し、広く一般に公開され、研究者の基礎資料として今後幅広い活用がなされることが予想されるなど、所期の目標以上の成果が得られた。 また、本特集展示及び図録により、寄贈の顕彰とすることもできたことも博物館事業として意義深いものとなった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究として、京都文化を中心とした文化財の収集・調査研究・展示・教育普及を実施することが中期計画目標として定められている。京都文化のうち陶磁分野では、通史的に調査研究を進めて情報を収集し、陶磁器の歴史における京焼をはじめとした陶磁器の位置付けを考えていくことが不可欠である。以上の点で、今回の寄贈作品は、重要な作品であるとともに幅広い作品群となっていることから、松井コレクションのみでも通史的に陶磁史の考察を行えることを示すなど、当初の想定を超えて研究を進めることができた。本研究成果を展示及び図録により公開したことは、陶磁史研究の発展に大いに寄与するものであり、所期の目標を超える成果と言える。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411Bｸ-2

業務実績書

中期計画の項目	（4）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ク　特集展示「百萬遍知恩寺の名宝」に関する調査研究（（4）-①-1））

【事業概要】

京都国立博物館が実施している「近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究」の成果公開の一環として、近年、調査が完結した知恩寺を対象に、同寺所蔵の文化財の研究を行い、調査研究成果を公開した。平常展示のなかでもテーマ性をもたせた「特集展示」の枠組みでの展示とし、京都に根差した浄土宗美術の精華を広く認知してもらうことも狙った。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室主任研究員　呉孟晋

【主な成果】

展示風景

知恩寺は京都市左京区にある浄土宗七大本山の一つで、「百萬遍」の名でも知られる名刹である。京都国立博物館では、知恩寺の全面的なご協力のもと、20 年度から断続的に同寺が所蔵する文化財の悉皆調査を行ってきた。27 年度末に刊行した『社寺調査報告』第 27 号（知恩寺篇）では、調査時に作成した調書に基づき、合計 434 件の文化財の詳細を掲出した。今回の展示にあたり、調査に関わった学芸部の全研究員が展示作品を精査し、展示室にあわせて総計 37 件の文化財を選出し、その研究成果を作品解説及びリーフレットに反映した

展示は全 3 章で構成した。第 1 章「宗祖の教え」では、開基の法然上人と第二世の源智上人をはじめ、中国浄土宗から始まる宗派の教えを、肖像画などを中心に関連する文化財で示した。第 2 章「浄土の世界」は、「浄土曼荼羅図」や「阿弥陀浄土変相図」といった大幅の展示のほか、快慶作の学説が提示された「阿弥陀如来立像」も同寺から出陳を賜り、CT スキャナー調査の結果、内部に納入品を発見したことなどに言及した。第 3 章「所縁の名宝」では、徳川将軍家をはじめ有力な檀越からの寄進などによる名品やゆかりの品を展示し、今回の調査で明らかになった円山応挙や高田敬輔ら近世絵画の優品もあわせて出陳した。展示規模は特集展示としては、これまでのなかでも最大級のものとなった。

会期中には関連事業として、土曜講座を計 2 回開講した。また、平成 30 年度公益財団法人仏教美術研究上野記念財団「研究発表と座談会」（9 月 2 日、主催：仏教美術研究上野記念財団、共催：京都国立博物館）を「仏師とその工房をめぐる諸問題」というテーマで開催し、前述の「阿弥陀如来立像」をめぐって活発な議論が交わされた。

なお、知恩寺からはすでに数多くの文化財の寄託を受けているが、今回の調査及び展示を契機に同寺から新規に預かることになったことについても附記したい。

【備考】

特集展示「百萬遍知恩寺の名宝」（8 月 7 日～9 月 9 日）平成知新館 2 階（全 5 室）
特集展示リーフレット『百萬遍知恩寺の名宝』8 月発行
関連土曜講座：福原隆善氏（浄土宗大本山百萬遍知恩寺法主）「百萬遍知恩寺の歴史」（8 月 25 日）、
呉孟晋「京都の社寺と博物館―京都国立博物館による百萬遍知恩寺什物調査について―」（9 月 8 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査で新たに認知された文化財の展示はもちろん、展示にあわせて学術団体主催のシンポジウムも開催されたことで、出陳文化財に関する議論をより深めるとともに、学会をはじめとする専門家にも知恩寺所蔵の文化財の全体像を明らかにすることができた。 特集展示の会期は夏休み期間中にあたったことから、中学、高校生の来館が増加することも想定して、作品解説は過度に専門的にならないように配慮し、英語、中国、韓国語も併記し、説明内容を追記するなどして海外の観覧者にも京都の宗教文化とその美術についての理解が深まるように工夫するとともに、リーフレットにより詳しく概論やコラムなどを掲載し、専門性も担保した。 京都にある寺院の文化財を展観するのは、同地に立地する当館に求められる使命であり、十全に果たしたものと考える。特に今回は調査、展示、保管という博物館運営を支える3つの柱のすべてを満たした理想的な形の調査研究事業となり、所期の目標を上回る成果を得られた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究として、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究にも関連する調査研究事業として実施した。これまでの調査研究を活かし、展示を通じてその成果を公開するとともに、寄託品の拡充にもつながっており、着実に成果を上げている。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411Bｸ-3

業務実績書

中期計画の項目	（4）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ク　特別企画「日中平和友好条約締結 40 周年記念　中国近代絵画の巨匠　斉白石」に関する調査研究（(4) -①-2)）

【事業概要】日中平和友好条約の締結から 40 周年を迎えるのを記念して中国近代水墨画を代表する斉白石（1864-1957）の展覧会を開催するにあたり、斉白石の絵画や書跡についての調査を実施する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室主任研究員　呉孟晋

【主な成果】

20 世紀の中国を代表する画家の一人である斉白石について調査研究を行い、その成果を 31 年 1 月から 3 月にかけて開催された特別企画「日中平和友好条約締結 40 周年記念　中国近代絵画の巨匠　斉白石」に反映した。

斉白石は単純化した造型に鮮やかな色彩で中国の水墨画に革新をもたらした一人である。大正、昭和初期の日本でも高く評価され、日本人の収集家も多かった。京都国立博物館では斉白石の名品を核とする須磨コレクションを受贈しており、近年、斉白石研究を継続して進めてきた。

今回の展示の借用先となった北京画院は斉白石が晩年に名誉院長を務めたことから斉白石の名品を数多く所蔵することで知られている。京都国立博物館で斉白石研究を進めるにあたり、数年前から北京画院を継続的に訪問し、研究員と交流を深め、国際シンポジウムで研究成果を発表してきた。特に斉白石の作品評価について、日本での評価が中国本国の画壇での高い評価につながったこと、戦後もそれが継続していたことを明らかにした。また、簡単な描写が多いことで知られる斉白石の作品のなかでも、草虫図をはじめとする画題では昆虫を精緻に描くことに改めて注目し、簡略化した花木に配することで、簡潔な表現が主体の文人画において革新をもたらしたことを強調した。

こうした研究成果を昭和 53 年（1978）に締結された日中平和友好条約が 40 周年を迎える 30 年度に企画された記念展示や土曜講座において十分に反映することができた。具体的には、北京画院所蔵の斉白石作品による斉白石名品展を開催するにあたり、中国側が提示したリストに日本側からも希望作品を伝え、中国側からの満額回答により総計 120 件を超える大規模な展観が実現した。

あわせて、京都国立博物館独自の構成として平常展示（名品ギャラリー）では、当館蔵の須磨コレクションを中心とする「須磨コレクションにみる斉白石の名品」を同時開催し、中国と日本での斉白石の一大コレクションによる「競演」とした。

調査風景

【備考】

展示：特別企画「日中平和友好条約締結 40 周年記念　中国近代絵画の巨匠　斉白石」東京国立博物館との共同企画。東博での展示（10 月 30 日～12 月 25 日）の後に、京博に巡回（31 年 1 月 30 日～3 月 17 日）。

図録：北京画院・東京国立博物館・京都国立博物館編『中国近代絵画の巨匠　斉白石』南寧：広西美術出版社、2018 年 10 月

講演等：呉孟晋「斉白石作品鑑賞入門」（東京国立博物館ギャラリートーク、11 月 9 日）
西上実「須磨コレクションの中国近代絵画」（当館土曜講座、31 年 2 月 9 日）
呂暁「木匠から巨匠へ：斉白石の人生と芸術」（当館土曜講座、31 年 2 月 23 日）
呉孟晋「斉白石の絵画における現代性」（当館土曜講座、31 年 3 月 9 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまでの研究成果の蓄積を活かしつつ、日中平和友好条約締結40周年という節目の時期に時宜を得た展示を行うことができた。具体的には、中国での学会発表や論文発表を通して、日本からの視点という独自性で斉白石の書画を再評価したことで、今後、評価が高まってゆく中国近代絵画研究に貢献することが期待できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究を実施した。京都国立博物館の所蔵品のうち、中国絵画コレクションの特色の一つである近代絵画の分野において、当館所蔵品に加えて、北京画院の一大コレクションとの展示することにより、量的・質的な充実を図ることができた。また、このことにより斉白石の画業の全体像を示し、中国近代絵画研究の進展に貢献することができた。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411B ｸ-4

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ク　特集展示「初公開！天皇の即位図」に関する調査研究((4)-①-1))

【事業概要】
特集展示「初公開！天皇の即位図」(31 年 1 月 30 日～3 月 10 日）の開催のため、展示の中心となる即位図及び関連史料の調査を行った。併せて、特集展示への出品交渉を進め、リーフレット等印刷物に掲載するための写真撮影等も行った。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員　福士雄也

【主な成果】
(1)他機関研究者の協力も得ながら、狩野永納筆「霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」に関連する史料約 15 件の調査を行った。

(2)展示の中心となる屏風に描かれるのが、即位式及び譲位式のどの場面であるのか、概ね明らかにすることができた。

(3)屏風の模本が公家の正親町公明により収集された可能性が高いこと、またその動機として公明自身の後桜町天皇譲位式及び後桃園天皇即位式への関与が想定し得るということを明らかにすることができた。

東京大学史料編纂所での史料調査
(「御即位図」)

(4)上記の成果は、天皇の即位式を描く他作例の制作意図等を解明していくうえでも有意義であり、宮廷文化史研究など美術史研究の枠を超えた研究の広がりが期待される。

【備考】
・調査件数　約 15 件
・出品予定作品数　8 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究の主たる対象である狩野永納筆「霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」は、天皇の即位及び譲位を記録的に描くという点で宮廷文化に深く関わる作品であり、しかも京都を活動の拠点とした京狩野の画家により制作された作品である。その意味で、京都文化の発信を活動の柱に据える当館にとって、本作と関連史料を調査研究することは館の使命に沿ったものであり、一般社会及び学会の要請にも応えるものであった。折しも、今上天皇の退位と皇太子殿下の即位を間近に控えた時期であることから、社会的関心の高い時宜にかなった調査研究テーマであったと言える。 本調査研究を通じて、屏風に描かれたのがいかなる儀式の場面か概ね明らかとなり、屏風模本の収集者やその意図についても特定の公家との関わりを想定し得るに至り、展示においてもその成果を反映した。こうした成果は、今後類似する作品の調査研究を進めるうえでも有意義なものであり、今後はさらに宮廷文化史等との学際的研究の展開が期待でき、所期の目標を上回る成果が得られたと言える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究として、京都文化を中心とした文化財の収集・調査研究・展示・教育普及を実施した。 そのなかで近世絵画分野においては、京都ゆかりの諸画家に関する資料・作品の調査研究を進め、情報を蓄積していくことが必要である。この点で、狩野永納という京都ゆかりの画家が宮廷儀式を記録的に描いた作品について、その描写内容のみならず受容のありかたにまで踏み込んだ調査研究を進めることができたことは、今後の画家に関する調査研究や、さらに江戸時代における画家と公家との関係等の把握に大きく寄与するものであり、大きな成果であったと言える。また、天皇陛下の譲位を控え注目を集めている宮廷儀式という京都に深く関わる文化事象の調査研究であった点で、美術史研究の枠を超え、今後のさらなる学際的な展開に繋がることが期待される有意義な成果となった点で、所期の目標を上回ったと言える。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1411Bｸ-5

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ク　特集展示「雛まつりと人形」に関する調査研究((4)-①-1)

【事業概要】

江戸時代に製作された各種の人形について、収蔵品の調書作成および画像撮影などの基礎調査を継続的に実施するとともに、各所蔵先における調査も実施し、寄託や寄贈という形で収蔵品の充実をはかる。その成果を加味しながら、恒例の展示となっている「雛まつりと人形」に反映させ、伝統的な節供文化の継承に寄与する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長（兼工芸室長）　山川曉

【主な成果】

(1)これまでに当館が築き上げた人形コレクションの形成過程と現在の状況について、第30回日本人形玩具学会において発表した。

(2)個人を中心とする各所蔵先の訪問調査を実施し、そのうちの一件を寄贈品として受け入れた。また、京都旧家に伝来する節供人形コレクションの基礎調査を継続して実施した。

(3)上記の成果を加え、恒例の特集展示「雛まつりと人形」を開催し、雛飾りの歴史や各種京人形についてまとめたリーフレットを作成した。

人形調査風景

【備考】

(1)山川曉「京都国立博物館における人形コレクションの形成」日本人形玩具学会第30回研究発表大会、7月8日

(3)特集展示「雛まつりと人形」31年2月13日～3月17日、展示作品47件
山川曉「雛御殿―雛人形の暮らす館―」31年3月3日、関連土曜講座
特集展示リーフレット「京人形を楽しむための鑑賞ガイド」8000部

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国際化が進む中で日本固有の生活文化が希薄になっていく中、雛まつりとして知られる節供行事の継承もまた、困難な局面を迎えている。日本の人形文化の多様性は国際的にも例がなく、そこには日本人固有の心性が託されているはずであり、博物館における人形の展示は、その継承への気づきともなる可能性を有している。恒例の展示を楽しみにしている来館者も多く、少しずつ作品を替えながら特集展示を継続的に実施するために、本年も収蔵品および新たな作品の調査を実施した。また、京都周辺には江戸時代の雛飾りを所蔵する旧家も少なくなく、世代交代を迎える中で処分を検討する事例が跡を絶たない。当館に寄せられる相談に応じ、聞き取り調査や実地調査を行うことにより、当館への寄贈や、より適切な収蔵先の決定へとつなげることができた。31年度以降も、継続して同様の調査研究を行っていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究の一環として、特集展示「雛まつりと人形」に関する調査研究を実施した。高級工芸品の製作地でもあり消費地でもあった京都の特色を、調査研究を通じて得られた知見を活かしつつ、人形を通して紹介する展示につなげることができた。国内だけでなく諸外国からの観光客が増加する中、日本の豊かな生活文化の一端を示す雛まつりの展示をするための調査研究をこれからも継続的に実施していく。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　復元模写制作に伴う仏教絵画の調査研究（(4)-①-1)）

【事業概要】

仏教絵画の制作当初の姿を復元的に描く模写制作に際し、現状では変色や剝落によって肉眼の観察のみでは判別できなくなっている料絹・料紙や顔料などの素材について、事前に高精細デジタルカメラや蛍光 X 線分析器等を用いた光学的調査を入念に実施し、そこで得られたデータを模写制作に活用・公開する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長　谷口耕生

【主な成果】

(1) 東京藝術大学の大学院生が行う信貴山縁起絵巻模写制作のため、高精細デジタル画像の撮影及び同絵巻山崎長者巻の原本熟覧調査を 2 度実施した（5 月 24 日・9 月 26 日）。同模写制作に当たっては、東京文化財研究所と当館の共同研究報告書『朝護孫子寺蔵　国宝信貴山縁起絵巻　調査研究報告書－光学調査編－』の成果に基づき使用する顔料の検討を重ねた。

(2) 愛知県立芸術大学が進める聖衆来迎寺蔵絹本著色楊柳観音像復元模写制作の基礎資料を提供するために高精細デジタルカメラ等の光学機器を用いた顔料調査を実施し、制作が進められた復元模写と原本との詳細な比較検討を行った（31 年 1 月 29 日）。

東京藝術大学大学院生による
信貴山縁起絵巻模写制作

【備考】

調査回数：3 回（5 月 24 日・9 月 26 日：信貴山縁起絵巻調査、31 年 1 月 29 日：聖衆来迎寺蔵楊柳観音像調査）
調査作品数：2 件（信貴山縁起絵巻山崎長者巻 1 巻、聖衆来迎寺蔵楊柳観音像 1 幅）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京藝術大学大学院生による信貴山縁起絵巻模写のため、当館と東京文化財研究所の共同研究による光学的調査の成果を提供するとともに、原本の詳細な熟覧調査を2度設けることができた。また、愛知県立芸術大学大学院生による聖衆来迎寺蔵楊柳観音像模写制作のため、当館が撮影した高精細カラー画像・近赤外線画像を提供するとともに、同大学と共同で各種の光学的調査を実施し、そこで得られた成果に基づいて制作当初の顔料を復元的に考察した。こうした文化財の現状模写や復元模写は、未来に継承すべき文化財の現状を顔料や基底材の質感と共に詳細に記録するとともに、現在は経年の劣化などによって失われた文化財の制作当初の姿を明らかにすることで、文化財が持つ比類なき価値を広く共有することが可能となるものである。こうした模写制作に当館が実施する最新の光学機器を用いた調査成果を反映することにより、模写の精度を飛躍的に向上することが可能となる。さらにこうした取り組みを31年度以降も継続し、模写制作を通じて得られる顔料・基底材等の知見を蓄積していくことで、絵画作品を中心とする文化財の素材研究に大きく寄与することが期待できるだろう。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	信貴山縁起絵巻、聖衆来迎寺蔵楊柳観音像という当館を代表する寄託品について復元模写を制作するにあたり、東京藝術大学、愛知県立芸術大学とともに精度の高い光学的調査・熟覧を実施し、その成果に基づいて研究会等を重ねながら彩色等の復元的考察を加え、着実に復元模写制作に寄与することができた。31 年度以降も、芸術系大学による復元模写制作に積極的に寄与できるよう、引き続きこれまでと同様の光学的調査をはじめ各種の調査研究を実施することで、中期計画の達成を目指す。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	イ　古代の写経と聖教に関する基礎的研究（(4)-①-1)）

【事業概要】

我が国には、寺院を中心に古代の写経や聖教が数多く伝来している。それは、人文科学全般にとって重要な研究資料であるが、たとえば文学作品や歴史書、古文書などに比較すると、仏教学以外の分野での資料としての利用が低調である。本研究は、当館の主要な蔵品である古代の写経と聖教を基軸に、文化財学的な立場から資料を調査し、多分野での利用に堪える基本情報の提示を目指すものである。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長　野尻忠

【主な成果】

(1) 写経の調査

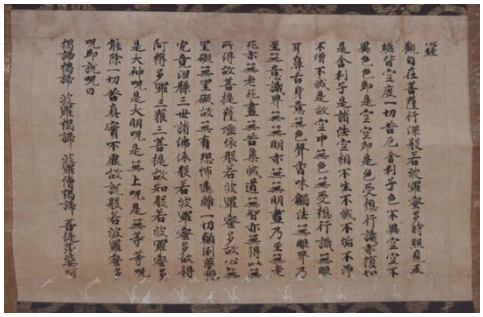
・奈良時代（8 世紀）書写の『大般若経』で白点の施された遺品について、国語学の専門家を招いて共同調査し（6 月 11 日）、白書の仮名・反切等が平安初期の加点であること、訓読を示すヲコト点も同時期で、種類としては喜多院点であることが判明した。

・「隅寺心経」の名で知られる『般若心経』を、3 種調査した（7 月 13 日個人蔵分。7 月 20 日寄贈候補分）。その結果、寄贈候補の品は、すでに知られている海龍王寺本と同筆であることが判明した。

・『法華経』の断簡「蝶鳥下絵経切」と、『賢愚経』の断簡「大聖武」（いずれも個人蔵）を調査した。(9 月 5 日)

・科研：基盤研究(A)「古代～中世の『鍮石』と『真鍮』の研究－金に等しい価値があったころ－」(課題番号：18H03591、研究代表者：西山要一）の一環として、金字経研究会を当館で 4 回開催し（12 月 18 日～31 年 2 月 24 日)、館蔵の紺紙金字経を集中的に蛍光エックス線調査した。その結果は、材質を特定できないものが多かったが、金（Au）使用と真鍮（Cu, Zn 等の合金）使用の両様が認められた。

・31 年 2 月 14 日・15 日に、東京国立博物館主催の書跡特別調査を受け入れ、機構内書跡担当により写経・版経の総合調査を実施した。



海龍王寺本との同筆関係が判明した隅寺心経

(2) 聖教の調査

・醍醐寺所蔵の『聖徳太子伝記』『太子曼荼羅講式』『諸寺縁起』を調査した。(4 月 14 日、5 月 30 日)

・東大寺（奈良市）において、同図書館蔵の聖教を調査した。(6 月 4 日～5 日)

・仁和寺（京都市）において、御経蔵の聖教を調査した。(7 月 30 日)

・寄託品である『聖徳太子伝暦』を、徳島県の文化財調査員とともに調査した。(9 月 13 日)

(3) 紙素材文化財一般の調査

・『三会定一記』や『古今和歌集』等、それに南都寺院文書（旧石崎文書）（以上いずれも個人蔵）を調査した（9 月 14 日・20 日・29 日、10 月 30 日、11 月 26 日・29 日)。『古今和歌集』の調査では、国文学の専門家の同席を得た。

(4) 研究成果の開示

・上記の研究や、29 年度までに蓄積された研究の成果の一部を、修理完成記念特別展『糸のみほとけ－国宝 綴織當麻曼荼羅と繡仏－』図録に掲載の解説文で発表したほか、平常展での展示解説等に反映させた。

【備考】

・野尻忠「奈良時代の二つの紫紙金字経」（奈良国立博物館サンデートーク、31 年 1 月 20 日）などで研究成果を発表

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は、以前から継続している基本的な文化財調査に加え、新たに金字経の材質調査に着手した。今のところデータの蓄積を優先し、解析は先送りしているが、31年度以降に研究へと発展させる。また、訓点や国文学関係典籍の調査にあたっては、外部の研究機関に属する専門家に同席してもらい、新たな知見を得ることができた。このように、年度計画にうたう着実な基本情報の蓄積は達成できているが、一方で、外部への公表の面ではやや物足りない結果となっており、31年度以降は積極的に発表の場を設けていく。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の調査と研究は、順調に実施できている。調査により得られた知見は、順次、展示会場や出版物における解説文等に反映できており、中期計画にある展覧事業に関連する調査研究の1つとして成果を上げている。30年度は、新たな手法による調査も試みており、今後さらに多角的な文化財情報の蓄積が期待できる。蓄積した情報は、原品の保管者として、それを簡単には調査できない多くの研究者に対する責任を果たすめ、機会あるごとに公表していく必要があり、今後はその取り組みを強化する。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cウ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ウ　仏教工芸・上代工芸の総合的調査（(4)-①-1)）

【事業概要】
仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表する。対象は館蔵品、寄託品、一時預かり品をはじめ、展覧会等に際して借用した作品、他の機関・社寺等が所蔵する作品に及ぶ。また、展覧会の出品候補となる作品や、当館の所在する奈良周辺の文化財など、各所の文化財についても積極的に調査を実施し、基礎情報の蓄積に励む。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室長　清水健

【主な成果】

1）展覧会に関する調査

・創建 1250 年記念特別展「国宝 春日大社のすべて」（以下、「国宝 春日大社のすべて」）にて借用した文化財の調査・写真撮影を実施した。
①借用した文化財のＸ線ＣＴ撮影、蛍光エックス線分析を含む調査（6 月 20 日、8 月 10 日）。
②借用した文化財に係る調査・研究会を実施（6 月 6 日）

・修理完成記念特別展「糸のみほとけ―国宝 綴織當麻曼荼羅と繡仏―」（以下、「糸のみほとけ」）にて借用した文化財の調査・写真撮影を実施した。

・科学研究費助成事業　基盤研究（Ｃ）「染織技法による仏像の研究」（研究代表者・内藤栄）は、仏教工芸の調査研究の一環として、「糸のみほとけ」展の事前調査を兼ねて実施した。また本研究によって会期前後にも借用した文化財の調査を行った。

・31 年度特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展」に係る事前調査・写真撮影を実施した。

国宝当麻寺西塔発見舎利荘厳具記者発表資料

(2)外部資金による調査

・科学研究費助成事業　基盤研究（Ｃ）「染織技法による仏像の研究」（研究代表者・内藤栄）による調査を 10 件実施した。
①川島織物セルコンにて復元模造（特別展「糸のみほとけ」にて公開）の打ち合わせ。進捗状況の確認（4 月 18 日）。
②館蔵・寄託品及び借用した文化財の光学的手法による染料調査（9 月 5 日）、ほか。

・科学研究費助成事業　基盤研究（Ｂ）「海洋交易路による仏教流伝形態の研究」（研究代表者・松長有慶）による文化財調査に研究分担者として内藤栄が参加し、オランダ・アムステルダム国立美術館、ライデン民族学博物館で調査を行った（12 月 9 日～13 日）。

(3)経常調査、その他の調査

・国宝当麻寺西塔発見の舎利荘厳具の調査・撮影を実施し、一般財団法人デジタル文化財創出機構の支援を得て、金製・銀製・金銅製舎利容器の模造品を制作した（11 月 14 日に記者発表）。

・修理寄託中の文化財につき、Ｘ線撮影を含む調査を行った（5 月 26 日、6 月 29 日）。

・調査・研究のため一時的に預かる文化財のＸ線ＣＴ撮影、蛍光エックス線分析を含む調査を行った（12 月 20 日）。

・国宝当麻寺西塔発見の舎利荘厳具に関して調査・研究会を実施した（31 年 2 月 16 日）。

・収蔵する仏教工芸品について随時調査を実施した。

【備考】
・調査 59 回（うち客員研究員・調査員による調査 6 回。海外調査 2 回）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表するという、事業概要に従い、当初の計画に基づき、概ね成果を達成している。30年度は、国宝当麻寺西塔より発見された舎利荘厳具のうち金製・銀製・金銅製舎利容器の模造品の制作を行ったことや、科学研究費助成事業も活用し、特別展「国宝 春日大社のすべて」、同「糸のみほとけ」で借用した文化財等の調査を数多く実施することができた点が評価される。加えて、所蔵者の協力を得て特別展「藤田美術館展」の事前調査・写真撮影についても成果を上げることができた。 また、29年度新たに導入されたＸ線ＣＴ装置を用いた調査・研究も充実し、金工・木漆工のデータを蓄積した。今後は一層の多くのデータの取得と活用に努めたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会に関する調査に加え、継続して行っている奈良周辺の文化財の調査・研究、仏教工芸に関する調査・研究、上代工芸に関する調査・研究について一定度成果を上げることができた。また、光学機器を用いた調査では、新たに導入したＸ線ＣＴ装置を活用して模造制作に取り組むなど、大きな前進を遂げた。なお、光学調査は成果の期待される分野であり、一層のデータの蓄積や分析、活用に努力すべきと考える。 31年度は従来の成果を引き継ぎ、調査回数の維持に努め、対象となる文化財の多角的な調査に励むなど、計画の遂行に努力したい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cｴ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	エ　墳墓出土品の調査研究（(4)-①-1)）

【事業概要】
当館蔵の墳墓出土品の学術調査を通じて展示活用や研究発信に貢献する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品室長　吉澤悟

【主な成果】

(1)群馬県白山古墳出土品の調査

28 年度より続けている白山古墳（群馬県前橋市）出土品の調査・研究を 30 年度も推進した。本品には和同開珎や銅碗など８世紀初頭の遺物が含まれており、関東地方の古墳消滅過程を考える上で定点となる資料である。28 年度に発表した「群馬県白山古墳出土品の研究１」に続く「同　２」を、新たな研究メンバーを加えて作成しており、新たな分析成果や三次元計測図などを公表している。これにより東日本の古墳の消滅と畿内の律令的文化の波及が重なり合いながら、新たな地域文化が形成されて行く過程を見通すことができた。また、30 年度、本品一式を地元の群馬県立歴史博物館に貸与し、その展示企画と併せて地元研究者と公開鼎談を行った。その際、同古墳の発掘当時の貴重な情報を地元より得ることができ、本品の評価に大いに役立った。

(2)五條猫塚古墳出土品の貸与と情報発信

五條猫塚古墳出土品の中から主要な遺物約 20 件を選び、地元の五條市文化博物館に貸与、公開を進めた。本古墳の発掘 60 年を記念し、また当館から研究報告書が刊行されたことから、過去の成果と新たな知見を紹介するべく、普段よりも多くの重要遺物を貸与・公開した。

(3)行基墓誌断片の調査

奈良時代の僧侶にして社会事業の先駆者として知られる行基の唯一の直接遺品、銅製墓誌断片（当館蔵）の再調査を行った。本品の再実測、蛍光Ｘ線分析による素材調査などから得られた特徴について詳細に報告を作成し、さらに行基墓の造営に関わった「行基集団」の性格について考察を行った。

(4)中世墓出土品の基礎調査

当館所蔵の古瀬戸瓶子や常滑甕等、寄託保管されている白磁四耳壺や銅製骨蔵器など、鎌倉から室町時代にかけての墳墓出土品について写真撮影や再計測、類例の探索などを行った。その成果の一部は、特別陳列「覚盛上人 770 年御忌　鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興」の展示品解説や論考に活用している。

再調査を行った行基墓誌断片

【備考】

(1)研究報告／諫早直人・大江克巳・金宇大・降幡順子・山口欧志・吉澤悟「群馬県白山古墳出土品の研究２」
『鹿園雑集』第 21 号　奈良国立博物館　31 年 4 月予定
展示／群馬県立歴史博物館　テーマ展示　白山古墳出土品　8 月 7 日～9 月 24 日
発表・鼎談／吉澤悟「出土遺物からみた白山古墳の特徴」
松本浩一・右島和夫・吉澤悟「鼎談・古墳と和同開珎－最後の古墳・白山古墳を考える－」
於．群馬県立歴史博物館、9 月 15 日
(2)展示／夏季特別展「五條猫塚発掘 60 年」　五條市立文化博物館　7 月 21 日～9 月 24 日
(3)論文／吉澤悟「行基墓誌断片を考える」『鹿園雑集』第 21 号　奈良国立博物館　31 年 4 月予定
(4)図録解説／特別陳列『覚盛上人 770 年遠忌　鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興』　奈良国立博物館
31 年 2 月 8 日

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵および寄託の墳墓出土品を積極的に調査・研究・展示することができた。特に白山古墳出土品や五條猫塚古墳出土品の展示では、館外における公開、情報発信に寄与することができた。また行基墓誌の再調査や中世墳墓遺物の調査は、科学研究費助成事業の助成を受けた研究活動とも連動しており、基礎的研究を着実に進めると同時に、その成果を展覧会の解説にも繋げることができた点で、大きな成果を得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の調査研究の一環として、当館の所蔵品・寄託品を中心に、積極的に調査や整理活動を行った。また館の内外の展示でその成果を活用することができた。中期計画に従った活動はおおむね順調である。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cオ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	オ　南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究（(4)-①-1)）

【事業概要】
展覧会開催に際して借用した作品や館蔵・寄託作品、また館外の寺社等の作品のなかから、南都伝来もしくは南都と関わりの深い古代・中世の彫刻を選び、詳細な調書の作成とデジタル高精細画像の写真撮影やX線ないしＣＴスキャン調査を通じ、データの収集と蓄積を行う。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員　岩田茂樹

【主な成果】
(1) 館内外において多数の作品の調査・撮影を行った。作品名は下記のとおり。
(2) 調査を通じて重要な学術的知見を得ることができた。
(3) 特別展や名品展における図録の解説や題箋の執筆、講座等における報告、また論文等刊行物のかたちで新知見の発表を行った。また一部については 31 年度以降の刊行物に発表する。

［作品名］
氷室神社舞楽面（5 月 10 日）／春日大社舞楽面（5 月 14 日）／東京国立博物館文殊五尊像（5 月 21 日）／奈良市写真美術館ガラス乾板（5 月 22 日）／興福寺古写真（5 月 24 日）／奈良大学ガラス乾板（5 月 29 日）／醍醐寺不動明王坐像・阿弥陀如来坐像（5 月 30 日）／悲田院宝冠阿弥陀如来坐像（5 月 30 日）／観音寺菩薩坐像（6 月 18 日）／当館愛染明王坐像（6 月 18 日）／法徳寺地蔵菩薩立像・菩薩立像・菩薩半跏像・二天王立像（6 月 22 日）／安楽寺阿弥陀如来立像・地蔵菩薩立像（7 月 18 日）／法徳寺文殊菩薩坐像・如来坐像・飛天像（7 月 26 日）／藤田美術館弥勒菩薩坐像・釈迦三尊像・楊柳観音立像（8 月 8 日）／春日大社流鏑馬像（8 月 21 日）／法徳寺千体仏像（9 月 7 日）／念仏寺阿弥陀三尊像・如来坐像（9 月 8 日）／西光寺十一面観音菩薩立像・不動明王立像・毘沙門天立像（9 月 8 日）／甘南備寺薬師三尊像（9 月 9 日）／西念寺阿弥陀如来立像（9 月 9 日）／法明寺天部立像（9 月 14 日）／十市町自治会大日如来坐像（9 月 14 日）／藤田美術館阿弥陀如来立像（10 月 2 日）／藤田美術館十二神将立像・四天王立像（11 月 8 日）／長林寺聖徳太子立像（11 月 11 日）／西念寺薬師堂薬師如来坐像・地蔵菩薩坐像・毘沙門天立像・不動明王立像・十二神将立像（11 月 23 日）／如意輪寺如意輪観音菩薩坐像（11 月 29 日）／金剛峯寺深沙大将立像・執金剛神立像（12 月 5 日）／遍照光院阿弥陀如来立像・阿弥陀三尊像（12 月 6 日）／光台院阿弥陀三尊像（12 月 7 日）／慶照寺阿弥陀如来立像・阿弥陀三尊像（12 月 22 日）／極楽寺阿弥陀三尊像（12 月 22 日）／當麻寺光背（8 面）（12 月 26 日）

［調査の成果］
奈良市写真美術館と奈良大学所蔵のガラス乾板を興福寺所蔵の古写真と照合する調査を通じて、国内外に現存する複数の彫刻作品の原所在地を突きとめることができた。観音寺菩薩坐像のＣＴスキャン撮影を通じて木心乾漆造の構造技法について新たな知見を得ることができた。春日大社流鏑馬像の調査の結果、同像が従来言われているより時代がさかのぼり、平安時代の作とみなされるにいたった。長林寺聖徳太子立像について鎌倉時代にさかのぼる作品であることが新たにわかり、かつその構造技法上の特色が知られた。如意輪寺如意輪観音坐像については秘仏のため従来調査が行われていなかったが、初めての本格的学術調査の結果、鎌倉時代の作であることが判明するとともに、像の伝来に関わる銘記も発見された。遍照光院阿弥陀三尊像も本格的学術調査は今回が初めてであり、その結果、鎌倉時代の慶派作品と推定され、同院の歴史に関連する重要作品と考えられることとなった。

【備考】
(1) 調査回数　53 回
(3)
・奈良市写真美術館・奈良大学および興福寺所蔵の古写真・ガラス乾板に関する調査の成果を、東京国立博物館研究誌『ＭＵＳＥＵＭ』676 号（10 月 15 日発行）掲載論文「明治時代の興福寺における仏像の移動と現所在地について―興福寺所蔵の古写真をもちいた史料学的研究―」（執筆山口隆介・宮崎幹子）で公開した。
・当館愛染明王坐像ほかの諸像と、十市町自治会大日如来坐像についての調査成果及び写真を、11 月 1 日に発行した『なら仏像館　名品図録』に反映させた。
・法明寺天部立像に関する調査の成果は、12 月 26 日から 31 年 1 月 20 日に開催された特集展示「新たに修理された文化財」の展示を通じて公開した。
・醍醐寺不動明王坐像・悲田院宝冠阿弥陀如来坐像・安楽寺阿弥陀如来立像・同寺地蔵菩薩立像・遍照光院阿弥陀如来立像・同院阿弥陀三尊像・光台院阿弥陀三尊像に関する知見ならびに写真を、30 年度末に発行予定の当館研究紀要『鹿園雑集』21 号に掲載する「（調査報告）快慶展ＣＴスキャン調査報告」（執筆岩田茂樹・岩井共二・山口隆介）ならびに 31 年度発行予定の豪華図録『快慶』（執筆同上）において発表する。
・藤田美術館所蔵の複数の彫刻作品に関する調査成果及び写真を、31 年 4 月 13 日から 6 月 9 日まで開催される特別展「国宝の殿堂　藤田美術館展」に反映させる。また同展開催中の公開講座「（仮）藤田美術館の仏教美術コレクション」（5 月 25 日、担当岩井共二）にも反映させる。
・法徳寺の諸尊像に関する調査で得られた知見ならびに撮影した写真を、31 年 7 月 13 日から 9 月 8 日に開催予定の特別陳列「（仮）法徳寺の仏像」の展示・図録で公開する。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	調査回数は29年度は35回であったので、さらに大幅に増加した。かつその成果は30年度発行の刊行物や特集展示に反映され、また31年度開催予定の特別展や特別陳列、あるいは講座等に反映される。計画に対し、十二分に成果が得られたと考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	29 年度に引きつづき、南都に伝来ないし南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品について、調書の作成や記録写真の撮影、ＣＴ・Ｘ線等の光学的手法による調査を行った結果、データの収集・蓄積に十二分の成果をあげている。中期計画の 3 年目として、ハイペースで事業を継続している。今後も同様のペースで事業を進めたい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cカ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	カ　東京文化財研究所との共同による仏教美術の光学的調査研究（(4)-①-1)）

【事業概要】

東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づいて、当館が所蔵及び保管する仏教絵画を中心とする美術作品について、高精細デジタルカメラや蛍光エックス線分析器など最新の光学機器を用いた文化財調査を実施し、併せてデジタルコンテンツの作成を行うものである。上記の調査を通じて、色料や基底材など作品に用いられる素材の情報や、制作技法に関する情報、補彩・補絹など補修箇所に関する情報を大量・精緻に蓄積し、報告書等でその成果を広く公表することで、美術史的研究や将来の修理に資することも視野に入れている。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長　谷口耕生

【主な成果】

(1) 29 年度末に刊行した報告書『信貴山　朝護孫子寺蔵　国宝　信貴山縁起絵巻調査研究報告書－光学調査編－』の掲載データに基づいて、国宝信貴山縁起絵巻に用いられる顔料の復元的考察に関する研究会を開催した。さらに同絵巻に関する光学的調査成果と美術史的考察を総括的に盛り込む研究報告書『信貴山　朝護孫子寺蔵　国宝　信貴山縁起絵巻調査研究報告書－研究編－』の 31 年度中の刊行に向けて東京文化財研究所研究員と編集会議を開催した（12 月 11 日）。

(2) 24 年度から継続的に実施してきた国宝綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）を対象とする光学調査の一環として､29 年度末に本格修理が完成した原本に対する追加調査を実施した（4 月 23 日）。本調査では高精細デジタルカメラを用いてカラー画像、近赤外線画像、顕微鏡写真の撮影を実施し、分割撮影した高精細画像の接合データを 7 月 14 日から開催の修理完成記念特別展特別展「糸のみほとけ－国宝 綴織當麻曼荼羅と繡仏－」（以下、「糸のみほとけ」）において展覧会図録や復元模造制作、ミニシアターなどに活用した。

国宝綴織當麻曼荼羅の光学的調査で得られた近赤外線写真

【備考】

調査回数　1 回(4 月 23 日)、調査作品数　1 件（国宝 綴織當麻曼荼羅　1 幅）
研究会等開催件数　2 件(5 月 24 日・9 月 7 日)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	16年度から継続的に実施してきた東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づき、平安絵巻を代表する名品である国宝信貴山縁起絵巻について、光学的調査の成果報告書第2冊の31年度刊行に向けて、調査データの整理・分析を進め、美術史的な考察を加える検討会も計画どおり実施することができた。また24年度から協同研究の一環として継続的に実施してきた国宝綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）の光学的調査について、原本の本格修理が完成したという絶好の機会を捉えて追加調査を実施することができた。これら精度の高い調査データは、東京文化財研究所の研究員とともに詳細な分析を加え、現在刊行を計画中の綴織當麻曼荼羅に関する調査成果報告書において広く公表する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	16 年度から協定を結んで進められてきた東京文化財研究所との共同研究に基づき､30 年度は平安絵巻を代表する信貴山縁起絵巻の調査報告書第 2 冊の 31 年度刊行に向けて､検討会及び編集作業を着実に進めた。さらに、24 年度から継続的に実施してきた国法綴織當麻曼荼羅に関する追加調査を実施し、その成果として得られた画像データを 7 月 14 日から当館で開催した特別展「糸のみほとけ」に活用・公開することができた。今後はこれまでの個々の作品調査や研究から一歩踏み込んで、彩色の施された文化財に関する総合的な研究と情報の共有という広い枠組みの中で検討を重ねることで、中期計画の達成を目指した更なる進展を図りたい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cキ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	特別陳列「おん祭と春日信仰の美術―特集　大宿所―」に関する調査研究（(4)-①-1)）

【事業概要】
春日大社摂社若宮社の祭礼であるおん祭の歴史・伝統と、春日信仰に関連した美術作品を紹介する展覧会。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員　斎木涼子

【主な成果】

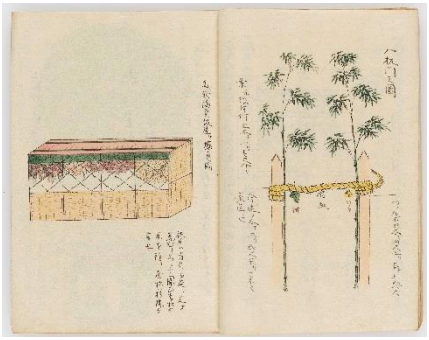
(1)京都大学附属図書館所蔵「奈良与力橋本家律令雑記」に含まれる、春日若宮おん祭関係史料の調査

江戸時代に奈良奉行与力を務めた橋本家の記録、「奈良与力橋本家律令雑記」に含まれるおん祭関係史料については、28 年に同年度の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」への出陳を前提とした調査を行い、その概要を把握していた。その際に、存在を確認していたものの、調査に及ばなかった史料について、30 年に詳しい調査を行い、30 年度の特集テーマに沿った史料を選定することができた。

(2)春日大社所蔵「大宿所春日若宮祭式事件并品書」の調査

調査の結果、すでに知られている別所蔵者写本の原本となった作品であることが確認された。

(3)以上の(1)(2)の調査成果により、30 年度特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の特集テーマ「大宿所」の内容を充実したものにすることが出来た。またこれにともない、従来未紹介であった「奈良与力橋本家律令雑記」の史料 2 点、また「大宿所春日若宮祭式事件并品書」を、展示・紹介することができた。



春日大社所蔵「大宿所春日若宮祭式事件并品書」

【備考】
・調査：京都大学附属図書館　1 回（2 点）
　　春日大社所蔵品　1 回（1 点）
・論文等：斎木涼子　「おん祭と春日信仰の美術―特集　大宿所―」（特別陳列『おん祭と春日信仰の美術』図録　展示概説、奈良国立博物館、12 月）
・特別陳列『おん祭と春日信仰の美術』（12 月 11 日～31 年 1 月 20 日、奈良国立博物館東新館）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	春日大社の伝統行事「春日若宮おん祭」について、注目されることの少なかった江戸時代の史料群の調査を行い、その存在を評価し、展示を通じて広く公表することができた。また例年、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」については、主に美術作品や芸能関係資料、また華やかな祭礼の側面を中心としたテーマ設定がなされることが多かったが、30年度は祭礼を支える部分にスポットをあて、その結果、今までにない新しい観点から展覧会を構成することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平安時代以来の長い歴史を持ち、重要無形民俗文化財である「春日若宮おん祭」の歴史、また春日社に対する信仰について、例年新たな切り口を見出し、展覧会を通じてその多様な魅力、歴史・文化における重要性を紹介することができている。今後も、祭礼や信仰の様々な側面に関する研究を行い、新たな知見を提示していく必要がある。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cク

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	特別陳列「覚盛上人 770 年御忌　鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興」に関する調査研究（(4)-①-1)）

【事業概要】
特別陳列「覚盛上人 770 年御忌　鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興」の開催にあたり、展示候補となる文化財を調査し、実際の展示や図録などの形で研究成果を発表し、さらに今後の研究活動へと結びつける。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長　野尻忠

【主な成果】

(1) 展示候補資料の調査
・覚盛上人の命日に、今も毎年おこなわれる「梵網会」を、特別陳列準備のため取材した。(唐招提寺)（5 月 19 日）
・出陳候補の「證玄骨蔵器」を初めて開封するにあたり、元興寺文化財研究所とともに構造を調査した（8 月 28 日）。開封は唐招提寺に於いて 9 月 10 日に実施された。

(2) 展示のための調査・写真撮影
・證玄骨蔵器の細部を調査した。(元興寺文化財研究所)（10 月 3 日）
・大悲菩薩（覚盛）坐像を調査し、構造等を確認した。(唐招提寺中興堂)（11 月 5 日）
・図録やパネルに使用する写真原板を調査した。(京都国立博物館、飛鳥園)（11 月 29 日ほか）
・初出陳となる円律上人（證玄）像や、覚盛願経などを調査し、また写真撮影した。(唐招提寺)（12 月 21 日）
・證玄骨蔵器の内容品を調査した。(唐招提寺)（12 月 21 日）

(3) 研究成果の公開
・特別陳列の開催にあわせて展覧会図録を刊行した。図録には論文 3 本を掲載したほか、初公開の證玄骨蔵記や円律上人像を含む 21 件の展示品の図版と解説文を収めた。
・会期中に、一般観覧者向けの公開講座「覚盛上人の事跡 ―唐招提寺中興―」を講堂で実施した。(31 年 2 月 23 日)

(4) 本研究の意義
・覚盛（1193～1212）は、鎌倉時代前期に奈良での戒律復興に重要な役割を果たした僧だが、その事跡についてはあまり広く知られていなかった。今回、覚盛関係史料を網羅的に整理したことは、研究史上に特筆されるものである。
・今回初めて科学的調査の対象となった證玄骨蔵器は、X 線 CT 等の手法も取り入れて構造の分析が進み、同時代の他の骨蔵記との比較研究に資する情報を提供することができた。

図録掲載の證玄骨蔵記 CT 画像

【備考】
・図録に掲載した論文は、野尻忠「総説　鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興～覚盛の事跡を中心に」、吉澤悟「證玄と忍性の骨蔵記―律僧の選んだ「舎利瓶」のかたち―」など 3 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	奈良の中世史や仏教史を語るうえで欠かせない僧覚盛の御忌の年に、その生涯と事跡を広く紹介することができた。あわせて、覚盛の前後に唐招提寺を支えた貞慶、證玄といった僧の活動にも触れ、覚盛の事跡を相対化することができた。初公開の資料については十分に調査し、今後の研究進展に資する情報を図録掲載等の形で公表することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の調査を通じて得た知見を展覧会の形で国民に還元するという計画は、順調に達成されている。31 年度以降も、引き続き、奈良の地域に密着したテーマにより、文化財の着実な調査と、それに基づく研究、そして展示公開を継続していく。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1411Cヶ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	Ｘ線ＣＴスキャナ等による彫刻・漆工・考古資料などの文化財に関する構造技法の調査研究 ((4)-①-1))

【事業概要】

本事業では、以下の内容について実施した。

(1)展覧会で借用した文化財に対して、状態確認や製作技法解明などを目的としてＸ線ＣＴスキャナによる調査を実施した。得られた結果は文化財の保管環境向上の資料として活用を図る。

(2)館蔵品や寄託品に対して、状態確認や製作技法解明などを目的としてＸ線ＣＴスキャナによる調査を実施した。得られた成果は保存カルテ作製や修理の際での利用を予定している。

(3)他の博物館・美術館、教育委員会や大学等から依頼のあった文化財等について、構造や製作技法解明を目的としてＸ線ＣＴスキャナによる共同調査を実施した。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　鳥越俊行

【主な成果】

(1)創建 1250 年記念特別展「国宝　春日大社のすべて」出陳品 6 件、修理完成記念特別展「糸のみほとけ-国宝　綴織當麻曼荼羅と繡仏-」出陳品 1 件、特別展「国宝の殿堂　藤田美術館」出陳予定品 1 件の木彫像や漆工品に対してＣＴ調査を行い、構造、納入品や虫損などの状況が確認できた。

(2)館蔵や寄託の彫刻・考古資料を 8 件ＣＴ調査し、外観から把握できなかった構造や劣化、過去の修理状況が確認できた。

(3)指定候補作品や仏教美術に関する資料など 16 件あまりの文化財に対してＣＴ調査を行い、構造や制作技法などに関する知見を得た。

調査で得られた成果については、報道発表「法華寺所蔵　文殊菩薩坐像の公開」、「岡寺所蔵　本尊脇侍 不動明王像・愛染明王像 平成の大修理完了調査報告」などを行うとともに、31 年度以降当館紀要や学会等での公開を予定している。

梱包状態でのＣＴ調査の様子

【備考】

・Ｘ線ＣＴスキャナ調査件数：152 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度に導入したＸ線ＣＴスキャナを活用し、展覧会の借用品、館蔵品や寄託品、外部から依頼のあった文化財など、152件の文化財などを調査し情報の蓄積を図った。成果は研究紀要や学会等で発表し、構造や制作技法など文化財の価値の再評価に役立つ基礎資料を提供した。31年度についても、継続した調査並びにデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度に導入したＸ線ＣＴスキャナは順調に稼働しており、展覧会の借用品、館蔵品や寄託品などを随時調査し情報の蓄積を図った。31年度も調査を継続し、データの蓄積を図るとともに中期計画の達成を目指す。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1411Dｱ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　Ｘ線ＣＴスキャナ等による文化財の構造技法解析に関する調査研究（(4) -①-1)）

【事業概要】
Ｘ線ＣＴスキャナ等による有形文化財の構造技法に関する調査研究を実施し、展覧事業・教育活動等に資する。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長　木川りか

【主な成果】

(1) 銅鐸及び大刀の内部構造調査

神戸市立博物館所蔵の国宝桜ヶ丘銅鐸については、過去に当館でＸ線ＣＴスキャナ等による総合診断調査を実施したが、Ｘ線減衰の影響のため舞（鐸の上面部）を可視化することはできなかった。30 年度は、全 14 口の銅鐸のＸ線ＣＴスキャナによる再調査を実施した。舞面をＸ線の照射方向と垂直に保持した状態でスキャンを行うことで、舞の内部状態を記録に収めた。この他、銀象嵌大刀のＸ線ＣＴ調査を実施し、錆に埋もれた象嵌及び表面に残った象嵌の文様を確認することができた。

桜ヶ丘銅鐸のＸ線ＣＴ調査の様子

(2) 3Dプリンタによるレプリカの製作

野村美術館所蔵の南蛮毛織水指のＸ線ＣＴスキャン及び三次元計測を実施した。その結果、身は中央で異なる金属板を鍛接させていること、蓋は 9 個の部材を組み合わせて作られていること等、構造技法に関する特徴が明らかになった。得られたＣＴデータと三次元計測データを組み合わせ、3Dプリンタによって精巧な立体資料を製作した。これによって、薄く延ばした水指の特徴を手にとって観察できるようになった。また、熊本県の国越古墳出土銅碗の過去の測定データに基づき、3Dプリンタによってレプリカを出力した。レプリカは 2 点製作し、熊本県立装飾古墳館と当館にてハンズオンで展示した。

【備考】
・Ｘ線ＣＴ調査件数 20 件、調査回数 160 回
・三次元計測調査件数 7 件、調査回数 45 回
・学会発表：「国宝『初音の調度』-耳盥・輪台、渡金箱、旅眉作箱-のＸ線ＣＴによる構造・技法調査」
　日本文化財科学会第 35 回大会（7 月 6 日、7 日）
・関連展覧会：「特集展示『国宝　銅鐸絵画』」（7 月 10 日～9 月 2 日）、「文化交流展『たたいて削って青銅器－東アジアの響銅－』」（9 月 15 日～12 月 23 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は26件の文化財調査を実施し、銅鐸や象嵌大刀などの作品の保存状態や内部構造に関する新たな知見を得ることができた。また、これまでの調査データをレプリカの製作や学会発表などを通じて公表し、研究成果の普及に努めた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿ってこれまで各種文化財の構造技法解析を実施し、文化財の製作技法に関する理解を深め、展示や学会発表などによって公表してきた。30 年度もこれまで通り調査を進められたことに加え、文化財の材質・形状に応じた調査手法の改良及びレプリカの製作を実施することができた。31 年度は、更新後のＸ線ＣＴスキャナを活用してより高精細な解析を実施する。また、銀象嵌大刀における象嵌文様を効果的に解説するための実物大ポスターを作成する等、研究成果を展示事業・教育活動へ還元していく。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1411Dイ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	イ　近世キリスト教に関する研究（(4) -①-1)）

【事業概要】
近世（安土桃山時代から江戸時代まで）の時代性を特徴付けるキリスト教の日本伝来と禁教に関する作品を展示して、近世日本におけるキリスト教の歴史や信仰に関する研究成果を発信する。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	研究員　松浦晃佑

【主な成果】
(1) 29年度からの継続事業として、「キリスト教の伝来と禁教」というテーマで、キリスト教の日本伝来から明治時代にキリシタン高札が撤廃されるまでの歴史を、観覧者がたどれるように作品展示を行った（8月28日から31年3月31日まで)。また、同じく継続事業として、「キリスト教信仰の道具」というテーマで、幕末に長崎奉行所がキリスト教徒から没収、又は海外からもたらされた十字架やメダイ、島原・天草一揆に参加した人々が所持していた十字架やロザリオを展示し、信徒たちの信仰を知ってもらう作品展示を行った（11月20日から31年1月14日まで)。
(2) 奈良・天理大学附属天理参考館と天理大学附属天理図書館が所蔵するキリシタン関係資料や南蛮関係資料、重要文化財に指定されているキリシタン版を調査した（11月6日、7日)。両館が所蔵するキリシタン関係資料の多くは、従来歴史的な位置付けがなされてこなかったが、調査を通じて、一定のまとまりに区分ができる見込みを得た。

「キリスト教の伝来と禁教」展示風景

キリシタン関係資料調査風景
（於：天理参考館、11月6日）

【備考】
調査回数2回。
11月6日、天理大学附属天理参考館、調査点数80点。11月7日、天理大学附属天理図書館、調査点数15点。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	7月に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」がUNESCO世界文化遺産に登録され、日本のキリスト教の歴史や信仰のあり方に対する関心が高まるなか、近世日本のキリスト教の歴史、キリスト教徒の信仰を作品展示にて紹介することで、社会的な要請に応えることができた。また、天理大学附属天理参考館と天理大学附属天理図書館の所蔵品の調査を通じて、従来歴史的な位置付けがなされてこなかった作品群を評価し直す見通しがついた。両館の協力を得て、展覧会を開催し、作品展示と解説図録にて研究成果を公開したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした文化財についての展示及び調査研究の一環として、近世日本の文化交流にとって非常に重要なキリスト教の歴史を、展覧事業を通じて、30年度も継続して広く紹介することができた。また、天理大学附属天理参考館と天理大学附属天理図書館等、他館の協力を得て、中期計画最終年度にキリスト教の歴史と文化を一般に紹介するとともに、研究成果を公開する展覧事業を行う見込みである。31年度は上記の継続事業と、32年度に行う展覧事業の準備を行う予定である。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1411Dウ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ウ　高等学校が所蔵する歴史資料に関する研究（(4) -①-1)）

【事業概要】

全国の高等学校には現在、校内遺跡出土品、発掘調査出土品等々、様々な来歴の考古資料が保管されている。高等学校所蔵考古資料の実態把握は、考古学研究上の重要性に加え、社会史的、教育史的意義を有する。しかしながら、考古学的知識を有する教職員の不足から、十分な管理、活用が行われているとはいえない状況にある。本研究は、高等学校所蔵考古資料の更なる活用に向けて、全国的な調査を実施し、その成果を展示、教育普及活動等の博物館活動を通じて広く公開するとともに、高等学校と博物館の効果的な連携活動について研究するものである。

【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　今井涼子

【主な成果】

（1）高等学校所蔵考古資料の調査

・30 年度は東京都立北野高等学校（17 年統廃合により廃校）と福島県立双葉高等学校（29 年 3 月より休校）の旧蔵資料調査を行った。

（2）「全国高等学校歴史学フォーラム」の実施

・29 年度同様ポスター発表形式で実施し、7 県 10 校（うち、福岡県 4 校）がポスター発表を行い、約 300 人が来場した。(8 月 4 日)
・福岡市内の中学校教員の視察、ケーブルテレビの取材を受けた。
・「実験タイム～きゅーはく石器 de クッキング！」と題して、長崎県立壱岐高等学校生徒とともに、彼らが製作した黒曜石製石器で食材を切り、その切れ味を確かめることで、石器が生活に必要な道具であることを理解する体験事業を行った。
・フォーラム終了後、参加生徒全員にフォーラム参加の感想、特に他校の発表についての意見を発表してもらい、参加生徒相互の意見交換を図った。
・事業趣旨にご賛同いただき、公益財団法人九州国立博物館振興財団の後援、太宰府天満宮の協力を得た。

全国高等学校歴史学フォーラムの様子

（3）高等学校との連携事業の実施

・30 年度「全国高等学校歴史学フォーラム」に参加した福岡県立筑紫丘高等学校と連携し、写真研修を行った。(8 月 17 日）29 年度に当館において実施した文化財写真研修を踏まえ、高等学校において高校生が文化財写真を撮影する方法を習得することを目的とした。参加者は同校郷土研究部及び写真部の部員。撮影対象は同校所蔵考古資料。当館職員が講師を務めた。

（4）高等学校との連携事業の視察

・当館での高校生を対象とした教育普及活動や博学連携活動の参考にすることを目的に、各地の博物館等が実施した高等学校との連携事業を視察、調査した。

【備考】

・30 年度資料調査：福島県立双葉高校所蔵資料（4 月 20 日、福島県文化財センター白河館)、都立北野高校旧蔵資料（5 月 24 日、板橋区立民俗資料館）
・30 年度事業視察：日本考古学協会高校生ポスターセッション（5 月 27 日)、岐阜県立関高等学校地域研究部企画展「東アジア史の案内人　渡辺三三旧蔵資料の研究」(9 月 29 日)、登呂博物館・日本考古学協会共催公開講演会「子どもたちと語る考古学と未来」（11 月 3 日)、群馬県立歴史博物館高校生向けワークショップ（11 月 20 日)、福島県文化財センター常設展示室「みんなの研究広場」コーナー福島高校展示（11 月 21 日)、京都市学校歴史博物館常設展示（11 月 27 日)、京都文化博物館「第 2 回ミュージアムの課題と可能性を考えるワークショップ　まちづくりと博物館」(31 年 2 月 2 日)・「京都府内の学校所蔵考古・歴史資料展 2」(31 年 3 月 9 日)、京都市学校歴史博物館シンポジウム「学校資料の活用を考える-学校資料の価値と可能性-」(31 年 3 月 10 日）
・「全国高等学校歴史学フォーラム」取材：ケーブルステーション福岡

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は、29年度に実施した調査等の成果を「全国高等学校考古名品展2018」で紹介し、「全国高等学校歴史学フォーラム」の運営に反映させた。また、29年度実施事業を踏まえ、高校生自身の研究活動を支援する内容の博学連携事業を実施した。31年度以降、30年度の実施成果を基に、継続的な博学連携事業の実施方法を検討する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。 31 年度は引き続き博学連携事業に取り組みながら、3 年間の研究結果を取りまとめ、他機関で参考にできるような形に整理する予定である。長期間継続可能な博学連携事業のあり方、内容について、実践を通して検討を進めるとともに、他機関の取り組みについてもさらに取材研究を進める必要がある。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1411Dｴ-1

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	エ　特集展示「国宝　銅鐸絵画」に関する調査研究（(4) -①-1)）

【事業概要】
本事業は、特集展示「国宝 銅鐸絵画」展に関する調査研究事業である。8 か年をかけた銅鐸に関する共同研究の成果を展覧会及び図録において広く、わかりやすく一般に公開した。

【担当部課】	交流課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　進村真之

【主な成果】
本展示は 22 年度より神戸市立博物館と当館が国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈（神戸市立博物館蔵）に関する共同研究を行ってきた成果を展示、図録、講演会、ワークショップ等で紹介するとともに、実物と計測データを見比べ検討する共同調査を行った。

(1) 7 月 10 日～9 月 2 日の期間に特集展示「国宝　銅鐸絵画」展を開催し、国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈の科学的調査の研究成果を展示及び図録で紹介した。桜ヶ丘 4 号・5 号銅鐸と同一工房作とされる東京国立博物館所蔵の国宝・伝香川銅鐸も合わせて展示を行い、九州で初めて 3 口を並べての紹介となった。東京国立博物館からは伝香川銅鐸の三次元画像の提供を受けるとともに、関連展示として桜ヶ丘 1 号銅鐸と同じ鋳型で作られた泊銅鐸も借用し、展覧会の内容を更に深化させることができた。

(2) 記念講演会「絵画銅鐸の魅力」(8 月 5 日）を開催したほか、展覧会場内でのミュージアムトーク（7 月 18 日 1 回、8 月 7 日 2 回）を行った。教育普及活動としては 3D プリンターを活用した銅鐸拓本ワークショップ（8 月 12 日）を行った。

(3) 神戸市立博物館の研究者 2 人を招聘し、館内の研究員とともに桜ヶ丘 4 号･5 号銅鐸と伝香川銅鐸の実物及び調査で取得した三次元画像による調査検討会を行った。

「国宝 銅鐸絵画」会場写真

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	神戸市立博物館や東京国立博物館と緊密に連携を取り、これまでのＸ線ＣＴや三次元デジタル計測のデータを活かして更に多くの研究成果を得ることができた。この研究成果を特集展示に反映し、広く一般に発信することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画「有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究」に基づき、銅鐸に関する調査研究を進め、その成果を特集展示に反映し、広く一般に発信することができた。 今回の共同研究に得られた知見を今後の調査研究および展覧事業、新たな教育普及事業に活用する予定である。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1411Dｴ-2

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	エ　特集展示「全国高等学校考古名品展 2018」に関する研究（(4) -①-1)）

【事業概要】
30 年度開催の特集展示「全国高等学校考古名品展 2018」の開催に向けた調査研究

【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　今井涼子

【主な成果】

（1）資料調査

・沼津市の加藤学園高等学校は、郷土研究部の活動が発展し、校内に考古学研究所が設立されており、同校の所蔵資料を調査した。研究所は静岡県東部を中心に発掘調査等の研究を行っており、非常に多くの資料が集積されていた。学校側の理解を得て、希望どおりの資料を借用できた。

（2）特集展示「全国高等学校考古名品展 2018」

・10 都道府県 11 校の所蔵資料並びに関係資料を展示した。学校はこれまでの「全国高等学校考古名品展」出品校を除いた中から選定した。また、考古資料だけでなく、高校生による考古学的研究活動に関する資料を展示し、研究活動の内容や成果を盛り込んだ。

・考古資料は時代順に展示し、歴史上または学史上の重要性、地域性や普遍性など、資料ごとにポイントをしぼった解説を付し、考古資料の用途や意義等をわかりやすく示すよう努めた。

・高校生による研究活動をより具体的に理解できるよう、古墳群の平板実測図の展示に合わせて平板測量に使用する道具を展示し、実測作業の一部を体験できるようにした。

平板測量の道具の展示状況

・会場内は一部資料を除いて写真撮影可とした。

・所蔵資料を出品いただいた学校のうち 5 校の関係者が来館し、本展を観覧。展示状況、内容ともにご満足いただけた。

・資料の借用、返却の際は、できるだけ学校側の対応者と多くの情報交換を行うよう留意し、本展開催にあたって得られた成果を還元できるよう努めた。

・交流課教育普及室および企画課教育普及担当と連携して、特集展示関連イベント「なりきり考古学者体験　平板測量スペシャル」を実施した。小学校 4 年生から 6 年生までを対象とした回と、中学生以上を対象とした回を設け、各 2 回ずつ計 4 回行った。実施前は体験者にとって理解が難しい作業であることを懸念していたが、遺跡の成り立ちや実測対象と実測図の見比べなど、実測作業の前後にあたる部分を丁寧に説明することで小学生も作業の意味を理解できることがわかり、十分に体験事業として実施できる手応えを得た。

・企画課教育普及担当と連携して、本展とほぼ同時期に開催した特集展示「国宝　銅鐸絵画展」と併せた PR 動画を制作し、当館ウエブサイトに掲載した。また、当該 PR 動画には、和歌山県立紀伊風土記の丘と京都府京都文化博物館の協力を得て、本展と同様に学校所蔵資料を紹介する展覧会である「学校のたからものⅡ」展と「京都府内の学校所蔵考古・歴史資料展 2」の告知を盛り込んだ。

【備考】
・30 年度資料調査：1 回　加藤学園高等学校（4 月 11 日）
・福島県立相馬高等学校、玉川学園教育博物館（町田市）、島根県立松江北高等学校、福岡県立宗像高等学校、長崎県立対馬高等学校の関係者が展示視察。
・「なりきり考古学者体験　平板測量スペシャル」8 月 11 日（小学 4～6 年生）10 人、9 月 1 日（中学生以上）10 人。
・8 月 12 日付毎日新聞に高校所蔵考古資料の意義や活用の可能性について寄稿。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展は、26年度、28年度に続く3回目の開催のため、都道府県・市町村教委、博物館等に十分周知されているとともに過去展の図録等で成果を示すことができる状況にあった。そのため、関係者から理解、協力を得やすく、露出展示や写真撮影、PR動画製作等、様々な試みを行うことができ、概ね好評であった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究を通じて高等学校所蔵考古資料の実態・内容把握に加え、高等学校の現状や考え方も知ることができた。また、高等学校所蔵考古資料を含む学校所蔵資料の掘り起こしや展示による紹介を行っている他施設と情報交換を行い、互いの活動を支援することができた。 近年、高等学校所蔵考古資料あるいは高校生による考古学研究に注目が集まりつつある。この状況に本研究並びに本展も貢献できたと考える。本研究の成果を今後の当館の展示・教育普及活動の計画、展開に活かし、より一層博学連携を進めていく必要がある。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1411Dオ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	オ　インドネシアの装飾古墳に関する調査研究（(4)-①-1)）

【事業概要】
日本ではほとんど知られていないインドネシア・南スマトラの装飾古墳を対象に、考古学研究とデジタルアーカイブの構築を行い、当館で推進してきた日本の装飾古墳研究にも寄与する成果を挙げる。

【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	前課長　河野一隆

【主な成果】
・31 年度に写真測量調査を計画中であるインドネシア装飾古墳について、インドネシア考古学研究所（ARKENAS）と協議を重ねた結果、遺構の遺存状況が良好で、彩色文様も鮮明な南スマトラ・パガラムに所在するレンバク 7 号墳を調査対象として選定した。
・実地調査を円滑に進めるため、レンバク 7 号墳の石室床面へ任意座標を設定し、測量精度について検証した。その結果、床面が奥壁に向かって傾斜するため、日本の古墳で行ったような平面を作る 3 点では精度が担保できず、任意座標を、最低限 4～5 点設定しないと十分な精度が得られないと分かった。
・必要機材の準備を進めるため、遮光素材と撮影条件の関連性について現地で実証実験を行った。その結果、入口全体を覆うように遮光を行わないと、入射光が乱反射して VR モデリングに支障が生じることが分かった。
・今までの撮影データ並びに今回現地を訪問して簡易測量した結果、取得したデータに基づいて、オルソ画像を作成した。その結果、必要な撮影回数と現地での調査に要する時間について見積もることができた。
・簡易測量による任意座標に基づいて高さデータを割り振り、簡易的な VR モデリングに成功した。
・31 年度実施予定のデジタルアーカイブ共同調査について協議し、時期や実施方法について具体的に詰めることができた。
・叩打によって装飾された文様を持つ古墳を踏査し、当地に彩色以外の装飾古墳が展開していることが分かった。

任意座標と遮光に係る実証実験風

作成した簡易 VR モデル

ARKENAS との協議風景

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は31年度実施予定の本調査に向けて、現地機関との協議、予備調査、簡易的な画像処理を行い、課題を洗い出すことができた。これを踏まえ31年度に向け十分な準備作業を進めるための基礎情報が得られた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。日本とインドネシアが共同で、埋葬施設の構造的特徴が日本と類似する装飾古墳のデジタルアーカイブ化を推進するため、最も良好な状態の装飾古墳を調査し、成果を共有することが本研究の目的である。30 年度は、良好な成果を挙げるための現地の課題整理を行い、31 年度の現地調査を成功に導くためのさまざまな準備を進めた。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1411Dヵ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業（(4)-①-1)）

【事業概要】
本事業は、25 年度から 29 年度まで当館が実施した文化庁委託事業「水中遺跡の保存活用に関する調査研究」の成果を踏まえ、新たに 30 年度から 5 年計画で実施される事業である。本事業は、国内外における水中遺跡の調査手法と技術の検証を行い、その結果をもとに『発掘調査のてびき－水中遺跡調査編－』（仮称）を作成することを目的とする。当館では遺跡の探査技術、水中での位置確認方法、遺物の保存処理、遺跡の活用方法、遺跡の現地保存やモニタリングの手法などを検証する。また、共同研究を行っている奈良文化財研究所ではてびき作成に向けた作業部会を設立してその内容を吟味する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長　小泉惠英

【主な成果】
30 年度の事業は、①『発掘調査のてびき－水中遺跡調査編－』（仮称）の作成、②国内の水中遺跡の保存と活用の手法に関する調査研究、③海外における水中遺跡保護に関する最新情報の収集、の３つの課題で構成される。
課題①：主に奈良文化財研究所が担当し、作業部会の設立・運営、4 回の作業部会会議を開催した。また、全国の自治体から参加者を募り、研究会（水中遺跡の保護の現状について発表、討論、ポスターセッション）を福岡県大野城市心のふるさと館で開催した。
課題②：
・「国指定史跡(鷹島海底遺跡)周辺の水中遺跡に関する保存・活用手法の検討」―長崎県松浦市鷹島海底遺跡から出土した遺物や沈没船に関して、現在行われている手法と今後の研究・調査の進め方について、松浦市教育委員会ならびに同史跡の調査研究を行っている琉球大学池田栄史教授などと協議した。松浦市主催の水中考古学セミナーへ参加し学生や一般市民と遺跡の保護について意見交換を行い、また、協力者会議を鷹島で開催した。
・「国内の水中遺跡に関する保存・活用手法の検討」―北海道上ノ国町では、昇平丸（薩摩・島津斉彬による建造船・明治初期に座礁）の推定座礁地点でサイドスキャンソナーおよび海底ビデオカメラによる探査手法を検証した。福岡県新宮町相島では、水中遺跡の発掘に参加し、海底での掘削の方法を確認した。鹿児島徳之島では、遺跡状況確認調査、鉄製遺物のモニタリング手法を検討し、協力者会議を開催した。

上ノ国町で実施した海底探査の様子

課題③：
・「スリランカ現地調査」―諸外国の水中遺跡保護体制と調査手法の事例収集のため、現地の水中遺跡調査担当者と協議した。また、調査現場における作業の視察と水中遺跡の現地確認調査を実施した。
・「ユネスコ水中文化遺産マニュアルの翻訳」―諸外国のマニュアルの例としてユネスコが刊行した『水中文化遺産マニュアル』を翻訳し、てびきの内容（目次案など）に反映した。

【備考】
文化庁の取組：水中遺跡調査検討委員会（2 回）、作業部会・協力者会議（４回）、研究会（１回）
文化庁報告書：『水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業１』（奈良文化財研究所と共著）
取材：新聞（朝日新聞、西日本新聞、北海道新聞、他）、テレビ（NHK 北海道、他）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	①～③の課題について、予定通りに実施することができた。①てびきの全体像と目的、5年間のスケジュールを確認した。②鷹島海底遺跡の現状の確認、また、31年度以降の調査の指針を確認した。上ノ国町、新宮町、徳之島ではそれぞれの自治体の文化財担当官が水中遺跡の調査・保護に積極的に参加したことにより、遺跡調査方法の好事例として紹介できる調査となった。③南アジア地域において、水中遺跡調査の体制整備の例について日本でも学ぶべきことが多いことが分かった。また、てびき作成の土台となる内容を持つユネスコマニュアルを翻訳した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30 年度は、5 か年事業の初年度であり、これからの事業計画の組み立て、てびきの主眼や構成を考える上で重要な 1 年となった。具体的な探査・調査手法の検証やてびきの内容についての考察は、31 年度から実施する。個々の課題については高い評価をすることができる一方、実際に文化財担当者が使いやすいマニュアルの作成に向け、現場の担当者や有識者からの意見を吸い上げ、また、当事業により得られた知識や見解を広く伝えるために積極的な行動を起こす必要が感じられた。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412A ｱ-1

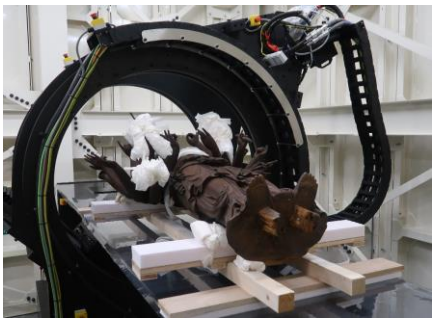
業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　特別展「京都　大報恩寺　快慶・定慶のみほとけ」に関する調査研究（(4)-①-2)）

【事業概要】
特別展に際し、出陳された作品の調査を実施して学術的な新知見を得るとともに、研究報告や研究論文の作成につなげ、広く共有する。この度の展覧会では、X 線 CT 撮影ならびに新規の写真撮影を実施した。

【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	課長　浅見龍介

【主な成果】
1）次のとおり調査を行った。
・9 月 20 日大報恩寺如意輪観音菩薩坐像（X 線 CT 撮影）
・9 月 25 日大報恩寺聖観音菩薩立像（X 線 CT 撮影）
・9 月 26 日大報恩寺十一面観音菩薩立像（X 線 CT 撮影）
・9 月 27 日大報恩寺馬頭観音菩薩立像（X 線 CT 撮影）
・10 月 29 日大報恩寺准胝観音菩薩立像（X 線 CT 撮影）
・11 月 27 日・28 日大報恩寺十大弟子立像等調査
・12 月 5 日・6 日大報恩寺十大弟子立像等調査
・12 月 11 日・12 日大報恩寺十大弟子立像（新規撮影）
・12 月 17 日大報恩寺本堂厨子の調査


10 月 29 日の X 線 CT 撮影の様子

2）X 線 CT 撮影においては、作品の構造や保存状態が詳細に知られるところとなった。写真撮影、厨子の調査等においては、対象像に関する新知見が得られた。
3）研究成果については、逐次、当館の研究誌上などで公表する予定である。

【備考】
調査回数　：9 回
調査作品数：16 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国立文化財機構内の博物館施設すべてにX線CTスキャナーが設置され、その成果への注目があつまるなか、特別展で出陳された作品をできる限り、こうしたX線CT撮影を実施することは、文化財保存の観点からも、必須の事項となりつつある。このたび、京都・大報恩寺の六観音菩薩立像のほぼすべてについて、X線CT撮影を実施した（千手観音菩薩立像については、安全性の問題を考慮して、実施を見送った)。本像の構造については、修理時に報告がなされているが、写真等は残されておらず、再確認をすることが不可能だった。このたびのX線CT撮影により、詳細な新情報が得られたのは幸いであった。X線CT撮影は、今後、彫刻の調査研究の手法や知見を劇的に変えていく可能性が高い。当館が継続して、撮影および情報の公開を行うことによって、研究水準の向上、進展につとめたい。さらにデータの解析を進めることで、仏像作品における構造技法の特色について研究を進め、逐次その成果を展示や刊行物等によって紹介したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展という貴重な機会をとらえて、文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができた。引き続き調査を進め、逐次その成果を展覧会の企画や出版物のなかで広く一般に発信していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412A ｱ-2

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　特別展「マルセル・デュシャンと日本美術」に関連する調査研究（(4)-①-2)）

【事業概要】　10 月 2 日から 12 月 9 日まで開催予定の東京国立博物館・フィラデルフィア美術館交流企画特別展「マルセル・デュシャンと日本美術」において、フィラデルフィア美術館が所蔵するマルセル・デュシャンの作品と日本美術と対比して、両者の持つ意味や価値観を浮き彫りにするため、作品調査を実施し、並びに効果的な展示手法を検討する。

【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室（兼文化財活用センター企画担当課長）　松嶋雅人

【主な成果】

(1)米国・フィラデルフィア美術館において、出品作品の交渉並びに作品の事前調査を行い、あわせて会場での展示方法などの参考のために、関連する作品の展示を行っているフィラデルフィア美術館の常設展示の調査を行った。本調査によって、デュシャンの生涯にわたる芸術活動を示す効果的な展示を行うことができた。

(2)東京大学駒場博物館において、デュシャン作品のレプリカ（「花嫁は彼女の独身者たちによって裸にされて、さえも」）の出品交渉、並びに作品状況の事前調査を行ったことで、デュシャンの創作活動の一端をわかりやすく、効果的な展示を実施することができた。

フィラデルフィア美術館学芸員によるデュシャン作品の説明

フィラデルフィア美術館の各部門スタッフと当館研究員との会場デザイン、環境保存状況の検討

【備考】

(1)作品の調査、並びに展示手法の検討：4 月 5、6 日（フィラデルフィア美術館）1 回

(2)作品の調査、並びに展示手法の検討：7 月 24 日（東京大学駒場博物館）　1 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	1)現代美術において世界的に注目されるマルセル・デュシャンの重要な作品の大半を所蔵するフィラデルフィア美術館のコレクションを当館において展示するため、詳細な作品調査を行い、展示手法を両館相互に幾度も検証を重ねたことで、多くの来館者にその意義をわかりやすく提示することができた。 2)本展は従来になかった日本美術と現代美術の組み合わせによって展開されるものとなり、目標値を超える8万人の来場者を迎えることとなった。この結果も踏まえ、当館並びに各種文化財の展示施設にとって新たな発想や着想を生むきっかけになると考えている。 3)本展の準備作業のなかで、フィラデルフィア美術館と出品交渉や交流を行うことによって、今後さらなる共同研究や特別展の企画立案に役立つと考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展を開催する上で、当館並びにフィラデルフィア美術館の収蔵品の総合的な調査研究が行えたことともに、当館の収蔵品の歴史的意義などを総合的に示せたことで、歴史・伝統文化の理解促進に多いに資することができた。またさらに、作品調査や打ち合わせなどで行った検討を踏まえて、広報・展示・図録など本展にかかわる様々な事業にその成果を反映することができた。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412A ｱ-3

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　特別企画「中国近代絵画の巨匠　斉白石」に関連する調査研究（(4)-①-2)）

【事業概要】
日中平和友好条約締結 40 周年を記念し、斉白石（1864-1957）の人と芸術を広く紹介するための展覧会を、京都国立博物館及び北京画院と協力して実施する。中国で最も有名かつ人気のある近代画家でありながら、現在の日本であまり知られていない斉白石の魅力をわかりやすく説明し、文化面における日中の相互理解を深める。

【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	出版企画室研究員　植松瑞希

【主な成果】
(1) 展覧会の実施

・展覧会名：「日中平和友好条約締結 40 周年　特別企画　中国近代絵画の巨匠　斉白石」
・会期：10 月 30 日～12 月 25 日
・会場：東洋館 8 室
・来館者数：62,405 人
・出陳作品件数：126 件（全て北京画院所蔵）

(2) 図録の編集
北京画院研究員、京都国立博物館研究員と協力し、出陳作品全件の図版を掲載する展覧会図録を編集した。
・論文 3 件（呂暁「木匠から巨匠へ」、呉孟晋「上見る鷹」、周蓉「斉白石と 20 世紀日本の美術界」）
・コラム 2 件（植松瑞希「草虫図の伝統と斉白石」「斉白石の目がとらえた水中の生き物たち」）

(3) 教育活動
調査研究の結果得た知見を、ギャラリートークおよび当館ブログで説明した。
・ギャラリートーク
11 月 9 日呉孟晋「斉白石作品鑑賞入門」　参加者：163 人
12 月 11 日植松瑞希「斉白石の魅力」　参加者：170 人
・1089 ブログ
呉孟晋「世界に羽ばたく斉白石」
植松瑞希「斉白石作品のたのしみかた」

【備考】
北京画院は 1957 年に成立した美術アカデミーであり、初代名誉院長に斉白石を迎え、その優品を多く所蔵することでも知られている。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・中国有数の斉白石コレクションである北京画院の所蔵品を、「花木」「鳥獣」「山水」「昆虫」「魚蝦」「人物と神仏」「書と印」という幅広い主題にわたって借用し、日本で初めて公開した。 ・目標数2.5万人を超える多数の来館者を迎え、図録、ギャラリートーク等を通じて、中国の国民的画家である斉白石への理解を深めた。 ・当館は斉白石作品および関連する中国近代画家作品を所蔵しており、これらを使った31年度以降行われる東洋館8室の平常展への興味関心を高めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・現代日本人になじみのない中国近代絵画を主題にしたが、その中の一人の画家の作品を集中的に展示することで、来館者に「斉白石」という名前を印象付けることができた。この画家を入口に中国近代絵画、また中国絵画全体への興味関心が高まることが期待できる。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412A ｱ-4

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　特別展「顔真卿　王羲之を超えた名筆」に関連する調査研究（(4)-①-2)）

【事業概要】
本展は、書の普遍的な美しさを法則化した唐時代に焦点をあて、顔真卿の人物や書の本質に迫るとともに、後世や日本に与えた影響にも目を向け、唐時代の書の果たした役割を検証する。

【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	部長　富田淳

【主な成果】
(1) 調査概要
特別展に出陳予定の作品を調査した。調査機関は下記のとおり。
大阪市立美術館・観峯館・漢字ミュージアム・個人所蔵作品(奈良)・個人所蔵作品(香川)。
また当館所蔵の大型掛軸の事前調査を行った。
(2) 調査の結果得られた知見
・出陳作品の状態や、安全な梱包のための有益な情報が得られ、展覧会の構成や解説、安全な輸送のための準備に取り組むことができた。
・大型掛軸については、状態を確認し、X 線調査を行ったた結果、応急修理を施し、安全かつ効果的な陳列を検討することができた。

大型掛軸の調査風景 1

大型掛軸の調査風景 2

【備考】
・調査回数：のべ８回。
・プロジェクトメンバー
六人部克典(学芸研究部列品管理課登録室研究員)、鍋島稲子(当館客員研究員)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	事前調査を行うことにより、展覧会のテーマにそった作品選定が可能になっただけでなく、出陳予定作品の状態を把握し、内部構造をX線で調査することによって、安全な輸送と展示を検討することができた。また、調査による知見を会場構成や図録の解説に反映させることができた。一部の作品については新たに撮影を行い、図録に未公開の画像を掲載することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画にそって調査や出陳交渉を進めることによって、日本初来日の作品や所在が不明であった作品などを選ぶことができたことは、斯界の調査研究および今後の研究に大きく寄与しうると考えられる。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412A ｱ-5

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　特別展「国宝 東寺-空海と仏像曼荼羅」に関連する調査研究（(4)-①-2)）

【事業概要】
真言宗総本山　東寺が所蔵する文化財を紹介する。

【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室長 丸山士郎

【主な成果】
会　期　31 年 3 月 26 日～6 月 2 日（62 日間）
会　場　平成館
主　催　東京国立博物館、真言宗総本山教王護国寺（東寺）、読売新聞社、NHK、NHK プロモーション
特別協賛　大和証券グループ
協　賛　NISSHA
入場料金 一般 1600 円(1400 円／1300 円)、大学生 1200 円(1000 円／900 円)、高校生 900 円(700 円／600 円)
中学生以下無料、(　)内は前売り／20 名以上の団体料金

真言宗総本山東寺は、平安遷都にともなって創建された寺院で、弘仁十四年（823 年）に空海に預けて真言密教寺院となった。真言宗は造形物を重視することから優れた作品が多く残る。本展覧会は、空海が造営を指導した講堂 21 体の中から 15 体の仏像（国宝）を出品するのをはじめ、空海請来の密教法具（国宝)、御請来目録（国宝)、両界曼荼羅（西院曼荼羅）（国宝）など、東寺の主だった文化財を紹介する。

【備考】調査回数：東寺所蔵作品につては全て事前の調査を実施した。
論文：総論 1、各論 4、コラム 7、作品解説 110 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東寺所蔵の全ての出品作品について事前の調査を実施し、その成果を図録や会場の解説に活かすことができた。 一部の重要絵画作品についてスキャンを行い高精細な画像を作成し、彫刻作品についてはCT撮影を実施した。得られたデータは今後の研究に活かすことができる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	真言密教の根本道場である東寺が所蔵する国宝、重要文化財をはじめとする密教美術の名品を広く紹介することができた。また、東寺所蔵の全作品について事前に調査を行い、図録原稿や会場解説にその成果を生かすことができた。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1412A ｱ-6

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　特別展「三国志」に関連する調査研究（(4)-①-2)）

【事業概要】31 年夏開催予定の三国志展にむけて、後漢時代から三国時代の文物を中心に調査研究をすすめる。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	東洋室主任研究員　市元塁

【主な成果】

6 月 27 日から 6 月 30 日にかけて河南省文物局を訪問し、曹操高陵出土人骨に関する情報を得た。8 月 1 日から 8 月 3 日にかけて北京を訪問し、市内最古の関帝廟を調査し、近代中国における関羽信仰について知見を得た。また、地質博物館にて漢時代玉石器の材質に関する情報を収集した。12 月 1 日の月例講演会において、曹操高陵出土画像石に関する研究成果を報告した。12 月 17 日から 21 日にかけて河南省と江蘇省を訪問した。曹操高陵出土品のうち、白磁とされていたものを詳細に観察し、この従来の見解を追認した。江蘇省南京市では上坊 1 号墓の墓室規模が安徽省天子墳を超え、現在知られている呉墓では最大規模となることを確認した。曹操高陵の白磁については 31 年 2 月 20 日にテレビ、新聞で報道され、また特別展「三国志」報道発表会でも報告し、大きな反響を得た。31 年 3 月末に、三国時代に関する論文を 2 本発表した。

河南省文物考古研究院にて
曹操陵出土品を調査(12 月 19 日)

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	後漢から三国時代にかけての考古資料は、年代根拠があいまいな資料が多く、これを実地調査において明らかにしていく必要がある。30年度は、河南省の曹操高陵出土品や南京の呉墓出土品など、比較的年代を絞り込める資料の調査を実施できたことで、相応の成果を上げることができた。それらの成果の一部は、講演会や論文の形で年度内に公開した。また曹操高陵出土の白磁については31年2月20日にテレビ、新聞で報道され、同日の特別展「三国志」報道発表会でも報告し、大きな反響を得た。しかしながら、本来であれば、より幅広い地域の調査を継続的に実施することがのぞまれる。なんとなれば三国志は、広大な中国全域にわたる課題であるからである。それについては他の業務との兼ね合い及び時間的費用的制約からおのずと限界がともなうであろうが、31年度はさらに研究を深化させるべく、業務の効率化等をはかっていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	31 年度は東京国立博物館および九州国立博物館において特別展「三国志」を開催し、これにあわせて、展覧会図録や講演会などで研究成果を広く公開する予定である。30 年度は、この 31 年度の成果公開に向けた事前の調査研究を主としたことから、成果公開の側面はなお限定的であった。そうしたなかで、曹操高陵出土の白磁について学術的な見解を披歴できたことは大きな成果であた。31 年度は調査研究を継続させるとともに、成果公開についても一層努力していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1412B ｱ-1

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　特別展「京のかたな　匠のわざと雅のこころ」に関する調査研究((4)-①-2))

【事業概要】

特別展「京のかたな　匠のわざと雅のこころ」(9 月 29 日～11 月 25 日）の開催のため、各地に所在する山城鍛冶関連作品・資料の調査を行った。併せて、展覧会への出品交渉を進め、図録等印刷物に掲載するための写真撮影も行った。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室主任研究員　末兼俊彦

【主な成果】

(1)他機関の研究者等の協力も得ながら所在情報を収集したうえで、約 300 件の作品・資料の調査を行い、基本的な情報をまとめた調書を作成した。調査の過程で、従来未紹介の作品、近年の所在が不明であった作品、研究上重要な意義を有する資料等を見出すことができた。

(2)数値データ等の記録に加え、作品の細部や付属資料も含めた詳細な写真撮影を進め、作品間の様式比較や伝来等周辺情報の収集を可能とする画像データの蓄積を行った。

(3)作品調査と並行して出品リストの絞り込みを行い、展覧会への出品交渉をスムーズに進めることができた。

(4)既刊の研究書・論文、同時代史料等を幅広く参照し、作家・作品に関する知見を深めることができた。

(5)写真撮影については、可能な限り先行集荷のうえ館内で撮影を行い、経費節減とともに質の高い写真の確保に努めた。

(6)祇園祭長刀鉾の大長刀など、抜群の知名度を誇りながらこれまで一切の開示がなされていなかった作品を調査し、初の一般公開を実現させた。

長刀鉾の大長刀
（長刀鉾保存会所所蔵）

【備考】

・調査件数　約 300 件
・出品作品件数　200 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	京都で製作された刀剣を通史的に時代・作者・工房・流派ごとに揃えることにより、作家性の問題や技術系譜、時代背景のもたらす変化などを日本の歴史とリンクさせ、大局的な視点で分析を行った初の試みとなった。山城鍛冶の作品は、鎌倉時代以降最も格式ある刀剣として公家・武家を問わず珍重された存在でありながら、山城鍛冶を主テーマとした大規模展覧会は一度も開催されてこなかった。その意味で、京都文化の発信を活動の柱に据える当館にとって、山城鍛冶の作品主軸とした特別展の開催は使命といってよく、一般社会および学会の要請にも応えるものであった。 そのような一地域の作品群を通史的に総括する展覧会を開催するにあたっては、代表作を網羅するのみならず、各工人・作家の多様性を示す作品や資料として重要な作品を視野に入れた調査研究を進める必要があった。この点において、新出作品や行方不明文化財を含む質の高い作品の調査研究を行ったことは、初期目標を超える成果であった。特に、宗教行事に用いられる秘蔵の作品を初めて一般に公開できた意義は大きく、展示・図録にはこうした調査研究の成果が反映されたものとなり、今後の研究に資する基礎資料として高い完成度を達成することができた。 また、特別展に出品されたいくつかの作品については新規寄託品として受け入れており、年度計画に叶う成果が得られた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	中期計画に沿って、文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。 文化財保護法に基づいた重要な役割のひとつである、国立博物館に収蔵・寄託されている国宝・重要文化財をはじめとする作品をあまねく広く公開するという点で、各館の収蔵・寄託品を数多く展示できたことは大きな成果といえる。また、調査研究の成果を基に京文化と日本刀という一貫したテーマを設けた展覧会であったことや、27年度からの計画的に準備をしての開催により、質の高い展覧会を行うことができた。展覧会計画当初には起きていなかった刀剣ブームの時流に合わせ、従来の刀剣愛好家のみならず、これまで積極的な来館に踏み切れていなかった若年女性層を中心とした新たな観覧者を獲得できたのは、この基礎的な展覧会の骨子が計画通り完成されていたためである。 これまでの研究成果はもちろんであるが、調査成果や文化財修復、蛍光X線等の最新機器を活かした研究成果を積極的に公開できたことは、展覧事業のみでなく、各事業の成果を広く公開することにつながったといえる。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1412B ｱ-2

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　特別展「時宗二祖上人七百年御遠忌記念　国宝 一遍聖絵と時宗の名宝」に関する調査研究((4)-①-2))

【事業概要】
特別展「時宗二祖上人七百年御遠忌記念　国宝 一遍聖絵と時宗の名宝」(31 年 4 月 13 日～6 月 9 日）のため、神奈川及び京都、滋賀を中心とする時宗寺院の所蔵文化財について調査・撮影を行い、併せて出品交渉も行った。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長　淺湫毅

【主な成果】
(1)時宗、時宗総本山清浄光寺（遊行寺）の協力のもと、清浄光寺及び京都・滋賀の時宗寺院 25 箇寺において、所蔵文化財の調査及び出品交渉を行った。さらには滋賀・浄信寺において悉皆調査を行い、地元教育委員会の報告書にも収められていない作品を発見した。また、京都・聞名寺においては行快作の阿弥陀三尊像を発見し、京都・極楽寺の毘沙門天立像の像内からは大量の納入品を発見するなど、重要な成果をあげ、12 月 17 日の展覧会の記者発表時に併せて公表した。
(2)数値データ等の記録に加え、作品の細部や付属資料も含めた詳細な写真撮影を進め、作品間の様式比較や伝来等周辺情報の収集を可能とする画像データの蓄積を行った。
(3)作品調査と並行して出品リストの絞り込みを行い、展覧会への出品交渉をスムーズに進めることができた。
(4)既刊の研究書・論文、同時代史料等を幅広く参照し、各寺院の歴史及び所蔵作品の製作年代判定などに関して広く見聞を得ることができた。
(5)写真撮影については、可能な限り先行集荷のうえ館内で撮影を行い、経費節減とともに質の高い写真の確保に努めた。

浄信寺調査風景

【備考】
(1)調査寺院　神奈川 1 箇寺、京都 13 箇寺、滋賀 12 箇寺
新発見の報道　12 月 18 日朝刊（朝日新聞、産経新聞、日経新聞、毎日新聞、読売新聞、京都新聞）
(3)出品予定件数　132 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	一遍によって鎌倉時代後期にはじめられた時宗は、鎌倉期にはじまった新仏教の中では後発にあたるが、踊り念仏や賦算などを通じて市中の人々に積極的に布教を行い、いちはやく信仰を集めた。京都は鎌倉（及びその周辺）とともに時宗の道場（寺院）が数多くつくられ、その信仰の一大拠点であったが、残念なことにこれまで京都における時宗の総合的な大規模展は行われてこなかった。そのような状況のなかで開催される本展は、時宗文化の素晴らしさをあらためて人々に知っていただくまたとない機会となる。30年度は本展に向けた文化財の事前調査を行い、仏教美術史の上からも重要となる新発見があった。その成果の一部は記者発表を通じて公表し、新聞等による報道など大きな反響もあり、所期の目標を上回る成果を得ることができた。なお、本研究成果の全貌は31年度の本展及び本展図録において公表することとなっている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究として、京都文化を中心とした文化財の収集・調査研究・展示・教育普及を実施した。そのなかで仏教美術の分野においては、京都を中心とした古社寺に関する調査研究を進め、情報を蓄積していくことが必要である。この点で、時宗という京都に大変縁の深い宗派の文化財について、質・量ともに充実した調査研究を進めることができたことは、今後の京都文化に関する調査研究、さらには中世以降の寺院研究に大きく寄与するものであり、極めて高い成果をあげることができたといえる。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1412C ｱ-1

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　修理完成記念特別展「糸のみほとけ－国宝　綴織當麻曼荼羅と繡仏－」に関する調査（(4)-①-2)）

【事業概要】
織物や刺繍による仏像を調査し、調査の成果、新規撮影写真を上記特別展に反映させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長　内藤栄

【主な成果】
国内 13 か所、54 件の作品を調査した。それによって、新出の作品の発掘が実現した。また、当館写真技師による新撮を行い、糸目が分かるような詳細なデジタルデータを蓄積した。この成果は展覧会会場に掲出された写真パネルやデジタルコンテンツ等に活用されたほか、展覧会図録に掲載した。また、併せて刺繍作家による技法説明用の複製製作、織物会社による綴織の複製製作を行い展覧会に出陳したほか、映像にして会場で放映した。技法が重要な展覧会であるだけに極めて意義深いものとなった。また、織物や刺繍作品を魅力的に展示する方法を研究し、ケースの手前側に作品を設置する方法を考案し、それに適した照明方法を考案した。

国宝・刺繍釈迦如来説法図（当館蔵）の染料に関する光学調査

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・織物や刺繍による仏像の特別展はほぼ半世紀ぶりであるため、新出資料の紹介、過去の研究の見直し、新規の写真撮影などが必要であったが、それを順調に実施した。 ・この分野の研究は、仏像や仏画に比較すれば遅れており、体系的な研究も進んでいなかったが、本展では仏像や仏画と比肩しうる価値のある分野であることを強調できた。 ・地道な研究を踏まえた特別展であり、仏教美術の専門館を標榜する当館ならではの独創性、専門性を発揮したが、一方で予備知識のない観覧者も楽しめる工夫をこらし、夏休み企画にふさわしい内容となった。 ・国宝・綴織當麻曼荼羅（當麻寺所蔵）、国宝・刺繍釈迦如来説法図（当館蔵）の修理完成記念の展覧会であることも功を奏し、主要作品を網羅した、織物と刺繍の仏像に関する決定版と言える特別展となった。 ・調査に際して最新の染料調査（可視分光分析）を実施し、新たなデータを学会に提示することができた。 ・展覧会図録に発表した繡仏・綴織の仏像に関する総論は、現在における当該分野の研究の到達点というべきもので、今後の研究の手引きとなる性格のものとなった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・博物館の重要な活動である保存修理の重要性を広く示すことができた。その意味で、保存と活用という文化財行政のありかたを問う企画であった。 ・博物館の任務である調査・研究を展示に反映し、一般には知られることの少ない織物や刺繍の仏像の世界を示すことができた。 ・分かりやすい展覧会をめざし、刺繍技法や綴織技法の分かりやすい解説と実演を行い、デジタルコンテンツによる細部鑑賞なども行った。 ・見やすい展示を心がけ、ガラスケースの手前側に作品を設置し、観覧者が間近に作品を鑑賞できる工夫を行い、公表を博した。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1412C ｱ-2

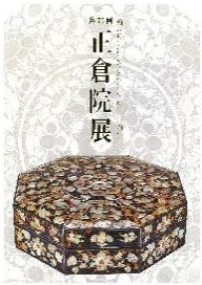
業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　特別展「第７０回 正倉院展」に関する調査研究（(4)-①-2)）

【事業概要】
特別展「第７０回正倉院展」の開催に当たり、円滑かつ安全に展覧会を遂行し、最新の成果を広く国民に周知するため、当該年度に出陳される宝物を含む宝物全般についての調査・研究、展示環境についての研究、観覧環境についての調査・研究、その他宝物の適切な輸送方法など、多角的に研究を行う。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室長　清水健

【主な成果】



図録表紙

(1)宝物についての調査・研究
・展覧会の開催に当たり、宮内庁正倉院事務所の協力を得て、一部の宝物の閲覧、宝物調書の閲覧、宝物の詳細な写真の提供等によって最新かつ正確な情報の入手に努め、展覧会図録や会場の題箋、パネル等に反映させた。
・正倉院、あるいは正倉院宝物についての研究成果を、展覧会図録所収の作品解説、小論文(「宝物寸描」)、公開講座、及び学術シンポジウム等を通じて公表した。また雑誌や新聞紙面等を通じて、研究員の日頃の研究成果を反映した最新の知見等をコメントやコラムのかたちで発信した。
・研究員全員が参加する宝物についての研究会を実施した。
(2)観覧環境についての調査・研究
・観覧者の多数集まる展覧会における適切な情報提供について考究するため、題箋やパネルの大きさ、位置等について検討し、アンケート等を通じて観覧者の発する意見や情報を収集した。題箋の内容・表記についての多言語化の観点も踏まえ、検討会を実施した。
・宝物の照明方法について外部専門家と意見を交換し、効果的な照明を会場にて試みた。また、有識者の意見、あるいはアンケート等を通じて観覧者の発する意見や情報を収集した。
・観覧者の多数集まる展覧会における適切な動線ついて考究するため、展示品やパネル等の配置、展示品への誘導方法、展示品の高さについて検討し、有識者の意見、あるいはアンケート等を通じて観覧者の発する意見や情報を収集した。
・宝物の安全かつ魅力的な展示についての検討会を、宮内庁正倉院事務所とともに行った。
(3)展示環境についての調査・研究
・宝物の適切な展示環境を考究するため、展覧会の会期中の温湿度データ、塵埃のデータを収集し、分析した。
・宝物の展示環境についての検討会を、展覧会の会期前に宮内庁正倉院事務所とともに実施し、また会期後には実際の計測データを検証し、31 年度以降の展覧会における展示環境の向上に資するための検討会を正倉院事務所とともに行った。
(4)その他
・宝物の安全な梱包・輸送のための検討会を内部で行い、宮内庁正倉院事務所とも検討会を行った。

【備考】
・宝物に関する事前調査　7 回
・宝物についての内部研究会　2 回
・公開講座　3 回
　吉澤悟「正倉院三彩 10 話―正倉院に伝わる二彩・三彩陶器の特徴と謎―」(11 月 10 日)ほか
・正倉院学術シンポジウム２０１８「正倉院宝物と新羅」　1 回
・『平成３０年　正倉院展目録』(日・英)　奈良国立博物館　10 月 27 日
　日本語篇所収／宮崎幹子「正倉院宝物と壬申検査―写真と模写をめぐって―」ほか

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	正倉院展の開催を円滑かつ安全に遂行し、最新の成果を広く国民に周知するという事業計画に基づき、概ね順調に成果を上げている。最新の知見を反映した作品解説を、学芸部全体での検討を経て展覧会図録に掲載し、一部は題箋・パネル等でも掲示した。また、小論文や講座、シンポジウムを通じて、最新の研究成果を公表した。さらに、27年度より実施している宮内庁正倉院事務所との諸々の検討会は深化を遂げ、一層充実してきている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当該中期については、主に宝物についての調査・研究、観覧環境についての調査・研究を重点項目とし、充実を図っていきたいと考えている。宝物に関する調査・研究は、日々更新される成果を踏まえて着実に進展しており、多くの画像やメディアを活用して、最新の成果を広く一般に伝えることが概ね達成されている。また宝物の観覧環境等に関する調査・研究も進展しており、観覧者の不満は以前に比べ相当低減している。今後は一層のデータ・情報の収集に努めるとともに、質の高い学術情報の普及を図りたい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1412C ｱ-3

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展」に関する調査研究（(4)-①-2)）

【事業概要】
特別展「国宝の殿堂　藤田美術館展」展覧会開催のための、藤田美術館所蔵コレクションの調査・研究

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	情報サービス室長　岩井共二

【主な成果】
(1)藤田美術館所蔵品調査を 6 月～31 年 3 月にかけて行った。
彫刻 25 件、絵画 86 件、工芸 45 件、書跡 34 件、考古 4 件
(2)調査によって、所在不明とされていたマニ（マニ教の教祖）像、未紹介の観音三十三身像、仏本行集経（五月一日経）などの存在が新たに確認された。空也上人立像は、奈良伝来という来歴が明らかになった。作品によっては、近赤外線撮影やＸ線ＣＴスキャンを行った。曜変天目茶碗については、８Ｋ高精細動画撮影を行った。

(3)展覧会出陳品 128 件の確定
展覧会出陳のための保存状態を確認し、うち 3 件については事前に応急修理を行った。また、出陳品は全て当館カメラマンが撮影を行った。これにより、当館の資料写真を蓄積することが出来た。

曜変天目茶碗 8K 映像撮影風景

【備考】

特別展図録『国宝の殿堂　藤田美術館展　曜変天目茶碗と仏教美術のきらめき』(平成 31 年 4 月 13 日刊行予定)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	31年4月に開催の特別展「国宝の殿堂　藤田美術館展」に際し、展示品の候補となる作品、及び関連作品等の調査・研究を精力的に進め、展覧会の充実や高度な学術情報の発信を図るという事業概要に従い、概ね目的を達成している。奈良にゆかりのある文化財や、未紹介文化財について、新たな知見を得ることが出来た。さらに、新規の写真撮影を行い、高精細デジタル画像の集積を行い、今後の研究に資する資料を集積出来た。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	31年4月開催の特別展の充実という目的に向け、一定の成果を上げることができた。藤田美術館の所蔵品について、過去に当館が調査してきた成果を踏まえ、さらに一層充実させるような展覧内容に向け、前進することができた。藤田美術館所蔵品の写真等の関係資料を比較・検討することによって、単体の調査のみでは把捉できない専門性の高い学術情報の収集に努め、当館の学術資源の一層の充実を図りたい。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1412D ｱ-1

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　特別展 「明治 150 年記念　オークラコレクション」 に関する調査研究 ((4) -①-2))

【事業概要】

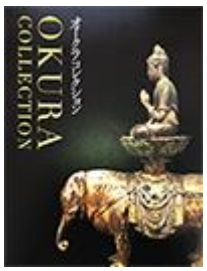
特別展 「オークラコレクション」 に関する調査研究。

現存では日本最古（1917 年設立）の私立美術館で、2019 年秋リニューアル・オープンを目指し休館中の大倉集古館のすぐれたコレクションを紹介する特別展として企画。10 月 2 日～12 月 9 日に開催のため、その準備として調査研究を進めた。同コレクションを通じ、大倉喜八郎が行った文化財保護の志、喜七郎による海外への日本文化発信といった歴史的意義を紹介するとともに、アジア諸国の多様なコレクションに光を当てることを目的とする。

【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料管理室主任研究員　山下善也

【主な成果】

・大倉集古館に関する図書・図録・文献等の情報収集を随時行った。
・大倉集古館学芸課員諸氏と面談し、大倉コレクションの概要についての情報収集を行った。
・展示構成、展示リスト、輸送計画等について具体化、調査研究の内容に基づき３章構成の展覧会として結実させた。
・256 ページにおよぶ展覧会図録『オークラコレクション』（当館研究員等による作品解説、大倉喜八郎・大倉喜七郎紹介、大倉集古館の歴史と概要、論文４編収録）を作成し、販売した。論文は次のとおり。
　髙橋裕次（大倉集古館学芸部長）「大倉コレクションの概要」
　山下善也（学芸部文化財課資料管理室主任研究員）「大倉集古館の近世日本絵画」
　小泉惠英（学芸部長）「大倉集古館の東洋美術と明治という時代」
　田中知佐子（大倉集古館主任学芸員）「大倉喜七郎のパトロネージと羅馬開催日本美術展覧会」
・当館研究員による記念講演会を 2 回実施した。
　「大倉集古館の近世絵画-狩野派、琳派など魅力の作品群をめぐって-」（10 月 8 日）
　　山下善也（学芸部文化財課資料管理室主任研究員）参加者：112 人
　「大倉集古館 － 日本最初の美術館はなぜできた? -」（10 月 13 日）小泉惠英（学芸部長）参加者：79 人



展覧会図録
『オークラコレクション』

記念講演会「大倉集古館の近世絵画-狩野派、琳派など魅力の作品群をめぐって-」

記念講演会「大倉集古館 － 日本最初の美術館はなぜできた？-」

【備考】

・大倉集古館学芸職員との打合せ（4 月 6 日、4 月 27 日）
・寄託先の東京国立博物館にて作品調査（5 月 10 日、5 月 11 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大倉集古館が東京オリンピック2020に合わせた改修工事・閉館中であるからこそ、主要作品（国宝・重文・重美）のほとんどを借用できる絶好の機会であった。作品のリストアップにあたって、個々の作品の実地調査、文献等の確認等は、不可欠の作業であったが、作業を概ね実施することができ、過不足の無いリストを作ることができた。大倉集古館の展示施設の規模では主要作を一堂に展示することは困難だが、当館の広い特別展室ではその強みを活かした一堂展示により、実物鑑賞の機会を作った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき本調査研究を行った。１．日本美術への眼差し　２．アジアへの眼差し、３．世界（西欧）への発信という「３章構成」は、展示作品の地理的エリアの拡大を視点に置き、ストーリー化したものであった。さらに 30 年は明治 150 年の年であり、大倉喜八郎・喜七郎親子による収集の歴史と重なっている。その点に注目し、彼らによる文化財保護の志、海外への日本文化発信といった歴史的意義を紹介することができた点で、展覧会を実施した今日的な意義は大きかった。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1412D ｱ-2

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　特別展「新安沈船展（仮）」に関連する調査研究（(4) -①-2)）

【事業概要】
2024 年に開催を予定している特別展「新安沈船展（仮）」にかかわる展覧会の準備にかかる調査研究

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長　白井克也

【主な成果】

31 年 1 月 6 日～1 月 10 日に、特別展の主要な出品機関となる予定の韓国国立中央博物館及び関連する展示を行っている韓国国立海洋文化財研究所を当館職員 5 人が訪問した。韓国国立中央博物館においては、韓国における調査研究の現状と、韓国で 2023 年に開催予定の展覧会の企画進行状況を聞き取るとともに、今後の展示の方針について意見交換を行った。国立海洋文化財研究所においては、今後の特別展実施のための協力を取り付けるとともに、1973 年の新安沈船の発見依頼、飛躍的に発達した、韓国における水中考古学の発展状況やその成果、水中文化財の保存処理に関する施設の状況、展示・普及の手法などについて調査を行った。

今回の現地調査によって、韓国での 2023 年に開催される展覧会を、2024 年ごろ九州国立博物館に巡回実施する基本方針について合意するとともに、日韓で共同して準備に当たるための協力態勢を構築した。

現地調査風景

【備考】
現地調査　1 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度の調査により、日韓の協力態勢を確認することができた。また、展覧会の実施時期を、韓国では2023年（新安沈船が中国を出航してから700周年に当たる）、日本への巡回を2024年と、具体的な実施時期の目標を立てることができた。今後、定期的な相互交流を行って調査研究を進め、展覧会の具体的な内容について検討を進めることができる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	アジア的な視点で日本文化の形成を捉える九州国立博物館の設立趣旨からみても、中世東アジアの国際交流の実態を物語る新安沈船に関して、国際的な展覧会を開催することの意義は大きい。また、韓国において先進的な成果が挙げられている水中文化遺産保護について、日本で普及できるための知見を得たことも、文化財の保存と活用を図る上で、得るところが大きい。31年度以降も引き続き、定期的な相互交流による調査研究を行っていきたい。

【書式Ｂ】　施設名 文化財活用センター　処理番号 1413Hア

業務実績書

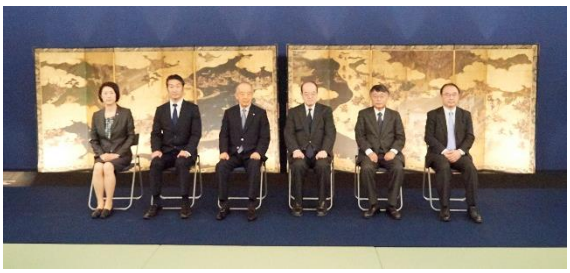
中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　レプリカやＶＲ等先端技術を使った、文化財の活用についての調査・研究（(4)-①-3)）

【事業概要】
文化財に親しむ機会の拡大を図ることを目的として、レプリカやVR等の先端技術及び、文化財への活用事例についての調査を行い、それらの知見を活かした事業を企画・運営し、効果についての調査・研究を実施した。

【担当部課】	本部文化財活用センター	【プロジェクト責任者】	副センター長　小林牧

【主な成果】
(1)高精細画像によるレプリカ制作やデジタルコンテンツ制作に関して優れた技術を持つ、企業・機関等の視察・インタビューを行った。
(2)レプリカやデジタル技術等を使ったコンテンツの公開を行っている国内外の博物館・美術館の視察・インタビューを行った。
(3)東京国立博物館本館においてレプリカやデジタル技術を活用した体験型展示企画を実施し、アンケートによる来場者調査を行った。
(4)キヤノン株式会社と連携して、高精細複製品の制作と活用についての共同研究プロジェクトを発足させた。
(5)凸版印刷、シャープなど、企業等と連携して高精細画像による文化財活用についての知見の交換を行った。

【備考】
(1)調査先／凸版印刷「旅道」、大日本印刷本社、大塚オーミ陶業信楽工場、東京藝術大学COI拠点、NHKエンタープライズ、NHK放送技術研究所、ソニー、シャープなど（小林牧、松嶋雅人、小島有紀子、西木政統、高木結美、松沼穂積、樋口理央）
(2)調査先／徳島・大塚国際美術館、鹿児島・霧島アートの森、パリ・アトリエドリュミエール、ミクロフォリ、ラヴィレット、貨幣博物館、自然史博物館、ルーブル美術館、科学博物館ほか、ロンドン・テートモダンミュージアム、大英博物館、V&A美術館ほか（小林牧、松嶋雅人、小島有紀子、西木政統、高木結美、松沼穂積、樋口理央）
(3)アンケート調査実施事業／「なりきり日本美術館」(7月24日～9月9日)、高精細複製品によるあたらしい屏風体験「平家物語 一の谷・屋島合戦図屏風」(10月23日～12月2日)、高精細複製品によるあたらしい屏風体験「国宝　松林図屏風」(31年1月2日～2月3日)、8Kで文化財「国宝　聖徳太子絵伝」(11月27日～12月25日)
○そのほか発表等
「文化財保護法の改正と文化財活用のあり方について～東京国立博物館の試みを軸に」小林牧（6月30日 展示学会）
「ホンモノか、複製か―文化財活用をめぐる課題と実践」小林牧（31年3月5日 日本学術会議哲学委員会【哲学と文化環境分科会】公開シンポジウム）



キヤノン株式会社との連携による高精細複製品の制作と活用についての共同研究プロジェクト 記者発表の様子（10月29日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財に親しむ機会の拡大を目的とした調査・研究を、4月の文化財活用センター準備室発足時から開始し、7月の文化財活用センター開設後も継続して行った。また、企業等、様々な技術をもつ機関との連携を積極的に行った。これらの調査・研究によって得られた国内外の最新の事例及び最新技術に関する知見を活かして、多くの人々に文化財に親しむ機会を提供するすることができた。さらに、それらについてのアンケート調査も実施した。31年度は企業等との連携をさらに強化し、プロジェクトの推進を図るとともに、それらの事業についての評価調査を継続して行いたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。30年度は、文化財活用センター発足にあたり、先端事例の調査を重点的に行った。31年度も、技術革新ならびに変化し続ける社会の動向について常に最新の知見を得るべく、国内外の調査を継続して実施することが重要であろう。また、これらの知見を活かした企画の展開については、より対象者を広げるための方法について研究を進めるとともに、研究成果についての発表もより積極的に行いたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1413Aｱ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　博物館環境デザインに関する調査研究（(4)-①-3)）

【事業概要】
東京国立博物館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。

【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	デザイン室長　矢野賀一

【主な成果】
・「東京国立博物館・フィラデルフィア美術館交流企画特別展『マルセル・デュシャンと日本美術』」、「博物館に初もうで　イノシシ 勢いのある年に」「縄文－日本における美の誕生」「 親と子のギャラリー　トーハク×びじゅチューン！　なりきり日本美術館」「松山・徳島の考古学」「世界文化遺産『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」登録記念　キリシタンの遺品」「博物館でアジアの旅」「日中平和友好条約締結周年記念 特別企画『中国近代絵画の巨匠　斉白石』」の展示デザインを行った。
・券売機のインターフェイス、総合文化展チケットのデザインを行った。
・甲冑作品を展示するための高透過低反射合せガラスや小型 LED 照明器具を用い、展示作業の安全性に配慮した展示ケースをデザインし観覧環境の向上につながった。

【備考】
・他館のデザイン調査：これまでの国内外の博物館・美術館でのデザインを調査し、特に 30 年度においては特別展及び総合文化展示の展示デザインのための参考とした。
・調査先／フィラデルフィア美術館、サックラー美術館、メトロポリタン美術館、MOMA、ルーブル美術館、ギメ美術館、パリデジタルアートセンター、バイエルン州立エジプト美術収集館。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	目標を達成している。国内外の美術博物館デザインの最新事例を調査し、総合文化展示及び特別展への展開がなされている。31年度は引き続き国内外の美術博物館デザインの調査をおこなう。また最新の情報技術など本館の総合文化展示や展示室のスマート化などへ展開できるよう調査研究を進める。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	目標を達成している。甲冑作品を展示するための高透過低反射合せガラスや小型LED照明器具を用い、展示作業の安全性に配慮した展示ケースをデザインし観覧環境の向上につながった。 31 年度は展示室のスマート化の調査研究及び本館リニューアルのデザインを進める予定である。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1413Aイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	イ　博物館教育に関する調査研究（(4)-①-3)）

【事業概要】
来館者の鑑賞体験を豊かにすることを目的とした、博物館教育の理論と実践に関する調査研究を、教育普及事業の実践、参加者に対するアンケート、学校教員との研究会を通して行った。

【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	課長　伊藤信二

【主な成果】
(1)各種ワークショップ、スクールプログラム等を通して、来館者の多様なニーズに沿ったプログラムの開発とその運営に関する研究を行った。ワークショップ「トーハク劇場」では、29 年に開発した、飛鳥時代を舞台とした法隆寺宝物館でのプログラムを 30 年度も 2 回実施し、低年齢層を対象としたプログラムの研究と実践を重ねるとともに、手応えを実感した。
(2)海外からの来館者を主な対象とし、29 年度より始めた日本文化体験プログラムを継続して実施した。書、きものをテーマとした気軽な体験型プログラムは、多くの外国人参加者をはじめとする多数の参加者を集め、好評を得ることが改めて確認された。(書体験 36 日間 4,788 人、浮世絵摺実演 2 日間 102 人)
(3)障がい者に向けたプログラムの開発を目指した調査・研究を継続して行い、特に聴覚障がい者に向けて試験運用した UD トーク（音声認識ソフトによるコミュニケーション支援アプリ）を講演会、ギャラリートークにおいて本格実施した。
(4) 他館との連携事業として、上野動物園、国立科学博物館との国際博物館の日記念ツアー「上野の山でサルめぐり」(5 月 13 日)並びに関連展示、親と子のギャラリー「サルのひろば」(4 月 17 日～5 月 20 日)を実施した。
(5)小・中・高等学校の教員を対象とした研修会（7 月 27 日)、東京都社会科教員を対象とした研修会（9 月 20 日）を行い、意見交換を行った。
(6)東京藝術大学との連携事業として、東京藝術大学の学生によるギャラリートークを行った。
(7)ボランティア組織のマネジメント及びボランティアによる事業の開発等について調査・研究を行い、外国人対応をテーマとした研修を実施した。
(8)ガイドアプリ「とーはくナビ」(日英対応）および音声ガイド（中韓対応）の利用状況調査を 12 月 4 日～14 日の間で実施した。

【備考】調査
1)ワークショップ等における参加者アンケート調査 12 回、教員研修会参加者アンケート調査 2 回　ガイドアプリ「とーはくナビ」(日英対応）および音声ガイド利用状況調査 1 回
2)全国博物館大会（11 月 28 日～30 日)分科会 4「ミュージアム・コミュニケーション―『多様な関わりを創る』市民との協働」(東京都美術館)で口頭発表を行った。(藤田千織　教育普及室長)
3)韓国国立中央博物館の朴娟嬉（パク・ヨンヒ）氏（教育課学芸員）が学術交流で来日したことに伴い、同氏と博物館教育に関する協議と意見交換を実施した。また同氏を同行して国内の 8 施設を訪問。施設見学と担当者との協議を実施し、博物館教育事業の理念と現況に関する調査研究を行った。(伊藤信二　博物館教育課長、鈴木みどり　ボランティア室長、藤田千織　教育普及室長、川岸瀬里　教育普及室研究員)
4)国外施設調査：【米国】ニューヨーク近代美術館、イントレピッド海上航空宇宙博物館、アーツ・アンド・マインズ、ミュージアム・アクセス・コンソーシアム（藤田千織　教育普及室長)、【仏国】日本文化会館、Atelier des Lumières、Micro-Folie（川岸瀬里　教育普及室研究員）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	様々な教育事業の実践や、他館との交流・連携事業を通じて、博物館教育についての研究を実施した。30年度は特に外国人を主な対象としたもの、有料のプログラム、聴覚障がい者に向けてのUDトーク、ボランティアの外国人対応など、新たな対象や多様なニーズに対応するため開発した教育プログラムの実践・検証を行うことができた。31年度は、こうした方向を維持しながら、プログラムの更なる充実と博物館教育の発展に寄与する調査研究の推進を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今中期では、より幅広い来館者に向けた鑑賞支援プログラムの調査・研究と実践を目指している。 未就学児を対象としたキッズデーなど、子どもを対象とした事業、障がい者を対象とした事業の調査・研究は、28 年度から継続して行っている。30 年度は、外国人を対象とした事業に対応したプログラムを 29 年度から検証的に継承し、手応えを得ることができた。ガイドアプリや音声ガイドのアンケートは同じく外国人観覧者のニーズを知る上でも有意義であった。また、こうした取り組みは、2020 年のオリンピック・パラリンピック後にも残るものとして位置付け、しっかりとした調査・研究のもと、実践につなげることが重要である。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1413Aｳ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ウ　凸版印刷と共同で実施するミュージアムシアターにおけるコンテンツの開発に関する調査研究（(4)-①-3)）

【事業概要】
館蔵文化財のデジタルアーカイブを活用した、新たな公開手法を凸版印刷株式会社と共同で研究する。

【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	課長　田良島哲

【主な成果】
・既制作のコンテンツ「土偶」をもとに、当館品川室長の監修により、改編作品『DOGU 美のはじまり』を制作し、特別展『土偶』の開催に合わせて公開した。
・日本刀の 3D データを素材としたコンテンツ開発を視野に入れて、当館所属の酒井主任研究員による監修のもとで、凸版印刷がスキャナによるデータ取得方法の調査研究を実施し、材質の表現や反射の特性を再現できる良質なデータを取得できる見込みを得た。

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・既存データを使って展示等と連動したコンテンツを公開することができ、所蔵品のデジタルアーカイブ蓄積の有用性が再確認できた。 ・新しい分野である刀剣のデータ取得をめざす調査研究に着手し、良質なデジタルアーカイブとして保存活用できる方向性を見出すことができた。31年度以降、この分野に関するコンテンツ制作の展望を得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・デジタルアーカイブのデータ取得に関する調査研究については、新分野に着手し、着実な成果をあげている。 ・データの利活用については、新規コンテンツの制作はなかったが、既存のデータを有効に使い、集客力のあるコンテンツとして、毎年継続的に公開を行うことができている。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1413Aｴ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	エ　ＩＣＴを利用した博物館見学ガイドの開発に関する調査研究（(4)-①-3)）

【事業概要】

来館者の鑑賞体験を深めることを目的とした日英２ヶ国語による鑑賞支援アプリ「トーハクなび」のユーザー動向解析を用い、より豊かな鑑賞体験の創造に関する調査研究を行った。また、児童生徒のための鑑賞支援アプリ「学校版　トーハクなび」のユーザー動向解析を用い、その活用・改善に関わる調査研究を行った。

【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	課長　伊藤信二

【主な成果】

(1)スマートフォンによる公式ガイドアプリ「トーハクなび」（日英２か国語対応）を継続して配信した。

(2)29 年１月より継続して、来館者サービスの一環として、「トーハクなび」をインストールした端末の貸し出しサービスを行い、その結果、アプリのアクセス数を大きく伸ばすことができた。

(3)27 年４月より継続して「トーハクなび」のユーザーログを集積・解析。来館者の鑑賞体験を深めるための情報の在り方と発信方法、的確なシステムについて、調査・研究を行い、報告書を作成した。

(4)学校団体で来館する児童・生徒を対象としたスクールプログラムの一環として、タブレット端末によるアプリ「学校版トーハクなび」(中学生・高校生対象）の運用を継続した。児童生徒へのアンケート調査およびログの集積を行い、報告書を作成した。

(5)ICT を利用した博物館ガイドについて、他館への情報提供や意見交換を行った。

(6)共同研究プロジェクトとして、電通国際情報サービス（ISID）とクウジットの協力を得た。

鑑賞支援アプリ「トーハクなび」トップ画面（英語版）

【備考】

1）報告書「学校版トーハクなび」利用者の動向　４月、31 年３月作成

2）電通国際情報サービス（ISID）とクウジットとの研究会を行った（1 回）

3）他館との意見交換：京都国立博物館、九州国立博物館、根津美術館、国立中央博物館（韓国)、北京故宮博物院（中国）など

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	1)　アプリ「トーハクなび」によるサービスを提供しつつ、ユーザーの動向についてのデータを集積することができた。 2)　「学校版トーハクなび」でも、生徒たちの使用状況についてデータを集積することができた。 3)　これらの実績とデータをもとに、運営方法等の改善を試み、オリンピック・パラリンピックに向けた新しい鑑賞ガイドシステムの開発を目指して、具体的な検討を開始した。 4)　現在の課題は、日英中韓による情報提供、ならびに展示替えに即した個別の作品解説の提供である。(当館は、展示作品数が膨大かつ頻繁に展示替えされるため、「トーハクなび」では本館、平成館考古展示室に限って個別作品解説を提供している)。 5)　31年度は、これらの課題を克服すべく、新しいシステムの開発を目指したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2020年に開催予定のオリンピック・パラリンピック開催にむけて、主に訪日外国人を対象とした鑑賞支援プログラムの充実を目指しているが、30年度は29年度から継続して現行のシステムのユーザー動向解析や他館のシステム等の情報収集を行い、それをもとに今後のシステムのあり方について検討することができた。31年度は、2020年度中の新鑑賞ガイドシステムの発進を目途として、そのコンテンツの開発と策定をを目指す。 また、学校団体での来館者に対しては、「学校版トーハクなび」の提供を継続して行いたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1413Bｱ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　博物館教育及びボランティアに関する調査研究 ((4) -①-3))

【事業概要】

本研究では、第一に、来館者サービスボランティア「京博ナビゲーター」の活動を実例に、対話とハンズ・オン教材を組み合わせた博物館教育の実践と研究を行った。第二に、「文化財に親しむ授業」で講師を務める大学生及び大学院生のボランティア「文化財ソムリエ」の育成に関する実践と研究を行った。第三に、これまでの研究成果を活用し、子どもや海外からの来館者を対象とした教育的な特集展示を企画立案し、実施した。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長　永島明子

【主な成果】

(1)京博ナビゲーターの活動

・京博ナビゲーター202 人の活動の指導及び監督。
・ミュージアム・カート内の解説シートの多言語対応。
・特別展「池大雅」関連ワークショップ「指で描こう！指墨画にチャレンジ」の企画・運営。
・特別展「京のかたな」関連ワークショップ「まぢかで見よう！はじめての刀」の企画・運営及び実施のための他館調査。(1 回・徳川美術館)
・外部の調査員と共同で第 1 期京博ナビゲーター（29 年度任期満了）に向けたアンケートの分析調査。
・京博ナビゲーターの活動を含む教育普及活動についての視察の受け入れ及び意見交換。(4 回・韓国文化財庁景福宮管理所、韓国国立中央博物館、国立公文書館、ダン計画研究所)

(2)文化財ソムリエ 19 人の育成

・絵画担当研究員による教材に関する勉強会の企画・実施。作品に関する専門的な知識を伝えることで、授業案作成に関する引き出しを増やす効果があった。
・岩絵の具や墨などの画材体験の企画・実施。訪問授業内でより具体的に画材の紹介を説明できる効果があった。
・複製文化財の活用を希望する学校教員との交流会の企画・実施。
・交流会に出席した教員による複製を活用した授業の実施。
・「第 34 回京都市中学校総合文化祭」における高精細デジタル複製品を用いた「おしゃべり鑑賞会」の企画・実施。
・他機関が実施している鑑賞教育の見学。(2 回・醍醐中学校)。

訪問授業の様子

(3)研究成果を反映した特集展示「謎とき美術！はじめの一歩」(7 月 21 日～9 月 2 日）の企画・実施。

・展示の理解の補助を目的とした 4 言語の謎ときシートの作成。
・教育室研究員によるギャラリートーク及び関連土曜講座「願いを託された動物・植物―吉祥文様入門―」の実施。

【備考】本研究を踏まえた事業の実績については、処理番号 1311B1、1311B2、1312B も参照

(1)科学研究費助成事業「対話とハンズ・オン教材を組み合わせた博物館教育の実践と研究」5 年計画（研究代表者の育児休業のため 1 年延長）の 3 年目

(2)交流会参加の教員による複製文化財を活用した授業について、11 月 2 日朝刊（京都新聞、日本経済新聞）に掲載

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	京博ナビゲーターについては、来館者アンケートなどから、その活動が来館者の主体的な興味・関心を引き出し、博物館における効果的な教育普及活動として機能していることが確認できた。また、第1期京博ナビゲーターに向けたアンケートの分析調査を通して、論文執筆の下地作りを行った。 文化財ソムリエ育成については、スクーリングなどを通じて多様なプログラムを立案・実践することにより、文化財ソムリエの主体的な参加を促し、多様で質の高い鑑賞授業を行った。教員との交流会及び複製を活用した授業は例年より参加者が多く、これらを通して学校教育と博物館教育双方のスキルを活かした複製文化財の活用方法について、より多角的に考察することができた。 特集展示「謎とき美術！最初の一歩」については、29年度に実施した特集展示「京博すいぞくかん」に対する子どもの反応を踏まえて展示内容や解説に改良を加えた結果、小学校低学年の参加を可能にした。また、掲示物・配布物を全て4言語対応することで、海外からの来館者にも日本美術に親しむ入り口を提供することができた。 海外を含めた外部機関から視察もあり、当館の教育普及活動が国内外の機関に周知・評価を得られていることが確認できた。今後もこれらの活動を継続して行い、それぞれの質の向上に努めたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究の中で、29年度に引き続き、中期計画を超える教育普及を目的とした特集展示を実施することができた。また、継続的に行っている京博ナビゲーターや文化財ソムリエに関する調査研究及びその活動も、年々質の向上が認められる。 中期計画の4年目を迎える31年度は、これまでの成果をふまえ、それぞれの活動における問題点の解決に向けた調査研究を進めていきたい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1413Cア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究（(4)－①－3)）

【事業概要】
奈良を中心とした寺社の歴史や伝統行事に関する情報を集め、「世界遺産学習」をはじめとする教育プログラムに反映させられるか検討を行い、重要度の高い情報、適切な内容を発信する仕組みを考える。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長　谷口耕生

【主な成果】
(1)奈良市教育委員会との連携事業による世界遺産学習の一環として、奈良市在住の小学生の親子を対象とする新たな教育プログラム開発に向けて検討を重ね、仏像館見学や仏像クイズを通じて地域の文化遺産について学ぶ「親子で学ぼう 奈良の仏像」を 7 月 25・26 日に実施した。
(2)奈良教育大学・奈良市教育委員会とともに立ち上げた ESD（持続的開発のための教育）コンソーシアム文化遺産教育ワーキンググループにおいて、博物館施設を活用して地域社会への関心を高めるための方策について協議を重ねた。
(3)同ワーキングで提言された展示と密接に関連するクラフト教材活用及びワークショップの実践として、特別展「糸のみほとけ」関連の親子ワークショップ「織ってみよう！糸のみほとけ」を奈良教育大学との連携事業として開催し（7 月 29 日）、小学生の親子が美しい色糸を用いた綴織の技法を実際に体験することで、繡仏や織成像など糸で作られた仏像をテーマとする展覧会への理解を深めることができた。

親子ワークショップ「織ってみよう！糸のみほとけ」実施風景

【備考】
・「世界遺産学習」に来館した学校団体 39 校（奈良市世界遺産学習 26 校、その他 13 校）
※29 年度実績：52 校（奈良市世界遺産学習 32 校、その他 20 校）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館における教育普及プログラムの重要な柱である「世界遺産学習」については、奈良教育大学・奈良市教育委員会とともに立ち上げたESDワーキング等で内容を随時検証しながらその継続性と質の確保に努めるとともに、実施対象を全国から来館する小中高校生に拡大した結果、合計39の学校団体（奈良市26校/その他13校）を受け入れ、29年度並みの実績を達成した。さらに親子ワークショップ「織ってみよう！糸のみほとけ」や親子対象の教育プログラム「親子で学ぼう 奈良の仏像」を実施し、「世界遺産学習」の地域学習・家庭学習への浸透というESDワーキングが提唱する理念を実践することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏像を主なテーマとしながら奈良の歴史、伝統文化に関する教育普及事業として継続的に行ってきた「世界遺産学習」は、全国から来館する小中高校生に対象を拡大するなど、一定の成果を収めている。その内容の充実・向上に向けて継続的な検討を行っており、31 年度から新たに導入するワークシートの利用について ESD ワーキング等の場で協議を重ねた。今後も「世界遺産学習」を地域学習・家庭学習に普及させることを目的として、地元の教育機関と連携しながら博物館の展示内容に密着した小中学生の親子を対象とする教育プログラム、ワークショップの一層の充実を図っていきたい。また、「世界遺産学習」において生徒に対応するボランティアのための作品解説ガイドライン（テキスト）を作成し、31 年度より使用する予定である。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1413Dア

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　ＮＨＫと共同で実施する高精細画像を活用したスーパーハイビジョンシアターにおけるコンテンツの開発に関する調査研究（(4) -①-3)）

【事業概要】

当館では開館以来、世界で唯一の常設設備として 8K というスーパーハイビジョンシステムによる映像を公開してきた。4K の 4 倍の密度を有する 8K が持つ臨場感あふれる優れた映像美を生かした、魅力的なコンテンツ作りを行う。多言語化などの新しいシステムの調査研究を推進する。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長　白井克也

【主な成果】

近い将来に追加する新しいコンテンツの作成に向けて、館内で協議を行った。九州国立博物館が大宰府政庁跡・太宰府天満宮と至近であるという地の利を考慮し、平常展（文化交流展）の 3 テーマエリア「遣唐使の時代」においての重要な位置を占める「大宰府」について、新たなコンテンツを製作することを決定した。関係作品を担当する研究員を中心による打合せを行い、作品の特性や今後の展示予定なども考慮し、コンテンツ製作の基礎となるシナリオ作成を行った。

毎年増加する外国人観覧者に対するサービス向上のため、昨年度中にコンテンツに対する英語・中国語・韓国語の翻訳原稿を作成、ナレーションの録音を行ったが、今年度に本格導入した。そのうえで、上映冒頭の注意事項に関して、中国語・韓国語によるナレーションの一部を再検討し、新規録音・視聴し、公開した。

３テーマエリア展示室の様子

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今後のコンテンツ制作にかかわる方針を決定するとともに、多言語化措置の見直しを進め、サービスの充実に努めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	スーパーハイビジョンシアターでのコンテンツの提供は、文化財の普及にかかわる先進的な手法のひとつとして重要である。今後もコンテンツのますますの充実を図りたい。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1413Dイ

業務実績書

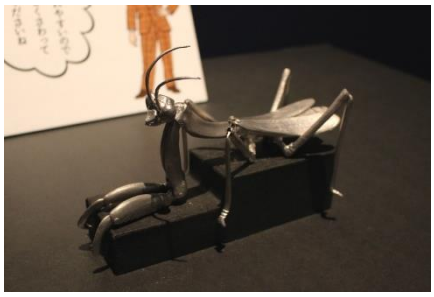
中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	イ　特別展のテーマに則した解説パネル・冊子・ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムに関する調査研究（(4) -①-3)）

【事業概要】
特別展をより楽しくわかりやすくするための教育普及プログラムを実施する。30 年度は「オークラコレクション」展、「京都・醍醐寺」展の 2 つの特別展において実施する。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	研究員　西島亜木子

【主な成果】
過去の特別展のアンケート結果や、来館者調査に基づき、特別展の内容や来館者層に応じた効果的な教育普及プログラムを実施した。

（1）特別展「オークラコレクション」では、大倉集古館の魅力をわかりやすく伝えるため、展示作品を詳しく紹介するパネルと、大倉親子と大倉集古館にまつわる逸話を紹介するイラスト入りのパネルを会場内に 8 か所設置した。また、展示作品「自在蟷螂置物」が実際にどのように動くかを体験してもらうため、「自在蟷螂置物」のレプリカを制作し、体験コーナーに設置して来館者がさわれるようにした。


「自在蟷螂置物」のレプリカ

来館者アンケートでの「大倉親子の解説パネルや自在置物蟷螂をさわる体験コーナーはいかがでしたか」という設問に対して、回答があったもののうち 93%は「とてもよかった」又は「よかった」と回答しており、大変好評を得た。具体的には「パネルがわかりやすくて良かった」「自在置物の蟷螂に触れられたのが良かった」という意見が多く、満足度が非常に高かった。

（2）特別展「京都・醍醐寺」では、醍醐寺や一般にはあまりなじみがないと思われる真言密教について、イラストを交えて解説するパネルを展示室内に 9 か所設置した。内容は、「密教を日本に広めた空海について」「醍醐寺の始まりについて」「密教と顕教の違い」「醍醐の花見について」など、展示を見る際に必要な密教についての基礎知識に加え、展示されている作品をより深く掘り下げた内容など多岐に渡った。また、パネルの解説とあわせて、今回展示される密教法具の使い方を知ってもらうため、醍醐寺での朝の勤行の様子を撮影した動画を上映した。

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	過去の特別展アンケートにより、イラストを交えたわかりやすいパネルは好評であるという結果が得られており、来館者からの期待も大きいことから、30年度も実施した。アンケートでもこれまでどおりの高評価を得ている。年齢や性別に関わらず、あらゆる層の方に満足していただいた。特に、特別展「オークラコレクション」での体験コーナー「自在蟷螂置物をさわってみよう！」は、動く作品である自在置物にさわれるという九博オリジナルのプログラムである。実際の展示作品と同じパーツが動くよう制作したことから、作品の魅力を伝えることができたと同時に、展示理解促進につなげることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展の教育普及プログラムは 29 年度に引き続き、30 年度のアンケートでも高評価を得ている。それぞれの特別展での来館者層や、来館者が期待する内容を想定してプログラムを実施することで、来館者のニーズに応えることができたといえる。それにより、中期計画における「教育普及事業に関する調査研究」のうち、特別展の教育普及については充分達成できたと考える。31 年度以降も来館者の期待に応えるプログラムを調査研究していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1421Aア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　博物館の環境保存に関する調査研究（(4)-②-1)）

【事業概要】
東京国立博物館による文化財の活用に伴い保全の必要性が生じる、保存環境、展示環境、輸送環境について調査研究し、今後の環境の向上に結び付けることを目的として実施する事業。

【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	課長（兼書跡・歴史室長）　冨坂賢

【主な成果】

(1) 展示環境に関する調査

当館が新規に作品を貸与する先の施設を中心に、展示環境の調査を行った。その際に協議した、環境改善や環境維持についての共通する課題や取り組み事例を情報共有することで、当館の環境保全についての有益な知見を得ることもできた。

(2) 展示ケースの開発

立体物の陳列作業の安全性向上を目的とした、展示台一体型の展示ケースを新規に開発した。

(3) 海外輸送環境の調査

加速度データロガー、GPS データロガー、タイムラプスカメラを併用し、これまで工程の詳細を把握することが困難であった海外輸送時の特に陸上輸送について輸送環境データを入手する手法を確立することができた。

(4) 館内用輸送機関の開発

館内移動時に用いる台車上の輸送環境データを計測し、台車上で生じる振動や衝撃を効果的に緩衝する機能をもった台車を試作した。

台車上の輸送環境計測

【備考】
・国内調査先：新ひだか町博物館、国立アイヌ民族博物館設立準備室、京都市考古資料館、長崎県歴史文化博物館
・国外調査先：釜山市立博物館（韓）、パリ日本文化会館（仏）、プティパレ美術館（仏）、Glasbau Hahn 本社（独）、大英博物館（英）、クリーブランド美術館（米）
・論文による研究成果発表
和田浩 博物館における文化財の展示環境と保存技術 空気調和・衛生工学 92(5) 空気調和・衛生工学会（査読あり）
和田浩 東京国立博物館における虫菌害予防と光の演出効果、展示室内の環境保全について 第 40 回文化財の虫菌害・保存対策研修会テキスト 文化財虫菌害研究所（査読なし）
和田浩 東京国立博物館における展示ケース製作事例からみた展示環境保全の取組み 文化財の虫菌害 第 76 号（査読なし）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特に展示環境と輸送環境の保全を目的とした調査研究を重点的に実施した。展示環境については全国的および国際的な技術水準についての情報を得る機会として貸与先の施設調査を積極的に活用した。また、展示環境には作品の陳列作業に関する安全性も重要な要素として存在する。開発した展示ケースはその点を最大限に考慮したものである。輸送環境に関しては海外輸送時の特に陸上輸送の環境解明について大きな成果を上げたと考えている。また、これまでほぼ未着手であった館内用輸送に対する調査研究についても開始することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の活用に伴い、展示環境および輸送環境との接触は必然的に生じる。それらの質的向上を目指した調査研究を継続することにより、社会的要求への対応と文化財の安全確保を両立できるものと考えられる。そのためには、国際的範囲で環境保全技術の最新情報および実例の収集と関係する研究者との協議を重ねる必要があり、その目的は十分に果たせている。また、館内輸送機関の開発に着手したことで、展示の度に移動される文化財の蓄積疲労を減少させるための方法論を31年度以降に構築できる基盤が整った。輸送環境保全に関する研究は当館が持つ特色でもあり、当該研究分野を牽引すべく、今後も引き続き調査研究を重点的に継続したいと考える。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1421Aイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	イ　美術品・輸送機関・梱包資材の振動特性情報を集積した安全輸送のためのシステム構築 ((4)-②-1))

【事業概要】輸送機関、梱包資材、文化財が輸送中に発生する振動に対してどのような応答を示すのかを調査し、科学的根拠に基づく梱包設計を行うシステムを構築する。

【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	調査研究課環境保存室長　和田浩

【主な成果】

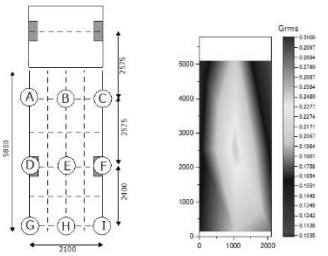
(1) 論文による研究成果発表

・和田浩 美術品輸送専用車両荷台上での振動に対する高速道路橋梁部伸縮継手の影響に関する研究 日本包装学会誌 27(4) 日本包装学会 8 月 1 日（査読あり）

・和田浩 RO/RO 船の乗下船時に美術品輸送専用車両の荷台上で発生する振動について 日本包装学会誌 27(4) 日本包装学会 8 月 1 日（査読あり）

・和田浩 他 文化財梱包の緩衝材に用いられるポリエチレンフォーム材の振動特性評価に関する研究 日本包装学会誌 27(5) 日本包装学会 10 月 1 日（査読あり）

・和田浩 実輸送データをフィードバックした文化財包装への取り組み 実務者のための力学的輸送包装設計ハンドブック（第 5 章第 3 節） テクノシステム 10 月 23 日（査読なし）



美術品輸送専用車両の荷台上で発生する振動レベルの分布

(2) 学会等による研究成果発表

・和田浩 美術品輸送専用車両の荷台上で発生する振動レベルの分布 文化財保存修復学会 6 月 17 日

・和田浩 文化財梱包・輸送の科学 第 11 回指定文化財（美術工芸品）企画・展示セミナー東日本会場 6 月 25 日

・和田浩 RO-RO 船による文化財輸送における乗下船時の振動環境 日本文化財科学会 7 月 8 日

・和田浩 美術品輸送専用車両を用いた文化財の低速走行輸送時の環境について 日本包装学会 7 月 12 日

・和田浩 文化財梱包・輸送の科学 第 11 回指定文化財（美術工芸品）企画・展示セミナー西日本会場 9 月 10 日

・Hiroshi Wada, Proposal of New Index for Transport History of Museum Objects, Symposium ‘Managing Risks to Collections’, Australian Institute for the Conservation of Cultural Material, Melbourne, 31 年 2 月 18 日

【備考】

学会等発表：6 回（内国際会議 1 回）、論文：4 本（内査読あり 3 本）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	陸上輸送における輸送環境への走行路面の影響、走行速度の影響を検証した。付随する成果として車両の個体差、荷台上の位置による差異も考慮すべき因子であることも判明した。また、これまでほぼ明らかにされなかった船舶輸送時の環境データを解析し、その特徴を捉えることができた。文化財の梱包に緩衝材として多用されるポリエチレンフォーム材の振動応答特性の評価試験によってその特性を導き出すとともに、緩衝材の特性を評価する手法を一般化することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究を実施した。全体の研究計画は、輸送機関上で発生する振動、梱包資材の振動応答、文化財(素材、模造品など)の振動応答をそれぞれ調査し、最終的にそれらの情報を集積した科学的な梱包設計システムの基礎を構築するものである。30年度は輸送機関上で発生する振動、梱包資材の振動応答について十分な成果が得られた。31年度はこうした輸送環境内で文化財が受ける負荷が蓄積疲労としてその素材を消耗する現象について追究したいと考えている。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1421Bｱ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　修復文化財に関する資料収集及び調査研究
【事業概要】文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究を行う	

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　大原嘉豊 企画室研究員　井並林太郎

【主な成果】
【主な成果】
(1)修復文化財情報の収集と調査
・30 年度、文化財保存修理所の工房に搬入された新規の修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理計画書」に基づき、149 件のデータを収集し、「修復文化財データベース」に登録した。
・当館研究員により 9 回行った修理工房の巡回のほか、修理技術者とともに実施した科学調査を含む調査を適宜実施し、文化財の構造や使用材料、内部納入品・銘文調査など、修理中にのみ得られる情報を収集、分析した。
(2)修復文化財情報の整理
・29 年度に修理が完了し、搬出を終えた修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理解説書（報告書)」に基づき、1,908 件のデータを「修復文化財データベース」上で更新し、整理作業を行った。
(3)模写作成のための文化財の調査
・当館と模写修理事業者（六法美術）による当館蔵「若狭国鎮守神人絵系図」の復元模写（5 か年計画）の 2 ヵ年目として、両者協議のうえ高精細画像を用いた上げ写しによって模写を進め、30 年度は 7 月に原本の料紙の調査を行い、その成果をもとに料紙の作成・加工を進めた。
(4)情報の公開と共有
・27 年度に修理が完成した文化財 133 件に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 16 号(31 年 3 月 31 日発行)に掲載した。
・修理時の調査により発見された銘文 33 件を「銘文集成」として同書に報告した。

復元模写作業

【備考】
(1)データ収集件数 149 件、巡回回数 9 回
(2)データベースの追加更新件数 1,908 件
(4)報告書　1 冊（修理報告 133 件、銘文報告 33 件を含む）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所で行われる修復文化財情報の収集・整理については、データのデジタル化処理方法等、将来的な情報の応用に対する発展性を見据えて継続的に実施している事業であり、効率性・正確性を担保しつつ30年度も順調に実施できた。この内容は『京都国立博物館文化財保存修理報告書』にて逐次報告している。 30年度は当館蔵の国宝「蓮池水禽図」（俵屋宗達筆）の修理の過程において新たな知見を得るなど、成果を蓄積することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究活動の一環として、文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究を行った。本事業は、法人化以前から継続してきた基礎研究事業であり、中期計画でもその重要性に鑑みて継続性を重視している。文化財保存修理所に搬入される修復文化財の多寡は他律的条件であるため定量的評価になじまないものであるが、ほぼ安定した件数で推移しており、有形文化財の修復や模写にかかる調査研究の情報を継続的に蓄積していく所期の目標は順調に達成しており、31年度以降も継続していく。 当館蔵「若狭国鎮守新人絵系図」の復元模写も調査結果をもとにした料紙が作成されるなど、5か年計画の2か年目として順調である。 31年度計画も30年度に準じて実施していくが、得られた知見をもとにした研究の活性化が望まれる。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1421Bイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	イ　文化財の製作・技法等に関わる材質構造調査・研究（(4) -②-1）

【事業概要】博物館の展示・教育普及活動に関連する調査研究として、有形文化財の製作技術に関わる調査や材料等に関する調査を実施する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室　降幡順子

【主な成果】

(1)蛍光 X 線分析法は、非破壊分析が可能であるため、共同調査等に係る材質調査として多くの調査を実施した。30 年度は特に金属組成、顔料調査、陶磁器胎土の分析調査を主としたものであった。

(2)実施した分析調査は、所蔵者の協力を得て修理所内工房と実施した寄託修理品の調査を含め、X 線 CT 撮像 13 件（27 点）、蛍光 X 線分析（携帯型装置含む）36 件（395 点）、可視赤外分光分析 1 件（40 点）であった。イメージングプレート(I.P)を用いた X 線透過撮影 4 回である。

(3)特に外部からの依頼で実施した滋賀県教育委員会からの美術工芸品調査（懸仏）や鳥取県埋蔵文化財センターからの出土遺物調査（坩堝、ガラス玉等）では、モバイル型分析装置（蛍光 X 線装置）を用いて現地にて実施するなど、機動的な文化財の科学調査に貢献することができた。

据え付け型蛍光 X 線分析装置による測定

(4)施設利用申請による調査としては、早稲田大学からの千葉県龍角寺境内より出土した磚仏および瓦の胎土分析を実施した。

(5)当館蔵「若狭国鎮守神人絵系図」の復元模写のため、高知県立紙産業技術センターに依頼し、原本の料紙分析を行った。

(6)これらの研究成果を修理事業等に活かすとともに、その一部を講演、学会、論文等で発表した。

【備考】

(5)研究成果

・学会発表：降幡順子・石田由紀子・岩戸晶子・神野恵・伊奈稔哲「奈良三彩・緑釉陶器の胎土中に含まれている鉄の化学状態の分析」日本文化財科学会第 35 回大会研究発表要旨集、7 月 7 日～8 日
・講演：降幡順子「高松塚古墳・キトラ古墳壁画を守るー古墳壁画の保存修理ー」京都国立博物館夏期講座、7 月
・講演：降幡順子「文化財を後世に伝える科学 - 博物館資料の科学調査 - 」けいはんなサイエンスカフェ、31 年 1 月
・論文：降幡順子・伊藤信二「年記銘を有する銅製工芸品の蛍光エックス線分析調査」『学叢』40 号、5 月
・論文：降幡順子・石橋茂登・中川あや「古代寺院関連遺跡出土銅製品の非破壊調査」『奈良文化財研究所紀要 2018』、6 月

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は、収蔵品・寄託品の調査に加え、外部調査を実施する機会が増加した。使用科学機器も据え付け型とともに、モバイル型分析装置による調査事例も増し、幅広い分析調査を実施できた。成果の一部は、学会、講演会、紀要等により専門家のみならず広く市民に向けて公表することができた。今後も調査研究として一層のデータ蓄積に努めていき、報告書等で公表していく予定である。また30年度では施設利用申請による分析調査は初の取り組みとなった。今後も体制を整え継続を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究の一環として、有形文化財の製作技術に関わる調査や材料等に関する調査研究を実施した。30 年度は、収蔵品・寄託品の調査点数も増加し、調査研究事業としては順調に進展しているが、それらの結果を展示活用、教育活動等に結び付ける機会は、いまだ十分とは言い難い。寄託品の調査結果の公表に際しては、作品所蔵者の了承が必要であるため、了承を得やすい体制も整えていく必要があるといえる。31 年度以降は、より迅速な情報公開を可能とし、調査研究成果の展示活用も実施していきたいと考えている。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1421Bｳ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	ウ　非破壊分析手法とその分析精度に係る調査研究（(4) -②-1）

【事業概要】博物館の展示・修復に関する業務の一環として、非破壊分析調査を実施する。また非破壊的な分析手法は、有形文化財に対して非常に有用な手法である一方で、どうしても分析精度に限界が生じるため、その分析精度に係る調査研究を実施する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室　降幡順子

【主な成果】

非破壊で内部構造を明らかにすることができるX線CT調査は、文化財資料調査に多く実施されている。30年度は調査対象とする資料の材質を従来の彫刻（木質文化財）からさらに広げ、服飾（絹布・糸）、考古遺物（鉄製品）、漆工品（漆、螺鈿）、紙の調査もおこなった。

(1)30年度は、X線CTを用いた調査として、寄託修理品を含め、X線CT撮像13件（27点）実施した。

(2)外部（京都大学）からの施設利用申請による調査を初めて実施した。

(3)X線CT測定では、金属鉄からなるテスト試料を用いて、X線CT画像の階調から求めた試料密度と、実際の密度との相違について測定条件による影響を計測した。

(4)携帯型分析装置を用いた分析調査では、表面形状、劣化の程度、測定距離などの要因による測定誤差が生じることが知られている。そこで誤差の低減を図るため、30年度は測定距離による測定誤差の低減を目指し、標準試料測定、検量線作成などを実施し、現場での分析調査に有用なデータの蓄積に努めた。

X線CT装置による聖餅箱の測定

(5)染織材料についても同様に、色見本に対して可視赤外分光分析を実施し、測定条件、測定対象の差異などによる誤差の軽減とデータの蓄積に努めた。これらの成果は今後の非破壊調査に活用できるものである。

(6)これらの研究成果の一部を学会等で発表した。

【備考】

(6)学会発表

・杉野公子、降幡順子、能澤慧子「レプリカ制作を通してみる19世紀ヨーロッパのこども服－ウール地ドレス－」服飾文化学会第19回大会、5月

・降幡順子、山川曉、南谷惠敬、一本崇之「X線CTを用いた内部構造調査－「懸守」（国宝・四天王寺蔵）の調査事例－」文化財保存修復学会第40回大会、6月

・降幡順子・辻本与志一・金旻貞・早川泰弘・建石徹・高妻洋成・宇田川滋正「キトラ古墳天井・星宿図の蛍光X線元素分析調査」日本文化財科学会第35回大会研究発表要旨集、7月

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	非破壊分析手法として、X線CT、実体顕微鏡、蛍光X線等の測定機器を用いた調査をおこなった。仏像等の彫刻や納入品の構造調査、浮世絵等の絵画材料等の調査を実施し、多くの情報を所蔵者、研究員、修理担当者と共有することができた。今後は30年度に実施したデータの蓄積から、有形文化財と装置の特性を生かし、より正確な情報を得ることができるよう、各装置の最適な測定法の確立を目指したい。さらに蓄積データの有効な活用として、研究者間での情報共有について検討していく。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究に関連する調査研究として、非破壊分析調査の実施および装置精度に関わる調査研究を実施した。30年度は対象とする有形文化財の材質の幅を広げるなど、順調に実施することができた。これらの研究成果の情報公開については、十分に生かす機会が少なかったことから、31年度以降は展示活用や研究会等も活用して、より迅速な情報公開を実施していきたいと考えている。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1421Cア

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境が文化財に与える影響等に関する調査研究 ((4)-②-1))

【事業概要】

館内施設や設備（展示室・展示ケース・収蔵庫等）の環境が文化財に与える影響の調査・分析を目的としている。次の 3 点の調査を継続的に実施し、得たデータの分析と情報共有を行うことで保存環境の向上を図った。

(1)温湿度センサーを用いた館内施設の温湿度調査
(2)展示ケース内に浮遊する塵埃調査（電子顕微鏡を用いた塵埃の観察）
(3)文化財害虫トラップの設置及び回収

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　鳥越俊行

【主な成果】

(1)29 年度に引き続き、展示室や展示ケースに設置した無線式温湿度センサーで 24 時間リアルタイムモニタリングを実施した。蓄積した温湿度データから、展覧会ごとに情報を整理し展示ケースの気密性向上に役立てた。収蔵庫についても 29 年同様、温湿度データロガーとデジタル温湿度計を用いた定期的なモニタリングと温湿度データの回収を行い、空調の調整に役立てた。

(2)正倉院展終了後に、展示ケース内のアクリル製治具などから塵埃を採取・電子顕微鏡にて観察し、塵埃の状況からケースの気密性に対する評価を行った。調査結果を踏まえ、気密性向上のための修理や部材交換などのメンテナンスを実施した。

昆虫類調査用トラップ設置の様子

(3)29 年度に引き続き、文化財害虫の生息状況を把握するため、文化財の保管及び展示に関わる箇所を中心に昆虫調査用トラップを設置し､2 か月に 1 回交換を行った。調査結果を蓄積し分析することで IPM(総合的有害生物管理)を推進し、文化財害虫の生息が確認された箇所を重点的に清掃し被害の低減に努めた。また、清掃と防塵マット交換を定期的に実施し、展示室・収蔵庫の周辺の衛生環境保持に努めた。

【備考】

・学芸部保存修理指導室員並びに総務課環境整備係員等により構成される､「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」を実施した。月に 1 回程度開催し、保存環境に関する問題点や改善案について協議を重ねている。
(1)展示室内温湿度調査：174 か所
(2)展示ケース内ほか粉塵調査：25 か所
(3)文化財虫害生息状況調査：150 か所
・「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」：11 回開催

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続した調査の実施やデータの蓄積を着実に行っている。また調査で得られた結果を踏まえ、ワーキンググループでの情報共有や議論を行い、保存環境の保持と改善を図った。データの共有化を進め、保存環境の維持や向上を進めると共に円滑な監視体制を整えたい。なら仏像館についても同様に館内環境維持のため継続して調査をすすめデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示室や収蔵庫では、温湿度並びに文化財害虫に関する継続したモニタリングや調査を年間を通じて行っている。なら仏像館も同様にデータの蓄積を着実に継続して実施することで、中期計画の達成を目指す。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1421Cイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	イ　文化財修理の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究（(4)-②-1)）

【事業概要】

本事業では、以下の 3 点の内容について実施した。

(1)修理方法の記録を残し将来の文化財修理に資するため、館蔵品や寄託品の保存状態に関する科学的な調査を行う。その内容を保存カルテとして記録する。

(2)館蔵品や寄託品の修理を着工するにあたり、修理文化財の保存状態に関する情報を得るための科学的な調査を行った。また、調査結果を踏まえた修理調書を作成している。

(3)修理中の文化財から取得した材質・銘文等の情報について調査と分析を行った。また、その結果を当館の研究紀要などへの掲載等を行いデータの蓄積を実施している。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　鳥越俊行

【主な成果】

(1)29 年度に引き続き、館蔵品や寄託品の保存状態を詳細に観察するとともに、得られた情報をふまえ保存カルテを作成している。必要に応じて光学調査も併せて実施し、作品の基礎データを蓄積した。

(2)29 年度に引き続き、館蔵品や寄託品の修理に伴い、詳細な観察や光学調査を実施した。保存カルテと調査結果をふまえて修理調書を作成し、館内鑑査や修理方針の策定に役立てた。

(3)29 年度に引き続き、修理中の木製文化財から得られた木片について、共同研究の一環として京都大学生存圏研究所との協定に基づき樹種同定を実施し樹種を同定した。また、修理中に発見された銘文は、当館研究員が翻刻を行い情報化と整理を実施した。26 年度から 29 年度の成果については、31 年度当初に刊行予定の文化財保存修理所修理報告に掲載すべく準備を進めている。

樹種同定のための顕微鏡観察

【備考】

・保存カルテや修理調書を基に修理された文化財は、修理完了後の翌年度冬に開催される特集展示「新たに修理された文化財」にて公表している。

(1)保存カルテ作成件数：総計 103 件
（内訳　絵画：26 件、書跡：2 件、彫刻：27 件、工芸：12 件、考古：36 件）

(2)修理調書作成件数：総計 9 件
（内訳　絵画：1 件、書跡：1 件、彫刻：4 件、工芸：2 件、考古：1 件）

(3)材質調査及び銘文調査件数：3 件
（内訳　材質調査実施件数：3 件）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所の修理技術者と連携を進め、Ｘ線ＣＴ、Ｘ線透過撮影や顔料調査などの科学的調査を行い、修理に有用な成果が得られた。保存カルテについても整備を進め、修理方針の検討に役立てた。また、材質調査や銘文調査も引き続き実施し、データの蓄積を図った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の文化財保存修理所は、奈良をはじめとする国指定品の修理における拠点であり、修理技術者との連携は今後も重要である。本事業は、修理に関する基礎情報を収集し、その成果を公開するものであることから、31 年度以降についても引き続き調査を行い、情報の蓄積を図ることで、中期計画の達成を目指す。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1421Cｳ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	ウ　保存科学の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究（(4)-②-1)）

【事業概要】

本事業では、以下の２点の内容について実施した。

(1)館蔵品や寄託品の修理前や修理中等に併せ、光学調査（Ｘ線透過撮影・蛍光Ｘ線分析）を実施した。そして、修理方針の策定に有効な情報を取得し反映させた。

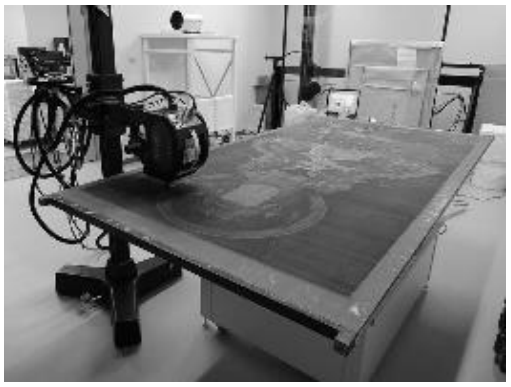
(2)文化財保存修理所での修理中の文化財については、当館の研究員と工房の技術員が共同で光学調査を実施し、得られた結果を修理へ反映している。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　鳥越俊行

【主な成果】

(1)館蔵・寄託の文化財（彫刻や漆工品など）の修理等に併せ、Ｘ線ＣＴスキャナやＸ線透過撮影を実施し内部構造や納入品の把握を行った。また、絵画の彩色材料である顔料に関する情報を得るため、蛍光Ｘ線分析装置を用いた分析を行った。これらの光学調査は修理に活用すると共に、データの蓄積も進めた。

(2)当館研究員と工房の技術者が共同でＸ線ＣＴスキャナ、Ｘ線透過撮影及び蛍光Ｘ線分析などの光学調査を行った。館蔵品や寄託品の修理前や修理中にこれらの調査を実施することで、修理へ成果を随時反映させることが可能となった。特にＸ線ＣＴスキャナの導入により、修理前や修理中に調査を行うことができるようになったことで、彫刻作品や漆工作品のより安全な修理に役立てることができた。



絵画の彩色材料調査

【備考】

・調査件数

Ｘ線ＣＴスキャナ調査回数：2 件（Ｘ線透過撮影調査を含む）

蛍光Ｘ線分析実施回数：1 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度に引き続き、修理等の際に内部構造や保存状態・材質情報に関する情報を得るため光学調査を実施した。Ｘ線ＣＴスキャナの活用により調査の質が大幅に向上した。光学調査の結果は修理調書に反映させるとともに修理方針の策定にも役立てている。31年度についても継続した調査並びにデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	Ｘ線ＣＴスキャナは順調に稼働し、彫刻や漆工品などの修理に大いに役立っている。文化財保存修理所での修理内容をふまえ、Ｘ線撮影や蛍光Ｘ線分析などの調査を行うことで、修理方針の策定等に伴う調査を随時実施できた。31 年度も調査を継続し、データの蓄積を図ることで中期計画の達成を目指す。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1421Dア

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　文化財の材質・構造等に関する共同研究（(4) -②-1)）

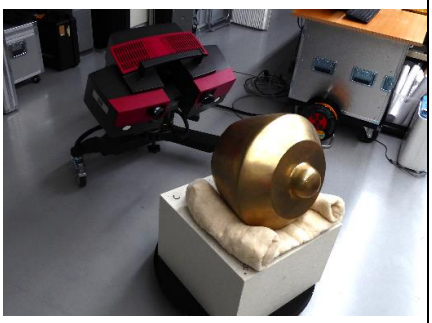
【事業概要】
Ｘ線ＣＴスキャン、三次元計測、蛍光Ｘ線分析等によって文化財の材質・構造等に関する研究を外部研究者と協力して実施する。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長　木川りか

【主な成果】

(1) ジャワ「ガムラン」構成楽器の構造形態と音響の関係

インドネシア・ジャワの「ガムラン」を構成する青銅楽器の構造形態、製作技法及び音響の相互関係を明らかにすることを目的とした筑紫女学園大学との共同研究の一環として、Ｘ線ＣＴスキャナおよび３Ｄデジタイザによって楽器の形態を測定し、音階と構造の関係を調査した。また、楽器の外側及び内側の表面の蛍光Ｘ線分析を行った結果、内側表面からのみ鉄が検出され、楽器製作時に鉄製の槌によって内側から打ち込みを行ったことが示唆された。今後は、楽器打撃時の音響計測を実施し、構造形態と音響特性の関係を検討していく。



「ガムラン」構成楽器の３Ｄデジタイザによる計測風景

(2) 茶入の伝統的な製作技法

茶入の製作技法と内部構造の関係を検討するために、高取・薩摩・唐物など各種茶入のＸ線ＣＴスキャンを実施した。その結果、ＣＴ画像において気泡・ヒビといった粘土内部の空隙を可視化でき、また、底部の糸切の痕跡や石膏を用いた後補部を検出することができた。気泡及びヒビの存在状況は茶入の製作技法に関連するものと考えられ、今後は画像解析に基づいた空隙の定量評価を行い、製作技法との関係を詳細に検討していく。

(3) 伝藕糸織仏画の材質調査

蓮から紡いだ糸（藕糸（ぐうし））で織ったと伝わる仏画 3 幅について、作品の寄託先の担当者と共同で、顕微鏡下における観察及び赤外分光分析による材質調査を行った。調査対象の 3 作品は全て藕糸を使用して織成されており、緯（よこいと）は藕糸と絹を撚り合わせた類例をみない技法で作られていることを強く示唆する結果が得られた。今後、研究紀要等で成果を公表する予定である。

【備考】
・Ｘ線ＣＴ調査件数 20 件、調査回数 160 回
・三次元計測調査件数 7 件、調査回数 45 回
・学会発表：「国宝『初音の調度』-耳盥・輪台、渡金箱、旅眉作箱-のＸ線ＣＴによる構造・技法調査」
日本文化財科学会第 35 回大会（7 月 6 日～7 日）
・論文：「野村美術館所蔵・南蛮毛織抱桶水指の科学分析」『野村美術館研究紀要 28 号』

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は26件の文化財調査を行うことができた。特に、30年度から新たに筑紫女学園大学、日本大学、始良市、直方市、北九州市等との共同研究に着手し、上記の成果を得ることができた。これらの成果は、各種文化財の製作技法に関する理解を深める上で重要であるのみならず、31年度により詳細かつ定量的な学術研究を遂行する基盤をなすものである。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまで中間計画に沿って様々な文化財の調査を実施し、文化財の保存と活用を推進するための基礎データを蓄積しており、30年度も継続して取り組むことができた。30年度末には本事業の中核的な分析装置であるＸ線ＣＴスキャナの機器更新が完了するため、31年度以降はさらに高精細な調査分析に取り組む。また、Ｘ線ＣＴ及び三次元計測によって得られた視覚的データを数値化する画像処理手法を検討し、より客観的なデータ解析を行う予定である。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1421Dイ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	イ　博物館における文化財保存修復に関する研究（(4) -②-1)）

【事業概要】
九州の保存修復の中核となる当館文化財保存修復施設の機能を活かし、西日本地域の大学において文化財保存修復を学ぶ学生を対象とした技術研修を実施する。また、地方行政及び博物館等施設において、文化財の保存修復の担い手となる人材を育てていくためのフィールド調査及び調査結果に基づく教育機会の提供を行う。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長　志賀智史

【主な成果】

・「文化財保存修復研修」
実施日：8 月 27 日～31 日の 5 日間
参加者：広島市立大学 4 人、九州産業大学 2 人、佐賀大学 1 人、別府大学 1 人の計 4 大学 8 人
内容：屏風の下張り製作
協力者：一般社団法人国宝修理装潢師連盟
大学・大学院で文化財保存修復を学ぶ学生を対象に、装潢修復技術を学ぶ機会を提供することができた。屏風の下張り製作を通して、伝統的な日本の紙文化財の構造を学び、その修復技術の一端を実習することで、受講者に文化財や保存修復への理解を深めてもらうことができ、将来の修理技術者の育成にも寄与することができた。

・「古文書保存基礎講座」
実施日：31 年 1 月 25 日、26 日
参加者：地方行政及び博物館等施設において古文書の調査・保管・修復担当者
内容：25 日　文化財の保存修理及び古文書の保存と活用についての講義、糊炊き実習
26 日　紙文化財の取り扱い実習、応急手当の実習
当館、福岡県教育委員会及び筑紫野市歴史博物館の三者共催事業。古文書の調査・保管や応急手当について研修する場を設けることができた。

・「古文書保存基礎講座」受講機関へのアンケート調査
調査対象：159 機関（18 年度～29 年度に本講座を受講した機関）
11 年に渡って実施してきた古文書保存基礎講座について、研修で得られた知識や技術の活用度をはかり、直面する課題やニーズ等の現況を把握するため、受講機関へのアンケート調査を行った。その結果、多くの機関において研修内容を日常業務に活用していることを確認できた。一方で、近年の受講機関の多様化により、近代資料や水損資料の保存を課題とする機関が増えていることや、経験年数の短い担当者が多く、専門家が不足していること等、現場が直面する課題も明らかとなった。

・文化交流展示「文化財をまもりつたえる博物館」
実施日：5 月 15 日～7 月 1 日（7 週間）
展示場所：文化交流展示室　第 1 室
これまでバックヤードツアーでしか知ることができなかった博物館の役割について、修復作品を中心に展示することで、より多くの方々に文化財保護という博物館の役割を知って頂く機会を設けた。展示は 29 年度に引き続き、文化財をまもりつたえてきた「保存箱」を中心に、「修理」、「模写模造と科学調査」、「収蔵」、「環境」の 4 つのテーマで展開した。

「文化財をまもりつたえる博物館」展示風景

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大学と文化財保護の現場における両機関において、将来及び現在の文化財の保存修復の担い手を対象に、30年度も継続して研修の機会を設けることができた。公共の財産である文化財を次世代に守り伝えていくためには、人材の育成を継続的に行う必要がある。そのため上記のアンケート調査等を活用することで、現場に即した実践的な研修を今後も継続していく予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	行政機関職員への研修、将来の修復技術者の育成、博物館来館者への展示を通した普及啓発を行うなど、中期計画に沿って多方面への文化財保存修復に関する教育活動を行うことができた。また、受講機関へのアンケート調査の結果は、今後の博物館での文化財保存修復に関する新たな取り組みを検討する上で、大変貴重な成果となった。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1421Dウ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	ウ　博物館危機管理としての持続的 IPM システムの研究（(4) -②-1)）

【事業概要】
本研究の目的は、我が国の博物館における IPM（総合的有害生物管理）普及のための地域共働システムづくりである。本研究では、研修会の開催、及び地元 NPO 法人やボランティア、大学・専門教育機関・地域文化施設の連携による IPM 研修プログラム確立を通し、IPM の社会的理解度を深めつつ、博物館等における IPM を軸にした自立的地域共働システムづくりを目指すものである。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　秋山純子

【主な成果】

(1)イギリスから文化財施設の虫害対策の専門家を招聘するとともに、国立民族学博物館からも講演の協力を仰ぎ、IPM セミナーを実施した（10 月 24 日）。国内の博物館、美術館、図書館関係者のみならず、館内での IPM 事業にかかわるスタッフ、NPO 法人、ボランティアあわせて 175 人の参加を得た。

(2)IPM 研修を 29 年度に引き続き実施した（10 月 25 日、26 日）。IPM 研修の受講は各施設の職種の異なる 2 人 1 組（総務系と学芸系など）での参加を原則としている。30 年度の IPM 研修では、募集定員 24 人のところ、北海道から九州まで全国 58 の施設から 109 人の応募があり、34 人が受講した。

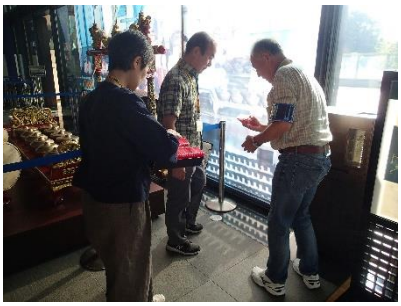
28 年度、29 年度に受講した館で、再度申し込みをするところも多く、この IPM 研修が各館で役立っていることが伺える。また、無記名でのアンケート結果では「とても良かった」と最高の評価で回答した参加者が全体の 79%以上と、非常に満足度が高い結果を示しており、引き続き IPM 研修を実施する必要があるといえる。

IPM セミナーにおけるイギリスの
ヴァレリー・ブライス氏の講演

(3)館内向け IPM 研修の開催
館内スタッフの希望者向けに IPM 研修を実施した（5 月 23 日）。館内のスタッフに当館の IPM 活動を知ってもらう良い機会となった。

(4)環境ボランティア活動として、館内ウォッチングや博物館科学課スタッフによる小話会、昆虫インジケータ観察などの活動を実施した。

IPM 研修風景


環境ボランティア活動での
館内トラップ交換風景

【備考】
- IPM セミナー　1 回　参加人数：175 人
- IPM 研修（2 日間）　1 回　参加人数：34 人
- 館内希望者向け IPM 研修（1 日間）　1 回　参加人数：21 人
- 学会研究会等発表：木川りか、秋山純子、富松志帆、武藤美代、泊智子、柿本大典、大城戸博文「ガラス外壁を有する博物館建造物における照明を利用した衝突野鳥の対策」文化財保存修復学会第 40 回大会（6 月 16 日、高知）、秋山純子、木川りか、富松志帆、武藤美代「九州国立博物館における各種資料の低温殺虫処理について」文化財保存修復学会第 40 回大会（6 月 16 日、高知）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今回のIPM研修ではより実践的に生物処理方法の選択を検討する実習を加えたことで、実際に自館に戻ったときに役立てられるという感想が多かった。IPMの実践に向けセミナーや研修の内容を検討し、確かな形で普及できた。31年度も引き続き内容等を精査し、実施していきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画のとおり、文化財の保存に関する博物館等の業務に関連し、セミナーやIPM研修等を全国の博物館等から担当者を受け入れて実施している。IPM研修は毎年、受講の希望者が多く、今後もこのようなニーズを踏まえつつ、調査研究により最新の状況を反映した教育活動を実施していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1421Dｴ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	エ　文化財に使用された彩色材料に関する面的調査法の検討（(4) -②-1)）

【事業概要】
近年、文化財の科学調査が一般的に行われるようになってきた。しかし文化財は脆弱な材質、構造のものが多く、文化財の科学調査は、調査のための作品移動の機会をなるべく少なくし、短時間に非破壊で行うことが求められる。これまでは制限がある中での点分析が主流であったが、文化財を総合的に理解するには面的な広がりで捉える調査が必要である。本研究では文化財の科学調査に面的な手法を導入した有効な調査法を検討する。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　秋山純子

【主な成果】

(1) 標準カラーチャートの赤外線画像をもとに「博物図譜」（香川県立ミュージアム保管）画帖 4 帖の赤外線画像を解析した結果を日本文化財科学会で発表した。（7 月 7 日、8 日）

(2)顔料･染料を塗り重ねた標準となるカラーチャート作成のため、染料（青花）の調査を行った。(8 月 1 日、2 日：東京文化財研究所)

(3)顔料･染料を塗り重ねた標準となるカラーチャート作成のため、材料の選定や内容について意見交換を行った。(8 月 10 日、11 月 13 日：京都国立博物館内修理工房)

スペイン・サラゴザ美術館での調査の様子

(4) これまでの赤外線画像による面的調査の成果を踏まえ、スペイン・サラゴザ美術館所蔵の浮世絵を調査・撮影することができた。この浮世絵はフランス・ボルドー大学の研究所で彩色の科学調査が行われており、点分析の成果を赤外線画像によって面の広がりで捉えることができた。(9 月 23 日～10 月 1 日：フランス・ボルドー大学、スペイン・サラゴザ美術館)

(5) 香川県立ミュージアムにて「博物図譜」の顔料について蛍光Ｘ線分析を実施し、使用されている彩色材料の解析を行った。(31 年 2 月 15 日、16 日)

【備考】
調査回数：5 回
学会発表等：
「赤外線画像と彩色材料の成分との比較について」日本文化財科学会第 35 回大会（7 月 7 日、8 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまでの研究成果を踏まえて、赤外線画像による判定が有効な緑色に着目した標準カラーチャートを作成した。また、海外の浮世絵を調査する機会を得て、絵画の中でもこれまでと塗りの状態が違う刷り物に対して、次につながる赤外線撮影をすることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財に関連する調査研究を実施した。本研究では面的調査に赤外線画像が有効であることを検証してきた。これまで実際の資料で検証するため調査を重ねてきた「博物図譜」をもとに、面的調査に有効な彩色材料に絞った標準カラーチャートを作成し、データを蓄積できた。また海外での調査でも赤外線画像による面的調査が有効であることを確認することができた。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1421Dオ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	日タイにおける文化財調査と資料集成（(4) -②-1)）

【事業概要】
これまで知られてきた日タイ交流史料を新出の交易・文化交流資料から見直し、日本とタイにおける文化財調査を行い、その資料を日タイにて共有する。本成果は今後の展示、文化財収集の基礎資料となる。

【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	課長　原田あゆみ

【主な成果】
30 年度は、日本とタイに伝わる更紗の研究として、明治初期にタイから日本にもたらされた貝葉写本と包裂、江戸時代に日本に伝わった更紗裂帳、タイに伝わる更紗を比較調査した。
また、当館所蔵の端物切本帳 13 冊の詳細なデータをまとめ、デジタル版及び紙版報告書として刊行した(31 年 3 月)。
大谷大学真宗総合研究所と共同で実施してきた織田得能（1860～1911）請来パーリ語貝葉経と包裂の調査は 3 年目にあたる（31 年 1 月 31 日～2 月 1 日)。また、30 年度も引き続き、タイ芸術局との共同調査を行い（31 年 2 月 5 日～8 日、2 月 22 日～28 日、3 月 22 日～27 日)、調査データを日タイにて共有した。

パーリ語貝葉経と包裂共同調査
大谷大学総合博物館
31 年 1 月 31 日

伝統的修復技法の調査
タイ・芸術局伝統工芸部修理所
31 年 2 月 25 日

日タイ関係資料の調査
タイ・アユタヤー遺跡
31 年 2 月 26 日

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は、収集してきたデータの整理と平行して、特に輸入更紗に関する調査報告書の準備を進めた。本調査研究は東京国立博物館所蔵の端物切本帳調査をまとめた『端物切本帳画像一覧』(3巻）から継続するもので、30年度は当館所蔵の端物切本帳についての『端物切本帳画像一覧』(5巻）を刊行することができた。本成果は、大谷大学真宗総合研究所との共同調査研究においても有効に活用されているだけでなく、日本各地に収蔵される端物切本帳との比較研究により、輸入染織研究に寄与することが可能である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財に関連する調査研究を実施した。中期計画 3 年目にあたる 30 年度は、これまでの調査成果の整理並びに専門家向けの報告書の作成を中心に作業を進めた。31 年度も引き続き日本、タイ国内の調査を継続予定である。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1422Aｱ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究（(4)-②-2)）

【事業概要】

東京国立博物館における収蔵品管理システムの調査研究を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。

【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	情報管理室長　村田良二

【主な成果】

1) 収蔵品管理システムについて、作品検索、総合文化展管理、鑑査会議管理、貸与管理、修理予定・履歴管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。
2) 作品検索機能について、制作地で検索できるようにした。
3) 展示案に含まれていた寄託品が返却された場合に、展示案の画面で警告を表示するようにした。
4) 文献管理機能を新規に開発した。列品等が掲載または言及されている展覧会図録、雑誌記事等の文献のデータを追加することにより、ユーザの利便性が向上した。
5) 機構内４博物館の収蔵品を公開する「ColBase」とのデータ連携について検討した。

文献データ管理画面

【備考】

収集データ件数　229,958 件
（内訳）
作品データ件数　218,145 件
平常展データ件数　5,147 件
鑑査会議データ件数　97 件
貸与データ件数　1,789 件
修理データ件数　2,669 件
文献データ件数　2,111 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品の効果的・効率的な管理のためのシステムを継続的に開発でき、学芸業務に欠かせないツールとして着実に発展させることができた。作品検索において制作地を検索条件に指定できるようにすることにより、検索の効率を向上させた。また、展示案が作成されたあとに、案に含まれていた寄託品が返却により使用不可となったことについて警告を表示することにより、従来担当者の記憶に依存していた部分をシステム化して抜け・漏れがないようにできた。文献データ管理機能を追加したことにより、作品ごとの過去の文献を参照することが大幅に容易になり、調査研究等の業務に役立てた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間では、システム全体の設計を再検討し、さらに発展させていく。30年度は、継続的な機能改善と同時に、プログラムコード全体の改善を行い、「ColBase」とのデータ連携について検討することができた。31年度以降は、ユーザインターフェース関連のライブラリの更新に着手するとともに、「ColBase」とのデータ連携のために公開データの出力機能の実装に着手する。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1422Aイ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	イ　創立 150 年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究（(4)-②-2)）

【事業概要】　34 年度の当館創立 150 年へ向けて、『東京国立博物館 150 年史』を編纂するために、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料として内容の調査を行う。30 年度は関係文書類の付箋挿入と整理、PDF などデータ化を進め、保存措置を講じる。また、『150 年史』執筆者に向けて資料提供を行う。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	東京国立博物館百五十年史編纂室長　恵美千鶴子

【主な成果】

(1)収集した文書類の整理・目録化・保存措置（4 月 2 日～31 年 3 月 29 日：週に 1～2 日）
資料保管室（資料館 3 階）に収集した約 8,500 件の館史関係文書類について、27 年度に完成した目録(仮)と対応するための付箋挿入を進めた。また、資料の保存や出納のために、中性紙箱への入れ替えを行った。以上は、資料整理補助謝金アルバイト 1 名と、東京国立博物館百五十年史編纂室員 2 名、編纂室 AF1 名がともに作業を行った。

(2)東京国立博物館百五十年史編纂に向けた打合せの実施（5 月 23 日ほか）
『150 年史』編纂のためのワーキング打合せを実施した。29 年度に決定した執筆者に、執筆依頼を行った。
また、執筆者を集めて、編集調整会議（2 月 22 日）を行った。

(3)館史の内容に即した文書類の整理・デジタル化

a)『百年史』資料のデジタル化（4 月 3 日から）
『東京国立博物館百年史』編纂の際に用いられた資料・原稿等の PDF 化を進めるとともに、『150 年史』編纂の資料として活用すべく館史資料のテキストをデジタル・データ化した。AF1 名と謝金アルバイト 1 名がこれを進めた。

b)海外交流展覧会資料のデジタル化（7 月 3 日から）
『150 年史』編纂に向けて、執筆資料とするために、海外交流展覧会に関する資料のデジタル化を行った。室員 1 名、AF1 名、謝金アルバイト 2 名がこれを進めた。

c)『150 年史　年表（稿)』の作成（5 月 10 日～6 月 29 日）
『150 年史』執筆の資料とするために、これまで蓄積してきたデータを年表に落とし込み、冊子を作製した。

(4)総合文化展にて館史に関わる展示の実施（10 月 30 日 ～12 月 25 日）
本館 15 室「歴史の記録」にて、館史にかかわる古写真などの展示を実施した。また、この展示に関連するギャラリートークを、室員 1 名が行った。

(5)問い合わせへの対応と関係資料の提供（12 月 21 日ほか）
『150 年史』執筆者などへの資料提供と、館内・館外からの館史に関する問い合わせに対応した。

【備考】
(1)収集した文書類の整理：65 日間実施
(2)編纂ワーキング打合せ（全体）と個別打合せ、編集調整会議：6 回実施
(3) a)『百年史』資料のデジタル化：55 日間実施（18 件約 14,000 点）
b) 海外交流展覧会資料のデジタル化：20 日間実施（30 件 414 点）
(5)資料提供・問い合わせ対応：22 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度より継続的に行ってきた文書類の整理・保存措置について30年度も進めることができた。また、収集・整理した文書類のデータを活用し、調査研究の歴史に関するデータを収集し、編纂資料年表（冊子本）を作成することができた。引き続き、館内各所に所在する文書類を『150年史』編纂に有効に活用できるようにするとともに、展示など他の事業にも役立つようなデータ作成を行う。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	資料目録について館内での周知が進み、文書類の活用希望者も増えてきた。また、館史に関わる問い合わせや調査研究などの要望に迅速に対応できるようになったことから、中期計画に対する進捗状況は順調である。31年度以降も引き続き文書類のデータ化を進めるとともに、利用しやすい文書整理を行い、さらなる活用を図っていきたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1422Bｱ

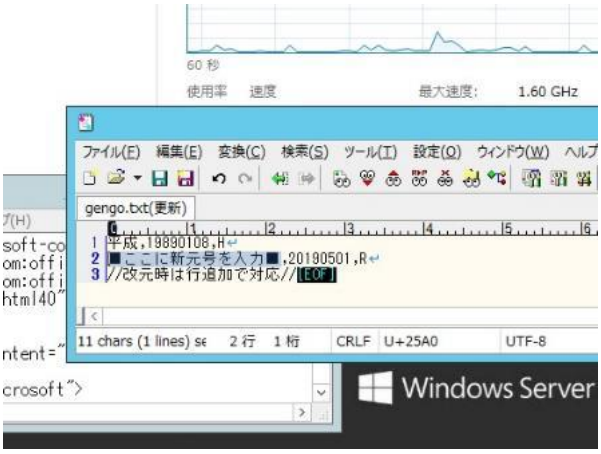
業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究 2）博物館情報、文化財情報に関する調査研究
プロジェクト名称	ア　文化財情報に関する調査研究((4)-②-2)-ア)

【事業概要】
当館の文化財情報システムや博物館ウェブサイト、博物館システムの整備や運用について検討するとともに、文化財情報に関する諸般の調査研究を実施する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長（兼列品管理室長）　羽田聡

【主な成果】
(1)当館の文化財情報システムや博物館ウェブサイト、博物館におけるインフラネットワークの整備や運用について検討する情報システム検討委員会を隔月で開催し、文化財情報に関する調査研究を推進した。
(2)博物館に求められるデジタルアーカイブズや、国立国会図書館を中心に整備が進むジャパンサーチへの対応のため、近年の他機関における動向や社会的ニーズの変化を踏まえ、メタデータの整備や画像提供のあり方について、継続して調査・検討を行った。
(3)改元の準備として、文化財情報システムの帳票プログラム等について検討を行い、新元号を処理可能なよう改修を行った。
(4)文化財保全のための収蔵・展示環境を監視する環境モニタリングシステムについて、セキュリティ向上のためWindows10 対応や、館内携行用タブレットの仕様変更による作業性向上など、各種改善を行った。
(5)写真及び撮影におけるデジタル化の推進に伴い増大する画像データを安全にバックアップするため、29 年度に導入した UDP バックアップ方式について、実運用を踏まえた検証を行いつつ、適宜改修・増強を図った。また、激甚災害対策として、さらに遠隔地でのバックアップができないか、最新のアーカイブ規格（LTO-8、Gen,2 ODA など）について検討を開始した。



プログラム改修
（文化財情報システムの改元定義）

【備考】

・情報システム検討委員会　6 回
・情報システム調査　6 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館のデジタルアーカイブズや博物館ウェブサイト、博物館システムの整備や運用について検討する情報システム検討委員会を隔月で開催したほか、環境モニタリングシステムの改善や画像ストレージシステムの改修を通じ、文化財情報に関する調査研究を推進した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画で求められている文化財情報に関する調査研究について、写真及び撮影におけるデジタル化の推進に伴い増大した画像データの効率的かつ安全な収容を進めるため、29年度に大幅に容量性能を向上させたバックアップシステムを、安定稼働に乗せる事ができた。 31年度以降は文化財情報システムを含めた博物館アーカイブズの調査研究に特化した分科会を設置し、本調査研究をより推進していく予定である。 情報システム委員会での検討課題が多岐にわたることから、31年度以降は文化財情報の調査研究をより強力に推進するためのアーカイブズ検討分科会（仮称）を設置することを予定している。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1422Cｱ

業務実績書

中期計画の項目	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア　文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究（(4)-②－2)）

【事業概要】

当館が活動範囲とする仏教にかかわる歴史と美術について、展覧会や調査研究事業と連動した情報収集を行い、そこにデジタル技術を適切に取り入れることにより、データの継続的な作成・データベースの構築・情報資源の公開並びに共有へと展開させる。その際には実践に即した方法論を鍛え、文化財の保存活用に資するアーカイブズの形成・発展にも寄与することを目指す。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	資料室長　宮崎幹子

【主な成果】

デジタル撮影の安定的な稼働を目指し、撮影機材、環境、保存用ストレージ、体制等の整備を行い、多数の撮影を実施した。情報システムや公開用データベースの更新を適宜行い、情報の公開と拡充に積極的に取り組んだ。30 年度は、画像保存用のストレージのリプレイスを実施するなど、設備面の整備に注力した。

(1)特別展「国宝 春日大社のすべて」（以下、「国宝 春日大社のすべて」）並びに「糸のみほとけ－国宝 綴織當麻曼荼羅と繡仏－」（以下、「糸のみほとけ」）の開催と連動して、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古の各分野の文化財の撮影を行った。「国宝 春日大社のすべて」では、その機会がとりわけ限定される神道美術の撮影が多数叶った。また、54 年ぶりに繡仏を展観する特別展となった「糸のみほとけ」でも、各地の優品を集成的に撮影することが出来た。これらによって、当館における文化財アーカイブズの更なる充実が図られた。

(2)29 年度に引き続き、ガラス乾板の保存活用事業を実施した。これは、デジタル化、ガラス乾板の保存処置（カビや埃の除去）、畳紙・保存箱への納入と、新たな専用キャビネットへの排架とが連動したもので、館内の貴重な歴史資料の保存活用を目指ざす事業である。30 年度はガラス乾板のデータベースを構築し、仏教美術資料研究センターにおいて情報公開をおこなった（6 月）。保存についても、年度内に全ての作業が完了した。ガラス乾板の被写体の同定については、引き続き各部門の協力を受けながら行っていく。

(3)33 年に刊行を予定している、快慶作品を集成した大型図録の基礎資料を収集するため、高野山等において文化財調査にともなう撮影を実施した。この活動は、当館のアーカイブズの充実だけにとどまらず、広く学界へ裨益する出版事業にも結び付けられる成果である。

撮影風景（阿弥陀三尊像　和歌山・光臺院）

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館では、文化財アーカイブズの形成を重要な活動のひとつとして位置付けている。なかでも拝観や移動、調査の機会が稀少な文化財を画像データとして蓄積し、共有可能な研究資源としていくことには、大きな意味がある。文化財の撮影は、保存や所蔵者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均値との比較から各年度の実績を評価することは必ずしも適切ではないが、主な成果でも述べたとおり、学術的に重要でありながら撮影の機会を得ることが難しい文化財について、継続的に調査を実施して質の高い画像データを取得し、公開へと繋げていることの意義は非常に大きい。近年では、文化財写真の黎明期を伝えるガラス乾板のデジタル化にも取り組むなど、更なる発展も視野に入れている。今後も当館の展覧会事業等と密接に連携しつつ情報の蓄積を続け、仏教美術情報の一大拠点として、文化財アーカイブズの質・量双方の維持に努める予定である。 人員と予算が限られる現在のような体制で、他館と比して遜色ない幅広い活動を展開できている点も評価できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	デジタル撮影を含む画像データの作成については、現在のところ安定的な稼働を維持できている。内部での処理から最終的な情報公開までの一連の流れについて、今後とも人材及び機材の確保を含めた長期的な展望が必須である。また、現在行っているカラー・近赤外線・透過Ｘ線のデジタル撮影に加えて、29 年度より本格稼働したＣＴ撮影についても、情報の蓄積と共有を実現させるべく、機材・設備の充実が急務である。 当館では仏教美術分野において国内唯一と言っていい貴重な画像データのコレクションを運用しているが、ＣＴ撮影に代表されるような文化財調査の進展に併せ、文化財アーカイブズの拡充が図れるよう、更なる体制整備が肝要である。今後も文化財の保存・活用そして研究の基盤として機能するべく、文化財アーカイブズ形成の実践を続けていくとともに、それを下支えする理論の構築にも取り組んでいく。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1430A

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究　③国内外の博物館等との学術交流等

【年度計画】
（4館共通）
1)海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。
2)当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。
3)国際的な講演・研究集会、シンポジウム等を開催する。
4)平成31年のICOM（国際博物館会議）京都大会2019に向けた活動を促進する。
（東京国立博物館）
1)学術交流協定を締結している博物館及び東アジア・欧米主要館を中心に、海外の博物館との交流を活発に行う。
2)アジア国立博物館協会（ANMA）理事会・定期大会、 IEO（国際展覧会オーガナイザー会議）、日中韓国立博物館館長会議等の国際会議へ参加する。

担当部課	学芸企画部企画課国際交流室	事業責任者	室長　楊鋭

【実績・成果】
（4 館共通）
1)中国、韓国、米国の博物館・美術館等から計 79 人の研究者を招へい・受け入れ、研究交流を行った。
2)中国、韓国、インドネシア、マレーシア、イスラエル、米国、ヨーロッパなど 11 ヵ国・地域の博物館・美術館等へ研究職員を 52 人派遣し、収蔵品とその活用に関する研究および、研究交流を行った。
3)文化庁支援、北米・欧州ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業の一環として国際シンポジウム「世界の中の日本美術－オリエンタリズム・オクシデンタリズムを超えた日本理解」(31 年 1 月 18 日、東京国立博物館）及び日本美術専門家会議（31 年 1 月 19 日、同館）を開催した。
4)第 66 回 全国博物館大会（11 月 28 日～30 日、東京都）への参加を通して、ICOM 京都大会への参加を呼びかけた。
5) ICOM-ASPAC 日本会議 2018（12 月 1 日～2 日、九博）への参加を通して、アジア太平洋地域の博物館関係者との情報交換、交流を推進した。
（東京国立博物館）
1)　韓国国立中央博物館及び中国・上海博物館等との学術交流協定に基づき、研究員の交流・派遣を行うとともに、海外での文化財調査や特別展など共同事業の企画・実施準備、国際会議に研究員を派遣した。また、今年はロシアにおける日本年から「江戸絵画名品展」（9 月 4 日～10 月 28 日、ロシア・プーシキン美術館）開催にあたり、現地の展示環境等に関する助言を行ったのをはじめ、国際的な調査研究、ネットワーク構築、交流事業の推進を図った。
2)　外国人来館者に日本美術をより理解し、楽しんでいただくため、多言語対応担当者を海外に派遣し、各国の公私立博物館の多言語化の対応状況を調査し、当館の多言語化環境の向上に促進した。

【補足事項】
（4 館共通）
上記研究員派遣人数は当館予算による派遣延べ人数を示す。
科学研究費助成事業等外部資金等を含む人数は 69 人。
（東京国立博物館）
1)研究員の海外交流の成果を館内で共有するため、学術交流発表会及び派遣者による研究交流成果報告会を実施した： ①韓国国立中央博物館研究員（6 月 29 日朴永萬氏・11 月 27 日朴娟嬉氏)、当館研究員（31 年 1 月 25 日遠藤主任研究員・飯田アソシエイトフェロー）
②中国・上海博物館研究員（11 月 26 日徐方円氏・12 月 12 日李蘭氏)、当館研究員（(31 年 4 月上旬予定　山本研究員・猪熊兼樹主任研究員）

「江戸絵画名品展」(9/4)

学術発表会(11/27)

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
海外からの研究者招聘	79人	－	－	経年変化	47	83	73	35
海外への研究者派遣	52人	－	－		18	47	60	67
国際シンポジウム開催数	1回	－	－		2	1	1	1
国際シンポジウム参加者数	256人	－	－		422	284	463	334

【年度計画に対する総合評価】
評定：Ｂ

【判定根拠、課題と対応】
韓国国立中央博物館・中国上海博物館との協定に基づく主体的な招へいに加え、海外の優れた研究者を招聘するとともに、館研究員を海外に派遣、研究者交流を活性化することにより、博物館活動に対する示唆が得られるよう努める。また、30年度で5度目となる米国・欧州ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業には5ヵ国22人の参加があった。これらの取り組みにより海外研究者・博物館関係者との交流が進み、今後の展覧会等事業や研究交流につながっている。今後、交流対象国をさらに広めていくことに努めたい。

【中期計画記載事項】
我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。

【中期計画に対する評価】
評定：Ｂ

【判定根拠、課題と対応】
例年規模の研究者招へいと派遣により成果を達成し、順調に遂行できた。第5回となった米国・欧州ミュージアム日本美術専門家会議では、世界の中の日本美術－オリエンタリズム・オクシデンタリズムを超えた日本理解に活発な議論が進み、交流を通じて、文化の理解し合うことを図った。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1430B

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等

【年度計画】
（４館共通）
1)海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。
2)当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。
3)国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。
4)平成31年のICOM（国際博物館会議）京都大会2019に向けた活動を促進する。

担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長　數馬厚人 企画室長　山川曉

【実績・成果】
（４館共通）
1)講演会・展覧会等のために海外研究者14人を招へいし、外国人客員研究員1人、特別研究員1人の海外研究者を受け入れた。
2)研究交流及び研修等のため、職員延べ35人を海外へ派遣した。
3)
・一郷韓国美術史研究院院長姜友邦(カンウバン)氏を招へいし国際特別講演会「日本と韓国の仏画の新解釈」及び日本研究者との座談会（31年1月26日）を開催した。
・北京画院理論研究部主任呂暁氏を招へいし土曜講座「木匠から巨匠へ：斉白石の人生と芸術」（31年2月23日）を開催した
4)
・ICOM京都大会に向けて、九州国立博物館で開催されたICOM-ASPAC及び関連の国際会議へ職員を派遣した。
・京都市内博物館施設連絡協議会主催の「ICOM京都大会プレイベント」に協力し、事業への冠付与や明治古都館（本館）の特別公開を行うなど開催機運醸成に努めた。

国際特別講演会の様子

【補足事項】
1)招へい者のうち2名は文化庁「平成30年度外国人芸術家・文化財専門家招へい事業」による。
2)フランス・ギメ美術館との学術交流協定に基づき、当館職員1名がギメ美術館にて調査を行った。
3)呂暁氏の土曜講座は特別企画「日中平和友好条約締結40周年　中国近代絵画の巨匠　斉白石」の関連講座である。
4)文化庁創立50周年、国際博物館会議（ICOM）京都大会開催1年前を記念し、オリジナルクリアファイルを配布した。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
海外からの研究者招聘	14人	－	－		2	2	2	2
海外への研究者派遣	35人	－	－		14	17	21	21
国際シンポジウム開催数	1回	－	－		1	1	0	1
国際シンポジウム参加者数	99人	－	－		168	200	0	140

【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 外国人招へいや職員派遣などの海外交流に加えて、30年度は外国人研究者の受け入れや北京画院及び東京国立博物館との共催である特別企画「日中平和友好条約締結40周年　中国近代絵画の巨匠　斉白石」も実施した。外国人招へいにあたっては文化庁「平成30年度外国人芸術家・文化財専門家招へい事業」を活用するなど、外部資金も積極的に活用した。また、ICOM京都大会開催地の国立博物館として機運醸成に努めた。以上のことから、年度計画の目標を上回る成果をあげることができた。

【中期計画記載事項】
我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 30年度は韓国より姜友邦氏、中国より呂暁氏を招へいし、講演会及び座談会並びに土曜講座を開催した。31年度以降も引き続き機会を捉えて、海外研究者も交えたシンポジウム、講座、講演等の実施を検討する。また、ICOM京都大会開催地として、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与できた。31年度に開催されるICOM京都大会に向け、引き続き一般の方も含めた広報活動を実施していく。

【書式Ａ】　施設名　奈良国立博物館　処理番号　1430C

中項目	１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究　③国内外の博物館等との学術交流等

【年度計画】（４館共通）
1)海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。
2)当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。
3)国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。
4)平成31年のICOM（国際博物館会議）京都大会2019に向けた活動を促進する。
（奈良国立博物館）
1)学術交流協定を締結している博物館を中心として、海外の博物館等との交流を活発に行う。

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　内藤栄

【実績・成果】（４館共通）
1)　中国・韓国の研究者等10人を招聘し、最新の研究状況について情報交換するとともに、今後の研究や展示および博物館活動全般について意見を交わした。また、修理完成記念特別展「糸のみほとけ－国宝 綴織當麻曼荼羅と繡仏－」でイギリスの美術館から展示品を借用するにあたり、先方のクーリエを2人、招聘した。
2)　職員のべ20人を諸外国に派遣し、文化財に関する研修および現地研究者との研究交流を実施した。
3)
・正倉院学術シンポジウム2018「正倉院宝物と新羅」を11月3日に開催した。30年度は東国大学校（韓国）の教授1人を招聘し、講演及び日本国内の研究者3人とのパネルディスカッションを行った。計227人の参加があった。
・国際講演会「慶州皇隆寺と韓国出土文字資料の世界」を31年2月1日に開催した。学術交流事業で招聘する国立慶州博物館研究員による国際講演会を行い、計40人の参加があった。
4)　ICOMの委員会の一つであるCOMCOLの年次会合（9月24日～28日、カナダ、ウィニペグ、Canadian Museum for Human Rights）に出席し、国内ではICOM2019京都大会の担当者会議（9月）と　ICOM国際委員会委員長意見交換会（10月）に参加した。
（奈良国立博物館）
1)　中国上海博物館、中国河南博物院、韓国国立慶州博物館との間で、学術交流協定に基づいて職員を派遣し、また先方の館員を招聘して、それぞれの専門分野にかかわる研究交流、意見交換を実施した。

【補足事項】
（４館共通）
1)　海外からの招聘人数の内訳は、上海博物館（中国）3人、河南博物院（中国）2人、国立慶州博物館（韓国）4人、東国大学校（韓国）1人、大英博物館（イギリス）2人。
2)　当館から海外への派遣人数の内訳は、国立慶州博物館（韓国）3人、国立中央博物館（韓国）2人、上海博物館（中国）3人、河南博物院（中国）2人、遼寧省博物館（中国）2人、洛陽市（中国）1人、インドネシア国立中央博物館ほか1人、ライデン民俗博物館ほか（オランダ・ドイツ）1人、　Canadian Museum for Human Rights（カナダ、ウィニペグ）1人、フリアギャラリーほか（アメリカ）1人、クリーブランド美術館（アメリカ）3人。
3)
・正倉院学術シンポジウム2018「正倉院宝物と新羅」　11月3日
　発表者：崔應天氏（東国大学校教授）
・国際講演会「慶州皇隆寺と韓国出土文字資料の世界」（於当館講堂）　31年2月1日
　発表者：李鎔賢氏（国立慶州博物館学芸研究士）
4)　COMCOLの年次会合では、各委員の発表を聴講するとともに、京都大会をプレゼンテーションした。また、COMCOLミーティングでは、プレカンファレンスの準備状況を報告した。
（奈良国立博物館）
1)　学術交流協定に基づいて、以下の交流を実施した。
・中国上海博物館から職員3人を10日間招聘し、当館から職員3人を10日間派遣した。
・中国河南博物院から職員2人を15日間招聘し、当館から職員2人を15日間派遣した。
・韓国国立慶州博物館から職員2人を各1か月間招聘し、当館から職員1人を4週間派遣した。

上海博物館からの招聘者、京都国立博物館にて教育プログラムを体験（12月21日）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
海外からの研究者招聘	12人	－	－		9	13	9	17
海外への研究者派遣	20人	－	－		13	20	16	22
国際シンポジウム開催数	―	－	－		－	－	－	―
国際シンポジウム参加者数	―	－	－		－	－	－	―

【年度計画に対する総合評価】
評定：Ｂ

【判定根拠、課題と対応】
　招聘数・派遣数とも、例年並みである。招聘時及び派遣時における文化財調査や研究交流、展示に関する意見交換は着実に実施できている。30年度は新たに、これまで国内の研究者を招聘し開催してきた正倉院学術シンポジウムにおいて、初めて海外の研究者に口頭発表を依頼し、好評を得た。

【中期計画記載事項】
　我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。

【中期計画に対する評価】
評定：Ｂ

【判定根拠、課題と対応】
　学術交流協定に基づく交流は、招聘・派遣とも順調に実施できている。海外の機関との信頼関係構築のため、今後も相互交流を継続していく必要があるが、派遣時・招聘時における文化財調査、研究交流、展示に関する意見交換などの内容を、現状よりもさらに充実させていかなければならない。ICOM京都大会に向けては、国内の準備委員会はもとより、国際委員会にも職員を派遣して意見交換し、準備状況は順調である。

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1430D

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等

【年度計画】
（４館共通）
1)海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。
2)当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。
3)国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。
4)平成31年ICOM（国際博物館会議）京都大会2019に向けた活動を促進する。
（九州国立博物館）
1)学術文化交流協定を締結している海外博物館等との交流を活発に行う。
2)海外の文化財研究者や修理技術者を招へいし、文化財保存修復施設を活用した専門的な国際交流セミナーやワークショップを開催する。
3)ICOM－ASPAC(国際博物館会議アジア太平洋地域連盟)会議を開催する。

担当部課	学芸部博物館科学課 交流課 総務課	事業責任者	課長　木川りか 課長　山野孝 課長　國谷勝伸

【実績・成果】
（4館共通）
1)海外の博物館・美術館等の研究者を21人（うち13人はICOM-ASPAC日本会議出席のため)、招聘した。
2)当機構職員を中国、韓国、スイスなど14か国へ45人を派遣し、研究交流、調査研究等を行った。
3)ICOM-ASPAC日本会議2018を開催した。
4)ICOM-ASPAC日本会議2018において、 ICOM京都大会2019から委員を招聘し、講演の場を設けた。

（九州国立博物館）
1)韓国国立公州博物館及び韓国国立扶餘博物館の研究員各1人を招聘し（6月4日～17日）講演を行った（6月5日)。
2)イギリスのＶ＆Ａ美術館のヴァレリー・ブライス氏、国立民族学博物館の日高真吾氏等を招聘して、博物館等のIPM（総合的有害生物管理）に関するセミナーを実施した（10月24日)。日本全国の美術館、博物館等から多くの関係者の参加を得て、交流を促進した（参加人数：175人)。
3)12月1日・2日にかけてICOM－ASPAC日本会議2018を開催し、12か国から集まった講演者により「文化財が未来へつなぐ-自然災害と博物館-」のテーマに沿って文化財の防災等について議論し、200人の聴衆を集めた。また、災害から文化遺産を保護するために博物館が果たす役割について述べた太宰府宣言も採択した。

Ｖ＆Ａ美術館ブライス氏の講演

【補足事項】
（４館共通）
2)國立故宮博物院（台湾）で開催された「第4世代の博物館：館長学術フォーラム」(7月26日～27日）に出席し、博物館の運営や展示手法等について講演を行った。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
海外からの研究者招聘	21人	－	－	経年変化	35	51	43	9
海外への研究者派遣	45人	－	－		82	77	67	47
国際シンポジウム開催数	1回	－	－		2	1	1	0
国際シンポジウム参加者数	200人	－	－		403	80	173	0

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	海外の博物館・美術館等から研究者を21人招聘し、また、学術文化交流協定館をはじめ、45人を海外へ派遣した。年度計画どおり、事業を実施できた。

【中期計画記載事項】
我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	29年度に引き続き、海外の研究者を招聘し、博物館等のIPMに関するセミナーを実施するなど、中期計画に沿った事業を実施できた。 2019年ICOM京都大会に向けて、ICOM-ASPAC日本会議2018を開催したことにより、国内外の博物館・美術館等とのネットワークを構築できた。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1440A

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表

【年度計画】
（東京国立博物館、京都国立博物館）
1)文化財修理報告書を刊行する。
（東京国立博物館）
1)「東京国立博物館情報アーカイブズ」等を運用し、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る。
2)紀要・図版目録等を刊行する。
3)法隆寺献納宝物特別調査概報を刊行する。
4)研究誌『MUSEUM』を刊行する。(年6回)

担当部課	学芸企画部企画課 学芸企画部博物館情報課	事業責任者	課長　浅見龍介 課長　田良島哲

【実績・成果】
（東京国立博物館、京都国立博物館）
1)『東京国立博物館文化財修理報告XIX』を刊行した。
（東京国立博物館）
1)
・「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」の運用を継続し、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図った。
・特集印刷物リーフレット等5件のPDFファイル版を当館ウェブサイト上に全件公開することによって研究情報の普及を図った。
2)
・『東京国立博物館紀要』54号を刊行した。
・『東京国立博物館図版目録 東洋古鏡篇』を刊行した。
3)『法隆寺献納宝物特別調査概報 XXXIX　文王呂尚・商山四皓図屏風 1』を刊行した。
4)研究誌『MUSEUM』673号～678号を刊行した。
○『東京国立博物館セレクション　高野切と仮名の美』を刊行した。
○特別展図録9件・特集印刷物8件（ﾘｰﾌﾚｯﾄ5件、冊子3件）を編集した。
○東京国立博物館ハンドブック（日本語、中国語、韓国語）の改訂版を制作した。
○出版企画委員会4回、『MUSEUM』『紀要』等編集委員会7回を開催し、博物館出版事業の拡充を図った。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
定期刊行物	16件	16件			16	16	16	16
紀要等	4件	4件		経	4	4	4	4
『MUSEUM』	6件	6件		年	6	6	6	6
『東京国立博物館ニュース』	6件	6件		変	6	6	6	6
特別展の開催回数（海外展除く）	8回	－	－	化	6	6	8	5
テーマ別展示の開催件数	28件	－	－		22	31	33	28
講演会等の開催回数	159回	－	－		127	146	160	199

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 紀要、『MUSEUM』、『博物館ニュース』等の定期刊行物16件を刊行するとともに、文化財修理報告、図版目録等を計画どおり刊行することができた。また、ハンドブック改訂版の制作で新しい情報も提供することができた。さらに、「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」で研究員の調査研究活動等に関する情報を随時公開。加えて、特集印刷物リーフレットのPDFファイル版をウェブサイトに掲載することで、さらなる情報公開に努めた。

【中期計画記載事項】
文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 『東京国立博物館図版目録　東洋古鏡篇』を発行するなど、図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などを順調に刊行するとともに、来館者の要望が高い出版物を刊行し、販売部数を伸ばすことができた。また、ウェブサイトでの公開等、インターネットを活用した調査研究成果の発信を行うことができた。また今後「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」での発信をさらに拡充する。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1440B

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究　④調査研究成果の公表

【年度計画】
（東京国立博物館、京都国立博物館）
1)文化財修理報告書を刊行する。
（京都国立博物館）
1)研究紀要『学叢』を刊行するとともに、学術研究公開の一環として既刊分の概要を順次ウェブサイトで公開する。
2)社寺調査報告書等を刊行する。

担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長　山川曉 連携協力室長　淺湫毅

【実績・成果】
（東京国立博物館、京都国立博物館）
1)『文化財修理報告書16』を刊行した。
（京都国立博物館）
1)『学叢40号』を刊行した。30年度は『学叢30号』のPDFを当館ウェブサイトにて追加公開した。
2)『社寺調査報告29　金剛寺（彫刻編）』を刊行した。
○特別展覧会にて2件、特集展示にて1件、特別企画にて1件の図録を刊行した。（定期刊行物実績値には含まない）

【補足事項】
（京都国立博物館）
・特集展示「美麗を極める中国陶磁」図録は、当館が所蔵する松井コレクションの全容を紹介するものであり、今後の中国陶磁研究の基礎となるものである。
・特別企画「中国近代絵画の巨匠　斉白石」図録は、中国・北京画院所蔵の斉白石作品を紹介するものであるが、当館研究員が編集及び執筆を行っていることに加え、日本語・中国語を併記した意欲的な図書である。

特集展示、特別企画図録

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
定期刊行物	11件	11件			10	11	10	11
紀要等	3件	3件		経	2	3	2	3
『博物館だより』	4件	4件		年	4	4	4	4
『Newsletter』	4件	4件		変	4	4	4	4
特別展の開催回数（海外展除く）	2回	－	－	化	2	3	2	2
テーマ別展示の開催件数	9件	－	－		4	7	9	8
講演会等の開催回数	37回	－	－		36	39	45	32

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 計画的に定期刊行物を発行し、博物館活動の周知に貢献した。 『学叢』には、教育普及活動に関する論文や科学調査機器を用いた分析結果の紹介も含まれている。 特別企画及び特集展示の図録は、最新の研究成果を盛り込むとともに画像を多用し、手にしやすい内容となるよう心掛けた。

【中期計画記載事項】
文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画3年目となり、学叢及び社寺調査報告書を継続的に刊行し、調査研究の成果を適切に公表する体制が組めている。今後も着実に成果を出しながら、WEB媒体を活用して広範囲に情報を発信する手法を探りたい。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1440C

中項目	1．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（4）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究　④調査研究成果の公表

【年度計画】
（奈良国立博物館）
1)研究紀要『鹿園雑集』を刊行するとともに、学術研究公開の一環としてウェブサイトで公開する。
2)東京文化財研究所と共同で実施している絵画作品等の光学的調査について、報告書を刊行する。
3)文化財修理に関する印刷物を刊行する。

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　内藤栄

【実績・成果】
（奈良国立博物館）
1)研究紀要『鹿園雑集』21号の刊行に向けて準備し（31年4月刊行予定）、これまでに刊行された号を当館ウェブサイトに掲載し、研究成果を広く公表した。また、30年度に新たに構築した奈良国立博物館リポジトリを活用し、インターネット上で『鹿園雑集』掲載論文を公開した。
2)東京文化財研究所と共同で実施している絵画作品などの光学的調査に関する報告書『朝護孫子寺蔵　国宝　信貴山縁起絵巻－研究編－』の31年度刊行に向けて調査資料の分析を進め、9月7日に編集会議を開催した。
3)文化財修理の報告『奈良国立博物館　文化財保存修理所　修理報告書』の刊行に向け準備を進めている。

【補足事項】

展覧会図録等

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
定期刊行物	6件	5件	A		5	4	6	6
紀要等	0件	1件	D		1	0	2	2
『博物館だより』	4件	4件	B		4	4	4	4
特別展の開催回数（海外展除く）	3件	－	－		3	3	3	3
テーマ別展示の開催件数	4件	－	－		9	4	4	4
講演会等の開催回数	27回	－	－		27	28	26	26

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
研究紀要『鹿園雑集』21号の31年4月の刊行に向け、編集作業を行った。既刊号の掲載論文については、これまでのウェブサイトだけではなく、30年度に新たに構築した奈良国立博物館リポジトリにおいても公開した。そのことにより、当館の調査研究成果へのアクセス性が向上した。また、東京文化財研究所と共同で行っている光学的調査について、30年度は調査資料の分析及び報告書の編集会議を行い、報告書の31年度内の刊行という目標に向けて、準備を進めることができた。その他定期刊行物についても順調に刊行、公開することができており、目標を達成している。

【中期計画記載事項】
文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
調査・研究の成果は、展覧会に関わる刊行物を中心に発信している。研究紀要『鹿園雑集』を30年度中に刊行することはできなかったが、30年度より既刊号掲載論文のリポジトリでの公開を開始するなど、アクセス性の向上に努めた。また、29年度に引き続き、文化財の修理報告書の刊行に向けて準備を進めている。さらに、30年度は『なら仏像館名品図録』を改訂し、彫刻の新収品や新寄託品のデータを加えて掲載することができた。例年の事業に加え、新たな取り組みも実施でき、中期計画は順調に遂行している。

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1440D

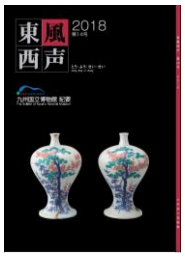
中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④ 調査研究成果の公表

【年度計画】
（九州国立博物館）
1)研究紀要『東風西声』を刊行する。
2)博物館科学に関する印刷物を刊行する。

担当部課	学芸部博物館科学課 学芸部文化財課 学芸部企画課	事業責任者	課長　木川りか 課長　原田あゆみ 課長　白井克也

【実績・成果】
（九州国立博物館）
1)研究紀要『東風西声』第14号を刊行した（部数900部）。
2)『九州国立博物館 文化財修理報告』第1号（発行部数750部）を編集、刊行した。14年度から17年度までの当館経費による修理の報告書をまとめた。
その他、特別展図録・特集展示図録等を8冊刊行した。（うち特別展図録3冊）
・特別展図録
『至上の印象派展　ビュールレ・コレクション』、『オークラコレクション』、『京都・醍醐寺―真言密教の宇宙』。
・特集展示図録等
『国宝　銅鐸絵画』、『全国高等学校　考古名品展』、『坂本コレクション受贈記念　北斎と鍋島、そして』、『平戸松浦家伝来の伊能図』、『響銅でつながる大宰府と東アジア』。
・当館所蔵の端物切本帳についての『端物切本帳画像一覧　九州国立博物館所蔵本』（5巻）を刊行した。

【補足事項】
1)『東風西声』第14号では15本の論文を掲載した。（うち当館職員執筆7本、外部研究者からの寄稿5本、外部研究者との共同執筆3本）
2)『九州国立博物館 文化財修理報告』は、当館所蔵品、当館経費で修理を行った当館以外の国立博物館等所蔵文化財、当館文化財保存修復施設で修理を行った文化財について、修理に関する記録をまとめたものである。第1号では、14年度から17年度までの文化財修理を対象とした。対象文化財の基本的情報、施工会社、修理前後の写真、使用材料、修理で得られた知見等を掲載する。これらの情報を公開することで、次回の修理での参考となるだけでなく、美術史や歴史学等の学術研究、修理事業の普及啓発など、多方面での活用が期待される。31年度以降も順次刊行する計画である。



東風西声第 14 号表紙

九州国立博物館文化財修理報告第 1 号表紙

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
定期刊行物	5件	5件	B	経年変化	5	5	5	5
紀要等	1件	1件	B		1	1	1	1
季刊情報誌『アジアージュ』	4件	4件	B		4	4	4	4
特別展の開催回数（海外展除く）	4回	－	－		5	4	4	3
テーマ別展示の開催件数	9件	－	－		11	8	6	6
講演会等の開催回数	80回	－	－		82	87	77	84

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
研究紀要について、15本の論文を掲載し、「重要文化財「色絵松竹梅文瓶子」に関する一考察」及び「題箋管理システムとその構築に係る検討過程について」等、当館の収蔵品や展示に関する内容を中心とし、内容がより充実したものを刊行することができた。また、文化財修理報告書も予定通り刊行した。その他、特別展図録、特集展示図録においても調査研究の成果を報告した。

【中期計画記載事項】
文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
予定どおりに印刷物を刊行することができた。また、調査研究の結果を文化交流展示やさまざまな機会に応じて公表することができ、中期計画に沿って順調に計画を実施している。研究紀要と修理報告については、インターネットでの公開の可能性を探りつつ、さらに普及活動を進めていくことを計画している。31年度以降もさらに充実した内容で印刷物の刊行を継続していきたい。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1510A

中項目	１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（５）国内外の博物館活動への寄与　①国内外の博物館等への有形文化財の貸与

【年度計画】
（４館共通）
1)国内の博物館等で開催する展覧会等へ収蔵品を貸与する。
2)文化財活用センターが中心となり、収蔵品貸与の促進を図るための取組を行う。
（東京国立博物館・奈良国立博物館）
1)国内の公私立博物館と考古資料の相互貸借を実施する。
（東京国立博物館）
1)長崎歴史文化博物館の平常展示のため、引き続き長期貸与する。
2)海外の美術館・博物館等で開催する展覧会へ貸与する（海外交流展出品作品を含む）。
3)地方公共団体の博物館等に収蔵品を貸与するとともに文化財活用センターと連携し、地方への貸与を促進する。

担当部課	学芸研究部列品管理課 文化財活用センター貸与促進担当	事業責任者	課長　救仁郷秀明

【実績・成果】
（４館共通）
1)国内の博物館等162機関に1,225件の作品を貸与した。
2)文化財活用センターと東京国立博物館は共同で東京国立博物館収蔵品貸与促進事業を実施した。国内の博物館等6機関に61件の作品を貸与した。
（東京国立博物館・奈良国立博物館）
1)松山市考古館、徳島市立考古資料館と協力して、考古資料の相互貸借を実施した。
（東京国立博物館）
1)長崎歴史文化博物館の平常展示のため、年度を越えた長期貸与を実施した。
2)海外の博物館等11機関に130件の作品を貸与した。
3)文化財活用センターと共同で東京国立博物館収蔵品貸与促進事業を実施し、6機関に61件の作品を貸与した。

【補足事項】
（４館共通）
2)大阪歴史博物館「没後130年　なにわ人物誌　堀田龍之助―幕末・近代の大阪に生きた博物学者―」（会期：4月25日～6月18日）に3件、斎宮歴史博物館「斎宮のまわりにも魅力がいっぱい―斎宮で自由研究②―」（会期：7月14日～9月2日）に1件、彦根城博物館「長曽祢虎徹―新刀随一の匠―」（会期：10月26日～11月25日）に5件、大分県立美術館「国宝、日本の美をめぐる―東京国立博物館名品展」（会期：11月2日～11月25日）に44件、堺市博物館「堺・経典をめぐる文化史」（会期：11月17日～12月16日）に2件、板橋区立郷土資料館「再発見！いたばしの遺跡―いたばしの旧石器時代・縄文時代―」（会期：31年1月19日～3月24日）に6件を貸与した。
（東京国立博物館・奈良国立博物館）
1)当館では、考古資料相互貸借事業として、松山市考古館に43件、徳島市立考古資料館に26件貸与し、松山市考古館から42件、徳島市立考古資料館から18件借用した。借用品により、特集「徳島・松山の考古学」（会期：11月6日～12月25日）を開催した。
（東京国立博物館）
2）ロシア・プーシキン美術館「江戸美術名品展」に78件、連合王国・ウェールズ国立博物館「今・昔―日本のアート&デザイン」に18件、パリ日本文化会館「縄文―日本における美の誕生」展に14件を貸与したことをはじめ、釜山市広域市立博物館に6件、アメリカ・メトロポリタン美術館に5件、大韓民国・国立中央博物館に2件、上海博物館に2件、パリ市立プティ・パレ美術館に1件、同・チェルヌスキ美術館に1件、スイス・リートベルグ美術館に1件を貸与した。
3)当館収蔵品貸与促進事業として、大分県立美術館「国宝、日本の美をめぐる―東京国立博物館名品展」に44件を貸与したことをはじめ、板橋区立郷土資料館「再発見！いたばしの遺跡―いたばしの旧石器時代・縄文時代―」に6件、彦根城博物館「長曽祢虎徹―新刀随一の匠―」に5件、大阪歴史博物館「没後130年　なにわ人物誌　堀田龍之助―幕末・近代の大阪に生きた博物学者―」に3件、堺市博物館に2件、斎宮歴史博物館に1件を貸与した。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
貸与件数	1,355件	－	－		1,130	991	946	914
うち国内の貸与件数	1,225件	－	－		1,059	909	750	783
うち国外の貸与件数	130件	－	－		71	82	196	131

【年度計画に対する総合評価】
評定：Ｓ

【判定根拠、課題と対応】
国内外の博物館等173機関に1,355件の作品を貸与し、貸与件数は近年の実績を大きく上回った。29年度は東京国立博物館単独で試行として実施した貸与促進事業を、30年度7月の文化財活用センター発足に伴い、センターと当館の共同で取り組み、公募による実施施設の選定を行った。事業発足2年目にもかかわらず、多くの申請があり、29年度を大幅に上回る件数の作品を貸与することができた。

【中期計画記載事項】
収蔵品については、その保管・展示状況、コンディション、貸出先の施設の状況等を総合的に勘案しつつ、国内外の博物館等の要請に応じて、展示等の充実に寄与するため、貸与を実施する。

【中期計画に対する評価】
評定：Ｓ

【判定根拠、課題と対応】
内外の博物館等の要請に応じて、過去5年で最も多くの作品貸与を実施することができた。貸与件数は近年減少傾向にあったが、30年度は著しく増加した。また、29年度の貸与促進事業の実施対象施設が東北地方(福島県、秋田県)の施設2か所にとどまったのに対し、30年度の実施対象施設は、東京都、滋賀県、三重県、大阪府、大分県と、地域的に大きく広がり、国内の博物館等の展示の充実に寄与することができた。引き続き、31年度以降も内外の有意義な展覧会に貸与を実施し、国内外の博物館活動に対して重要な寄与を果たしていく予定である。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1510B

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（５）国内外の博物館活動への寄与　①国内外の博物館等への有形文化財の貸与

【年度計画】
（４館共通）
1)国内の博物館等で開催する展覧会等へ収蔵品を貸与する。

担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長　羽田聡

【実績・成果】
（４館共通）
1)国内外あわせ80機関（機関は延べ件数）に対し、計289件の収蔵品・寄託品貸与を行った。
　収蔵品の貸与件数：136件
　寄託品の貸与件数：153件
　　計：289件

【補足事項】
1)収蔵品の貸与に際しては、貸出先施設の保管体制、警備体制、虫害対策等を総合的に判断しながら先方の要望に応じた。
　具体的な例として、国内では東京国立博物館の特別展「顔真卿　王羲之を超えた名筆」展に「国宝　金剛般若経開題残巻」（当館蔵）を含む国宝3件、重文3件の収蔵品・寄託品貸与を行った。
　また、海外では国際交流基金等主催の海外展に、「国宝　風神雷神図屏風」（建仁寺蔵）等をはじめ、日本文化を代表する文化財を貸与した。また、ワシントン条約による輸出規制がある中で、作品のコンディションを十分に考慮したうえ、象牙軸の交換を行う等の対策を講じ積極的に要望に応じた。

「国宝　金剛般若経開題残巻」（部分）
特別展「顔真卿　王羲之を超えた名筆」展（東京国立博物館）貸与品

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
貸与件数	289件	－	－		582	303	367	349
うち国内の貸与件数	274件	－	－		570	293	365	336
うち国外の貸与件数	15件	－	－		12	10	2	13

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	収蔵品の保存状況と貸出先のコンディションを勘案しながら、国宝・重要文化財を含む収蔵品・寄託品を国内の博物館に中心に貸与を実施した。海外への貸与についても十分に審議を重ねた上で日本文化を代表する海外でも著名な収蔵品の貸与を行った。31年度も引き続き、先方の要請に可能な範囲で応じていく予定である。

【中期計画記載事項】
　収蔵品については、その保管・展示状況、コンディション、貸出先の施設の状況等を総合的に勘案しつつ、国内外の博物館等の要請に応じて、展示等の充実に寄与するため、貸与を実施する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	収蔵品の保管・展示状況と貸出先のコンディションを勘案しながら先方の要請に適切に応じた。新規貸与先については、貸与施設の展示・保管環境等を十分に考慮したうえで可能な範囲で要請に応じた。海外についても、十分に審議を重ねた上で収蔵品の貸与を行い、日本文化の発信に寄与した。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1510C

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（５）国内外の博物館活動への寄与　①国内外の博物館等への有形文化財の貸与

【年度計画】
（４館共通）
1)国内の博物館等で開催する展覧会等へ収蔵品を貸与する。
（東京国立博物館・奈良国立博物館）
1)国内の公私立博物館と考古資料の相互貸借を実施する。

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　内藤栄

【実績・成果】
（４館共通）
1)収蔵品と寄託品を国内合わせて35の機関に計134件の貸出を行った。
2)文化財活用センターに当館の列品貸与窓口、貸借規定等の情報を提供し、スムーズな収蔵品貸与が促進されるよう準備を行った。
（東京国立博物館・奈良国立博物館）
1)大分県立歴史博物館、群馬県立歴史博物館、市立五條文化博物館の計 3 館との間で考古資料の相互貸借事業を実施した。

【補足事項】
（４館共通）
1) 収蔵品・寄託品の貸与
・貸与先35機関の内訳
　国立4件、公立16件、私立11件、海外4件
・貸与作品134件の内訳（国内109件、国外25件）
　国宝6件（館蔵品2件、寄託品4件）
　重要文化財32件（館蔵品15件、寄託品17件）
　その他96件（館蔵品67件、寄託品29件）
　貸与した館蔵品84件の内訳
　（絵画25件、彫刻15件、書跡2件、工芸9件、考古33件）
　貸与した寄託品50件の内訳
　（絵画24件、彫刻14件、書跡3件、工芸1件、考古8件）

貸与品：国宝 伝教大師筆尺牘　弘仁四年十一月廿五日　一幅　館蔵品

（東京国立博物館・奈良国立博物館）
相互貸借事業における貸与・借用品数
・大分県立歴史博物館
　館蔵品11件（大分県内出土の塼仏、瓦、経筒等）が特集展示「おおいたの考古遺産里帰り展－奈良国立博物館所蔵資料－」で展示された
　借用品9件（大分県内出土の瓦、土器、金銅仏など）を当館の名品展考古部門の展示で活用
・群馬県立歴史博物館
　館蔵品6件（白山古墳出土の刀、鏃、銅碗、和同開珎）が第6回テーマ展「塚廻りの埴輪」にて展示された
　借用品7件（群馬県内出土の埴輪、石製模造品）を当館の名品展考古部門の展示で活用
・市立五條文化博物館
　館蔵品1件（五條猫塚古墳出土品計22点）が夏季特別展「五條猫塚古墳 発掘60年」にて展示された
　借用品5件（縄文土器2点、弥生土器7点）を当館の名品展考古部門の展示で活用

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
貸与件数	134件	－	－	経年	149	145	165	210
うち国内の貸与件数	109件	－	－	変化	149	137	161	205
うち国外の貸与件数	25件	－	－		0	8	4	5

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
30年度も作品の貸与実績は良好であり、国内外の展覧会に大きく貢献することができた。また、考古資料の相互貸借事業を継続して実施し、各地域で生まれた文化財を「里帰り」させることができた。

【中期計画記載事項】
収蔵品については、その保管・展示状況、コンディション、貸出先の施設の状況等を総合的に勘案しつつ、国内外の博物館等の要請に応じて、展示等の充実に寄与するため、貸与を実施する。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
中期計画に基づき、作品のコンディションや相手博物館のニーズ等を勘案して慎重かつ柔軟な対応を行い、国内外の展覧会の成功と充実に貢献することができた。特に30年度は例年に比べ海外への貸与件数が多く、国際的に協力することができたといえる。貸与の件数も相応であり、中期計画の進展は順調である。

【書式Ａ】　施設名　九州国立博物館　処理番号　1510D

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（５）国内外の博物館活動への寄与　①国内外の博物館等への有形文化財の貸与

【年度計画】
（４館共通）
1)国内の博物館等で開催する展覧会等へ収蔵品を貸与する。

担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長　原田あゆみ

【実績・成果】
（４館共通）
1)国内33機関に収蔵品および寄託品を貸与した。
（機関数は延べ数。東京国立博物館からの長期管理換品を含む。）

【補足事項】
（九州国立博物館）
国内の貸与先機関は、下記の通りである。
・国および国立機関
　文化庁※、東京国立博物館※、京都国立博物館※、奈良国立博物館

・地方公共団体及び公立博物館・美術館
（福岡県内）
　九州歴史資料館※、甘木市歴史資料館、伊都国歴史博物館、小郡市埋蔵文化財センター、求菩提資料館、北九州市立小倉城庭園、福岡市博物館、大野城心のふるさと館、太宰府市文化ふれあい館
（福岡県外）
　唐津市近代図書館、愛知県陶磁美術館、青森県立美術館、熊本県立美術館、島根県立美術館、神奈川県立金沢文庫、大分市美術館、都城島津邸、大阪府立近つ飛鳥博物館、山口県立美術館、岡山県立美術館、福島県立美術館

サントリー美術館
「琉球　美の宝庫」展出品
花鳥図巻

・私立博物館・美術館及び私立団体
　公益財団法人古都大宰府保存協会大宰府展示館、サントリー美術館、三井記念美術館、MOA美術館

（※印は29年度から30年度にかけて貸与）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
貸与件数	80件	－	－		101	90	83	71
うち国内の貸与件数	80件	－	－		89	88	72	67
うち国外の貸与件数	0件	－	－		12	2	11	4

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	公私立の博物館等の要請に対し、適切に貸与を実施した。

【中期計画記載事項】
　収蔵品については、その保管・展示状況、コンディション、貸出先の施設の状況等を総合的に勘案しつつ、国内外の博物館等の要請に応じて、展示等の充実に寄与するため、貸与を実施する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	要請先施設の状況を総合的に勘案して、適切に貸与を実施し、公私立博物館等の展示の充実に寄与することができた。31年度以降も、国内外の博物館の展覧会への貸与を積極的に協力する。

【書式Ａ】　施設名 国立文化財機構　処理番号 1520H-1

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（５）②国内外の博物館等への援助・助言等

【年度計画】
（４館共通）
2)博物館・美術館および寺社等における展示・収蔵の安全対策に関する助言、研修会等を通した啓発を行い、文化財等防災に貢献する。

担当部課	東京国立博物館学芸研究部 京都国立博物館学芸部 文化財防災ネットワーク推進本部 本部事務局文化財防災ネットワーク推進室	事業責任者	部長　田沢裕賀 部長　朝賀浩 室長　岡田健

【実績・成果】※［ ］内は、実施担当の施設・部署を表す。
（４館共通）
2)
本事業は、博物館・美術館および寺社等における有効な安全対策を体系的に把握し、その成果をもとに国内外の博物館等への啓発を行うことを目指しており、30年度はそのための基礎情報の収集に着手し、多くの成果をあげることができた。
a. 東京国立博物館の海外展及び総合文化展における展示業務を中心として、博物館・美術館における展示・収蔵の安全対策に関する調査を行った。［東京国立博物館］
・支持具に関する調査（4件）
　東洋考古・東洋陶磁作品の支持具製作に伴う採寸調査、支持具改善に向けた埴輪重量計測等（東京国立博物館）
・展示設備の製品及び技術に関する調査（12件）
　展示ケース製造工場見学・検品立会い（ドイツ・フランクフルト）、「親と子のギャラリー トーハク×びじゅチューン！ なりきり日本美術館」使用音響機器確認（東京国立博物館）、「縄文」展展示ケース協議（フランス・パリ日本文化会館）、新設博物館における設備の安全対策調査（国立アイヌ民族博物館設立準備室）等
・展示作業および手法に関する調査（3件）
　「縄文」展展示作品輸送時の振動計測（フランス・パリ日本文化会館）等
・収蔵空間における安全対策の調査（3件）
　博物館施設内の収蔵庫を調査し、基本的な安全対策の仕様を分類・整理（東京国立博物館）
・被災事例に関する情報収集（2件）
　北海道胆振東部地震による博物館被害と、その後の対応等に関する調査（北海道博物館）等
・博物館・美術館における展示・収蔵の安全対策に関する協議会（第1回）（31年2月26日）
　会場：東京国立博物館、対象：展示・収蔵設備メーカー、美術品梱包輸送会社等、参加者数：27人
b. 社寺等における収蔵文化財の安全対策に関する調査を行った。［京都国立博物館］
・免震台の適切な活用と転倒防止策等の調査研究のため、三次元計測用スキャナーにより立体作品の重心位置を算出し、京都市消防局の協力を得て起震車を使用し、振動計測とともにデータ解析・シミュレーションを行った（実施回数：2回）。
・社寺における文化財の安全対策に関する聞き取り調査を行った（9月、於：清浄華院）。

【補足事項】

支持具改善に向けた埴輪採寸
担当：東京国立博物館

起震車を使用した振動計測実験
担当：京都国立博物館

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
援助・助言等の件数	2件	－	－		-	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 情報収集の方法等、試行錯誤の段階であり、専門機関との連携構築を含め、年度計画の一年目として研究の基盤を作ることができた。

【中期計画記載事項】
国内外の博物館等からの要請に応じて、専門的・技術的な援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的・文化財等防災ネットワークの形成等に努める。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 30 年度は、基礎情報の収集に着手した段階であり、関係専門機関等との協議会を一回開催するにとどまった。国内外の博物館等に対する専門的・技術的な援助・助言を行い、社寺等の収蔵環境における実践的な対策の提案に至るために、31 年度も引き続き調査研究を進める。

【書式A】　施設名 文化財活用センター　処理番号 1520H-2

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（5）②国内外の博物館等への援助・助言等

【年度計画】
（文化財活用センター・４館共通）
1)公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言を行う。

担当部課	本部文化財活用センター	事業責任者	副センター長　小林牧

【実績・成果】
（文化財活用センター・４館共通）
1)
イ　公私立博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言　20件
・文化庁、地方公共団体、公私立博物館等の文化財関係事業に関する助言・協力　17件
　文化庁、内閣府、独立行政法人日本芸術文化振興会、一般社団法人文化財保存修復学会、日本文化財科学会、全国都道府県在京文教担当者連絡協議会他
・文化財の展示・展覧会の運営に関する援助・助言　1件
　大分県立美術館
・講演・セミナー・審査等での協力　1件
　独立行政法人日本芸術文化振興会
・博物館等の運営・事業・環境に関する援助・助言　1件
　三菱一号館美術館

ロ　平成31年度東京国立博物館収蔵品（キリシタン関係遺品）貸与促進事業実施対象館募集による新規応募館に対する文化財管理、保存体制についての評価を実施し、具体的な保存環境調査に着手した（1件）。

【補足事項】

全国都道府県在京文教担当者連絡協議会の研修事業への協力（10月11日）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
援助・助言等の件数	20件	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 全国の公私立博物館・美術館等からの要請に応じて、専門的な援助・助言を行った。また、収蔵品貸与促進事業の新規応募館の資料保存や防災、防犯体制について書類による評価を行い、審査に際して見解を表明した。31 年度は、引き続きこうした援助・助言に取り組むとともに、収蔵品貸与促進事業の貸与予定館の環境調査と必要に応じた現地調査、改善協力を行う。

【中期計画記載事項】
国内外の博物館等からの要請に応じて、専門的・技術的な援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的・文化財等防災ネットワークの形成等に努める。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 文化財活用センターの初年度の活動として、公私立博物館・美術館等に対する各種の援助・助言や東京国立博物館収蔵品貸与促進事業応募館の環境審査等を適切に行い、順調に事業を進めることができた。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1520A

中項目	１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（５）②国内外の博物館等への援助・助言等

【年度計画】
（４館共通）
1)公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言を行う。
（東京国立博物館）
1)新規貸与館に対する環境調査は、東京文化財研究所と協力して指導助言を行う。

担当部課	学芸研究部 総務部	事業責任者	部長　田沢裕賀 部長　山下登

【実績・成果】
1)公私立博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対し、131件の援助・助言を行った。
・文化庁、地方公共団体、公私立博物館等の文化財関係事業に関する助言・協力　40件
　文化庁、板橋区美術館、サントリー美術館、京都市美術館、国立アイヌ博物館他
・文化財の展示・展覧会の運営に関する援助・助言　11件
　韓国国立現代美術館、独立行政法人日本芸術文化振興会、ルーヴル・アブダビ、
　アフガニスタンバーミヤン考古学研究所他
・文化財の調査・保存・修理に関する助言・指導　23件
　東京藝術大学大学院、宮内庁三の丸尚蔵館、法隆寺、山種美術館他
・講演・セミナー・審査等での協力　37件
　文化庁、國立故宮博物院（台北)、ロシアプーシキン美術館、下関市考古博物館、松山市考古館、
　東北大学他
・博物館等の運営・事業・環境に関する援助・助言　20件
　故宮博物院（北京)、ルーブル美術館、佐賀城本丸歴史館、江戸東京博物館、三菱一号館美術館、
　茨城県陶芸美術館他

（東京国立博物館）
1)新規貸与館に対する環境調査を実施し、指導助言を行った。
　環境調査を実施した新規貸与館は、17館。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
援助・助言等の件数	131件	－	－		119	139	120	138

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 国内・海外問わず公私立博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対し、131 件の援助・助言を行った。また、新規貸与館に対する環境調査を 17 館に対して行った。いずれも内容・質ともに適切に実施し、年度計画を順調に達成することができた。

【中期計画記載事項】
国内外の博物館等からの要請に応じて、専門的・技術的な援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的・文化財等防災ネットワークの形成等に努める。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画期間の 3 年目として、国内外の博物館等からの要請に応じて適切に専門的・技術的な援助・助言を行い、他の博物館との情報交換や関係性の強化に努めた。31 年度以降も引き続き、可能な限り国内外の博物館等からの要請に積極的に応じていきたい。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1520B

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（5）国内外の博物館活動への寄与　②国内外の博物館等への援助・助言等

【年度計画】
（4館共通）
1)公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言を行う。

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　朝賀浩

【実績・成果】
1)
・文化庁、地方公共団体、公私立博物館等の文化財関係事業に関する助言・協力（各種委員会等の委員としての助言を含む）(59件)
・文化財の展示・展覧会の運営に関する援助・助言（9件）
・文化財の調査・保存・修理に関する助言・指導（13件）
・講演・セミナー・審査等での協力（58件）
・博物館等の運営・事業・環境に関する援助・助言（1件）

【補足事項】
・文化庁、地方公共団体、公私立博物館等の文化財関係事業に関する助言・協力
文化庁買取委員など官公庁の各種委員会への助言・協力
京都府、大阪府、滋賀県、三重県などの地方公共団体の文化財保護審議会委員等として助言
祇園山傘連合会、法隆寺金堂壁画保存活用委員会、日本文化財科学会などの各種団体への助言
ICOM京都大会に関連する各種委員会へ委員として協力

・文化財の展示・展覧会の運営に関する援助・助言
石川県立美術館、福岡市博物館などの国内の博物館・美術館への展示指導
文化庁、国際交流基金などの海外展への援助

・文化財の調査・保存・修理に関する助言・指導
野崎家塩業歴史館、鳥取県埋蔵文化財研究センターなどへの調査指導
文化庁、元興寺文化財研究所などへの調査協力

・講演・セミナー・審査等での協力
文化庁など官公庁主催のセミナー及び研修の講師や京都大学などの大学での非常勤講師として協力
「第53回京の冬の旅」広報及び特別講座講師としての協力

・博物館等の運営・事業・環境に関する援助・助言
九州国立博物館で開催されたICOM-ASPAC開催のための援助、助言。

「第53回京の冬の旅」ポスター

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年	26	27	28	29
援助・助言等の件数	140件	－	－	変化	29	65	112	168

【年度計画に対する総合評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
国内外の様々な機関の要請に応じて、様々な職員がそれぞれの専門性に応じて140件の援助、助言、指導及び協力を行った。特別展や展示の多言語化など業務も多忙ななか、様々な協力要請を本務に支障のない範囲で受け、我が国の文化行政や博物館行政に協力している。なかんずく「第53回京の冬の旅」への佐々木館長の協力は全国展開されたことから、当館の知名度向上にも大きく貢献した。

【中期計画記載事項】
国内外の博物館等からの要請に応じて、専門的・技術的な援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的・文化財等防災ネットワークの形成等に努める。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
中期計画に基づき、国内外の博物館等からの要請に応じて、専門的・技術的な援助・助言を行っている。また、これらの協力を通じて博物館等の関係者とのネットワークも形成に努めた。特に31年度開催のICOM京都大会に向けて委員会や会議などでも協力を進めた。31年度以降も引き続き各機関からの要請に基づき、可能な限り協力していく。

【書式A】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1520C

中項目	1．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（5）国内外の博物館活動への寄与　②国内外の博物館等への援助・助言等

【年度計画】
（4館共通）
1)公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言を行う。
2)博物館・美術館および寺社等における展示・収蔵の安全対策に関する助言・研修会等を通した啓発を行い、文化財等防災に貢献する。

担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長　野尻忠

【実績・成果】
（4館共通）
1)公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言は、71件あった。内訳は以下の通り。
・文化庁、地方公共団体、公私立博物館等の文化財関係事業に関する助言・協力（各種委員会等の委員としての助言を含む）　20件
・文化財の展示・展覧会の運営に関する援助・助言　4件
・文化財の調査・保存・修理に関する助言・指導　19件
・講演・セミナー・審査等での協力　17件
・博物館等の運営・事業・環境に関する援助・助言　11件
2)31年1月18日に、京都国立博物館・奈良文化財研究所と共催で第2回中部近畿文化財防災連絡会を主催し、行政の文化財担当者や博物館・美術館の防災担当者らと意見交換を行うことで、文化財防災の意識向上に役立てた。

【補足事項】
1)
・文化財の展示・展覧会の運営に関する援助・助言（4件）には、東北歴史博物館で開催された特別展に学術協力し、現地での展示作業に従事した件や、クリーブランド美術館（アメリカ）で開催予定の特別展に協力した件を含む。
・文化財の調査・保存・修理に関する助言・指導（19件）には、東大寺（奈良）や仁和寺（京都）の所蔵典籍・古文書の調査に協力し助言した件を含む。

徳島県教委による文化財調査への協力（9/13）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
援助・助言等の件数	71 件	－	－		58	58	62	72

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 東北歴史博物館での「東大寺と東北」展への学術協力、クリーブランド美術館での特別展への協力など、国内外の博物館・美術館への援助・指導・助言を幅広く実施できた。それ以外の地方公共団体等への助言件数は例年並であり、年度計画は達成されたと評価できる。また、文化財等防災に関して、当館で実施した文化財防災連絡会には、多くの文化財担当者・防災担当者が参加し、意見交換による意識の向上及び人的ネットワークの形成に貢献できた。

【中期計画記載事項】
国内外の博物館等からの要請に応じて、専門的・技術的な援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的・文化財等防災ネットワークの形成等に努める。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 国内・国外、あるいは公立・私立の別や規模の大小を問わず、数多くの機関への援助・助言を実施できている。そのほか寺社等から文化財調査や保存について助言を求められることがあり、積極的に対応している。こうした活動は情報交換の推進、人的ネットワーク形成の観点から評価でき、今後さらに件数の増加に努める。

【書式Ａ】　施設名　九州国立博物館　処理番号　1520D

中項目	１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信
事業名	（５）国内外の博物館活動への寄与　②国内外の博物館等への援助・助言等

【年度計画】
（４館共通）
1)公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等の援助・助言を行う。
2)博物館・美術館および寺社等における展示・収蔵の安全対策に関する助言・研修会等を通した啓発を行い、文化財等防災に貢献する。
（九州国立博物館）
1)地域の自治体と連携し、公私立博物館・美術館等職員のための古文書保存に関する専門講座を開催する。
2)公私立博物館・美術館等職員のためのＩＰＭ（総合的有害生物管理）に関する専門講座を開催する。

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　小泉惠英

【実績・成果】
（4館共通）
1)以下のとおり、公私立の博物館・美術館等に対する援助・助言を行い、年度計画どおり事業を実施できた。
・文化庁、地方公共団体、公私立博物館等の文化財関係事業に関する助言・協力（各種委員会等の委員としての助言を含む（35件）
・文化財の展示・展覧会の運営に関する援助・助言（4件）
・文化財の調査・保存・修理に関する助言・指導（13件）
・講演・セミナー・審査等での協力（15件）
・博物館等の運営・事業・環境に関する援助・助言（5件）
2)文化財防災ネットワーク推進事業ワークショップを、熊本県教育庁文化課の協力を得て、奈良文化財研究所と共同で開催した。
（九州国立博物館）
1)古文書保存基礎講座を開催した。(31年1月25日、26日)
2)ＩＰＭセミナー、ＩＰＭ研修及び館内向けＩＰＭ研修を実施した。
　ＩＰＭセミナーは、30年度はイギリスのＶ＆Ａ美術館からＩＰＭに関わる研究者を招聘し、国内の博物館等からも最新の知見について報告してもらう専門講座として開催した。
　その他、ICOM-ASPAC日本会議2018を12月1日、2日に開催した。自然災害により被災した文化財の保護に博物館が果たす役割について、各国専門家による事例報告とパネルディスカッションを行い、活発な意見が交わされた。その成果は、日本会議2018「太宰府宣言」としてウェブサイトで公表した。

【補足事項】
・5月23日に、館内向けのＩＰＭ研修を実施した（会場：当館、受講人数：21人)。
・10月24日にＩＰＭセミナーを開催した（会場：当館、参加人数：175人)。
・10月25日～26日にＩＰＭ研修を実施した（会場：当館、受講人数：34人)。
・7月12日に文化財防災ネットワーク推進事業ワークショップを開催した（会場：奈良文化財研究所、参加人数：4人)。
・31年1月25・26日に福岡県教育委員会、筑紫野市歴史博物館と連携し、古文書保存基礎講座を開催した（当館、筑紫野市歴史博物館、参加人数：22人)。

10 月 26 日 IPM 研修の様子

7 月 12 日実施の文化財防災ネットワーク推進事業ワークショップの様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
援助・助言等の件数	72件	－	－		57	67	87	105

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 関西以西の唯一の国立博物館として、九州地域だけでなく日本全国からの多くの問い合わせに対応した。また、文化財修理やＩＰＭなど当館の特色である事業の普及啓発について、連携機関等との協議をふまえて内容を吟味し、より良い研修を実施することができた。

【中期計画記載事項】
国内外の博物館等からの要請に応じて、専門的・技術的な援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的・文化財等防災ネットワークの形成等に努める。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に従い、当館研究員の専門性を活かし国内外の博物館等からの要請に応じて指導、助言を行うとともに、新しい内容に更新しつつ研修会を開催するなど、地域の核としての博物館の役割を果たしている。毎年新しい内容を取り入れるなど、今後のニーズも見据えてこれからもセミナー、研修等を実施していきたい。

文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施

【調査研究の評価軸及び評価指標等】

（１）新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究

①有形文化財（美術工芸品，建造物）及び伝統的建造物群に関する調査研究　　【自己点検評価：**A**】

本項について 30 年度は対象となる 6 件の調査研究の年度評価は「A」4 件、「B」2 件であり、美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に大きく寄与したことから、全体としてAと評価した。

評価軸：我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に寄与しているか。	
成果	本評価軸に対し 30 年度は対象となる 5 件の調査研究について、下記の成果により「A」と評価した。 美術工芸品については、近・現代美術に関する調査研究において、とくに女性画家や美人画家への関心の高まりに合わせ、栗原玉葉、武村耕靄といった、これまで殆ど等閑視されてきた女性画家について、新出の作品や未公刊の日記等の資料を調査し、研究所内研究会や研究誌『美術研究』をはじめ、所外の展覧会やシンポジウムでも研究成果を発表、その画業を丹念に追いながら明治から大正にかけての女性画家の経済的基盤を明らかにするなど、30 年度中に大きな進展を得ることができた。また、文化財に関する調査研究成果及び研究情報の共有に関する総合的研究においては、アメリカのゲッティ研究所が運営するゲッティ・リサーチ・ポータルに 29 年度よりアジア諸国から初めて情報を提供し、2 年目となる 30 年度は『日本美術年鑑』、『美術研究』、『保存科学』など東京文化財研究所刊行物の過去 83 年にわたる刊行物の全文データ 546 件を公開し、これまでほぼ日本国内のみに限られていた研究成果の公開発信を世界的に増強した。国内外の関係機関と連携しながらオープン・アクセスのコンテンツを増やすことで、日本の文化財研究の専門性の高さ、ひいては日本の文化への理解促進に貢献した。またこの成果について、当初の予定にはなかった、国際美術図書館会議（於アムステルダム国立美術館）にて口頭発表し、ゲッティ研究所をはじめ国内外の関連機関からも高く評価され、さらなる公開コンテンツの増大と研究推進を発展的な軌道にのせることができた。 建造物については、法隆寺古材調査のとりまとめにより古代建築の技法を明らかにするとともに、岡山県津山市の伝統的建造物群調査によりその価値を明らかにして保存方策を含む報告書を作成した。また、大阪府大阪市の綿業会館の調査により文化財保護法の改正に対応した保存活用計画を作成した。 以上のことから、30 年度は、我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に高く寄与することができた。
評価軸：有形文化財の保存修復等に寄与しているか。	
成果	本評価軸に対し 30 年度は対象となる 1 件の調査研究について、下記の成果により「B」と評価した。 薬師寺所蔵の歴史資料について長年の調査研究の成果として目録を公刊して全貌を示すとともに、春日大社関係の大宮家文書や興福寺関係資料をはじめとする諸社寺の歴史資料及び書跡資料の調査研究を進め、それぞれの内容を明らかにすることができた。 以上のことから、30 年度も有形文化財の保存修復等に寄与することができた。

②無形文化財，無形民俗文化財等に関する調査研究　　【自己点検評価：**A**】

本項について 30 年度は対象となる 3 件の調査研究の年度評価は「A」2 件、「B」1 件で、無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に大きく寄与したことから、全体としてAと評価した。

評価軸：無形文化財，無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に寄与しているか。	
成果	本評価軸に対し 30 年度は対象となる 3 件の調査研究について、下記の成果により「A」と評価した。 無形文化財の保存・継承に関する調査研究においては、演奏機会の少ない重要無形文化財の宮薗節について、29 年度より宮薗千碌氏（重要無形文化財・各個認定）等への綿密な聞き取り調査等を実施し、これを進

	展させ、30 年度に記録作成を開始することができた。当初は古典曲の記録を念頭に置いていたが、聞き取り調査を進める過程で、「新曲」に分類されるレパートリーの演奏機会が特に少ないとわかったため、30 年度は古典曲に加えて新曲も記録作成（各 1 曲）し、今後の進展が期待できる調査研究を実施しえた。記録作成に係る事前事後の聞き取り調査は今後も積み重ね、その概要を取りまとめて 31 年度公開すべく継続的に取り組む予定である。また、30 年度の楽器製作・修理技術調査の概要は「楽器を中心とした文化財保存技術調査報告 2」（『無形文化遺産研究報告』第 13 号）で発表し、ウェブサイト上での公開も進めているが、調査により「楽器製作に特化した道具の製作技術」及び「楽器素材としての竹材が直面する課題」が明らかになったため、調査対象を拡大し、目的を特化した手作りヤスリの製作者及び楽器に使用する竹の伐採から販売を手掛ける製造者への聞き取り調査を追加実施し、併せて前掲報告で取り上げた。31 年度は後者の楽器素材としての竹材研究を、楽器製作者や竹材製造者に演奏家、音響学の専門化等を加えて開始する予定であり、楽器製作・修理技術に関する研究の更なる進展に向けての礎を築くことができた。 無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究においては、現在全国で問題となっている継承の危機をテーマに 31 年度の「無形民俗文化財研究協議会」を開催し、想定を超える 183 名（29 年度は 132 名）の参加を得た。その成果は報告書として刊行した。さらに継承の危機と活用に関わる課題を伝承者から直接聞く機会として、「祭ネットワーク」を 2 回（昨年は 1 回）開催し、祭礼・芸能関係者とのネットワークを強化した。 以上のことから、30 年度は、無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に高く寄与することができた。

③記念物，文化的景観，埋蔵文化財に関する調査研究　　【自己点検評価：**A**】

本項について 30 年度は対象となる 17 件の調査研究の年度評価は「A」7 件、「B」10 件であるが、平城宮跡・藤原宮跡の継続的な発掘調査において、古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与する大きな成果をあげていることや、水中文化遺産の調査法の確立に大きく寄与する発展性のある成果をあげたことなどから、全体としてAと評価した。

評価軸：記念物の保存・活用に寄与しているか。	
成果	本評価軸に対し 30 年度は、対象となる 2 件の調査研究についていずれも「B」評価であり、下記の成果により全体としてBと評価した。 遺跡整備・活用研究集会を 30 年度は「史跡等の保存活用計画」をテーマとして開催し、文化財保護法の改正により法定となった保存活用計画の作成に当たっての技術的な課題等を共有することができた。また、29 年度の研究集会の成果をとりまとめた報告書「史跡等を活かした地域づくり・観光振興」を刊行し、成果の活用を促進した。 以上のことから、30 年度も記念物の保存・活用に寄与することができた。
評価軸：古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与しているか。	
成果	本評価軸に対し 30 年度は、対象となる 10 件の調査研究について、「A」評価 5 件、「B」評価 5 件であり、下記の成果により全体としてAと評価した。 平城宮東院地区の発掘調査では、国内でも初となる 8 世紀の調理用の地上式炉跡とみられる遺構が検出され、東院の厨施設の実態を解明できた。平城宮東区朝堂院東門の発掘調査では、奈良時代後半の東門の正確な規模の確定と奈良時代後半とは規模・構造の大きく異なる奈良時代前半の様相も明らかにすることができ、さらに東区朝堂院全体の規模を確定できた。 藤原宮大極殿院地区の発掘調査では、大極殿院北面回廊を検出し、北門の存在を確定するとともに、その構造が南門・東門とも異なっていたことを明らかにすることができた。 いずれも古代日本都城の解明等にかかる多大な調査研究の成果を得ることができた。

	以上のことから、30 年度も古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与することができた。
評価軸：文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展に寄与しているか。	
成果	本評価軸に対し 30 年度は対象となる 1 件の調査研究について、下記の成果により「B」と評価した。 文化的景観と考古学との関係をテーマとした文化的景観に関する研究集会を開催して、文化的景観の概念及び調査・計画等の体系化を進展させることができた。また、京都市等の現地調査・研究では保存計画や整備・活用計画の策定について検討を深めることができた。 以上のことから、30 年度も文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展に寄与することができた。
評価軸：埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与しているか。	
成果	本評価軸に対し 30 年度は、対象となる 3 件の調査研究についていずれも「B」評価であり、下記の成果により全体としてBと評価した。 古代官衙、集落遺跡等に関する研究集会では、従来注目されていなかった官衙・集落出土の大型貯蔵具に焦点を絞り、各地域・遺跡での出土様相や使用形態などの特徴を抽出する作業を通じて、大型貯蔵具の特性及び遺構・遺跡の歴史的意義づけを論じることができ、古代国家形成の分析や古代都城研究に資する研究成果を得た。 古代瓦に関する研究集会では、従来の軒瓦のみを対象とした研究ではなく瓦の製作技術そのものに注目することにより、瓦生産を総体的に検討し８世紀における中央と地方との関係の具体相を把握することができ、瓦を通じて古代社会の実相にさらに迫ることができた。 以上のことから、30 年度も埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与することができた。
評価軸：水中文化遺産に関する調査研究に寄与しているか。	
成果	本評価軸に対し 30 年度は、対象となる 1 件の調査研究について下記の成果をあげたことにより、「A」と評価した。 発展途上にある日本における水中遺跡の調査研究において、市町村教育委員会においても遺跡の状況を把握することが可能な、安価で簡便な調査法の確立に見通し得ることができた。また、鷹島海底遺跡の元寇船の水中での現地保存に迅速に対応し、発展性の高い埋め戻し法を開発することができた。 以上のことから、30 年度は水中文化遺産に関する調査研究に大きく寄与することができた。

モニタリング指標

		第 3 期中期期間平均	28 年度	29 年度	30 年度	31 年度	32 年度
論文等数	東文研	14.8	13	12	14		
	奈文研	71.4	37	61	56		
	計	86.2	50	73	70		
報告書等の刊行数	東文研	1.4	3	3	9		
	奈文研	25.2	16	15	13		
	計	26.6	19	18	23		

（２）科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

①文化財の調査手法に関する研究開発　【自己点検評価：**A**】

本項について 30 年度は対象となる 4 件の調査研究の年度評価は「A」3 件、「B」1 件であり、科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に高く寄与することができたことから、全体としてAと評価した。

評価軸：科学技術を的確に応用し，文化財の調査手法の正確性，効率性等の向上に寄与しているか。	
成果	本評価軸に対し 30 年度は、対象となる 4 件の調査研究について下記の成果をあげたことにより、「A」と評価した。 デジタル画像の形成方法の研究開発において、媒体が脆弱で劣化が進み、資料情報の保全に緊急を要するガラス乾板からの画像取得については、これまでの光学的調査研究の実績を踏まえ、東京文化財研究所所蔵のみならず鎌倉芳太郎撮影ガラス乾板（重要文化財）など、30 年度は外部機関が所蔵するガラス乾板を対象に、緊急性に呼応した画像取得を実施することができた。画像取得にあたっては、一般的に用いられるスキャナではなく、撮影時に膜面に触れる恐れがなくガラス乾板を傷めにくいカメラを用い、カメラメーカーとも共同して、ガラス乾板からの画像取得という目的に特化したソフトウェアやカメラ等の機材のカスタマイズを行った。さらに、ガラス乾板から取得したデジタルネガの明暗反転にとどまらず、被写体や調査目的に応じた明度の調整を行うなど、東京文化財研究所独自の調査手法による鮮明な画像を取得できた。このことは、今後、鎌倉芳太郎撮影ガラス乾板の被写体でもある、失われたり状態が著しく変化した文化財の撮影当時の状況の詳細な観察や、色彩の再現といった調査研究への応用も期待できる成果である。 埋蔵文化財の探査・計測方法の研究開発においては、地方公共団体等で簡便かつ廉価に導入可能な方法を開発しており、研究発表や講習会開催などによる成果の普及を行うことで、これまで取り組んできた遺跡・遺物の詳細なデータを従来の数十分の一の時間と労力で計測・記録する手法を普及段階に進めた。 年輪年代学研究においては、出土遺物、建造物、美術工芸品等の多岐にわたる木造文化財を対象とした年輪年代調査・研究を実施しており、従来は年代測定を目的に活用されてきた年輪年代学的手法を木簡の同一材推定に活用し、接合する削屑の事例を見出すなど、研究手法の応用を進めた。 以上のことから、30 年度は、科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に高く寄与することができた。

②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究　【自己点検評価：**B**】

本項について 30 年度は対象となる 12 件の調査研究の年度評価は「A」4 件、「B」8 件であり、計画通り、科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与できたことから、全体としてBと評価した。

評価軸：科学技術を的確に応用し，文化財の保存・修復の質的向上に寄与しているか。	
成果	本評価軸に対し 30 年度は、対象となる 12 件の調査研究について下記の成果をあげたことにより、「B」と評価した。 文化財の生物劣化の現象解明と対策に関する研究においては、歴史的木造建造物における環境低負荷型の殺虫処置方法である湿度制御温風殺虫処理について、日光山中禅寺鐘楼で国内 2 例目となる現地処理を実施した。また、その際に東京文化財研究所が開発した殺虫処理効果判定システムを導入した。 文化財の材質・構造・状態調査に関する研究においては、煉瓦造建造物に析出している塩類の可搬型 X 線回折分析装置を用いたその場分析の結果と、周辺の温湿度環境・レンガの含水量との比較により、劣化と保存環境に関する検討を行った結果を学会で発表した。 文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究においては、油汚損の文化財クリーニングへの適用などを目的に、ゲルを使用した場合の現場適用方法を検討した。汚れの除去効果に加え、作業環境の評価も行い、安全な有機溶媒の使用方法を調査した。

	キトラ古墳壁画保存管理施設の運用・管理、高松塚古墳及びキトラ古墳壁画の調査及ぶ保存・活用を効率よく実施するとともに、被災装飾古墳の調査についても随時、臨機応変に対応した。また、国営飛鳥歴史公園のキトラ古墳地区の運用が開始された後、キトラ古墳の整備に関する報告書を作成した。 以上のことから、30 年度は、科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与することができた。

モニタリング指標

		第 3 期中期期間平均	28 年度	29 年度	30 年度	31 年度	32 年度
論文等数	東文研	16.4	18	17	16		
	奈文研	26.2	34	50	38		
	計	42.6	52	67	58		
報告書等の刊行数	東文研	5.0	5	5	5		
	奈文研	2.6	1	3	1		
	計	7.6	6	8	7		

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2111Eア

中期計画の項目	2-(1)-①-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-①-1)-ア	①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究 1)我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究 ア　国内外の文化財に関する様々な情報について分析し、それらの情報を文化財保護に対して活用するための調査研究を実施する。また、イギリス・セインズベリー日本芸術研究所と研究会を開催する。その他機関との連携も図りつつ、文化財情報の公開・活用のための、より望ましい手法等の研究を行う。
プロジェクト名称	文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○江村知子（文化財アーカイブズ研究室長）、橘川英規（研究員）、安永拓世（研究員）、米沢玲（研究員）、増田政史（研究補佐員）	

【年度実績と成果】

○調査研究の成果データの国際標準化に向けての調整・公開

・29 年度に引き続き、当研究所刊行の論文を JAIRO（国立情報学研究所）を通じて公開する作業を進め、『美術研究』、『無形文化遺産研究報告』、『保存科学』、各種報告書を新たに追加し、合計 7 タイトル 3,516 件の論文のフルテキストを公開した。

・世界最大の図書館サービスである OCLC（Online Computer Library Center）のセントラル・インデックスに、2014（平成 26）・2015（平成 27）の展覧会カタログ所載記事・論文のデータ約 6,000 件を「東京文化財研究所美術文献目録」として搭載した。

○国内外の関連機関との研究協議

・国立歴史民俗博物館で開催された国際シンポジウム「アート・歴史分野における国際的な標準語彙の活用 ―Getty Vocabulary Program の活動と日本」にて口頭発表。（6 月 16 日）

・日本資料専門家欧州協会（EAJRS）リトアニア大会に参加し、口頭発表及び研究協議。（9 月 12～15 日）

・アムステルダム国立美術館で開催された国際美術図書館会議にて口頭発表。（10 月 4～5 日）。

・アート・ドキュメンテーション学会にて、国立西洋美術館との共同研究成果を発表。（10 月 13 日）

・アメリカのゲッティ・リサーチ・ポータルに、当研究所刊行物のデータ 546 件を追加、公開し、研究協議を行った。

・イギリス・セインズベリー日本藝術研究所と日本美術及び同研究に関する英語文献・記事情報の採録に関する運用面での協議を行い、講演を行った。（11 月 13～15 日）

日本資料専門家欧州協会リトアニア大会の様子

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、国内はもとより海外からもオープン・アクセスによる利用拡大をめざし、国内外の関係機関と連携しながら公開コンテンツ数をさらに増大し、その成果を国内外で発表して反響を得た。②独創性においては、ゲッティ研究所のポータルサイトを通じて当研究所刊行物の公開を行った点に高い独創性を示し得た。③発展性においては、国際的な日本美術の情報発信が軌道に乗り、さらなる発展が見込まれた。④効率性においては、国内外の諸機関との連携強化により国内外の利用者の情報取得・収集についての効率性が一段と高まった。⑤継続性においては、1930 年の開所以来の蓄積・実績に立脚しつつ、我が国における文化財情報の外部発信についてイニシアチブを取るとともに、その発信を安定・継続的に行える環境を整えた。よって、所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A

【目標値】	**【実績値・参考値】** 調査・研究成果の公表環境の整備　1 件（ア） 美術に関する情報公開　2 件（イ、ウ） 学会・研究会等発表　5 件（エ、オ）	定量評価 ―

ア　JAIRO への論文の追加（62 件）（5 月）
イ　ゲッティ・リサーチ・ポータルへのデジタルコンテンツ搭載(546 件)（10 月）
ウ　OCLC への「東京文化財研究所美術文献目録」情報提供（約 6,000 件）（11 月、31 年 2 月）
エ　橘川英規「明治期～昭和期刊行博覧会・展覧会資料のオープン・アクセス化事業」(9 月 12 日、日本資料専門家欧州協会（EAJRS）リトアニア大会、ヴィータウタス・マグヌス大学）ほか 3 件
オ　安永拓世「与謝蕪村筆「鳶・鴉図」に見るトリプルイメージ」(11 月 15 日、セインズベリー日本藝術研究所)

中期計画評価	A

中期計画記載事項	我が国において古代から近現代までに制作された絵画・彫刻等を中心とする有形文化財、及びそれらに関連する国内外の文化財について、その文化財の制作背景等とその後の評価の変遷、今日に至るまでの保護等に関する調査研究、文献・画像資料及び文化財情報に関する調査研究とそれらの収集・整理を行い、調査研究成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	今中期計画に基づき 30 年度は、所期の計画を上回り、当研究所の文化財に関する調査・研究の成果・データを国際標準に適合させ、国内外の関係機関との連携を強化し、文化財情報の公開と活用を推進し、国際性・新規性・卓越性の高い実績を上げることができた。31 年度以降も国内外で活発に成果公表を行い、継続的に専門性の高い研究資料コンテンツの公開・活用を推進する。

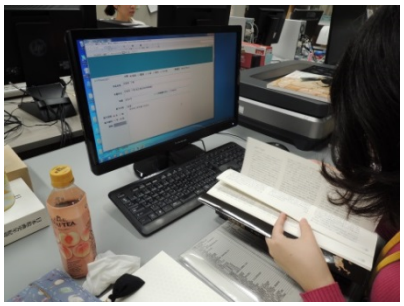
【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2111Eイ

中期計画の項目	2-(1)-①-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-①-1)-イ	①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究 1)我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究 イ　近世以前の日本を含む東アジア地域における美術作品を対象として、基礎的な調査研究及び光学調査を進め、研究の基盤となる資料情報の充実を図る。併せて、これにかかる国内外の研究交流を推進する。
プロジェクト名称	日本東洋美術史の資料学的研究	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○小林達朗（日本東洋美術史研究室長）、小野真由美（主任研究員）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）	

【年度実績と成果】

○研究基盤となる資料整備

・美術史研究のためのコンテンツ（日本美術史年紀資料集成）を作成するため平成11年以降の展覧会図録から年紀のある作品の資料を順次収集して、入力し、随時ウェブサイトにて公開し、公開されたものは、30年度新規に400件に達した。



年紀資料の入力作業

○研究交流の推進

本プロジェクトにかかる研究会を次のとおり行った。

(1) 小野真由美（文化財情報資料部）「土佐光起著『本朝画法大伝』考―「画具製法并染法極秘伝」を端緒として―」(6月)

(2)「ワット・ラーチャプラディットの日本製扉部材と伏彩色螺鈿に関する研究会」二神葉子外10名発表（7月）

(3) 京都絵美（東京藝術大学)「絹本著色技法の史的展開について―仁和寺所蔵孔雀明王像をめぐる一考察」(11月)

(4) 山本聡美（共立女子大学)「病苦図像の源流―静嘉堂文庫蔵「妙法蓮華経変相図」について」(12月)

(5) 相澤正彦（成城大学文芸学部)「静嘉堂文庫美術館本「春日曼荼羅」と高階画系」(12月)

(6) 米沢玲（文化財情報資料部)「二幅の不動明王画像 」(31年2月)

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性及び②独創性においては、最新の研究成果を研究会にて発表、討議を行うことができた。中でも、上記（2）は外部からも多数の発表者、40人以上の聴講者を迎えて、多角的な研究成果の発表を行い、また、上記（4)、(5）の研究会も外部から20人近い出席者を迎えて、これまでほとんど注目されてこなかった作品の美術史上の意義について認識を共有することができた。③発展性においては、29年度に引き続き、東京国立博物館と共同で館蔵の平安仏画の光学調査を行い、今まで知られることのなかった技法について情報を認識することができ、これを報告書として刊行することができた。④継続性においては、年紀資料集成については、29年度に引き続き新たに400件を追加しウェブサイト上のデータベースで公開することができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	A	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】**	定量評価
	論文等6件（下記ア～カ)、年紀資料集成追加件数400件、研究発表6件（上述「研究交流の推進」の通り)、刊行物1件（キ）	―

ア小野真由美・恵美千鶴子「研究資料『銅御蔵御掛物御歌書極代付之帳』の翻刻と外題」(『美術研究』425号、7月)、イ小野真由美・恵美千鶴子「研究資料『銅御蔵御掛物御歌書極代付之帳』の翻刻」(『美術研究』425号、7月)、ウ増田政史「中宮寺文殊菩薩立像について―戒律と春日信仰」(『美術研究』426号、12月)、エ稲葉（藤村）真以「韓国画壇の変遷」(『美術研究』426号、12月)、オ津田徹英「研究資料　滋賀・浄厳院像　木造釈迦如来立像」(『美術研究』426号、12月)、カ勝盛典子「伏彩色螺鈿再考」(『美術研究』427号、31年3月)、キ『東京国立博物館所蔵　国宝平安仏画　光学調査報告書』(東京国立博物館・東京文化財研究所、31年3月)

中期計画評価	B

中期計画記載事項	我が国において古代から近現代までに制作された絵画・彫刻等を中心とする有形文化財、及びそれらに関連する国内外の文化財について、その文化財の制作背景等とその後の評価の変遷、今日に至るまでの保護等に関する調査研究、文献・画像資料及び文化財情報に関する調査研究とそれらの収集・整理を行い、調査研究成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	今中期計画3年目にあたり、年紀資料集成の作成、研究会の開催を順調に実施することができた。29年度から着手した東京国立博物館との共同研究においては、主要平安仏画について撮影を行い、これまでに得られた知見を報告書として刊行した。31年度以降もさらに調査を継続的に進めていく予定である。

【書式Ｃ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2111Eｳ

中期計画の項目	2-(1)-①-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-①-1)-ｳ	①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究 1)我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究 ウ　近現代美術を対象として日本における展開を軸としつつ、その方向付けに大きく関わった欧米等の動向も視野に入れて分析・考察する。併せて、作家や関係者及び美術館等の諸機関が所蔵する資料の調査を行い、得られた情報を近・現代美術研究の基礎資料として整備する。その事業のひとつとして日本美術家人名データベースの作成を進める。
プロジェクト名称	近・現代美術に関する調査研究と資料集成	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、橘川英規（研究員）、城野誠治（専門職員）、野城今日子（アソシエイトフェロー）、山梨絵美子（副所長（兼）部長）、三上豊、丸川雄三、田中淳、齋藤達也、田所泰（以上、客員研究員）	

【年度実績と成果】

○黒田記念館の鑑賞の手引きとなる『黒田清輝　黒田記念館所蔵品より』を編集・刊行した。
○当研究所が所蔵する黒田清輝宛書簡について、黒田家・樺山家・旧藩主島津家・杉家・橋口家・篠塚家から差し出された書簡の目録と一部の翻刻を『美術研究』426 号・427 号に掲載した。
○明治期に活躍した女性日本画家、武村耕靄についての部内研究会を開催（4 月 24 日）、その成果を『美術研究』427 号に掲載した。
○明治～大正期に活躍した女性日本画家、栗原玉葉についての論考を『美術史』185 冊（10 月）に掲載、またその研究成果を長崎歴史文化博物館で開催された展覧会「新章ジャパンビューティ」に反映させ、同展に際して催されたシンポジウム「栗原玉葉をめぐる物語」に田所・塩谷が講師として参加した（31 年 1 月 13 日）。
○カリフォルニア大学ロサンゼルス校東アジア図書館に開設した美術評論家のヨシダ・ヨシエ文庫についての部内研究会を開催した（5 月 23 日）。
○久米美術館との共同研究として、既刊『久米桂一郎日記』中のフランス語部分の和訳に着手した。
○第 52 回オープンレクチャーで、藤田嗣治・常玉・陳澄波の描いた裸婦についての研究発表を行った（10 月 27 日）。

ヨシダ・ヨシエ文庫についての部内研究会の様子

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、栗原玉葉をはじめとする女性美人画家への関心の高まりにあわせて成果を発表した点が高く評価される。②独創性においては、藤田嗣治・常玉・陳澄波という国籍の異なる東アジアの画家をヌードという視点でその画業を捉え直した点が高く評価される。③発展性においては、これまでほとんど等閑視されていた武村耕靄の画業を再検証し、明治の女性画家の実態を明らかにした点が高く評価される。④効率性においては、既刊『久米桂一郎日記』中のフランス語を和訳し、日本の研究者の便を図った点が評価される。⑤継続性においては、25 年度以来続けている黒田清輝宛書簡の翻刻を、30 年度も精力的に進めた点が高く評価される。よって、所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	B	A

【目標値】	**【実績値・参考値】**	定量評価
	刊行物　1 件（ア）、論文等　1 件（イ）、学会・研究発表　1 件（ウ）	―

ア塩谷純『黒田清輝　黒田記念館所蔵品より』（印象社、31 年 1 月）、イ田所泰「武村耕靄と明治期の女性日本画家に関する研究」（『美術研究』427 号、31 年 3 月）、ウ橘川英規「カリフォルニア大学ロサンゼルス校におけるアーカイブズの収受・保存・提供―ヨシダ・ヨシエ文庫を例に」（文化財情報資料部研究会、5 月 23 日）

中期計画評価	A

中期計画記載事項	我が国において古代から近現代までに制作された絵画・彫刻等を中心とする有形文化財、及びそれらに関連する国内外の文化財について、その文化財の制作背景等とその後の評価の変遷、今日に至るまでの保護等に関する調査研究、文献・画像資料及び文化財情報に関する調査研究とそれらの収集・整理を行い、調査研究成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	30 年度は、特に栗原玉葉と武村耕靄という、知られざる日本近代の女性画家の研究において所期の計画を上回る大きな進展が見られた。部内研究会に始まり、『美術研究』での発表、さらに展覧会という形での成果の結実は、理想的な展開といえるだろう。久米美術館との共同研究においても久米桂一郎日記の仏文翻訳に着手、31 年度以降は黒田清輝日記のウェブサイトとリンクさせた形で、そのウェブサイト公開を進めていきたい。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2111Eェ

中期計画の項目	2-(1)-①-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-①-1)-ェ	①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究 1)我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究 エ　美術作品を中心とする有形文化財についてのより深い理解を得ることを目的として、南蛮漆器等を対象として、その表現・技術・材料について自然科学や伝統技術、また歴史学等の隣接諸分野と連携した多角的調査研究を実施するとともに、新たな研究手法の検討・開発に取り組む。
プロジェクト名称	美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○小林公治(広領域研究室長)、山梨絵美子(副所長（兼）部長)、二神葉子(文化財情報研究室長)、江村知子(文化財アーカイブズ研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林達朗(日本東洋美術史研究室長)	

【年度実績と成果】

○螺鈿及び漆器類に関わる調査研究等

・4 月 26 日・7 月 31 日、日本民藝館において朝鮮製螺鈿漆器の調査を共同研究者らと同館杉山学芸部長立会いで行った。

・5 月 8 日、川越市立博物館にて、三芳野神社縁起絵巻調査及び同館岡田学芸員との意見交換を実施した。

・5 月 10～12 日、韓国国立中央博物館からの依頼により渡航し、同館所蔵高麗螺鈿香箱の復元に関する助言を行った。

・6 月 28 日、東京大学総合研究資料館小石川分館にて関野貞資料の調査を行った。

・7 月 2～3 日、韓国国立中央博物館保存科学部朴研究員の来日調査について助力した。

・8 月 2、23 日、個人蔵琉球製箔絵籐盆 2 枚について、研究協議及び当研究所保存科学研究センターとの共同調査を実施した。また 11 月 1、3 日及び 31 年 2 月 26 日、沖縄で関連作品調査を行った。

・31 年 3 月 4～5 日、南蛮文化館及び堺市博物館ほかにおいて漆器などの調査を実施した。

上海国際学術会議発表風

○研究成果公開

・7 月 7～8 日、日本文化財科学会（奈良女子大学）において、奈良国立博物館ほかとの共同研究成果である「南蛮文化館所蔵南蛮漆器類の X 線 CT 調査」のポスター発表を行った。

・10 月 2 日に開催した第 5 回文化財情報資料部研究会において、金沢大学神谷嘉美氏より「平蒔絵技法で用いられる金属材料の形状について―南蛮漆器作例を中心に―」と題した発表を実施した。

・11 月 15～16 日、上海博物館で開催された中国古代漆器国際学術研討会において「中国における漆地螺鈿の成立と発展―螺鈿史上の古代・中世とその画期」と題して発表した。

○研究データの整備と公開

・インターネットで公開している『美術研究』データについて、未公開であった英文要旨のテキストデータを公開し、英語による研究情報検索の便宜を促進した。また、英文要旨の無い 155 号以前を対象とした検索用キーワードの抽出作業を開始した。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、29 年度実施した南蛮漆器の CT スキャニング調査によって得られた新知見を早々に学会での発表によって公開することができた。②独創性においては、韓国国立中央博物館からの依頼を受けた相手方の当該作品復元計画に対し、もう一人の出席者と共に日本側として考えるありうべき復元案について説明を行うことができた。③発展性においては、29 年度文化財情報資料部研究会での発表についてさらに内容を拡充させた論文として公刊できた。④効率性においては、少ない人員及び時間の中でデータベースの内容充実化を行った。⑤継続性においては、これまでにウェブサイト公開されていたレポジトリの不足を補い、海外からの広い利用促進を念頭に置いた検索便宜を図ることを試みた。上記によって全体として、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	B	B	B	A

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
・	論文等　2 件（エ）、学会・研究発表　3 件（ア、イ、ウ）	―

ア、小林公治ほか「南蛮文化館所蔵南蛮漆器類の X 線 CT 調査」(『日本文化財科学会第 35 回大会研究発表要旨集』、7 月 6 日)、イ、神谷嘉美「平蒔絵技法で用いられる金属材料の形状について―南蛮漆器作例を中心に―」(文化財情報資料部研究会、10 月 2 日)、ウ、小林公治「中国における漆地螺鈿の成立と発展―螺鈿史上の古代・中世とその画期」(附中国語要旨)(上海博物館、『中国古代漆器国際学術研討会 論文稿』、11 月)、エ、高田知仁「螺鈿と王権―近世近代タイ装飾美術の含意」(『美術研究』426 号、12 月)

中期計画評価	B
中期計画記載事項	美術作品を中心とする有形文化財についてのより深い理解を得ることを目的として、南蛮漆器等を対象として、その表現・技術・材料について自然科学や伝統技術、また歴史学等の隣接諸分野と連携した多角的調査研究を実施するとともに、新たな研究手法の検討・開発に取り組む。
評定理由及び今後の見通し	30 年度は、各地での漆器及び螺鈿器の調査研究を実施したほか、国内学会での成果発表や海外国際会議における発表と論文による国内国外間の研究結果のずれに対する問題提起、また公開データベースの実質的な利用促進に向けた取り組みなど意欲的に進めることができた。31 年度以降も同様の方向で取り組みたい。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2112F

中期計画の項目	2-(1)-①-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-①-2)	①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究 2)建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究 法隆寺古材調査を中心とする古代建築の調査研究を推進する。また、近世・近代を中心とした我が国の文化財建造物の保存・修復・活用に関する基礎データの収集、未指定建造物の調査、歴史的建造物の今後の保存と復原に資するための調査・研究を行い、纏まったものより順次公表を行う。伝統的建造物群及びその保存・活用に関する調査研究を推進し、保存を行っている各自治体等への協力を行う。
プロジェクト名称	歴史的建造物および伝統的建造物群の保存・修復・活用の実践的研究	
文化遺産部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○島田敏男（建造物研究室長）、箱崎和久（都城発掘調査部遺構研究室長）ほか6名	

【年度実績と成果】

・法隆寺古材調査のとりまとめ　従来より行ってきた法隆寺古材調査について、報告書にまとめるべく図面の作成と執筆・編集作業に入った。
・奈良県近世後期社寺建築調査　奈良県がおこなっている県内社寺の悉皆調査について、調査協力をおこない、4市町村全社寺の建築台帳を作成した。
・津山市城西地区（岡山県津山市）伝統的建造物群調査　当該地区について、その価値をあきらかにし、伝統的建造物群としての保存方策を提案し、報告書を作成した。
・重要文化財綿業会館（大阪府大阪市）保存活用計画調査　当該建物の保存活用計画の策定のための基礎調査をおこなうとともに保存活用計画を作成した。
・旧中村家住宅（長野県塩尻市）調査　旧奈良井宿内のかつての櫛屋の建造物の調査をおこない、報告書を作成した。
・湯浅町（和歌山県）重要建造物調査　湯浅町内の醸造にかかる伝統的建造物の調査をおこない、31年度に報告を作成予定。
・ベトナムゲアン省カインソン集落調査　昭和女子大学に協力し、ベトナム国内の伝統集落の調査に協力し、報告書の執筆を分担した。

旧中村家住宅調査風景

年度計画評価	A

【評定理由】

下記観点から評価をおこなった。①適時性については、地方の文化財の掘り起こしを推進するとともに、改正文化財保護法に対応した保存活用計画の作成をおこない、時代の要請に応えた。②独創性については、悉皆調査、個別建物調査、伝統的建造物群調査、保存活用計画策定と当研究の調査研究対象の広範さおよびその質は他の追隋を許さない。③発展性については、特に、悉皆調査よび保存活用計画策定の成果は、他地域、他文化財でも汎用可能なものとして発展性が期待できる。④効率性については、限られた人員のなかで充分に成果を出している。⑤継続性については、今後とも継続可能である。よって、①から④についてはA評価、⑤についてはB評価とした。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	B

【目標値】	**【実績値・参考値】** ・論文等数：3件（ア、イ、ウ） ・調査回（日）数　奈良県55日、津山市4回（9日）、綿業会館4日 旧中村家2回（5日）、湯浅町3回（7日）、ベトナム1回（5日）	定量評価 ―

ア福嶋啓人・前川歩「近世宿場町における地割の継承と変化」『奈良文化財研究所紀要2018』（30年6月）
イ島田敏男「津山市城西伝統的建造物調査」『奈良文化財研究所紀要2018』（30年6月）
ウ島田敏男（執筆分担）『昭和女子大学紀要VOL.25 ベトナム社会主義共和国　ゲアン省　カインソン集落調査報告書』30年11月

中期計画評価	B

中期計画記載事項	建造物に関しては、古代建築の保存に資するため、法隆寺古材調査を中心とする古代建築調査を行って古代建築及びその修理過程等を明らかにする。また、近世・近代の建造物等の調査研究を行い、成果を公開する。伝統的建造物群については、その保存と活用に資するため、重要伝統的建造物群保存地区を目指している地区の調査を行い、成果を公開するとともに、各地の歴史的建造物の保存に協力する。
評定理由及び今後の見通し	古代建築の技法に関する研究は、中期計画に対し順調に進捗している。当研究所が蓄積した過去の研究成果を元にした当研究所ならではの研究である。法隆寺古材調査は膨大な作業量があるが地道に研究成果をまとめて公表して行く。受託各事業は自治体や所有者の求めに応じて行っているが、いずれも文化財建造物や伝統的建造物群の保存に大きく資するものである。31年度以降は、これについても力を注ぎたい。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2113F

中期計画の項目	(1)-1-3)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-①-3)	①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究 3)歴史資料・書跡資料に関する調査研究　近畿を中心とする古寺社や旧家等が所蔵してきた歴史資料・書跡資料等に関して、原本調査、記録作成を悉皆的に実施するとともに、薬師寺・仁和寺等の資料について公表に向けて整理研究を行う。
プロジェクト名称	近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究	
文化遺産部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○吉川聡（歴史研究室長）、山田徹（同志社大学助教・客員研究員）、綾村宏（京都女子大学教授・客員研究員）	

【年度実績と成果】

・薬師寺所蔵の歴史資料について、東京大学史料編纂所と連携研究を実施した。それに基づき、第 1 函～第 11 函の調書原本校正・目録原稿作成・目録校正作業を行い、目録を公刊した(ア)。また第 26 函の写真撮影を行った。
・仁和寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、御経蔵第 83 函～第 87 函聖教の調書原本校正・写真撮影を実施した。また、御経蔵第 150 函中世文書について、釈文を詳細に検討し、原本校正を行った。
・唐招提寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、宝蔵の聖教第 17 函の調書作成、念仏会函・掛け軸の整理作業と、聖教第 7 函～第 8 函の写真撮影を行った。
・奈良市教育委員会と連携研究の協定を結び、氷室神社宮司の大宮家所蔵文書の函文書の調書作成・写真撮影を行った。
・三仏寺所蔵の歴史資料を調査し、近世文書第 7 函の調書作成・経典の整理作業等を行った。
・法華寺所蔵の近世法華寺村絵図の調査・写真撮影を行った。
・当麻寺所蔵の書跡資料の調査を実施した。
・興福寺所蔵の書跡資料について検討し、その成果を公表した(ウ)。
・金峯山寺関係の個人蔵の歴史資料について、第 1 函～第 2 函の調書作成等を行った。
・東大寺所蔵の歴史資料の調査を、科学研究費補助金も充当して実施し、新修東大寺文書聖教第 87 函～91 函の調査データ入力、第 86 函～88 函・98 函等の写真撮影を実施した。
・興福寺関係の個人蔵歴史資料につき、科学研究費補助金も充当して調査を行い、江戸時代の当主の肖像画や古文書の写真撮影・調査データ入力作業等を行った(写真)。また、中世文書の写しを翻刻・公表した(イ)。
・調査協力の依頼を受けて、石山寺文化財調査・東大寺貴重書調査・文化庁による仁和寺聖教調査に協力した。

古文書調査

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、特に薬師寺調査においては、重要史料の目録を公刊して研究者が利用可能な状態にしたものであり、適時性が高い。②独創性においては、興福寺関係の個人蔵資料からは、中世～近世の興福寺で承仕という実務組織が重要な役割を果たしていたことを明らかにしつつあり、独創性がある。③発展性においては、目録の公刊は研究者が今後史料を利用するための基礎となるものであり、発展性がある。④効率性においては、薬師寺・大宮家においては他機関と連携研究を結んで効率的に調査を進めている。⑤継続性においては、膨大な資料を長年にわたり中断なく調査し、全容解明に努めており、継続性に優れている。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	B	A	B	A

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・刊行物数：1 件（ア）　・論文等数：2 件（イ、ウ） ・調査資料点数：薬師寺：写真撮影 200 点　仁和寺：写真撮影 396 点　唐招提寺：写真撮影 108 点　大宮家：調書作成 101 点・写真撮影 36 点　三仏寺：調書作成 173 点・写真撮影 71 点　金峯山寺関係個人蔵資料：調書作成 20 点　東大寺：調査データ入力 1036 点・写真撮影 654 点　興福寺関係個人蔵資料：調査データ入力 420 点・写真撮影 453 点	定量評価 —

ア奈良文化財研究所編『薬師寺文書目録』第 1 巻
イ吉川聡「興福寺承仕関係文書から」『奈良文化財研究所紀要 2018』(30 年 6 月)
ウ綾村宏「興福寺蔵『明本抄』奥書の検討」『奈良文化財研究所紀要 2018』(30 年 6 月)

中期計画評価	B

中期計画記載事項	我が国の歴史、文化の解明及び理解の促進等を図るため、薬師寺・仁和寺等の近畿地方を中心とした寺社の歴史資料・書跡資料等に関する調査研究を行う。
評定理由及び今後の見通し	古寺社に伝来した資料を近畿を中心に調査し、その成果を目録等の形で公表することを目指している。中期計画 3 年目の 30 年度は、薬師寺の目録を公刊した。目標を一つ達成できたと言えよう。今後は、仁和寺の資料が現在公表準備中なので、その作業を進める必要がある。またそれ以外の資料も、公表準備に入れるように着実に調査を進めていく必要がある。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2121E

中期計画の項目	2-(1)-②-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-②-1)	②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査及び研究 1)重要無形文化財の保存・活用に関する調査研究等 無形文化財等の伝承実態に関する基礎的な調査研究及び資料の収集を行うとともに、現状記録を要する対象を精査し、記録作成を実施する。記録作成に関しては、これまで継続してきた講談等の演芸に加え、邦楽分野についても範囲を広げ実施する。 調査研究等に基づく成果の一部については、一般向けの公開講座等を通して公表する。また、これまでに研究所で収集・保管してきた記録・資料の整理を行い、必要に応じて媒体転換等の措置を講ずる。
プロジェクト名称	無形文化財の保存・継承に関する調査研究及び無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化	
無形文化遺産部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○飯島満（部長）、前原恵美（無形文化財研究室長）、石村智（音声映像記録研究室長）、菊池理予（主任研究員）ほか	

【年度実績と成果】

○無形文化財に関する調査研究
・芸能分野：古典芸能（歌舞伎・文楽・三味線音楽ほか）に関する調査研究
・日本伝統楽器製作を中心とした文化財保存技術（雅楽管楽器、能管、地歌駒・撥、琵琶、箏、太棹三味線ほか）及び道具・材料（ヤスリ、竹ほか）の調査研究
・工芸分野：絹糸製作技術調査（絹織製作研究所、岡谷蚕糸博物館）、靭皮（じんぴ）繊維に関する調査（葛布、芭蕉布）
○現状記録を要する無形文化遺産の記録作成
・平家：実演記録を作成（菊央雄司氏ほかによる伝承曲・復元曲各 1 曲）
・宮薗節：実演記録を作成（宮薗千碌師ほかによる古典曲・新曲各 1 曲）
・諸芸：講談及び落語（正本芝居噺）の実演記録を作成（一龍斎貞水師・8 席・神田松鯉師 6 席・林家正雀師 2 席）
○研究調査に基づく成果の公表
・「日本の芸能を支える技Ⅰ琵琶　石田克佳」、「同Ⅱ三味線象牙駒　大河内正信」（以上 7 月 31 日）、「同Ⅲ雅楽管楽器　山田全一」、「同Ⅳ太棹三味線　井坂重男」（31 年 3 月 31 日）発行
・第 12 回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座「伝統の音を支える技」を開催（東京文化財研究所、8 月 14 日、共催：東京邦楽器商工業協同組合）及び同講座に関する報告書の刊行（31 年 3 月 31 日）
・江戸文化講座「現代に生きる江戸のファッション」（浮世絵太田記念美術館、12 月 1、8、15 日）
・「楽器を中心とした文化財保存技術調査報告 2」（『無形文化遺産研究報告』第 13 号、31 年 3 月 31 日）
○無形文化遺産に関わるアナログ資料のデジタル化
・音声資料：オープンリールテープに関して、民謡テープ（約 80 時間）のデジタル化を実施

年度計画評価	A

【評定理由】

下記の観点から評価を行った。①適時性については、文化財の保存技術が注目される中、技術保持者の高齢化が問題となっている伝統楽器製作技術、及び道具や材料の調査研究を行った点を高く評価した。②独創性及び⑤継続性については、講談の長編語り物の継続的な記録作成は当研究所独自の事業であり、さらに平家の実演記録作成を継続したほか、演奏機会の少ない重要無形文化財の宮薗節についても記録作成を開始したことを高く評価した。③発展性については、織の技術及び絹織物を関連付けた点、これまで識別困難であった靭皮繊維について現地調査を通じて特徴の把握に努めている点、伝統楽器製作技術調査を通じて得た課題の情報を精査し他分野との協力体制を整えようとしている点を高く評価した。④効率性については、専門分野が横断する文化財保存技術の調査において、当研究所内の他の部・センターの協力を得て実施できたことを高く評価した。よって、所期の計画を上回り、順調かつ発展的成果を得られていることから、総合評価をＡとした。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値）論文等発表 2 件（ア）／学会・研究発表 2 件（イ、ウ）／刊行物 5 件（エ、オ）	定量評価 －

ア前原恵美・橋本かおる「楽器を中心とした文化財保存技術調査報告 2」（『無形文化遺産研究報告』第 13 号、東京文化財研究所、31 年 3 月）ほか 1 件、イ前原恵美「古典芸能における御祝儀物」（儀礼文化学会、儀礼文化学会研修室、10 月 14 日）、ウ菊地理予「現代に生きる江戸のファッション」（江戸文化講座、浮世絵太田記念美術館、12 月 1、8、15 日）、エ パンフレット「日本の芸能を支える技Ⅰ琵琶　石田克佳」（東京文化財研究所、7 月 31 日）、オ「伝統の音を支える技」報告書（東京文化財研究所、31 年 3 月 31 日）ほか 3 件

中期計画評価	A

中期計画記載事項	重要無形文化財を中心とする古典芸能・伝統工芸技術及びそれらに関わる文化財保存技術について、調査研究・情報収集・記録作成に努め、その保存伝承に資する成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	中期計画期間 3 年目の 30 年度は、所期の計画を上回り、とりわけ伝統楽器製作を中心とする文化財保存技術に関する研究に関し、聞き取り等を含めより具体的な調査を実施することができた。31 年度以降、実演記録作成については、30 年度より加わった宮薗節を含め、本中期計画中の継続的な実施を予定している。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2122E

中期計画の項目	2-(1)-②-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-②-2)	②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査及び研究 2)重要無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究等 我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形の民俗文化財、及び文化財の保存技術のうち、近年の変容の著しいものを中心に、現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等を明らかにするとともに、各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図る。特に災害下における伝承の復興や、後継者不足等により継承の危機にある伝承を重点的に調査研究の対象とする。 さらに、無形文化遺産の記録やその所在情報を継続的に収集し、その情報の整理・公開に努めるとともにネットワーク構築を図る。
プロジェクト名称	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	
無形文化遺産部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○飯島満（部長）、久保田裕道（無形民俗文化財研究室長）、石村智（音声映像記録研究室長）、今石みぎわ（主任研究員）、菊池理予（主任研究員）ほか	

【年度実績と成果】

○無形民俗文化財に関する調査研究
・風俗慣習調査：来訪神等の調査研究
・民俗芸能調査：民俗芸能の分類に関わる調査研究（秋田県北秋田市ほか9県）
・民俗技術調査：民具製作・和船製作・食に関わる技術等の調査研究
○選定保存技術に関する調査研究
・当研究所と滋賀県草津市との研究協定に基づいた青花紙製作に関する調査報告書の刊行
・滋賀県教育委員会と協力し、滋賀県選定保存技術「曳山金工品修理」保持者の技術の調査・映像記録作成の実施
○無形文化遺産アーカイブスの開発と公開
・被災地における無形文化遺産調査：東日本大震災被災地の無形文化遺産に関する調査・記録保存・活用に関わる研究
・無形文化遺産アーカイブスの構築：無形文化遺産アーカイブスの開発と公開、映像・画像等の収集とデジタル化
○研究集会の開催
・無形民俗文化財研究協議会：第13回協議会を「いま危機にある無形文化遺産」をテーマに開催（東京文化財研究所、12月14日、参加人数183人）。成果は報告書として刊行。
・民俗芸能に関する研究集会（祭ネットワーク）、民俗技術に関する研究集会（箕の研究会）を開催。

山形県米沢市小松豊年獅子踊り

年度計画評価	A

【評定理由】

下記観点から評価を行った。①適時性においては、伝承地域の過疎化や少子高齢化により継承の危機に晒されている無形民俗文化財・選定保存技術の調査は社会的ニーズが高い。また東日本大震災をはじめ多発する自然災害との関連において行っている無形文化遺産の調査・研究も、同様に社会的ニーズが高い課題として注目されており極めて適時性が高い。②独創性においては、無形民俗文化財の研究部としては国内唯一の存在であり、全国の関係者とのネットワーク構築を促進させていることは、無形民俗文化財の保護体制の整備・強化に貢献するものとして、その独創性を十分に評価できる。③発展性においては、調査・研究の成果を協議会等及び下記の刊行物等によって積極的に情報発信できた。④効率性においては、無形民俗文化財及び選定保存技術に関する専門家をスタッフに擁し、各人の専門性を生かして効率的に調査研究を実施できた。⑤継続性においては、無形文化遺産アーカイブスの開発と公開、映像・画像等の収集とデジタル化を引き続き継続的に実施している。よって、所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	B

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） 論文等発表2件（ア）／学会・研究発表2件（イ）／刊行物2件（ウ）	定量評価 －

ア「箕づくり技術の継承と変容を考える―「箕サミット―編み組み細工を語る」の試み」（『月刊文化財』4月号ほか）、イ「ICH contributing to Japanese Post-disaster Rehabilitation」（大韓民国無形遺産院、10月26日）ほか1件、ウ『青花紙製作技術に関する共同調査報告書―染織技術を支える草津のわざ―』（東京文化財研究所）ほか2件

中期計画評価	A

中期計画記載事項	無形民俗文化財においては、全国の民俗芸能・風俗慣習・民俗技術の情報を収集記録し、その保存及び活用に貢献しうる研究成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	中期計画期間3年目の30年度は、所期の計画を上回り、前中期計画において重点的に行ってきた東日本大震災の被災地域における無形民俗文化財の調査・研究を継続しつつも発展させることができた。31年度以降も自然災害のみならず地域の過疎化や少子高齢化、環境や社会構造の変化により継承の危機にある無形文化遺産の保護・活用にも貢献することを目指す。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2123E

中期計画の項目	2-(1)-②-3)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-②-3)	②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査及び研究 3)無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集等 日本と関連の深いアジア諸国等との間において研究員の交流や無形文化遺産関連調査を行う等、無形文化遺産分野における研究交流事業を実施する。ユネスコ無形文化遺産保護条約に関する調査研究を進める。
プロジェクト名称	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集	
無形文化遺産部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○飯島満（部長）、石村智（音声映像記録研究室長）、宮田繁幸（客員研究員）、二神葉子（文化財情報資料部文化財情報研究室長）	

【年度実績と成果】

現地調査（京都府宇治市）

○韓国文化財庁国立無形遺産院との研究交流

韓国国立無形遺産院との研究交流の一環として、4月23日～5月7日にかけて石村智・音声映像記録研究室長を韓国国立無形遺産院に派遣し、同院の研究員と共に済州島において無形文化遺産に関する共同調査を実施した。本調査の成果は韓国国立無形遺産院における成果発表会で発表した（5月4日）。また10月15日～11月2日にかけて、韓国国立無形遺産院の尹秀京・学芸研究士を受け入れ、民俗技術に関する共同調査を石川県珠洲市、静岡県静岡市、京都府宇治市等で実施した。本調査の成果は当研究所における成果発表会で発表された（11月2日）。

○無形文化遺産の国際的な動向に関する調査研究

ユネスコ無形文化遺産条約第13回政府間委員会（開催国モーリシャス：11月26日～12月1日）に2名のスタッフ（石村・二神）を派遣し、ユネスコ無形文化遺産条約に関する情報収集を行うとともに、日本国政府代表団に専門的な助言を行った。なお本調査の成果は『無形文化遺産研究報告』第13号において「無形文化遺産の保護に関する第13回政府間委員会における議論の概要と今後の課題」として報告した。

○アジア太平洋地域における無形文化遺産の情報収集

ユネスコ大洋州事務所と共催で、9月25～28日に福岡市で開催された国際学会「世界社会科学フォーラム（WSSF）」においてセッション「太平洋島嶼国における帰属の文化の育成―文化遺産と文化的表現の多様性の保護及び促進を通して」を実施し、大洋州における無形文化遺産の保護について国内外の専門家と意見交換し、議論を行った。また、アジア太平洋無形文化遺産研究センターと共催で、12月7～9日に宮城県仙台市及び女川町にて、「アジア太平洋の無形文化遺産と自然災害に関する地域ワークショップ」を開催し、アジア太平洋各国17人の参加者とともに無形文化遺産保護の課題についての報告、議論を行った。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、現在、無形文化遺産に係る保護政策を国内的にも国際的にも促進している韓国の現状を把握する上で韓国国立無形遺産院との研究交流は時宜に適ったものであるといえる。②独創性においては、無形文化遺産に関する韓国の政府機関と直接の研究交流を行っているのは日本では当研究所のみであり、他に代え難い事業を実施することができた。③発展性においては、今回ユネスコ大洋州事務所と共催した国際学会セッションを通じて、大洋州地域の無形文化遺産の専門家・保持者と関係強化ができたため、同地域への国際協力への貢献に発展する可能性が出てきた。④効率性においては、ユネスコ無形文化遺産委員会において日本国政府代表団に助言を行うなど、当研究所の成果を効率的に活用することができた。⑤継続性においては、韓国国立無形遺産院との研究交流の第3フェーズの2年目を順調に進めることができたこと、さらにユネスコ無形文化遺産委員会については毎年その動向を調査していることから、一定の継続性を達成している。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	A	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値）論文等発表1件（ア）、学会発表1件（イ）	定量評価 ―

ア 二神葉子「無形文化遺産の保護に関する第13回政府間委員会における議論の概要と今後の課題」（『無形文化遺産研究報告』第13号、31年3月31日）、イ Tomo Ishimura “Safeguarding cultural heritage in the Pacific: current issues and perspectives” (Paper presented at World Social Science Forum 2018, Fukuoka, 26th September 2018)

中期計画評価	B

中期計画記載事項	無形文化財、無形民俗文化財等に関する課題に取り組み、その伝承・公開に係る基盤の形成に寄与する。
評定理由及び今後の見通し	中期計画の3年目として30年度は、韓国国立無形遺産院との研究交流は順調であり、30年は第3フェーズの2年目にあたるが、今後もより発展していくことが期待され、当初の計画通りに実施することができた。ユネスコ無形文化遺産条約政府間委員会における情報収集については、毎年その動向を把握するとともに、その分析結果を毎年『無形文化遺産研究報告』にて公開していることから、31年度以降も継続的に実施していくことで、中期計画の目標を十分達成していけると考える。また本年に実施した国際学会等の発表を通じて事業成果の発信もつとめていく予定である。

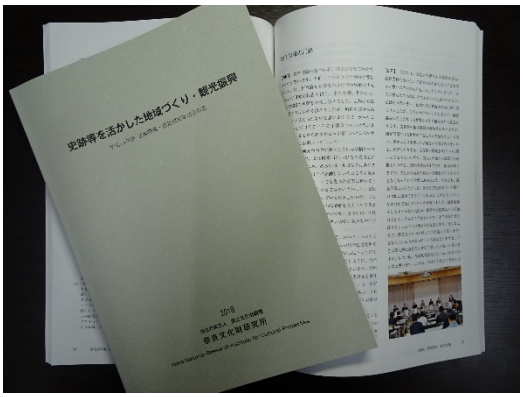
【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2131Fｱ

中期計画の項目	2-(1)-③-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-1)-ｱ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 1)史跡・名勝の保存・活用に関する調査研究 我が国の史跡・名勝に関し、以下の調査研究を行う。 ア　遺跡等の整備に関連する国際的な動向も踏まえた資料の収集・調査・整理等を行う。また、近世等の遺跡の保存・活用に関する研究集会を開催するとともに、過年度開催した研究集会の成果の取りまとめ及び公表を行う。
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査研究（遺跡等整備）	
文化遺産部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○内田和伸（遺跡整備研究室長）、高橋知奈津（遺跡整備研究室研究員）、マレス・エマニエル（遺跡整備研究室アソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】

・29 年度の遺跡整備・活用研究集会報告書『史跡等を活かした地域づくり・観光振興』の編集発行
30 年 6 月に「文化財保護法及び地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律」が成立・公布され、文化財保護事務を教育委員会から首長部局へ移管できるようになった。これまでも地域づくりや観光振興を目指して文化財の保護と活用を積極的に進めるために、文化財保護に関する事務が首長部局に委任または補助執行できるようになっていた制度を使ったり、文化財担当者が双方の併任することや人的交流が行われてきた。その成果や課題、文化財担当者の役割などを事例として多く紹介し、共有することができた。

・30 年度の遺跡整備・活用研究集会の企画・開催
12 月 21 日に「史跡等の保存活用計画−歴史の重層性と価値の多様性−」をテーマに研究集会を開催し、参加者は 128 人であった。



29 年度遺跡整備・活用研究集会報告書

年度計画評価	B

【評定理由】

下記の各観点から評価を行った。①適時性については、今年度の研究集会文化財保護法の改正のあった年で、これまでの成果を確認する適切なタイミングであった。②史跡等を活かした地域づくり・観光振興が求められる昨今においては適切なテーマであった。③さらにこのテーマでの発展性が見込める。④効率性については、悪かったことはないが、良かったと言えることもなかった。⑤継続性については、毎年その時々で必要とされる研究テーマを選んでいるが、遺跡の保存活用という点では継続性をもっている。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	B	A	B	B

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・論文等件数・・・3 件（ア、イ　ほか） ・研究発表等数・・2 件 ・報告書刊行数・・1 件	定量評価 ―

ア内田和伸「史跡等を活かした地域づくり・観光振興」『史跡等を活かした地域づくり・観光振興』奈良文化財研究所 pp. 1−4
イ内田和伸「奈良文化財研究所による特別名勝平城宮東院庭園の活用について」『史跡等を活かした地域づくり・観光振興』奈良文化財研究所 pp. 177−180　ほか

中期計画評価	B

中期計画記載事項	記念物のうち史跡については、その保存・活用のためのマネジメントに関する調査研究を地域振興の観点に基づき国際的動向も踏まえながら進める。名勝については、近世の庭園に関する調査研究を実施し、成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	29 年度の報告書では文化財保護法改正までの史跡等を活かした地域づくり・観光振興について、その実態を一部ではあるが把握でき、報告することができた。30 年度の研究集会では法定となる保存活用計画の内容においては、構成要素の捉え方など細かい課題についても取り上げることができ、計画作成の技術的な課題などを共有することもできた。このため上記の判断とした。今後は史跡指定を受けている社寺の保存活用計画等についてさらに検討内容を深める研究集会を行うか検討中である。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2131Fイ

中期計画の項目	2-(1)-③-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-1)-イ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 1)史跡・名勝の保存・活用に関する調査研究 我が国の史跡・名勝に関し、以下の調査研究を行う。 イ　近世庭園に関する研究集会「庭園の歴史に関する研究（仮称）」を開催する。また、近世庭園調査を行うとともに、庭園に関する基礎資料の収集・整理、所蔵資料の整理を進める。
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査研究（庭園）	
文化遺産部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○内田和伸（遺跡整備研究室長）、高橋知奈津（遺跡整備研究室研究員）、マレス・エマニエル（遺跡整備研究室アソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】

・28 年度より実施の「庭園の歴史に関する研究（近世）」では、30 年度は「茶の文化と庭園」をテーマに研究会を企画し、10 月 21 日に開催した。庭園史・建築史・歴史の各分野の研究者 5 人が発表を行い、ほか参加者 10 人と討議をおこなった。31 年 3 月には研究会の報告書を刊行した。
・連携研究「名勝法華寺庭園の保存活用にかかる調査研究」では、29 年度に引き続き、保存活用計画策定業務において、庭園の歴史や保存活用の現状等について、重要な知見を得ることができた。
・25 年度より継続の奈良市教育委員会との連携研究「奈良市における庭園の悉皆的調査」では、報告書刊行に向けて、執筆・編集作業を進めることができた。
・森蘊寄贈資料の整理では、目録作成を完了し、ＨＰにおいて公開をおこなった。
・そのほか、日本庭園学会関西支部大会（於：奈良）や、鳥取県文化財庭園技術者講習会をはじめ、研究成果を公表する機会を多く持つことができた。

名勝法華寺庭園保存活用計画策定
現地検討 4.24

年度計画評価	B

【評定理由】

①適時性について、名勝法華寺庭園の保存活用にかかる調査研究において、保存活用計画策定という時宜を得て、これまで未着手であった法華寺庭園の歴史や維持管理の現状について詳細なデータを得ることができた。②独創性について、庭園の歴史に関する研究会で、庭園について多分野の研究者が集まる機会は類がなく、貴重な討議の場となった。また法華寺庭園が門跡尼寺（比丘尼御所）の庭園であるという特殊性から、その価値づけにおいて独創的で新たな見解を得ることができた。③発展性について、研究論集『近世庭園の研究』の刊行に向けての議論を進めることができた。また保存活用計画策定に関わり、他の庭園における計画策定にその知見を活かし得る状況になった。④効率性について、庭園の歴史に関する研究会、法華寺庭園の調査、奈良市における庭園の悉皆的調査で得られた近世の庭園に関する諸成果を、相互に活かすことができた。⑤継続性については、庭園の保存活用計画策定や悉皆的調査などを別所で展開し、継続できる可能性がある。以上から本事業は良好な成果を上げていると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	B	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） ・論文・・・・・・3 件（ア、イ　ウ） ・研究発表等数・・16 件 ・報告書・・1 件（エ）	定量評価 ―

ア　内田和伸「藤原宮朝堂院朝庭における幢幡遺構の配置と設計思想」ランドスケープ研究 80-5 日本造園学会　30 年 5 月
イ　高橋知奈津「造園古書にみる「露地・茶庭」」平成 30 年度庭園の歴史に関する研究会報告書　茶の文化と庭園　奈良文化財研究所　31 年 3 月
ウ　エマニュエル・マレス「「モネの庭」−日仏文化交流の橋渡し−」奈良文化財研究所紀要 2018　30 年 6 月
エ　『平成 30 年度庭園の歴史に関する研究会報告書　茶の文化と庭園』31 年 3 月

中期計画評価	B

中期計画記載事項	記念物のうち史跡については、その保存・活用のためのマネジメントに関する調査研究を地域振興の観点に基づき国際的動向も踏まえながら進める。名勝については、近世の庭園に関する調査研究を実施し、成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	中期計画ではこの 5 年間の研究テーマを近世庭園の研究としている。3 年目の 30 年度は計画通りに「茶の文化と庭園」をテーマに研究会を開催し、庭園と茶の文化に関する研究の現状や課題を共有できた。31 年度は「庭園文化の近世的展開」をテーマに研究を進めていく。また、名勝法華寺庭園の調査研究では、庭園の歴史だけでなく、現地に即した保存活用に関する詳細なデータも得ることができた。今後も整備等のための詳細調査等を継続していく。以上のように近世の庭園について、歴史研究と実地研究の双方から知見を得、相互に活かすことができたのは、非常に有意義であり、さらに研究を深めていく。

【書式C】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 2132F ｱ-1

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-ｱ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2)古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ア　古代都城の解明のため、平城宮跡東院地区及び第一次大極殿院地区、平城京跡、東大寺塔院地区、藤原宮大極殿院地区、藤原京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を行う。
プロジェクト名称	平城宮東院地区の発掘調査（平城第 595 次調査）	
都城発掘調査部（平城）	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○渡邉晃宏（都城発掘調査部副部長）、馬場基（史料研究室長）、海野聡（遺構研究室研究員）ほか	

【年度実績と成果】

・平城宮跡東院地区の学術調査。東院地区は東宮等に利用された重要な宮殿空間であり、継続的な調査を実施している。
　調査面積：1,134 ㎡　　調査期間： 1 月 22 日～7 月 13 日

・基本層序
　基本層序は地表から表土約 5 ㎝、整備盛土（約 35 ㎝）、旧耕作土・床土（約 20 ㎝）、奈良時代の遺物包含層（5～10 ㎝）。この下で、調査区北半では上から炭混じりの灰色粘土の上に大粒（径約５～７㎝）の礫を敷いた整地、小粒（径約３～４㎝）の礫敷きを確認した。最下層の整地である礫のない橙褐色粘質土は調査区全体に敷かれている。
　奈良時代の整地土の上面で遺構を検出した。

・主な検出遺構
　掘立柱建物 3 棟、掘立柱塀 1 条、溝 6 条、被熱痕跡 3 か所、方形区画遺構 8 基

方形区画遺構（南から）

・主な出土遺物
　瓦類（軒瓦、丸平瓦）、土器（土師器、須恵器、製塩土器、青磁、白磁、灰釉・緑釉陶器）、木器、金属器、石製品

・調査所見
　東院の厨施設につき、隣接する第 593 次調査と合わせてその実態を解明できた。特に方形区画遺構・被熱痕跡は、全国でも初の検出事例となる 8 世紀代の地上式炉跡（調理用）とみられ、今後の研究上も重要な成果である。

年度計画評価	A

【評定理由】

下記の各観点から評価を行った。①適時性においては、計画通り継続的な調査を確実に実施出来た。②独創性においては、全国でも初検出となる地上式炉跡とみられる遺構について、考古学的に高度な調査を実施したのみならず、磁気探査を含めた奈文研ならではの総合的な調査を行い、大きな成果を得た。③発展性においては、平城宮の構造を考えるうえで重要な成果であり、さらに 8 世紀代の厨房施設の実態を解明する先駆的事例となる成果を挙げた。④継続性においては、29 年度の調査成果と総合して一体的な理解・調査を進めることで、東院地区の巨大な厨施設の全容解明に向けた成果を挙げることができた。以上より、A と判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	S	A	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・論文等数：1 件（ア） ・記者発表数 1 回・新聞報道（6 月 15 日:朝日新聞他 5 紙　） ・現地説明会 1 回(6 月 17 日)　参加者　813 人 ・出土遺物件数等：土器 121 箱・軒丸瓦 75 点、軒平瓦 119 点、丸・平瓦 199 袋分、木器 1 点、木炭 1.54 kg、金属器 19 点、石製品 15 点	定量評価 ―

ア山藤正敏他「東院地区の調査－第 595 次」『奈良文化財研究所紀要 2019』31 年 6 月刊行予定

中期計画評価	B

中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本都城の解明等を図るため、平城宮東院地区の調査を継続的に実施している。本調査もその一環であり、とりわけ国内でも初検出となる 8 世紀の調理用の炉跡とみられる遺構や、関連する建物群の発見など、多大な研究成果を得ることができた。以上より、計画以上に順調に進捗していると判断した。今後は、今回の調査成果を反映させながら、さらに継続的に調査を進めていきたいと考えている。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2132F ｱ-2

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-ｱ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2)古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ア　古代都城の解明のため、平城宮跡東院地区及び第一次大極殿院地区、平城京跡、東大寺塔院地区、藤原宮大極殿院地区、藤原京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を行う。
プロジェクト名称	平城宮東区朝堂院東門の発掘調査	
都城発掘調査部（平城）	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○渡邉晃宏（都城発掘調査部副部長）、林正憲（主任研究員）、福嶋啓人（遺構研究室研究員）ほか	

【年度実績と成果】

・平城宮の政務・儀礼の中心的空間である東区朝堂院の東門の解明のための調査。
　調査面積：560 ㎡　調査期間：10 月 1 日～31 年 1 月 18 日。
・基本層序：表土・包含層、奈良時代後半および前半の遺構面、奈良時代前半の造営整地土
・主な検出遺構：掘立柱門 1 棟・掘立柱塀 2 条（以上奈良時代前半）、門基壇 1 基・築地塀 2 条・凝灰岩分布域 1 か所（以上奈良時代後半）
・主な出土遺物：土器・土製品・瓦・鉄製品
・調査所見：東区朝堂院の奈良時代前半の東門遺構、一本柱区画塀、奈良時代後半の東門基壇と周辺遺構を検出した。これにより東門の変遷と東区朝堂院全体の規模を確定した。

調査区全景（北から）

年度計画評価	A

【評定理由】

以下の観点から評価を行った。①適時性においては、報告書編集を目指しつつ東区朝堂院東門の全体像解明のために必要な調査を適切に行った。②独創性においては、高度な計画によって、遺構に損傷を与えずに下層の奈良時代前半の状況を解明した。③発展性においては、朝堂院の規模や配置計画に関する確実なデータなど、今後の都城研究の基礎となる重要な成果を得た。④継続性においては、継続的調査によって平城宮中枢区画を明らかにし、周辺施設の関連性に関する重要な知見を得ることができ、今後の調査に資する大きな成果を挙げた。以上から、A と判定した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	A	A	A	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	（参考値） ・論文等数：1 件（ア） ・記者発表数 1 回・新聞報道（12 月 14 日：5 紙） ・現地見学会 1 回(12 月 15 日)　参加者 569 人 ・出土遺物件数：土器 3 箱・瓦 24,567 点・金属製品等 7 点 ・記録等作成数：実測図 24 枚、デジタル写真約 700 枚	―

ア福島啓人他「東区朝堂院東門の調査－第 602 次」『奈良文化財研究所紀要 2019』31 年 6 月刊行予定」

中期計画評価	A

中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本都城の解明等を図るため、平城宮の中枢区画である東区朝堂院東門を調査した。奈良時代後半の東門の正確な規模を確定するという当初計画の目標を達成したのみならず、奈良時代後半とは規模・構造の大きく異なる奈良時代前半の様相も明らかにすることができた。以上より A と判定した。 今後はこの成果を踏まえ、東区朝堂院報告書作成に向けた調査研究を進めたい。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2132F ｱ-3

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-ｱ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2)古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ア　古代都城の解明のため、平城宮跡東院地区及び第一次大極殿院地区、平城京跡、東大寺塔院地区、藤原宮大極殿院地区、藤原京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を行う。
プロジェクト名称	東大寺東塔院の発掘調査	
都城発掘調査部（平城）	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○渡邉晃宏（都城発掘調査部副部長）、今井晃樹（主任研究員）、芝康次郎（考古第１研究室研究員）	

【年度実績と成果】

・東大寺東塔院の解明のための南門・東門・南面回廊・西面回廊・北面回廊の発掘調査（東大寺・奈良県立橿原考古学研究所との合同）。
　調査面積：1,219 ㎡　調査期間：7 月 2 日～12 月 21 日。

・基本層序
基盤層が褐色粘質土（マンガン混じり）あるいは礫混じり橙色土で、その上位に礫混じりに砂質土を積むなどして基壇土を構築。西面回廊では黄褐砂と粘土の互層による版築を確認した。

・主な検出遺構
南門・東門・回廊の基壇および礎石建物、同雨落溝、参道（南門南辺）

・主な出土遺物
　瓦（軒瓦・鬼瓦・平瓦・丸瓦）、土師器、瓦器、鉄釘、銅製品

・調査所見
　南門、東門では鎌倉時代再建礎石建物とその雨落溝の痕跡を確認し、回廊では再建建物と奈良時代創建建物の２時期の遺構を確認した。今回の調査により、再建期に回廊が複廊から単廊へ大きく改造されていたことが一連の調査で初めて判明した。

回廊北西隅の礎石建物および雨落溝

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、整備計画・復原研究の詳細の検討に合わせて、適切な発掘調査を実施することができた。②独創性においては、土層体積状況の分析などにおいて奈文研ならではの総合的な調査・研究を行うと同時に、共同で調査した橿原考古学研究所のもつノウハウも合わせて導入することで大きな成果を上げることができた。③発展性においては、東塔院回廊及び門について構造の変化や新たな基礎構造などを確認し、また今後の調査に資する情報を得た。④効率性においては、従前の調査成果を断ち割り箇所の重点的調査を行い、効率を高めた。⑤継続性においては、29 年度までの調査成果を元に調査区を設定、調査計画を策定し、質の高い調査を実施した。以上から、Ａと判断した

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	B	A

【目標値】	**【実績値・参考値】** (参考値) ・論文等数：1 件（ア） ・記者発表数・新聞報道（11 月 8 日： 朝日新聞他 5 紙） ・現地説明会 1 回(11 月 11 日)　参加者 1,048 人 ・出土遺物件数　等：土器 1 箱・瓦 1,243 箱・金属製品 3 点	定量評価 ―

ア芝康次郎ほか「東大寺東塔院の調査―第 600 次」『奈良文化財研究所紀要 2019』31 年 6 月刊行予定

中期計画評価	A

中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本の都城解明等のために、東大寺塔院の発掘調査を進め、その様相を明らかにする中期計画である。30 年度は東塔の囲繞施設に関しての情報を得る計画であった。計画通り順調に進捗しており、また鎌倉時代再建塔と奈良時代の創建塔との違いを見出したことは大きな成果と判断し、Ａと判定した。 今後も、東大寺東塔院整備計画や復原研究と調整・連動を図りながら、継続的に質の高い調査を進めていきたいと考えている。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2132F ｱ-4

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-ｱ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2)古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ア　古代都城の解明のため、平城宮跡東院地区及び東区朝堂院地区、平城京跡、東大寺塔院地区、藤原宮大極殿院地区、藤原京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を行う。
プロジェクト名称	藤原宮大極殿院地区の発掘調査	
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原地区)	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○玉田芳英（部長）、尾野善裕（考古第二研究室長）、廣瀬覚（主任研究員）、大林潤（主任研究員）、栗山雅夫（企画調整部写真室技術職員）ほか	

【年度実績と成果】

○藤原宮大極殿院北門・北面回廊の発掘調査（第 198 次）を実施した。
・調査地：橿原市高殿町
・調査期間：５月 28 日～12 月５日
・調査面積：1,050 ㎡
○調査成果
・藤原宮大極殿院北面回廊の中央部分を調査した。その結果、北面回廊全体の柱配置と柱間寸法を明らかにすることができ、北門の存在が明確になるとともに、北面回廊が複廊構造であることを確定できた。また、大極殿院北部の造営過程において、運河の埋め立て状況や、排水溝の付け替え、二段階にわたる礫敷などを確認した。大極殿院の造営にあたっては、排水と地盤沈下への対応に苦慮していたことが新たに判明し、造営過程をより詳細に辿ることが可能となり、31 年度以降の継続調査につながる成果が得られた。

北門・北面回廊検出状況

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価した。①適時性では、近年の調査成果をうけて 41 年前の調査区を含めた地区を調査し、新たな所見を数多く得ることができたためＡとした。②独創性においては、大極殿院北門の存在を明らかにしたほか、北面回廊が複廊構造となることを確定させたことと、大極殿院北部における排水処理や整備の在り方を解明するなど、重要な新知見を数多く得たことからＡとした。③発展性においては、北面回廊の柱配置や柱間寸法を復元できたことに加え、北門が南門や東門とは構造や規模を異にしていることを明らかにするなど、大極殿院のみならず藤原宮全体の様相を解明する上で重要な成果を得ることができたためＡとした。④効率性については、これまでの調査成果を受けて適切な場所に調査区を設定し、効率的に調査を実施できたためＢとした。⑤継続性においては、藤原宮の様相解明のための長期的な継続調査の一環として大極殿院の調査を実施しており、今後の継続調査に資する成果を得たためＢとした。以上より、事業は所期の目標以上に進んでいると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	B	B

【目標値】	**【実績値・参考値】** ・報道発表数：1 件（ア）　・現地説明会数：1 件（イ） ・現地説明会来場者数：694 人　・論文等数：３件（ウ、エ、オ） ・出土遺物：軒瓦等 33 点、丸・平瓦 43 箱、土器 11 箱、木簡 4 点、木器・木製品 19 点 ・記録作成数：遺構実測図 45 枚、写真 681 枚	定量評価 ―

ア、奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院回廊の調査（飛鳥藤原第 198 次調査）記者発表資料」（30 年９月）
イ、奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院回廊の調査（飛鳥藤原第 198 次調査）現地説明会資料」（30 年９月）
ウ、大林潤・廣瀬覚「藤原宮大極殿院北面回廊・北門の調査（飛鳥藤原第 198 次調査）」『奈文研ニュース No. 70』（30 年９月）
エ、廣瀬　覚「藤原宮大極殿院北面回廊・北門の調査（飛鳥藤原第 198 次調査）」『奈文研ニュース No. 71』（30 年 12 月）
オ、前川　歩・廣瀬　覚「大極殿院回廊の調査―第 195・198 次」『奈良文化財研究所紀要 2019』（31 年６月予定）

中期計画評価	A

中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本の都城の解明を図るという中期計画の目標をもとに、藤原宮大極殿院地区の発掘調査と研究を進める計画の３か年目で、30 年度は大極殿院北面回廊が複廊であることを明確にしただけでなく、北門の存在を確定させるとともに、その構造が南門や東門と異なっていたことを明らかにした。中期計画の目標達成に向けて、予想以上の成果が上がっているため、Ａ評価とした。31 年度以降も発掘調査を進め、藤原宮大極殿院の構造解明を目指す。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2132F ｱ-5

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-ｱ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2)古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ア　古代都城の解明のため、平城宮跡東院地区及び東区朝堂院地区、平城京跡、東大寺塔院地区、藤原宮大極殿院地区、藤原京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を行う。
プロジェクト名称	飛鳥地域等の発掘調査	
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】**○玉田芳英（都城発掘調査部長）、清野孝之（考古第三研究室長）、和田一之輔（考古第一研究室研究員）、道上祥武（考古第三研究室アソシエイトフェロー）、栗山雅夫（企画調整部写真室技術職員）ほか	

【年度実績と成果】

○大官大寺南方（明日香村奥山）発掘調査（第 199 次）

（試掘調査）
・調査期間：31 年 1 月 15 日～26 日
・調査面積：65.5 ㎡

（地中レーダー探査）
・調査期間：31 年２月 18・20・21 日
・調査面積：10,000 ㎡

調査成果
・大官大寺南門の確認とその南方に広がる未調査地の様相を解明することを目的とし、広範な地域を対象とする地中レーダー探査と、試掘調査をあわせて実施した。
・調査区中央で十条大路南側溝の可能性がある東西溝１条、条坊道路廃絶後の掘立柱建物を検出した。調査区北半では大官大寺の造営あるいは条坊道路の敷設にともなうと考えられる整地土を検出し、周辺の土地利用や開発の実態を考えるうえで重要な成果となった。

第 197-6 次調査検出石列（東から）

○飛鳥寺旧境内（明日香村飛鳥）発掘調査（第 197-1・2・6 次）
・調査期間：4 月 2 日～5 月 11 日（1 次）、5 月 14 日～2 月 22 日（2 次）、31 年 1 月 9 日～3 月 1 日（6 次）
・調査面積：47 ㎡（1 次）、240 ㎡（2 次）、約 87 ㎡（6 次）

調査成果
・寺域北部の 1・2 次調査では、奈良時代の土坑数基を検出するとともに、近世に周辺一帯が整備され、現在につながる景観が成立したことが判明した。寺域東部の 6 次調査では、古代の柱穴 2 基と石列、南北溝等を検出し、これまで不明であった飛鳥寺東部域の様相の一端を明らかにすることができた。

年度計画評価	A

【評定理由】

下記の各観点から評価した。①適時性においては、機会を巧みにとらえて調査を適切に進め、多くの遺構を検出する等の成果をあげたことからＡとした。②独創性においては、これまであまり調査が及んでいない地区で適切に発掘調査を実施し、成果をあげたことからＢとした。③発展性においては、大官大寺南方、飛鳥寺旧境内ともに、今後の調査研究に資する資料が得られたためＡとした。④効率性に関しては、29 年度の調査経験を踏まえて調査方法を合理化し、所期の目的どおり成果が得られたためＡとした。⑤継続性においては、これまでの飛鳥地域での調査成果を踏まえた上で、大官大寺南方、飛鳥寺旧境内のいずれにおいても新たな知見を得たことからＡとした。以上から、事業の進捗状況は年度計画どおりであると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	B	A	A	A

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	・論文等：1 件（ア） ・出土遺物：土器 44 箱、瓦 518 箱、石器・土製品 11 箱、木簡約 160 点 ・調査件数：4 件	―

ア、清野陽一・和田一之輔ほか「大官大寺南方の調査―飛鳥藤原第 196･199 次」『奈良文化財研究所紀要 2019』（31 年 6 月予定）

中期計画評価	A

中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本の都城の解明等を図るため、藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進めるという中期計画に対して、大官大寺を取り巻く遺構の一端を解明し、目標達成に向けて順調に成果をあげただけでなく、飛鳥地域の開発史について新たな知見を得るという成果を上げた。今後も、適宜機会をとらえて、これまで調査の手が及んでいなかった地域の様相解明を目指した調査を進めてゆく予定である。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2132F イ-1

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-イ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2)古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 イ　出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に行い、調査研究が纏まったものより順次公表する。
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原地区)	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○玉田芳英（部長）、尾野善裕（考古第二研究室長）、清野孝之（考古第三研究室長）、大林潤、山本崇（以上、主任研究員）ほか	

【年度実績と成果】

・30 年度の発掘調査で検出した遺構の図面・写真資料の作成・整理・分析研究とともに、出土遺物の整理・分析研究を進めた。とりわけ、藤原宮大極殿院北門を検出した第 196 次発掘調査の成果を踏まえた研究では、北門の規模や構造が南門のみならず東門とも異なることを明らかにするとともに、大極殿院内庭北部では礫敷が二度にわたって施工され、地盤沈下に対応していたことを明らかにするという成果をあげることができた。これらの成果は、一般向けの現地説明会で公表した。

・29 年度までに実施した発掘調査の遺構図面・写真資料の再整理・再検討・分析研究とともに、出土遺物の再調査・再整理・分析研究を進めた。『藤原宮木簡　四』および『木器集成図録』を刊行し、右京九条二・三坊（瀬田遺跡）の報告書作成を原稿執筆の段階まで進めた。飛鳥地域関係では、石神遺跡の遺構および出土品の整理・分析作業を重点的に行っており、研究成果の一部を『奈良文化財研究所紀要 2019』に掲載の予定である。

『藤原宮木簡　四』

・藤原京から平城京への遷都に関する研究を進め、藤原宮朝堂院において発見した幢幡遺構の関連調査からは、平城宮跡に奈良時代前期に遡る幢旗遺構が存在することを発見するという成果をあげた。また、京の造営や平城京への遷都の理由について、近年の調査成果をもとに新たな見解を提示した。これらの成果については、専門家向けに研究発表を行うだけでなく、講演会を通して広く国民に向けて情報発信を行った。

年度計画評価	A

【評定理由】

次記の観点から評価した。①適時性については、最新の調査研究成果をいち早く公表したばかりでなく、講演会などを通して広く普及・公開に努めており、14 件という研究発表等数において、28 年度実績（4 件）を倍増させた 29 年度実績（8 件）を大きく凌駕したためＳとした。②独創性については、藤原宮跡における調査成果を基礎として、既調査成果の中から見落とされていた幢旗遺構を発見するという著しい成果（イ・エ）をあげたためＡとした。③発展性については、『藤原宮木簡　四』（オ）、『木器集成図録』（カ）の刊行が、今後研究を進めていく上での基礎になる成果と考えられるためＡとした。④効率性については、研究成果全体として、例年と遜色のない成果をあげていることからＢとした。⑤継続性については、継続的な調査を踏まえて研究を遂行していることに加え、『藤原宮木簡　四』、『木器集成図録』の刊行という大きな成果をあげたことからＡとした。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	S	A	A	B	A

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	(参考値) ・記者発表件数：1 件（ア） ・研究発表件数：14 件（イ～エほか） ・報告書 2 件（オ・カ）、論文数等：13 件	—

ア、奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査（第 196 次）記者発表資料」(30 年 9 月)
イ、大澤正吾「平城宮幢旗遺構の発見―平城宮遷都と儀式遺構の変化―」奈文研第 10 回東京講演会、10 月 13 日
ウ、玉田芳英「古代都市藤原京の実態」奈文研第 10 回東京講演会、10 月 13 日
エ、大澤正吾「平城宮第一次大極殿院における幢旗遺構の発見」都城制研究会、12 月 15 日
オ、奈良文化財研究所編（責任編集：山本崇）『藤原宮木簡　四』(31 年 1 月)
カ、奈良文化財研究所編（責任編集：和田一之輔）『木器集成図録　飛鳥・藤原編』(31 年 3 月)

中期計画評価	A

中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進め、古代日本の都城の解明を図るという中期計画の目標達成に向けて、藤原宮の大極殿院造営過程について新知見を得たことに加え『藤原宮木簡　四』の刊行など、A評価とした 29 年に比肩する成果を上げている。今後も、逐次整理・検討作業を進め、成果を公表してゆく予定である。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2132F イ-2

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-イ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2)古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 イ　出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に行い、調査研究が纏まったものより順次公表する。
プロジェクト名称	平城宮・京跡出土遺物・遺構の調査・研究	
都城発掘調査部（平城）	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○渡邉晃宏（都城発掘調査部副部長）、高妻洋成（埋蔵文化財センター長）、森本晋（企画調整部長）ほか	

【年度実績と成果】

(1)30 年度の発掘調査及び既往の調査による検出遺構・出土遺物の整理と研究

・平城宮東院地区の調査（平城第 595 次）、平城宮東区朝堂院東門の調査（平城第 602 次）等で検出した遺構の検討、および出土した各種遺物の洗浄・整理・実測・分析・保存処理等を実施。

・報告書の刊行に向け、平城宮東区朝堂院地区、平城京左京三条一坊一・八坪、右京一条二坊四坪・二条二坊一坪等で出土した遺構・遺物の整理・分析を実施。

(2)調査・研究成果の公表

・29 年度に実施した発掘調査について、『紀要 2018』(ア)にて報告。

・29 年度以前に実施した発掘調査出土遺物の研究成果について、『紀要 2019』(イ)にて報告。

・30 年度の発掘調査の概報を作成。

・特別展『地下の正倉院展』(10 月 13 日～11 月 25 日・於：平城宮跡資料館)を開催し、図録(ウ)を刊行するとともに、記者発表を実施した。

古代遊戯「かりうち」のセット

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、発掘調査の進展に対応し、迅速な遺物・遺構の整理作業を進め、調査の効率的遂行に還元することが出来た。特に平城第 595 次調査出土の膨大な遺物を迅速に検討・整理し、発掘調査現場と連携したことは大きな成果である。②独創性においては、科研費等の外部資金による成果と融合させながら、新たな視点（遊戯など）や手法によって、新知見を多く得た。③発展性においては、出土品の調査によって新形式の瓦を見いだすなど、今後の研究の指標となる成果を得た。④継続性においては、従来からの調査の積み重ねによって得られた知見を踏まえつつ、データを蓄積することができた。以上から着実に事業の成果を上げたと判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	B	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** (参考値)論文等数：3 件（ア、イ、ウ）	定量評価 ―

ア「Ⅲ平城宮跡等の調査概要」『奈良文化財研究所紀要 2018』30 年 6 月
イ「Ⅲ平城宮跡等の調査概要」『奈良文化財研究所紀要 2019』31 年 6 月刊行予定
ウ『地下の正倉院展－荷札木簡をひもとく－』30 年 10 月

中期計画評価	B

中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本の都城解明等を図るため、遺物・遺構研究の蓄積を計画している。当初計画通りの継続的な調査・研究の蓄積のみならず、予想をはるかに超えて膨大に出土した遺物の迅速な整理・調査作業を実施して発掘調査現場にフィードバックしたり、遺物の保管方法や調査手法などにおいて新たな手法の導入を行うなど、当初計画を超える研究を展開している。以上から、計画以上に順調に進展していると判断した。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2132Fウ

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-ウ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2)古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ウ　飛鳥時代の壁画古墳について東アジアを主とする古墳、壁画、天文図等の事例との比較研究を行うとともに、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、寺院出土の金属製遺物を中心とした資料の調査を行う。また、飛鳥時代木造建築遺物の研究として、藤原宮・京跡や飛鳥・藤原地域に所在する寺院の出土部材の研究を行う。
プロジェクト名称	東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究	
飛鳥資料館	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○石橋茂登（学芸室長）、西田紀子（学芸室研究員）、若杉智宏（学芸室研究員）ほか４名	

【年度実績と成果】

・壁画古墳関連で韓国、中国の壁画古墳に関する資料を収集した。
・29 年度調査の成果を論文等で発表した（ア、イ、ウ）。
・飛鳥寺跡出土の銅製品の一部の残欠について鉛同位体比分析を実施した。成果は 31 年度刊行の紀要で報告する予定。
・銭弘淑塔について 29 年度の蛍光Ｘ線分析と写真撮影の結果を整理した。
・山田寺跡出土部材の計測調査を継続した。

鉛同位体比サンプリング作業

年度計画評価	B

【評定理由】

飛鳥資料館において高松塚古墳、キトラ古墳は重要な展示テーマの一つとなっており、東アジアの壁画古墳に関する調査を継続して知見を蓄積することは、飛鳥資料館にふさわしい事業であるとともに、今後の展示の充実と発展にとっても重要であるので、②独創性、③発展性を高く評価できる。また保存と公開について関心を集めている両古墳について、保存修理事業に参画している当研究所が壁画古墳全般についての調査研究をすすめることは①適時性、②独創性が高く、④効率性も良い。今後の文化財の保存公開や学術研究に大いに寄与する調査と考えられるので、③発展性の面も評価できる。
飛鳥寺跡出土品については所蔵館である飛鳥資料館が積極的に調査を行い、情報を公開してゆくことで、古代寺院研究全体へ貢献することが期待できる。銭弘淑塔の調査は昨年度のデータの整理分析を継続しており、今後の成果取りまとめにむけて着実な進展をしている。飛鳥寺跡出土品の詳細な調査と、銭弘淑塔の悉皆的な分析は、これまで期待されながら実現してこなかったものであり、②独創性が高いと評価できる。山田寺跡出土部材の計測は、PEG 処理した大型木製品の長期にわたる挙動を知る上で重要な調査であり、これも②独創性、⑤継続性が高い。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	B	B	B

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値）論文等数　３件	定量評価 －

ア降幡順子・石橋茂登・中川あや「古代寺院址出土銅製品の非破壊調査」『奈良文化財研究所紀要２０１８』６月刊行
イ諫早直人・石橋茂登・田村朋美「飛鳥寺塔心礎出土金・銀製品」『奈良文化財研究所紀要２０１８』６月刊行
ウ石橋茂登・木村結香「飛鳥寺塔心礎出土蛇行状鉄器の復元的研究」『奈良文化財研究所紀要２０１８』６月刊行

中期計画評価	B

中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	いずれの調査も着実に進展しており、毎年成果を公表してきているので順調と評価できる。古代寺院関連の調査と壁画古墳関連の調査は古代の思想や儀礼を考察する上で相互に関連があり、四神思想などは都城研究にとっても重要な要素として、今後も調査研究を継続することが望まれる。今後も継続的に成果を出すことが期待できる。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2132F ｴ-1

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-ｴ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2)古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ｴ　アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡及び陶磁器に関する調査研究並びに研究協力について、日本の古代都城及び北魏洛陽城等に関する中国社会科学院考古研究所との共同研究と学術交流の推進、中国の生産遺跡（鞏義市黄冶窯跡・白河窯跡及び生産品）に関する河南省文物考古研究院との共同研究、北票喇嘛洞墓地出土の陶器等の調査・分析を中心とする遼寧省文物考古研究所との共同研究、日韓古代文化の形成と発展過程に関する韓国国立文化財研究所との研究者の発掘現場交流を含む共同研究等を、協定に基づいて行う。 また、調査研究が纏まったものより順次公表する。
プロジェクト名称	中国との共同研究	
都城発掘調査部（平城）	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○渡邉晃宏（副所長）、玉田芳英（都城発掘調査部部長）、尾野善裕（考古第二研究室長）、今井晃樹・廣瀬覚・神野恵・丹羽崇史（主任研究員）	

【年度実績と成果】

・中国社会科学院考古研究所
　両研究所の友好議定書に基づく学術交流の実施 1 人招聘（11 月 15 日～12 月 14 日）・1 人派遣（31 年 2 月 25 日～3 月 27 日）
　北魏洛陽宮城出土遺物調査（31 年 3 月 16 日～24 日・4 人派遣）。
・遼寧省文物考古研究院
　友好共同研究「三燕文化出土遺物の研究」にかかる学術交流として先方代表団 4 人を招聘（6 月 11 日～16 日）。
　遼寧省文物考古研究院、および朝陽市博物館を 5 人で訪問し、三燕文化出土の金属器・土器等を調査（11 月 12 日～17 日）。
　前回の共同研究成果をとりまとめた論文集の翻訳、編集を進めた。
・河南省文物考古研究院
　共同研究議定書に基づき、先方代表団 5 人を招聘（11 月 19 日～23 日）。
　黄冶窯・白河窯出土遺物調査（31 年 3 月 18 日～22 日）。
　『黄冶窯発掘調査報告書』日本語版について編集作業を進めた。

河南省文物考古研究所来日時の講演会風景

年度計画評価	B

【評定理由】
　以下の各観点から評価を行った。①適時性においては、29 年度調印した新たな協定書に基づく研究計画を速やかに実施することができた。②発展性においては、上述の新協定書に基づく学術交流・遺物調査を含めて、多様な研究を展開することができた。③効率性においては、メール等を利用しての綿密な打ち合わせ・連携によって作業を効率的に進めることができた。④継続性においては、従前からの研究成果の蓄積と、さらにそれらを踏まえての研究計画策定・協定書の調印を行うことができた。以上から、事業を計画通り着実に遂行したと言え、B と判定した。

観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） ・社会科学院：招聘 1 人 30 日間・派遣 1 人 31 日間・出張 4 人 9 日間	定量評価 ―

中期計画評価	B
中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本の都城の解明等を図るため、アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡及び陶磁器に関する調査研究並びに研究協力について、着実に研究を推進することができた。これにより、当初計画を着実に実施した。31 年度以降も、30 年度に実現した研究成果と信頼関係の蓄積を踏まえて、より活発な研究を展開したい。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2132Fｴ-2

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-ｴ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2)古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 エ　アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡及び陶磁器に関する調査研究並びに研究協力について、日本の古代都城及び北魏洛陽城等に関する中国社会科学院考古研究所との共同研究と学術交流の推進、中国の生産遺跡（鞏義市黄冶窯跡・白河窯跡及び生産品）に関する河南省文物考古研究院との共同研究、北票喇嘛洞墓地出土の陶器等の調査・分析を中心とする遼寧省文物考古研究所との共同研究、日韓古代文化の形成と発展過程に関する韓国国立文化財研究所との研究者の発掘現場交流を含む共同研究等を、協定に基づいて行う。また、調査研究が纏まったものより順次公表する。
プロジェクト名称	韓国との共同研究	
都城発掘調査部（平城）	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○渡邉晃宏（副所長）、玉田芳英（都城発掘調査部長）、清野孝之（考古第三研究室長）、林正憲・庄田慎也（主任研究員）、松永悦枝（研究員）	

【年度実績と成果】

・発掘調査交流

韓国国立文化財研究所との合意に基づく発掘調査交流の実施

韓国研究者の招聘：１人（８月６日～９月 28 日、54 日間）

→　平城宮・京及び藤原宮・京、飛鳥地域での発掘調査等に参加

当研究所研究員の派遣：１人（９月３日～10 月５日、33 日間）

→　韓国・慶州において発掘調査等に参加

・日韓共同研究

韓国国立文化財研究所との合意に基づく共同研究事業の実施

日韓共に５チームが共同研究に参加

韓国側：計 15 人を受け入れ。各チーム１週間程度。

日本側：計 15 人を派遣。各チーム１週間程度。

なお、30 年度は５年計画の３年目にあたるため、10 月 17～18 日に当研究所において中間成果報告会を開催。日韓それぞれ５チームが相互に研究成果を発表し、討論を実施。韓国側から計６人を招聘。なお、32 年度には『日韓文化財論集Ⅳ』を刊行する予定。

日本における発掘調査交流の様子

年度計画評価	B

【評定理由】

下記の各観点から評価を行った。①適時性においては、５年間の計画に沿って計画的・効率的に共同研究を実施することができた。②独創性においては、考古学、文献史学、名勝などの広範な分野にわたる両研究所の特性を活かして共同研究を行った。③発展性においては、日韓で学術的課題を共有し、研究することで今後の学術的発展に寄与することができた。⑤継続性においては、本事業が 18 年度から継続しており、今後も共同研究を持続していくことを確認できた。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	⑤継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・日韓共同研究・中間成果報告会　参加者 33 人 ・論文等数　３件（ア、イ、ウ）　報告書等の刊行数　１件（エ）	定量評価 ―

ア中島義晴「日韓の庭園および景勝地における建築内部からの風景の眺望」『奈良文化財研究所紀要』2018、30 年６月

イ尹亨準「韓日発掘交流を終えて」『奈文研ニュース』No.71、30 年 12 月

ウ前川歩「日韓発掘交流に参加して」『奈文研ニュース』No.72、31 年３月

エ奈良文化財研究所・韓国国立文化財研究所『日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究・中間成果発表会資料集』（147 頁）、30 年 10 月

中期計画評価	B

中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本の都城の解明を図るため、韓国国立文化財研究所との合意のもと、共同で調査研究を進めているが、発掘調査を介した人的交流も行うことによって、学術成果のみならず互いの信頼関係を蓄積している。31 年度以降も研究事業を継続的に実施し、５年ごとに研究成果を論集というかたちで結実させ、長期的な発展を視野に含めた上で、本事業を展開していきたい。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2133F

中期計画の項目	2-(1)-③-3)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-3)	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 3)重要文化的景観等の保存・活用に関する調査研究 文化的景観及びその保護に関する景観の調査及び保護に関する調査研究の成果をまとめる。また、文化的景観の保存・活用に関する研究集会を開催するとともに、前年度に開催した研究集会の成果をまとめ、報告書を刊行する。
プロジェクト名称	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	
文化遺産部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○中島義晴（景観研究室長）、惠谷浩子（景観研究室研究員）、本間智希（景観研究室アソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】

○基礎的・体系的研究

・11 月 18 日に当研究所において文化的景観研究集会（第 10 回）を開催した。文化的景観と考古学との関係をテーマとして、葛飾柴又や五島等の事例を踏まえ市町村の文化財保護担当者や大学等の研究者等とともに検討した。参加者は約 90 人であった。

・29 年度に開催した文化的景観研究集会「地域らしさを支える土木」の報告書を刊行した（刊行物ウ）。

○文化的景観保護に関する現地調査・研究

・京都市等をフィールドに、市の担当部局への協力を通じて文化的景観の価値や継承等に関する検討を行った。

・当研究所ウェブサイトにおいて公開している重要文化的景観選定地区の情報について、最新情報を追加した。

第 10 回文化的景観研究集会

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、近年注目されている公共工事と景観との調和について文化的景観保護の観点から検討しその成果を報告書として刊行することができた。②独創性においては、地域の歴史の理解に欠かせない遺跡を扱う考古学と文化的景観保護との関係に着目し分野の横断等の現状や課題を把握することができた。③発展性においては、研究集会等で文化的景観保護に関する最近の様々な事例を収集、検討できたことにより、今後のさらなる発展を期待できる。④継続性においては、研究集会を過去の成果を踏まえつつ開催し、また、重要文化的景観選定地区の情報を更新することができた。以上から本事業は大きな成果を上げていると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・論文等数　4 件（ア） ・研究発表等数　4 件（イ） ・報告書等の刊行数　1 件（ウ）	定量評価 ―

ア惠谷浩子「自然が織りこまれた南禅寺別邸群の庭―疏水のネットワークとアカマツの広がり」『琵琶湖疏水の学習 4』30 年 8 月　ほか 3 件
イ惠谷浩子「文化的景観の調査研究・普及・保全に関する取組み」30 年 12 月、ほか 3 件
ウ奈文研『地域らしさを支える土木 第 9 回文化的景観研究集会報告書』31 年 3 月

中期計画評価	B

中期計画記載事項	文化的景観の保存・活用の促進等を図るため、重要文化的景観に関する情報を収集・整理し、成果を公開する。あわせて、複数の事例研究により文化的景観の調査手法の体系化を行う。
評定理由及び今後の見通し	研究集会の開催や現地調査の実施等により、当初の計画通り研究を遂行できた上、研究集会では文化的景観の概念及び調査・計画等の体系化に関する検討を深め、また、研究成果の刊行及びウェブサイトの更新をして情報を継続的に公開し、保護行政・学術研究への貢献を図った。現地調査・研究では、保存計画や整備・活用計画の策定について検討を深められたことは評価できる。 31 年度以降は、文化的景観の保存計画や整備活用事例の基礎的な情報収集、また、個別の事例・課題に対する検討を行い、成果の公表等をしていく。

【書式Ｃ】　施設名　奈良文化財研究所　処理番号　2134Fア

中期計画の項目	2-(1)-③-4)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-4)-ア	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 4)全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究 我が国の埋蔵文化財及びその保存・活用に関し、以下の調査研究を行う。 ア　全国の遺跡のうち官衙・古代寺院を中心とした資料収集及び分析に有効な指標や手法についての研究を進め、その成果をデータベース化して順次公開する。
プロジェクト名称	遺跡データベースの作成と公開	
埋蔵文化財センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○金田明大（遺跡・調査技術研究室長）、村田泰輔（遺跡・調査技術研究室研究員）、馬場基（都城発掘調査部主任研究員）、小田裕樹（都城発掘調査部考古第二研究室研究員）、ほか	

【年度実績と成果】

・29 年度開催した第 21 回古代官衙・集落研究集会の報告書など（ア・イ）を編集・刊行した。
・都城に関する報告書の資料収集をおこない、建物・遮蔽施設その他政庁を構成する遺構を収集・整理した。
・上記のデータを基に第 22 回古代官衙・集落研究集会「官衙・集落と大甕」の研究報告資料（ウ）および、当日配布の『甕据付建物遺構集成』（エ）を作成した。
・新たに刊行された官衙関係遺跡・寺院遺跡についての資料をデータベース化し、新出資料も追加して一般公開した。
・井戸遺構に関する資料を追加収集した。
・皇朝十二銭に関するデータベースを作成し、資料収集・整理しデータベース化した。
・か帯に関する資料収集をおこなった。

研究報告資料と配布資料

データベース画面

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性：文化財保護行政で需要の高い官衙遺跡の基礎情報を提供し、研究と保護の施策を講じる上で寄与している。②独創性：全国を網羅し、多彩なデータベース項目を備えることで多様な分析が可能であり、他に類を見ない。③発展性：公開データ地域・件数、データ種類を広げている。④効率性：官衙・集落遺跡の研究は、膨大な量のデータを比較検討する必要があり、それを効率よく検索・集計することに大きく寄与している。⑤継続性：長期にわたり情報の追加と改定を継続してデータベースのさらなる充実化を図り、報告書等により公開している。以上の様に、各観点からみて、所期の目標を十分に達成していると認められ、Ｂと評価する。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	A

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ◆データベース入力補訂件数 官衙：遺跡 199／文献 1188／建物 546／画像 760 古代寺院：遺跡 8／文献 445／建物 104／画像 152：古代井戸：遺跡 69／文献 427／井戸 547 皇朝十二銭：遺跡 204／文献 964／銭データ 510 か帯：遺跡 191／文献 415 ◆公開データ数：合計　104,677 件　報告書件数：2 件　（ア、イ）	定量評価 ―

ア第 21 回古代官衙・集落研究会報告書『地方官衙政庁域の変遷と特質』報告編、30 年 12 月
イ第 21 回古代官衙・集落研究会報告書『地方官衙政庁域の変遷と特質』資料編、30 年 12 月
ウ第 22 回古代官衙・集落研究会『官衙・集落と大甕　研究報告資料』30 年 12 月
エ第 22 回古代官衙・集落研究会『甕据付建物　遺構集成』30 年 12 月

中期計画評価	B

中期計画記載事項	遺物及び遺構の解明とその保存・活用の促進等を図るため、官衙・集落遺跡、古代瓦等に関し全国的な情報収集及び連携に基づく調査研究を実施し、成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	研究は計画通り順調に進捗した。継続的な情報の蓄積が着実に図られており、我が国の古代官衙・集落研究に寄与するところが大きい。当研究所が推進する「全国遺跡報告総覧」等を効果的に活用する上でも、特に需要の多い官衙・集落・井戸について、その効率的な分析・研究を支える本データベースは重要である。今後も継続して情報の収集と公開活用を推進したい。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2134F イ-1

中期計画の項目	2-(1)-③-4)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-4)-イ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 4)全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究 我が国の埋蔵文化財及びその保存・活用に関し、以下の調査研究を行う。 イ　古代官衙・集落遺跡に関する研究集会、古代瓦に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。
プロジェクト名称	古代官衙、集落遺跡等に関する研究集会の実施、報告書の刊行	
都城発掘調査部（平城）	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○馬場基（史料研究室長）、林正憲(主任研究員)、小田裕樹・大澤正吾(考古第二研究室研究員)、清野陽一（考古第三研究室研究員）	

【年度実績と成果】

(1)第 22 回古代官衙・集落研究集会「官衙・集落と大甕」(12 月７～８日、於：平城宮跡資料館講堂）を開催。

研究報告は、小田裕樹「宮都における大甕」、川畑誠「北陸における官衙・集落と大甕」、田中広明「古代官衙・集落と大甕」、木村泰彦「長岡京の甕据付建物と大甕」、木村理恵「大甕の生産と流通の変遷について」、三舟隆之「大甕を使う」の計 6 本。報告後、会場からの質問や意見を交えつつ、西山良平氏の司会により報告者を中心とした討論を行った。また、研究集会に際しては、報告資料集（ウ、エ）を編集・刊行し、参加者等に配布した。

(2)『第 21 回古代官衙・集落研究会報告書　地方官衙政庁域の変遷と特質　報告編／資料編』(奈良文化財研究所研究報告 20 冊）(ア、イ)の刊行

29 年度開催した第 21 回研究集会の報告書を刊行し、研究成果の公開を行った。

第 22 回古代官衙・集落研究集会の様子

年度計画評価	B

【評定理由】

以下の各観点から評価を行った。①適時性においては、古代官衙・集落遺跡の調査・研究推進における重要かつ適切な課題を設定し、第 22 回研究集会を開催し、29 年度に開催した第 21 回研究集会の成果を、遅滞なく研究報告書として刊行し、広く公開した。②独創性においては、従来注目されていなかった官衙・集落遺跡出土大型貯蔵具に焦点を絞り、各地域・遺跡での出土様相や使用形態などの特徴を抽出する作業を通じて、大型貯蔵具の特性および遺構・遺跡の歴史的意義づけを論じることができた。③発展性においては、大型貯蔵具という新規の視点の提示と共有によって、今後多くの地域・遺跡での分析が積み上げられ、豊かな成果を得ることができ期待される。④継続性においては、当研究所の事業として、継続的に研究集会を開催し、成果を刊行することで、多くの参加者を得てかつ研究の相互連携を深めることができた。

以上より、B と評価した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	A	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】**	定量評価
	・研究発表等数・・・・6 件 ・報告書等の刊行数・・2 件（ウ、エ） ・研究集会参加者 119 人。アンケート・回収率 107 人(回収率 90%)　大変有意義 67 人、有意義 36 人、普通 3 人、あまり有意義ではなかった 1 人、有意義ではなかった 0 人。	―

ア第 21 回古代官衙・集落研究会報告書『地方官衙政庁域の変遷と特質』報告編、12 月
イ第 21 回古代官衙・集落研究会報告書『地方官衙政庁域の変遷と特質』資料編、12 月
ウ第 22 回古代官衙・集落研究会『官衙・集落と大甕　研究報告資料』12 月
エ第 22 回古代官衙・集落研究会『甕据付建物　遺構集成』12 月

中期計画評価	B

中期計画記載事項	遺物及び遺構の解明とその保存・活用の促進等を図るため、官衙・集落遺跡、古代瓦等に関し全国的な情報収集及び連携に基づく調査研究を実施し、成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	・当初計画通り研究集会を実施し、報告書を刊行することができた。 ・研究集会報告・討論を通じて、古代国家形成の分析や古代都城研究に資する研究成果を得た。 ・全国の文化財担当職員等との調査・研究情報の交換を通じ、研究の質的向上に資した。 ・研究報告書の刊行によって研究成果を公表し、国民共有の財産となった。 本研究集会及び報告書は、古代国家形成・古代都城研究に有益で、また全国の地方自治体の埋蔵文化財担当職員等の参加者からの期待も大きい。今後も継続的に事業を推進する必要があり、適切なテーマ設定による質の高い研究集会の開催を進めていきたい。

【書式C】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 2134F イ-2

中期計画の項目	2－(1)-③-4)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-4)-イ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 4)全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究 我が国の埋蔵文化財及びその保存・活用に関し、以下の調査研究を行う。 イ　古代官衙・集落遺跡に関する研究集会、古代瓦に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。(都城)
プロジェクト名称	古代瓦に関する研究集会の実施、報告書の刊行	
都城発掘調査部 (平城)	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○)】** ○清野孝之（都城発掘調査部考古第三研究室長)、今井晃樹・林正憲・岩戸晶子（主任研究員)、石田由起子・清野陽一（考古第三研究室研究員)、道上祥武（考古第三研究室アソシエイトフェロー)	

【年度実績と成果】

(1) 第 19 回シンポジウム　8 世紀の瓦づくりⅧ「一本づくり・一枚づくりの展開２」(31 年 2 月 2・3 日、於:平城宮跡資料館講堂）を開催。29 年度、東日本を対象にしたのに引き続き、30 年度は西日本を対象とした。研究報告は、

北村圭弘「近江地域の一本づくり・一枚づくり」　((公財)滋賀県文化財保護協会)
藤田智子「山城地域の一本づくり・一枚づくり」　(京丹後市教育委員会)
谷崎仁美「摂津・河内・紀伊地域の一本づくり・一枚づくり」　(龍谷大学文学部)
村田和弘・垣内拓郎「近畿北・西部の一本づくり・一枚づくり」
(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)・((公財)兵庫県まちづくり技術センター)
松尾佳子「山陽地方の一本づくり・一枚づくり」　(岡山県古代吉備文化財センター)
榊原博英「山陰地方の一本づくり・一枚づくり」　(浜田市教育委員会)
岡本治代「四国地方の一本づくり・一枚づくり」　(徳島県立博物館)
山口　亨「九州地方北部の一本づくり・一枚づくり」　(佐賀市教育委員会)
金田一精「九州地方南部の一本づくり・一枚づくり」　(熊本市経済観光局 熊本城総合事務所)

の計 9 本。

報告後、報告者を中心とした総合討論会を開催し、会場からの質問や意見を交えつつ、討論を行った。

シンポジウムに際しては、発表要旨集（ア)、資料集（イ）を編集・刊行し、参加者等に配布した。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性において、当初の予定通り第 19 回シンポジウムを開催した。②独創性については、従来の軒瓦のみを対象とした研究ではなく瓦の製作技法そのものに注目することにより、瓦生産を総体的に検討し 8 世紀における中央と地方との関係の具体相を把握することができた。③発展性においては、製作技法そのものの研究のため、軒瓦のみではなく出土瓦の大半を研究対象とすることで、軒瓦の出土しない遺跡をも検討することができた。④効率性においては、全国の資料を一所で集中的に検討することにより、各地の瓦生産の特性を逐一確認し議論することができた。⑤継続性においては、29 年度の同一のテーマを西日本の資料を中心に検討することができた。以上から、本事業を計画通り着実に実施したと言える。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	B	B

【目標値】	**【実績値・参考値】** (参考値) ・論文等数・・・・・・9 件 ・研究発表等数・・・・9 件 ・報告書等の刊行数・・2 件（ア、イ） ・研究集会参加者 126 人。アンケート・回収 78 人(回収率 62%)	定量評価 ―

ア「第 19 回シンポジウム　8 世紀の瓦づくりⅧ　一本づくり・一枚づくりの展開２」31 年 2 月
イ「第 19 回シンポジウム　8 世紀の瓦づくりⅧ　一本づくり・一枚づくりの展開２　資料集（西日本編)」31 年 2 月

中期計画評価	B

中期計画記載事項	遺物及び遺構の解明とその保存・活用の促進等を図るため、官衙・集落遺跡、古代瓦等に関し全国的な情報収集及び連携に基づく調査研究を実施し、成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	瓦を通じて、古代社会の実相に迫るという計画を着実に実施し、予定通り研究集会を開催、有意義な報告と多くの参加者を得たことから、十分な成果を上げていると考え、Ｂと判定した。 今後も、計画的・継続的・着実に事業を推進し、文化財研究の水準の底上げに資していきたいと考えている。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2135F

中期計画の項目	2-(1)-③-5)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-5)	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 5)水中文化遺産に関する調査研究 国内の水中文化遺産の調査に取り組むとともに、主に海外の水中文化遺産に関する調査研究及び保存活用の事例を調査し、今後の取組に資する。
プロジェクト名称	水中文化遺産に関する調査研究	
埋蔵文化財センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（センター長）、清野孝之（都城発掘調査部考古第三研究室長）、金田明大（埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室長）	

【年度実績と成果】

○水中遺跡における遺物の現地保存に関する調査研究

・海底における鉄および銅の腐食ならびに木材のフナクイムシによる食害および腐朽について基礎データを蓄積した。

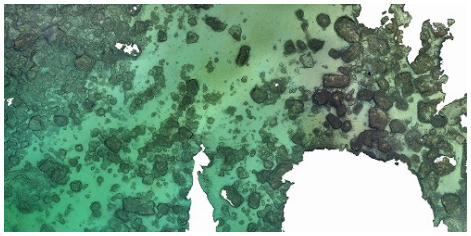
・水中での木製遺物の保管における酸素の供給が水質及び遺物に与える影響を明らかにし、海底での木製遺物の保存法に応用した。

・鷹島海底遺跡において、１号沈没船を現地保存するための埋め戻し法の検討を行い、効率的かつ経済的な埋め戻し法を考案した。31 年２月末に実施された埋め戻しにおいてモニタリング用の金属試料と木材試料を埋設するとともに、環境モニタリングのセンサーを埋設した。

○水中遺跡の記録法に関する調査研究

・レジャー用廉価型サイドスキャンソナーを用いて簡便に水中遺跡の状況を把握することが可能であることを明らかにした。

・水中カメラによる水中遺跡の撮影データから多視点ステレオ画像（SfM/MVS）による三次元形状を求めることができることが明らかとなった。



水中遺跡の多視点ステレオ画像（SfM/MVS）による三次元形状

年度計画評価	A

【評定理由】

下記観点から評価を行った。①適時性：日本においては水中遺跡の調査研究は発展途上にあり、その調査法および保存について先進的に研究を展開した。②独創性：安価で簡便な方法を用いることで市町村教育委員会でも水中遺跡の把握が可能となるという点は調査体制をいかに確立していくかという点においてきわめて独創的なものといえる。③発展性：水中遺跡の把握は高額な予算を必要とするが、レジャー用の廉価型サイドスキャンソナーや SfM/MVS 技術を用いることで簡便に水中遺跡の状況を把握することが可能であることが明らかとなった。このことは水中遺跡の把握を市町村教育委員会の職員でも実施できる可能性を見出したものであり、今後の水中遺跡の把握においてきわめて発展性が高いということができる。④効率性：鷹島海底遺跡で発見された元寇船の水中での現地保存に対して研究成果を基に埋め戻し法を開発し迅速に対応した。また、精度において劣るものの安価で簡便に水中遺跡の所在を把握できる方法は今後の水中遺跡の保護においてきわめて効率性を高めるものである。⑤継続性：鷹島海底遺跡における元寇船の現地保存の状況を海中において暴露試験と環境データのモニタリングを継続的に実施することでより有効な現地保存法の開発を実施することが可能となる点において重要な調査となっている。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） 論文等数：３件（ア） 研究発表等数：２件（イ）	定量評価

ア高田祐一、福家恭、山口欧志、金田明大：大阪城石垣石丁場跡における水中残石の調査、奈良文化財研究所紀要 2018

イ柳田明進、池田榮史、松田和貴、脇谷草一郎、高妻洋成：海底遺跡における埋め戻し法の差異が鉄製遺物の腐食に及ぼす影響、日本文化財科学会第 35 回大会（於奈良女子大学）30 年７月 7－8 日

中期計画評価	A

中期計画記載事項	国内の水中文化遺産の調査に取り組むとともに、主に海外の水中文化遺産に関する調査研究及び保存活用の事例を調査し、今後の取組に資する。
評定理由及び今後の見通し	30 年度より新たに奈良文化財研究所において水中文化遺産の調査研究に着手したところである。水中文化遺産の保存については我が国は発展途上にあり、その調査研究は極めて重要であり、継続して調査法、保存ならびに保護体制について今後調査研究を進展させる。水中遺跡の所在を簡便に把握する方法の研究および発見された元寇船の現地保存について、従来、奈良文化財研究所において蓄積されてきた調査研究の成果を基に、発展的に有効な開発研究を実践したことから、所期の目標を上回る成果が得られていることから A と評価する。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2211E

中期計画の項目	2-(2)-①-1)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-①-1)	①文化財の調査手法に関する研究開発の推進 1)デジタル画像の形成方法等の研究開発 さまざまな光源を用いた高精細デジタル撮影により、文化財が本来有する情報を目的に応じて正確・詳細に視覚化するための調査・研究を行い、その成果を公開する。その一環として、ガラス乾板等の過去に撮影された写真原版からの画像の取得手法に関する調査研究を行う。
プロジェクト名称	文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○二神葉子（文化財情報研究室長）、小山田智寛（研究員）、城野誠治（専門職員）、谷口毎子（研究補佐員）	

【年度実績と成果】

○デジタル画像の形成方法の研究開発

・不規則な平面を有する文化財の画像情報の取得・形成やガラス乾板など古写真の情報の活用を中心に検討した。所内プロジェクト、外部資金による他プロジェクトとも連携し、東京国立博物館所蔵の平安仏画など多数の文化財の光学的調査を実施した。

・媒体が脆弱で劣化が進み、資料情報の保全に緊急を要するガラス乾板からの画像取得については、当研究所所蔵のみならず、過去の文化財の姿を伝える貴重な資料を含んだ画像情報の利活用の促進のため、鎌倉芳太郎撮影ガラス乾板（重要文化財）など、外部機関が所蔵するガラス乾板からの画像取得を実施した。画像取得にあたっては、一般的に利用されるスキャナーではなく、カメラメーカーと共同でカスタマイズしたカメラを用いるなど、独自の手法により鮮明な画像を得られるよう工夫した。

○他機関と連携による情報共有・公開情報の作成

・文化財アーカイブズ研究室と連携し、『洋人奏楽図屏風 光学調査報告書』、『伊藤若冲菜蟲譜 光学調査報告書』及び『国宝 麻布著色吉祥天像』に関する調査研究成果を所内資料閲覧室で公開するにあたり、軽快な高精細画像の拡大・縮小に加え、蛍光X線分析による調査が行われた画面上のポイントと分析データを紐付けし公開できるよう加工した。

・エントランスロビーでのパネル展示「文化財の光学的調査と記録の継承」を6月1日から実施した。また、『春日権現験記巻十九・巻二十　光学調査報告書』を12月14日付で刊行した。

東京国立博物館所蔵
平安仏画の撮影

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、高精細の画像取得・蓄積は我が国の文化財に対する国内外の関心にこたえるものである。また、ガラス乾板は乳剤が寿命に達しており画像消失の恐れがあることからも、時宜に適っている。②独創性においては、光学的調査では独自に開発・選択した技術・機材を最大に活用、通常の機材では記録不能な可視光の全範囲などを記録できた。③発展性においては、データのウェブサイト公開では任意の撮影時の光源2種を選んでの画像の表示や同時拡大・縮小、蛍光X線分析の全データの掲載、分析ポイント選択での分析データの表示など、紙媒体にはない特徴を最大に生かした。④効率性においては、刊行物やエントランスロビーでの展示パネルを所内で編集し、効率よく活動を所内外に伝達できた。⑤継続性は、他プロジェクトとも連携し光学的調査を継続的に実施した。よって、所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	刊行物1件（ア） 論文4件（イ） 研究発表1件（ウ）	－

ア『春日権現験記絵巻十九・巻二十　光学調査報告書』（東京文化財研究所、12月14日）
イ 早川泰弘・城野誠治・皿井舞「春日権現験記絵の彩色材料調査（巻十九・巻二十）＜巻十九＞」（『春日権現験記絵巻十九・巻二十　光学調査報告書』pp.XRF4-27、東京文化財研究所、12月）ほか3件
ウ 城野誠治「光学的調査の方法と成果ー科学写真からわかること」那智参宮曼荼羅絵巻本の仕立てを探る、國學院大學、12月8日

中期計画評価	B

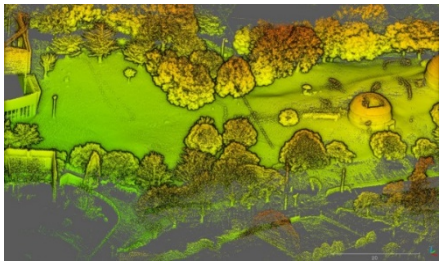
中期計画記載事項	文化財の現状及び経年劣化等の記録や解析に応用するため、デジタル画像の形成や3D記録製作等について研究開発を進める。
評定理由及び今後の見通し	30年度は、上記の中期計画の記載事項についていずれも所期の目標を達成した。31年度以降も、運営費交付金や外部資金による他プロジェクトと連携し、効率的に調査研究を実施する。研究成果については、「文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用」と連携し、ウェブサイトによる発信に引き続き努める。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2212F

中期計画の項目	2-(2)-①-2)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-①-2)	①文化財の調査手法に関する研究開発の推進 2)埋蔵文化財の探査・計測方法の研究開発 埋蔵文化財の調査における新たな手法の開発・導入と応用に関する研究を行う。特に、情報取得手段としての遺跡探査、地質の検証、遺構･遺物の計測についての手法及び資料の製作技法や形態に基づく資料分析、一般にむけてのＡＲ・ＶＲ、ゲーム等の利用を含めた成果を活用する方法について研究を進める。
プロジェクト名称	埋蔵文化財の探査・計測方法の研究開発	
埋蔵文化財センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○金田明大（遺跡・調査技術研究室長）、山口欧志（遺跡・調査技術研究室研究員）、西村康（ACCU所長：客員研究員）、西口和彦（桜小路電気社長：客員研究員）、中村亜希子（客員研究員）	

【年度実績と成果】

・平城宮、飛鳥・藤原地域等にて SLAM（自己位置推定と環境地図作成）等の技術を応用した遺構計測を実施した。
・日本文化財科学会第 35 回大会・日本考古学協会第 84 回において成果を発表した。
・第 3 回文化財方法論研究会を共同開催し、研究発表とワークショップによる研究成果と技術の普及をおこなった。
・廉価型 GNSS（全球測位衛星システム）測量器の精度・作業効率を比較し有効性を評価した。
・日本の遺跡における効率的なマルチチャンネル地中レーダーの試験を実施し、取得手法・機材の改良と有効性を確認した。
・奈良県平城宮跡・藤原宮跡・唐招提寺・富雄丸山古墳、京都府恭仁宮跡、山口県周防鋳銭司跡、広島県下岡田遺跡などの地形計測・遺跡探査を実施した。
・平城京、飛鳥・藤原地域、キトラ古墳壁画、鳥取県出土銅鐸等の計測を実施した。
・平城宮・京瓦基準資料の三次元計測を進め、データを蓄積した。
・文化庁・北海道・鳥取県・京都府立大学・インドネシア共和国ガジャ・マダ大学等の依頼により、地域の文化財担当者および大学生・大学院生向けの三次元計測の利用と活用に関する講習会を実施した。
・平城宮・京出土土器資料の三次元計測による土器製作技法の検討をおこなった。
・web や AR・VR、ゲームを利用した文化財デジタルデータの活用について、実際のデータを用いて試行した。



手持ち Lidar 計測成果

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、計測・探査など基礎的な分野の研究を行った。地方公共団体等からの計測・探査実施あるいは技術指導の依頼や災害復旧に伴う緊急の調査要請が多く、それらに即応して成果を上げた。②独創性において、自治体などでも導入可能な廉価な機器等を改良して文化財に特化した手法を確立し、新しい手法として普及を図っている。③発展性においては、既存の調査・研究の蓄積との連携に配慮しながら、地方公共団体等で簡便かつ廉価に導入可能な方法を開発しており、基礎的な記録手段として広範に普及しつつあり、文化財の調査方法の改良と得られたデータの利活用への基礎を担うものと考える。④効率性において、これまで取り組んできた遺跡・遺物の詳細なデータを従来の数十分の一の時間と労力で計測・記録する手法は普及段階に進んだ。⑤継続性においては、独法化以前からの研究資産・研究水準を引き継ぎつつ、不断の技術改良と現在の文化財研究及び保護に要求される水準に沿った研究を進め、成果を上げている。以上の様に、所期の目標を上回る成果が得られていると認められ、目標を満たしていることから B と評価する。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	B	A	A	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	探査件数：7 件　計測件数：10 件　論文等件数：9 件（ア～イ） 発表等件数：19 件　講習会開催　9 件	—

ア山口欧志　文化遺産のデジタルドキュメンテーションの現状と課題　日本考古学協会第 84 回総会発表要旨（30 年 5 月）
イ金田明大　SLAM 技術を用いた森林内遺構の迅速な計測　日本文化財科学会第 35 回大会発表要旨集（30 年 7 月）

中期計画評価	B

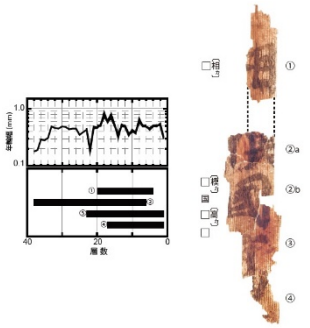
中期計画記載事項	遺跡調査の質的向上及び作業の効率化等を図るため、遺跡の探査・計測等の調査手法に関する研究開発を進める。
評定理由及び今後の見通し	30 年度は 29 年度に続いて考古学研究及び発掘調査の手法開発に寄与する研究開発と、研究発表や講習会開催などによる成果の普及を行い、成果を上げた。各地の研究者・文化財担当者の依頼を受け、調査を実施するとともに、複数の県や大学、海外から文化財担当者向けの講習会の要請があり、これに対応したことも特筆される。今後も行政における埋蔵文化財調査に資する研究を推進したい。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2213F

中期計画の項目	2-(2)-①-3)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-①-3)	①文化財の調査手法に関する研究開発の推進 3)年輪年代学を応用した文化財の科学的分析方法の研究開発 出土遺物、建造物、美術工芸品等の木造文化財の年輪年代調査を実施し、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の研究に資するとともに、年輪データの蓄積を進める。また、マイクロフォーカスX線CTを用いた非破壊調査手法や、年輪年代学的手法による同一材推定の応用等、分析方法の研究開発を進め、これらの研究成果を公表する。
プロジェクト名称	年輪年代学研究	
埋蔵文化財センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（埋蔵文化財センター長兼年代学研究室長）、　星野安治（埋蔵文化財センター主任研究員）ほか客員研究員4名	

【年度実績と成果】

・出土遺物、建造物、美術工芸品等の多岐にわたる木造文化財を対象とした年輪年代調査・研究を実施した。
・出土遺物の調査・研究：大阪府近大山賀遺跡の方形周溝墓から出土した木棺材の年輪年代測定をおこない、弥生時代前期末から中期初頭の年代を得ることができた
・また、平城第524次調査（法華寺旧境内隣接地）から出土した削屑木簡を年輪年代学的な視点から観察することで、同一材に由来する群に分類し、同一簡について検討することによって、これまで不明確であった削屑木簡の接合を見出した。
・建造物・美術工芸品の調査・研究：滋賀県鞭崎神社本殿の年輪年代測定、また、解体修理に伴う栃木県輪王寺三仏堂の馬頭観音坐像、阿弥陀如来坐像、千手観音坐像の年輪年代測定をおこなった。



同一材推定成果に基づく
削屑木簡の接合状況

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、発掘調査や解体修理の進捗状況に対応した年輪年代調査を実施した。②独創性および③発展性においては、従来、年代測定を目的に活用されてきた年輪年代学的手法を、木簡の同一材推定に活用し、接合する削屑木簡を見出すなど、独創性を発揮するとともに、古代史学への波及が期待できる。④効率性においては、デジタル画像技術の活用により、多数の削屑木簡を調査対象として供するなど、効率的かつ正確に年輪年代調査を実施した。⑤継続性においては、各地域の年輪データの蓄積を継続的に実施し、標準年輪曲線の拡充を図っている。以上のように、順調に事業が推移していると判断し、評価を行った。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	B	A

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	・論文等：7件（ア） ・発表等：3件（イ）	—

ア年輪年代学的手法による木簡研究の可能性、木簡研究40、30年11月25日ほか6件
イ年輪年代学的手法による平城京左京二条二坊十四坪出土木簡の同一材推定、第33回日本植生史学会大会、30年11月11日ほか2件

中期計画評価	A

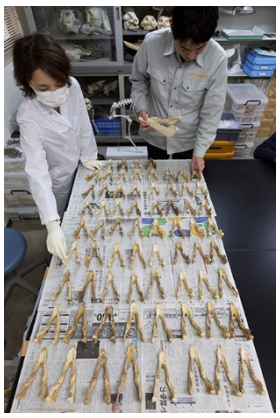
中期計画記載事項	年輪年代調査による木造文化財の年代確定に資するため、年輪データの地域性に関する研究を進める。また、年輪年代の非破壊調査等の新たな手法に関する研究開発を進める。
評定理由及び今後の見通し	年輪年代調査・研究を通して、各種文化財に資する情報を提供することができた。弥生時代の方形周溝墓出土木棺材や、近世の建造物および仏像の年輪年代測定を実施したことにより、考古学・建築史学・美術史学等に大きく寄与すると考えられる。また、従来、主に年代測定の手段として使用されることの多かった年輪年代学を、同一材推定の視点から木簡へ応用し、接合する削屑木簡を見出すことができた点も、30年度の大きな特徴である。今後、古代史学への貢献が期待されるなど、年輪年代学による調査・研究が発展的に進展するものと判断し、評価をおこなった。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2214F

中期計画の項目	2-(2)-①-4)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-①-4)	①文化財の調査手法に関する研究開発の推進 4)動植物遺存体の分析方法の研究開発 平城宮跡・藤原宮跡等から出土する動植物遺体の調査を実施して古環境や動植物資源利用の歴史を明らかにするとともに、多様な調査手法について基礎的な研究を行う。また、環境考古学研究の基礎となる現生標本を継続的に収集して、公開する。
プロジェクト名称	動植物遺体の調査研究	
埋蔵文化財センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（埋蔵文化財センター長）、山崎健（環境考古学主任研究員）、松崎哲也（環境考古学研究室アソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】

○ 堂の前遺跡（岩手県）、金井東裏遺跡、金井下新田遺跡（群馬県）、前田耕地遺跡（東京都）、保美貝塚（愛知県）などの遺跡から出土した動物遺存体や骨角製品を分析した。
○ 群馬県の金井東裏遺跡から出土した古墳時代の小札、鉄鏃装具、鉄鉾装具、刀子柄について、分析をおこなった。種同定ができた資料はすべて鹿角であり、保存条件には恵まれていない内陸部の様相がうかがえる貴重な事例となった。
○ 藤原宮下層運河や平城京右京一条二坊四坪ほかにおいて、古環境復元のための調査分析をおこなった。
○ 現生骨格標本の収集と公開を進めた。また、三次元計測による立体的な骨格図譜の Web サイト（3D Bone Atlas Database）は、部位を増加して、高精細なデータに更新した。
○ 研究成果の発信として、International Conference of Archaeozoology や日本動物考古学会、日本魚類学会などで発表をして、研究成果の社会還元や普及事業として松阪市文化財センターはにわ館で講演をして、一般向け書籍に執筆した。



現生標本の整理

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、地方公共団体からの多様な依頼や相談を受けながら、東日本大震災の復興事業に伴う支援要請にも対応し、成果を上げた。②独創性においては、日本列島で初めての出土事例となる鹿角製小札や銀・鹿角併用装鉾の分析を実施して、古墳時代の鹿角利用を明らかにできたことは特筆できる。③発展性においては、貝塚調査が急増した東北地方の動物利用について、岩手県で開催された日本動物考古学会で今後の研究視点を提示した。④効率性においては、一定の精度を確保しながら分析方法を工夫することにより、復興事業に伴う発掘調査による膨大な出土資料の分析に対応した。⑤継続性においては、研究の基礎となる現生標本の継続的な収集・作成・管理・公開するとともに、三次元計測による立体的な骨格図譜の Web サイトも拡充・更新した。以上の様に、所期の目標を十分に達成していると認められ、Bと評価する。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】 ・論文等数：6 件（ア、イ） ・研究発表等数：8 件（ウ）	定量評価 —

ア山崎健「骨角製品（武器・武具・工具）の素材同定」『金井東裏遺跡発掘調査報告書』、31 年 3 月 31 日
イ松崎哲也「椎骨の形態比較によるマグロ属同定への試み」『日本動物考古学』36、31 年 3 月 31 日、ほか 4 件
ウ山崎健ほか「東北地方における貝塚調査の現状―宮城県・岩手県を中心として―」『日本動物考古学会第 6 回大会』、6 月 16 日、ほか 7 件

中期計画評価	B

中期計画記載事項	過去の生活・生業活動の解明等を図るため、分析に必要不可欠な現生の動植物標本を収集・整理するとともに、発掘調査等で出土した動植物遺存体等の調査手法に関する研究開発を進める。
評定理由及び今後の見通し	研究は、計画通り順調に進展した。30 年度は火砕流堆積物に覆われた群馬県金井東裏遺跡の出土資料を分析して、大きな成果を得ることができた。31 年度は隣接した金井下新田遺跡で同じく火砕流堆積物の直下から出土した資料を分析していく予定である。また、31 年度も復興調査の支援要請を受けており、継続的に取り組みながら、これまでに得られた研究の意義や成果を地元に還元させていきたい。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2221E

中期計画の項目	2-(2)-②-1)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-②-1)	②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究 1)生物被害の予防と対策に関する調査研究 歴史的建造物、古墳環境等生物制御が困難な空間にある文化財を対象として、簡易・迅速な生物モニタリング手法を用いた実践的な応用研究を展開するとともに、虫菌害被害を受けた文化財に対する環境低負荷型の防除方法や生物被害痕跡のクリーニング技術の普及に向けた課題を整理する。
プロジェクト名称	文化財の生物劣化の現象解明と対策に関する研究	
保存科学研究センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○佐藤嘉則（生物科学研究室長）、小峰幸夫（アソシエイトフェロー）、佐野千絵（センター長）ほか	

【年度実績と成果】

○歴史的木造建造物における環境低負荷型の殺虫処置方法である湿度制御温風殺虫処理について、日光山中禅寺鐘楼で国内2例目となる現地処理を実施した。また、その際に当研究所が開発した殺虫処理効果判定システムを導入した。
○湿度制御温風殺虫処理について、29年度に実施した現地処理の成果と課題を共有するため専門家会合を開催した。
○文化財害虫の早期検出に役立つ新しい技術として、遺伝子解析を応用した害虫同定法に関する基礎研究を進めた。特に30年度は文化財害虫標本の収集と遺伝子塩基配列データベースの構築を進めた。
○津波で被災した文化財の微生物劣化機構解明に関する研究で、特に民俗資料と古文書について詳細に解析を行った研究成果をまとめ、国際会議で報告を行った。
○油彩画表面に発育したカビの分離同定及び顔料上での発育特性について調査研究を継続し、その成果を学会発表及び学術雑誌を通じて報告した。
○浮遊菌を簡易・迅速に測定できる新たな機器を用いて、実際にカビの被害がある博物館収蔵庫を調査地としてデータ収集の調査を継続して行った。

日光山中禅寺鐘楼の湿度制御温風処理の様子

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性と③発展性においては、管理保全計画策定の中で高い需要が今後ますます期待される歴史的木造建造物の温風殺虫処置方法の実施に向けた基礎研究を先導して実施した点とこれを現地の応用まで展開しつつある点を高く評価した。②独創性においては、文化財害虫の遺伝子解析に基づく同定手法に関する基礎研究や津波被災文化財の微生物劣化機構の解明などの研究課題は高い独創性があると評価した。④効率性においては、大学や他の研究機関と綿密な連携体制を作り、それぞれの組織の専門性を生かして分担しながら基礎研究を遂行し、新しく加わった客員研究員も含めてきわめて効率よく実施できた点を高く評価した。⑤継続性においては、微生物に起因する文化財の劣化現象の解明という普遍的なテーマについて、油彩画表面に発育した微生物の性状分析研究を通して継続的に研究を実施し成果を得た。よって、所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が進行していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	B

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） ・論文・報告：合計3件（ア、イ、ウ） ・学会発表：合計8件（エ、オほか6件）	定量評価 ―

ア「文化財の保存技術の概説とその事例～生物劣化とその対策～」（佐藤嘉則、『空気調和・衛生工学』92号、5月）、イ「湿度制御した温風処理における殺虫効果判定の検証」（小峰幸夫、佐藤嘉則ほか4人、『保存科学』58号、31年3月）、ウ「歴史的木造建造物におけるチビケカツオブシムシの発生」（小峰幸夫、『Urban Pest Management』8号、11月）、エ Culture-based and molecular-based analysis of the fungal community on tsunami disaster-affected cultural properties, (Y. Sato and R. Kigawa, The International Biodeterioration and Biodegradation Society 2018 meeting -New Trends in Cultural Heritage Biodeterioration-, University of Coimbra, Portugal, 9月5～7日)、オ「湿度制御した温風処理による甲虫類の駆除―社寺建築における効果の検証―」（藤井義久、佐藤嘉則、小峰幸夫ほか9人、文化財保存修復学会第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと、6月16日）ほか6件

中期計画評価	A

中期計画記載事項	大規模燻蒸に替わる虫菌害対策のシステム化をより向上させるため、浮遊微生物量の短時間・連続測定など新しいモニタリング技術について基礎研究を行う。屋外環境においては、木造建造物や古墳など環境制御が困難な場所における生物被害の予防策および対処法に関する調査研究を行う。
評定理由及び今後の見通し	中期計画の3年目として30年度は、歴史的木造建造物に対する湿度制御温風殺虫処理法に関する専門家会合、2回目の現地処理を実施することができ、大規模燻蒸に替わる屋外文化財の虫害対処法については非常に順調に研究が進捗しているといえる。当初予定にはなかった油画の生物被害の研究にも成果を上げ、所期の計画を上回る研究を進めることができた。31年度以降も、引き続き、本研究業務を遂行する予定である。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2222E

中期計画の項目	2-(2)-②-2)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-②-2)	②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究 2)文化財の保存環境と維持管理に関する調査研究 白色 LED 照明下における展示物の視認性の特徴について科学的検証を進め、また温湿度環境への影響について調査を行う。さらに、展示ケース内汚染物質軽減方法の検討と清浄化マニュアルの普及を行う。
プロジェクト名称	保存と活用のための展示環境の研究	
保存科学研究センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○吉田直人（前保存環境研究室長）、○佐野千絵（センター長（兼）保存環境研究室長）、石井恭子（研究補佐員）	

【年度実績と成果】

○白色 LED の発光特性と彩色絵画の色彩の見えについて研究を進め、反射スペクトルは各 LED 照明の波長特性に依存し、色ずれが起こること、輝度分布は LED 照明の直進性と表面の各色材の粗密などの影響を受けて見えが変わることなど、基本的な情報を数値化して得ることができた。

○白色 LED の美術館等への導入にあたり学芸員が参考にできる技術指針を、日本照明学会美術館・博物館照明技術指針作成委員会と協働して原案をまとめた（委員長：佐野千絵）。この活動の中で、白色 LED の光科学作用は美術館博物館用蛍光灯と同等で、色温度が小さいほど文化財への損傷度は小さくなることを導出した。また、放射による加熱の影響は使用電気量が小さいことから蛍光灯等の従来光源に比較して小さいことを明示した。以上から、文化財保護のためには白色 LED の利用は好ましいとの結論を提示した。

展示室内における空気汚染調査の様子

○空気清浄化マニュアルの普及を目的に、フォローアップ研修での講演、文化財保存修復学会大会でのポスター掲示を行い、30 年度寄せられた学芸員からの意見を取り入れ、改訂版を年度末までに当研究所ウェブサイトへの掲載準備を実施した。

○これまでの研究実績を生かし、国際文化遺産協力センターの事業に協力し、イラン国立博物館の館内環境に関して、窒素酸化物、硫黄酸化物、アンモニア、有機酸、揮発性有機化合物の調査を現地で実施し、外気流入の多い場所では大気汚染の影響が大きいこと、木製の展示ケース内は有機酸濃度が高いこと、展示室内はアンモニア濃度がやや高いことがわかった。改善の方向について検討した。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、LED 展示照明への転換は喫緊の課題であり、文化財への影響と見えの違いを科学的に検証することは当研究所に求められていたが、ある程度の到達点に達することができた。②独創性においては、LED の直進性と表面の状態に着目し、従来光源の反射則が適用できるか検証しており、従来にはない視点である点を評価した。③発展性においては、学芸員の求めている情報を優先して検討し、文化財保護に適した照明であることを検証した点を発展性が高いと評価した。④効率性においては、大学教員である客員研究員の協力を得られ、多数の分野の LED 照明に係る専門家を効率的に集め検証が進められた。⑤継続性においては、空気環境清浄化に関する長年の研究成果の蓄積が、国際的な研究協力にも発展したことを評価した。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） 論文 1 件（ア）、学会発表 2 件（イ、ウ）	定量評価 －

ア「History of Environmental Inspection of Museums When Borrowing Objects Designated as Important Cultural Properties of Japan」（吉田直人ほか、Turin Congress 2018, International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works、9 月 14 日）、イ「白色 LED の発光特性と彩色絵画の色彩との関係について」（吉田直人、文化財保存修復学会第 40 回大会、6 月 16 日）、ウ「合板からの酢酸放散挙動と博物館展示ケースで用いるための選定指標」（佐野千絵ほか、日本建築学会、9 月 4 日）

中期計画評価	B

中期計画記載事項	文化財の展示照明として導入が進む白色 LED、有機 EL 光源が文化財の保存に与える影響並びにその展示照明としての評価方法を検討する基礎研究を実施し、照明に関する新たな基準作成に資する。また、文化財に影響を与える展示ケース内汚染物質の軽減方法に関して検討を行い、空気清浄化マニュアルを作成して成果普及を図る。
評定理由及び今後の見通し	中期計画に沿って 30 年度は、所期の計画通り順調に成果を挙げることができた。LED 照明の研究については、今後はデータ収集などの基礎的な作業が中心となるため、31 年度は、これまでの成果を下に、成果の普及公開に注力する予定である。また空気清浄化については、木材使用を避けられない日本の博物館展示環境においては普遍的な課題であり、環境監視や制御方法について検討を続ける。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2223E

中期計画の項目	2-(2)-②-3)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-②-3)	②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究 3)可搬型分析機器を用いた文化財の材質・構造、及び保存状態に関する調査研究 複数の可搬型機器を活用して、絵画・工芸品・建造物等に関する高精度な材質・構造・状態調査を行う。新規導入の高精度蛍光X線分析装置の立ち上げとその場分析への適用を行う。これまでに調査した絵画作品の調査報告書を刊行する。
プロジェクト名称	文化財の材質・構造・状態調査に関する研究	
保存科学研究センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○犬塚将英（分析科学研究室長）、早川泰弘（副センター長）、城野誠治（文化財情報資料部専門職員）、岡田健（客員研究員）、古田嶋智子（客員研究員）	

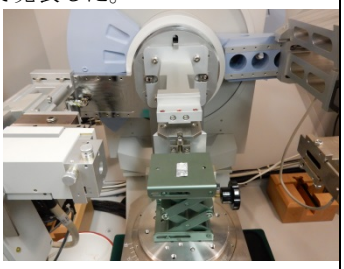
【年度実績と成果】

○可搬型分析装置を用いたその場分析

・可搬型蛍光X線分析装置による材料調査として、絵画、工芸品などの調査を実施した。平安～江戸期の日本絵画を集中的に調査し、彩色材料の変遷と多様性について検討を重ねた。

・煉瓦造建造物に析出している塩類の可搬型X線回折分析装置を用いたその場分析の結果と、周辺の温湿度環境・レンガの含水量との比較により、劣化と保存環境に関する検討を行った結果を日本文化財科学会にて発表した。

・可搬型X線回折分析装置を用いて、蒔絵硯箱の装飾に用いられている鉛材に発生した腐食生成物の分析を行った。その分析結果と金属試験片を用いた暴露試験の結果から、劣化のメカニズムを解明するための検討を行った。



金属試験片のX線回折分析

○据置型蛍光X線分析装置を用いた元素マッピング分析

・29年度末に新規導入した据置型蛍光X線分析装置を用いて、青銅試料、典籍などの元素マッピングを実施し、材料の分布に関する調査を行った。

○研究成果発表

・これまでに得られた調査結果などをまとめて、論文2件、学会発表2件の研究成果発表を行った。また、これまでに調査を実施した絵画作品に関する光学調査報告書を刊行した。

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、絵画、工芸品などの様々な種類の文化財の調査時に、それぞれの目的に応じて最適な分析手法を選択し、可搬型及び据置型分析装置を用いた調査を迅速に実施した。②独創性においては、煉瓦造建造物での析出塩類や鉛に発生する腐食生成物の分析を行い、それらを取り巻く保存環境と照らし合わせて、文化財の劣化要因についての新たな検討を行った。③発展性においては、新たに据置型蛍光X線分析を用いたマッピング分析を開始し、その場分析の可能性を広げた点を高く評価した。④効率性においては、分析装置の設置方法やデータ解析法の改良を重ねることにより、分析調査の効率が向上した。⑤継続性においては、同一の手法を用いた分析を継続することにより、分析結果の精度を担保している。よって、所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	B	B

【目標値】	**【実績値・参考値】** ・論文等2件（ア、イ）、学会発表等2件（ウ、エ）、報告書等2件（オ、カ）	定量評価 －

ア「国宝日月四季山水図の蛍光X線分析」（早川泰弘、城野誠治『保存科学』58号、31年3月）、イ「桐箱、キリ材から放散する化学物質とその影響」（古田嶋智子、犬塚将英『保存科学』58号、31年3月）、ウ「国宝信貴山縁起絵巻の彩色材料調査」（早川泰弘、城野誠治、日本文化財科学会第35回大会、7月6～8日）、エ「INAXライブミュージアム「窯のある資料館」における保存環境と塩類析出に関する調査（2）」（佐々木淑美、犬塚将英、日本文化財科学会第35回大会、7月6～8日）、オ『国宝 信貴山縁起絵巻 蛍光エックス線分析結果』（7月、東京文化財研究所）、カ『カトリック長崎大司教区所蔵　無原罪の聖母図（聖母マリアの御絵）光学調査報告書』（31年1月、東京文化財研究所）

中期計画評価	A

中期計画記載事項	各種の可搬型分析機器を用いた文化財の材質・構造に関する調査方法を確立し、日本絵画における顔料の変遷についての研究を進めるとともに、金工品等における黄銅（真鍮）材料の利用実態を明らかにする。新たに可搬型X線回折装置を導入し、各種文化財の保存状態等に関する調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	中期計画の3年目として30年度は、可搬型蛍光X線分析機器を用いた分析調査を行ったことにより、日本絵画で用いられている顔料についての研究成果が得られた。可搬型X線回折装置を活用することにより、金属製品に見られる腐食生成物や建造物に見られる析出塩類の分析を行い、これまで個別に現象として報告されていた文化財の劣化要因である空気汚染物質濃度と腐食との関連についての検討を、正確に根拠を持って進めた点に、所期の計画を上回る成果が得られていると評価した。また、据置型蛍光X線分析装置を用いて、真鍮が用いられている文化財のマッピング分析を実施した。31年度以降も、引き続き、本研究業務を遂行する予定である。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2224E

中期計画の項目	2-(2)-②-4)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-②-4)	②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究 4)屋外文化財の劣化対策に関する調査研究 屋外に所在する石造・木質文化財及び自然史資料を対象に、覆屋の機能・遺構の露出展示に関する課題として、周辺環境等の劣化要因の究明及び修復材料・技術に関する研究を行う。
プロジェクト名称	屋外文化財の劣化要因と保存対策に関する調査研究	
保存科学研究センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○朽津信明（修復計画研究室長）、柳沼由可子（研究補佐員）、前川佳文（文化遺産国際協力センター研究員）	

【年度実績と成果】

屋外に位置する各種の文化財の劣化状況、保存環境、保存対策について、以下の通り調査研究を進めた。

○新宮市の一遍上人名号碑や安来市の塩津神社古墳などでSfM（Structure from Motion）による三次元計測を試み、現在の劣化状況を記載し、それと環境との関係から望まれる保存対策を検討した。
○熊本地震で被災した古墳や、豪雨災害で被災した山都町の通潤橋など、被災文化財において被災状況の調査を行い、適切な修復方針の策定に寄与した。
○牧島アンモナイト館において化石産出露頭に着生する藻類について、過去に古墳などで行ってきた対処を応用してそれを軽減させる試みを実施した。
○あきる野市の大岳鍾乳洞、臼杵市の風連鍾乳洞、美祢市の秋芳洞など、各地の鍾乳洞で起きている、「照明をLEDに替えたら緑色生物が目立つようになった」という問題について調査を開始し、照度や照明の波長特性などのデータを蓄積し始めた。

アンモナイト館における藻類軽減対策の「蓋」

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、熊本地震で被災した文化財や、豪雨災害で被災した文化財の保存修復事業に対応してきている。②独創性においては、今まで文化財科学分野で取扱いが少なかった自然史資料に対して、人文資料でこれまで得られた成果の適用を開始した。③発展性においては、現在試みている自然史資料の保存における対策が効果を挙げれば、各地の同様の文化財への応用が期待される。④効率性においては、自然史系文化財と人文系文化財の両方を持つ市町村において、それぞれを個別に調査するのではなく、同じ機会に同一手法を用いて調査することにより効率化を図った。⑤継続性においては、現在自然史資料に適用している保存の考え方は既に人文資料では過去に試みているものであり、継続的に経過観察を行うことから長期的視点に立って評価を行える。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） ・論文等発表2件（ア、イ） ・学会・研究発表3件（ウ、エ、オ）	定量評価 －

ア「日本における石碑保存の歴史的事例とその考え方」(朽津信明、『保存科学』58号、31年3月)、イ Simple Evaluation of the Degradation State of Cultural Heritage Based on Multi-view Stereo. (Nobuaki Kuchitsu, Masayuki Morii, Shuji Sakai, and Hiroki Unten、『Progress in Earth and Planetary Science』2019 6:12号pp.1-9、31年2月、ウ「ウトグチ瓦窯跡における着生生物繁茂を与える光環境」(朽津信明、森井順之、柳沼由可子、文化財保存修復学会第40回大会　高知市文化プラザかるぽーと、6月16日)、エ「覆屋の藻類繁茂軽減効果に関する研究」(朽津信明、森井順之、犬塚将英、日本文化財科学会第35回大会、奈良女子大学、7月7、8日)、オ「過去に造られたレプリカを利用した露頭の風化速度の検証」(朽津信明、森井順之、柳沼由可子、酒井修二、運天弘樹、日本応用地質学会平成30年度研究発表会、札幌市教育文化会館、10月16、17日)

中期計画評価	B

中期計画記載事項	屋外に所在する石造物や木造建造物等について、凍結劣化や塩類風化、頻繁な生物被害などの屋外特有の保存環境要因、及び地震や水害などの自然災害による劣化・破損を軽減するための方法について調査研究を行う。
評定理由及び今後の見通し	中期計画の3年目として30年度は、所期の計画に沿って順調に各種文化財の劣化に関するデータが蓄積されていると判断した。特に自然史資料について、これまで人文資料で培ってきたノウハウを適用し、保存対策を具体的に提言し始めている。31年度以降は、対策の効果が具体的に評価できると期待される。

【書式Ｃ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2225E

中期計画の項目	2-(2)-②-5)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-②-5)	②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究 5)文化財の修復技法及び修復材料に関する調査研究 美術工芸品及び建造物等の修復においてこれまでに使用されてきた伝統材料及び今後使用が想定される新しい修復材料について、調査研究と評価を行う。29 年度までの成果を活かし、絹やセルロース等繊維を使用した文化財の保存修復方法の検討を行う。また、文化財クリーニング方法についても 29 年度までの成果をもとに、現場での処置方法を開発する。
プロジェクト名称	文化財修復材料と伝統技法に関する調査研究	
保存科学研究センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○早川典子(修復材料研究室長)、佐藤嘉則（生物科学研究室長)、倉島玲央（研究員)、藤井佑果（アソシエイトフェロー)、岡部迪子（研究補佐員)、菊池理予（無形文化遺産部主任研究員）ほか	

【年度実績と成果】

○文化財の伝統材料と修復材料に関する調査

・古典的製法で作製された膠に関する研究

古典的製法で作製された膠の基本物性の測定と現場での使用条件の確立を行った。これらの成果を東京藝術大学陳列館において「膠と修理　-『序の舞』を守る-」として 10 月 14～19 日に展示発表した。

・絵画の基底材に関する調査

30 年度は絵画の基底材の調査を行った。特に、絹糸の断面形状により絵画の彩色効果が異なること、その断面形状が時代によって異なる可能性があることに着目し、非破壊のデジタルマイクロスコープ調査を用いて絵画に使用されている絹の現地調査、及び参照資料の測定や分析を行った。併せて自然布の規定材に関する調査も行った。

東京藝術大学陳列館における「膠と修理」展示風景

・漆に関する調査

日本産の漆と東南アジアの漆の塗膜の硬度比較を行った。また、適切な保存環境についての条件確立を目指しこれらの強制劣化試験も行い、それぞれの比較検討をした。

○文化財の修復技法に関する研究

・ジェルクリーニング方法に関する検討

油汚損の文化財クリーニングへの適用などを目的に、ゲルを使用した場合の現場適用方法を検討した。汚れの除去効果に加え、作業環境の評価も行い、安全な有機溶媒の使用方法を調査した。

・11 月 22 日に「文化財修復の現状と諸問題に関する研究会」を開催した。参加者は 104 人であった。

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、新規クリーニング材料として注目されているゲルについての検討を行い、修復材料の可否にとどまらず、化学物質リスクアセスメントを進め、文化財や作業者にとってより安全な修復材料評価を進めた点でＡと判定した。②独創性においては、伝統材料の物性を検証し、保存修復に適した条件について検討を行っている点をＢと評価した。③発展性においては、得られたデータをもとに、今後、新たな修復材料の開発や保存環境の提言が見込まれるため、Ａとした。④効率性においては、複数のテーマを効率的に遂行しつつ、一定の成果を得られたことからＢとした。⑤継続性においては、31 年度以降にこれらの成果を文化財修復の現場や美術史研究への還元を目的とする研究を遂行する見通を立てることができたためＡと判断した。よって、所期の計画を上回り、順調かつ発展的成果を得られていることから、総合評価をＡとした。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	B	A	B	A

【目標値】	【実績値・参考値】 ・論文　4 件（ア、イ） ・学会発表　10 件（ウ、エ、ほか 8 件）	定量評価 －

ア「画絹の物性に及ぼす断面形状・殺蛹方法の影響　－大和文華館所蔵作品調査データを含めて－」(早川典子ほか、『保存科学』58 号、31 年 3 月)、イ「ミャンマー漆と日本漆の塗膜硬さに関する定量的評価」(倉島玲央ほか、『保存科学』58 号、31 年 3 月）ほか 2 件、ウ「Pemulen® TR-2 ゲルを利用した液体汚損クリーニング-油除去作業を例にして- 」(藤井佑果ほか、文化財保存修復学会第 40 回大会、6 月 17 日)、エ「接着剤およびアーカイバルテープの劣化」(早川典子ほか、文化財保存修復学会第 40 回大会、6 月 17 日）ほか 8 件

中期計画評価	A

中期計画記載事項	美術工芸品や建造物等の修復に貢献するため、伝統的な修復材料・技法についての科学的調査を行い、その安定性についての評価を行う。また旧来の材料・技法では施工が困難とされてきたものについて、新規の材料・技法の開発に関する調査研究を行う。
評定理由及び今後の見通し	30 年度は、伝統的な修復材料・技法についての科学的調査としては膠や漆などについて展示・論文・学会発表を行うに至っており、また、新規材料・技法の開発についてはゲルを使用した有機溶媒の適用を検討した。特に、当初計画にはなかった化学物質リスクアセスメントの視点を取り入れたゲルクリーニングの応用と評価は、所期の計画を上回る修復分野全体に資する大きな成果であった。31 年度はさらにこれらを発展させつつ、文化財修復に関する包括的な研究を行う。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2226F

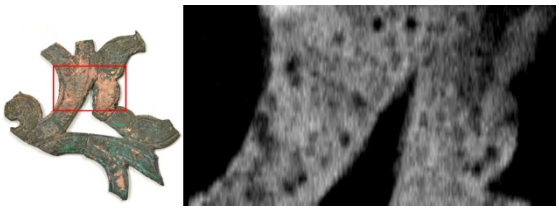
中期計画の項目	2-(2)-②-6)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-②-6)	②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究 6)考古遺物の保存処理法に関する調査研究 種々の材料調査分析法を総合的に活用して出土遺物の材質、構造及び劣化状態に関する診断調査を行い、保存処理法の開発に資する基礎的なデータを収集する。特に、鉄製遺物の効果的な新規の脱塩法を確立するための基礎研究を行う。また、木製遺物の物性、化学組成及び組織構造に関する基礎データを集積し、システマティックな含浸処理法に関する基礎研究を行う。
プロジェクト名称	考古遺物の保存処理法に関する調査研究	
埋蔵文化財センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（センター長兼保存修復科学研究室長）、田村朋美（都城発掘調査部研究員、保存修復科学研究室研究員（併任））、柳田明進、松田和貴（以上、保存修復科学研究室研究員）	

【年度実績と成果】

○X 線 CT、蛍光 X 線分析などの手法を総合的に活用して、大官大寺出土の金銅製木口金具に加えて現代に製作した手板試料の材質・構造調査を実施し、古代の建築金具の制作技法に関する情報を提示した。

○鉄製遺物の新規脱塩法の開発のため、30 年度は実験室実験からその効果が向上される最適条件を検討し、従来法に比べて処置中のストレスが低く、高い腐食抑制効果を示す方法になり得ることを示した。

○「同位体比分析と産地推定に関する最近の動向」と題した研究集会を開催し（11 月 27 日）、長年にわたる鉛同位体比分析の膨大な研究成果を振り返るとともに、最新の同位体比データに基づく青銅製品やガラス製品等の産地に関する研究について全国の文化財担当者と情報を共有し、意見交換を行った。



大官大寺出土金具の X 線 CT 像（左図：撮像範囲）

○平城宮跡出土木製遺物の一時保管環境における水質調査、及び現生木材試料を用いた腐朽実験の結果から、一時保管中の遺物の劣化を抑制する方策について検討し、学術雑誌に研究論文を発表した。

○木製遺物内部への保存処理薬剤の浸透性に大きく関与する物性値を実測するための基礎的な実験を開始した。

○飛鳥池工房遺跡出土品、山田寺跡出土木製品（重要文化財）のうち漆塗の施されたもの、及び将来指定候補となり得る平城宮京及び藤原宮京出土木簡の保存処理を良好に実施した。

○保存処理後の木簡の削り屑を保管する中性紙製容器（29 年度に開発）について、特許出願を行った。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。

①適時性：金属製遺物や大型木製遺物の保存技術について未解決の課題に取り組んだ。飛鳥池工房遺跡及び山田寺跡出土木製品の保存処理、及び指定に向けた平城宮京跡・藤原宮京跡出土木簡の保存処理を進めた。②独創性：鉄製遺物の新規脱塩法の開発を進め、従来法との腐食抑制効果と比較して、極めて良好な結果を得た。木簡の木取や寸法に応じて卓越した技術により保存処理を実施した。③発展性：様々な分析法を複合的に活用することにより、多様な考古遺物の材質・構造調査に対応できた。④効率性：各種の材質構造を総合的に分析することで、効率よく遺物の診断調査を実施し、遺物の劣化原因を究明できた一方、老朽化により構造調査の要である X 線透過撮影装置の運用が制限されたため、迅速な診断調査に支障をきたした。⑤継続性：当研究所に大量に保管されている平城宮及び飛鳥・藤原宮跡出土遺物を対象にすることで、多くの遺物の材質・構造調査のデータを継続的に収集することができた。また、過年度に構築された保管環境のモニタリング体制の下で基礎データの蓄積が進んだ結果、遺物の劣化抑制の具体策を提示することができた。総合評価：以上の様に、定性的並びに定量的な観点から、所期の目標を達成していると認められ、B と評価する。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	(参考値) ・論文等数：3 件　・研究発表等数：18 件　・研究集会等の開催：1 件 ・刊行物：1 件	—

中期計画評価	B

中期計画記載事項	考古遺物の診断調査から得られる情報を活用し、金属製遺物の脱塩・安定化法や木製遺物のシステマティックな含浸処理法等、考古遺物を安定した状態で保存・活用するための新規の保存処理法に関する調査研究を行う。
評定理由及び今後の見通し	X 線 CT をはじめとする各種の材質・構造調査を実施することで、多角的に遺物の状態を知ることができるようになったが、装置老朽化のため、構造調査の要である X 線透過撮影装置の運用が制限され、迅速な診断調査に支障をきたした。鉄製遺物の新規脱塩方法の開発研究が進み、成果が得られつつある。また、木製遺物についても、30 年度までに構築した一時保管中の水質データのモニタリング体制により、着実に基礎データを蓄積した。さらに、重要文化財級の遺物の保存処理を卓越した技術で実践したことから、所期の目標を達成していると認められ、B と評価する。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2227F

中期計画の項目	2-(2)-②-7)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-②-7)	②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究 7)遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究 環境制御による劣化抑制の成否について検証するため、平城宮跡遺構展示館等をフィールドとして、遺構の劣化の進行速度と周辺の環境についてモニタリング調査を行う。石造文化財等の劣化要因である塩析出が材料の劣化に及ぼす影響に関する基礎研究を行う。さらに、埋蔵環境における金属製品の腐食プロセスを解明するため、金属腐食実験を行い、環境因子と劣化の関係を定量的に評価する。
プロジェクト名称	遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究	
埋蔵文化財センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（埋蔵文化財センター長）、脇谷草一郎（埋蔵文化財センター主任研究員）、柳田明進、松田和貴（以上、保存修復科学研究室研究員）	

【年度実績と成果】

・大分市元町石仏の環境調査を継続して実施した。覆屋改修が石仏表面での塩析出の挙動におよぼす影響について、周辺環境の実測調査と熱水分移動解析を実施した。
・塩析出時に生じる磚や石仏表面の破壊を抑制するとともに材料中の塩除去を目的とした、パルプおよび粘土鉱物による脱塩法について実験を実施した。
・土壌カラム実験を実施し、カラム内の含水率と酸化還元環境状態の鉛直分布と、金属片試料の腐食過程のモニタリングを実施した。得られた結果から、埋蔵環境とその環境下での金属製遺物の腐食過程を定量的に把握するとともに、それらのモデル化を試みた。
・高松市石船塚古墳、石船古墳、石船天満宮で保存されている同質石材石棺は現在異なる劣化状態にあることから、これらを対象に周辺環境調査をおこない、石材の劣化状態におよぼす影響について検討する。30 年度は環境調査に着手した。

石船古墳環境調査

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、近年、遺跡の公開・活用が重要視されており、適切な環境下で遺跡の安定した保存を担保しつつ、観覧等の公開・活用に資する技術の研究・開発を行った。②独創性については、既往の手法が土や石材の強化に主眼を置くものであったのに対して、本研究は遺跡における熱水分移動解析に基づいて遺跡の整備後に生じる遺構の劣化を予測し、それを予め回避するために適切な環境の制御を行うことで遺構保存を実現することを目的としており、独創的な研究と言える。③発展性については、遺構を取り巻く環境は無二のものであるが、乾湿の繰り返しや塩類析出など、遺構で生じる劣化現象は熱、水分と溶質移動によって引き起こされる普遍的なものである。したがって、本研究から得られた知見は汎用性に富むもので、広範な分野にわたる様々な遺構への応用が可能である。④効率性については、フィールド調査で使用する機材や調査手法は、異なる環境下にある多種多様な遺構で使用可能なものであることから、機器類の導入経費や運用面において効率は高いと考えられる。⑤継続性については、各調査フィールドにおいて調査の長期的な目標、及び各年の短期的な目標を明確に設定し、各地方公共団体の文化財担当者と目標と成果を共有しつつ、長期的な文化財保護行政の一環としての調査研究という位置づけを得て事業を継続している。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	・論文等数：4件（ア、イ） ・研究発表等数：8件	—

ア安福勝、小椋大輔、脇谷草一郎、高取伸光：蒸発法を用いた凝灰岩の水分物性測定、日本建築学会大会（東北）梗概、仙台、30年9月4-6日、2018
イ高取伸光、小椋大輔、脇谷草一郎、安福勝、桐山京子：脱塩技術の定量的評価を目的とした材料内水分・塩移動モデルの開発　既存の熱水分塩同時移動解析モデルによる浸透圧を考慮した脱塩実験の再現性の検討、日本建築学会大会（東北）梗概、仙台、30年9月4-6日、2018

中期計画評価	B

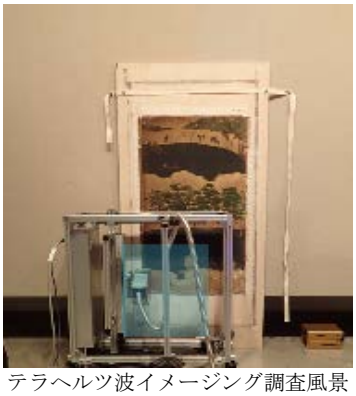
中期計画記載事項	遺構周辺の熱水分性状に関する環境調査及び物質移動、埋蔵環境についてモデル化を行い、遺構と埋蔵環境下にある遺物の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究を行う。
評定理由及び今後の見通し	調査研究フィールドの殆どが前中期計画から調査を継続して実施しているものであることから、十分量の実測データを蓄積するとともに、その成果として多くの研究発表を行うことができた。さらに、塩析出による多孔質材料の劣化に関する室内実験に加え、埋蔵環境下での金属製遺物の腐食に関する室内実験にも着手したことから上記の評価を妥当と考えた。今後はこれまでの熱、水分移動に加え、埋蔵環境を支配する溶存酸素などの溶質移動を考慮した埋蔵環境形成モデルの精度向上を図る予定である。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2228F

中期計画の項目	2-(2)-②-8)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-②-8)	②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究 8)建造物の彩色に関する調査研究 建造物彩色等の材料調査を行い、使用されている材料の同定と彩色技法の調査研究を行う。復元された平城宮跡大極殿において、建造物塗装彩色の経年変化に関する研究を行うため、環境調査並びに大極殿塗装彩色及び暴露試験用塗装彩色手板の色彩測定を行う。
プロジェクト名称	建造物の彩色に関する調査研究	
埋蔵文化財センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】**○高妻洋成（保存修復科学研究室長）、脇谷草一郎（主任研究員）、田村朋美（都城発掘調査部研究員、保存修復科学研究室研究員（併任））、柳田明進、松田和貴（以上、保存修復科学研究室研究員）、金旻貞（保存修復科学研究室アソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】

・第一次大極殿において、周辺環境が建築塗装の劣化におよぼす影響を検討するため、環境調査を継続して実施した。
・平城宮跡朱雀門において塗装の劣化状態調査を 28 年度から継続して実施した。また、塗装の変色・退色の定量化をおこなうため、28 年度から継続して分光測色計を用いた塗装の色差の測定を実施した。
・彩色文化財の内部構造を非破壊で診断する方法として用いているテラヘルツ波イメージング技術について、30 年度は測定の結果の解釈について検討を行った。特に、テラヘルツ波イメージングの全画像および断面画像から得られる情報とともに、周波数信号（time domain spectrum）のパルス信号のピーク数の変化から修理前の診断技術として応用するだけではなく、修理修復後の評価手法としてもテラヘルツ波イメージングを応用できることが明らかとなった。
・故宮博物院と東南大学が進める故宮養心殿の整備事業に関して、建造物彩色の劣化状況調査および、それらの劣化に対して周辺温熱環境、地盤の水分環境が及ぼす影響について現地調査をおこなった。


テラヘルツ波イメージング調査風景

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、遺跡の公開・活用が重要視されるなか、遺構の展示のみならず復原建物を表示する例が散見される。本研究から得られる成果は、現存する古代の建造物の彩色保存のみならず、公開・活用のための復原建物の保存にも寄与するところ大と考えられる。②独創性については、既往の建築物塗装の劣化に関する調査では、製作当初の材料、技法および現在に至るまでの外界気象条件について、情報があまりに不明確であったことから、塗装の劣化について精緻な検討が困難であった。しかし、本研究ではそれらの情報を得た上で、建築塗装の劣化に関する調査を実施できる点において独創性の高い研究と考える。③発展性については、遺跡の公開・活用が求められる現在、その手法として復原建物の建設は今後も一定の需要があるものと考えられ、本研究の成果はそれらの保存、維持において大きく寄与しうるものと考える。④効率性について、フィールド調査で使用する機材や調査手法は、異なる環境下にある多種多様な遺構で使用可能なものであることから、機器類の導入経費や運用面において効率は高いと考えられる。⑤継続性においては、第一次大極殿における環境条件調査において、定期的に現地における調査を実施し、継続して研究事業を遂行している。以上のように、所期の目標を十分に達成していると認められ、Bと評価する

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） ・論文等数：１件（ア） ・研究発表等数：２件（イ）	定量評価 ―

ア金旻貞：テラヘルツ波を用いた彩色文化財の非破壊界面調査、構築と交流の文化史－工楽善通先生傘寿記念論集－、雄山閣、2018
イ金旻貞、高妻洋成、宇都宮正紀、田畔徳一、大野恭子：智恩寺紙本金地著色天橋立図屏風の非破壊界面調査、日本文化財科学会第 35 回大会（於奈良女子大学）30 年７月 7−8 日

中期計画評価	B

中期計画記載事項	南都の寺社等の歴史的建造物の塗装彩色の修理に資するため、技法及び材料調査を実施するとともに、復元された平城宮跡大極殿において塗装彩色の経年変化のモニタリング法に関する研究を行う。
評定理由及び今後の見通し	主に平城宮跡大極殿を調査対象として気象条件の実測調査を継続して実施していること、及び塗装の劣化に大きく影響をおよぼすと考えられる塗装材料に関する基本的な物性値の蓄積していることから上記の評価が妥当と考える。今後も大極殿を中心に、継続して定期的な劣化状態調査を実施するとともに、室内実験を通して塗装の劣化に対して環境がおよぼす影響について検討し、現地において塗装の劣化を抑制する環境制御法について検討する。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2229E

中期計画の項目	2-(2)-②-9)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-②-9)	②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究 9)近代文化遺産の保存・修復に関する調査研究 近代文化遺産の特徴である煉瓦・石・コンクリート・各種金属・各種合成樹脂・各種繊維等の多種多様な材料の劣化や保存手法に関する基礎的調査研究を行う。特に 30 年度は、28・29 年度に実施した煉瓦・鉄に関する研究を踏まえ、コンクリート造構造物の修復事例を調査し、保存科学的観点からその修復・保存の理念と手法を検証、評価する。
プロジェクト名称	近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究	
保存科学研究センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○北河大次郎（近代文化遺産研究室長）、石田真弥（アソシエイトフェロー）、鳥海秀実（研究補佐員）、中山俊介（文化遺産国際センター長）	

【年度実績と成果】

再現した型枠木目の確認
（広島平和記念資料館）

○コンクリート建造物の保存修復について
・コンクリート建造物の保存修復に関する勉強会を 2 回実施し、現状の課題（劣化処理、耐震化など）を整理した。勉強会には、プロジェクトスタッフのほかに文化庁調査官、大学教授等が参加した。
・スイス・イタリアにおけるコンクリート建造物の保存修復事例を実査し、政府機関や大学の専門家と保存修復の技術の現状、開発の方向性について意見交換を行った。
・保存修復の国内先進事例 15 件を実査し、現場ヒアリング等を踏まえ現状と課題の分析を行った。
○台湾における近代文化遺産の保存修復事例を実査し、その歴史等を冊子にまとめた。また台湾の政府機関・大学と協力して、近代文化遺産に関するシンポジウムを計 3 回開催した（8 月台北、31 年 3 月東京・大阪）。
○29 年度に調査報告書を刊行した国際基督教大学所蔵ジェットエンジンをテーマとするシンポジウムを 6 月に開催した。
○文化庁調査員、近代遺跡の調査等に関する検討会委員（文化庁）、全国近代化遺産活用連絡協議会協力者会議委員（全近）等として、近代文化遺産の重文指定、保存活用に関する調査・助言を行った。
○保存修復の担い手が不足している近代土木遺産の分野の技術者を集め、担い手育成に向けた検討会を 5 回実施した。
○29 年度の研究成果をまとめた報告書『鉄構造物の保存と修復』、28 年度の研究成果をまとめた報告書の英語版『Conservation and Restoration of Brick Buildings and Structures』を刊行した。

年度計画評価	B

【評定理由】
以下の各観点から評価を行い、事業が円滑かつ適切に実施されていると判断した。①適時性においては、国指定等が進む一方で保存修復の理念・技術が未だ確立していないコンクリート建造物に関する研究と、地域発展に寄与する積極的な文化財活用を展開する台湾の近代文化遺産に関する研究を順調に進めた。②独創性においては、国内外の先進事例分析を踏まえて、コンクリート建造物の課題を包括的に整理し、産官学の専門家と共に取り組む共同研究は前例がなく、独創性が高い。③発展性においては、行政や現場の実務担当者との議論を踏まえた研究であり、修理実務への応用が期待でき、発展性は極めて高い。④効率性においては、勉強会を行うことで具体的テーマを早い段階で絞り込み、そこでの意見を踏まえて現地調査物件を厳選しており、効率的である。⑤継続性においては、27 年度の近代文化遺産に係る包括的課題整理と、28 年度の煉瓦造建造物、29 年度の鉄構造物に関する調査を継続・発展させた研究であり、継続的に計画を進めている。よって、順調に事業が進行していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	A	B	B

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値）学会・研究発表 6 件（ア～カ）／刊行物 2 件（キ、ク）	定量評価 －

ア「”ここ”の歴史へー幻のジェットエンジン、語るー」（北河大次郎、東京文化財研究所／国際基督教大学アジア文化研究所・平和研究所、6 月 2 日）、イ「砂防施設と文化財について」（北河大次郎、国土交通省北陸地方整備局、6 月 6 日）、ウ「日本における近代化遺産に関する文化財保護行政の展開について」（北河大次郎、台湾文化部文化資産局、8 月 17 日）、エ「わが国防災遺産の系譜と立山砂防」（北河大次郎、富山県世界遺産登録推進事業実行委員会、9 月 30 日）、オ「20 世紀遺産と立山砂防」（北河大次郎、土木学会、10 月 12 日）、カ「旧安田銀行担保倉庫の保存・活用に関する取り組み」（石田真弥、日本建築学会関東支部、31 年 3 月 7 日）、キ『鉄構造物の保存と修復』（8 月 31 日、東京文化財研究所）、ク『Conservation and Restoration of Brick Buildings and Structures』（31 年 3 月 31 日、東京文化財研究所）

中期計画評価	B
中期計画記載事項	コンクリート構造物やレンガ構造等による産業・交通・土木関連の施設や機械類、合成樹脂等の複合的な材料が使われている美術工芸品など、近代文化遺産の保存や修復に必要とされる理念・技術・方法を研究し、保存管理計画等の策定に寄与する。
評定理由及び今後の見通し	中期計画に沿い本研究では、28 年度から 30 年度にかけて、煉瓦、鉄、コンクリートという近代的な構造材を対象として、保存・修復の考え方と手法をまとめてきた。いずれも当初の計画通りに実施しているもので、30 年度は所期の目的を十分達成したといえる。31 年度は、合板、布、ガラスなど複数の近代的な材料から構成される内部造作を対象とする予定である。これらの調査を踏まえ、最終年度の 32 年度には全体のフォローアップ調査ととりまとめを行う。

【書式Ｃ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2230Eア

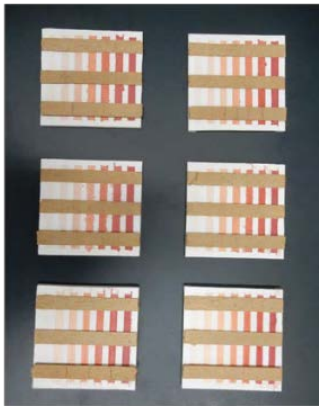
中期計画の項目	2-(2)-②-10)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-②-10)-ア	②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究 10)高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究 ア　文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画等の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。
プロジェクト名称	高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究	
保存科学研究センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○佐野千絵（センター長）、早川泰弘（副センター長）、吉田直人（前保存環境研究室長）、佐藤嘉則（生物科学研究室長）、朽津信明（修復計画研究室長）、早川典子（修復材料研究室長）ほか	

【年度実績と成果】

○ 現状は泥に覆われているが、「辰」「巳」「申」に該当すると推定される漆喰片について、X線透過撮影による顔料の可視化を検討した。泥の厚み、漆喰の厚み、顔料の濃度の条件を変化させて試料を作成して撮影条件の検討を行い、その上で実際の撮影を行った。

○ X線透過撮影によって得られた画像について、ソフトによるエッジ強調の問題を解決するための検討を行った。十二支の図像を可視化する際には、わずかなX線透過量の違いを正確に判断する必要があるため、31年度にかけて模擬資料のX線透過撮影を継続して行うこととした。

○テラヘルツ分光分析のデータ解析手法の改善を行い、漆喰層の状態をより詳細に評価できるようにした。



泥の下の図像撮影条件検討のための試験試料

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、解体後10年間を経た高松塚古墳壁画の今後の保存方法に関する検討、キトラ古墳壁画の保管環境への協力からＢと判定した。②独創性においては、日本では従来行われていない古墳壁画の修復方法を検討し、得られた成果を修復現場に還元したためＡと判定した。③発展性においては、キトラ古墳壁画の泥に覆われた漆喰の下の画像調査は発展性の高いものであるためＡとした。④効率性においては、限られたスタッフの中で複数のテーマを遂行しており、Ｂと判定した。⑤継続性においては、今後の活用に向けて現場での検討を解体以降の10年間適宜行ってきており、今後の継続性もあることからＢとした。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	（参考値）学会発表等　4件（ア、イ）	―

ア「高松塚古墳壁画の修復報告 ―国宝絵画としての保存修復処置―」（早川典子ほか、文化財保存修復学会第40回大会、6月17日）、イ「Investigation of thermal environment inside the shelter for decorated tumulus in Japan」（Masahide Inuzuka, et.al, International Instutitute for Conservation, トリノ工科大学、9月14日）ほか2件

中期計画評価	B

中期計画記載事項	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、実践的調査研究を迅速かつ適切に行う。
評定理由及び今後の見通し	中期計画に沿った成果が得られていると考えた。30年度は、高松塚古墳、キトラ古墳双方に進捗があり、さらにこの先の展開について具体的検討が行われたため、本プロジェクトが順調に推移していると評価した。これらの成果は31年度以降、両古墳壁画のみならず文化財分野全体における保存修復について寄与することが可能であると考えられる。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2230Fｱ

中期計画の項目	2-(2)-②-10)	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-②-10)-ｱ	②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究 10)高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究 ア　文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画等の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。
プロジェクト名称	高松塚古墳、キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究	
埋蔵文化財センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○高妻洋成（センター長）、玉田芳英（都城発掘調査部長）、内田和伸（文化遺産部遺跡研究室長）	

【年度実績と成果】

古墳壁画保存対策 PT（発掘班・保存整備班・修復班・材料調査班・生物環境班）：東文研と当研究所で構成

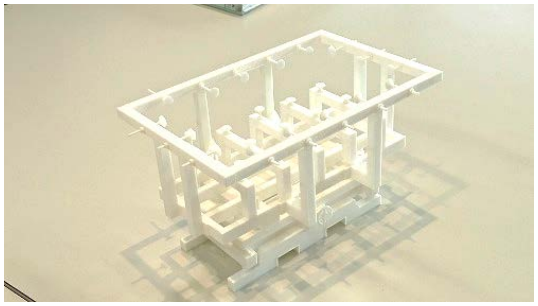
○高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究

・文化庁の古墳壁画の保存活用に関する検討会の下に 29 年度より設置された熊本県被災装飾古墳ワーキンググループ第４回（31 年 2 月 19 日）に参加した。

・石材の安定化を検討するため、石材の含浸強化処置の効果を評価するための引張強度試験を 29 年度に引き続き実施するとともに、床石のフレームのモックアップ作製、石材の亀裂の状況の記録法の検討を行った。

・キトラ古墳の整備事業に関する報告書を作成した。

・古墳壁画の保存活用に関する検討会に職員を派遣した。



床石のフレームのモックアップ

○文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画等の調査及び保存・活用に関する技術的協力

・壁画の現状を把握するため、種々の分析調査を実施した。壁画を安全に測定することのできるＸ線回折装置の開発を進め、精度の向上を図った。

・類似古墳調査の一環として、中国遼寧省の高句麗の古墳壁画、韓国のソウル市立漢城百済博物館の高句麗壁画模写および模型の調査ならびに陵山里古墳群出土壁画片および史跡整備状況の視察調査を行った。

年度計画評価	A

【評定理由】

下記観点から評価を行った。①適時性：国営飛鳥歴史公園のキトラ地区の運用が開始された後、キトラ古墳の整備に関する報告書を作成した。②独創性：壁画を安全に分析するためのＸ線回折装置の分析精度を向上させるための基礎データを集積し、改良を加えることにより分析精度の向上を達成し、実用化の目処をつけた。③発展性：将来的な石室石材の安定化と公開に向けた検討を行うために、床石のフレームのモックアップの作製および強化処置の効果に関する基礎データを収集することができた。④効率性：再構成されたキトラ古墳壁画の表面状態を 3 次元的に記録するために多視点ステレオ画像（SfM-MVS 技術）を応用することで、簡便かつ迅速に 3 次元情報を得ることができた。⑤継続性：高松塚古墳およびキトラ古墳の壁画の保存と活用を行うための調査研究体制及び管理・活用の体制を構築して事業を継続するとともに、被災装飾古墳の調査についても随時、臨機応変に今後も対応していくことにしている。以上のことから、所期の事業目標を量的にも質的にも良好に達成したということできる。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・派遣人数：のべ 35 人　　・研究発表等件数：2 件（ア、イ） ・論文：4 件	定量評価 ―

ア大塚将英、高妻洋成、杉岡奈穂子、福永香、建石徹、小笠原具子、早川典子、テラヘルツイメージングによる高松塚古墳壁画のしっくいの調査、日本文化財科学会第 35 回大会、7 月 6 日～8 日、2018

イ降幡順子、辻本与志一、金旻貞、高妻洋成、早川泰弘、建石徹、宇田川滋正、キトラ古墳天井・星宿図の蛍光Ｘ線元素分析調査、日本文化財科学会第 35 回大会、7 月 6 日～8 日、2018

中期計画評価	A

中期計画記載事項	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、実践的調査研究を迅速かつ適切に行う。
評定理由及び今後の見通し	29 年度に引き続き、30 年度はキトラ古墳壁画保存管理施設の運用・管理、高松塚古墳及びキトラ古墳壁画の調査及び保存・活用を効率よく実施した。31 年度以降も両古墳の調査及び保存・活用に資する事業を推進するとともに、類似する古墳等の調査にも臨機応変に対応していきたい。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2230Fイ

中期計画の項目	2-(2)-②-10	科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
年度計画の項目	2-(2)-②-10)-イ	②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究 10) 高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究 イ　壁画の安定した保存と公開活用を行うための適切な石室内の熱水分環境について調査研究を行う。
プロジェクト名称	古墳壁画の恒久的保存に関する調査研究	
埋蔵文化財センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○高妻洋成（保存修復科学研究室長）、脇谷草一郎（主任研究員）、柳田明進（保存修復科学研究室研究員）	

【年度実績と成果】

・宮崎市蓮ヶ池横穴群には羨道部が開口しているものと密閉されているもの両者が存在する。横穴の保存に適した閉塞方法について検討するため、30 年度も横穴内部の温熱環境調査と石材劣化状態調査を継続して実施した。調査の結果、開口している横穴では季節ごとに横穴の上部、下部と場所を変えながら外気と換気しており、特に冬期は横穴下部で石材表面が乾湿を繰り返す様子が認められ、石材の表層剥離を助長していると推察された。また、30 年度は横穴内部で生じる劣化を予測するための気流解析に着手した。

蓮ヶ池横穴群における環境調査

・模擬古墳において、腐食センサによる腐食モニタリング、および炭素鋼、青銅試料を用いた暴露試験を実施した。30 年度は、蓄積されつつある調査結果に基づき、古墳の石室内環境が金属製遺物の腐食に及ぼす影響を検討した。外界気象の影響によって石室内の温度斑が生じ、その結果として発生する結露の挙動が、金属製遺物の腐食に顕著に影響していることが示された。

・日田市ガランドヤ古墳１、２号墳、および墳丘の被覆状況が異なる法恩寺山３号墳と穴観音古墳の計４基の装飾古墳において環境調査を継続して実施した。30 年度は、墳丘が一部残存する２号墳の温熱環境調査を実施するとともに、保護施設内部において墳丘土壌を安定に保存する手法について検討した。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、国内に多数の壁画を有する古墳が存在する中で、安定した保存、公開方法を確立するため、壁画の現地での保存の可否の判断をおこなう根拠となる情報の蓄積を行った。②独創性においては、装飾古墳における環境の実測調査および模擬古墳での劣化試験に基づき、古墳石室内での壁画の劣化モデルを構築し、解析的な手法による評価技術の開発を行った。③発展性においては、古墳の立地や構造は様々ではあるものの、汎用性の高い土中空間での熱水分環境のシミュレーションモデルを国内の多くの壁画古墳に広く適応し、科学的な根拠に基づく壁画古墳の保存法が提示されると期待される。④効率性においては、実験条件を同一に整えることができる模擬古墳において、様々な環境計測機器を設置したことで、自由度が高く、継続的かつ効率的に環境および遺物の劣化状態に関するデータを収集することができた。⑤継続性においては、装飾古墳、模擬古墳における調査ともに、定期的に現地における調査を実施し、継続して研究事業を遂行している。以上のように、所期の目標を十分に達成していると認められ、Ｂと評価する。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	・論文等数：４件（ア、イ） ・研究発表等数：５件	—

ア脇谷草一郎、小椋大輔、高妻洋成：遺跡保存のための環境管理　－史跡ガランドヤ古墳１号墳の保存と活用を目的とした環境設計に関する研究－、地盤工学の知見に基づく歴史的地盤遺跡の保全と活用に関する研究委員会報告論文集、大阪、30 年９月 12 日、2018

イ脇谷草一郎、小椋大輔、高妻洋成：結露抑制を目的とした装飾古墳保護施設の環境設計、日本建築学会環境工学委員会　第 48 回熱シンポジウム「湿気の仕組み・制御・評価」、大阪、30 年 10 月 13 日－14 日、2018

中期計画評価	B

中期計画記載事項	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業等、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、実践的調査研究を迅速かつ適切に行う。
評定理由及び今後の見通し	事業の３年目となる 30 年度は装飾古墳、模擬古墳での検討をおこなうことで、古墳内での温熱環境および遺物劣化についての実測調査によるデータが蓄積されていることから、上記の評価が妥当と考えられる。31 年度以降はより実際の壁画古墳の構造を考慮した新たな模擬古墳の建設を進めるとともに、古墳の石室を構成する石材の劣化特性におよぼす水分状態の影響の検討などのデータの収集についても着手する予定である。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2311Eア

中期計画の項目	2-(3)-①-1)	文化遺産保護に関する国際協働
年度計画の項目	2-(3)-①-1)-ア	①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進 1)文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信 海外、特に国際協力活動の対象となる地域の文化遺産に関する情報の収集、諸外国の文化遺産保護施策等に関する調査を行う。 ア　世界遺産委員会をはじめとするユネスコ等が行う主要な国際会合へ出席して情報の収集を行うとともに、国内外において文化遺産の保護をめぐる今日的課題等に関する調査研究を行う。また、収集した情報の整理・公開及び比較研究等を通じて、今後の我が国の文化遺産保護施策の検討の用に供する。
プロジェクト名称	文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信	
文化遺産国際協力センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○西和彦（国際情報研究室長）、二神葉子（文化財情報資料部文化財情報研究室長）、境野飛鳥、増渕麻里耶（以上、アソシエイトフェロー）、石村智（無形文化遺産部音声映像記録研究室長）	

【年度実績と成果】

○文化遺産保護に関する情報収集のため、以下の国際会議やシンポジウム等に出席した。収集した情報は取り纏めて所内で蓄積するとともに、後述の世界遺産研究協議会を開催して関係自治体等関係者に対して情報の周知を図るとともに、その報告書、講演等を通じて成果の公表を行った。

・6 月 24 日～7 月 4 日　第 42 回世界遺産委員会（マナーマ）

・11 月 14～15 日　第 91 回国際文化財保存修復研究センター理事会（ローマ）

○文化遺産保護関連の法令の収集・分析及び翻訳作業を実施し、ポーランドの文化遺産関連法令の背景に関する説明を併せて『各国の文化財保護法令シリーズ［23］ポーランド』として刊行した。

○上記の成果について広く共有を図るため、「世界遺産研究協議会」を開催し、関係自治体等に対して得られた情報・知見の周知を図る（9 月 28 日）とともに、報告書を刊行してより幅広い周知に努めた。

第 42 回世界遺産委員会
(バーレーン・マナーマ)

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、特に要望の多く状況の変化が激しい世界遺産関連を中心に文化遺産保護の最新の国際動向を把握し、ウェブサイトでの活動報告や報告書等で得られた知見と分析内容を公開するとともに、関連組織や自治体等関係者に詳細かつ時宜に適う提供ができた。②独創性においては、スタッフの専門知識と当研究所独自のネットワークを活用し、ウェブサイト等で公開されているものでは得られない情報を含む収集と発信を行った。③発展性においては、文化財保護法令シリーズにおいて法令の正確な翻訳のみならず、新たにその背景に関する説明を付し、また世界遺産研究協議会においては参加者に有用な情報を多面的に提供するなど国際情報の発信に大きな発展を得た。④効率性においては、スタッフが関わる他の関連業務で得られた周辺情報も統合するなど、国内外のネットワークを通じ最小限の従事者・規模で着実に事業を進めることができた。⑤継続性においては、世界遺産委員会等の国際会議に継続的に参加することにより、単に最新の情報のみならず分析に基づいて有用な情報を提供した。また、文化財保護法令シリーズについては初めて東欧圏を取り上げ、23 冊目を刊行することができた。よって、所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	B	A

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値）国際会議出席 2 回、会議開催 1 回、刊行物発行 2 冊（ア、イ）	定量評価 －

ア『各国の文化財保護法令シリーズ［23］ポーランド』(31 年 3 月 29 日)
イ『世界遺産研究協議会　戦略的 OUV 選択論』(31 年 3 月 29 日)

中期計画評価	B

中期計画記載事項	海外、特に国際協力活動の対象となる地域の文化遺産に関する情報の収集、諸外国の文化遺産保護施策等に関する調査を行う。国際情勢に鑑みながら毎年、優先度の高い国の文化遺産保護関連の法令について条文を和訳し、法令集として刊行する。また世界遺産委員会などユネスコ等が行う主要な国際会合へ出席して情報の収集を行うとともに、文化遺産の保護をめぐる今日的な課題等に関する調査研究を行い、その成果をインターネットなど多様な媒体を通じて国内外に情報発信する。
評定理由及び今後の見通し	中期計画期間中に、継続的に文化遺産保護に関する国際情報の収集・分析を行い、着実に情報発信と成果公表を行い、国内外の研究ネットワーク強化に努める。30 年度は最新の情報を積極的に収集したほか、補足説明や分析と併せて広く成果の周知を図るための会議を開催するなど、計画通りの成果を上げることができた。31 年度も継続して、今中期計画に基づいた国際情報の収集・研究・発信を実施する予定である。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2311Fイ

中期計画の項目	2-(3)-①-1)	文化遺産保護に関する国際協働
年度計画の項目	2-(3)-①-1)-イ	①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進 1)文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信 海外、特に国際協力活動の対象となる地域の文化遺産に関する情報の収集、諸外国の文化遺産保護施策等に関する調査を行う。 イ　英国等の研究機関との間で文化遺産に関する研究交流を行う。
プロジェクト名称	イギリスセインズベリー日本藝術研究所との共同研究	
企画調整部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○森本晋（企画調整部長）、玉田芳英（都城発掘調査部長）、神野恵（都城発掘調査部主任研究員）、石橋茂登（企画調整部飛鳥資料館学芸室長）、庄田慎矢（都城発掘調査部主任研究員）	

【年度実績と成果】

・「曙光の時代　日本の考古学の連続と変革」展の英語版刊行に向けた準備を引き続き進めた。
・10 月 31 日、当研究所にて、セインズベリー日本藝術研究所より 2 人を招聘し、講演会を開催した。(サイモン・ケイナー氏「キリスト教の受容（400-1000 AD）の際の北海周辺におけるシルクロードからの影響」「スーザン・ウィットフィールド氏 “Faith Across the Seas: Changing Landscape of the Silk Road”
・11 月 22 日、The Great Hospital（英国ノリッチ)にて、一般向け講演を行った。(Shinya Shoda “How Buddhism changed the world at the east extreme end of the silk road”)
・11 月 23 日、セインズベリー日本藝術研究所(英国ノリッチ)にて、専門家によるワークショップに参加し、研究発表を行った。(Shigeto Ishibashi “Early temples in Japan”, Tomomi Tamura “Glass beads trade between the East and West”)

当研究所での講演会の様子

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、2020 年のオリンピック開催にむけて、英国においての日本文化の発信への協力を推進した。②独創性については、当研究所の独自の研究成果を英国で発表した。③発展性においては、海外でのワークショップでの成果発表と意見交換を通じ、2020 年夏に英国イーストアングリア大学にて開催予定の特別展『信仰の到来（仮)』にむけた準備を進めた④継続性においては、協定に基づいて今後も協力関係を維持することを双方で確認しており、上記特別展への協力など 31 年度以降の計画についても積極的に協議中である。以上から、事業は順調に推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	A	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	（参考値）研究発表等数 5 件	—

サイモン・ケイナー「キリスト教の受容（400-1000 AD）の際の北海周辺におけるシルクロードからの影響」セインズベリー日本藝術研究所奈良講演会（10 月 31 日）奈良文化財研究所
スーザン・ウィットフィールド “Faith Across the Seas: Changing Landscape of the Silk Road” セインズベリー日本藝術研究所奈良講演会（10 月 31 日）奈良文化財研究所
Shinya Shoda “How Buddhism changed the world at the east extreme end of the silk road” Public lectures “Arrival of belief” (11/22) The Great Hospital
Shigeto Ishibashi “Early temples in Japan” Workshop “Arrival of belief” (11/23) Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures
Tomomi Tamura “Glass beads trade between the East and West” Workshop “Arrival of belief” (11/23) Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures

中期計画評価	B
中期計画記載事項	諸外国における文化遺産の保存修復及び管理活用に関する研究会の開催や遺跡現地におけるワークショップを含む国際共同研究等の実施を通じて、その理念と技術の両面における研究を進めるとともに、国際協力を推進するための基盤を強化する。
評定理由及び今後の見通し	28 年度より継続的かつ順調に行われている。特に、当研究所における研究成果をイギリスにおいて一般市民および専門家を対象に発信したことは特筆に値する。31 年度以降の計画も進められており、事業の順調な継続が見込まれる。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2312E-1

中期計画の項目	2-(3)-①-2)	文化遺産保護に関する国際協働
年度計画の項目	2-(3)-①-2)-ア-(ア)・(イ)	①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進 2)文化遺産保護協力事業の推進 ア　文化遺産の保護協力事業及び国際共同研究事業を以下のように実施し、成果を広く公表する。 (ア)カンボジア・アンコール遺跡群（特に西トップ遺跡及びタ・ネイ遺跡）やミャンマーをはじめとする東南アジア地域等の文化遺産保護に関する調査研究及び保護協力事業を実施する。 (イ)西アジア地域等の文化遺産保護に関する調査研究を実施する。特にイラン・アルメニア等において文化遺産保護協力事業を実施する。
プロジェクト名称	アジア諸国等文化遺産保存修復協力	
文化遺産国際協力センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○友田正彦（保存計画研究室長）、安倍雅史（研究員）、マルティネス・アレハンドロ、間舎裕生、淺田なつみ（以上、アソシエイトフェロー）、山田大樹（客員研究員）、荒木晶（前事務補佐員）	

【年度実績と成果】

○東南アジアの木造建造物の専門家2人を招聘し、「大陸部東南アジアにおける木造建築技術の発達と相互関係」と題する研究会を開催した。カンボジア、タイ、ミャンマーにおける木造建築技術の歴史的発展に関する最新研究動向を共有するとともに、日本人専門家も交えた議論を行った。

○アンコール地域保存管理機構（APSARA）とともにタネイ遺跡保存整備のための現地調査を継続した。東参道跡及びテラス遺構、東門周囲の発掘調査を実施したほか、解体修理に向けた事前準備作業として東門の3次元計測を実施した。また、事業の進捗状況を国際調整委員会会合や東南アジア考古学会例会にて報告した。

○イランに外部専門家を含む4人を派遣し、イラン国立博物館において博物館の環境管理に関する研修を実施したほか、博物館に計測機材を設置して大気汚染の実態を調査した。また、同博物館図書室における虫害状況に関する調査も実施した。

○アルメニアに外部専門家を含む3人を派遣し、染織文化遺産に関する保存修復研修をエチミアジン大聖堂博物館及び歴史文化遺産科学研究センターにて実施した。

○外部資金事業と連携し、ブータンの文化遺産保護に関する現地調査及び協議等を行った。

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、イランやアルメニアで相手国ニーズに応じて事業を継続実施した。②独創性においては、情報量の少ない東南アジアを対象とした最新研究動向をセミナー開催等を通じ、他に先駆けて国内関係機関に紹介することができた。③発展性においては、カンボジアでの発掘では新たな遺構を発見し新知見を得た。また、相手国と従来からの協力関係をさらに深め、遺跡整備の実現に寄与することができた。④効率性においては、カンボジアでの発掘など、当初予定にない大きな実績をあげることができた。⑤継続性においては、現地機関への技術移転等を図りつつ、着実に実績を積み上げることができた。よって、所期の予定を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A

【目標値】	**【実績値・参考値】**	定量評価
・	（参考値） 専門家派遣8回（延べ23人）、専門家招聘1回（延べ2人） 研究会開催1回、研究会等発表2回、報告書作成3冊（ア～ウ）	－

ア報告書『東南アジア諸国等文化遺産保存修復協力 平成30年度成果報告書』、31年3月
イ報告書『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainabe Development of Ta Nei Temple, Angkor-Progress Report of 2017 and 2018-』、31年3月
ウ報告書『東南アジア古代都市・建築研究会：東南アジアの古代都市を考える』、31年3月

中期計画評価	A

中期計画記載事項	諸外国における文化遺産の保存修復及び管理活用に関する研究会の開催や遺跡現地におけるワークショップを含む国際共同研究等の実施を通じて、その理念と技術の両面における研究を進めるとともに、国際協力を推進するための基盤を強化する。また、その成果をもとに、日本が得意とする調査技術や保存技術等を活かしつつ、ミャンマーやカンボジアなどASEAN諸国をはじめ、諸外国での文化遺産保護に関する技術支援や体制強化などに資する協力事業を実施する。
評定理由及び今後の見通し	30年度は、所期の計画を上回り、アジア諸国における文化遺産保護水準の向上に資するための協力として、カンボジアやイラン、アルメニアにおける事業をさらに発展させることができた。31年度以降も、順調な進展が期待される。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2312E-2

中期計画の項目	2-(3)-①-2)	文化遺産保護に関する国際協働
年度計画の項目	2-(3)-①-2)-ｱ-(ｳ)	①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進 2)文化遺産保護協力事業の推進 国際共同研究等の実施を通じて諸外国の保存修復及び管理活用に関する考え方や手法に関する研究を進め、国際協力を推進するための基盤を強化するとともに、その成果をもとにアジア地域を主とする諸外国において文化遺産保護協力事業を推進する。 ア　文化遺産の保護協力事業及び国際共同研究事業を以下のように実施し、成果を広く公表する。 （ウ）上記各事業と連携しつつ、文化遺産の保護に関する研究会の開催等を通じて国内外の専門家との情報の共有化を図る。
プロジェクト名称	保存修復技術の国際的応用に関する研究	
文化遺産国際協力センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○加藤雅人（技術支援研究室長）、前川佳文（研究員）、鴫原由美（保存科学研究センターアソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】

○ミャンマー・バガン遺跡における寺院壁画保存に向けた煉瓦造建造物外壁の調査準備と保存修復方法の検討に関する研究協力者との打合せ及び事例調査を下記の日程で行った。
期間：4 月 19 日～29 日
場所：フィレンツェ国立修復研究所、文化協会バスティオーニ

○ミャンマー・バガン遺跡における煉瓦造寺院（No.1205）の外壁調査と保存修復方法の検討及び施工実験／ミャンマー・バガン遺跡における壁画の技法及び図像学的調査
期間：7 月 11 日～8 月 5 日
場所：バガン遺跡群　1,205 寺院

若手専門家の育成

○本事業に関する発表
・学会発表「ミャンマー・バガン考古遺跡群における壁画保存修復に向けた調査研究」-美術史的・技法的視点による壁画調査- 文化財保存修復学会第 40 回大会（高知）、6 月 12 日
・論文「Integrated scientific investigations on the constitutive materials from Me-taw-ya Temple, Pagán Valley, Burma (Myanmar)」pp.737-750, Journal of the International Measurement Confederation Volume 131, 19.1

年度計画評価	A

【評定理由】
下記各観点から評価を行った。①適時性及び⑤継続性においては、昨年に引き続き 30 年度も、28 年 8 月に発生したミャンマー地震による被害への対応を実施したことをはじめ、当事国からの保存修復方法改善に向けた協力関係の継続要請は続いており、本事業は高い適時性と継続性を得ていると判断した。②独創性においては、当研究所の卓越した国際的ネットワークを生かし、当事国が抱える問題点の解決に向けてひとつひとつ丁寧に取り組む事業の進め方は他では行われていないため、独創性は高い。③発展性においては、当事国より本事業における目標の設定方法及び進行管理方法に大きな関心が寄せられている。④効率性においては、現地専門家との良好な関係性が築けたこともあり、限られた時間の中でも着実に成果が得られている。よって、所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	B	B	A

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） 論文 1 件、研究発表 3 件（ア）、刊行物 1 件（イ）	定量評価 －

ア前川佳文「Il progetto in corso di Tokyo National Research Institute for Cultural Propertie」（The University of Applied Sciences and Arts of Southern Switzerland、4 月 26 日）ほか 2 件、イ『ミャンマー・バガン遺跡における寺院壁画の保存に向けた外壁調査と保存修復方法の研究』（東京文化財研究所）

中期計画評価	A

中期計画記載事項	諸外国における文化遺産の保存修復及び管理活用に関する研究会の開催や遺跡現地におけるワークショップを含む国際共同研究等の実施を通じて、その理念と技術の両面における研究を進めるとともに、国際協力を推進するための基盤を強化する。 また、その成果をもとに、日本が得意とする調査技術や保存技術等を活かしつつ、ミャンマーやカンボジアなど ASEAN 諸国をはじめ、諸外国での文化遺産保護に関する技術支援や体制強化などに資する協力事業を実施する。
評定理由及び今後の見通し	30 年度は、現地の保存修復に携わる若手専門家を積極的に事業に取り込み、震災復興に直結した支援活動に加えて人材育成事業も積極的に展開することができた。また、調査のみに留まらず、調査結果を具体的に対象となる文化財に反映させ示すことができた結果、当事国関係者より高い評価を得ることができた。以上の理由から、中期計画の 3 年目に所期の計画を上回る大きな進展を得た研究業務が遂行されたといえる。31 年度以降も継続して良好な関係を維持しながら、ミャンマーの文化財保存分野に貢献できる事業を行う。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2312Fア

中期計画の項目	2-(3)-①-2)	文化遺産保護に関する国際協働
年度計画の項目	2-(3)-①-2)-ア	①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進 2)文化遺産保護協力事業の推進 国際共同研究等の実施を通じて諸外国の保存修復及び管理活用に関する考え方や手法に関する研究を進め、国際協力を推進するための基盤を強化するとともに、その成果をもとにアジア地域を主とする諸外国において文化遺産保護協力事業を推進する。 ア　文化遺産の保護協力事業及び国際共同研究事業を以下のように実施し、成果を広く公表する。 (ア)カンボジア・アンコール遺跡群（特に西トップ遺跡及びタ・ネイ遺跡）やミャンマーをはじめとする東南アジア地域等の文化遺産保護に関する調査研究及び保護協力事業を実施する。
プロジェクト名称	カンボジア・西トップ遺跡の調査と修復	
企画調整部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○佐藤由似（国際遺跡研究室専門職）、杉山洋（国際遺跡研究室特任研究員）	

【年度実績と成果】

○1 月から開始した中央祠堂の解体を継続し、8 月までに屋蓋部、躯体部上半、躯体部下半の順で解体を行い、それぞれ仮組を行った。
○9 月以降は基壇部の実測と調査に入った。上成基壇中央にある撹乱壙の発掘と調査の結果、当該土壙は 20 世期初頭にフランスが修復を行った時に基壇の状況を調べるために開けた試掘壙であると推定するに至った。
○10 月中央祠堂上成基壇と下成基壇の解体を進め、内部ラテライト基壇の西南部を露出し、11 月に建築班の調査を行い、写真測量を行った（写真）。
○基壇調査と平行して東側仏像台座の解体と調査を行い、前身遺構とみられるラテライト基壇を発見し、台座の地下構造が明らかとなった。
○12 月アンコール国際調整委員会において、これまでの業績がカンボジア政府に認められ、サハメトレイ勲章を受賞した。

中央祠堂基壇西南部　砂岩外装解体後の調査

29 年同様、解体に伴う調査を詳細に行うことによって、当該遺跡の歴史的変遷に関して、解体前の調査より飛躍的に高い精度での解明が進んだ。現地の若手研究者と共に、調査修復という遺跡修復と歴史的変遷の解明という新たなシステムを構築できたと考える。

年度計画評価	B

【評定理由】

①適時性に関しては西トップ遺跡の保存状況に鑑み適時的に修復を開始したことが評価できる。②独創性に関しては調査と修復を組み合わせるこれまでにない修復のシステムを確立した点が評価できる。③発展性に関しては、現地の若手研究者と共に事業を進めている点、並びに、遺跡の解体修復にとどまらず、上座部仏教の広がり、クメール文明に於ける石造建造物研究における成果が評価できる。④効率性に関しては効率よく機材と人材を使用配置することにより、予定よりほぼ 1 年早く中央祠堂の解体を進めることができた点を評価できる。⑤継続性に関しては当該調査修復が南祠堂から北祠堂、さらには中央祠堂へと切れ目無く継続的に実施されていることが評価できる。
以上の各評価基準に照らし、本事業の 30 年度の評価は順調に進んでいる各側面に鑑みて、B 評価に値すると考える。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ○論文発表：1 件　ア ○口頭発表：1 件　イ　　○報告書：ウ、エ	定量評価 —

ア佐藤由似、杉山洋「西トップ遺跡北祠堂偽扉の調査―釈迦如来立像に関する検討―」『奈良文化財研究所紀要 2018』30 年 6 月 30 日
イ佐藤由似、杉山洋「西トップ遺跡中央祠堂の調査と修復」第 30 回国際調整委員会技術小委員会、30 年 6 月 5 日
ウ奈良文化財研究所『西トップ遺跡調査修復中間報告 7 中央祠堂屋外部解体編』31 年 3 月 29 日
エ奈良文化財研究所『Survey and Restration of Western Prasat Top Interim Report 7 Dismantling the Roof Part of Central Sanctuary』31 年 3 月 29 日

中期計画評価	B

中期計画記載事項	諸外国の文化遺産担当者等を対象とした研修や専門家の派遣を通じて、文化遺産の保存・修復に関する人材育成と技術移転を進める。研修は一時的な技術移転に留まらず、国際的な文化遺産保護に関する情報交換、技術移転、相互協力を行い、国際貢献に努める。
評定理由及び今後の見通し	西トップ遺跡の調査修復事業においては、今中期計画期間中に事業を完了する計画である。その目標に向かい、29 年度に北祠堂の解体と再構築を終了、30 年度に中央祠堂の解体調査に着手、躯体部の解体と基壇部の調査という、予定以上の進展での事業進行を行うことができた。中央祠堂に関しては一部の仕上げを残し 31 年度中に大まかな完成に到達できる見通しを得ている。本事業はこうした高い効率性と継続性をもって実施されており、中期計画の進展状況としても、予定より早い事業進行と大きな成果に鑑みて、B 評価とする。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2313E-1

中期計画の項目	2-(3)-①-3)	文化遺産保護に関する国際協働
年度計画の項目	2-(3)-①-3)-ア	①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進 3)文化遺産の保存・修復に関する人材育成等 文化遺産保護の担当者や学芸員及び保存修復専門家を対象とした研修や専門家の派遣を通じて諸外国における文化遺産の保存・修復に関する人材育成と技術移転を積極的に進める。 ア　国内外の諸機関等と連携して人材育成や技術移転等の国際支援を実施する。また海外の文化遺産保存担当者を対象に、国内外において和紙及び紙・絹、漆及び漆文化遺産等についての保存修復の講義と実技を行い、基礎的な知識を教授する。在外の日本古美術品を対象に事前調査を行い、その結果をもとに修復を行う。
プロジェクト名称	在外日本古美術品保存修復協力事業	
文化遺産国際協力センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○加藤雅人（技術支援研究室長）、元喜載、小田桃子（以上、アソシエイトフェロー）、江村知子（文化財情報資料部文化財アーカイブズ研究室長）	

【年度実績と成果】

○作品修復を以下の通り実施した。
・ナショナルギャラリー・オブ・ビクトリア（オーストラリア）所蔵　般若図　絹本着色　掛軸1幅　修復完了。
・ナショナルギャラリー・オブ・ビクトリア（オーストラリア）所蔵　親鸞聖人絵伝　絹本着色　掛軸4幅　修復中。
・インディアナポリス美術館（アメリカ）所蔵　煙寺晩鐘図・平沙落雁図　紙本墨画　掛軸2幅　修復中。
・インディアナポリス美術館（アメリカ）所蔵　太公望図・林和靖図　紙本墨画　掛軸2幅　修復中。
・インディアナポリス美術館（アメリカ）所蔵　八橋図・檜図　紙本金地着色　6曲1双　修復中。
○所蔵館現地における作品調査を以下の通り実施した。
・モントリオール美術館（カナダ）
○学会発表を以下の通り実施した。
・小田桃子ほか「クラクフ国立博物館所蔵　狩野董川中信筆『月下秋景図（絹本着色 掛軸装）』修復事例報告」、文化財保存修復学会第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと（高知県）、6月16～17日
・元喜載ほか「日本絵画の裏彩色に対する剥落止めに用いる膠水溶液濃度の検討」、文化財保存修復学会第40回大会、高知市文化プラザかるぽーと（高知県）、6月16～17日

修復作業

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、近年日本の修復技術・材料に対する海外からの注目が集まっている。また引き続き、本事業への参加及び日本古美術品の保存修復に対する問い合わせがあり、その需要は高い。これらの需要に即応し、30年度は5件の作品修復を実施できたことから適時性が高いと判断した。②独創性においては、日本美術品についての専門的な修復技術・知識を用いる本事業は、当研究所特有の知見を活かした事業であり、他では行われていないため、独創性が高いと判断した。③発展性においては、修復することにより海外において日本の文化財の活用が進んだ。更に成果を日本語及び英語で国内外へ発信することで技術の応用も期待できる。④効率性においては、最小限の員数及び限られた時間の中で、修復、研究発表及び海外での作品調査を行うことができた。⑤継続性においては、作品修復、また修復処置に対する助言等、海外の博物館美術館からの要望が高く、継続性が高いと判断した。以上のことから、年度計画に従って順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	B	B	A

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	（参考値） 修復作品5件（11点）、報告書4件（ア）、作品調査1件、学会発表2件	―

ア 報告書『在外日本古美術品保存修復協力事業　平成30年度　遊女と禿図　No.2015-1　修復報告』、31年3月　ほか3件

中期計画評価	B

中期計画記載事項	諸外国の文化遺産担当者等を対象とした研修や専門家の派遣を通じて、文化遺産の保存・修復に関する人材育成と技術移転を進める。研修は一時的な技術移転に留まらず、国際的な文化遺産保護に関する情報交換、技術移転、相互協力を行い、国際貢献に努める。
評定理由及び今後の見通し	中期計画の3年目として、30年度は所期の計画通り順調に遂行したと判断した。31年度は、27年度に輸入した1件4点及び29年度輸入した3件6点の作品の修復を引き続き行うとともに、次期修復候補作品の調査及び情報収集を継続する。30年度に修復が終了した1件の作品に関しては、日英二か国語で報告書を刊行することで情報発信を行い、技術移転に努める。

【書式Ｃ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2313E-2

中期計画の項目	2-(3)-①-3)	文化遺産保護に関する国際協働
年度計画の項目	2-(3)-①-3)-ア･イ	①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進 3)文化遺産の保存・修復に関する人材育成等 文化遺産保護の担当者や学芸員及び保存修復専門家を対象とした研修や専門家の派遣を通じて諸外国における文化遺産の保存・修復に関する人材育成と技術移転を積極的に進める。 ア　国内外の諸機関等と連携して人材育成や技術移転等の国際支援を実施する。また海外の文化遺産保存担当者を対象に、国内外において和紙及び紙・絹、漆及び漆文化遺産等についての保存修復の講義と実技を行い、基礎的な知識を教授する。在外の日本古美術品を対象に事前調査を行い、その結果をもとに修復を行う。 イ　ユネスコ･アジア文化センター（ACCU)等が実施する研修への協力を行う。
プロジェクト名称	国際研修	
文化遺産国際協力センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○)】** ○加藤雅人(技術支援研究室長)、後藤里架、五木田まきは（以上、アソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】

○日本国内研修―国際研修「紙の保存と修復」の開催
・日時及び場所：8 月 27 日～9 月 14 日、東京文化財研究所ほか
・主催：東京文化財研究所、文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）
・参加者所属国：アルゼンチン、イギリス、オーストラリア、カナダ、ザンビア、デンマーク、フィジー、フランス、ブータン、ポーランド
・講義、実習等：材料学（紙、伝統的接着剤)、装潢修理技術実習（巻子修復)、手漉き和紙工房見学、取り扱い（実習）等。

日本国内研修

○メキシコ研修―ICCROM-LATAM プログラム「International Course on Paper Conservation in Latin America」の開催
・日時及び場所： 5 月 28 日～6 月 13 日、メキシコ文化省国立人類学歴史機構国立文化遺産保存修復機関（CNCPC）
・主催：CNCPC、東京文化財研究所、ICCROM
・参加者所属国：アルゼンチン、キューバ、コロンビア、スペイン、パラグアイ、ブラジル、ペルー、メキシコ
・講義、実習等：材料学（紙)、装潢修理技術の基礎（実習、講義)、装潢修理技術の欧米紙文化財への応用（講義、実習）など

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、海外の美術館・博物館、修復関係者からの要望が常に高く例年開催しているが、随時、研修方法及び内容の変更を行ってきており、適時性がある。そのことは、参加者の満足度が 100%であることからもうかがえる。②独創性においては、伝統技術、材料科学、歴史学などの様々な専門家による講義及び実習を備え、かつ紙漉現場などの実地学習をも備えた研修は他にはない。これらの内容は当研究所の基礎研究及び調査に基づいており独自のものであり、高い独創性を示しえた。③発展性においては、日本の紙文化財だけでなく海外の文化財の修復にも応用が可能である。帰国後のフォローも行っている。さらに参加者が帰国後に報告会、シンポジウム、ワークショップなどで報告することで知見・経験が共有されている。④効率性においては、プログラム編成や旅程を工夫することで、限られた費用と期間で最大限の研修効果を得ることができた。⑤継続性においては、参加者の好評を得、既に 25 年以上の歴史を持つが常時応募倍率も高い。また、研修修了者の同僚、後輩、学生などからも応募があり、継続が望まれている。以上のことから、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	B	B	A

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値）研修開催数：2 回、日本研修参加者数：10 人、メキシコ研修参加者数：11 人、研修参加者満足度：日本研修 100%、メキシコ研修 100%	定量評価 －

中期計画評価	B

中期計画記載事項	諸外国の文化遺産担当者等を対象とした研修や専門家の派遣を通じて、文化遺産の保存・修復に関する人材育成と技術移転を進める。研修は一時的な技術移転に留まらず、国際的な文化遺産保護に関する情報交換、技術移転、相互協力を行い、国際貢献に努める。
評定理由及び今後の見通し	30 年度は、国内外における研修を国際機関等と継続的に共催することにより、中期計画 3 年目においても順調に技術移転を行ったことからＢとした。 海外の諸専門家から恒常的に必要とされているため、31 年度以降も同様の計画のもと遂行予定である。メキシコ研修の 31 年度開催に関しては、共催機関である CNCPC が 12 月の政権交代後の新政府より期間等の変更を求められており、当研究所と共に内容等の検討を行っている。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2313F

中期計画の項目	2-(3)-①-3)	文化遺産保護に関する国際協働
年度計画の項目	2-(3)-①-3)-イ	①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進 3)文化遺産の保存・修復に関する人材育成等 文化遺産保護の担当者や学芸員及び保存修復専門家を対象とした研修や専門家の派遣を通じて諸外国における文化遺産の保存・修復に関する人材育成と技術移転を積極的に進める。 イ　ユネスコ･アジア文化センター（ACCU)等が実施する研修への協力を行う。
プロジェクト名称	ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）等が行う研修への協力	
企画調整部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○)】**○森本晋（部長)、中村一郎（写真室専門員)、神野惠・林正憲（都城発掘調査部主任研員)、脇谷草一郎（埋蔵文化財センター主任研究員)、柳田明進・松田和貴（埋蔵文化財センター遺跡保存修復科学研究室研究員）	

【年度実績と成果】

ユネスコアジア文化センター（ACCU）が行った以下の事業に協力し、文化遺産の調査研究・記録や保護に関する実践的な知識や技術を移転し、人材育成を行うことができた。

・個別テーマ研修「博物館収蔵品の保存科学」(7 月 24 日～8 月 7 日）では、3 か国（アフガニスタン、バングラデシュ、パキスタン）からの 5 人の研修生に対して、博物館収蔵品の保存に関する講義と実習を研究員 2 人が 8 日に渡り行った。
・集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」(9 月 4 日～10 月 4 日）では、アジア太平洋諸国 16 か国、16 人の研修生に対して、研究員 6 人が 5 日に渡り講義と実習の講師を務めた。
・フィジーで実施された「文化遺産ワークショップ」(10 月 22 日～27 日）に研究員 1 人を講師として派遣し、フィジー人他の専門家 15 人に対して博物館収蔵品の記録法と台帳作成に関する研修を行った。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記の各観点から評価を行った。①適時性において、本事業はアジア太平洋地域諸国から毎年寄せられる要望に応える研修事業に対応している。②独創性においては、研究所が長年にわたり蓄積してきた独自の知識や技術を研修生に伝えている。③発展性においては、研修対象国が多様であり、研修内容の改良が毎年なされている。④継続性においては、長年にわたり継続的に対応している事業で、今後も継続が計画されている。以上から、事業は順調に推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値）派遣講師、のべ 9 人、研修日数、のべ 16 日	定量評価 —

中期計画評価	B
中期計画記載事項	諸外国の文化遺産担当者等を対象とした研修や専門家の派遣を通じて、文化遺産の保存・修復に関する人材育成と技術移転を進める。研修は一時的な技術移転に留まらず、国際的な文化遺産保護に関する情報交換、技術移転、相互協力を行い、国際貢献に努める。
評定理由及び今後の見通し	本研修事業は、長期に渡り継続しているもので、相手国や研修生からの意見を取り入れて年々改良を加えながら進めている。現在の中期計画期間においても、研究所の持つ文化財に関わる包括的かつ先進的な知識・技術の移転を行っており、30 年度も順調に事業を遂行した。31 年度以降もさらに最新技術の紹介といった改良を続けながら研修を継続的に進める予定である。

【書式C】　施設名 アジア太平洋無形文化遺産研究センター　処理番号 2320G

中期計画の項目	2-(3)-②	アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する調査研究
年度計画の項目	2-(3)-②	アジア太平洋無形文化遺産研究センターは、アジア太平洋地域における無形文化遺産の保護のための調査研究の推進拠点として、以下の事業を行う。 ・同地域における無形文化遺産保護分野の研究についての総合的情報収集、及びその成果に基づく無形文化遺産保護調査研究データベースの充実 ・無形文化遺産保護に関する研究の活性化に資する国際会議・研究者フォーラムの開催 ・同地域における無形文化遺産保護と災害リスクマネジメントに関する調査研究の実施 ・国際会合等への出席やユネスコ及び関連機関との連携を通じた無形文化遺産保護関連の国際的動向の情報収集
プロジェクト名称	アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する調査研究	
研究担当	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○大貫美佐子(副所長兼研究担当室長)、佐々木一恵・野嶋洋子・長谷川悟郎・児玉茂昭（以上、アソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】

以下の事業を通じ、無形文化遺産保護そのための調査に貢献した。

(1)無形文化遺産保護パートナーシップ事業(文化庁受託)　(※詳細は処理番号 3320G(1)、(2)①を参照。)

①〈マッピング事業 1〉アジア太平洋諸国の無形文化遺産保護研究に関する文献調査

②〈マッピング事業 2〉アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する研究情報収集と活用の最適化

③アジアのポストコンフリクト国等を対象とした無形文化遺産の緊急保護支援の研究

(2)無形文化遺産の持続可能な開発への貢献に関する複合領域的研究 - 教育を題材として(ユネスコ活動費補助金)

・ベトナム、フィリピンの 2 か国において、フォーマル、ノンフォーマル教育に無形文化遺産の要素を取り入れた教材用のガイドラインを作成した。

・国際シンポジウム「無形文化遺産の持続可能な開発への貢献に関する複合領域的研究-教育を題材として」を開催(31 年 1 月 21 日～22 日、奈良)。

(3)アジア太平洋地域における無形文化遺産と災害リスクマネジメントに関する基礎的調査研究(文化財保存活用基金)

・「アジア太平洋の無形文化遺産と自然災害に関する地域ワークショップ」を開催(12 月 7 日～9 日、仙台・女川)、「災害から無形文化遺産を護り防災に活用するための提言」を採択、ウェブサイトより公開した。

・プロシーディングスを出版した(31 年 3 月)。

(4)情報公開等：『IRCI 概要 2018』日・英版、『IRCI リーフレット』日・英版作成（新規）

年度計画評価	A

【評定理由】

無形文化遺産保護は喫緊の課題であることに加え、紛争・災害に関する事業(1)③及び(3)は、緊急時における無形文化遺産への関心が高まりつつある国際的動向と合致し先駆的と評価できること、事業(2)も国際的枠組である持続可能な開発目標への貢献を目指すものであることから①適時性及び②独創性をA評価とした。またこれらの事業は対象国・ユネスコ等から高く評価されており、今後の活動への期待が大きいことから③発展性についてもA評価とした。④人員が限られているなか、東京文化財研究所、東北大学、現地機関等との連携により、効率的に活動を実施できた。⑤継続性においては、事業予算の安定的確保が難しい状況が依然としてあることからC評価とした。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	C

【目標値】	**【実績値・参考値】** (参考値)国際協力事業実施件数：5 件((1)①～③、(2)、(3))、国際会議等開催件数：5 件、国際会議等出席件数 7 件、海外調査件数 1 件、刊行物 6 冊	定量評価 －

①『IRCI 概要 2018(日本語版)』(9 月)②『IRCI 概要 2018(英語版)』(8 月)③『Proceedings of the Asia-Pacific Regional Workshop on Intangible Cultural Heritage and Natural Disasters』(31 年 3 月)、ほか全 6 冊

中期計画評価	B
中期計画記載事項	アジア太平洋地域において活動する研究者・研究機関と連携のもと、無形文化遺産保護の実践及び方法論についての国際会議やシンポジウム及び専門家会合並びに出版等の事業を通じた研究の活性化、研究情報の収集及びその活用戦略の検討と開発を通じて、当該地域における無形文化遺産保護のための研究を促進する。特に、自然災害等によって危機に瀕した無形文化遺産に注意を払い、その実態や保護事例についての調査研究を行うとともに、我が国の知見を通じて、無形文化遺産保護の国際的充実に資する。
評定理由及び今後の見通し	マッピング事業はまとめの段階に入り、文献収集について報告書を作成するとともに、31 年度のデータベース改善にむけた調査を実施し、より持続的な情報収集の体制作りも模索し始めた。無形文化遺産と教育に注目した持続可能な開発に関する事業においても、シンポジウムをふまえガイドラインを作成できた。ポストコンフリクト事業では各国研究機関等との連携体制が整い、紛争により危機に瀕した無形文化遺産について情報収集及び記録作成が進展した。自然災害に関する地域ワークショップでは、災害時の無形文化遺産保護やその防災・復興への活用についての提言が採択され、各国での今後の活動の進展が期待できる有意義な成果があった。今後は、継続中の事業についてはより具体的な情報収集や分析を進め、事例研究として成果を上げるとともに、国内外の研究機関との連携を強化しつつ、無形文化遺産保護の国際的充実と研究拠点形成に努める。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2411E

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)・2)・3)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。 1)文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。2)被災文化財関連情報に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。 3)文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。
プロジェクト名称	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○江村知子（文化財アーカイブズ研究室長）、橘川英規（研究員）、安永拓世（研究員）、米沢玲（研究員）、小山田智寛（研究員）、阿部朋絵（研究補佐員）、増田政史（研究補佐員）	

【年度実績と成果】

○全所的な文化財情報の発信：4半期ごとにアーカイブズWG協議会を開催した（5月11日、6月14日、9月25日、31年3月19日）。継続的に情報発信を行う基盤構築を行った。

○実践女子大学香雪記念資料館・京都工芸繊維大学美術工芸資料館「記録された日本美術史−相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」に協力し、所蔵資料である田中一松資料をまとまった形で初公開した。パンフレットを作成し、京都工芸繊維大学でのシンポジウムにおいて口頭発表を行い（7月7日）、文化財情報資料部研究会でも発表を行った（31年1月29日）。

○美術資料のデータ化と公開：栃木県佐野市立吉澤記念美術館所蔵　伊藤若冲筆「菜蟲譜」、薬師寺所蔵「国宝　吉祥天像」に関するデジタルコンテンツ等を作成し、所内公開を行った。

○所蔵図書・雑誌資料の書誌情報の標準化と所蔵資料管理の改良：約30万件の蔵書について標準的な情報化と効率的な情報公開、適切な蔵書管理のため、図書館システムを導入した。

○明治・大正期刊行の雑誌類等資料のデジタル化推進：当研究所及び東京美術倶楽部所蔵の『売立目録』について、データ入力と収載内容のテキストと画像が検索できるシステム改良を行い、所内公開に向けての準備を行った。

○資料閲覧室の運営・管理

・資料受け入れ数：和漢書3,833件、洋書70件、展覧会図録・報告書等7,092件、雑誌1,647件（合計12,642件）

・閲覧室利用状況：公開日総数137日・年間利用者合計1,070人

「記録された日本美術史−相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」パンフレット

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、国際的なオープンアクセス需要への対応のため、当研究所の活動と研究成果を広く周知することを継続的に行った。また実践女子大学・京都工芸繊維大学共催で行った展覧会に協力し、所蔵資料を初公開することができた。②独創性においては、当研究所が有する専門性・独自性の高い文化財情報の公開を念頭におき、『売立目録』のデジタル検索システムの所内公開の準備などを進めた。③発展性においては、国内外の関係機関と連携して、国内外に情報発信するための取り組みを積極的に行い、今後の活動の基盤を強化した。④継続性においては、当研究所が有する情報・画像資料のデジタル化作業を年間通じて順調に進めた。あわせて、高い利便性と安定した資料の保管の双方に配慮しつつ、資料閲覧室としての公共性と高い専門性を保持した運営を行い、週3回、一般利用者への所蔵資料の提供を行った。以上により、所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	B	A	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・「記録された日本美術史−相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」への協力:研究発表2件（ア） ・美術資料のデジタルコンテンツ制作と公開　2件（イ、ウ）	定量評価 −

ア　江村知子「田中一松資料について」（「記録された日本美術史−相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」シンポジウム、7月7日、京都工芸繊維大学）ほか1件、

イ　栃木県佐野市立吉澤記念美術館所蔵・伊藤若冲筆「菜蟲譜」、ウ　薬師寺所蔵「国宝　吉祥天像」（31年3月）

中期計画評価	B

中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。なお、文化財に関するデータベースの公開件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	30年度は、文化財研究の専門機関として研究成果の情報発信とデータベース化にあたって、汎用性・利便性を視野に入れつつ公開を推進し、あわせて資料閲覧室としての公共性と専門性の双方を有する運営を進めることができた。31年度以降も当研究所が行う文化財の調査研究とその成果を集約しつつ、データベースの継続的拡充を行い、専門的アーカイブと総合的レファレンスの充実を推進する。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2411F

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。 1)文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。特に全国遺跡報告総覧を充実させる。
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実	
企画調整部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○森本晋（企画調整部長）、高田祐一（文化財情報研究室研究員）	

【年度実績と成果】

・文化財情報データベースの充実として、従来より進めている遺跡、写真、報告書抄録、航空写真、図面画像、考古関連雑誌論文情報補完の各データベースに関して、データの入力・更新を行うとともに、公開データベースの更新を行った。

・データベースのデータ件数は30年度末で以下のとおり、順調に増加している。ただし（　）内は29年度末の値。（単位:件）

木簡　53,933件(166,658)【データベースの構造をリニューアル】
抄録　108,279件(103,028)
写真　798,976件(729,474)
遺跡　487,544件(483,842)
航空写真　1,394,006件(1,393,190)
図面画像　376,991件(346,672)
論文補完　99,367件(95,967)

遺跡報告総覧説明会

・埋蔵文化財の発掘調査報告書の全文検索データベース「全国遺跡報告総覧」に関して、関係機関との協議を計9回行ったほか、全国各地で説明会を5回開催した。

年度計画評価	A

【評定理由】

①適時性においては、最新のデータを提供して充実を図っている。②独創性においては、全国遺跡報告総覧のように他に類を見ないデータを提供しており、独自のデータ解析も提供している。③発展性においては、既存のデータベースの内容を着実に充実させているとともに、データベースの機能強化を実現している。④継続性においては、大規模なデータベースを維持し、確実なデータ提供を多年に渡って実現している。これらより、内容豊かなデータベースとして著しく発展していることから、順調に事業が推移していると判断し、全体の評定をAとした。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	A	A	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】**	定量評価
・文化財に関するデータベースの公開件数 24件	（実績値）公開データベースの件数　24件 （参考値）公開データベースのデータ件数　1,316,283件 データベースへのアクセス件数　12,870,940件 内全国遺跡報告総覧データ件数　48,687件 アクセス件数　11,175,466件 論文発表　5件（ア）　口頭発表　4件（イ）	A

（ア）論文　高田祐一「全国遺跡報告総覧における学術情報流通と活用の取り組み」他4件
（イ）研究発表　森本晋「編年時間参照系モデルを活用した編年定義間の不整合箇所抽出法について」他3件

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。なお、文化財に関するデータベースの公開件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	文化財情報に関する基礎的な研究を積み重ねつつ、継続性が重要なデータベースの充実を着実に進めている。他機関と協力して進める大規模データベースである全国遺跡報告総覧は、頻出用語表示機能などのデータ解析機能を付加し、データのダウンロードも141万件以上に達するなど、中期目標を超える成果を継続して達成しており、今後の発展も引き続き期待される。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2413F

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-3)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。3)文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。(連携推進課)
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供	
研究支援推進部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○津田保行（連携推進課長）、渡勝弥（課長補佐）、伊藤久美（事務補佐員）ほか	

【年度実績と成果】

・資料の収集・整理・保管・提供
新庁舎の完成に伴い、9 月 3 日から 10 月 14 日までの限られた期間で、図書約 25 万冊、雑誌約 8 万冊を仮設庁舎から新庁舎へ計画的かつ効率的に移動した。

・新庁舎の完成により書庫の収蔵冊数が約 47 万冊となり、旧庁舎の約 3 倍となる収蔵設備を充実した。また、閲覧室に加えて、閲覧室前の通路部分にも一般利用者の閲覧スペースを設けることで利用サービスの充実を行った。

・利用者サービス
利用者の利便性の向上を図るため、閲覧希望者には事前に閲覧希望資料をメールまたはファックスにて送付してもらうことにより、待ち時間の短縮を図った。
奈文研が組織運用する平城宮跡解説ボランティアの方々を対象に閲覧室の利用についての説明会を実施し、開かれた閲覧室と閲覧室の利用促進のアピールをした。

購入図書　804 冊
寄贈図書　8,052 冊
雑誌　2,953 冊

一般利用者　295 人
利用冊数　2,609 冊
来館者複写件数　1,011 件

遠隔利用：複写受付件数　346 件
貸借貸出冊数　65 冊

新庁舎の閲覧室

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性において、図書の移動を契機に書庫の鍵をシリンダー錠から職員個人のカードキーに移行したことにより、研究員が図書資料室に鍵を取りにくる必要がなくなったため、地下書庫に図書自動貸出機、複写機、閲覧机を配置することで資料の閲覧・出納を可能とし、研究員の調査・研究の利便性の向上を図った。また、一般利用者のために閲覧室前の通路部分にも閲覧スペースを設けて利用サービスの充実を行った。②発展性において、図書資料の収蔵スペースを旧庁舎の約 3 倍に充実させた。また、従来は図書自動貸出機で返却処理をしていたが、図書自動貸出機を地下 2 階に移動したため、返却処理は図書資料室でも行うこととし、夜間の返却用に図書資料室外に返却用ブックトラックを配置するなど、図書の移動を契機に多様な対応を行った。③効率性において、一般利用者の閲覧希望資料を事前に連絡制を導入することにより、待ち時間の短縮を行った。④継続性において、従来の継続的な業務を滞りなく行った。以上の観点から本事業は順調に推移していると判断した。

観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	A	A	A	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** (参考値) 資料閲覧室・図書資料室の開室日数　219 日 資料閲覧室・図書資料室の利用者数　295 人 文化財に関する資料・図書等の総件数　468,084 件	定量評価 —

中期計画評価	A

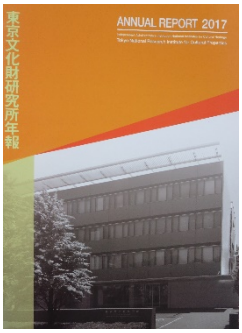
中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。
評定理由及び今後の見通し	長年の慢性的な書庫狭隘化が解消されたことにより、計画的に多種・多様な資料の収集計画を立案することが可能となった。また、書庫面積の拡大により棚数が増加したため、長期的に大規模な図書移動がないように各書架に余裕を持たせた資料配置を行ったことにより、研究員が書庫を利用するうえでの長期的な利便性を向上した。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2421E

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1)定期刊行物の刊行 ・『東京文化財研究所年報』 ・『東京文化財研究所概要』 ・『東文研ニュース』 ・『美術研究』(年3冊) ・『日本美術年鑑』 ・『無形文化遺産研究報告』 ・『無形民俗文化財研究協議会報告書』 ・『保存科学』
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行	
東京文化財研究所	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】**○齊藤孝正（所長）	

【年度実績と成果】

・『東京文化財研究所年報』2017年度版
・『東京文化財研究所概要』2018年度版
・『東文研ニュース』年3回（67～69号）
・『美術研究』（425号）（6月）
・『美術研究』（426号）（12月）
・『美術研究』（427号）（31年3月）
・『平成29年版　日本美術年鑑』（31年3月）
・『無形文化遺産研究報告』第13号（31年3月）
・『第13回無形民俗文化財研究協議会報告書』（31年3月）
・『保存科学』58号（31年3月）



『東京文化財研究所年報』

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行なった。①適時性においては、『無形文化遺産部研究報告』では、文化財等保存技術はその多くで伝承の維持が危ぶまれており、実態調査は喫緊の課題といえるが、伝統芸能で使われる楽器に関連する保存技術をまとめて報告された事例は少なく、研究プロジェクトの研究成果を速やかに発表することができた。②独創性においては、『美術研究』426号の高田知仁論文で、誌上58年ぶりとなる東南アジアの美術を取り上げ、タイ近世近代の螺鈿装飾と王権との密接な関係・変化について実証的検討を行った点を高く評価した。③発展性においては、『美術研究』425～427号に継続的に近代画家らの書簡を翻刻解題報告することで、当時の画壇の人的交流や関係の全体像を明らかにする研究への発展が期待される。④効率性においては、『保存科学』刊行では、30年度末の発行を実現するために、査読や英文校正等を含む編集作業の効率を向上させた。⑤定量評価においては、所期の予定通り12点の定期刊行物を刊行することができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	
定性評価	B	A	A	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】**	定量評価
・定期刊行物等の刊行件数　12件	（実績値）定期刊行物等の刊行件数　12件（以下のとおり） 『東京文化財研究所年報』2017年度版　刊行部数400部 『東京文化財研究所概要』2018年度版　刊行部数2,700部 『東文研ニュース』67～69号　刊行部数各1,600部 『平成29年版　日本美術年鑑』刊行部数・配布部数600部 『美術研究』425号～427号　刊行部数各400部、配布部数各380部 『無形文化遺産研究報告』第13号　発行部数600部 『第13回無形民俗文化財研究協議会報告書』　発行部数700部 『保存科学』58号　発行部数650部、配布部数500部	B

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	中期計画3年目となる30年度も所期の計画通り、各研究プロジェクトの研究成果を反映させた定期刊行物を刊行することができた。31年度以降も、学術誌としての一定の水準を保ちながら、また当研究所の事業内容を一般に広報する上でも有益な内容の報告書となるよう今後とも努める予定である。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2421F

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1)定期刊行物の刊行　・『奈良文化財研究所紀要』・『奈良文化財研究所概要』・『奈文研ニュース』・『埋蔵文化財ニュース』 2)公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 3)ウェブサイトの充実　・学術情報リポジトリ・なぶんけんブログ（探検!奈文研、コラム作寶樓等）
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行、公開講演会・現地説明会等の開催、ウェブサイトの充実	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○津田保行（連携推進課長）、渡勝弥（連携推進課課長補佐）溝端靖秀（連携推進課課長補佐）、ほか	

【年度実績と成果】

◆定期刊行物の刊行
- 奈良文化財研究所概要 2018　30 年 6 月刊行、3,000 部
- 奈良文化財研究所紀要 2018　30 年 6 月刊行、3,000 部
- 奈文研ニュース「No. 69」30 年 6 月「No. 70」30 年 9 月「No. 71」30 年 12 月「No. 72」31 年 3 月
- 埋蔵文化財ニュース　31 年 3 月「No. 174」「No. 175」「No. 176」「No. 177」

◆現地説明会
- 6 月 17 日平城宮東院地区の発掘調査(平城第 595 次) 現地説明会　於奈良市法華寺町他(参加者　813 人)
- 9 月 15 日藤原宮大極殿院の発掘調査(飛鳥藤原第 195 次)現地説明会　於橿原市高殿（参加者　694 人）
- 12 月 15 日平城宮東区朝堂院の発掘調査(平城第 602 次) 現地説明会　於奈良市法華寺町他(参加者 569 人)

◆講演会
- 6 月 16 日第 122 回公開講演会　講演者：山本、佐藤、福嶋（参加者 224 人）
- 9 月 22 日 東院庭園庭の宴（参加者　138 人）
- 10 月 13 日 第 10 回東京講演会タイトル「藤原から平城へ　平城遷都の謎を解く」
  講演者：渡辺・海野・大澤・今井・神野・玉田（参加者　530 人）
- 11 月 10 日第 123 回公開講演会　講演者：所長、高田、山藤（参加者　163 人）

奈文研ニュース

◆シンポジウム
- 10 月 23 日　第 1 回 報告書データベース作成に関する説明会　11 月 22 日　第 2 回　12 月 20 日　第 3 回　31 年 1 月 22 日　第 4 回　31 年 2 月 22 日　第 5 回
- 11 月 18 日　文化的景観研究集会（第 10 回）(参加者 90 人)
- 11 月 27 日　保存科学研究集会 2018「同位体比分析と産地推定に関する最近の動向」(参加者 116 人)
- 12 月 7 日～8 日　第 22 回古代官衙・集落研究集会「官衙・集落と大甕」(参加者 119 人)
- 12 月 21 日　遺跡整備・活用研究集会(参加者 129 人)
- 31 年 2 月 2 日～3 日　第 19 回古代瓦研究会シンポジウム(参加者 203 人)

◆体験型イベント
- 8 月 7 日～8 日「つくろう!!ミニチュア玉枕」(飛鳥資料館) 阿武山古墳から出土した玉枕のミニチュアをビーズで作るイベント（参加者 103 人）
- 8 月 21 日～22 日「奈良の都の木簡に会いに行こう!2018」子供達が発掘現場から持ち帰った木簡を含む土の洗浄・選別作業や木簡の解読等の体験を行った。(参加者 49 人)（日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」採択事業）
- 11 月 9 日「古代の曲物迫る」(飛鳥資料館) 曲物を桜の樹皮で綴じる「樺綴じ」を応用した栞づくりを、曲物の材料をつかって体験を行った。(参加者 17 人)

◆ウェブサイトの充実
- ウェブサイト全体のアクセス件数は 13,931,633 件（29 年度 10,887,187 件）を達成した。
- 「全国遺跡報告総覧」の登録件数が 3 万件を超え、公開当初の倍となり、発行機関数は 530 機関で公開当初の 1.6 倍となった。8 月にはモバイル端末向けの PDF を公開し、また、12 月には遺跡の所在地、種別、時代等で報告書が検索できるサービスを公開した。
- 奈文研ブログ「探検！奈文研」は、 No183～No200　「コラム作寶樓」月 2 回更新

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、調査研究の成果を適時に刊行するとともに、現地説明会開催、ウェブ公開いずれにおいても即時的に情報を発信した。②独創性においては、当研究所の調査・研究内容の新規性及び卓越性を持たせ発信することができた。③発展性においては、個々のデータベース登録数も増え、多様なブログ、コラム等を更新することによりＨＰの内容を一層充実させた。また、当研究所の調査研究の成果を多元的に発信するために体験イベントを実施した。④継続性においては、定期刊行物、講演会、ウェブ公開いずれにおいても従来から継続的に実施している上、データベースは随時、データを増加しており、アクセス数も上昇しているため、恒久的な提供と利用が認められる。⑤定量的評価の観点について、刊行数においては目標通りに実施することができ、公開講演会等においては目標を上回る回数を実施することができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	A	A	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
(1) 定期刊行物等の刊行件数 10 点 (2) 公開講演会、現地説明会の開催回数 10 回	(実績値) (1) 定期刊行物等の刊行件数　10 点 (2) 公開講演会、現地説明会の開催回数　20 回	(1) B (2) A

中期計画評価	A

中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。
評定理由及び今後の見通し	目標を上回る回数の公開講演会や現地説明会等を実施し、調査成果を精力的かつ多元的に発信している。また、全国遺跡報告総覧などウェブサイトの利用率は飛躍的に上昇している。 今後も公開講演会、現地説明会、ウェブサイトの充実等を通じて調査研究の成果をさらに発信していきたい。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2422E

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-2)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 2)公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講座（オープンレクチャー）
プロジェクト名称	平成30年度オープンレクチャー（調査･研究成果の公開）	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○小林達朗（日本東洋美術史研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小野真由美（主任研究員）	

【年度実績と成果】

○10月26日、27日の2日間にわたり、専門家はもとよりひろく一般からも聴講者を募集し、オープンレクチャー「かたちからの道、かたちへの道」を開催した。

○当研究所より2人、外部より2人の講演を行った。それぞれの講演テーマは次の通りである。
・小山田智寛（文化財情報資料部研究員）「文化財データベースの作成とその意義について」
・水野裕史（筑波大学助教）「雪村周継と臨済宗幻住派―大雄山法雲寺を起点に―」
・山梨絵美子（副所長）「裸婦に表わされた地域性―フジタ・常玉・陳澄波を例に」
・呉孟晋（京都国立博物館主任研究員）「伝統を現代につなぐ：斉白石が描いた花鳥のかたち」

講演会の様子

○外部からの聴講者は10月26日が66人、27日が68人の参加を得た。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、両日あわせて134人の参加者を見、専門家以外の一般参加者が多かった。参加者からのアンケート結果では、10月26日の56人の回答者数のうち、「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせ76.8%、10月27日の54人の回答者のうち「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせ94.5%の回答を得ることができ、時宜に適った講演テーマにて実施できた。②独創性においては、「かたちからの道、かたちへの道」という大テーマのもと、日本美術の多様な作品についてこれまで未発表であった研究成果を公開できた。③発展性においては、日本美術について多様な面から研究成果を一般に公開でき、今後の専門論文発表の礎となった。④継続性においては、「古典の日」に合わせ、さらに台東区の「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の一環としての協力を欠かさずに続けて開催している。また、定量評価においては、年1回開催の目標を達成し、アンケートにより参加者の高い満足度を得た。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】**	定量評価
・講演会の開催回数 1回	（実績値） 1回	B

中期計画評価	B

中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	30年度は、29年度に続き今中期計画3年目にあたるプロジェクト事業を計画通り達成できた。31年度も同様に「かたちからの道、かたちへの道」をテーマとして、2日間、各日2人の形態で開催する予定である。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2423E

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-3)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 3)ウェブサイトの充実 ・東文研総合検索システム　・東京文化財研究所刊行物一覧　・学術情報リポジトリ
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備・充実	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○二神葉子（文化財情報研究室長）、小山田智寛（研究員）、三島大暉（アソシエイトフェロー）、逢坂裕紀子（研究補佐員）、安岡みのり（研究補佐員）、丸山礼（研究補佐員）	

【年度実績と成果】

○調査研究成果の発信

・2件のウェブデータベース（「明治大正期書画家番付データベース」、「書画家人名データベース（明治大正期書画家番付による）」）を新規に公開した。また「総合検索」にて公開されている所蔵図書や文化財関係文献等の各種データベースに対するデータ追加を毎月末に実施するとともに、機能改善を適宜実施した。さらに、東京文化財研究所ウェブサイトの更新、SNSによる情報発信を適宜実施した。

・刊行物一覧について、全文検索や並べ替え、当該刊行物のPDFファイルへのリンク機能を追加し、利便性を高めた。

○研究成果発信のための情報セキュリティの強化

・サイバー攻撃を防ぐファイアウォール、及び所外へのアクセスを制御するプロキシの機能を統合したセキュリティシステム、ネットワーク機器の動作記録（ログ）を一か所で管理するログサーバーを導入、無線LANアクセスポイントを更新した。

・ネットワーク機器及びソフトウェアの保守・監視を行い、国立文化財機構内他施設の担当者と情報交換しセキュリティ水準の維持向上に努めた。

・当研究所職員の情報セキュリティへの意識向上を目的に研修を開催した（9月4日、31年3月12日）。

○その他

・29年度に引き続き、文化財アーカイブズ研究室及び近・現代視覚芸術研究室と連携し、データベース管理システムOracleによる所内データベースをカスタマイズ、利便性を向上させた。また、学会や専門家のユーザー会での発表により、データベース構築や運用、データベース公開の効果に関連した成果を公表した。

明治大正期書画家番付データベース

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、データベースの新規公開、データ追加は我が国の文化財に対する国内外の関心にこたえるもので、時宜に適ったものである。②独創性においては、無料のデータベースエンジン、ウェブコンテンツを統合的に管理するcontent management system(CMS)を利用、所内で独自開発した公開データベースは学会やユーザー会でも高く評価された。③発展性においては、横断検索が可能で、画像、テキストのいずれも扱えるデータベースを構築、今後のデータベースの多様化にも対応した。④効率性においては、情報システムへの理解を深める所内向け研修など、効果的に活動を所内外に伝達できた。⑤継続性においては、ウェブサイト更新による情報発信、セキュリティ水準向上への対応も継続的に実施した。⑥定量評価においては、目標値の150%超のデータベースを公開できた。よって、初期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	A	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
・データベースの公開件数　18件	（実績値）データベースの公開件数　28件 （参考値） ・データベースのデータ件数 1,271,388件 ・データベース等へのアクセス件数 3,096,569件 （うち海外からのアクセス件数割合 約30%） ・学会発表件数　6件（ア）　論文件数　1件（イ）	A

ア 小山田智寛、二神葉子、福永八朗、三島大暉、田所泰「刊行物およびWeb公開データベースを含む東京文化財研究所の情報管理システム」（デジタルアーカイブ学会第3回研究大会、京都大学、31年3月15、16日）ほか5件

イ 小山田智寛、二神葉子、三島大暉「持続可能な文化財情報データベースの構築と運用について」（『公開シンポジウム「人文科学とデータベース」2019　発表論文集』、31年3月2日刊行）

中期計画評価	B

中期計画記載事項	文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。
評定理由及び今後の見通し	30年度は、上記の中期計画の記載事項についていずれも所期の計画を上回ることができた。31年度以降も、運営費交付金や外部資金による他プロジェクトと連携し、効率的に調査研究を実施する。また、情報システムセキュリティの確保に留意しつつ、調査研究及びウェブサイトを活用した成果公開のための情報基盤の整備を行うとともに、国内外での事例調査を実施し、文化財情報データベースをさらに拡充する。

【書式C】　施設名　奈良文化財研究所　処理番号　2431F

中期計画の項目	(4)-③	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-1)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。 1)特別展・企画展
プロジェクト名称	平城宮跡資料館・飛鳥資料館・藤原宮跡資料室における展示公開	
企画調整部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○加藤真二（企画調整部展示企画室長）、石橋茂登（飛鳥資料館学芸室長）ほか	

【年度実績と成果】

○平城宮跡資料館　開館日数 307 日　入館者数 90,558 人
・夏期企画展「夏のこども展示　たいけん！なぶんけん」（7 月 21 日～9 月 2 日）開催。入館者数 9,205 人
・秋期特別展「地下の正倉院展 - 荷札木簡をひもとく - 」（10 月 13 日～11 月 25 日）開催。入館者数 15,853 人
・新春ミニ展示「平城京の亥」（31 年 1 月 4 日～ 1 月 27 日）開催。入館者数 4,576 人
・冬期企画展「発掘された平城 2017・2018」（31 年 2 月 2 日～3 月 31 日）開催。入館者数：11,725 人
・常設展展示物・施設のメンテナンス　専門業者により 10 月 29 日に実施、ボランティアガイド・外部質問、取材、学校団体対応（5 件/週）。展示物等の貸借業務（16 件）

○飛鳥資料館　開館日数 304 日　入館者数 29,276 人
・春期特別展「あすかの原風景」（4 月 27 日～7 月 1 日）開催。入館者数 8,816 人　5 月 25 日ウォークイベント開催。
・夏期企画展「第 9 回写真コンテスト「飛鳥のいきもの」」（7 月 27 日～9 月 2 日）開催。入館者数 2,428 人
・秋期特別展「よみがえる飛鳥の工房－日韓の技術交流を探る」（10 月 5 日～12 月 2 日）開催。入館者数 7,492 人 11 月 9 日曲物イベント開催。
・冬期企画展「飛鳥の考古学 2018」（31 年 1 月 25 日～3 月 17 日）開催。入館者数 3,117 人

平城宮跡資料館ギャラリートーク

飛鳥資料館曲物イベント

○藤原宮跡資料室
常設展示に加え、①山田寺の調査出土遺物、②山田道の調査出土器・古墳時代の弓・木製品等の写真パネル、③飛鳥寺北方の調査出土軒瓦・文字瓦・鴟尾等を速報展示。

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。

①適時性においては、新庁舎も完成し奈文研の関心が高まっている中、その業務を紹介する平城の夏期企画展を実施できた。②独創性においては、秋期特別展において、木簡という、奈良文化財研究所ならではの素材をもとに、全国各地からの来館者の地元と平城宮・京とのかかわりを知ってもらうという、広がりをもった展示を行なうことができた。③発展性においては、各展覧会とも、共用のパンフレットなど、3 月に開館した平城宮いざない館第４展示室とリンクさせる企画を実施することができた。将来的に両者を利用した企画展・特別展を開催す基礎を構築できた。飛鳥資料館では春期展における地籍図の調査と展示やウォークイベントの開催を通じた地元との連携、秋期展での曲物職人とコラボレーションした製作イベントの開催など、従来の展示・講演会と異なる展開を試みていることが高く評価できる。④継続性においては、毎年行っている展覧会であっても、内容を変えつつ、継続的に実施するとともに、ギャラリートークなども充実させている。このため、平城の秋期特別展については、29 年度よりも 1,012 人多い来館者があった。定量評価について、平城宮跡資料館においては特別展・企画展を年間 4 件開催することができ、目標以上に実施出来た。

以上から、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	A	A	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】**	定量評価
(1) 平城宮跡資料館特別展・企画展開催件数　4 件 (2) 飛鳥資料館特別展・企画展等開催件数　4 件	(実績値) (1) 平城宮跡資料館特別展・企画展開催件数　4 件 (2) 飛鳥資料館特別展・企画展等開催件数　4 件 (参考値) 平城宮跡資料館　入館者数：90,558 人　開館日数：307 日 飛鳥資料館　入館者数：29,276 人　開館日数：304 日 藤原宮跡資料室入館者数：8,270 人、開館日数：357 日 図録等刊行実績：平城宮跡資料館: 3 件（ア～ウ）、飛鳥資料館: 3 件（エ～カ）	(1) B (2) B

ア『たいけん！　なぶんけんノート』（T210 ㎜×Y100 ㎜判フルカラー24 ページ　7 月 21 日発行）
イ『地下の正倉院展―荷札木簡をひもとく―』（A4 判フルカラー16 ページ　10 月 13 日発行）
ウ『発掘された平城 2017・2018』（A4 判フルカラー８ページ　31 年 2 月 2 日発行）
エ『あすかの原風景』（定形外オールカラー72 ページ　4 月 27 日発行）
オ『よみがえる飛鳥の工房－日韓の技術交流を探る』（A4 オールカラー42 ページ　10 月 5 日発行）
カ『飛鳥の考古学 2018』（Ａ４オールカラー20 ページ　31 年 1 月 25 日発行）

中期計画評価	B

中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。
評定理由及び今後の見通し	平城宮跡資料館、飛鳥資料館ともに４回の展覧会を開催するなど、順調に目標値を達成している。来館者のさらなる理解向上に向け、プロジェクトの実施を図りたい。

【書式C】　施設名　奈良文化財研究所　処理番号　2432F

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-2)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。 2)定期的に勉強会や研修を開催し、平城宮跡解説ボランティアを育成するとともに、解説ボランティアとの連絡会議等を通じて、より効果的かつ効率的な制度運用を行う。
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティアの研修内容の充実及び運用改善	
研究支援推進部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○津田保行（連携推進課長）、溝端靖秀（連携推進課課長補佐）、岩井靖子（連携推進課事務補佐員）、林尚代（連携推進課事務補佐員）、京牟礼薫（連携推進課事務補佐員）	

【年度実績と成果】

○解説ボランティア研修等

解説ボランティアの育成に資するため、平城宮跡資料館及び平城宮跡歴史公園平城宮いざない館（受託授業）における特別展、企画展にかかる解説ボランティアに向けての展示解説研修の実施、発掘調査の現地説明会、及びボランティア勉強会を実施した。

・平城宮跡歴史公園平城宮いざない館展示研修 4 月 1 日から 16 日の毎日（計：土、日を除く 11 日間）及び 21 日
・平城宮跡資料館夏期こども展示解説研修 7 月 20 日・23 日
・平城宮跡資料館「地下の正倉院展」解説研修 10 月 12 日・15 日（Ⅰ期）、10 月 29 日（Ⅱ期）、11 月 12 日（Ⅲ期）
・解説ボランティア向けの発掘調査の現地説明会（平城宮跡東院地区） 6 月 15 日（平城宮東院地区）、12 月 14 日 （平城宮東区朝堂院）
・解説ボランティア勉強会 8 月 18 日・20 日、9 月 15 日・18 日、12 月 15 日・17 日（毎月同内容で 2 回開催、平城宮跡に関する内容等について）

○解説ボランティアに関する会議

・平城宮跡解説ボランティア懇談会の開催（研究部と事務部が一体となったボランティア活動を検討する会議、毎月 1 回開催）
・平城宮跡解説ボランティア連絡会議の開催（解説ボランティア班長と奈文研職員によるボランティア活動の確認、活性化、改善等を検討するための会議、毎月 1 回開催）

連絡会議については、平城宮跡資料館駐輪場の整備、定点ガイド配置者の不足解消、次年度勉強会の希望テーマの意見集約など、解説ボランティアからの意見を取り入れ、運用改善を行った。また、文化庁や平城宮跡歴史公園を運用する国営飛鳥歴史公園事務所、平城宮跡管理センター、奈良県、平城宮跡再生プロジェクト（県の指定管理者）と定期的に打ち合わせを行い、平城宮跡内での事業、イベントに関する情報を収集し、それを解説ボランティアへ提供することで来訪者に平城宮跡の情報発信を行った。

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、新制度のもとで活動を開始した解説ボランティアの活動を確認し、改善等の意見を随時取り入れ検討するための平城宮跡解説ボランティア連絡会議、及び研究部と事務部が一体となって組織した平城宮跡解説ボランティア懇談会を継続的に開催したこと、また、毎朝開催している朝礼等において解説ボランティアからの意見を取り入れること等により、研究所におけるボランティアの情報発信内容等が効果的に進んでいくようになった。

②独創性においては、解説ボランティアの資質向上のため、平城宮跡における当研究所の最新の調査研究成果を踏まえた勉強会、発掘調査現地説明会、マナーや展示の研修に加え、解説案内に即した実地研修を企画実施した。③発展性においては、新制度の下、勉強会、研修を実施するとともに班長出席による連絡会議を毎月実施し、ボランティアからの意見を随時取り入れるようにすることで、活動の活性化や運用改善が進められた。④継続性においては、新制度による活動が順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	A	A	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・ボランティア登録人数：158 人 ・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：87,546 人 ・解説活動日数：302 日	定量評価 ―

中期計画評価	A

中期計画記載事項	宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティアを育成する。
評定理由及び今後の見通し	平城宮跡解説ボランティアについては、30 年 1 月から新たなボランティア制度のもと、定期的な勉強会、展示研修等を通じて、ボランティアの育成を行い、資質の向上に努めた。また、連絡会議の場を通じて、ボランティアの意見等を取り入れつつ、円滑な活動を実施している。今後も本制度を精査していき、更に効率的、効果的な運用になるよう努めていきたい。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2511E

中期計画の項目	2-(5)-①	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-①-1)・2)	①文化財に関する研修の実施 1)文化財の担当者研修、博物館・美術館等の保存担当学芸員研修を行う。 2)研修の体系を完成させるとともに、研修受講生を対象としたアンケート及び派遣元自治体を対象とした研修成果の活用状況に関するアンケート調査を行い、その結果を踏まえ研修計画を策定する。
プロジェクト名称	博物館・美術館等保存担当学芸員研修	
保存科学研究センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○吉田直人（前保存環境研究室長）、○佐野千絵（センター長（兼）保存環境研究室長）、倉島玲央（研究員）、小峰幸夫（アソシエイトフェロー）ほか	

【年度実績と成果】

○第 35 回博物館・美術館等保存担当学芸員研修を実施した（7 月 9～20 日、受講者 30 人）
・研修終了後にカリキュラム各項目の理解度や有用度、また今後の要望等に関するアンケート調査を行った。

○29 年度に実施した第 33 回博物館・美術館等保存担当学芸員研修受講者の所属長あてに、研修成果の活用実績やカリキュラム、応募手続き等に関する要望を問うアンケート調査を行った。

○「平成 30 年度保存担当学芸員フォローアップ研修－展示・収蔵環境の正確な把握のために－」を実施した(6 月 25 日、参加者 102 人)。

保存担当学芸員研修での
ケーススタディの様子

年度計画評価	B

【評定理由】

下記観点から評価を行った。①適時性においては、文化財保護法の改正を受けて文化財の「活用」が進められる中、資料保存の考え方や技術についての正確な知識がより求められる状況となり、応募者は定員を大きく超えた。②独創性においては、あらゆる種類の文化財に対応し、材料や製作技術も盛り込んだ講義を展開しており、実習も行っている点で総合的であることが他団体の研修と際立って異なっている。③発展性においては、受講後もフォローアップ研修などを通して最新知識を得られるとともに、専門講師と知り合える場ともなっており、資料保存の考え方や技術普及について向上が見込める機会となっている。④効率性においては、内部講師を中心に、必要な場合には外部講師も加え、受講者のニーズに応えることができるようプログラムを構成している。⑤継続性については、地域の資料保存のボトムアップを図る狙いで、受講者選考において地域格差が少なくなるよう配慮し、地域への成果還元を継続して目指している。よって、順調かつ効率的に事業が進行していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
(1) 実施件数 1 件 (2) 受講者数 30 人 (3) アンケートによる研修成果の活用実績 80%以上	(1) 実施件数　1 件 (2) 受講者数　30 人 (3) 研修成果の活用実績　100%	(1) B (2) B (3) A

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等の文化財担当者に対し文化財に関する研修を行うとともに、保存担当学芸員に対し保存科学に関する研修を行う。 なお、研修の実施件数及び受講者数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。また、アンケートによる研修成果の活用実績が 80%以上となることを目指す。
評定理由及び今後の見通し	30 年度は、中期計画どおり研修を実施し、受講者向けのアンケートでは全員から満足したという評価であった。31 年度以降は文化財活用センターと連携して当研修を行う予定であるが、学芸員資格課程で博物館資料保存論が定着しつつある状況を受け、これまで初級研修のレベルで行ってきた内容を見直し、後半週に課題取組型の新しい研修方式を取り入れ、より一層の改善に取り組む予定である。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2511F

中期計画の項目	2-(5)-①	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-①-1)・2)	①文化財に関する研修の実施 1)文化財の担当者研修、博物館・美術館等の保存担当学芸員研修を行う。 2)研修受講生を対象としたアンケート及び派遣元自治体を対象とした研修成果の活用状況に関するアンケート調査を引き続き行い、その結果を踏まえ、より充実した研修計画を策定する。
プロジェクト名称	文化財担当者研修	
研究支援推進部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○森本晋（企画調整部長）、加藤真二（企画調整室長）、天野千代子（総務係長）　ほか	

【年度実績と成果】

以下の研修を実施した。

①	建築遺構調査課程	6月11日～6月15日	8人
②	古文書歴史資料調査基礎課程	6月18日～6月22日	12人
③	近現代建築保存活用課程	7月9日～7月13日	24人
④	木質文化財の科学的調査基礎課程	7月23日～7月27日	8人
⑤	地質考古調査課程	9月3日～9月7日	29人
⑥	文化的景観調査計画課程	9月10日～9月14日	10人
⑦	遺跡情報記録課程	9月18日～9月21日	21人
⑧	低湿地遺跡調査課程	10月3日～10月5日	8人
⑨	保存科学Ⅰ(金属製遺物)課程	10月9日～10月17日	12人
⑩	文化財写真課程	11月26日～12月6日	20人
⑪	報告書編集基礎課程	12月6日～12月13日	15人
⑫	報告書デジタル作成課程	12月13日～12月20日	7人
⑬	史跡等保存活用課程	31年1月15日～1月25日	21人
⑭	出土文字資料調査課程	31年2月18日～2月22日	10人
⑮	保存科学Ⅳ(遺構･石造文化財)課程	31年2月25日～3月1日	6人
		合計	211人

○遺跡の発掘調査や保存・整備等に関し、必要な知識と技術の研鑽を図るため、地方公共団体等の文化財担当職員を対象として、専門研修15課程の研修を実施し、延べ211人が受講した。
○研修受講者に対するアンケート調査では、100%から「有意義であった」「役に立った」との回答を得ており、充実した研修が実施できた。
○派遣元を対象とした研修成果の活用状況に関するアンケート調査を31年2～3月に実施した。
○文化財研修を紹介するパンフレットを1回作成し、各都道府県・政令指定都市へ配布した。

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、地質環境調査課程、遺跡情報記録課程、報告書デジタル作成課程など、公共性、緊急性が特に高い研修を行い、これへの対応を行った。②独創性においては、いずれの研修も当研究所以外では実施できず、なおかつ最新の知見を盛り込むことで、研修内容のオリジナリティ、新規性、卓越性を実施した。③発展性においては、発掘・保存・整備等に関する技術の全国的な水準向上に対応した。④効率性においては、基本的に5日間、研究所の既存設備、適任者で行うこととし、時間的投資、人的投資、設備的投資上の効率性を実施した。⑤継続性においては、文化財担当者研修は、前身の埋蔵文化財担当者研修及び埋蔵文化財発掘技術者研修を含め、昭和49年より継続しており、のべ受講者数も9,701人となった。⑥定量的評価の観点においても、目標値に達成した。総じて、事業はきわめて順調に推移していると言える。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	B	B	A

【目標値】	**【実績値・参考値】**	定量評価
(1) 研修の実施件数（件／課程）15課程	(1) 研修の実施件数　15課程	(1) B
(2) 研修の受講者数（人）156人	(2) 研修の受講者数　211人	(2) A
(3) 研修成果の活用状況（%）80%以上	(3) 研修成果の活用状況　100%	(3) A

中期計画評価	A

中期計画記載事項	文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等の文化財担当者に対し文化財に関する研修を行うとともに、保存担当学芸員に対し保存科学に関する研修を行う。
評定理由及び今後の見通し	定性評価については、いずれの観点もB以上で、特に適時性、独創性、継続性ではAと評価できた。また、定量評価も、いずれの目標値とも達成し、研修の受講者数、研修成果の活用状況は、A評価であった。以上から、本プロジェクトは、順調に推移していると判断されたことから、Aと評価した。30年度は、中期計画期間の3年目ではあるが、順調に推移していると判断されたことから、本プロジェクトの進め方が適格であることが確認された。今後とも、厳しい財源事情のなか、費用対効果も十分に勘案しながら研修事業の充実を図りつつ、順調にプロジェクトを推進したい。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2521E-1

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-1)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 1)地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。
プロジェクト名称	文化財の収集、保管に関する指導助言	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○山梨絵美子（副所長（兼）部長）、江村知子（文化財アーカイブス研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、安永拓世（研究員）ほか	

【年度実績と成果】

1. 実践女子大学香雪記念資料館・京都工芸繊維大学美術工芸資料館「記録された日本美術史−相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」開催に関する協力・助言
2. 静岡県立美術館の特別展「幕末狩野派展」の事前調査に関する協力・助言
3. 山口県立美術館の特別展「雲谷等顔展」の事前調査に関する協力・助言
4. 鳥取県立博物館の特別展「土方稲嶺展」の事前調査に関する協力・助言
5. 東京藝術大学大学美術館の購入資料選定に関する協力・助言
6. 岩手県宮古市文化財調査に関する協力・助言
7. 八尾市史編纂のための文化財調査に関する協力・助言

8〜28. 以下、所蔵作品調査に関する協力・助言

イギリス・イーストアングリア大学セインズベリー視覚芸術センター、イギリス・大英博物館、イギリス・オックスフォード大学アシュモリアン美術館、シンガポール・アジア文明博物館、シンガポール国立遺産保護センター（HCC）、韓国国立中央博物館、静岡県立美術館、神奈川県立歴史博物館、仙台市博物館、逸翁美術館、鳥取県立博物館、神田日勝記念美術館、和歌山県立博物館、和歌山市立博物館、川越市立博物館、日本民藝館、東京大学総合研究資料館、浦添市美術館、南蛮文化館、二十六聖人記念館、長崎歴史文化博物館

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、国・地方公共団体等からの文化財に関するさまざまな要請に対して、適時及び適切な指導・助言を行うことができた。特に静岡県立美術館の「幕末狩野派展」をはじめ、専門家の間で注目度の高かった展覧会に貢献した意義は大きく、A評価とした。②発展性においては、指導・協力要請の件数が増加する中で、スタッフの有するスキル・専門性を存分に活用し、他ではできない当研究所独自の指導・助言を実施できた。③効率性においては、担当を分けることによって、専門性の高い指導・助言を実施した。④継続性においては、南蛮文化館をはじめ継続的に実施しているケースにおいては、指導・助言を通して高い信頼関係を築くことができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	A	B	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値）指導・助言 28 件	定量評価
		−

中期計画評価	B

中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	中期計画に基づき 30 年度は、文化財情報資料部に要請されたさまざまな文化財に関する事項を、適時、継続的に、スタッフの有するスキル・専門性にもとづいて協力し、適切な指導・助言を行ったので、Bと判断した。31 年度も引き続き、外部からの要請に対して協力・適切な指導・助言を行っていきたい。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2521E-2

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-1)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 1)地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。
プロジェクト名称	無形文化遺産に関する助言	
無形文化遺産部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○飯島満（部長）、石村智（音声映像記録研究室長）、久保田裕道（民俗文化財研究室長）、前原恵美（無形文化財研究室長）	

【年度実績と成果】

○無形文化遺産の保存・伝承・活用等に関する助言
・国指定等文化財の保存及び活用に関する文化庁への助言 2 件
・ユネスコ無形文化遺産に関する文化庁への助言 1 件
・民俗技術に関する文化庁への助言 1 件
・伝統音学普及促進支援事業に関する文化庁への助言 1 件
・選定保存技術に関する文化庁への助言 1 件
・新進芸術家育成事業に関する文化庁への助言 1 件
・国立劇場民俗芸能公演に関する日本芸術文化振興会への助言 1 件
・国立劇場文楽公演に関する日本芸術文化振興会への助言 2 件
・一般財団法人日本青年館への助言 1 件
・公益社団法人全日本郷土芸能協会への助言 1 件
・神奈川県への助言 1 件
・東京都武蔵野市への助言 1 件
・神奈川県箱根町への助言 1 件
・岐阜県岐阜市への助言 2 件
・岐阜県関市への助言 1 件
・滋賀県への助言 1 件
・京都府京都市への助言 1 件
・徳島県への助言 1 件
・島根県への助言 1 件
・鳥取県への助言 1 件
・国立民族学博物館への助言 1 件
・東京都歴史文化財団への助言 1 件

阿波晩茶製造技術調査委員会（徳島県教育委員会）での助言（阿波晩茶制作の様子）

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。②独創性においては、我が国の無形の文化財を扱う国内唯一の研究機関として、古典芸能・工芸技術・民俗芸能・民俗技術等の保存活用に関する各種委員会等にて的確な助言を行い、当研究所の知見を活かした高い独創性を示しえた。①適時性、③発展性及び④継続性においては、当研究所の高い専門性から継続的な委嘱を受けているため、各々においても十分であると評価した。よって、所期の計画通り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	A	B	B	

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値）助言 25 件	定量評価 ―

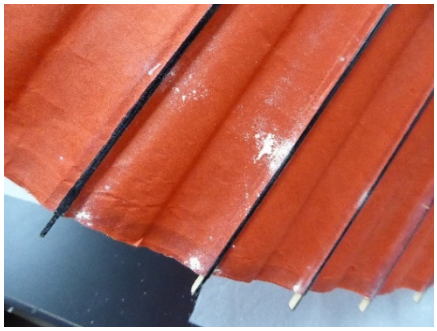
中期計画評価	B
中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	中期計画期間の 3 年目として 30 年度は、例年通り、多様な助言依頼に対応できており、計画通りの実績をあげることができた。文化財保存技術やそれを支える道具・材料等に関わる案件も増加の傾向にあるため、当研究所内の他の部・センターとの連携も図り、31 年度以降も信頼を損なわぬよう努めることとしたい。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2521E-3

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-1)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 1)地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。
プロジェクト名称	文化財の虫菌害に関する調査・助言	
保存科学研究センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○佐藤嘉則（生物科学研究室長）、小峰幸夫（アソシエイトフェロー）、佐野千絵（センター長）	

【年度実績と成果】

○これまでに蓄積された文化財の生物被害対策に関する調査・研究の成果を活かし、国や地方公共団体等からの要請に応じて専門的な見地から技術的な協力・助言を行うことにより、文化財の保存に関する質的向上に貢献した。
○虫菌害問題の相談元は、国や地方公共団体の博物館、美術館、図書館、教育委員会や社寺等の文化財保存担当あるいは文化財修復関係機関等であった。
○対応件数は、合計で 44 件あり、その中には派遣依頼等を受けて現地にて調査を実施したものや当研究所にて分析試験等を実施したものなど、より詳細な調査が必要な事案もあった。
○相談内容は、保存公開施設内における害虫やカビの発生に関すること、殺虫・殺菌処理で使用する薬剤に関することなどが多かった。また、熊本地震に起因する石室内への漏水の対策から石室内に大量にカビが発生した事案もあり、詳細な微生物解析を継続している。あるいは社寺で空調機器が無い収蔵空間で保存されている文化財が高湿によりカビが発生するといった事案もあり、現地で取り得る対策を継続して模索している。


虫害が見つかった民俗資料

○被害の規模は文化財展示収蔵施設全体に関する事柄から、個別の作品に対する事柄まで多岐に渡った。
○災害に起因する文化財の水損被害とその初期対応など緊急性を伴う事案にも対応した。
○現場の対応とあわせて、啓発・普及活動の一環で生物被害に関する研修講師を担当した。その際にこれまでに作成した啓発普及ポスターの配布を行った。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、災害などの初期対応で生物被害の拡大抑止のために緊急の対応が必須であるが、必要な情報や調査を最短時間で優先的に提供し、適切に対応することができたといえる。②独創性については、文化財の生物被害に対応できる専門家がいる点で他機関にはない独自性が高いと判断した。③の発展性においては、虫害の対応の中でプロジェクト研究に必要な文化財害虫標本を入手できたことが研究と連動させるという点で発展性があるといえる。④効率性においては、現地調査や分析試験も含めて合計で 44 件の相談件数に少ない人数で対応できた点が高く評価できる。④継続性においては、毎年 30 件を超える相談案件に全て対応することができている。よって、本事業は順調かつ効率的に実施できていると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値）協力・助言実施件数：44 件	定量評価 －

中期計画評価	B

中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	中期計画に沿い 30 年度は、、国や地方公共団体等からの文化財に関する生物被害の要請に対して協力・助言を行い、文化財の保存に関する質的向上に貢献することができた。緊急を要する相談案件に優先して対応することは非常に困難であるが、本業務の重要性を考慮して 31 年度も外部相談案件について真摯に対応すると同時に、相談案件数を減らしていくために、さらなる啓発普及活動も実施する予定である。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2521E-4

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-1)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 1)地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。
プロジェクト名称	文化財の修復及び整備に関する調査・助言	
保存科学研究センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○早川泰弘（副センター長）、朽津信明（修復計画研究室長）、北河大次郎（近代文化遺産研究室長）、早川典子（修復材料研究室長）、倉島玲央（研究員）、佐野千絵（センター長）	

【年度実績と成果】

○30 年度に実施した各地の国宝、史跡や重要文化財等の保存や修復に関する指導助言は以下のとおりである。

国宝高松塚古墳壁画、特別史跡キトラ古墳壁画、国宝臼杵磨崖仏、国宝銅造阿弥陀如来坐像（鎌倉大仏）、国宝平等院鳳凰堂、国宝東寺五重塔、国宝普済寺六面石幢、史跡端島炭鉱跡、史跡竹原古墳、史跡石人山古墳、史跡桜京古墳、史跡薬師堂石仏附阿弥陀堂石仏、史跡観音堂石仏、史跡原城跡、史跡土佐藩主山内家墓所、史跡清戸迫横穴、史跡吉見百穴、史跡佐渡金銀山遺跡、史跡足尾銅山、史跡韮山反射炉、史跡萩反射炉、史跡原爆ドーム、史跡東京湾要塞跡、史跡出島和蘭商館跡、史跡下藤キリシタン墓地、史跡長崎原爆遺跡、重要文化財通潤橋、重要文化財本河内水源地水道施設、重要文化財旧佐世保無線電信所（針尾送信所）施設、重要文化財氷川丸、重要文化財日本丸、重要文化財常願寺川砂防施設、重要文化財東慶寺文書、重要文化財末広橋梁、重要文化財厳島神社大鳥居、重要文化財旧鶴岡警察署、重要文化財近代教科書関係資料、重要文化財法隆寺金堂外陣旧壁画（土壁）、重要文化財細川家舟屋形天井画、重要文化財鎌倉芳太郎資料、重要文化財鷹見泉石関連資料、重要文化財旧木下家住宅、名勝錦帯橋、東山ひがし重要伝統的建造物群保存地区、特別天然記念物秋芳洞、天然記念物風連鍾乳洞、天然記念物郷村断層、熊本県内被災古墳。

熊本地震で被災した井寺古墳内部

○地方自治体指定その他の文化財の保存と修復に関する指導助言は以下のとおりである。

登録有形文化財森村橋、日本航空協会所蔵「飛燕」、根津美術館蔵石造浮屠、慶応義塾大学蔵計算機、東京国立近代美術館所蔵近代絵画、富山市大山恐竜足跡化石群、大阪新美術館準備室所蔵関根正二作品、高島市指定絹本著色釈迦十六善神像、岡山県高野神社神紋、長崎市指定史跡ド・ロ神父大平作業場跡、「高風居」泰山荘。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、30 年度も 29 年度から引き続いて熊本地震によって被災した文化財に適切に対処しており、社会の要請にこれまで以上に的確かつ速やかに応えることができた点を高く評価した。②独創性においては、保存科学の考え方があまり浸透していない、天然記念物や伝建地区の保存などにも協力を行った。③発展性においては、通潤橋など、現在修復事業が行われている現場への協力を行っており、発展性が期待される。④効率性においては、古墳や石仏など、各地域に存在する類似した対象に対して、情報共有を促しながら協力することで効率化が図られた。⑤継続性においては、高松塚古墳やキトラ古墳等、長年継続的に取り組んでいる事業に 30 年度も継続して寄与してきた。よって、総合的に順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	B	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値）指導・助言件数　60 件	定量評価 －

中期計画評価	B

中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	中期計画の 3 年目として 30 年度は、所期の計画通り、29 年度までに引き続き熊本の被災文化財の修復に協力を行うとともに、豪雨被害を受けた文化財など、様々な対象に協力を行うことができた。また、従来のように美術工芸品と建造物に偏ることなく、天然記念物や名勝、伝建地区など、様々な範疇の文化財に関わる機会が増えてきている。31 年度以降は、今後さらに様々な形態の文化財に対して要請が出た時にも同様に迅速に対応できるように、経験を蓄積して体制の充実を図っていく予定である。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2521E-5

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-1)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 1)地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。
プロジェクト名称	文化財の材質・構造に関する調査・助言	
保存科学研究センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○犬塚将英（分析科学研究室長）、早川泰弘（副センター長）	

【年度実績と成果】

30年度は、蛍光X線分析、X線回折分析による材質調査、及びX線透過撮影による構造調査などの調査・助言を実施した。調査を行った作品、所蔵先、調査月は以下の通りである。

○材質調査
- 建造物彩色・付着物（平等院、5月）、
- 典籍（書道博物館、5月）、
- 屏風（仁和寺、6月）、
- 漆工品（徳川美術館、8月）、
- 金箔・蒔絵粉（中尊寺、12月）
- 装飾経（根津美術館、5月）、
- 屏風（明治神宮、6月）、
- 漆工品（畠山記念館、8月）、
- 典籍、金工品（個人蔵、8月）、

○構造調査
- 絵画（ポーラ美術館、31年2月）

○指導・助言
- 絵画の光学調査（ポーラ美術館、4月）

中尊寺金色堂での金箔の調査

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、当所の高い専門性が認めて所蔵先から依頼された要請に迅速に応じて、材質調査・構造調査を実施した。調査後は速やかに調査報告書を作成し、文化財の材質・構造に関する助言を行った点を高く評価した。②独創性においては、X線透過撮影のための現像装置を含む機材一式を調査場所に持ち込んで調査を行うことにより、その場で調査結果に関する議論を行う独自の手法を確立できた。③発展性においては、29年度末に新規導入した据置型蛍光X線分析装置を用いて元素マッピングの分析を開始することができた。④効率性においては、設置方法の改良を重ね、材質・構造調査の効率が向上した。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	
定性評価	A	B	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値）調査・助言件数　11件	定量評価
		－

中期計画評価	B

中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	中期計画に沿い30年度は、これまでに当研究所が実践してきた科学的調査技術に加えて、28年度から導入した可搬型X線回折分析装置、可搬型イメージングプレート現像装置を活用した調査・助言を、29年度に引き続き継続的に行えたため、所期の計画通り実行されていると判断した。また、29年度末に導入した据置型蛍光X線分析装置を用いた元素マッピングの分析調査を新たに開始した。31年度以降も継続して、外部からの要請に対し適切な調査・助言を実施する予定である。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2521E-6

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-1)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 1)地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。
プロジェクト名称	美術館・博物館等の環境調査と援助・助言	
保存科学研究センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○吉田直人（前保存環境研究室長）、○佐野千絵（センター長（兼）保存環境研究室長）、石井恭子（研究補佐員）	

【年度実績と成果】

○国指定品の所有者以外による公開、また公開承認施設申請に関わる資料保存環境調査を 37 館に対して行い、計 39 通の報告書を作成・提出した。

○全国の文化財施設等からの保存環境、また新築・施設改修・増築などの相談に対して助言を行い、改善に資した。必要に応じて、現地調査を行った。

空気環境調査の様子

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、全国からの非常に多数の要請に基づいて実施したもので、展覧会が安全に開催できるよう、わずかな人数でできる限りすみやかに助言した点を高く評価した。②独創性においては、常に調査方法に改良を加えるため、調査機器の開発情報の入手や改良についての提案などを行っている。③発展性においては、館側が自主的に検査を行えるよう助言し、学芸員の資料保存に対する知識と技術の向上にも役立つよう配慮している。④効率性においては、遠距離での調査に耐えられる調査手法を選択し、時間・経費などのリソースの最適化を常に追求している。⑤継続性においては、集約されたデータから異常な環境がすみやかに判断し対応できた。これらより、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	B	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） 調査・助言件数　428 件 環境調査報告書作成数　39 通	定量評価 ―

中期計画評価	B

中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	中期計画に基づき 30 年度は、当研究所の保存環境に係る研究成果の地域への還元の一手法として、地方公共団体への援助を進める目的で、全国の博物館等文化財保存施設に対して、保存環境に関する援助・助言を実施した。すべての依頼に対応し、安全な文化財の保存と展示に資することができており、順調に計画通り実行されていると判断した。一方、地域での問題解決が可能となりつつある現在、地域の保存担当の判断で、展示が先送りになるなどの課題も見えてきたことから、31 年度以降は人数に勝る文化財活用センター保存部門に当研究所のノウハウを継承し、環境調査に対応することとした。当研究所では中期計画のとおり、保存環境の研究の一環として、研究的な対応が必要な、環境改善が難しい事例を中心に、例えば長期の温湿度データの解析を基に改修計画を提案するなどの研究を進めることで、地域への研究成果還元を進める予定である。

【書式C】　施設名 文化財活用センター　処理番号 2521E-7

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-1)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 1)文化財活用センターを中心に地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。
プロジェクト名称	文化財の保存環境に関する相談対応・助言、協力	
保存担当	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○齊藤孝正（前統括マネージャー兼保存担当課長）、吉田直人（保存担当室長）、間渕創（保存担当研究員）、木下美緒（事務補佐員）	

【年度実績と成果】

7月2日に「文化財の保存環境に関する相談窓口」を設け、30年度は下記の業務を行った。

・国内の博物館・美術館等、既存施設からの保存環境管理や改善に関する相談に対して、助言を行った（34件）。そのうち10件については、相談内容から必要と判断し、現地に赴き、視察や聞き取り調査、また環境計測等を行った。
・新築や増改築を予定している文化財保存施設について、基本設計や実施設計の段階で、関係者と協議を行い、保存環境維持の観点から助言を行った（19施設）。展示・収蔵空間に求められる環境等について説明を行い、また必要に応じて空間配置や設備設計の見直し等を進言した。うち、1件については現地視察を行った
・外部機関からの依頼に応じて、資料保存環境に関する研修会等での講義を行った（3件：文化財虫菌害研究所、国文学研究資料館、全国美術館会議保存科学部会）。

現地調査の様子
（収蔵庫の空気環境分析）

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、文化財保護法の改正や東京五輪の開催を控え、各地で文化財活用の機運が高まる中で、保存を重視する姿勢として相談窓口を開設したことは時機を得たものであった。②発展性においては、一方的な助言等に留まらず、博物館・美術館等が自ら積極的に良好な環境の維持管理に取り組むことを重視する対応を行った。③効率性においては、相談に対して速やかかつ適切な対応を行うために、対応事例の整理、記録を進めた。④継続性においては、ひとつの相談への対応終了後も、その後の環境状態等について報告を受けるなどアフターケアに努めた。以上の評価を総合して、順調に本事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	A	A	A	B	

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） 保存環境に関する相談件数：34件 新築、増改築に関する相談施設数：19施設	定量評価 －

中期計画評価	B
中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	中期計画に沿って、全国の博物館等文化財保存施設に対し、保存環境、また施設建築に関する援助・助言を行い、安全な文化財の保存と展示に資することができたことから順調と判断した。31年度以降は国指定品の公開や既存施設の大規模改修が増大することが見込まれることから、相談案件数の大幅な上昇に対して、より効率的かつ適切に対応できる体制を整えたい。また、環境管理に関する研修会等による周知活動も積極的に行っていきたい。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2521F-1

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-1)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 1)地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。
プロジェクト名称	地方公共団体等の要請による発掘調査等への協力・援助	
都城発掘調査部（平城）	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】**○渡邉晃宏（都城発掘調査部副部長）ほか	

【年度実績と成果】

・発掘調査の概要は下表の通り

次数	遺跡名	調査期間	面積	主な検出遺構・調査所見
598	平城京左京一条二坊十五坪	5 月 15～16 日	25 ㎡	南北溝 1 条、井戸 1 基他
599	平城宮跡	6 月 21 日～29 日	92.75 ㎡	市庭古墳周濠他
604	法華寺阿弥陀浄土院跡	11 月 5 日～12 日	30 ㎡	東西溝 1 条、土坑 1 基
605	平城京左京一条二坊十坪	11 月 21 日～30 日	21 ㎡	顕著な遺構なし
606	平城京左京三条一坊十六坪	12 月 3 日～13 日	31 ㎡	溝 1 条、土坑 6 基他
607	平城宮跡	12 月 19 日～21 日	64 ㎡	土坑 1 基
608	平城宮跡	12 月 13 日～20 日	28 ㎡	小穴、土坑、溝
609	興福寺	31 年 2 月 20 日～3 月 5 日	113 ㎡	築地痕跡、整地土
610	右京北辺北	31 年 2 月 18 日～27 日	47 ㎡	溝 1 条

・立会調査の概要：遺構面の深度に関する情報を蓄積し、また遺構保護に尽力した。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、奈良県・奈良市からの要請に対し、適切かつ迅速に対応して、文化財保護行政に資することができた。②発展性においては、遺構面の把握を通じて、今後の保存対策に資する情報を得ることができた。とりわけ、市庭古墳の周濠の正確なデータなどは、今後の遺構保全に特に有意義な情報である。③効率性においては、発掘調査・立会調査を、作業スケジュールの調整などを通じて、国民への負担を最低限に留めて調査を進めることができた。④継続性においては、平城宮・京内の遺跡の状況に関する情報を、着実に蓄積することができた。以上から、計画通り要請に応じて的確に協力援助を実施した。

観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） 立会調査件数：49 件、日数：のべ 99 日	定量評価 —

中期計画評価	B

中期計画記載事項	文化財に関する協力・助言等　国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	地方公共団体からの要請に応じて、適宜に適切に対応して文化財保護に資することができた。計画通り順調に進捗していると判断した。 今後も、社会情勢の変化に対応しつつ、多様な要請に対して臨機応変に対応していきたいと考えている。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2521F-2

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-1)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 1)文化財活用センターを中心に地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。
プロジェクト名称	地方公共団体が行う飛鳥・藤原地区の発掘調査への援助・助言	
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原地区)	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○)】** ○玉田芳英（部長)、尾野善裕（考古第二研究室長)、清野孝之（考古第三研究室長)、栗山雅夫（企画調整部写真室技術職員）ほか	

【年度実績と成果】

飛鳥・藤原地区で地方公共団体が行う発掘調査等への援助事業は5件で、いずれも土木工事に伴う事前調査や立会調査である。緊急を要する事前調査に効率よく対応し、藤原宮及び飛鳥地域についての考古学的研究を進める上での基礎資料の継続的蓄積を図った。とりわけ、飛鳥寺北方の厳重立会調査で出土した風鐸は、飛鳥寺の堂塔所用のものと考えられる点で貴重である。なお、第197-8次調査は31年度にかけての継続調査である。

飛鳥寺北方出土風鐸

次　数	調　査　地	調査原因	発掘面積	調査期間	概　要
第197-1次	飛鳥寺北方	電線埋設	47.1㎡	4/2～5/11	歴史時代の土坑を検出
第197-2次	飛鳥寺北方	電線埋設	239.6㎡	5/14～2/22	堂塔所用と目される風鐸が出土
第197-4次	藤原宮跡	水路改修	250㎡	11/9～12/14	溝および藤原宮造営期の井戸を検出
第197-5次	藤原宮跡	道路拡幅	7㎡	10/22～10/25	溝・土坑・小柱穴を検出
第197-6次	飛鳥寺東方	水路建設	98.9㎡	1/9～3/1	石列・柱穴を検出
第197-8次	本薬師寺跡	畦畔整備	120㎡	3/18～継続中	堂塔所用と目される瓦が出土

年度計画評価	A

【評定理由】

次記の観点から評価した。①適時性については、地方自治体からの要請、とりわけ工事日程の調整が非常に難しい飛鳥寺北方の調査に適宜適切に対応したことからAとした。②独創性については、29年度の反省を踏まえて調査方法の合理化を図り、調査精度を格段に向上させることができたことからAと評価した。③発展性においては、200 箱を超える飛鳥寺の瓦を中心に、今後の研究の基礎となる資料の蓄積をすることができたためAとした。④効率性については、調査方法の合理化による調査精度の向上が著しかったことからAとした。⑤継続性においては、半世紀にわたって途切れることなく飛鳥・藤原地域での調査を行っていることをふまえBとした。以上から、事業の進捗状況は年度計画以上であると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	・援助（調査件数）6件 ・出土遺物：軒瓦267点、丸・平瓦560箱、土器61箱、木簡約160点ほか ・論文等数：4件（ア～ウほか)	—

ア、尾野善裕ほか「飛鳥寺北方の調査―第197-1・2次―」『奈良文化財研究所紀要2019』(31年6月予定)
イ、石田由紀子「発掘調査の概要 藤原宮外周帯の調査（飛鳥藤原第197-4次）」『奈文研ニュース』No.72(31年3月)
ウ、石田由紀子ほか「藤原宮外周帯の調査―第197－4次」『奈良文化財研究所紀要2019』（31年6月予定)

中期計画評価	A

中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定 理由及び 今後の見通し	我が国古代国家成立期の主要舞台である飛鳥・藤原地域の調査研究は、開発事業との調整を適切に図りながら、関係自治体と緊密に連携して今後も継続的に進めてゆく予定である。30年度は、地方公共団体からの要請に応えて、工事日程との関係上、限られた条件の下ではあったが、適宜必要な学術的調査を実施し、調査成果を迅速かつ着実に公開してきており、中期計画に沿って順調に成果を上げている。いずれの調査も周到な準備のもとに適切に実施したもので、飛鳥寺北方の調査（第197-2次）で飛鳥寺の堂塔所用と考えられる風鐸を発見するなど、当初予想以上の成果をあげることができたため、Aと評価する。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2521F-3

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-1)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 1)文化財活用センターを中心に地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・専門的知識の提供等を行う。
プロジェクト名称	地方公共団体等が行う史跡の整備、復原事業等に関する技術的助言	
奈良文化財研究所	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】**○松村恵司（所長）	

【年度実績と成果】

地方公共団体等が行う文化財の調査・保存・修復・整備・活用等の事業について、専門委員会委員への就任等を通して、建造物修理、史跡整備、発掘調査等に関する専門的・技術的な助言を行った。

現在就任している専門委員会委員（一部）

・若桜町伝統的建造物群保存検討委員会委員（鳥取県八頭郡）
・横手市伝統的建造物群保存審議会委員（秋田県横手市）
・太宰府史跡調査研究指導委員会委員（福岡県太宰府市）
・特別史跡百済寺跡再整備検討委員（大阪府枚方市）
・史跡岐阜城跡整備専門委員会委員（岐阜市）
・難波宮跡整備計画検討委員会議委員（大阪市）
・丸亀市史跡丸亀城跡調査整備委員会委員（香川県丸亀市）
・国史跡鳥海柵跡整備委員会委員（岩手県金ケ崎町）
・史跡「石の宝殿及び竜山石採石遺跡」整備委員会委員（兵庫県高砂市）
・名勝多神社奥書院庭園保存整備委員会委員（滋賀県多賀町）
・重要文化的景観「宇治の文化的景観」の整備にかかる調査の指導（京都府宇治市）
・史跡備後国府跡保存活用計画策定委員（東京都府中市）
・史跡ガランドヤ古墳保存整備委員会（大分県日田市）
・石見銀山遺跡調査専門委員会委員（鳥取県）
・吉岡銅山関連遺跡調査委員会委員（大阪府高梁市）
・清水山城館跡保存活用計画策定委員会（滋賀県高島市）
・史跡兜山古墳環境整備検討委員会（福井県鯖江市）

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。

①適時性においては、地方公共団体の要請に対し、適時・適切に対応した。②独創性においては、当研究所独自の専門知識を生かし各委員会に従事した。③発展性において、多様な要請に対応し今後の事業発展に貢献した。④継続性において、継続的に検討が必要な委員会等は、再任・任期の延長によって継続的に協力している。総じて、年間通じて出張回数も多く、要請に応じた的確な対応をとることができた。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） 出張依頼を受けた件数：273 件（委員会出席、審議会出席、その他（現地指導・現地調査等））	定量評価 ―

中期計画評価	B

中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	全国で行われている遺跡の発掘調査、保存・修復・整備事業や、建造物の調査、修復事業について、各担当機関から専門的な協力・助言を求められ、適時・適切に対応することができた。当研究所に対する社会的要求に応えるべく、今後も継続的に対応し、貢献していく。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2522E

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-2)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 2)蓄積されている調査研究の成果を活かし、他機関等との共同研究及び受託研究を行う。
プロジェクト名称	他機関等との共同研究及び受託研究を実施	
東京文化財研究所	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】**○齊藤孝正（所長）	

【年度実績と成果】

○国・地方公共団体等が行う文化財の調査・整備・修復・保存・活用等について、受託研究等を行った。
・美術工芸品保存修理用具・原材料調査事業
・国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務
・特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務
・被災資料有害物質発生状況調査業務
・文化遺産国際協力コンソーシアム事業
・世界文化遺産の遺産影響評価に関する調査研究事業
・文化財の英語表記に関する調査研究事業
・文化遺産国際協力拠点交流事業「ネパールの被災文化遺産保護に関する技術的支援事業」
・文化遺産保護国際貢献事業「ミャンマーにおける考古・建築遺産の調査・保護に関する技術移転を目的とした拠点交流事業・建築分野」
・文化遺産保護国際貢献事業「トルコ共和国における壁画の保存管理体制改善に向けた人材育成事業」
・シルクロードが結ぶ友情プロジェクト「シリア人専門家研修（紙資料）」

このほか、一般財団法人日本航空協会ほか3機関と共同研究を行った（計4件）。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、国・地方公共団体等の要請に応じて、喫緊の研究課題を的確に遂行することができた。特に、地震で被災したネパールやミャンマーにおいては、所内外の適切な専門家を派遣し、文化遺産の復興に資することができた点を高く評価した。②独創性においては、我が国の文化財研究の拠点としてこれまで当研究所が蓄積してきた調査・研究の実績を活かし、他機関等との共同研究及び受託研究に取り組むことができた。③効率性においては、多様な研究課題の実施に際し、所内適任者による効率的な調査を実施することができた。④継続性においては、国宝高松塚古墳壁画及び特別史跡キトラ古墳の調査業務をはじめとする、これまで当研究所が受託してきた研究課題を30年度も継続して実施することができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③効率性	④継続性	
定性評価	A	B	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・受託研究　11件 ・共同研究　4件	定量評価 －

中期計画評価	B

中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	国・地方公共団体等からの共同研究及び受託研究の依頼に対し、中期計画に基づき、文化財に関する当研究所の知見や調査成果を活かし、的確に対応した。多くの機関との共同研究及び受託研究を実施したことにより、文化財に関する調査・研究の中核として、我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に寄与できているものと考える。 31年度以降も、我が国全体の文化財の調査・研究の質的向上に寄与すべく、蓄積されている調査研究の成果を活かし、他機関との共同研究及び受託研究に取り組んでいく。

【書式C】　施設名　奈良文化財研究所　処理番号　2522F

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-2)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 2)蓄積されている調査研究の成果を活かし、他機関等との共同研究及び受託研究を行う。
プロジェクト名称	他機関等との共同研究及び受託研究	
奈良文化財研究所	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】**○松村恵司（所長）	

【年度実績と成果】

地方公共団体等が行う文化財の調査・保存・修復・整備・活用等について、これまで蓄積した調査・研究の成果を活かし、以下のような受託研究等を行った。

・考古資料および文献史料からみた過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベースの構築・公開（国立大学法人東京大学地震研究所）
・平城宮跡歴史公園第一次大極殿院南門他発掘調査（国土交通省近畿地方整備局）
・史跡　飛鳥寺跡に隣接する県道「橿原神宮東口停車場飛鳥線」の発掘調査（奈良県中和土木事務所）
・平成 30 年度文化遺産国際協力拠点交流事業実施委託業務（ミャンマーにおける考古・建築遺産の調査・保護に関する技術移転を目的とした拠点交流事業）（文化庁）
・特別史跡キトラ古墳の保存・活用及びキトラ古墳壁画保存管理施設の管理・運営業務（文化庁）
・国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務（文化庁）
・平成 30 年度水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業（文化庁）
・京都市の文化的景観保存計画策定調査（京都市）
・平成 30 年度国史跡ガランドヤ古墳における運用手法の検討及び墳丘復元法検討業務（大分県日田市）
・国宝薬師寺東塔遺物整理業務（金属製品）（奈良県）
・特別史跡藤原宮跡（別所町水路改修）発掘調査（橿原市）
・波怒棄館遺跡および台の下貝塚出土の動物遺存体の分析（宮城県気仙沼市）
・松帆銅鐸・舌の調査研究（兵庫県南あわじ市）
・湯浅町重要建造物調査研究業務（和歌山県湯浅町）
・長門鋳銭所跡出土木簡等の保存処理等を経ての総合的研究（山口県下関市）
ほか

年度計画評価	B

【評定理由】

下記観点から評価した。

①適時性において、地方公共団体等の要請に応じて実施業務に適時・的確に対応した。②独創性において、独自の技術力そして唯一無二の専門性を生かして業務を遂行した。③発展性において、実施業務は多種多様であり、全国の地方公共団体等の今後の保存や活用の業務に貢献した。④効率性において、受託業務にかける時間と人力等を効率よく配置し遂行した。よって、順調に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	
定性評価	B	A	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・受託調査研究受入・実施件数　35 件　299,269 千円（29 年度：34 件　271,675 千円）	定量評価 —

中期計画評価	B

中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	3 年目である 30 年度も地方公共団体等の要請に基づき、当研究所の培ってきた調査研究の成果を活かし、的確に受託研究を遂行し、順調に推移している。今後も他機関と連携・協力体制を構築しながら、積極的に文化財に関する調査研究等に取り組んでいく。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2523F

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-②-3)	②文化財に関する協力・助言等 国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 3)地震・水害等により被災した地域の復旧・復興事業に伴い、地方公共団体等が行う文化財保護事業への支援・協力を行う。
プロジェクト名称	被災した地域の復旧・復興事業に伴う地方公共団体等への支援・協力	
埋蔵文化財センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○高妻洋成（センター長）、脇谷草一郎（埋蔵文化財センター主任研究員）、中島志保（アソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】

・熊本地震で被災した装飾古墳の復旧整備に向けた委員会（熊本市、玉名市、嘉島町、氷川町）に委員として職員を派遣した。
・広島県立文書館の依頼を受け、西日本豪雨により甚大な被害を受けた古文書の一部を応急処置として真空凍結乾燥を行った。
・西日本豪雨により甚大な被害を受けた岡山県にて被害状況の調査、技術的助言ならびに冷凍倉庫の手配を行った。

嘉島町井寺古墳の復旧整備に向けた調査

年度計画評価	A

【評定理由】

下記観点から評価を行った。①適時性：熊本地震により被災した装飾古墳の復旧に向けた委員会への職員の派遣ならびに西日本豪雨により被災した地域への技術的援助等を時宜に応じて行った。②発展性：装飾古墳の復旧をその状況に応じて多様に行った。また、水損した文書類の緊急保管法として汎用的な冷凍倉庫の手配を行った。③効率性：水損した文書を真空凍結乾燥することにより効率よく安定化させることができた。④継続性：熊本地震により被災した装飾古墳の復旧には長期間を要するが、専門性を有する職員を派遣することにより復旧事業を推進することができる。以上のことから、所期の事業目標を量的にも質的にも良好に達成したということができる。

観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	A	A	A	A	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値）・派遣人数：のべ 12 人　　・応急処置件数：１件（広島県立文書館）	定量評価 ―

中期計画評価	A

中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	熊本地震により被災した装飾古墳の復旧事業に対する支援・協力、西日本豪雨により被災した地域への技術的援助を迅速かつ効率よく実施した。31 年度以降も熊本地震により被災した装飾古墳の復旧事業に協力するとともに、頻発する災害に対する減災に関する協力ならびに被災した文化財のレスキューや応急処置に臨機応変に対応していきたい。

【書式Ｃ】　施設名　奈良文化財研究所　処理番号　2531F-1

中期計画の項目	2-(5)-②	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-③-1)	③平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力 文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力する。また、ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動に協力する。 1)文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力 ・文化庁が行う平城宮跡、藤原宮跡の整備・公開、管理事業への協力
プロジェクト名称	文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡の整備・管理等への協力	
研究支援推進部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○菊本 惠二（研究支援課長）、江川　正（研究支援課宮跡等活用支援係長）、今西康益（研究支援課宮跡等活用支援係係員）ほか２名	

【年度実績と成果】

（１）特別史跡平城宮跡内及び藤原宮跡内の現状等について、情報提供及び助言
- 消防訓練実施への協力
- 平城宮跡歴史公園第一次大極殿院南門復原整備工事への協力
- 第一次大極殿復原整備工事関係資料提供等
- 発生事案の報告及び対応
- 平城宮跡及び藤原宮跡等の保存整備に関する検討委員会への参加

（２）平城宮跡及び藤原宮跡内における不具合対応策提案及び整備管理業務の実施
- 平城宮跡等草刈り管理業務
- 平城宮跡施設整備計画の情報提供等
- 復原施設、遺構表示、便益施設等故障対応
- 宮跡内植栽管理への助言
- 国有地管理への助言
- 発生事案への報告及び対応

年度計画評価	B

【評定理由】

下記観点から評価を行った。①適時性、これまでの方針や過去の経等の情報提供及び必要な助言を、文化庁や国土交通省の要望に適時的確に対応し、29 年度と同様の実績を上げた。また、台風等の災害に迅速に対応し、被害が少なかった。②発展性においては、文化庁、国交省等の委員会等に積極的な参加・協力による情報共有を行い、適確な審議が可能になるための助言を行った。③効率性においては、過去の維持管理及び修繕等事業毎に整理された情報を迅速に提供した。④継続性においては、整備内容、発生事案等事例を継続的に積み重ねることによって、今後においても必要に応じて情報を提供し事業進捗に協力した。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・各種会議への参加件数（公園整備関係 1 件） ・資料提供、協議等依頼への対応事項件数（文化庁 48 件、国土交通省 14 件） ・立会調査等対応件数（日数）等（文化庁 40 件、国土交通省 14 件）	定量評価 ―

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化庁と国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力する。また、ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動に協力する。
評定理由及び今後の見通し	文化庁施設の公開・利用等の連絡調整、発掘調査等の連絡調整、文化庁施設の整備・維持管理及び修繕等の相談に対応している。そして、文化庁施設（復原施設・便益施設等）の計画的整備に対しても、必要な情報提供及び助言等の協力を行っている。今後も、国土交通省平城宮跡歴史公園整備計画等への必要な情報提供及び助言等を行い、公開・活用事業に継続的な協力を行っていく。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2531F-2

中期計画の項目	2-(5)-③	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-③-1)	③平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力 文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力する。また、ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動に協力する。 1)文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力 ・国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院の復原、朱雀大路周辺の整備等への協力
プロジェクト名称	平城宮復原整備研究	
都城発掘調査部 （平城）	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○渡邉晃宏（都城発掘調査部副部長）、箱崎和久（遺構研究室長）ほか 24 名	

【年度実績と成果】

・国土交通省が行う朱雀門周辺や第一次大極殿院等の整備工事に当たり遺構保存を目的とした立会調査を 7 件行った。
・国土交通省が行う第一次大極殿院南門復原整備工事現場定例会議に 24 回出席し、指導・助言を行った。
・国土交通省が行う第一次大極殿院南門復原工事の現場公開に関する会議（定例会議分科会）に 12 回出席し、指導・助言を行うとともに、現場公開イベント等に対して協力を行った。
・第一次大極殿院の復原に向けて、建築金具の研究を進め有識者会議等を 5 回開催した。
・第一次大極殿院の復原に向けて、扁額の研究を進め所内検討会を 1 回開催した。
・第一次大極殿院南門復原整備工事において、南門鴟尾の原型製作に対する現地指導等への対応を 4 回行った。
・第一次大極殿院の復原研究報告書作成に向けて、原稿の執筆を進めた。
・文化庁が行う特別史跡平城宮跡の管理に対して、適時に適切な対応・助言を行った。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記、各観点から評価を行った。①適時性については、文化庁・国土交通省が行う平城宮跡等における整備等に対して、主として研究的側面からの検討を迅速かつ的確に行い、適時に適切な指導・助言を行うことができた。②独創性については、第一次大極殿院諸建築の建築金具の復原において、金具のデザインと奈良時代における製作工程の関連について、金具を試作する等の実験を行い検証した。③発展性については、国土交通省が進める第一次大極殿院南門の復原整備工事が 30 年度から本格化し、工事に関わる事項及び現場公開に関する事項ついて、適切かつ十分な指導・助言を行うことができた。④効率性については、国土交通省の事業に対して、迅速かつ効率的な指導・助言・協力を行った。⑤継続性については、22 年度から継続的に進めてきた復原研究をもとに、第一次大極殿院南門復原整備工事で表出した諸課題に対して、迅速かつ適切に対応し、今後の発展や継続につながる十分な成果を上げることができた。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	B	B	A

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・国土交通省が行う整備工事への立会調査対応件数：7 件 ・国土交通省が行う第一次大極殿院の南門復原整備工事現場定例会議出席回数：24 回 ・国土交通省が行う第一次大極殿院南門復原整備工事現場公開に関する分科会出席回数：12 回 ・第一次大極殿院南門復原整備工事の鴟尾原型製作に対する現地指導等回数：4 回 ・第一次大極殿院の復元に向けての有識者会議等開催回数：5 回 ・第一次大極殿院復元に向けての扁額に関する所内検討会開催回数：1 回	定量評価 ―

中期計画評価	B

中期計画記載事項	文化庁と国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力する。
評定理由及び今後の見通し	文化庁・国土交通省が進める平城宮跡等の整備に対し、立会調査を行った他、指導・助言を適切に行い、平城宮跡の保存・活用に十分寄与することができた。第一次大極殿の復原に向けては、建築金具の製作工程とデザインの検討を確実に進めることができた。また、復原整備工事が本格化した第一次大極殿院南門の現場においては、工事で表出した諸問題や公開における課題に対して、迅速かつ適切に対応することできた。31 年度以降も引き続き適切に対応していく計画である。

【書式Ｃ】　施設名　奈良文化財研究所　処理番号　2531F-3

中期計画の項目	2-(5)-③	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-③-1)	③平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力 文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力する。また、ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動に協力する。 1)文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力 ・国土交通省の平城宮いざない館開館後の展示についての監修協力及び同館照覧ゾーンに関する学芸業務・連絡調整への協力
プロジェクト名称	国土交通省が行う平城宮いざない館での公開・活用事業への協力	
企画調整部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○加藤真二（展示企画室長）、田中恵美（展示企画室アソシエイトフェロー）、廣瀬智子（展示企画室アソシエイトフェロー）、座覇えみ（展示企画室アソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】

３月 24 日に開館した平城宮いざない館第４展示室の展示の監修・学芸業務を中心に、いざない館の活動について、国土交通省国営飛鳥歴史公園ならびに管理センターに協力を行なった。

・奈文研所蔵品の貸出　369 件
・訂正箇所の提示：131 か所
・展示物の管理
　日報の作成、データロガーによる温湿度モニタリング、貸出等対応 122 件
・専門知識による助言・協力・監修：16 件
・質問・案内対応：66 件
・来館者調査・学校団体アンケートの実施
　来館者調査実施（10 日 31 日、11 月６日）
　学校団体アンケート（配布期間：9 月 18 日～12 月 14 日、回収件数：120 件）
・平城宮跡資料館との共同事業の企画・実施
　パンフレット作製２件、企画展示コーナーパネル展示２回
・虫害調査の実施（31 年 3 月 1 日～11 日、設置したトラップ 76 か所）

企画展示コーナーの体験型展示

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。
①適時性においては、開館１年目につきものの初期エラーの修正・訂正に必要な基礎データを提供することができ、いざない館の順調な運営に資することができた。
②独創性においては、長年にわたり平城宮・京跡で発掘調査を行ってきた奈良文化財研究所ならではの 369 件という多数の所蔵品を貸し出すとともに、平城宮跡資料館の展示とのコラボ企画をおこなうなど、まさに、奈文研ならではの独創的な協力を行なうことができた。
③発展性においては、今後、平城宮跡資料館を中心する宮跡内諸施設との連携した企画を進めるうえでの基盤づくりをおこなうことができた。
④継続性においては、展示室４の基本構想作成段階からかかわり続け、いざない館開館後も学芸業務を受託しており、より長期の協力を行なうことができる。
以上から、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	A	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値）平城宮いざない館年間来館者数：264,367 人	定量評価
		—

中期計画評価	B

中期計画記載事項	文化庁と国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力する。
評定理由及び今後の見通し	国交省・管理センターと協力して事業を進め、初期エラーについて、徹底的に洗い出し、131 か所の訂正必要箇所を提示し、これを解消することができるなど、いざない館開館１年目の事業を順調に進め、264,367 人という多数の来館者を迎えることができた。また、これからの協力の基盤を構築することができた。このため、B 評価とした。

【書式C】　施設名　奈良文化財研究所　処理番号　2531F-4

中期計画の項目	2-(5)-③	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-③-1)	③平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力 文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力する。また、ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動に協力する。 1)文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力 ・文化庁が行うキトラ古墳壁画保存管理施設の管理・運営と古墳壁画の公開事業への協力
プロジェクト名称	文化庁が行うキトラ古墳壁画保存管理施設の管理・運営と古墳壁画の公開事業への協力	
飛鳥資料館	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○石橋茂登（学芸室長）、若杉智宏（学芸室研究員）、菊地智慧（学芸室アソシエイトフェロー）ほか５名	

【年度実績と成果】

移動プラネタリウムの様子

・キトラ古墳壁画保存管理施設の管理運営を行うとともに、壁画を季節に合わせて４回公開した。また、出土遺物レプリカ等の展示、見学者の理解を深めるための壁画の解説映像の製作と放映を行った。
・キトラ古墳壁画の第７回公開事業（5 月 19 日～6 月 17 日）を実施した。
・キトラ古墳壁画の第８回公開事業（7 月 21 日～8 月 19 日）を実施した。
・キトラ古墳壁画の第９回公開事業（9 月 22 日～10 月 21 日）を実施した。
・キトラ古墳壁画の第 10 回公開事業（31 年 1 月 19 日～ 2 月 17 日）を実施した。
・壁画公開期間にあわせてキトラ天文図を解説する移動プラネタリウムのイベント（10 月 19 日～10 月 21 日、31 年 2 月 14 日～2 月 17 日予定）を実施した。
・壁画公開時にチラシ、ポスター、解説リーフレットを作成した。解説リーフレットは英語、中国語（簡体字・繁体字）、韓国語を毎回用意して外国語対応を充実させた。
・壁画非公開期間においても展示室の公開を実施し、キトラ古墳閉塞石や韓国の十二支像拓本、天文図や保存処理についての解説パネルなどを展示した。十二支「亥」について展示の解説シートを作成した。
・文化庁、国土交通省飛鳥歴史公園事務所、飛鳥管理センター、飛鳥保存財団と、連絡調整等のため月１回の定例協議を継続した。また、毎日キトラ古墳周辺地区内の飛鳥管理センターを訪問して相互に来館者数や作業の予定を交換した。広報についても相互に情報提供しあい、相乗効果を出せるよう努めた。

年度計画評価	A

【評定理由】

①適時性は、キトラ古墳壁画の主題である四神を春夏秋冬にあわせて公開し、天井天文図の公開にあわせて移動プラネタリウムを開催した点から高く評価できる。また、中国式星座が描かれたキトラ天文図をベースに、夜空の星とキトラの星座を対応させた移動プラネタリウムは②独創性がきわめて高い。③発展性についても、壁画公開を映像やプラネタリウムと連携させることで公開事業の発展を実現したと評価できる。④効率性においても、年４回の壁画公開と、その間の壁画非公開期間の展示、各種印刷物、移動プラネタリウムの実施など、限られた人員で効率よく事業を実施できたと評価できる。⑤継続性についても、知識・経験とコンテンツ類の蓄積を活かして毎年の展示内容などをリバイズしてきており、継続によってレベルアップしていると評価できる。

総合的にみて、定例の壁画公開だけにとどまらず、新しい魅力を高めるべく精力的な活動を実施して成果をあげることができたと評価できる。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	(参考値) ・壁画公開実施　４回　　・解説シート　１種　　・協議等回数　計 12 回 ・リーフレット　５種　　・移動プラネタリウム　２回	―

ア『平成 30 年度　キトラ古墳壁画　第７回公開』5 月 19 日発行。
イ『平成 30 年度　キトラ古墳壁画　第８回公開』7 月 21 日発行。
ウ『平成 30 年度　キトラ古墳壁画　第９回公開』9 月 22 日発行。
エ『平成 30 年度　キトラ古墳壁画　第 10 回公開』31 年 1 月 19 日発行。

中期計画評価	A

中期計画記載事項	文化庁と国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力する。
評定理由及び今後の見通し	開館３年目を迎え、来館者のマンネリ化を防ぐためにさまざまな工夫を実施したと評価できる。今後は事業の安定的な継続とともに、さらに新しいコンテンツの用意や外国人対応、幅広い層に対応できる分かり易い解説など、充実して魅力的な公開活用事業として展開していくことが期待できる。

【書式Ｃ】　施設名　奈良文化財研究所　処理番号　2532F

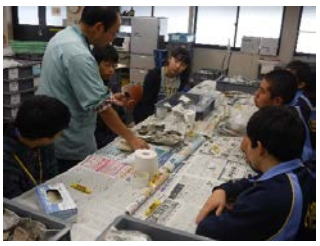
中期計画の項目	2-(5)-③	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-③-2)	③平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力 文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力する。また、ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動に協力する。 2)ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動への協力
プロジェクト名称	ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動への協力	
研究支援推進部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○津田保行（連携推進課長）、菊本恵二（研究支援課長）、溝端靖秀（連携推進課課長補佐）、江川正（研究支援課宮跡等活用支援係長）	

【年度実績と成果】

○ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワークへの協力

ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワークとの共催、後援事業等において、人員及会場提供等の協力を行った。

・第 16 回平城宮跡クリーン大会（共催）4 月 7 日　参加者数：150 人
・第 35 回平城宮跡歴史講座（後援）（テーマ：『聖武・光明子と僧侶たち』シリーズ第 1 回～行基と大仏造立～　講師：舘野和己(奈良女子大学特任教授)）5 月 27 日　参加者数：156 人　平城宮跡資料館
・第 36 回平城宮跡歴史講座（後援）（テーマ：『聖武・光明子と僧侶たち』シリーズ第 2 回～鑑真の来日～　講師：寺崎保広（奈良大学文学部教授)）9 月 23 日　参加者数：112 人　平城宮跡資料館
・第 37 回平城宮跡歴史講座（後援）（テーマ：『聖武・光明子と僧侶たち』シリーズ第 3 回～玄昉/真備の入唐後におかる活躍～　講師：市大樹（大阪大学大学院文学研究科准教授)）31 年 1 月 27 日　参加者数：139 人　平城宮跡資料館
・「平城京歴史講座」（講師派遣協力）（「出土河原が伝える古代の歴史」講師：林正憲(奈良文化財研究所主任研究員)）6 月 9 日　参加者数：80 人　平城宮いざない館
・「平城京歴史講座」（講師派遣協力）（いざない館の地下を掘る「平城京左京三条一坊一坪の発掘調査」講師：山本祥隆(奈良文化財研究所研究員)）10 月 13 日　参加者数：83 人　平城宮いざない館
・「平城京歴史講座」（講師派遣協力）（「考古資料を展示するーいざない館・平城宮跡資料館での取り組みー」講師：座覇えみ(奈良文化財研究所アソシエイトフェロー)）12 月 8 日　参加者数：51 人　平城宮いざない館
・第 11 回遺跡見学会への協力　10 月 28 日　参加者数：19 人（講師派遣）
・平成 30 年度平城宮跡歴史公園ガイド研修会への協力　12 月 8 日　参加者数 71 人（研修講師の派遣）
・ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワークとの定期連絡会議（月 1 回、計 12 回実施）


職場体験（土器調査）

○周辺自治会等への協力

自治会主催の歴史教室への講師派遣、周辺中学校の職場体験への協力を行った。

・「佐保川地域ふれあい会館の歴史教室」（佐保川自治連合会）への講師派遣
林主任研究員（考古第三研究室)「佐紀古墳群を歩く」（遺跡見学エクスカーション）5 月 12 日　参加人員　28 名
海野研究員（遺構研究室)「平城宮東院地区の発掘最前線」 7 月 14 日　参加人員　28 人
福嶋研究員（遺構研究室)「浴室建物について-法華寺を中心に-」 9 月 8 日　参加人員　27 人
桑田主任研究員（史料研究室)「荷札木簡をひもとく」（展示解説とミニツアー）11 月 10 日　参加人員　32 人
国武主任研究員（考古第一研究室)「平城宮東方官衙地区のごみ穴発掘」31 年 1 月 12 日　参加人員　24 人
吉川室長（歴史研究室)「平城宮のその後と超昇寺」31 年 3 月 9 日　参加人員　31 人

・職場体験への協力
・11 月 7 日～8 日　富雄中学校（参加人数　3 人)、11 月 7 日～9 日　富雄南中学校（参加人数　3 人)、11 月 14 日～16 日　都跡中学校（参加人数　3 人）

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、ＮＰＯ法人と協力しつつ、平城宮跡の清掃や普及活動を行った。また、ＮＰＯ法人との定期的な連絡会議を月一回実施し、ＮＰＯ法人との意見交換を踏まえて、平城宮跡歴史公園の平城宮いざない館での平城京歴史講座に本研究所研究者を 30 年度より派遣する等、より連携協力関係が進んでいることからＡ評価とした。②発展性においては、ＮＰＯ法人の歴史講座等の支援や、周辺自治会が企画する講座への講師派遣を通じて、広く情報発信を行うことができた。③効率性においては、ＮＰＯ法人の共催、後援事業において、当研究所の施設を有効かつ効果的に活用できた。④継続性においては、ＮＰＯ法人への支援や、周辺自治会への協力を引き続き実施し、協力体制を継続的に維持させることができた。以上により、本事業については、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	A	B	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】**	定量評価
		―

中期計画評価	B

中期計画記載事項	ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動に協力する。
評定理由及び今後の見通し	29 年度に引き続き、ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワークの行う活動に協力した。また、周辺自治会等の活動への協力も継続的に実施した。今後も引き続き、平城宮跡の有効な利活用や情報発信を目的とした同法人や周辺自治会等の活動に、協働して取り組んでいく予定である。

【書式C】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2541E

中期計画の項目	2-(5)-④	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-④-1)	④連携大学院教育の推進 連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成する。 1)東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育等の推進 ・東京藝術大学大学院：システム保存学(保存環境学、修復材料学)
プロジェクト名称	東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進	
保存科学研究センター	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○朽津信明（修復計画研究室長）、早川泰弘（副センター長）、吉田直人（前保存科学研究室長）、犬塚将英（分析科学研究室長）、佐藤嘉則（生物科学研究室長）、早川典子（修復材料研究室長）ほか	

【年度実績と成果】

○30 年度開講した授業及び担当教員、受講者数

保存環境計画論（前期、火曜 1 限）　2 単位　吉田直人・佐藤嘉則・朽津信明　19 人　（聴講 1 人）
修復計画論　（前期、木曜 1 限）　2 単位　朽津信明　8 人
修復材料学特論（前期、木曜 2 限）　2 単位　早川泰弘・早川典子　12 人
保存環境学特論（後期、火曜 1 限）　2 単位　犬塚将英・佐藤嘉則　6 名（聴講 1 人）
文化財保存学演習
テーマ：「色を測る」、講師：朽津信明
日時：6 月 5 日(火)13～17 時、21 人

保存環境計画論の授業風景

○入学試験
平成 30 年度東京藝術大学大学院美術研究科（修士課程）入学試験を実施し、9 月 19～21 日に入学試験及び面接を実施して、合格者 1 人を決定した。

○成績評価等、文化財保存学専攻運営への協力
教室会議（11 回）、入試合同判定会議（2 回）、博士・修士学位審査会への協力

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、文化財保護法の改正など、最新の情報を盛り込んだ各種授業を展開でき、藝大基幹講座の付する教育の幅を広げる点で有効であった。②独創性においては、実際の指定文化財で行われた修復や保存事業について講義し、これは通常の大学教育で不足している部分であり独創性がある。③発展性においては、入試で修士課程の合格者を確保し 31 年度からさらに教育の充実が期待されることになった。④効率性においては、30 年度は藝大の校舎で行う講義の割合を増やし、学生が効率的に学べる環境を実現した。⑤継続性においては、藝大との協力関係を維持することによって、最新の研究成果を若手人材育成に有効活用できている。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・開講時間： 前期　火曜 1 限、木曜 1 限、木曜 2 限　/　後期　火曜 1 限 ・開講回数：90 分×15 回、受講者数：延べ 4 人 ・開講時間　1 限 9：00～10：30　2 限 10：40～12：10　3 限 13：00～14：30 ・開講回数　計 4 コマ　各 2 単位	定量評価 －

中期計画評価	B

中期計画記載事項	連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成する。
評定理由及び今後の見通し	中期計画の 3 年目として 30 年度は、文化財保存学専攻他教室に在籍している修士・博士学生の教育にも協力し、大学側からの評価も高く、当初計画通りに遂行できた。第 4 期中期計画では、文化財保存学専攻所属の大学院学生に対して 4 授業 8 単位を開講し、修士論文指導、文化財保存学専攻に所属する学生全体への教育の質の向上に資するため教員交代を適宜行う計画である。中期計画第 3 年次として、今期は最終的に 2 名の教員交代を行っており、31 年度から新任教員が講義を受け持つことで、大学からの要望により有効に応えていけるようになると期待される。また新規に修士学生の受け入れが決まっており、今中期計画の中で修士論文まで作成可能の見込みである。

【書式C】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2541F

中期計画の項目	2-(5)-④	地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
年度計画の項目	2-(5)-④-1)	④連携大学院教育の推進 連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成する。 1)東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育等の推進 ・京都大学大学院：共生文明学（文化・地域環境論） ・奈良女子大学大学院：比較文化学（文化史論）
プロジェクト名称	京都大学・奈良女子大学との間での連携大学院教育の推進	
研究支援推進部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】**○松村恵司（所長）	

【年度実績と成果】

○客員教授・准教授として各専門分野に関する講義、演習、実習を通して大学院生の研究指導を実施。

京都大学大学院人間・環境学研究科
- 玉田 芳英「原子・古代精神文化論 1・2」「文化遺産学演習 2A・2B」
- 高妻 洋成「保存科学論 2」「文化遺産学演習 5A・5B」
- 尾野 善裕「遺物調査法論 1・2」「文化遺産学演習 1A・1B」
- 馬場 基「史料学論 1・2」「文化遺産学演習 3A・3B」
- 山﨑 健「環境考古学論 1・2」「文化遺産学演習 4A・4B」

奈良女子大学大学院人間文化研究科
- 渡邉 晃宏「歴史資料論Ⅰ・Ⅱ」
- 神野 恵「歴史考古学特論Ⅰ・Ⅱ」

奈良大学文学部
- 中島義晴・前川歩・高橋知奈津・本間智希

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、本務において得た最新の研究成果などをもとに、研究指導を行った。②独創性においては、当研究所が長年培ってきた専門知識を教授することができた。③発展性においては、連携大学院における講義や研究指導を通じて、次世代の研究者の育成・発展に大きく貢献した。④継続性においては、大学との連携協定を基に長年継続しており、継続的に実施することができた。文化財保存・活用に関する幅広い知識と高度な技術を兼ね備えた人材育成について、計画通り寄与することができた。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	**【実績値・参考値】** （参考値） ・受入学生数(延べ人数)：108 人 京都大学　30 人 奈良女子大学　6 人 奈良大学　72 人	定量評価 ―

中期計画評価	B

中期計画記載事項	連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成する。
評定理由及び今後の見通し	連携大学院協定に基づき、計画的かつ継続的に実施できた。今後も、これまで蓄積してきた研究成果を基に連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与するため、学生に対して研究指導を実施していく。

【書式A】　施設名 国立文化財機構　処理番号 2551

中項目	2．文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施
事業名	（5）地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等　⑤文化財等の防災・救援等への寄与

【年度計画】
1)体制づくり
地域の多様な文化資源の保護を目的として、文化財等の防災・救援のための連携・協力体制づくりを行う。
・文化遺産防災ネットワーク推進会議や文化遺産防災ネットワーク有識者会議を開催する。
・機構各施設が地区分担を行い、自治体や博物館等施設、史料ネット等へのヒアリング、情報交換会の開催、調査の実施及び会議への参加等を通じて地域文化財防災ネットワーク構築を促進する。また、災害発生時には迅速な救援活動を実施するため、地域間連携・組織間連携のガイドライン策定に向けた検討を行う。

担当部課	文化財防災ネットワーク推進本部 本部事務局文化財防災ネットワーク推進室	事業責任者	室長　岡田健

【実績・成果】※［ ］内は、実施担当の施設・部署を表す。
1)
a．文化遺産防災ネットワーク推進会議（参画機関24団体）：第8回開催（5月23日）・第9回開催（11月15日）［推進室］
　文化遺産防災ネットワーク有識者会議：第8回開催（6月14日）・第9回開催（12月19日）［推進室］
　推進会議では、推進事業の活動状況と参画機関による情報交換等を行い、「文化遺産防災ネットワーク推進会議　活動ガイドライン」策定について意見を交わした。有識者会議では、29年度に19人だった有識者を新たに11人（新規7人、継続4人）に更新し、推進事業の課題にとどまらず、文化遺産保護の全体像に関わる重要な議論と提言をいただいた。
b．活動ガイドライン策定ワーキンググループ（WG）会議（30年度：6回開催）［推進室］
　WG委員5人に推進室メンバーを加えて協議し、地域間連携・組織間連携のガイドラインの骨子となる「文化遺産防災ネットワーク推進会議　活動ガイドライン」策定のための要項をまとめた。
c．4博物館・2研究所が全国を6つのブロックに分けて担当し、都道府県を基礎単位とした地域内連携の確立と促進のため、聞き取り調査を実施し、県内各種会合へ参加し、ブロック内協議会等の開催を促進した。［国立文化財機構6施設・推進室］
・北海道・東北：7道県に訪問調査（10件）。
・関東・甲信越：10都県を訪問し、各1～2回の都県内会合を開催した（計18回）。さらに県境を越えたブロック内協議会を2回開催した（出席団体数：第1回23団体、第2回12団体、於：東京国立博物館）。また、東京都の基礎自治体を対象として重点的に訪問・現状把握調査を実施した（文化財所管担当：区23、市22、町4、村1。その他、文化財関連団体10件）。
・中部圏・近畿：7府県に訪問調査（16件）。京都防災対策連絡会に出席（2回）。第2回中部・近畿文化財防災連絡会議を開催した（31年1月18日）。 会場：奈良国立博物館、参加者数：102人
・中国・四国：4県に訪問調査（6件）。広島歴史資料ネットワーク総会（31年1月12日）、えひめ文化財防災フォーラム（31年1月31日）に参加し情報収集。中四国文化財防災研究協議会を開催した（31年2月13日）。 会場：岡山県立博物館、参加者数：9県12人。
・九州：5県に訪問調査（5件）。また、平成30年度熊本県文化財レスキュー事業定例打ち合わせ会（4回）、「九州・山口ミュージアム連携事業」ワーキング会議（2回）、「九州・山口ミュージアム連携事業」検討会議（2回）に参加し情報収集した。
d．国内で発生した自然災害における文化財被災情報の収集［国立文化財機構6施設・推進室］
　島根県西部地震、大阪府北部地震、平成30年7月豪雨、台風20号、台風21号において、文化庁・文化財等関連機関に文化財被災情報の確認を行った。また、大規模な水害の発生においては、水損紙資料の対応状況の確認を行った。
e．地方公共団体・文化財関連団体等の主催する講演会・研修会等への講師派遣［東京国立博物館：3件、推進室：2件］
・千葉県博物館協会総会（5月24日） 会場：千葉県立中央博物館
・新潟県歴史資料保存活用連絡協議会「平成30年度第1回歴史資料保存活用研修会」（7月20日） 会場：新潟県立文書館
・東京都教育委員会「平成30年度区市町村教育委員会埋蔵文化財担当者会議及び研修会」（31年3月1日） 会場：東京都立多摩図書館
・（公財）日本博物館協会「平成30年度研究協議会　テーマ２　平成の大規模災害と博物館」（31年3月8日） 会場：北海道博物館
・平成30年度静岡県文化財等救済ネットワーク会議（31年3月15日） 会場：静岡県男女共同参画センター「あざれあ」
f．地域連携を重点に置いた研修会の開催
・水損紙資料真空凍結乾燥処理ワークショップ（7月12日）［九州国立博物館・奈良文化財研究所］　会場：奈良文化財研究所
・文化財防災ネットワーク推進事業セミナー「大分県が取り組む文化財の地域防災計画」（31年2月14日）［九州国立博物館］
　会場：九州国立博物館、対象：都道府県の文化財等担当者、博物館・美術館学芸員等、受講者数：43人
g．国内の研究集会等に参加し、地域における文化財の保全や災害時の活動体制に関する情報収集や発表を行った。［推進室］
・2018年度 京都大学防災研究所 公開講座（第29回）「災害を知り、災害に備える―九州の近年の災害とこれから―」（10月2日）
・第5回全国史料ネット研究交流集会（11月17日・18日）：国立文化財機構が共催した。
・ICOM-ASPAC日本会議2018　国際シンポジウム「文化財が未来へつなぐ―自然災害と博物館」（12月1日・2日）
h．以下の報告書を刊行し、専門家及び一般市民の情報収集に貢献するため、国内の博物館、大学、図書館、公文書館等に納本した。
・地域の文化財防災に関する研究集会報告書Ⅰ『第4回全国史料ネット研究交流集会』：500部（11月7日）［推進室］
・『平成30年度文化財防災ネットワーク推進事業―九州国立博物館の取り組み―』：1,000部（31年3月29日）［九州国立博物館］

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 ・推進会議参画団体を対象とする組織連携は活動ガイドライン策定作業を開始して、一層緊密な体制の構築が展望できるようになりつつある。 ・都道府県を基礎単位とする地域連携は、各施設の取り組みにより順調に進んでいる。 ・新しい構成による有識者会議は、文化財全般の社会的課題の中での防災の取り組みについての議論を行い、ネットワーク構築のための方向性を的確に示すものとして機能している。

【中期計画記載事項】
　巨大地震等大規模災害に対応した文化財等の防災や被災した文化財等の救援・修理等の適切な処置を行うため、文化庁及び地方公共団体、文化財関係各団体等の要望を踏まえつつ、機構として全国的な連携・協力体制の整備に向けて、以下の事業及び関連する調査研究等を行う。
1)体制づくり
有事における文化財等の防災・救援のための連携・協力体制づくりに向けた検討を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 ・推進会議活動ガイドライン策定作業が順調に進み、今後のネットワークの方向性が明確になってきたことにより、地方自治体に対してはそのような支援体制があることを念頭においた地域連携体制の構築を求めていくという道筋が鮮明になった。

【書式A】　施設名：国立文化財機構　処理番号：25527

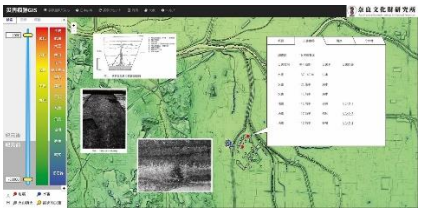
中項目	2．文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施
事業名	（5）地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等　⑤文化財等の防災・救援等への寄与

【年度計画】
2)調査研究等の実施
ア　文化財等の防災・救援の技術的課題に関する調査研究を行い、情報の発信を行う。
・全国の文化財防災の先進事例の収集や、地方指定等文化財情報に関する収集・整理・共有化や、文化財防災体制にかかる調査研究に取り組む。
・国および地方指定等文化財に関する全国文化財等データベース・全国文化財保護条例データベースを構築し、自然史標本リストの共有システムの確立、歴史災害痕跡のデータベースの運用・活用、地域文化遺産リストに関する地図作成作業等を実施し、広く文化財全般の防災ネットワークの構築に寄与する。
・文化財が被災した自然災害に関する事例集を作成し、公開する。

担当部課	文化財防災ネットワーク推進本部 本部事務局文化財防災ネットワーク推進室	事業責任者	室長　岡田健

【実績・成果】※［ ］内は、実施担当の施設・部署を表す。
2)
ア
a. 以下の通り、地方指定等文化財情報に関する収集・整理・共有化を行った。［東京文化財研究所］
・無形文化遺産情報発信・収集を目的としたウェブサイト「いんたんじぶる」の継続的運用
・「無形文化遺産の防災」関西連絡会議（31年2月3日）　会場：京都芸術センター　参加数：6府県1市
・「無形文化遺産の防災」連絡会議（31年3月1日）　会場：東京文化財研究所　参加数：10県
・『平成29年度「無形文化遺産の防災」連絡会議報告書』：150部（31年3月29日）
b. 地域の文化財等防災体制構築のためのモデル策定「うきは市文化財サポーター育成講座」開講（27年度から継続）（5月28日～12月17日、全8回）［九州国立博物館］　会場：うきは市民ホール他、対象：うきは市民等、参加者数：延べ90人
4年間の活動成果として、『うきは市文化財サポーター育成講座』報告書：1,000部（31年3月29日）を刊行した。
c. 阪神淡路・東日本両震災の救援委員会の経費関連書類をデータベース化し、被災レベル・被災範囲・被災資料点数（または面積）・作業フェーズごとの人員数と経費の相関を得るための解析モデルの開発に着手した。［東京文化財研究所］
d. 歴史的建造物と動産文化財の一体的な防災・救援体制構築のため、以下の研究を行った。［推進室］
・各都道府県におけるヘリテージマネージャー養成講習の動向調査（9府県）を行い、千葉県ヘリテージマネージャー養成講習（全8回）に参加した。
・ヘリテージマネージャースキルアップ講習会へ講師を派遣し、歴史的建造物における動産文化財の防災に関する講義を実現した。（31年3月9日）
e. 文化財防災体制のあり方に関する調査研究として、各地でのシンポジウム・研修会等に参加し、関係団体への聞き取り調査を行った。［推進室］
・シンポジウム「歴史が導く災害科学の新展開Ⅱ―人の記録、自然の記憶―」（6月16日）会場：東北大学災害科学国際研究所
・自衛隊における文化財救援のための法的根拠等に関する自衛隊法務担当への聞き取り調査（31年3月13日）。於：陸上自衛隊第十師団守山駐屯地
f. 全国文化財等データベース・全国文化財保護条例データベースの構築を進めた。［東京文化財研究所］
・文化庁所有の47都道府県の文化財データのデータベース構築を進め、27都県所有の紙媒体による文化財データのデジタル変換作業を完了した。
・西日本23府県分の文化財保護条例データをデータベースに登録した。
・上記データベース構築に資するため、西日本の地方自治体史・報告書を収集したほか、京都府文化財関係資料のデジタル化を行った。
g. 自然史標本リスト共有システムの確立のため、現生標本の所在調査（東北大学考古学研究室、約1,000点）及び陸前高田市立博物館所蔵の被災自然遺物の整理・データ化（229袋分）を行った。［奈良文化財研究所］
h. 歴史的災害痕跡データベースの運用・活用を行った。［奈良文化財研究所］
・データベース及びプログラムの大幅更新、全体バックアップ、新規入力作業により、確認した災害痕跡件数が21,803件に達した。
・英語版歴史的災害痕跡データベース普及啓発用原稿を作成した。
・地震災害痕跡調査・記録リーフレット『現場でみつかる地震災害痕跡（携帯版）』：2,500部（31年3月31日）を刊行した。
i. 都道府県との連携による文化遺産保全リスト・地図作成を進めた。［奈良文化財研究所］
・和歌山県湯浅町、広川町を対象とした文化遺産保全地図システムのデモ版と『文化遺産保全地図システム使用方法マニュアル』を作成した。
・上記デモ版について、和歌山県内での対象地域を広げるため、候補の町に事業内容を説明した。。
j. 自然災害による文化財の被災・救出に関する事例集（歴史資料・自然史資料）の作成に向けて実施要項を作成し、専門家及び関係機関への調査を行った。［奈良国立博物館・奈良文化財研究所］

【補足事項】



歴史的災害痕跡データベース
災害痕跡情報（箸尾遺跡）の画面

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：A	・各種の文化財データベースの構築を進め、自然災害による文化財の多岐にわたる被害に備えた防災データベースを確立しつつある。

【中期計画記載事項】
巨大地震等大規模災害に対応した文化財等の防災や被災した文化財等の救援・修理等の適切な処置を行うため、文化庁及び地方公共団体、文化財関係各団体等の要望を踏まえつつ、機構として全国的な連携・協力体制の整備に向けて、以下の事業及び関連する調査研究等を行う。
2)調査研究等の実施
ア　文化財等の防災・救援に関する調査研究を行い、情報の収集と発信を行う。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：A	・長年の課題である「歴史的建造物が被災した際の所蔵動産文化財の保全」について、建築士会・文化庁建造物担当の理解を得てヘリテージマネージャー講習会での講義を実現するに至ったのは、画期的な成果であると評価できる。これまでに蓄積してきた迅速性・適格性という保全処置に関するノウハウが、いよいよ試される段階に来た。 ・各施設が取り組んできた特色ある文化財データベースは、データ収集から利用の段階に進みつつあり、平常時・災害発生時の活用が期待される。

【書式A】　施設名：国立文化財機構　処理番号：2552ｲｳ

中項目	2．文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施
事業名	（5）地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等　⑤文化財等の防災・救援等への寄与

【年度計画】
2)調査研究等の実施
イ　保存科学等に基づく被災文化財等の劣化診断、安定化処置及び修理、保存環境等に関する研究を実施し、指針の策定を目指す。
・けいはんなオープンイノベーションセンターの施設を利用し、収蔵庫機能の維持管理等を行いつつ関西地区における文化財防災の拠点としての活用について研究を行う。
・自然災害により被災した様々な状態の被災資料に関する劣化診断・応急処置等の方法に関する研究を行う。
・被災文化財等の安定的保管のための保存環境に関する研究を行う。
ウ　無形文化遺産の防災と被災後の継承等に関する研究を実施する。
・無形文化遺産総合データベースを構築し、これを活用して、無形文化遺産の防災に寄与する。
・無形文化遺産の動態記録作成等を通じて、被災後の継承等に関する研究を実施する。

担当部課	文化財防災ネットワーク推進本部 本部事務局文化財防災ネットワーク推進室	事業責任者	室長　岡田健

【実績・成果】※［ ］内は、実施担当の施設・部署を表す。
2)
イ
a. けいはんなオープンイノベーションセンターの施設を利用した収蔵保管施設において、落下防止対策、浮遊菌等調査、温湿度管理等を実施し、安定的な保管管理のためのデータを取得した。この保管管理の試験運用モデルとして実施していた、京都国立博物館防災対応受託規則に基づく、建仁寺両足院の文化財の一時保管が完了した（29年7月～31年2月）。［京都国立博物館］
b. 自然災害により被災した様々な状態の被災資料に関する劣化診断・応急処置等の方法に関する研究を行った。
・脱塩処理に伴う資料自体の収縮について基準数値を定めている米国・スミソニアン研究所を訪問し、実験に関する内容を取材した後、ワシントンD.C.及びニューヨークの主要な美術館との意見交換を行った（10月21日～28日）。［東京国立博物館］
・水損資料の処置方法と臭気発生の関係を特定するため、資料凍結による微生物への影響、乾燥庫の温湿度条件、処理薬剤の影響等について検証を行った。並行して、吸水時間の異なる紙資料について、最適な水浸時間を検証した。［東京文化財研究所］
・海水損した資料に対する脱塩材料としてパルプ及び粘土に着目し、これらを用いた効果的な脱塩方法の開発に向けた基礎研究を実施した。［奈良文化財研究所］
・28年熊本地震被災資料の真空凍結乾燥作業を行った（7月12日～10月5日）。［奈良文化財研究所］
ウ
a. 無形文化遺産総合データベース（非公開）に埼玉県・和歌山県・沖縄県の情報を登録した。［東京文化財研究所］
b. 無形文化遺産の災害リスクマネジメントに資する技術調査を行い、動態記録及び報告書を作成した。［東京文化財研究所］
・技術調査（2件）：鵜飼舟製作技術、阿波晩茶
・動態記録作成（4件）：鵜飼舟製作技術、琵琶製作技術、三味線太棹修理技術、阿波晩茶
・『文化財保護のための動態記録作成に関する調査研究事業―民俗技術の記録制作事業報告書―』：30部（31年3月）

【補足事項】

阿波晩茶製造技術調査（7月、於：徳島県）にて
防災に資する項目の聞き取り及び記録撮影

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 ・文化財防災拠点として収蔵施設維持管理の試験的運用を順調に進めている。 ・文化財研究所を中心に被災文化財の保全処置及び保管環境に関する科学的な研究を進めている。30年夏の集中豪雨で被災した紙資料の保全等、緊急性のある課題にも対応し得る体制を構築している。 ・無形文化遺産の防災に関する情報発信が強化され、機構としての特色を示している。

【中期計画記載事項】
巨大地震等大規模災害に対応した文化財等の防災や被災した文化財等の救援・修理等の適切な処置を行うため、文化庁及び地方公共団体、文化財関係各団体等の要望を踏まえつつ、機構として全国的な連携・協力体制の整備に向けて、以下の事業及び関連する調査研究等を行う。
2)調査研究等の実施
イ　保存科学等に基づく被災文化財等の劣化診断、保存環境、安定化処置及び修理等に関する研究を行う。
ウ　無形文化遺産の防災と被災後の継承等に関する研究を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 ・東日本大震災で津波被害を受けた文化財は、現在も被災県をはじめ各地で保全処置の作業が続けられており、臭気の除去、脱塩方法についての対策が求められている。新たな研究方法の応用や、外国の手法の採用など、各施設の能力と研究ネットワークを駆使した取り組みが行われていることが高く評価できる。

【書式A】　施設名 国立文化財機構　処理番号 2553

中項目	２．文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施
事業名	（５）地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等　⑤文化財等の防災・救援等への寄与

【年度計画】

3)人材育成・事業啓発活動等の実施

・本事業での取組についてウェブサイト・パンフレット等を更新して情報公開に努める。
・被災資料の応急処置等に関わる動画を作成し、公開する。
・文化財等の防災・救援に関する指導・助言、研修、啓発・普及活動として、シンポジウム、講演会、研究集会、地方公共団体担当者等への研修会、地域の防災体制構築のための人材育成等を実施する。
・国際研修・シンポジウム等の実施・参加を通して、諸外国の防災の取組や被災文化財の保全処置方法に関する新たな知見の入手に努めるとともに、我が国の経験を活かして諸外国の文化財防災に貢献する。

担当部課	文化財防災ネットワーク推進本部 本部事務局文化財防災ネットワーク推進室	事業責任者	室長　岡田健

【実績・成果】※［ ］内は、実施担当の施設・部署を表す。

3)

a. 文化遺産防災ネットワーク推進会議の参画団体・関係団体と情報共有を図りながら、以下の通り情報公開を行った。［推進室］

・文化財防災ネットワーク推進事業ウェブサイトをリニューアルした（訪問者数93,817件）。
　30年度に開設した問合せフォーム及び電話・メールによる文化財防災に関する問合せ・相談は7件だった。
・文化財防災ネットワーク推進事業紹介パンフレット改訂第三版（日）：2,000部を発行した（10月11日）。

b. 被災資料応急処置マニュアル動画『文化財防災マニュアル　民俗資料のクリーニング処置例〈地震災害〉・〈水害〉編』（日・英2言語版）を製作し、31年3月29日にウェブサイトで公開した。ハンドブック版（日）：1,000部（31年3月15日）、DVD版（日）：200部（31年3月28日）［推進室］

c. 一般市民向けのシンポジウムを以下の通り開催した。

・シンポジウム「文化財を守り伝える1　文化財の保存と修理」（10月27日）［京都国立博物館］
　会場：けいはんなオープンイノベーションセンター2階ミュージアムホール、参加者数：120人、報告書：500部（31年3月22日）
・文化財防災ネットワーク推進事業シンポジウム「地域防災と文化財―自然災害を知り、地域の貴重な文化的資源を守り、伝える」（31年2月10日）［推進室・京都国立博物館］
　会場：京都国立博物館 平成知新館講堂、参加者数：83人

d. 研修・研究会を実施し、防災・減災・レスキューといった視点から、被災文化財の応急処置等の技術の習得を促進した。

・文化財等防災ネットワーク研修（10月31日～11月1日）［奈良文化財研究所］
　会場：奈良文化財研究所、対象：地方公共団体の文化財担当職員、博物館・美術館等の学芸員、参加者数：16人
・熊本県博物館ネットワークセンターにおいて、熊本県主催の「文化財レスキュー資料整理会」（11月22日）に参加し、同県内外の美術館等学芸員・県文化課職員・市民サポーターに向けて、文化財の取扱い方法に関する助言を行った。［九州国立博物館］
・平成30年度文化財防災ネットワーク推進事業研修会「水害に備える」（31年2月27日）［東京文化財研究所・京都国立博物館］
　会場：京都国立博物館、対象：京都府内の文化財担当職員、博物館・美術館等の学芸員、参加者数：26人

e. 文化財防災に関わる外国機関等と積極的に連携し、我が国の防災に関する経験を国際貢献に役立てた。［推進室］

・四川省土木建築学会世界遺産工作委員会「文化遺産リスクマネジメント国際学術論壇」での講演と情報収集（4月28日）
　会場：中国・西南大学（四川省成都市）
・中国文化遺産研究院研究者招聘（2人）による、被災文化財及び歴史的建造物の防災体制に関する視察（6月3日～6月9日）
　視察先：九州歴史資料館、平成29年7月九州北部豪雨被災地、熊本城、清水寺、唐招提寺等
・「中日共同文物防災減災高級研修コース」への講師（6人）派遣と情報収集（9月3日～9月11日）
　会場：中国文化遺産研究院（北京市）、受講者数：25人
・立命館大学ユネスコ・チェア「文化遺産と危機管理」国際研修への講師（4人）派遣（8月29日～9月18日）
　会場：立命館大学 歴史都市防災研究所、京都国立博物館他、受講者数：15人
・国際シンポジウム「地域と共に取り組む文化遺産防災－世界の経験、日本の未来－」開催（9月20日）
　会場：立命館大学衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム、参加者数：62人、報告書：600部（31年3月29日）
・第2回博物館文化財防震技術国際学術シンポジウムでの発表・情報収集（10月16日～10月17日）
　会場：中国・雲南省博物館（雲南省昆明市）

【補足事項】

文化財防災ネットワーク推進事業シンポジウム
「地域防災と文化財―自然災害を知り、地域の貴重な文化的資源を守り、伝える」（31年2月10日）
於：京都国立博物館

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
・文化財の保全技術に特化した研修・シンポジウムに限らず、一般市民に向けて「地域における災害と防災」という包括的なテーマでシンポジウムを開催し、アンケートでは「満足である」が7割以上となった。引き続き、地域との協力による多様かつ実際的な内容の活動を目指す。

【中期計画記載事項】
巨大地震等大規模災害に対応した文化財等の防災や被災した文化財等の救援・修理等の適切な処置を行うため、文化庁及び地方公共団体、文化財関係各団体等の要望を踏まえつつ、機構として全国的な連携・協力体制の整備に向けて、以下の事業及び関連する調査研究等を行う。
3)人材育成等の実施　文化財等の防災・救援に関する指導・助言、研修、啓発・普及活動を実施する。

【中期計画に対する評価】
評定：A

【判定根拠、課題と対応】
・一連の研修・シンポジウムの実施、国外の専門家との交流によって、事業の基盤が確立した。この5年間の活動の成果を通じて、一般市民への啓発と同時に、地方公共団体の文化財担当職員に対する総合的な教育プログラムの開発が重要であるとの問題意識を得たため、平成31年度の年度計画に新規項目として取り入れ、実現を目指す。

（受託事業）

処理番号	年度計画の記号	受託事業名	担当	備考	頁
3112F-1	2-(1)-①-2)	津山市城西伝統的建造物調査	奈文研	文化遺産部	332
3112F-2	2-(1)-①-2)	旧中村家住宅調査研究業務	奈文研	文化遺産部	333
3112F-3	2-(1)-①-2)	湯浅町重要建造物調査研究業務	奈文研	文化遺産部	334
3112F-4	2-(1)-①-2)	重要文化財綿業会館保存活用計画調査研究業務	奈文研	文化遺産部	335
3112F-5	2-(1)-①-2)	藤原京右京九条二・三坊、瀬田遺跡発掘調査による出土文化財の調査・研究及び報告書作成業務	奈文研	都城発掘調査部（藤原）	336
3112F-6	2-(2)-①-2)	平成30年度具志川城跡三の郭毀損箇所詳細記録調査	奈文研	埋蔵文化財センター	337
3132F	2-(1)-③-2)-ｱ	東大寺東塔復元案作成にかかる調査研究業務	奈文研	都城発掘調査部（平城）	338
3133F	2-(1)-③-3)	京都市の文化的景観保存計画策定調査	奈文研	文化遺産部	339
3134F	2-(1)-③-4)-ｱ	考古資料および文献史料からみた過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベースの構築・公開	奈文研	埋蔵文化財センター	340
3135F	2-(1)-③-5)	平成30年度水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業	奈文研	埋蔵文化財センター	341
3213F	2-(2)-①-3)	国道163号木津東バイパス事業に伴う岡田国遺跡埋蔵文化財発掘調査に係る年輪年代測定業務	奈文研	埋蔵文化財センター	342
3214F	2-(2)-①-4)	波怒棄館遺跡および台の下貝塚出土の動物遺存体の分析	奈文研	埋蔵文化財センター	343
3215E	2-(2)-①-5)	美術工芸品保存修理用具・原材料調査事業	東文研	保存科学研究センター	344
3226F-1	2-(2)-②-6)	松帆銅鐸・舌の調査研究	奈文研	埋蔵文化財センター	345
3226F-2	2-(2)-②-6)	群馬県金井下新田遺跡出土ガラス製遺物の材質調査	奈文研	埋蔵文化財センター	346
3227F	2-(2)-②-7)	平成30年度　国史跡ガランドヤ古墳における運用手法の検討及び墳丘復元法検討業務	奈文研	埋蔵文化財センター	347
3228F	2-(2)-②-8)	法隆寺若草伽藍跡西方の調査出土壁画片の調査	奈文研	埋蔵文化財センター	348
3230E-1	2-(2)-②-10)-ｱ	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務	東文研	保存科学研究センター	349
3230E-2	2-(2)-②-10)-ｱ	特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務	東文研	保存科学研究センター	350
3230F-1	2-(2)-②-10)-ｱ	特別史跡キトラ古墳の保存・活用及びキトラ古墳壁画保存管理施設の管理・運営業務	奈文研	埋蔵文化財センター	351
3230F-2	2-(2)-②-10)-ｱ	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務	奈文研	埋蔵文化財センター	352
3230F-3	2-(2)-②-10)-ｱ	井寺古墳の被害状況調査業務	奈文研	埋蔵文化財センター	353
3230F-4	2-(2)-②-10)-ｱ	大規模地震により被災した玉名地域にある凝灰岩で構築された古墳石室等の被害状況並びに保存環境調査業務	奈文研	埋蔵文化財センター	354
3311E-1	2-(3)-①-1)-ｱ	文化遺産国際協力コンソーシアム事業	東文研	文化遺産国際協力センター	355
3311E-2	2-(3)-①-1)-ｱ	世界文化遺産の遺産影響評価に関する調査研究事業	東文研	文化遺産国際協力センター	356
3311E-3	2-(3)-①-1)-ｱ	文化財の英語表記に関する調査研究事業	東文研	文化遺産国際協力センター	357
3312E-1	2-(3)-①-2)-ｱ-(ｱ)	文化遺産国際協力拠点交流事業「ネパールの被災文化遺産保護に関する技術的支援事業」	東文研	文化遺産国際協力センター	358
3312E-2	2-(3)-①-2)-ｱ-(ｱ)	文化遺産保護国際貢献事業「ミャンマーにおける考古・建築遺産の調査・保護に関する技術移転を目的とした拠点交流事業・建築分野」	東文研	文化遺産国際協力センター	359
3312F	2-(3)-①-2)-ｱ-(ｱ)	平成３０年度文化遺産国際協力拠点交流事業実施委託業務（ミャンマーにおける考古・建築遺産の調査・保護に関する技術移転を目的とした拠点交流事業）	奈文研	企画調整部	360
3313E-1	2-(3)-①-3)	文化遺産保護国際貢献事業「トルコ共和国における壁画の保存管理体制改善に向けた人材育成事業」	東文研	文化遺産国際協力センター	361
3313E-2	2-(3)-①-3)	シルクロードが結ぶ友情プロジェクト「シリア人専門家研修（紙資料）」	東文研	文化遺産国際協力センター	362
3320G	2-(3)-②	平成30年度無形文化遺産保護パートナーシッププログラム	アジア太平洋無形文化遺産研究センター		363
3521F-1	2-(5)-②-1)	第一次大極殿院建造物復原整備他にかかる調査委託	奈文研	都城発掘調査部（平城）	364
3521F-2	2-(5)-②-1)	長門鋳銭所跡出土木簡等の保存処理等を経ての総合的研究	奈文研	都城発掘調査部（平城）	365
3521F-3	2-(5)-②-1)	国宝薬師寺東塔遺物整理業務（金属製品）	奈文研	都城発掘調査部（平城）	366
3521F-4	2-(5)-②-1)	平城京左京一条二坊十五坪の調査	奈文研	都城発掘調査部（平城）	367
3521F-5	2-(5)-②-1)	平城京左京二条二坊十五坪の調査	奈文研	都城発掘調査部（平城）	368
3521F-6	2-(5)-②-1)	五十二段北トイレ改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	奈文研	都城発掘調査部（平城）	369
3521F-7	2-(5)-②-1)	史跡　飛鳥寺跡に隣接する県道「橿原神宮東口停車場飛鳥線」の発掘調査	奈文研	都城発掘調査部（藤原）	370
3521F-8	2-(5)-②-1)	史跡　飛鳥寺跡に隣接する県道「橿原神宮東口停車場飛鳥線」の厳重立会調査	奈文研	都城発掘調査部（藤原）	371
3521F-9	2-(5)-②-1)	史跡　飛鳥寺跡に隣接するバイパス水路工事の発掘調査	奈文研	都城発掘調査部（藤原）	372
3521F-10	2-(5)-②-1)	特別史跡藤原宮跡（別所町水路改修）発掘調査	奈文研	都城発掘調査部（藤原）	373

3521F-11	2-(5)-②-1)	特別史跡藤原宮跡（高殿町道路拡幅）発掘調査	奈文研	都城発掘調査部（藤原）	374
3523E	2-(5)-②-3)	被災資料有害物質発生状況調査業務	東文研	保存科学研究センター	375
3531F-1	2-(5)-③-1)	平城宮いざない館詳覧ゾーンにかかる学芸業務および解説案内等業務	奈文研	企画調整部	376
3531F-2	2-(5)-③-1)	古墳・壁画等の複製品を用いた展示活用に関する情報収集・分析業務	奈文研	企画調整部	377
3531F-3	2-(5)-③-1)	特別史跡平城宮跡及び藤原宮跡地内における歴史的環境維持業務	奈文研	研究支援推進部	378

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3112F-1

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
【事業名称】	津山市城西伝統的建造物調査（①-2)）		
【委託者・受託経費】 委託者： 津山市（岡山県） 受託経費：2,500 千円			
【担当部課】	文化遺産部建造物研究室	【事業責任者】	室長　島田敏男
【スタッフ】 島田敏男（建造物研究室長)、大林潤（都城発掘調査部遺構研究室主任研究員)、鈴木智大（都城発掘調査部遺構研究室研究員)、福嶋啓人（都城発掘調査部遺構研究室研究員)、前川歩（都城発掘調査部遺構研究室研究員)、林良彦（客員研究員）			

【年度実績概要】

当調査研究は、29・30 年度の 2 か年事業として受託したものである。

津山市では、旧津山城下町の城西地区について、伝統的建造物群としての保存を検討しており、当調査研究は、そのための基礎調査に位置づけられる。

城西地区は旧津山城下町の西端に位置し、出雲往来沿いのかつて町人地と寺社地からなる。

29 年度には、調査地区の現況把握のため、調査地区全域にわたり、地区内の建造物の悉皆的な調査を行い、1,264 件の敷地それぞれについて、現状の建物の形状・建築時期の把握、写真撮影を行い、調査地区内すべての敷地の状況、敷地内建物をリスト化した。当調査成果は、今後伝統的建造物群としての保存行政にかかる基礎資料として活用される。また、個別建物調査として町家の詳細調査 36 件を行った。

30 年度は、個別建物調査として社寺の詳細調査 14 件を行った。また、地割り痕跡調査および工作物の調査を行った。そして、これら調査成果をもとに、絵図・文書等の資料検討と合わせて、城西地区の形成・変化の歴史をあきらかにした。

以上の調査成果に基づき、城西地区の現況を整理し、城西地区の価値を明らかにした。城西地区は、17 世紀に町割りが開始され、18 世紀初頭に成立した町割りを良く残し、特に出雲往来の沿った、かつての町人地および寺社地は、江戸時代から近代の特徴ある伝統的建造物を良く残し、城下町の商家町および寺町の歴史的風致を良く残し、価値が高いことを明らかにした。また、これら成果に基づき、津山市と協議の上、地区としての保存方策を提案し、報告書を刊行した。

津山市城西　寺町の町並

津山市城西　商家町の町並

【実績値】

個別建物（社寺）調査野帳　60 枚
地割り痕跡調査・道路幅員調査野帳　18 枚
工作物野帳　22 枚
撮影写真　約 2,800 カット

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3112F-2

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
【事業名称】	旧中村家住宅調査研究業務 (①-2))		
【委託者・受託経費】 委託者： 塩尻市（長野県） 受託経費：2,595 千円			
【担当部課】	文化遺産部建造物研究室	【事業責任者】	室長　島田敏男
【スタッフ】 島田敏男（建造物研究室長）、箱崎和久（都城発掘調査部遺構研究室長）、福嶋啓人（都城発掘調査部遺構研究室研究員）			

【年度実績概要】

旧中村家は、塩尻市奈良井宿伝統的建造物群保存地区内に所在し、旧奈良井宿上町に位置する。敷地は街道の北側に面し、街道に面して間口 3 間強の主屋が建ち、間口幅で敷地があり、敷地背面に土蔵が 1 棟建つ。天保 8 年（1837）の大火後の建築と考えられ、天保 14 年（1843）の絵図に「櫛屋利兵衛」とあることから、この時には建物が完成していたと考えられる。戦後、無住となり荒れていたが、昭和 45 年（1970）に公有化され、修理・整備された。このようななか、本調査事業は、旧中村家の価値を明らかにすることを目的として、行ったものである。

調査では、現地調査として実測調査、痕跡調査を行い、併せて資料調査を行って当該建築の変遷過程を明確にし、その価値を明らかにした。

調査の結果、主屋、土蔵ともに 19 世紀中期の建築で、主屋は旧中山道の宿場町における典型的な小規模町家の形態を良く残す点で価値が高いことを明らかにした。さらに、主屋および土蔵の床板に残る色漆の痕跡より、当該建物（主屋 2 階座敷・土蔵 1 階）において櫛の生産（漆塗り）が行われていたことが判明し、かつての奈良井宿において、敷地内において櫛の生産・販売が行われていたことを示す貴重な事例であることを明らかにした。

以上の成果を報告書として刊行した。

旧中村家主屋外観

旧中村家調査風景

【実績値】

調査野帳　34 枚

調査写真　約 1,100 カット

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3112F-3

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
【事業名称】	湯浅町重要建造物調査研究業務 (①-2))		
【委託者・受託経費】 委託者： 湯浅町(和歌山県) 受託経費：2,800 千円			
【担当部課】	文化遺産部建造物研究室	【事業責任者】	室長　島田敏男
【スタッフ】 島田敏男（建造物研究室長)、大林潤（都城発掘調査部遺構研究室主任研究員)、鈴木智大（都城発掘調査部遺構研究室研究員)、福嶋啓人（都城発掘調査部遺構研究室研究員)、前川歩（都城発掘調査部遺構研究室研究員)、林良彦（客員研究員）			

【年度実績概要】

湯浅町は和歌山県中部の海岸線に位置し、古来より港町として発展するとともに、江戸時代以降有田地方の政治経済の中心地となり、醸造の町として名高く、旧市街地は湯浅町湯浅伝統的建造物群保存地区として保存され、国の重要伝統的建造物群保存地区となっている。

本調査事業は、上記保存地区内の主として醸造業者の建造物を調査し、これら建造物の価値の再評価を行うことを目的としたもので、平成 30・31 年度の 2 か年事業である。

調査対象とした家屋は、加納家、太田家、大本紀伊本苑、旧栖原家、北村家の 5 件で、30 年度は、以上 5 件について現地調査を行った。

調査対象とした 5 件のうち、なかでも加納家は、江戸後期の主屋が江戸時代から近代にかけて、拡大発展する経過が明らかになり、現在現役の醸造施設である醸造蔵をはじめとする醸造施設群も江戸時代から近代にかけて拡大発展する経緯を明らかにした。

平成 30 年度の調査成果に基づき、31 年度に報告書を刊行する予定である。

湯浅町加納家外観

湯浅町太田家外観

【実績値】

調査野帳　100 枚

調査写真　約 5,000 カット

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3112F-4

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(1)　新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
【事業名称】	重要文化財綿業会館保存活用計画調査研究業務（①-2)）		
【委託者・受託経費】 委託者：　一般社団法人　日本綿業倶楽部 受託経費：258 千円			
【担当部課】	文化遺産部建造物研究室	【事業責任者】	室長　島田敏男
【スタッフ】 島田敏男（建造物研究室長)、前川歩（都城発掘調査部遺構研究室研究員)、福嶋啓人（都城発掘調査部遺構研究室研究員）			

【年度実績概要】

当事業は、重要文化財綿業会館（大阪府大阪市）の保存活用計画改訂にかかる調査研究である。

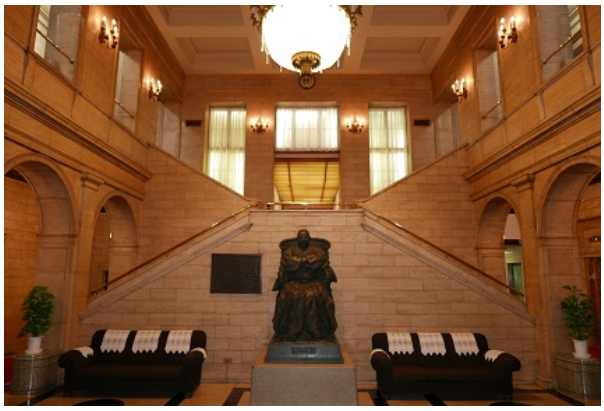
綿業会館は、関西を代表する近現代の事務所建築として、15 年 12 月 25 日に重要文化財に指定されたもので、現在も現役の施設として活用されている。保存と活用を両立すべく、21 年に保存活用計画が策定されているが、再度、その詳細な価値を調査するとともに、その価値に基づき所有者にとって使用し易い管理マニュアルとしても使用し得る保存活用計画とすべく、その改訂作業を行ったものである。さらには、30 年に改正された文化財保護法（30 年 6 月 1 日成立、同 6 月 8 日公布、31 年 4 月 1 日施行）において、保存活用計画が認定計画となるのに伴い、その趣旨に沿った改訂を行うこととなった。

現地調査によって建物内部の造作等の保存状況を調査し、併せて綿業会館所蔵の諸資料の調査を行い、当該建物の建築過程、改造過程、保存状況を確認した。

調査により、改造の変遷を明らかにするとともに、現存する個々の造作材・設備の新旧を明確にした。さらに資料調査等を通して、家具等の什器の新旧も明らかにした。

その上で、改正文化財保護法における保存活用計画に則した内容となるよう、文化庁、大阪府、大阪市と綿密な協議を行い、改訂計画案を作成した。

綿業会館外観



綿業会館一階ロビー

【実績値】

現地野帳　20 枚
設計図等電子化　167 枚
写真　5,800 カット

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3112F-5

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
【事業名称】	藤原京右京九条二・三坊、瀬田遺跡発掘調査による出土文化財の調査・研究及び報告書作成業務（①-2))

【委託者・受託経費】
委託者： 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構
受託経費：5,505 千円

【担当部課】	都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	【事業責任者】	部長　玉田芳英

【スタッフ】
森川実、山本崇（以上、主任研究員)、鈴木智大（遺構研究室研究員)、和田一之輔（考古第一研究室研究員)、石田由紀子、清野陽一（以上、考古第三研究室研究員）

【年度実績概要】

○藤原京右京九条二坊・三坊及び瀬田遺跡の発掘調査報告書の作成業務。発掘調査はポリテクセンター奈良の本館建て替えにともない、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構と受託契約を結んで 2015～2016 年に実施したものである（第 187 次調査)。

藤原京期では、条坊関連遺構（西二坊大路）及び掘立柱建物群を検出した。弥生時代後期末に関しては大型円形周溝墓、方形周溝墓、土坑、溝など多数の遺構を検出し、とりわけ大型円形周溝墓は前方後円墳に起源に関るものとして注目された。遺物には古代の土器に加え、多数の弥生土器と縄文時代後期・晩期の土器、及び縄文時代の石器がある。

これら一連の調査成果の重要性に鑑み、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構と再度受託契約を結んで業務を実施することとしたものである。

瀬田遺跡の大型円形周溝墓（南西から）

・出土文化財の調査・研究

縄文時代～古代の土器及び縄文時代の石器の実測作業・製図（トレース）作業を実施し、遺物観察表等の作成作業を行った。また、検出遺構の実測図の整理作業を進め遺構図の製図・トレース作業を完了させた。

これらの業務と並行しつつ、藤原京右京九条二・三坊における条坊関連遺構や坪内における土地利用のあり方について検討を進めた。また、弥生時代後期末の瀬田遺跡における円形周溝墓の規模・墳形や性格、並びに縄文時代と弥生時代の土器などについて、必要な考古学的研究を実施した。

・報告書作成業務

発掘調査報告書の章立てを検討し、Ⅰ.序言、Ⅱ.調査、Ⅲ.遺構、Ⅳ.遺物、Ⅴ.自然科学分析、Ⅵ.考察、Ⅶ.結語との７章にて報告書の構成案をまとめた。このうち、Ⅲ.遺構は「古代」（藤原京右京九条二・三坊)、「古墳時代」「弥生時代」、「縄文時代」（以上３節は瀬田遺跡）に、Ⅳ.遺物も「瓦」、「古代の土器」、「弥生土器」、「縄文土器」、「縄文時代の石器」等に分節した。上半期に執筆分担を決め、年間を通じて遺構図・遺物実測図の製図・浄書作業、出土土器の復元作業、掲載予定写真の整理作業、原稿執筆等を実施した。

【実績値】
・遺構図作成数（トレース済）　195 点
・土器実測図作成数（トレース済）　408 点
・石器実測図作成数（トレース済）　10 点

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3112F-6

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
【事業名称】	平成 30 年度具志川城跡三の郭毀損箇所詳細記録調査（①-2))		
【委託者・受託経費】 委託者：沖縄県島尻郡久米島町 受託経費：2,992 千円			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	センター長　高妻洋成
【スタッフ】 山口　欧志　（埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室　研究員）			

【年度実績概要】

○本事業は、文化庁「歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業費国庫補助　具志川城跡」を実施する沖縄県島尻郡久米島町からの依頼による受託研究事業である。

本受託研究では、8 月に石積みが崩落し毀損した三の郭西側外壁について、崩落箇所の位置や状況について、三次元デジタルデータを作成するための詳細な記録を行う。この調査研究を通して、グスク遺跡の石垣の正確・迅速・効率的な記録方法を検討する。30 年度の主たる実績は以下の通りである。

1）具志川城跡の石垣の三次元計測

毀損した具志川城跡三の郭南西部の石垣を主たる対象とした（図 1)。またその周囲の石垣についても、今後の具志川城跡をはじめグスクの保存・修復・保護に資するための記録を考える上で重要性が高いため、該当部分も記録対象とした。具体的な調査面積は 3,600 ㎡（約 80m×約 45m）を調査範囲とした。計測方法はドローンを用いて撮影した画像やカメラを 5mほどに伸張する一脚に装着してリモート撮影した画像を SfM-MVS（Structure from Motion and Multi-view Stereo）を用いて三次元モデルを構築する方法を採用した。

図 1　具志川城跡三の郭の石垣毀損状況

図 2　具志川城跡南西～南の石垣の三次元モデル

2）三次元モデルを利用した具志川城跡平面オルソ画像や石垣断面形状図の作成

1）で構築した三次元モデルを解析して、位置情報を与え、オルソ画像を作成した。また平面オルソ画像を GIS（地理情報システム）に格納して、調査対象範囲の平面図を作成した。また、三次元モデルを任意の地点の石垣（報告書中では毀損箇所に隣接する箇所と、城門付近、ならびに遺跡南東部）の断面形状図を作成した。これらにより今後、どの地点の石垣がどのような状況にあるのかを継続的に定量的に検討するための資料を整備することができた。

3）グスク遺跡の石垣の記録方法についての検討

計測のための足場の確保が難しいグスクなどでは、ドローンなどを用いて撮影した画像から SfM-MVS によって三次元モデルを構築する方法が、記録方法の選択肢の 1 つとして検討の価値があることを指摘した。

【実績値】

三次元計測用写真撮影数 4,400 点、調査面積約 3,600 ㎡、遺跡三次元モデル 1 点、平面オルソ画像 1 葉、石垣立面オルソ画像三葉、石垣断面形状図 5 葉、報告書 1 点

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3132F

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(1)　新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
【事業名称】	東大寺東塔復元案作成にかかる調査研究業務（③-2）-7)）

【委託者・受託経費】
委託者：東大寺
受託経費：14,202 千円

【担当部課】	都城発掘調査部遺構研究室	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長　渡邉晃宏

【スタッフ】
箱崎和久（都城発掘調査部遺構研究室長）、馬場基（史料研究室長）、今井晃樹・大林潤・神野恵・廣瀬覚（主任研究員）、前川歩・鈴木智大・福嶋啓人（遺構研究室研究員）、芝康次郎（考古第１研究室研究員）、山本祥隆（史料研究室研究員）、目黒新悟（遺構研究室アソシエイトフェロー）、島田敏男（文化遺産部長）、脇谷草一郎（埋蔵文化財センター主任研究員）、高田祐一（企画調整部文化財情報研究室研究員）

【年度実績概要】

奈良時代創建の東大寺東塔（以下、天平塔）の復元案作成を行う東大寺からの受託研究。文献史料・発掘遺構・出土遺物のほか各種の類例の分析に基づいて復元する。

30 年度は、既往研究の整理を行った上で文献史料の写本調査、東塔礎石の探索と調査、各種類例の分析を行った。その結果、天平塔の高さ、相輪の規模と初重平面が確定し、想定される軒の出、柱径、最上重の規模について一定の復元案を得た。また、天平塔の復元にあたり、奈良時代創建の東大寺金堂（以下、天平金堂）と鎌倉時代再建の東大寺東塔（以下、鎌倉塔）の復元検討も併せて行った。

これらの検討のため所内に「東大寺東塔復元検討会」（以下、所内検討会）を立ち上げ、所内研究員を中心とする検討を進め、30 年度はこれを計７回開催した。また、有識者を招聘した東大寺主催による「東大寺東塔建築復元検討委員会」（以下、親委員会）にて検討成果を発表した（１回）。このほか、出土遺物を実見しながらの検討会を適宜行った。

第６回東大寺東塔復元検討会
（10 月 15 日）

これら検討内容の記録として、所内検討会の内容をまとめた『東大寺東塔復元検討会記録１』（内部資料）と、親委員会の内容をまとめた『東大寺東塔復元検討会記録２』（内部資料）を作成した。また、これらの調査研究報告書を刊行するための準備を進めた。

なお、本研究は 30 年１月から 15 か月計画で開始し、29 年度内に所内検討会１回、親委員会１回を開催している。30 年度の各検討会の議題及び実施日は以下の通り。

・既往研究の整理、発掘調査成果（第２回所内検討会、５月 18 日）
・文献からの高さの検討、古代の塔婆の構造と特徴（第３回所内検討会、６月 25 日）
・伝承のある礎石の検討、相輪の検討（第４回所内検討会、７月 25 日）
・柱径の検討、最上重の規模の検討（第５回所内検討会、８月 30 日）
・軒の検討１、塔身高と相輪高のプロポーションの検討（第６回所内検討会、10 月 15 日）
・第２回～第６回所内検討会までの検討内容のまとめ（第２回親委員会、11 月 21 日）
・組物の検討１、鎌倉塔の検討１（第７回所内検討会、12 月 17 日）
・組物の検討２、鎌倉塔の検討２（第８回所内検討会、31 年１月 24 日）

【実績値】
・東大寺東塔復元検討会：７回（第２回～第８回）
・東大寺東塔建築復元検討委員会：１回（第２回）有識者６人招聘
・論文等数：１件（①）
　① 「古代建築における礎石の柱座径と柱径との関係　東大寺東塔の復元研究１」
　　『奈良文化財研究所紀要 2019』（31 年６月予定）
・報告書等数：３件（②、③、④）
　② 『東大寺東塔復元検討会記録１』（31 年３月）（内部資料）
　③ 『東大寺東塔復元検討会記録２』（31 年３月）（内部資料）
　④ 『東大寺東塔復元検討会記録３』（31 年３月）（内部資料）

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3133F

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
【事業名称】	京都市の文化的景観保存計画策定調査（③-3)）		
【委託者・受託経費】 委託者： 京都市 受託経費：4,777 千円			
【担当部課】	文化遺産部景観研究室	【事業責任者】	室長　中島義晴
【スタッフ】 惠谷浩子（景観研究室研究員)、本間智希（景観研究室アソシエイトフェロー）			

【年度実績概要】

・「京都の文化的景観」に関し、現地調査を計 10 回行った。また、研究会を 1 回実施し、議事録も作成した。

・「北山杉の林業景観」に関し、現地調査を計 15 回行った。31 年 3 月には住民向けの調査報告会を実施した。また、研究会を 1 回開催し、議事録も作成した。

・27 年度から 30 年度にかけて行った「京都中川の林業景観」の調査成果のとりまとめを実施するとともに、報告書の執筆・編集・刊行を行った。

・「京都の文化的景観」、「京都岡崎の文化的景観保存計画書」、「北山杉の林業景観」の調査や研究会議等の実施、また調査報告書の編集のため、京都市等との協議をのべ 16 回行った。

「北山杉の林業景観」研究会の開催

「京都の文化的景観」の調査

【実績値】

調査報告書：1 点
現地調査：25 回
研究会：2 回
調査報告会：1 回
デジタル写真：2,845 点

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3134F

業務実績書(受託事業)

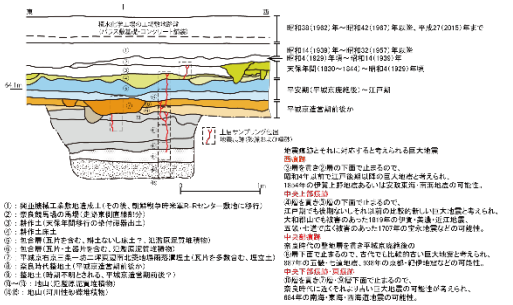
中期計画の項目	2-(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
【事業名称】	考古資料および文献史料からみた過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベースの構築・公開 (③-4) -ア)		
【委託者・受託経費】 委託者： 国立大学法人　東京大学地震研究所 受託経費：6,475 千円			
【担当部課】	埋蔵文化財センター 遺跡・調査技術研究室	【事業責任者】	埋蔵文化財センター長　高妻洋成
【スタッフ】 村田 泰輔（埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室　研究員)、小池 伸彦（埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室　特任研究員）			

【年度実績概要】

○本事業は、科学技術・学術審議会の建議「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画」に基づき、「考古資料および文献資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開」を研究課題として 26 年度から 5 か年計画で進めている。これは「地震・火山噴火予知研究協議会」からの依頼による受託事業であり、ここに設置された「史料・考古部会」は、地震・火山噴火に関する近代的な観測データが整う以前の資・史料を収集・調査・分析・活用し、低頻度で発生する大規模な地震や火山噴火現象等の理解・解明に資する役割を担っている。そのなかで当研究所は、主として災害痕跡の考古・地質学的データの収集とデータベース構築・公開を担当しており、30 年度の主たる実績は以下の通りである。

1)発掘調査報告書のデータ抽出、分析、整理作業

29 年度に引き続き発掘調査データから災害痕跡データの抽出に取り組み、それらの場所、時期、災害類別を進め、データベースの構築を進めた。宮崎県から鹿児島県沿岸部での地震、津波痕跡の追跡と共に、南海トラフ起源地震への対応として、全国での事例を進めている。また当研究所の発掘調査地から検出された地震痕跡を用い、被災時期の特定方法の改善を進めた。精査到達件数については県名の後に括弧付けで以下の通りに付記した。北海道 (59)、青森県 (50)、岩手県 (90)、宮城県 (227)、秋田県 (13)、山形県 (10)、福島県 (25)、茨城県 (48)、栃木県 (48)、群馬県 (203)、埼玉県 (183)、千葉県 (30)、東京都 (12)、神奈川県 (30)、新潟県 (20,730)、富山県 (24)、石川県 (13)、福井県 (23)、山梨県 (50)、長野県 (30)、岐阜県 (19)、静岡県 (199)、愛知県 (153)、三重県 (15)、滋賀県 (218)、京都府 (1,330)、大阪府 (1,730)、兵庫県 (64)、奈良県 (2,041)、和歌山県 (1,207)、鳥取県 (205)、島根県 (13)、岡山県 (6)、広島県 (40)、山口県 (6)、徳島県 (25)、香川県 (34)、愛媛県 (90)、高知県 (13)、福岡県 (1,602)、佐賀県 (12)、長崎県 (10)、熊本県 (2,810)、大分県 (1,308) 宮崎県 (1,021)、鹿児島県 (1,277)、沖縄県 (10)



発掘調査地で検出された地震痕跡に基づく被災時期の特定研究事例

2)データベース入力

データ量の増加と共に入力項目の整理が 29 年度に引き続き必要となり、各項目の再定義（文字情報、画像情報、ID化情報等）を行った。これまでのデータをこの定義づけに従い更新し、データベース化を進めている。

3)災害痕跡データベース構築とＧＩＳシステムの開発

膨大化するデータに対応するデータベース構造や検索システムの更新を進めると共に、外部協力機関からのデータ入力を念頭に、データベースのクラウド化、入力システムの開発を進めた。今後も国土地理院情報検索システム、産業総合研究所地質情報システムとの連動のための地質データの入力および表示方法の開発を継続的に進める。

4)発掘調査現場における災害痕跡の調査、試料採取・分析

平城宮・京、藤原宮（以上、奈良県）を中心に現地調査を行い、検出された地震痕跡等について調査を行った。また 29 年度行った遺跡群については報告書執筆を行った。

5)学会・シンポジウムでの情報発信

地震史料シンポジウムでの発表（12 月 13 日)。

災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画成果報告シンポジウム成果報告（31 年 3 月 14～16 日)。

【実績値】

論文 3 点、書籍 1 点、刊行物 1 点、報告書 2 点

論文『奈良文化財研究所紀要』「藤原宮大極殿院の調査」「左京二条十五坪の調査」「平城宮第一次大極殿院南門および下層遺構の積土構造」

書籍「発掘された歴史的地震。火山災害痕跡データベース」『デジタル技術で魅せる文化財　奈文研と ICT』4 月 15 日

刊行物『現場でみつかる地震災害痕跡（携帯版)』31 年 3 月 28 日

報告書『台の下貝塚発掘調査報告書』『研究紀要 37』「金井東浦遺跡出土遺物の X 線 CT 画像解析」31 年 3 月 1 日

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3135F

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
【事業名称】	平成 30 年度水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業 (③-5))		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：4,463 千円			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	センター長　高妻洋成
【スタッフ】 清野孝之（都城発掘調査部考古第３研究室長)、金田明大（埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室長）			

【年度実績概要】

・水中遺跡調査検討委員会協力者会議を４回開催した

第１回 7 月 12 日　文化庁
第２回 10 月 16 日　奈文研
第３回 12 月 18～19 日　徳之島
第４回 31 年 3 月１～２日　松浦市鷹島

・水中遺跡保護行政の課題･問題点を明らかにし、水中遺跡保護行政の推進のために必要となる事項を探るため、研究集会「水中遺跡保護行政の実際」を福岡県大野城市「心のふるさと館にて開催した。

・『水中遺跡調査のてびき』（仮称）を作成するためのニーズとシーズを抽出するため、全都道府県に水中遺跡の調査、研究及び保存に関するアンケート調査を行った。

協力者会議による鷹島海底遺跡 1 号沈船の埋め戻し作業の視察

【実績値】

・水中遺跡調査検討委員会協力者会議の開催：４回
・研究集会「水中遺跡保護行政の実際」開催：出席者 55 人
・アンケート回収件数：43 都道府県、1,044 市町村
・研究集会要旨集：１件
・研究集会ポスター発表リーフレット：１件

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3213F

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
【事業名称】	国道 163 号木津東バイパス事業に伴う岡田国遺跡埋蔵文化財発掘調査に係る年輪年代測定業務(①-3))		
【委託者・受託経費】 委託者： 公益財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター 受託経費：526 千円			
【担当部課】	埋蔵文化財センター年代学研究室	【事業責任者】	埋蔵文化財センター長兼年代学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 星野安治（埋蔵文化財センター主任研究員）			

【年度実績概要】

・京都府岡田国遺跡において出土した奈良時代中頃と考えられている井戸の井戸枠材について，伐採年代を推定すべく年輪年代調査を行った。

・岡田国遺跡は，恭仁京の範囲内と考えられている。恭仁京内における年代測定事例は少なく，本受託調査・研究での成果は貴重な情報になり得ると期待される。

・調査は，京都府埋蔵文化財調査研究センターに保管されている岡田国遺跡出土井戸枠材の木口面，もしくは柾目面を接写撮影し，撮影した画像を用いて年輪幅を計測する方法を用いた。

・これまでに，岡田国遺跡出土井戸枠材 17 点について年輪幅の計測をおこなった。今後，得られた年輪曲線のクロスデーティングを進める予定である。

岡田国遺跡出土井戸枠材の年輪計測画面

【実績値】
調査点数：17 点

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3214F

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
【事業名称】	波怒棄館遺跡および台の下貝塚出土の動物遺存体の分析（①-4)）		
【委託者・受託経費】 委託者： 気仙沼市（宮城県） 受託経費：5,206 千円			
【担当部課】	埋蔵文化財センター環境考古学研究室	【事業責任者】	主任研究員　山崎健
【スタッフ】 松崎哲也（環境考古学研究室アソシエイトフェロー）			

【年度実績概要】

○宮城県気仙沼市に所在する波怒棄館遺跡（縄文時代前期中葉～中期前葉）と台の下貝塚（縄文時代中期後葉～後期前葉）から出土した動物遺存体の分析を行った。30 年度は 1㎜ メッシュ資料の分析を行い、波怒棄館遺跡は計 6,020 点、台の下貝塚は計 33,014 点を同定した。

○波怒棄館遺跡 1㎜ メッシュ資料の同定結果
貝類はムラサキインコが最も多く、次いでイガイ、ニシキウズガイ科、アサリ、チリハギガイ科、陸産貝類などが含まれていた。魚類はニシン科が最も多く、次いでカタクチイワシ、サバ属、アイナメ属、アジ科、ウミタナゴ科、サケ属などが含まれていた。哺乳類はネズミ科を同定した。

○台の下貝塚 1㎜ メッシュ資料の同定結果
貝類はムラサキインコが最も多く、次いでイガイ、アサリ、ニシキウズガイ科、などが含まれていた。魚類はニシン科が最も多く、次いでカタクチイワシ、サバ属、アジ科、サケ科、ハゼ科、アイナメ属、カサゴ亜目などが多く見られた。鳥類はスズメ目を同定した。哺乳類はネズミ科、コウモリ目、ニホンリス、ムササビを同定した。その他に爬虫類ではヘビ亜目、両生類ではカエル目が多数含まれていた。

台の下貝塚から出土したムラサキインコの破片

【実績値】
分析点数：39,034 点

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 3215E

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
【事業名称】	美術工芸品保存修理用具・原材料調査事業 (②－5))		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：９８０千円			
【担当部課】	保存科学研究センター	【事業責任者】	修復材料研究室長　早川典子
【スタッフ】 菊池理予（無形文化遺産部主任研究員)、江村知子（文化財情報資料部文化財アーカイブ研究室長)、岡部迪子（研究補佐員)			

【年度実績概要】

本事業では美術工芸品の修理材料及びその生産・製造に用いる用具の原材料について、それらを安定的に供給し続ける上で見られる現況の課題（生産量・流通体制・品質など）の調査を行い、調査結果に基づき具体的な支援策を実施するための枠組み作成を検討する。30 年度は、研究組織の立ち上げのための打ち合わせを行った上で、美術工芸品の修理に使用する原材料・用具のうち、冬季に作業を行う楮・トロロアオイ・なめし革について調査を行った。

・楮　高知県立追手前高等学校吾北分校（高知県吾川郡いの町）
　（高知県産業振興推進部・種田氏、いの町吾北総合支所・田岡氏らより聞き取り調査）
・楮　尾崎製紙所（高知県吾川郡仁淀川町）
・楮　純信和紙工房（高知県土佐市）
・楮　高知県立紙産業技術センター（高知県吾川郡いの町）
調査日：31 年 3 月 4～6 日
調査担当者：　江渕栄貫、岡岩太郎、福西正行（以上、伝統技術伝承者協会)、山本記子（国宝修理装潢師連盟)、地主智彦、佐藤健治、伊藤久美（以上 、文化庁)、菊池理予、岡部迪子（以上、当研究所)

・楮　那須楮生産者・相馬氏（茨城県常陸大子町）
・楮　東秩父村和紙の里（埼玉県秩父郡東秩父村御堂）
・トロロアオイ　新ひたち野農協（茨城県小美玉市）
調査日：31 年 3 月 10～11 日
調査担当者：江渕栄貫、大菅直、福西正行、(以上、伝統技術伝承者協会)、宇都宮正紀、藤井良昭（以上、国宝修理装潢師連盟)、地主智彦、藤田励男、髙梨真行、平出真宣、伊藤久美、高橋詩織（以上、 文化庁)、菊池理予、岡部迪子（以上、当研究所)

楮生産者の現地調査

・なめし革　新敏製革所（兵庫県姫路市）
・なめし革　皮革史研究家・林氏（兵庫県姫路市）
調査日：31 年 3 月 20 日
調査担当者：　西岡文夫（日本甲冑武具研究保存会)、地主智彦、伊東哲夫、多比羅菜美子、小林彩子、伊藤久美（以上、文化庁)、荒木臣紀（東京国立博物館)、前原恵美、宇髙健太郎、菊池理予、岡部迪子（以上、当研究所)

【実績値】

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3226F-1

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
【事業名称】	松帆銅鐸・舌の調査研究 (②-6))		
【委託者・受託経費】 委託者： 南あわじ市 (兵庫県) 受託経費：1,056 千円			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長　髙妻洋成
【スタッフ】 田村朋美 (都城発掘調査部研究員、埋蔵文化財センター研究員 (併任))、村田泰輔 (埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室研究員)、柳田明進 (埋蔵文化財センター保存修復科学研究室研究員)、難波洋三 (埋蔵文化財センター客員研究員)			

【年度実績概要】

○本事業の対象は、27 年に南あわじ市で発見された銅鐸および舌である。本資料は、舌を伴う点やこれらを吊り下げる紐が残存する点など、銅鐸の具体的な使用方法や埋納年代を知る上で非常に重要である。30 年度は、舌 7 点について、一連の保存処理を実施した。

1) 保存処理の一環として、舌 7 点について、クリーニング作業を実施し、表面に付着している土粒子などを除去した。
2) 保存処理の一環として、ベンゾトリアゾールを含むエタノールに浸漬し、舌 7 点の防錆処理を実施した。
3) 保存処理の一環として、舌 7 点のアクリル樹脂による強化処置を実施した。
4) 分析試料の採取にともなう欠損箇所をエポキシ樹脂で充填するとともに、補彩を施した。
5) 舌 7 点の使用痕の状態を記録するため、表面状態の写真撮影および顕微鏡観察を実施した。
6) 保存処理終了時の状態を写真に記録した。

松帆銅鐸舌のクリーニングの様子

【実績値】

○事業報告書：1 件

『平成 30 年度　松帆銅鐸・舌の保存処理に関する報告書』31 年 3 月

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3226F-2

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
【事業名称】	群馬県金井下新田遺跡出土ガラス製遺物の材質調査（②-6))

【委託者・受託経費】
委託者： 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
受託経費：143 千円

【担当部課】	埋蔵文化財センター保存修復科学研究室	【事業責任者】	室長　髙妻洋成

【スタッフ】
田村朋美（都城発掘調査部研究員、埋蔵文化財センター研究員（併任))

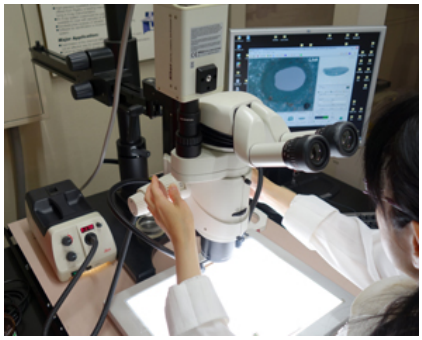
【年度実績概要】

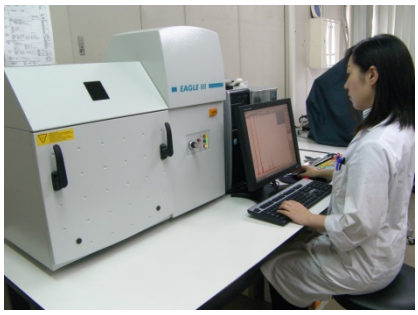
○本事業の対象は、金井下新田遺跡から出土したガラス製遺物 16 点である。これらのガラス製遺物の製作技法、材質的特徴および着色剤について明らかにするため、各種の自然科学的調査を実施した。

1) 製作技法を解明するため、顕微鏡観察を実施した。

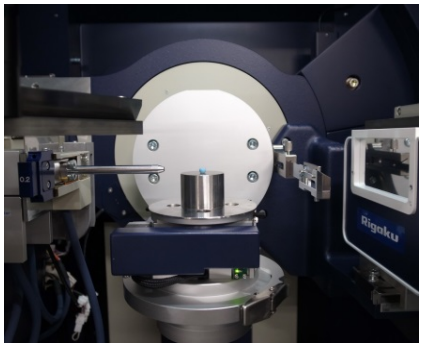
2) ガラス製遺物の主要な構成成分とそれらのおおよその含有量を知るために蛍光Ｘ線分析を実施した。本調査ではエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（エダックス社製 ＥＡＧＬＥⅢ）を用いた。測定にあたっては、新鮮な破断面など風化の影響ができるだけ少ない箇所を選択的に測定した。測定結果は、測定資料と近似する濃度既知のガラス標準試料を用いて補正した理論補正法（Fundamental Parameter method、以下ではＦＰ法）により、検出した元素の酸化物の合計が 100%になるように規格化した。
励起用Ｘ線源は Rh 管球、管電圧は 20 ｋＶ、管電流は 200 μＡ、Ｘ線照射径は 112 μｍ、計数時間は 300 秒とした。測定は真空中で実施した。

3) ガラス中には着色剤として添加されたと考えられる結晶物質が含まれることがある。このようなガラス中の結晶物質の同定には、Ｘ線回折分析法を利用した。測定に用いた装置はリガク社製 SmartLab である。励起用対陰極は銅(Ｃｕ)、管電圧は40 ｋＶ、管電流は30 μＡ、スキャンスピードは1.0008 (deg./min.)、スキャン範囲は 50.000-89.9400 (deg.)であった。


顕微鏡観察



蛍光Ｘ線分析



Ｘ線回折分析

【実績値】
○事業報告書：1 件
『群馬県金井下新田遺跡出土ガラス製遺物の材質調査報告書』31 年 2 月

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3227F

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
【事業名称】	平成 30 年度　国史跡ガランドヤ古墳における運用手法の検討及び墳丘復元法検討業務（②-7)）

【委託者・受託経費】
委託者：　日田市（大分県）
受託経費：330 千円

【担当部課】	埋蔵文化財センター保存修復科学研究室	【事業責任者】	埋蔵文化財センター長　高妻洋成

【スタッフ】
脇谷草一郎（埋蔵文化財センター主任研究員）

【年度実績概要】

大分県日田市に位置する史跡ガランドヤ古墳１号墳は、装飾が描かれた奥壁などの石材表層で剥離や析出物が認められる。このような装飾劣化の主たる要因は石材表面における結露の発生と考えられることから、装飾の保存のために、26 年度に石室保護施設を設置し、施設内部で結露を抑制する環境の制御法について検討してきた。28 年度から 29 年度にかけては、夏期の結露発生を抑制するため、石室内でヒーティングを行うとともに保護施設内部において除湿器を稼働させ、外気温湿度の季節変化に応じた施設内空気の換気を行い石室内部における結露抑制をはかった。30 年度は引き続き石室周辺環境のモニタリングを行いつつ、石室内部における結露を抑制する適切な環境の制御を実施した。

防水シートで保護されたガランドヤ２号墳

また、墳丘封土が部分的に残存するガランドヤ２号墳については、墳丘を防水シートで覆った状態で石室および墳丘の保存が図られている。30 年度は継続して石室石材の結露状況および劣化状況を調査するとともに、石室内部の温熱環境調査を実施した。その結果、１号墳とは異なり、墳丘の保護のためには石室内部を乾燥することは不適と考えられ、石室内部が通年結露した状況を再現する仮設保護施設の設計に着手した。さらに、保護施設内部において墳丘土壌を保存するため、墳丘土壌を最適な含水状態に維持するシステムの開発に着手した。

【実績値】
事業報告書：1 件
①『国史跡ガランドヤ古墳における運用手法の検討及び墳丘復元法検討業務』31 年 3 月
研究発表：２件
①脇谷草一郎、小椋大輔、高妻洋成：遺跡保存のための環境管理　－史跡ガランドヤ古墳１号墳の保存と活用を目的とした環境設計に関する研究－、地盤工学の知見に基づく歴史的地盤遺跡の保全と活用に関する研究委員会講習会、於キャンパスポートプラザ大阪、31 年 9 月 12 日、2018
②脇谷草一郎、小椋大輔、高妻洋成：結露抑制を目的とした装飾古墳保護施設の環境設計、日本建築学会環境工学委員会　第 48 回熱シンポジウム「湿気の仕組み・制御・評価」、於京都大学、31 年 10 月 13 日－14 日、2018

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3228F

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
【事業名称】	法隆寺若草伽藍跡西方の調査出土壁画片の調査 (②-8))		
【委託者・受託経費】 委託者： 斑鳩町教育委員会 受託経費：267 千円			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長　髙妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎 (埋蔵文化財センター主任研究員)、田村朋美 (都城発掘調査部研究員、埋蔵文化財センター研究員 (併任))、柳田明進 (保存修復科学研究室研究員)、中村一郎 (企画調整部写真室専門職員)			

【年度実績概要】

○28、29 年度に引き続き、奈良県斑鳩町所在の法隆寺若草伽藍跡西方出土、壁画片 30 点の材料調査を実施した。

○これらの壁画片は法隆寺創建時の若草伽藍に用いられた壁画であり、火災を受けたことで当初の色調が変色した状態である。

○資料の現状を記録するため、写真室において写真撮影を実施した。

○調査資料 30 点について光学顕微鏡による観察、X 線透過撮影、赤外線写真の撮影を実施し、下地や彩色層の状態などの壁画の層構造を中心に観察した。すべての壁画片は表層、中層、最下層からなる３層を有し、最下層では礫を含むモルタルであることが観察された。

○壁画資料の蛍光 X 線分析および X 線回折分析を実施し、下地層、彩色部に用いられた材料について検討した。その結果、白色の下地層ではカルシウムが明瞭に含まれている結果は得られず、アルミニウム、ケイ素が検出されており、下地層では白土が使用された可能性が示唆された。また、赤色部では蛍光 X 線分析から鉄が顕著に検出されるとともに、X 線回折において赤鉄鉱が検出されておりベンガラが顔料として使用されていると考えられる。

壁画片の蛍光Ｘ線分析の様子

【実績値】

事業報告書：1 件

　　『法隆寺若草伽藍跡西方の調査出土壁画片の調査報告』31 年 3 月

調査資料点数：30 点

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 3230E-1

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務（②－10）-ｱ))		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：３７，３６４千円			
【担当部課】	保存科学研究センター	【事業責任者】	センター長　佐野千絵
【スタッフ】 早川泰弘（副センター長）、吉田直人（前保存環境研究室長）、犬塚将英（分析科学研究室長）、佐藤嘉則（生物科学研究室長）、朽津信明（修復計画研究室長）、早川典子（修復材料研究室長）ほか			

【年度実績概要】

国宝高松塚古墳壁画の恒久的な保存方針に基づき、壁画の修理、修理環境の保全及び壁画の保存・活用に係る調査・研究業務を実施した。

○壁画の修理内容及び修理環境の保全に関連する事項

・壁画の修理方針や内容に関する科学的・学術的助言

壁画表面のクリーニングを行うため、粗鬆化した漆喰部分の強化方法を検討した。古墳壁画の保存活用に関する検討会で膠の使用が確定したため、その事前試験、現場での協議を実施した。また、今後の保存方法についての協議を重ねた。

・高松塚古墳壁画恒久保存対策調査事業の生物調査報告書の出版に向けた編集作業を行った。

・修理施設内の温湿度・生物等の調査

高松塚古墳壁画修理施設修理作業室の温湿度モニタリングを実施した。温度は20～22℃で推移、相対湿度は夏季に若干高めであったが、期間を通じて概ね50%台を維持した。また、施設の空調制御運用法について検討した。

酵素処置作業

高松塚古墳壁画仮設修理施設の歩行性昆虫調査及び除塵清掃を、第1回目の調査（5月10日）、第2回目（8月18日）、第3回目（11月16日）、第4回目及び除塵清掃（31年2月1日）で実施した（委託先：イカリ消毒株式会社）。

高松塚古墳壁画仮設修理施設の浮遊菌等調査を、第1回目（9月14日）、第2回目（31年1月11日）で実施した（委託先：NPO法人カビ相談センター）。

○壁画の保存・活用に関連する事項

・壁画面の状態調査及び状態図の作成について

修理施設に定期的に修理施設で文化庁・装潢師連盟と研究協議を行った。また修理材料についての調査研究を実施した。これらに資するため、高句麗古墳の視察を行った（10月27日～11月1日）。

・他の古墳壁画にかかる事項の調査研究

史跡屋形古墳群、史跡日岡古墳において保存環境に関する助言を行った。

また、他の装飾古墳の微生物と藻類の遺伝子解析研究を進めた。

○その他

・奈良文化財研究所と共同して、高松塚古墳壁画の材料に関する分析調査を継続的に実施した。またテラヘルツ分光分析により、下地を形成している漆喰層の状態の調査を行った。

・30年度4回行われた国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設（国営飛鳥歴史公園内）の一般公開に際して、延べ18名を派遣し、立会い説明等を行った（5月19～25日、7月21～27日、9月22～28日、31年1月19～25日）。

・古墳壁画保存関連の事業全般について情報共有を行い、効率的で正確な作業を行うために、6月1日、31年2月6日の2回にわたり、奈良文化財研究所と古墳壁画保存対策プロジェクトチーム会議を開催した。

・7月17日、31年3月22日に開催された文化庁の「古墳壁画の保存活用に関する検討会」（第24回、25回）に、奈良文化財研究所とともに事務局として出席した。

【実績値】

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 3230E-2

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務（②－10）-7))		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：１９，６７８千円			
【担当部課】	保存科学研究センター	【事業責任者】	センター長　佐野千絵
【スタッフ】 早川泰弘（副センター長）、吉田直人（前保存環境研究室長）、犬塚将英（分析科学研究室長）、佐藤嘉則（生物化学研究室長）、朽津信明（修復計画研究室長）、早川典子（修復材料研究室長）ほか			

【年度実績概要】

特別史跡キトラ古墳の取り外した壁画の保存修復措置に係る資料整備、古墳・壁画の保存・活用に係る調査・研究の業務を実施した。

○壁画の保存修復措置に関する事項

・最適な保存処置方法の検討

壁画の集中メンテナンスを四神の館で5回行った（6月25～29日、7月9～13日、8月27～31日、10月29日～11月2日、31年3月25～29日）。壁画は概ね安定していたが、再構成を行っていた高松塚古墳壁画修理施設との環境設定の差異が若干あるため、装潢師連盟と協力し、適宜、剥落どめ及びクリーニングを行い、安定化をはかった。

・これまでの修理記録についてデータベースの作成を行った。

・保存管理に最適な設備環境の検討

壁画の保管及び展示公開を行っている「四神の館」において、環境調査、生物清掃状況調査及び改善に協力した。

・材料調査と保存収縮処置方法の検討

奈良文化財研究所との共同により、キトラ古墳の材料に関する分析調査を継続的に実施している。30年度は泥に覆われた部分の下にあると推定される画像についてX線による撮影検討を行い、「辰」「巳」「申」の撮影を行った。

・他の古墳壁画にかかる事項の調査研究

高松塚古墳壁画の調査と連携して、効率的に実施した。

【実績値】

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3230F-1

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳の保存・活用及びキトラ古墳壁画保存管理施設の管理・運営業務（②-10）-ｱ))

【委託者・受託経費】
委託者：文化庁
受託経費：85,007 千円

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	センター長　高妻洋成

【スタッフ】
玉田芳英（都城発掘調査部長）、石橋茂登（飛鳥資料館学芸室長）

【年度実績概要】
・壁画保存管理施設に研究員、アソシエイトフェローおよび事務補佐員が常駐し、施設の管理・運営業務を適切に行った。
・壁画の安定した保存管理を行うため、壁画管理室、展示室及び外気の温湿度を記録し、適切な温湿度管理を行った。また、害虫トラップを設置し、害虫による被害の予防に努めた。展示室内展示ケースの空気質環境の改善を行い、遺物を展示できる環境に移行させた。
・キトラ古墳壁画の一般公開において、チラシ、ポスター、パンフレットの作成、展示室における出土遺物の企画展示、移動式プラネタリウムの設置、見学者の理解を進めるための壁画の解説映像の制作と放映、監視員の配置を行った。
・壁画の非公開時においては、出土遺物の企画展示、解説パネルの設置、監視員の配置を行った。
・キトラ古墳壁画の写真記録を行った。
・キトラ古墳壁画乾拓板および高松塚古墳壁画乾拓板を用いて乾拓体験およびキトラ古墳現地見学会を４回行った。

壁画公開時の移動式プラネタリウム

【実績値】
・キトラ古墳壁画の公開
　第７回：公開期間　5 月 19 日～6 月 17 日　　参加人数　7,304 人
　第８回：公開期間　7 月 21 日～8 月 18 日　　参加人数　6,406 人
　第９回：公開期間　9 月 22 日～10 月 21 日　　参加人数　9,196 人
　第 10 回：公開期間　31 年 1 月 19 日～2 月 17 日　参加人数　6,370 人
・壁画非公開時の展示企画
　５回
・キトラ古墳現地見学会及び乾拓体験
　5 月 22 日　16 人
　8 月 3 日　10 人
　10 月 9 日　15 人
　31 年 2 月 1 日　10 人
・害虫トラップ調査：年 10 回、35 か所
・空中カビ及び付着カビ調査：8 月 21 日及び 31 年 1 月 11 日
・除塵清掃：31 年 2 月 22 日

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3230F-2

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2－(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務（②-10）-ｱ)		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：60,761 千円			
【担当部課】	都城発掘調査部、文化遺産部遺跡整備研究室、飛鳥資料館、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室	【事業責任者】	埋蔵文化財センター長　高妻洋成
【スタッフ】 玉田芳英（都城発掘調査部長）、内田和伸（文化遺産部遺跡整備研究室長）、石橋茂登（飛鳥資料館学芸室長）、脇谷草一郎（埋蔵文化財センター主任研究員）			

【年度実績概要】

・脆弱化した石材の強化処置の有効性を検討するため、凝灰岩試料の引張強度試験を行い、基礎データを収集した。
・床材の拘束兼移動用フレームのモックアップを作製した。
・石室目地漆喰の安定化処置を行い、収蔵および展示のための台を作製した。
・高松塚古墳壁画の状態を記録するため、可視光線、赤外線及び紫外線を用いたデジタルスキャニングを実施した。
・壁画の漆喰層の状態を把握するため、テラヘルツ波イメージングによる調査を行った。
・高松塚古墳壁画に対して安全にかつ精度の高い分析を行うためのＸ線回折装置の開発研究を行った。
・これまでに得られた蛍光Ｘ線分析の結果をとりまとめ、報告書の編集を行った。
・高松塚古墳壁画の保存・活用に資するため、国内においてはガランドヤ古墳の保存環境に関する調査研究を行うとともに、韓国の陵山里古墳群出土壁画等の調査を行った。

高松塚古墳壁画の紫外線スキャニング

【実績値】

・床石の拘束及び移動用フレームのモックアップ作製：１件
・高松塚古墳壁画の経年変化記録撮影：11 件
・デジタルアーカイブスキャニング：可視光 11 件、赤外線 11 件、紫外線 3 件
・テラヘルツ波イメージング：４件
・高松塚古墳壁画修理施設一般公開派遣研究員数：のべ 28 人

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3230F-3

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
【事業名称】	井寺古墳の被害状況調査業務		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：996 千円			
【担当部課】	埋蔵文化財センター・都城発掘調査部・企画調整部	【事業責任者】	埋蔵文化財センター長　髙妻洋成
【スタッフ】 金田明大（埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室長）、林正憲（都城発掘調査部主任研究員）、中村一郎（企画調整部専門職員）			

【年度実績概要】

・井寺古墳石室内部の詳細な写真撮影を行い、被害状況を記録した。
・石室内部の三次元計測を行い、三次元画像データを取得した。
・羨道部石材の変位により生じた間隙から構築石材裏面の状況をファイバースコープにより観察し、被害状況を記録した。
・地中レーダー探査及び電気探査を行い、墳丘及び石室の構造と変形を把握した。
・石室内の保存環境を把握するため、温湿度データロガを石室内、仮設保護施設及び外部に設置し、モニタリング調査を開始した。

井寺古墳の羨道部石材裏面のファイバースコープ調査
積石の破壊と裏込めの土の流出が認められる。

【実績値】

石室内部の詳細な写真撮影記録：1 件
石室内部の三次元形状記録：1 件
羨道部石材裏面のファイバースコープ観察記録：1 件
地中レーダー探査：1 件
電気探査：1 件

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3230F-4

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
【事業名称】	大規模地震により被災した玉名地域にある凝灰岩で構築された古墳石室等の被害状況並びに保存環境調査業務		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：984 千円			
【担当部課】	埋蔵文化財センター・都城発掘調査部・企画調整部	【事業責任者】	埋蔵文化財センター長　髙妻洋成
【スタッフ】 金田明大（埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室長）、脇谷草一郎（埋蔵文化財センター主任研究員）、林正憲（都城発掘調査部主任研究員）			

【年度実績概要】

・和水町の江田船山古墳の家形石棺及び塚坊主古墳の保護施設内の石室の地震による被害状況をコンパクトデジタルカメラ（オリンパス社製 STYLUS TG-4 TOUGH）を用いて詳細に撮影した。撮影データは別添の DVD に記録、保存した。

・和水町の江田船山古墳の家形石棺及び塚坊主古墳の保護施設内の石室の地震による被害状況を撮影したデータを用いて、SfM/MVS により 3 次元画像を構成した。それぞれの 3 次元画像は DVD に記録、保存した。

・玉名市の永安寺東古墳、和水町の江田船山古墳及び塚坊主古墳の石室内の保存環境を把握するため、石室内、保護施設内及び屋外に温湿度データロガを設置し、モニタリング調査を開始した。

・江田船山古墳の家形石棺は３１年１月３日の地震により石棺側壁全体を横断する亀裂が生じており、現状を維持できなくなる恐れがあった。石棺のこれ以上の崩壊を防ぎ、石棺の保護を図るための調査研究を継続実施するために、応急処置として土嚢を用いた支保工を実施した。

塚坊主古墳石室の被害状況調査

【実績値】

・詳細な被害状況の撮影記録：2 件（江田船山古墳、塚坊主古墳）

・三次元計測：2 件（江田船山古墳、塚坊主古墳）

・土嚢積みによる応急処置工事：１件（江田船山古墳）

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 3311E-1

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
【事業名称】	文化遺産国際協力コンソーシアム事業（①－1）－ｱ))		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：４４，４３６千円			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長　中山俊介
【スタッフ】 中野照男（事務局長・客員研究員）、松保小夜子、牧野真理子、五嶋千雪（以上、アソシエイトフェロー）、杉田菜緒子（前事務補佐員）			

【年度実績概要】

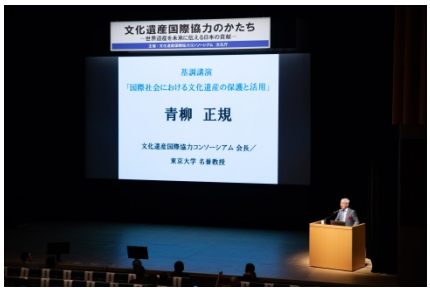
文化遺産国際協力に係る諸課題について議論するとともに、関係機関との連携を図るために会議を開催した。文化遺産保護に関する国際協力の活動を広報するため、研究会やシンポジウムを開催するとともに、コンソーシアム公式ウェブサイトを通して文化遺産に関する情報を発信したほか、活動紹介のための小冊子を制作した。また、モンゴルにおいて国際協力相手国調査を実施した。

Ⅰ．コンソーシアムの会議の開催

・運営委員会を 2 回開催し、活動方針等を協議した。31 年 3 月には活動報告のための総会を開催した。
・企画分科会を 4 回、東南アジア・南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会、欧州分科会、アフリカ分科会、中南米分科会を各 2 回ずつ、計 16 回開催した。
・大洋州地域における文化遺産の現況についての情報共有及び議論を行うため、大洋州ワーキンググループを開催した。

Ⅱ．情報収集と情報発信

・コンソーシアム公式ウェブサイトで文化遺産国際協力に関わる活動を広く取り上げた。
・研究会「諸外国における文化遺産保護の支援と協力を知る・語る」（ワークショップ）、「文化遺産と SDGs」を開催した。
・シンポジウム「文化遺産国際協力のかたち―世界遺産を未来に伝える日本の貢献―」を開催した（文化庁と共催）。
・特別講演会「文化遺産と SDGs を考える」を開催した。
・会員向けのメールニュース（コンソーシアムイベント告知、国内外文化遺産関連イベントの案内等）を配信した。



シンポジウムの様子（基調講演）

Ⅲ．文化遺産国際協力の推進に資する調査

・モンゴルに実地調査団を派遣し、モンゴルの文化遺産を巡る現状を調査した。

【実績値】

総会の開催：1 回、運営委員会の開催：2 回、分科会の開催：(企画分科会 4 回、東南アジア・南アジア分科会 2 回、西アジア分科会 2 回、東アジア・中央アジア分科会 2 回、欧州分科会 2 回、アフリカ分科会 2 回、中南米分科会 2 回)合計 16 回、研究会の開催：2 回、シンポジウムの開催：1 回、特別講演会の開催：1 回、大洋州ワーキンググループ：1 回

（成果物ドキュメント名）

①パンフレット『文化遺産国際協力コンソーシアム』(日英併記：2,000 部、9 月刊行)
②報告書『諸外国における文化遺産保護の支援と協力を知る・語る』(日本語版：300 部、31 年 3 月刊行)
③報告書『文化遺産と SDG s』(日本語版：300 部、31 年 3 月刊行)
④報告書『文化遺産国際協力のかたち―世界遺産を未来に伝える日本の貢献―』(日本語版：300 部、31 年 3 月刊行)
⑤報告書『文化遺産国際協力コンソーシアム平成 30 年度協力相手国調査　モンゴル国調査報告書』(日本語版：300 部、31 年 3 月刊行)
⑥小冊子『文化遺産の国際協力』(日英併記：1,000 部、31 年 3 月刊行)

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 3311E-2

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
【事業名称】	世界文化遺産の遺産影響評価に関する調査研究事業（①－1）－ｱ))		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：５，１４８千円			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	国際情報研究室長　西和彦
【スタッフ】 二神葉子（文化財情報資料部文化財情報研究室長）、境野飛鳥（アソシエイトフェロー）			

【年度実績概要】

本事業の目的は、近年世界遺産委員会やイコモス等による勧告で求められることが多くなってきている遺産影響評価について、国内外の世界遺産における取組の現状について情報収集・ 分析し、日本国内における世界文化遺産や暫定一覧表に記載されている文化遺産に適用可能な遺産影響評価の方法とその評価書の内容について研究し、参考指針を作成することである。

作成された参考指針及び事業報告書は、開発事業等による世界文化遺産の顕著な普遍的価値への負の影響の予防、あるいはその影響を許容されうる規模や内容の軽減等、世界文化遺産の適切な保存・管理に資するよう、地方自治体の担当者にも共有し、各地方自治体において参考指針を活用して遺産影響評価が実施されることを目的としている。

当該調査研究事業の一環として、以下のアンケート調査、ヒアリング調査、国際会議を実施した。

・アンケート調査：国内の世界文化遺産を有する自治体（都道府県及び市区町村、すでに推薦書を世界遺産委員会に対して提出している資産を含む）に対し、遺産影響評価に対する認識、取組状況、課題等についてアンケート調査を実施。

・ヒアリング調査：国内の世界文化遺産を有する自治体のうち、先進的な取り組みを行っていると思われる岩手県（平泉―仏国土（浄土）を表す建築・ 庭園及び考古学的遺跡群―）及び福岡県（「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群）に対し、県庁にて取組状況の詳細、そのための体制、課題等についてヒアリング調査を実施（9 月 6 日、10 日）。

・参考指針の作成に資するため、国内外の専門家を招致し、国際会議を実施。このうち事例報告部分については、今後の遺産影響評価の実施に資するため、国内の世界遺産を有する自治体担当者の傍聴を求めた（10 月 23～25 日）。

・調査研究事業の結果を報告書として取り纏め、必要箇所に配布した。

国際会議の様子
（黒田記念館会議室）

【実績値】

アンケート調査（対象資産 19 件、対象自治体 92 か所）、ヒアリング調査（2 回）、国際会議（事前ブリーフィングを含め３日間、海外招致専門家 2 人、国内招致専門家 7 人、その他文化庁、自治体等）、報告書 1 冊『世界文化遺産の遺産影響評価に関する調査研究事業報告書』（日本語版：200 冊、31 年 3 月刊行）

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 3311E-3

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
【事業名称】	文化財の英語表記に関する調査研究事業 (①－1) －7))		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：９９３千円			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	国際情報研究室長　西和彦
【スタッフ】 二神葉子（文化財情報資料部文化財情報研究室長)、境野飛鳥（アソシエイトフェロー）			

【年度実績概要】

近年、文化財が地域振興、観光振興等に資するとの認識が高まってきており、文化財に期待される効果や役割が拡大している。しかしながら、全国各地の文化財に設置された多言語解説版等においては、各類型の英語表記が近年増える外国人観光客に対して文化財の真の価値を伝えきれていないとの指摘もある。

本調査研究は、増大する観光インバウンドに対応した英語表記等を整備し、国内外の旅行者に対して文化財の理解を促進するため、文化財の類型、指定登録等の手法との関連に留意して調査研究を行うものであり、今後の文化財の発信・活用方策を戦略的に企画・立案するための基礎資料を整理することを目的とする。

具体的には、以下の作業を行う。

・資料調査：9か国について、文化遺産に関する最新法令を確認し、文化財指定等の分類、その英語表記等を整理する（具体的には、根拠法令、制定年、主要な最終改正年、保護対象の分類、指定等の段階、その名称及び英語表記、規制、優遇措置等を確認)。

・ヒアリング調査：国外専門家へのヒアリングを行い、上記作業で収集した基礎情報に関連する運用の実態、現状と課題等を補足整理する（31年3月)。

・上記の作業の結果を、一覧表等でわかりやすく整理する。

【実績値】

海外調査（2か国）

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 3312E-1

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業「ネパールの被災文化遺産保護に関する技術的支援事業」(1-2)-ｱ-(ｱ))		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：２０，４０６千円			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長　友田正彦

【スタッフ】
間舎裕生、淺田なつみ（以上、アソシエイトフェロー）、山田大樹（客員研究員）、久保田裕道（無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長）、石村智（無形文化遺産部音声映像記録研究室長）

【年度実績概要】
27年4月のゴルカ地震で被災したネパールの文化遺産復興を技術的に支援するため、カウンターパートである同国文化・観光・民間航空省考古局をはじめ関係機関との協働のもと、建築史・建築構造・都市計画・修復技術・無形文化遺産等の各分野において、以下のような現地活動等を同局に派遣中のJICA専門家とも連携しつつ行った（括弧内は出張期間と派遣人数）。なお、歴史的建造物の構造学的調査は東京大学生産技術研究所腰原幹雄研究室、歴史的集落の保存と復興に関する調査は神戸芸術工科大学西村幸夫研究室にそれぞれ再委託して実施した。

（4 月 25 日～5 月 11 日：3 人）
ハヌマンドカ王宮内アガンチェン寺周辺建物群の実測調査、煉瓦壁面破損調査、記録画像作成、煉瓦目地材調査、内壁面仕上げ層調査。歴史集落保全に関する行政担当者ワークショップをサンクーにて開催。
（7 月 7～18 日：4 人）
ハヌマンドカ王宮内アガンチェン寺周辺建物群の実測調査、内壁面仕上げ層調査。カトマンズ盆地内歴史的集落保全現地担当者との打合せ等。
（8 月 12～28 日:4 人）
ネワール集落における新築デザインガイドライン策定に向けた調査及び現地専門家とのワークショップ、ネワール集落における空間構造把握調査、コカナ集落における無形文化遺産調査。
（8 月 21～30 日：2 人）
コカナ集落における無形文化遺産調査。
（9 月 16～28 日：2 人）
ハヌマンドカ王宮内アガンチェン寺周辺建物群の実測調査、内壁面仕上げ層調査、仕上げ層サンプル整理、行政担当者との打合せ、カトマンズ盆地内歴史的集落視察及び現地担当者との打合せ等。
（11 月 22～28 日：5 人）
パナウティ集落・コカナ集落における伝統民家（合計 2 軒）の構造調査、コカナ集落における新築デザインガイドライン策定に向けた現地打合せ。
（31 年 1 月 29 日～2 月 4 日：1 人）
コカナ集落における新築デザインガイドライン決定・リーフレット作成に向けた現地打ち合わせ、伝統民家の保全手法に関する現地専門家へのヒアリング調査。
（31 年 2 月 22 日～3 月 2 日：5 人）
ハヌマンドカ王宮内アガンチェン寺周辺建物群の内壁面仕上げ層成分分析調査ほか。
（31 年 2 月 26 日～3 月 18 日：8 人）
カトマンズ盆地内歴史的集落保全に関する市長フォーラムの開催、ハヌマンドカ王宮内アガンチェン寺周辺建物群修復に関する打合せほか。
（31 年 3 月 22 日～3 月 26 日：1 人）
ハヌマンドカ王宮内アガンチェン寺周辺建物群修復に関する調査及び打合せ

アガンチェン寺周辺建物群の調査

【実績値】
専門家派遣 10 回（延べ 35 人）、現地会合 9 回、報告書 3 冊、研究論文 4 件、研究発表 5 件

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 3312E-2

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
【事業名称】	文化遺産保護国際貢献事業「ミャンマーにおける考古・建築遺産の調査・保護に関する技術移転を目的とした拠点交流事業・建築分野」(1-2)-ｱ-(ｱ))		
【委託者・受託経費】 委託者：奈良文化財研究所 受託経費：４，７５２千円			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長　友田正彦
【スタッフ】 マルティネス・アレハンドロ（アソシエイトフェロー)、腰原幹雄（東京大学教授)、渡邊緩子（日鉄住金テクノロジー)			

【年度実績概要】

28 年 8 月 24 日に発生した地震により大きな被害を受けたミャンマー中部所在のバガン遺跡群について、その適切な保存・修復対策を検討すると同時に、同国宗教文化省考古・国立博物館局（DOA）をはじめとする現地当局が目下実施中の修復事業の質的向上に向けた情報提供や技術的助言を行うことを主な目的として、以下の現地調査を実施した。

・(5 月 23～29 日：2 人）歴史的建造物の建築構法・技術に関する調査及び構造挙動モニタリング：

文化遺産建造物修理の専門家計 2 人を派遣し、歴史的建造物の建築構法・技術に関する調査を行うほか、被災した歴史的建造物の構造挙動モニタリング調査を継続した。建築構法・技術に関する調査については、歴史的建造物 36 棟を対象として、煉瓦の寸法・積み方・加工、目地の作り方、煉瓦壁の構造、アーチ・ヴォールトの構法に関して調査を行った。さらに、Carleton 大学の Mario Santana 教授と協力して、ヴォールトの記録作成の方法について現地で検討を行った。構造挙動モニタリング調査については、29 年度に引き続き、3 棟の建造物を対象として現地の DOA スタッフと協力してモニタリングを継続した。

・(8 月 21～26 日：3 人）歴史的建造物の構造上の特性に関する調査、緊急補強方法の検討及び構造挙動モニタリング：

文化遺産建造物修理、建築構造の専門家計 3 人を派遣し、歴史的建造物の構造上の特性に関する調査を行うとともに、現地当局の要求に応じて 1249 寺院に関して緊急的な補強の方法を検討し、技術的な助言を提供した。さらに、現地の DOA スタッフと協力してモニタリングを継続した。

・(11 月 12～19 日：4 人）現地ワークショップの開催及び第 1 回国際調整委員会への参加：

文化遺産建造物修理、建築構造、保存科学の専門家計 4 人を派遣し、11 月 13 日にヤンゴンのミャンマー技術者協会(MES)、翌 14 日にはバガンの DOA 支局において、それぞれ現地の専門家を対象にしたワークショップを開催した。ワークショップでは主に歴史的煉瓦造建造物の建築技術・構法、構造上の特性、及び伝統的モルタル材料の成分分析について現在までの調査研究の成果を発表し、現地の専門家と意見交換を行った。さらに、11 月 17･18 両日に開催された第 3 回技術調整フォーラム及び第 1 回国際調整委員会（ICC）へ参加し、当研究所及び奈良文化財研究所が実施している関連協力事業の概要について報告した。

緊急的補強方法に関する技術

【実績値】

専門家派遣 3 回（のべ 9 人)、現地ワークショップ 2 回、論文 6 件、研究発表等 8 回、報告書 2 冊

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3312F

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(3) 文化遺産保護に関する国際協働
【事業名称】	平成 30 年度文化遺産国際協力拠点交流事業実施委託業務（ミャンマーにおける考古・建築遺産の調査・保護に関する技術移転を目的とした拠点交流事業）（①-2)-ｱ-(ｱ)）

【委託者・受託経費】
委託者： 文化庁
受託経費：11,844 千円

【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	部長　森本晋

【スタッフ】
佐藤由似（企画調整部国際遺跡研究室専門職）、杉山洋（同特任研究員）影山悦子（同アソシエイトフェロー）、山藤正敏（都城発掘調査部考古第二研究室研究員）、田村朋美（同考古第一研究室研究員）

【年度実績概要】

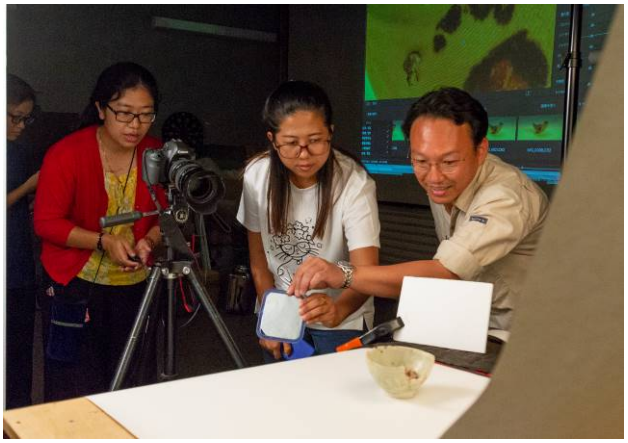
本事業は、ミャンマー宗教・文化省考古・国立博物館局を相手国拠点とし、ヤンゴン大学考古学部の協力を得て、考古・建築遺産の調査・保護に必要な技術の移転をはかることを目的としている。当研究所は考古分野の研修を実施し、建築分野の研修は東京文化財研究所が実施した（再委託）。

当研究所は、考古部門の研修を以下のとおり日本とミャンマーにおいて実施した。

①陶磁器の調査研究

・7 月 28 日～8 月 4 日：ヤンゴン大学・ダゴン大学の考古学部講師 2 人と大学院修了生 1 人を日本に招へいし、ミャンマー出土陶磁器の記録・展示に関する研修を行った。受講生は講師の指導のもと、陶磁器の記録（写真撮影、実測、実測図のデジタルトレース）、欠損部分の復元、展示方法の検討を行った。また高槻市新池ハニワ工場公園において窯跡の展示方法を見学し、堺市博物館において東南アジア陶磁器のコレクションを調査した。

・31 年 1 月 15 日～22 日：ミャンマーのモン州に当研究所の考古学者他 3 人および町田市立博物館の陶磁器専門家 1 人を派遣し、窯跡および出土陶磁器の調査研修を行った。現地の考古学者 1 人、ヤンゴン大学・ダゴン大学の考古学部講師 2 人と大学院修了生 1 人が参加した。またヤンゴン大学考古学部において、ミャンマーにおける考古学調査に関するワークショップを開催した。



陶磁器の写真撮影（8 月）

②考古遺跡の測量

・10 月 15 日～21 日：ミャンマーのシュリクシェトラ遺跡内にある考古学フィールドスクールの講師 3 人を日本に招へいし、考古遺跡の測量方法に関する研修を行った。受講生は、トータルステーションの設置方法、角度と距離の計測方法を習得し、測定結果から手計算で測点の座標を求める作業を行った。受講生からミャンマーのシュリクシェトラ遺跡における考古調査の成果について情報を得た。

・11 月 24 日～12 月 1 日：考古学フィールドスクールに当研究所の考古学者他 3 人を派遣し、現地の測量会社の協力を得て、4 日間にわたり、考古遺跡の測量に関する基本的な知識と技術の習得を目的とした研修を行った。研修受講者は 42 人であった。測量の基礎に関する講義と、トータルステーションの設置・操作方法の実習を行った後、実際にシュリクシェトラ遺跡内の城門址のトラバース測量を行った。

【実績値】
・専門家派遣　2 回、7 人
・専門家招へい　2 回、6 人
・研修　4 回、52 人
・ワークショップ　1 回、25 人

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 3313E-1

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
【事業名称】	文化遺産保護国際貢献事業「トルコ共和国における壁画の保存管理体制改善に向けた人材育成事業」(1-2)-ｱ-(ｱ))		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：１０，５５７千円			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長　中山俊介
【スタッフ】 前川佳文（研究員)、増渕麻里耶（アソシエイトフェロー)、鴫原由美（保存科学研究センターアソシエイトフェロー）			

【年度実績概要】

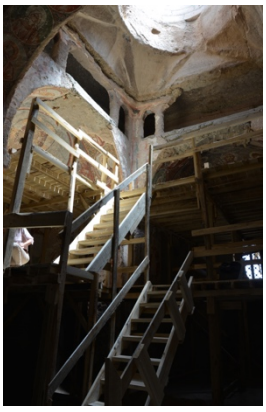
トルコ共和国には、制作された時期や趣旨の異なる数多くの壁画が現存し、それらは同国の貴重な文化遺産であるとともに、主要な観光資源としても活用されている。中でも世界的に有名なのは、カッパドキア地域に広がるあまたの奇岩を彫りぬいてつくられた古代の宗教施設、すなわち岩窟教会群の壁画である。本事業は、こうしたトルコ共和国の壁画を保存・管理していくうえで重要となる応急処置のあり方についてそのプロトコルを確立させ、本事業に参加する文化財保存分野の専門家が、応急処置が必要となる様々な場面において的確な判断を行い、正しい介入が行えるようなプロセスの構築を目指すものである。30 年度は、主に以下の事業を実施した。

■研修事業の開催

調査結果をもとに、トルコ共和国の壁画を保存していくうえで重要となる応急処置のあり方を見直し、そのプロトコルを確立させていくことを目標とする第 1 回研修を 29 年度に実施した。30 年度もこれに引き続き現場実地研修と座学で構成された研修を 2 度開催した。

◇第 2 回研修： 6 月 25 日～29 日
◇第 3 回研修：10 月 15 日～20 日

現場実地研修場所は 29 年度までに実施した調査で選定し、トルコ共和国内に 10 か所設置された国立保存修復センターより各 3 人ずつ専属の専門家が参加した。（計 30 人）



壁画保存の現場実地研修を行うタガール教会内部

■研修内容

・現場実地作業
　事前調査（損傷マッピング、文献調査）
　応急処置の実践（部分固定方、エッジング、グラウティング）
　応急処置用材料の実験（流動性調査、含浸率調査、収縮率調査等）
・座学
　トルコ共和国における保存修復活動の事例報告
　日本の壁画保存に係る研究発表
　研修内容に係る意見交換

壁画保存における応急処置の実践の研修風景

■大学教育機関における調査

現行の文化財関連教育制度についての理解を深めることを目的にトルコ共和国内で文化財保存・修復学科を有する複数の大学を訪問し、聞き取り調査を実施した。

【実績値】

○事業終了後に実施したアンケート調査

Excellent: 24, Very Good: 6, Good: 0, Fair: 0, Poor: 0 （計 30 人）

○学会・研究発表 1 件、刊行物 1 件

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 3313E-2

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
【事業名称】	シルクロードが結ぶ友情プロジェクト「シリア人専門家研修（紙資料)」(①－3))		
【委託者・受託経費】 委託者：シルクロードが結ぶ友情プロジェクト実行委員会 受託経費：３，０００千円			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	研究員　安倍雅史
【スタッフ】 友田正彦（保存計画研究室長)、間舎裕生（アソシエイトフェロー)、荒木晶（事務補佐員)、小田切真梨（研究支援推進部企画渉外係任期付専門職員)、石川絵梨子（同事務補佐員）			

【年度実績概要】

シリアでは 2011 年以来続いている紛争によって多くの文化遺産が被災している。遺跡や歴史的建造物の破壊や博物館収蔵品の略奪、遺跡の盗掘などは報道される機会も多いのに対し、さほど注目されていない図書館等に収蔵された歴史的書物等の汚損・破損の被害にも顕著なものがある。シリアにおける文化遺産の復興を技術的に支援するため、同国古物博物館総局から 2 人の専門家を招へいし、図書資料を中心とした紙文化財の保存修復に関する技術移転研修を実施した。なお、研修の実施においては国立公文書館、国立国会図書館の 2 機関より協力を得た。

被招へい者
ファタト・カメル・ジャディード（ダマスカス国立博物館近代美術部長）
ラザーン・アル＝ジュンディ（国立歴史文書センター保存修復部長）

招へい期間
5 月 15～30 日

実施内容
5 月 16～18 日、21 日　国立公文書館（糊炊き、和紙資料・洋紙資料の繕い、裏打ち、簡易製本の作成）
5 月 19 日　鎌倉市内文化財見学
5 月 22～25 日　国立国会図書館（破損した図書資料の修復、虫損直し、再加湿紙による補修、保存容器作成）
5 月 27 日　京都市内文化財見学
5 月 28 日　奈良市内文化財見学
5 月 29 日　閉講式、東京文化財研究所見学

閉講式後には被招聘者 2 人に対して、シリア国内の事情や今回研修への評価に関するヒアリングを行った。その結果、国内の紙資料の保存修復のほとんどを担当している国立歴史文書センター保存修復部には現在 16 人の職員が在籍し、オスマン帝国時代（16～20 世紀初頭）の行政文書やフランス委任統治時代（20 世紀半ば）の雑誌・新聞・古写真等の保存修復を行っているとのことであった。また、1999 年～2005 年の間には青年海外協力隊により紙資料の修復研修が首都ダマスカスで実施されたとのことである。その際に紹介された、和紙を用いた資料修復の方法を現在でも用いているため、同様に和紙による修復方法を学ぶことができた今回の研修は非常に有用であったとの感想が寄せられた。

国立国会図書館における研修風景

【実績値】
報告書「The Silk Road Friendship Project: The Training Workshop for the Preservation of Paper Cultural Heritage, 2018」　1 件

【受託】　施設名 アジア太平洋無形文化遺産研究センター　処理番号 3320G

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(3)-2 アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する調査研究		
【事業名称】	平成 30 年度無形文化遺産保護パートナーシッププログラム		
【委託者・受託経費】 委託者：文化庁 受託経費：51,683 千円			
【担当部課】	―	【事業責任者】	アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長　岩本渉

【スタッフ】
大貫美佐子(副所長(兼)研究担当室長)、林洋平(係長)、児玉茂昭、佐々木一恵、野嶋洋子、長谷川悟郎、池田明子、梅田恭代(以上、アソシエイトフェロー)、坂本翼、古川幸恵、加藤智子(以上、前アソシエイトフェロー)

【年度実績概要】
(1)アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する調査研究(書式 C2320G(1)に対応)
①文献サーヴェイを通じた情報収集・分析
・インドネシア、シンガポールの 2 か国について、現地研究者の協力により文献調査を実施した。
・文献サーヴェイ最終年度として、これまでの成果をまとめ事業報告書を作成し、ウェブサイトで公開した。
②研究データベースの更新・充実
・上記①で収集した情報をデータベースに追加。また登録済みデータの見直し作業も進めた。
・データベースを介した資料活用の可能性について、ミャンマーを事例にフィージビリティ調査を実施した(31 年 1 月 7 日～18 日)。
③アジアの紛争後国家等における無形文化遺産の現状に関する現地調査
・アフガニスタン、スリランカ(北部・北東部)、東ティモールについて、パートナー機関と連携し現地調査を完了した。
(2)無形文化遺産保護及びその研究活性化に資する国際会議等の開催
①紛争後状況における無形文化遺産の調査研究に関するワークショップ等を以下のとおり開催した。
・Study of Emergency Protection of Intangible Cultural Heritage in Conflict-Affected Countries in Asia [Timor-Leste](ポストコンフリクト国の無形文化遺産に関する予備調査についてのワークショップ)(4 月 5 日～6 日、東京) (運営交付金で実施)
・Workshop on the Research on Intangible Cultural Heritage in Conflict Affected Countries (Northern and Eastern Provinces of Sri Lanka)(ポストコンフリクト国等を対象とした無形文化遺産の研究ワークショップ(スリランカ北部、東部州))(6 月 26 日～27 日、東京)
・IRCI Workshop for the Preparation of 1st-Round Survey on Intangible Cultural Heritage in Afghanistan (アフガニスタンにおける第一段階の現地調査実施にむけた調整会議)(9 月 4 日～6 日、東京)
・IRCI Meeting for Study of Emergency Protection of Intangible Cultural Heritage in Conflict-Affected Countries in Asia (アフガニスタン、東ティモール調査報告会)(12 月 8 日～11 日、鶴岡・東京)
・Working Group Session for Research on Intangible Cultural Heritage in Northern and Eastern Provinces of Sri Lanka(スリランカ北部及び東部における無形文化遺産研究のためのワーキンググループセッション)(31 年 3 月 5 日～8 日、京都)
②「第 7 回 IRCI 運営理事会」(9 月 26 日、大阪)を開催し、31 年度事業計画について承認を得た。
(3)国際会議等への参加を通じた連携・協力機関等の開拓、及び C2 センター間の関係強化
・Seventh General Assembly of State Parties for the 2003 Convention (6 月 5 日～6 日、パリ)
・Sixth annual coordination meeting of category 2 centres active in the field of ICH (6 月 7 日、パリ)
・Unlocking the potential of tertiary education for ICH safeguarding (7 月 17 日、ソウル)
・2018 Sub-regional Meeting for ICH safeguarding in Northeast Asia (8 月 28 日～29 日、ウランバートル)
・韓国 C2 センター運営理事会(12 月 13 日,ソウル)
・第 7 回中国 C2 センター運営理事会(12 月 19 日,北京)
・第 8 回中国 C2 センター運営理事会(31 年 3 月 26 日,北京)
(4)情報公開等
①IRCI ウェブサイトの定期的更新を行った。

【実績値】
国際会議等開催件数：2 件 6 回、国際会議等出席件数 7 件
データベース検索件数：751 件 (30 年 4 月 1 日～31 年 3 月 31 日)、登録件数：2,534 件
ウェブサイトアクセス件数：10,779 件 (30 年 4 月 1 日～31 年 3 月 31 日)
刊行物：①『Report on the IRCI Literature Survey on Intangible Cultural Heritage Safeguarding Research (2016-2018)』(デジタル版をウェブサイトで公開)

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3521F-1

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
【事業名称】	第一次大極殿院建造物復原整備他にかかる調査委託（②-1)）

【委託者・受託経費】
委託者： 国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所
受託経費：40,015 千円

【担当部課】	企画調整部展示企画室・ 都城発掘調査部遺構研究室	【事業責任者】	副所長　渡邉晃宏

【スタッフ】
箱崎和久（都城発掘調査部遺構研究室長)、大林潤・山本崇・丹羽崇史（主任研究員)、島田敏男（文化遺産部長)、加藤真二（企画調整部展示企画室長)、中村一郎（企画調整部専門職員)、脇谷草一郎・柳田明進（埋蔵文化財センター保存修復科学研究室研究員）ほか

【年度実績概要】

平城宮第一次大極殿院地区の整備に伴う復原検討を行う国土交通省からの受託研究。奈良時代前期（Ⅰ－2 期）の第一次大極殿院を構成する、南門、東楼・西楼、築地回廊の各建物、及び大極殿院の地形や諸施設等について往時の形態を復原するのが目的である。

30 年度は 29 年度に続き、大極殿院の建築金具の復原研究を中心に検討を進めた。29 年度までに行った古代建築金具の製作技術の検討成果と、文献史料の調査成果を踏まえ、金具の試作による検証実験を３回にわたり実施した。その内容と成果について、有識者を招いて建築金具検討会等を開催し、各種提案を受けて研究を進めた。また、大極殿院の復原金具の意匠の検討を進め、南門所用の金具並びに東楼・西楼所用の金具の意匠案を検討し決定した。さらに、大極殿院建物の扁額に関する有識者を招いた検討会を行い、扁額の有無や題字等について討議した。

第６回建築金具検討会（12 月 13 日）

このほか、平城宮いざない館開館後の監修業務を行った。

建築金具の検討（第一次大極殿院復原建築金具検討会(第 5・6・7 回)、原型試作中間報告会)
・29 年度までの検討で想定した建築金具の鋳込み工程の検証実験を行った。また成果品について目視及び拡大観察と蛍光Ｘ線分析、Ｘ線透過撮影を行い、大官大寺金堂出土木口金具との比較考察を行った。想定を裏付ける成果を得るとともに、鋳型製作以降の工程における問題点とその解決を明らかにした。
・金具鋳造に用いる原型と鋳型の材質及び製作方法の検証実験を行い、量産を考慮した場合に考え得る当時の原型と鋳型の仕様を検討した。
・上記検討を踏まえて鋳物への鍍金方法の検証実験を行い、成果品について目視及び拡大観察と蛍光Ｘ線分析、コンピュータ断層撮影を行い、出土品との比較検証を行った。一連の検証実験による検討により、古代建築金具の鋳造工程を総合的に復原考察した。
・29 年度に引き続き、南門所用の各金具、東楼・西楼の軒先木口金具・高欄木口金具の意匠の復原検討を行い、各意匠案を決定した。

扁額の検討（第一次大極殿院復原扁額検討会)
・中国の事例、国内の文献史料等の類例から、南門、東楼・西楼に扁額を取り付けた可能性、取り付けた場合の扁額の題字について検討し、復原整備工事における方針を決定した。

報告書の作成
・29 年度までの検討の内容を報告書として刊行すべく、原稿執筆及び各種資料の整理や編集作業などを進めた。

平城宮いざない館の開館後監修
・管理用展示物台帳の作成、展示パネル・題箋などの修正、追加の地震対策、来館者・学校団体調査を行った。

【実績値】
・第一次大極殿院復原建築金具検討会（8 月 2 日、12 月 13 日、31 年 1 月 22 日)：有識者４人招聘
・第一次大極殿院扁額検討会（31 年 1 月 30 日)：有識者２人招聘
論文等件数：２件（①、②)
① 李暉「古代鋳銅製建築金具の鋳込み工程の検証－第一次大極殿院の復原研究 27－」（『奈良文化財研究所紀要 2019』31 年 6 月､予定)
② 坪井久子「文献史料からみた鋳造と鍍金に関する検討－第一次大極殿院の復原研究 28－」（『奈良文化財研究所紀要 2019』31 年 6 月､予定)
報告書等数：２件（③、④)
③ 『第一次大極殿院復原検討会記録 15』（6 月）（内部資料）④『③同記録 16』（31 年 3 月）（内部資料）

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3521F-2

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
【事業名称】	長門鋳銭所跡出土木簡等の保存処理等を経ての総合的研究（②-1))		
【委託者・受託経費】 委託者： 下関市（山口県） 受託経費：1,996 千円			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城地区）	【事業責任者】	史料研究室長　馬場基
【スタッフ】 渡邉晃宏（都城発掘調査部副部長)、馬場基（史料研究室長)、桑田訓也（主任研究員)、山本祥隆（史料研究室研究員)、脇谷草一郎・星野安治（埋蔵文化財センター主任研究員)、松田和貴（保存修復科学研究室研究員）ほか			

【年度実績概要】

山口県下関市に所在する長門鋳銭所跡から 22 年に出土した木簡数百点（推定）について、科学的な保存処理を実施した上で釈文を確定し、その歴史的な意義を明らかにするための事業である。27・28 年度にそれぞれ木簡 50 点について実施し、29 年度には木簡 40 点を対象とし、あわせて同じ調査で出土した鋳銭遺物 14 点（坩堝 5 点・銅銭 1 点・銭笵 4 点・鞴羽口 2 点・スラグ 2 点）について自然科学的分析を実施した。30 年度はこれまでの成果を受けて、さらに木簡 55 点を対象とした。

調査は概ね以下の手順で行った。

①保存処理前の状態（水漬け状態）について、肉眼による文字の釈読及び木の形状や加工の観察などを行い、それらを踏まえた調書（記帳）を作成。
②同上について、可視光線（カラー)、赤外線の 2 種類の写真をデジタルカメラで撮影。データは、奈文研と下関市教育委員会の双方に保管している。
③同上について、釈文の検討を最新鋭の赤外線テレビカメラ装置を用いて実施し、釈文案を作成。
④同上について、埋蔵文化財センター年代学研究室において、顕微鏡観察による樹種の絞り込み及び同定を実施。55 点中 37 点については、委託主体と相談の上で切片を採取しプレパラートを作成した。
⑤①～④の終了後、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室において、科学的な保存処理を実施。保存処理は、高級アルコール含浸の上、真空凍結乾燥を施した。
⑥保存処理後の状態について、②と同じ要領で写真撮影を実施。
⑦同上について、③と同じ要領で釈文を再検討し、最終的に釈文を確定。

大型削屑

以上の調査の結果、全国有数の古代官衙遺跡出土木簡群であることを再確認する一方、貴重な資料を確実に後世に残すための最善の科学的保存処理を実施することができた。また、30 年度を以て、長門鋳銭所跡出土木簡のうち主要なものについて、科学的保存処理と釈文の確定を完了することができた。

30 年度の具体的な調査成果については、委託主体である下関市教育委員会に業務完了報告書の形で報告した。

なお、これまでの４か年にわたる調査成果については、別途報告書にまとめて公表する予定であり、その詳細については先方と協議中である。

【実績値】
保存処理 55 点
記録作成 171 点（可視光線写真 58 点、赤外線写真 58 点、記帳 55 点）

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3521F-3

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
【事業名称】	国宝薬師寺東塔遺物整理業務（金属製品）(②－1))		
【委託者・受託経費】 委託者： 奈良県 受託経費：969 千円			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城地区）	【事業責任者】	主任研究員　国武貞克
【スタッフ】 国武貞克・庄田慎矢（都城発掘調査部主任研究員)、芝康次郎（考古第 1 研究室研究員)、浦蓉子（考古第 1 研究室アソシエイトフェロー)、ほか			

【年度実績概要】

・国宝薬師寺東塔の解体修理にともなう発掘調査で出土の金属製品（おもに鉄製品）について、報告書作成（32年度末刊行予定）に向けた整理作業を行っている。30 年度は受託研究の 2 年目にあたる。

・出土した金属製品には、銅製品 7 点、鉄製品 196 点がある。30 年度は、鉄製品について当研究所保存科学研究室の協力のもとクリーニング作業と保存処理作業をおこなった。また 29 年度未完であった遺物の実測作業を進めた。
具体的な作業内容は以下の通り。

①クリーニング作業：サビや表面の細かい土などを落とす。
②保存処理作業：有機溶剤（トルエン）に含侵させ、乾燥させる。
③保存処理後の記録作業：写真撮影およびデータベース化。

保存処置作業の様子（有機溶剤に浸す）

・保存処理作業および遺物の実測（トレース含む）作業は、203 点すべて完了した。

・これらの作業と並行して、東塔解体前に部材に取り付けられていた鉄釘について実地調査（目視観察、実測作業、写真撮影）を奈良県文化財保存事務所薬師寺出張所においておこない、出土遺物との対応関係についての調査を進めている。

【実績値】
クリーニングおよび保存処理作業　203 点全点完了
実測　203 点全点完了（30 年度は 133 点を実施）

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3521F-4

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
【事業名称】	平城京左京一条二坊十五坪の調査（②-1)）		
【委託者・受託経費】 委託者： 高岡幸子 受託経費：97 千円			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城地区）	【事業責任者】	副部長　渡邉晃宏
【スタッフ】 渡邉晃宏（副部長)、国武貞克（主任研究員）			

【年度実績概要】

・住宅建設のための開発に伴う調査。
　調査面積：25.25 ㎡。
　調査期間：5 月 15 日～5 月 16 日。

・基本層序

地表から、1 層：黒色粘質土（攪乱層、約 30ｃｍ)、2 層：褐灰色粘質土（耕作土、約 30ｃｍ)、3 層：褐灰色粘質土（耕作土、約 25ｃｍ)、4 層：黄橙色粘質土（遺物包含層、約 10ｃｍ)、5 層：褐灰色粘質土（南北溝 1 埋土、約 20ｃｍ)、7 層：黄褐色粘質土（地山、約 10ｃｍ)、8 層：黄白色粘質土（地山、約 15ｃｍ以上)。1 層を重機により除去し、4 層を人力で堀削した後に、7 層上面で遺構検出を行った。遺構を検出した標高は、70.69～70.80ｍであり、北から南に向かって傾斜している。遺構検出面の地表からの深さは 0.4～0.5ｍである。

・主な検出遺構

井戸 1 基（江戸時代)、南北溝 1 条（奈良時代)、小穴 2 基（奈良時代）

・主な出土遺物

土師器・須恵器（コンテナ 5 箱）
軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦（コンテナ 3 箱）
砥石 1 点

・調査所見

耕作土の直下の地山で遺構検出を行った。

調査区西端で検出した奈良時代の南北溝は、その位置から東二坊坊間東小路の東側溝の可能性がある。また、この南北溝の底面で検出した 2 基の小穴は、ほぼ南北に並び、3m（10 尺）離れているため、一連の塀の柱穴を構成する可能性がある。ともに、十五坪の西の区画に関係する施設であった可能性が高い。この南北溝は、東二坊坊間東小路の側溝の可能性が高い遺構としては初めての事例となるため、今後周辺の調査により検証していく必要がある。

江戸時代の井戸は井戸側が大部分抜かれており遺存状態が良くないが、磚組の井戸である。28 年度に同じく法華寺町の平城第 575 次調査で検出した井戸（SE11125）と同様の構造と推定され、貴重な類例が追加されたといえる。

完掘状況（北から）

【実績値】

出土遺物：土器片 3 箱（整理用コンテナ)、瓦片 5 箱（整理用コンテナ)、石製品 1 点
実測図：2 点（A2 版)、デジタル写真：19 点

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3521F-5

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
【事業名称】	平城京左京二条二坊十五坪の調査（②-1)）		
【委託者・受託経費】 委託者： 福井利子 受託経費：2,170 千円			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城地区）	【事業責任者】	副部長　渡邉晃宏
【スタッフ】 渡邉晃宏（都城発掘調査部副部長)、神野恵（主任研究員)、小田裕樹（考古第 2 研究室研究員）ほか			

【年度実績概要】

・共同住宅建設にともなう事前調査。
　調査面積:526 ㎡（うち 114 ㎡は学術目的による拡張）
　調査期間： 7 月 5 日～9 月 3 日

・基本層序
　地表から表土・造成土（0.4m)、旧耕作土・床土（0.4m)、遺物包含層（灰褐色粘質土、0.1～0.2m）が堆積し、調査区北部および北拡張区では黄灰色粘土､南部では青灰シルト質の地山に達する。調査区北西部では､炭が混じる橙褐色砂質土の奈良時代の整地土が遺存していた（約 0.1m)。遺構検出は奈良時代の整地土および地山上面でおこなった。遺構面の標高は 60.6～60.8m である。

・主な検出遺構
　濠状遺構、溝４条、土坑３基、掘立柱建物１棟

・主な出土遺物
　土器・土製品、瓦磚類、木器、金属製品など

調査区全景（北西から）

・調査所見
　奈良時代の空間利用の在り方が明らかになった。奈良時代前半には東西溝による区画と土坑１・２などの造営関連の遺構が展開しており、その後整地を施して異なる土地利用が行われており、奈良時代後半～末頃には八角形断面形の柱をもつ建物が展開していた。特に土坑２からは類例のない箱形土製品など特殊な遺物が出土し、性格をめぐって今後の検討が必要である。
　中世に掘削された濠状遺構を検出した。法華寺に残る古絵図では、調査地周辺に「大堀」という字名が記載された東西に長い水田が記載されており、これは今回の調査で検出した濠状遺構に由来する可能性が考えられる。濠状遺構の変遷と埋没時期について、史料の検討も含めて今後進める必要がある。

【実績値】

出土遺物：土器・土製品　　整理用コンテナ 99 箱（須恵器・土師器・箱形土製品）
　　瓦磚類　軒丸瓦 79 点、軒平瓦 77 点、磚 7 点、丸瓦 185.74 kg、平瓦 463.04 kg、未整理コンテナ 188 箱
　　木器等（製品）　110 箱　（下駄、箸、杭、付け木、漆器椀、漆器、曲物、など）
　　大型木製品　18 点（曲物側板、曲物底板、部材、柱根、礎板、杭、曲物井戸枠、曲物周辺木材など）
　　金属製品　５点（鉄丸釘：1、鉄角釘：1、鉄針金：1、板状鉄製品：1）
　　冶金関連　バット 22 箱（羽口・ルツボ・鉄滓・銅滓等）
　　石製品　バット 4 箱(砥石 17 点、金床石片、石鍋等)
記録作成数：実測図 30 枚（A2 判)、デジタル写真約 960 枚

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3521F-6

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
【事業名称】	五十二段北トイレ改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査		
【委託者・受託経費】 委託者： 奈良県 受託経費：1,157 千円			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城地区）	【事業責任者】	副部長　渡邉晃宏
【スタッフ】 渡邉晃宏（都城発掘調査部副部長）、林正憲・桑田訓也（主任研究員）、浦蓉子（考古第 1 研究室アソシエイトフェロー）ほか			

【年度実績概要】

・既存建物（トイレ）の除却および新築工事に伴う発掘調査。
調査面積は約 134 ㎡。調査期間は 10 月 22 日～10 月 31 日。
調査地は、興福寺南大門東門守屋（壇正積基壇を伴う建物）の南端部、およびその東側に位置する南北方向の築地塀の西雨落溝にあたる。

調査区全景（南西から）

・基本層序
上から①造成土（厚さ 10～80 ㎝）、②黄褐色砂質土（マンガンを多く含む、遺物を含まない、厚さは最大で 15 ㎝程度）、③明褐色粘質土（遺物を含まない、基盤層か）である。調査区の東半には②がなく、①の直下が③となる。③上面の標高は、調査区東北隅が約 94.2m、西南隅が約 93.3mで、おおよそ北東から南西に向かって低くなる。
遺構検出は、①を除去した面、すなわち②もしくは③の上面で行った。検出面の標高は、最も高い東北部で 94.2m前後、最も低い西南部で 93.4m前後である。なお、②のある西北部では②を掘り下げ、③の上面でも検出を行った。

・主な検出遺構
時期不明の土坑のほかに、顕著な遺構は認められなかった。土坑は、埋土の様相および出土遺物からみて、多くが近代以降に属するとみられる。

・主な出土遺物
瓦（奈良時代～近代）、土師器皿（鎌倉時代）、陶磁器（近世）など。

・調査所見
南大門東門守屋および東側の築地塀に関わる築地塀西雨落溝などの遺構は検出できなかった。周辺の調査における遺構の標高からみて、削平された可能性が高いとみられる。

【実績値】
・出土遺物：丸瓦・平瓦 5 袋、軒丸瓦 3 点、土器片 1 箱（整理用コンテナ）、
・記録作成数：実測図 8 枚（A2 判）、デジタル写真約 300 枚

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3521F-7

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
【事業名称】	史跡　飛鳥寺跡に隣接する県道「橿原神宮東口停車場飛鳥線」の発掘調査（②-1))

【委託者・受託経費】
委託者： 奈良県中和土木事務所
受託経費：994 千円

【担当部課】	都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	【事業責任者】	部長　玉田芳英

【スタッフ】
尾野善裕（考古第二研究室長)、大林潤（主任研究員)、松永悦枝（考古第一研究室研究員)、道上祥武（考古第三研究室アソシエイトフェロー)、栗山雅夫（企画調整部写真室技術職員）

【年度実績概要】
○明日香村大字飛鳥の県道橿原神宮東口停車場飛鳥線上における電線地中化工事にともなうハンドホール設置箇所についての発掘調査であり、奈良県中和土木事務所からの受託により実施した。対象地は史跡飛鳥寺跡の北辺に接する幅約４ｍの道路上で、ハンドホールの大きさに合わせて、1.4～2.6m×2.2～4.4m の規模の調査区を７箇所（西側から１～７区とした。）に設置して発掘調査を行った。
・調査地：明日香村大字飛鳥
・調査期間：4 月 2 日～5 月 11 日
・調査面積：47.1 ㎡

１区遺構検出状況（南西から）

○調査成果
・１区および２区で古代の遺物を含む土坑を検出したが、調査区が狭隘なため、性格を明らかにするには至らなかった。
・１～７区の土層観察からは、調査区付近を境として、かつては北側が急激に落ち込む地形であったが、中・近世に大規模な盛土整地が行われていることが判明し、調査地一帯の歴史的な景観変遷を復元する上での手がかりを得ることができた。

【実績値】
・出土遺物：軒瓦 21 点、丸・平瓦 43 箱、土器 3 箱ほか
・記録作成数：遺構実測図 10 枚、写真 21 枚、メモ写真 108 枚
・論文等数：1 件（①）
①尾野善裕ほか「飛鳥寺旧境内の調査―第 197-1・2・6 次―」『奈良文化財研究所紀要 2019』(31 年 6 月予定)

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3521F-8

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
【事業名称】	史跡　飛鳥寺跡に隣接する県道「橿原神宮東口停車場飛鳥線」の厳重立会調査（②-1))

【委託者・受託経費】
委託者： 奈良県中和土木事務所
受託経費：5,743 千円

【担当部課】	都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	【事業責任者】	部長　玉田芳英

【スタッフ】
尾野善裕（考古第二研究室長)、鈴木智大（遺構研究室研究員)、清野陽一（考古第三研究室研究員)、栗山雅夫（企画調整部写真室技術職員）ほか

【年度実績概要】

○明日香村大字飛鳥の県道橿原神宮東口停車場飛鳥線上における電線地中化工事にともなう管路掘削部分についての厳重立会調査であり、奈良県中和土木事務所からの受託により実施した。対象地は史跡飛鳥寺跡の北辺に接する幅約４ｍの道路上で、基本的に工事掘削に立ち会い、土層観察と遺物採集に努めるという形で調査を進めたが、設計変更にともなって大型のハンドホールが設置されることとなった１か所（１区）については、工事掘削深度が遺構面に達することが予期されたため、発掘調査に切り替えた。
・調査地：明日香村大字飛鳥
・調査期間：5 月 14 日～31 年 2 月 22 日
・調査面積：239.6 ㎡

1 区遠景（西から）

○調査成果
・１区で古代の遺物を含む土坑を検出したが、調査区が狭隘なため、その性格を明らかにするには至らなかった。管路部分の立会調査では、顕著な遺構は認められなかったが、遺物包含層から 200 箱を超える大量の瓦が出土し、飛鳥寺所用瓦の研究を進める上での貴重な資料が得られた。特筆すべき出土遺物としては、飛鳥寺所用ではないかと目される金銅製の風鐸があり、失われた堂塔の荘厳の様子を解明するための手がかりとなることが期待される。

【実績値】
・出土遺物：軒瓦 144 点、丸・平瓦 220 箱、土器 27 箱、金属製品 14 点、石器・石製品 10 点ほか
・記録作成数：遺構実測図 1 枚、写真 9 枚、メモ写真 519 枚
・論文等数：1 件（①）
①尾野善裕ほか「飛鳥寺旧境内の調査―第 197-1・2・6 次―」『奈良文化財研究所紀要 2019』(31 年 6 月予定)

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3521F-9

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
【事業名称】	史跡　飛鳥寺跡に隣接するバイパス水路工事の発掘調査（②-1)）

【委託者・受託経費】
委託者： 奈良県中和土木事務所
受託経費：6,828 千円

【担当部課】	都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)	【事業責任者】	部長　玉田芳英

【スタッフ】
清野孝之（考古第三研究室長)、山本崇（主任研究員)、和田一之輔（考古第一研究室研究員)、道上祥武（考古第三研究室アソシエイトフェロー)、栗山雅夫（企画調整部写真室技術職員)

【年度実績概要】
○飛鳥村内の水路建設工事にともなう発掘調査であり、奈良県中和土木事務所からの受託事業として実施した。調査地は、飛鳥寺の寺域東限にあたると推定される。
・調査地：明日香村大字飛鳥 53-2 番地
・調査期間：1 月 9 日～3 月 1 日
・調査面積：約 87 ㎡（東西全長約 40m）

○調査成果
・調査区内には７世紀後半およびそれ以前の遺物を含む古代の整地土が広がる。この整地土の上面で、石列４条を検出した。調査区中央で南北方向に１条（石列１)、調査区東部で南北方向に１条（石列２)、東西方向に２条（石列３・４）ある。
・石列１は掘方をともなわないことから、整地に際して据えられたと考えられる。西に面を揃えていることから、南北溝の東肩と考えられるが、西肩は既に破壊され残っていなかった。
・石列２は、東側に掘方をともなうが、溝の東肩と考えた場合にあるべき西肩の存在を認めなかった。石列３・４の掘方には重複関係があり、南側の石列３が古い。
・石列３は東西石組溝の北肩、石列４は東西石組溝の南肩と考えられる。石列４の約 30 ㎝北で掘り込みを検出し、これは石組溝の北肩の痕跡である可能性がある。
・調査区中央と東部で、整地土の下から各 1 基の柱穴を検出した。中央の柱穴は掘方一辺 1m前後で、石列１よりも古い。調査区東部の柱穴は掘方一辺 60 ㎝前後で、柱根が残存していた。いずれも東西に並ぶ柱穴が確認できなかったことから、南北塀もしくは柵列の一部とみられる。飛鳥寺の東限の区画施設である可能性もあるが、確定はできなかった。
・調査区中央の整地土の下層から木簡約 160 点が出土した。木簡のほかには、大量の瓦磚類、土器、木製品等が出土した。
・調査区は狭小であったが、石列や柱穴など多くの遺構を検出することができた。重複する遺構の在り方からは、短期間のうちに繰り返し土地利用が行われていたことが知られ、これまで不明であった古代における飛鳥寺東部域の様相の一端を明らかにすることができた。

調査区全景（東から）

【実績値】
・出土遺物：土器 13 箱、軒丸瓦 61 点、鴟尾 2 点、丸・平瓦 238 箱、木製品 10 箱、柱根 1 点、木簡約 160 点
・記録作成数：遺構実測図 8 枚、土層断面図 7 枚、デジタル写真 78 枚、デジタルメモ写真 385 枚
・論文等数：1 件（①)
①尾野善裕ほか「飛鳥寺旧境内の調査―第 197－1・2・6 次」『奈良文化財研究所紀要 2019』(31 年 6 月予定)

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3521F-10

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
【事業名称】	特別史跡藤原宮跡（別所町水路改修）発掘調査（②-1)）

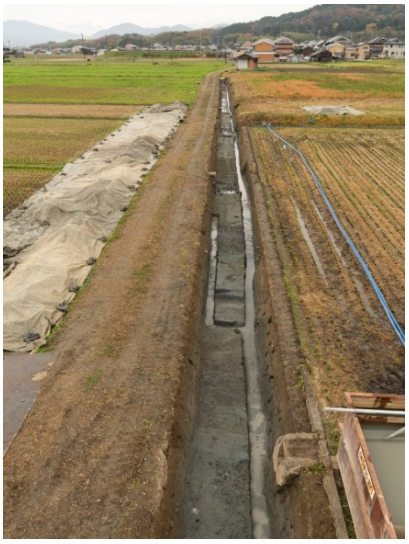
【委託者・受託経費】
委託者： 橿原市
受託経費：2,143 千円

【担当部課】	都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	【事業責任者】	部長　玉田芳英

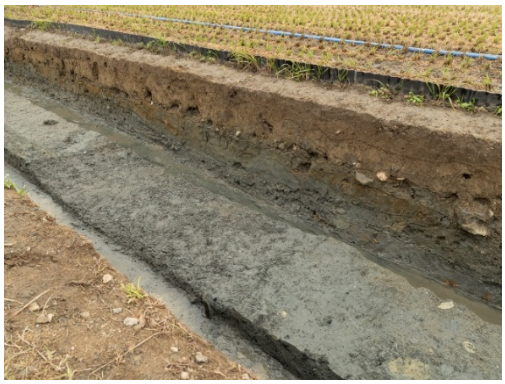
【スタッフ】
石田由紀子（考古第三研究室研究員)、森川実（主任研究員)、鈴木智大（遺構研究室研究員)、片山健太郎（考古第一研究室アソシエイトフェロー)、栗山雅夫（企画調整部写真室技術職員)

【年度実績概要】

○別所町内における水路改修にともなう調査であり、橿原市からの受託事業として実施した。調査地は、藤原宮南面大垣外濠と六条大路の間にある外周帯にあたる。
・調査地：奈良県橿原市別所町
・調査期間：11 月 19 日～12 月 14 日
・調査面積：216.2 ㎡（東西全長約 100m)


調査区全景（西から）

○調査成果
・調査区は全体にわたって水路による削平が著しく、古代の整地層である可能性のある褐色砂質土層は調査区壁面で確認できたのみで、平面的には残存していない。そのため遺構検出は古墳時代以前の洪水層や地山上で行った。遺構検出面の高さは標高 74.30～74.70mである。
・調査区西部の朱雀大路西側溝、先行朱雀大路西側溝の推定位置で、それぞれ南北溝を検出した。ただし、調査区の幅が南北に狭いうえに、両溝とも古代の遺物が出土しなかったため、朱雀大路あるいは先行朱雀大路の西側溝と断定はできなかった。なお、朱雀大路東側溝については、近世から近代にかけての耕作用水路によって壊された可能性が高い。
・調査区東端で井戸を検出した。重複関係から斜行溝１より新しく、井戸枠が少なくとも２段残存していた。掘方および井戸枠内埋土の出土遺物からみて、藤原宮造営期のものである可能性が高い。掘方から木簡が１点出土した。
・今回の調査では、条坊関連の遺構の検出が期待されたが、その確定には至らなかった。しかし、外周帯に宮造営期と目される井戸が存在することが明らかになったことは、大きな成果である。


南北溝２検出状況（北西から）

【実績値】
・出土遺物：土器 6 箱、軒瓦 8 点、丸・平瓦 14 箱、木製品２箱、銭貨２点、石器１点、骨１点、木簡１点
・記録作成数：遺構実測図 24 枚、写真 15 枚、メモ写真 359 枚
・論文等数：２件（①・②)。
①石田由紀子「発掘調査の概要 藤原宮外周帯の調査（飛鳥藤原第 197-4 次）」『奈文研ニュース』No.72(31 年 3 月)
②石田由紀子ほか「藤原宮外周帯の調査―第 197－4 次」『奈良文化財研究所紀要 2019』（31 年 6 月予定)

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3521F-11

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
【事業名称】	特別史跡藤原宮跡（高殿町道路拡幅）発掘調査（②-1)）

【委託者・受託経費】
委託者： 橿原市
受託経費：440 千円

【担当部課】	都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	【事業責任者】	部長　玉田芳英

【スタッフ】
森川実（主任研究員)、栗山雅夫（企画調整部写真室技術職員）

【年度実績概要】
○高殿町内における市道拡幅にともなう発掘調査であり、橿原市からの受託事業として実施した。調査地は、高所寺池から北へ延びる市道と常楽寺前の東西道路との交差点で、藤原宮東南官衙地区にあたる。
・調査地：奈良県橿原市高殿町
・調査期間：10 月 22 日～10 月 25 日
・調査面積：7.0 ㎡

○調査成果
・検出した遺構は、土坑２基、東西溝１条、小柱穴１基である。
・土坑ＳＫ01 は調査区北西隅および西壁で確認した。遺物は出土していない。土坑ＳＫ02 は、調査区中央部から西辺にかけて検出した不整楕円形の土坑で、調査区のさらに西への広がりを有する。細片化した土器片が少量出土した。東西溝ＳＤ01 は、調査区南端で検出した素掘溝で、ＳＫ02 と重複し、これより新しい。調査区内で確認できたのは北肩のみで、南肩は調査区外である。遺物は出土していない。小柱穴ＳＰ01 は、ＳＫ01 とＳＫ02 の間で検出した。直径 0.4mの円形を呈する。
・南側隣接地の第 188-7 次調査の成果に照らし合わせてみて、層序と遺構検出面が同一であることを確認でき、官衙の遺構はさらに広がると予想される。ただし、調査範囲が狭小であるため、検出した遺構の規模や広がり等を明らかにするには至らなかった。

遺構検出状況（北東から）

【実績値】
・出土遺物：丸・平瓦１箱、土器・陶磁器１箱ほか。
・記録作成数：遺構実測図１枚、写真９枚、メモ写真 33 枚。
・論文等数：１件（①）
①森川実ほか「藤原宮の調査―第 197-5 次」『奈良文化財研究所紀要 2019』（31 年 6 月予定）

【受託】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 3523E

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
【事業名称】	被災資料有害物質発生状況調査業務（②-3)）		
【委託者・受託経費】 委託者：陸前高田市 受託経費：３，５４７千円			
【担当部課】	保存科学研究センター	【事業責任者】	センター長　佐野千絵
【スタッフ】 吉田直人（前保存環境研究室長)、林美木子（文化財防災ネットワーク推進室アソシエイトフェロー)、古田嶋智子（客員研究員)、佐藤嘉則（生物科学研究室長)、早川典子（修復材料研究室長）ほか			

【年度実績概要】

これまでに安定化処理を終えた資料、修理した資料に残存する異臭、保管中の諸問題を対象に、作業者や管理者に有害な化学物質の有無や濃度について調査し、今後の保管及び安定化処理等の進め方について、改善方法を提案することを目的とする。

○保管環境の調査

・温湿度調査

各作業室、資料収蔵室に温湿度測定機器を設置し、管理者である学芸の執務室に温湿度情報を集約して監視できる端末を設置した。

・空気質調査

文化財の保管環境としては問題ないことを確認した。

労働環境の観点から 29 年から問題となっていたナフタレンについては、改善状況について継時観察中である。29 年の換気促進、薬剤除去、ガスバリア袋による封鎖、吸着剤・吸着シート設置により、室内大気中濃度は 28 年の 10 分の 1 まで下がったが、WHO の推奨する濃度の 10 倍にとどまっている。2F は収納スペースであり、1F の作業場所の濃度は WHO の基準を満たし、作業者の健康被害のおそれはなくなったが、より改善できるよう、活性炭シートを追加設置した。

新たな問題として、外部委託で 29 年度に修理した民俗資料について異臭があり、ガスクロマトグラフ質量分析計で定性分析したところ、外構で使用するべき木材防腐処理薬剤によって防腐処理されていることがわかった。建物内の収蔵庫から外のプレハブ倉庫に移し、室内濃度を定量分析したところ、揮発性有機化合物総量（TVOC）が厚生労働省の作業環境の基準より 1 桁高いことが明らかになった。現在、VOC を換気扇で外部に排気し、その効果を 31 年度に把握し、追加の改善措置を検討することとなった。また、労働安全衛生上の配慮から、室内に入る際には有機化合物除去フィルターを装着した小型保護具（マスク）をつけるよう助言した。

・生物生息状況調査

保存環境における生物被害のリスクを緩和するために、害虫及び微生物についての調査を行った。目視による調査では、9 月 27 日の調査時点で、保管してある文化財や資料などに害虫が発生していることはなく整理されているのが確認できた。

活性炭シートの追加設置

○処置作業の改善

水彩など水による洗浄・脱塩が困難な資料への処置方法について検討を始めた。ジェランガムの利用について、撹拌が難しく、一般作業者での利用にあまり適していない例が散見され、改善が必要な状況である。

【実績値】

被災資料有害物質発生状況調査業務報告書　1 件

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3531F-1

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等
【事業名称】	平城宮いざない館詳覧ゾーンにかかる学芸業務および解説案内等業務(③-1))

【委託者・受託経費】
委託者：一般財団法人　公園財団飛鳥管理センター
受託経費：5,132 千円（4 月 1 日～31 年 1 月 31 日)、　1,061 千円（31 年 2 月 1 日～31 年 3 月 31 日）

【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	展示企画室長　加藤真二

【スタッフ】
廣瀬智子（展示企画室アソシエイトフェロー)、田中恵美（展示企画室アソシエイトフェロー)、座覇えみ（展示企画室アソシエイトフェロー）

【年度実績概要】
・展示物の状態確認と日報の作成をおこなった。
　特に、井戸部材（廊下）と斎串（展示室４）については、状態確認・展示環境のモニタリングを重点的に行なっている。その中で判明した温湿度に関する留意点については、管理センターに伝え、館内の展示環境の改善を図った。状態確認の中で確認された展示物の修理必要箇所については、保存科学研究室の協力を得ながら修理を行なった。また、6 月 18 日に発生した北摂地震では、地震発生後、展示状態の確認を行ない、展示物には影響がなかったことを確認したうえで、倒れた題箋類をもとにもどした。さらに、後日、テグスを張るなどの展示物の転倒防止対策をとった。
・奈文研へあった所蔵物の貸出・調査依頼に応じ、展示室４からの展示物の取り出し･搬出、返却後の原状復帰を行なった。
・印刷・出版物の監修、依頼のあった来館者ほかの案内、ボランティアガイド・来館者などからの質問に対応した。
・平城宮跡資料館展示とコラボレーションしたパンフレット､展示室４企画展示コーナーを利用したパネル体験型展示を行った。

作成した平城宮跡資料館展示とコラボしたワークシートと記念品類

・展示室４を中心とした平城宮いざない館全館における展示に関わる訂正・修正箇所の洗い出しを行い、国交省、管理センター、展示業者等関係者に通知した。
・来館者調査を実施した。
・虫害調査を実施した。
・解説案内業務については、いざない館詳覧ゾーンに解説ボランティア 3 人を定点ガイドとして配置するため、展示解説の研修を行ない、来館者への解説案内を実施した。

　なお、31 年 1 月末で受託契約が終了し、委託者・事業内容変わらずで、同年 2 月から受託契約を結び、引き続き事業を行う。

【実績値】
・日報の作成（土日祝日をのぞく毎日）
・展示物・演示具等の補修・調整 27 件（回）
・露出展示物および木製品の計測・グラフ化作業等 90 件
・展示物の借用・調査対応 10 件
・管理センターへの専門的知識に基づく助言・協力・監修 9 件
・印刷・出版物・アプリの校正・監修 7 件
・案内 6 件
・質問対応 60 件
・作成したパンフレット類 2 種類、体験型展示 2 種類
・通知した展示室４を中心とした展示に関わる訂正・修正箇所：131 か所
・来館者調査の実施（10 月 31 日、11 月 6 日）
・虫害調査の実施（31 年 3 月 1 日～11 日、設置したトラップ 76 か所）

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3531F-2

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
【事業名称】	古墳・壁画等の複製品を用いた展示活用に関する情報収集・分析業務（③-1)）		
【委託者・受託経費】 委託者： 文化庁 受託経費：1,977 千円			
【担当部課】	飛鳥資料館	【事業責任者】	学芸室長　石橋茂登
【スタッフ】 若杉智宏（学芸室研究員)、西田紀子（学芸室研究員)、金旻貞（学芸室ｱｿｼｴｲﾄﾌｪﾛｰ）ほか７名			

【年度実績概要】

・茨城県 ひたちなか市埋蔵文化財センターにて虎塚古墳レプリカの展示活用状況を調査した。
・愛知県立芸術大学にて法隆寺金堂壁画模写、高松塚古墳壁画模写などの展示活用状況を調査した。
・徳島県大塚国際美術館にて絵画の陶板複製の展示活用状況を調査した。
・福岡県王塚装飾古墳館にて古墳石室レプリカの展示活用状況を調査した。
・福岡県五郎山古墳館にて古墳石室レプリカの展示活用状況を調査した。
・熊本県立装飾古墳館にて古墳石室レプリカの展示活用状況を調査した。
・高松塚壁画館にて高松塚古墳壁画模写、高松塚古墳石室模型の展示活用状況を調査した。
・キトラ古墳壁画体験館四神の館にてキトラ古墳壁画陶板複製の展示活用状況を調査した
・飛鳥資料館にて高松塚古墳壁画の高精細写真、模写、石室レプリカおよびキトラ古墳壁画の陶板複製、漆喰印刷の展示活用状況を調査した。
・関西大学博物館にて高松塚古墳壁画再現展示室の陶板複製の展示活用状況を調査した。
・国史跡　武蔵府中熊野神社古墳石室復元展示室にて熊野神社古墳石室模型の展示活用状況を調査した。
・福岡市立博物館にて鋤崎古墳石室模型の展示活用状況を調査した。
・漢城百済博物館にて高句麗壁画古墳壁画模写、高句麗壁古墳石室模型の展示活用状況を調査した。
・国立公州博物館にて武寧王陵玄室レプリカの展示活用状況を調査した。
・夫余陵山里古墳群にて１号墳東下塚石室模型の展示活用状況を調査した。
・アンテロス美術館にて絵画の浮き彫り複製の展示活用状況を調査した。
・ウフィッツィ美術館にて絵画の浮き彫り複製の展示活用状況を調査した。
・イタリア　国立サン・マルコ美術館にて絵画の浮き彫り複製の展示活用状況を調査した。
・ドゥオーモ付属博物館にて絵画等の浮き彫り複製の展示活用状況を調査した。

・各調査について結果を取りまとめ、報告書作成に向けた準備を行った。

熊本県立装飾古墳館
千金甲１号墳石室レプリカの調査

【実績値】

・調査　19 施設

【受託】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 3531F-3

業務実績書(受託事業)

中期計画の項目	2-(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
【事業名称】	特別史跡平城宮跡及び藤原宮跡地内における歴史的環境維持業務（③-1)）		
【委託者・受託経費】 委託者： 文化庁 受託経費：14,860 千円			
【担当部課】	研究支援推進部	【事業責任者】	研究支援課長　菊本 惠二
【スタッフ】 江川正（宮跡等活用支援係長)、今西康益（宮跡等活用支援係係員)、我妻 めぐみ（宮跡等活用支援係係員)、 辻本信一（宮跡等活用支援係係員)、窪田さゆり（前宮跡等活用支援係係員）			

【年度実績概要】

特別史跡平城宮跡地内及び藤原宮跡地内における不具合対応策提案及び整備管理業務の実施

平城宮跡地内及び藤原宮跡地内において文化庁が実施する事業を補助し、遺構の保存、公開・活用への環境整備の円滑な進捗を図るもの。実施期間　4 月 1 日から 31 年 3 月 31 日（休日を除く）

1 特別史跡平城宮跡地内及び藤原宮跡地内における不具合対応策提案業務の実施

－1　環境維持、宮跡内施設等の安全確保のための対策提案

○復原施設、遺構表示、便益施設設備の状況観察及び故障等不具合へ対応策提案、対応手配等協力

① 平城宮跡北面大垣整備地既設コンクリートブロック塀・排水対応
② 第一次大極殿免震装置点検
③ 朱雀門風鐸等点検
④ 朱雀門・南面大垣点検
⑤ 宮跡内植栽管理への助言
⑥ 平城宮跡国有地管理への助言
⑦ 藤原宮跡国有地管理への助言　他

平城宮跡草刈り業務状況

－2　緊急事案発生への対応提案

○事件、事故等緊急事案対応への応策提案、対応手配等協力

① 平城宮跡内危険箇所表示対応
② 平城宮跡内水路増水対応
③ 平城・藤原宮跡内倒木対応　他

2 特別史跡平城宮跡地内及び藤原宮跡地内における整備管理業務の実施

－1　平城宮跡及び藤原宮跡における草刈り業務（別途業務外注）管理の実施

○計画及び実施工程等の調整
○施工箇所の点検・確認
○事前の調整（地元自治会等への説明会同席、要望への反映）
○周辺住民等からの要望・苦情の聴取
○聴取内容、施工箇所変更などの業者への伝達

－2　平城宮跡及び藤原宮跡における整備、改修・修繕等の実施にかかる調整対応を実施

○計画及び実施工程等の調整、施工箇所の確認

① 平城宮跡東区朝集殿院水路石垣修繕工事
② 平城宮跡朱雀門南面大垣外装修理工事
③ 遺構展示館養生シート更新
④ 平城・藤原宮跡水路修繕等
⑤ 藤原宮跡民有地等境界柵整備
⑥ 平城宮跡（植栽剪定）
⑦ 藤原宮跡（植栽剪定）他

【実績値】

1－1　不具合対応策提案及び整備管理業務の実施（対応策提案件数　398 件）

1－2　緊急事案発生への対応提案（対応提案件数　16 件）

2－1　草刈り業務管理の実施　平城宮跡 648,138.27 ㎡・藤原宮跡 394,146.96 ㎡、（地元要望調整等対応件数　230 件）

2－2　計画及び実施工程等の調整、施工箇所の確認（調整対応件数　76 件）

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 6110

大項目	Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置
中項目	１．業務改善の取組
事業名	（１）組織体制の見直し

【年度計画】
・国際業務の推進体制の整備の一環として、2019 年 ICOM 京都大会に向けて、機構内における組織体制を整備する。
・情報セキュリティの確保・維持の重要性に鑑み、本部情報担当部門の検討を継続し、設置する。
・平成 30 年 7 月 1 日付で本部に文化財活用センターを開設する。

担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長　伊藤進吾

【実績・成果】
・国際業務の推進体制の整備の一環として、10月に審議役の職を新設した。併せてICOM京都大会の実施に向けて、課長級職員を1人派遣した。
・情報セキュリティの確保・維持のため、10月に本部情報担当部門への職員の配置を行い、本部情報担当部門の拡充を図った。
・7月1日付にて本部に文化財活用センターを開設した。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
国際業務の推進体制整備の一環として、30年度は予定通りICOM京都大会準備室への人員配置を行うことができた。また、本部情報担当の人員を増員することで、機構全体の情報セキュリティの確保・維持の推進を図った。国際業務の推進体制整備、情報セキュリティへの対応を、引き続き進めていく。
文化財活用センターは当初の予定どおり開設した。

【中期計画記載事項】
組織の機能向上のため、組織・体制等の見直しを行う。特に、2019 年 ICOM 京都大会及び 2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に向けて、機構の事業全体を通じて、各施設横断的に国際業務を戦略的に推進する体制を整備する。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
中期計画に沿って、組織の機能向上のための組織・体制の見直しを実施した。28年度の副理事の職の新設に引き続き、「2019年ICOM京都大会」に向けて課長級職員の派遣を行うことで、事業を推進している。
31年度以降も、「2019年ICOM京都大会」、「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会」の開催に向けた国際業務の推進体制整備を、情報セキュリティへの対応と併せて引き続き進めていく。
文化財活用センターについては、今後の状況を踏まえて、対応を行っていく。

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 6120

中項目	１．業務改善の取組
事業名	（２）人件費管理の適正化

【年度計画】
国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数は国家公務員の水準を超えないよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。

担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長　伊藤進吾

【実績・成果】
・人事給与統合システムを利用し、人件費のシミュレーション等を行い、30年度も適正な人件費管理を行った。
・役職員の報酬額については、毎年度総務省の実施している「独立行政法人の役員の報酬等及び職員の給与の水準の公表方法等について（ガイドライン）、平成15年9月9日策定」において、個別の額を公表しており、併せて、法人ウェブサイト上においても掲載している。31年度も引き続き公表することとしている。

【補足事項】
・当法人の給与規程は、国家公務員の職員給与を規定している一般職の給与に関する法律等に準拠している。また、国と異なる諸手当はない。
・ラスパイレス指数は、29年度は、事務・技術職員が98.5、研究職員が99.7となっており、その水準維持に努めた。なお、30年度のラスパイレス指数は31年9月に総務省ウェブサイトにて公表予定である。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	年度計画に沿って、国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数は国家公務員の水準を超えないよう取り組んだ。その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表している。

【中期計画記載事項】
国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数については適正な水準を維持するよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	29年度に引き続き、中期計画に沿って人件費管理の取り組みを実施している。 31年度も引き続き、着実に人件費管理の取り組みを検討、実施する。

【書式A】　施設名 法人全体　処理番号 6130

中項目	1．業務改善の取組
事業名	（3）契約・調達方法の適正化

【年度計画】
①契約監視委員会を実施する。
②施設内店舗の貸付・業務委託について引き続き企画競争を実施する。

担当部課	本部事務局財務課（取りまとめ） 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京文化財研究所研究支援推進部管理課、奈良文化財研究所研究支援推進部総務課、アジア太平洋無形文化遺産研究センター総務担当	事業責任者	事務局長　山下登

【実績・成果】
①「独立行政法人における調達等合理化契約の取組の推進について（平成 27 年 5 月 25 日総務大臣決定)」に基づき、外部委員で構成された契約監視委員会を設置し、機構が 30 年度に締結した契約の点検・見直しを行った。
第 1 回契約監視委員会（11 月 26 日開催）
第 2 回契約監視委員会（令和元年 6 月 12 日開催）
②東京国立博物館（レストラン、自動販売機、平成館ラウンジ飲食店、黒田記念館カフェ、ミュージアムショップ）、奈良国立博物館（ミュージアムショップ・レストラン）、奈良文化財研究所（飛鳥資料館ミュージアムショップ、平城宮跡資料館ミュージアムショップ）については企画競争を実施済み。30 年度においては、同様に貸借期間終了に伴い京都国立博物館にて、ミュージアムショップ・レストランの企画競争を実施した。今後も、賃貸借期間終了時に順次企画競争を実施予定である。
○
・30 年 11 月に機構内の会計系職員を対象とした研修を行った。（22 人が参加）
・より多くの競争参加業者を募るため、公告期間をこれまでの「10 日間以上」から自主的措置として 20 日間以上確保するように引き続き努めている。
・列品等修理契約について、修理契約委員会を設置し、修理可能な業者が複数存在すると判断された契約は企画競争を実施している。

一般競争入札件数

年度	29 年度	30 年度	増減
件数	129 件	136 件	7 件

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり取組を実施している。

【中期計画記載事項】
「独立行政法人における調達等合理化の取組の推進について」（平成27年5月25日総務大臣決定）に基づき、引き続き取組を着実に実施し、文化財の購入等、随意契約が真にやむを得ないものを除き、競争性のある契約への移行を推進することにより、経費の効率化を行い、随意契約によることができる事由を会計規定等において明確化し、公正性・透明性を確保しつつ合理的な調達を実施する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり取組を実施している。

【書式A】　施設名 法人全体　処理番号 6140

中項目	1．業務改善の取組
事業名	（4）共同調達等の取組の推進

【年度計画】
本部事務局、東京国立博物館、東京文化財研究所について、上野地区（東京藝術大学、国立科学博物館、国立西洋美術館）における再生PPC用紙、トイレットペーパー、廃棄物処理、古紙等売買、複写機賃貸借、トイレ洗浄機器等賃貸借の共同調達を引き続き実施する。他施設での実施についても、引き続き周辺機関と協議する。

担当部課	本部事務局財務課（取りまとめ） 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京文化財研究所研究支援推進部管理課、奈良文化財研究所研究支援推進部総務課、アジア太平洋無形文化遺産研究センター総務担当	事業責任者	事務局長　山下登

【実績・成果】
・本部事務局、東京国立博物館、東京文化財研究所について、引き続き上野地区（東京藝術大学、国立科学博物館、国立西洋美術館）における再生PPC用紙、トイレットペーパー、廃棄物処理、古紙等売買、便器洗浄機器賃貸借、複写機賃貸借及び保守業務の共同調達を実施した。（再生PPC用紙、トイレットペーパー、廃棄物処理、古紙等売買：本部事務局、東京国立博物館、東京文化財研究所、東京藝術大学、国立科学博物館、国立西洋美術館。便器洗浄機賃貸借：東京国立博物館、国立科学博物館、国立西洋美術館。複写機賃貸借及び保守業務：本部事務局、東京国立博物館、東京文化財研究所、国立科学博物館）。
・京都国立博物館では、京都国立近代美術館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所と共同調達を実施した（PPC用紙及びトイレットペーパー）。
・奈良国立博物館では、 PPC用紙及びトイレットペーパーについて、近隣の共同調達契約を調査し、業者と交渉した結果、共同調達と同額又はそれ以下に納入金額を引き下げて調達を実施した。共同調達については、事務負担等を考慮し、現状では見合わせているが、近隣の共同調達契約の動向に応じて、必要があれば共同調達への参加について今後も検討を進める。
・九州国立博物館では、九州地区の大学とPPC用紙及びトイレットペーパー及びガソリンカードの利用について共同調達を実施した。
・奈良文化財研究所では、PPC用紙及びトイレットペーパーについて、近隣機関の共同調達における納入金額と同額にて独自に調達を実施した。その他の物品の共同調達については、引き続き検討を進める。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり取組を実施している。

【中期計画記載事項】
各施設の業務内容や地域性を考慮しつつ、コピー用紙等の消耗品や役務について、周辺の他機関等との共同調達等の取組を推進する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり取組を実施している。

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 6151

中項目	１．業務改善の取組
事業名	（５）一般管理費等の削減　①機構内の共通的な事務の一元化による業務の効率化

【年度計画】
機構のネットワークの統合を検討し、業務の効率的な運用及び情報の共有化を推進する。

担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長　伊藤進吾

【実績・成果】
・次期機構ネットワークの検討として複数事業者から意見徴収を行い、うち一社は簡易コンサルとして外部委託し、技術的検討の参考とした。(31年3月)
・機構内各施設の担当者と検討・調整を行い、次期機構ネットワークの31・32年度の設計構築に向けた準備を進めた。

【補足事項】
ネットワーク統合の統合効果を最大化するため、メールサーバ統合とサイボウズの外部化を合わせて検討・実施している。統合メールシステムの段階的導入については、処理番号6200を参照。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
一般管理費	1,277百万円	中期目標期間中15%以上効率化	－		832	1,080	831	754
業務経費	5,956百万円	中期目標期間中5%以上効率化	－		6,319	6,580	5,417	6,159

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	次期機構ネットワークの検討を進め、31・32年度の設計構築に向けたスケジューリングの目処を立てることができた。

【中期計画記載事項】
中期目標の期間中、一般管理費については１５％以上、業務経費については５％以上の効率化を行う。ただし、文化財購入費、文化財修復費等の特殊要因経費はその対象としない。また、人件費については次項（２）及びⅨ４．に基づき取り組むこととし、本項の対象としない。このため、事務、事業、組織等の見直しや、サービスの質を維持した上で外部委託により経費削減が可能な業務を引き続き精査して計画的にアウトソーシングするなど業務の効率化を図る。
具体的には下記の措置を講じる。
①機構内の共通的な事務の一元化による業務の効率化（略）

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	機構共通事務システムの基盤である機構ネットワークの、今中期目標期間内の更新に向けて、必要な準備を進めることができた。 メールサーバ統合は、クラウド化と運用の本部一元化により、サービスの質を維持した上で効率的な管理運用を図っている。

【書式A】　施設名 法人全体　処理番号 6152

中項目	１．業務改善の取組
事業名	（５）一般管理費等の削減　②計画的なアウトソーシング

【年度計画】
以下の業務の外部委託を継続して実施する。
（東京国立博物館）
・警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務
・資料館業務の一部
・施設内店舗業務
（京都国立博物館）
・看視案内業務及び設備保全業務の一部
・受付・案内・警備業務、売札業務及び清掃業務
（奈良国立博物館）
・建物設備の運転・管理業務
・警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務
（九州国立博物館）
・建物設備の運転・管理業務等
・警備業務、看視案内業務及び清掃業務
（東京文化財研究所・奈良文化財研究所）
・警備業務、清掃業務及び建物設備の運転・管理業務等

担当部課	本部事務局財務課（取りまとめ） 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京文化財研究所研究支援推進部管理課、奈良文化財研究所研究支援推進部総務課、アジア太平洋無形文化遺産研究センター総務担当	事業責任者	事務局長　山下登

【実績・成果】
・全ての施設において、電気設備保守業務、機械設備保守業務、昇降機設備保守点検業務、構内樹木等維持管理業務、清掃業務、各種事務補助作業等について民間委託を実施している。
・博物館は警備・展示室監視等業務の大部分を民間委託している。また、研究所は警備業務の全てを民間委託している。
・博物館の来館者サービスに関しては、売札業務、受付・案内業務、託児業務、ロケーション撮影対応業務、図書・写真資料を閲覧等の利用に供するサービス及び図書整理業務等について民間委託を実施している。
・東京国立博物館では、引き続き茶室、大講堂等の施設貸出業務及び音声ガイド貸出業務について民間委託を実施している。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり外部委託を実施している。

【中期計画記載事項】
（略）事務、事業、組織等の見直しや、サービスの質を維持した上で外部委託により経費削減が可能な業務を引き続き精査して計画的にアウトソーシングするなど業務の効率化を図る。
　具体的には以下の措置を講じる。
（略）②計画的なアウトソーシング

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり外部委託を実施している。

【書式A】　施設名 法人全体　処理番号 6153

中項目	1．業務改善の取組
事業名	（5）一般管理費等の削減　③使用資源の減少

【年度計画】
・省エネルギー　光熱水量の使用状況を把握し、管理部門を中心に引き続き節減に努める。
・廃棄物減量化　使用資源の節減に努め、廃棄物の減量化に引き続き努める。
・リサイクルの推進　廃棄物の分別収集を徹底し、リサイクルを引き続き推進する。

担当部課	本部事務局財務課（取りまとめ） 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京文化財研究所研究支援推進部管理課、奈良文化財研究所研究支援推進部総務課、アジア太平洋無形文化遺産研究センター総務担当	事業責任者	事務局長　山下登

【実績・成果】
・日常の節電節水の周知徹底、クールビズ・ウォームビズの推進、冷暖房の省エネ運転、照明のLED化の推進等を行った。
・廃棄物削減では、両面印刷の励行、館内LAN・電子メール等の活用を引き続き行い、会議でのiPad活用による文書のペーパーレス化を実施した。
・リサイクルの実施（廃棄物の分別収集、リサイクル業者への古紙売り払い、再生紙の発注等）
・使用資源の推移等

光熱水使用量

事項	29年度	30年度	増減	増減率
電気（kwh）	25,703,795	25,705,596	1,801	0.01%
ガス（㎥）	1,984,170	1,941,360	-42,810	-2.16%
水道（㎥）	154,269	157,555	3,286	2.13%

日常の節電節水の周知徹底、冷暖房の省エネ運転等を実施したが、以下の外的要因により使用量は電気と水道について増加した。
電気使用量　奈良文化財研究所において、本庁舎移転に伴う電気使用量の増加があった。（前年度比14.36%増）
水道使用量　奈良文化財研究所において、平城宮跡資料館で発生した水漏れに伴う増加があった。（前年度比25.5%増）

廃棄物排出量

事項	29年度	30年度	増減	増減率
一般廃棄物（kg）	232,251	210,462	-21,789	-9%

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29
光熱水量								
電気量(kwh)	25,705,596	－	－	経年変化	26,425,896	24,981,029	25,475,017	25,703,795
ガス量(㎥)	1,941,360	－	－		1,904,708	1,888,670	1,961,450	1,984,170
水道量(㎥)	157,555	－	－		148,365	143,070	144,711	154,269
廃棄物排出量(kg)	210,462	－	－		241,900	225,151	225,453	232,251

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 各施設においては計画通り節減に努めており、光熱水使用量及び廃棄物排出量の増加は30年度の外的要因によるところが大きい。

【中期計画記載事項】
（略）事務、事業、組織等の見直しや、サービスの質を維持した上で外部委託により経費削減が可能な業務を引き続き精査して計画的にアウトソーシングするなど業務の効率化を図る。
具体的には以下の措置を講じる。
（略）③使用資源の減少
・省エネルギー　・廃棄物減量化　・リサイクルの推進

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 各施設においては計画どおり節減に努めており、光熱水使用量及び廃棄物排出量の増加は30年度の外的要因によるところが大きい。

【書式Ａ】　施設名 本部事務局　処理番号 6200

中項目	２．業務の電子化
事業名	業務の電子化

【年度計画】
機構ウェブサイトにおいて、機構に関する情報の提供を引き続き行い、政府の方針に沿ってオープンデータを推進し、各事務システムの継続運用とバックアップ・インフラ増強に努める。

担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長　伊藤進吾

【実績・成果】
・引き続き機構ウェブサイトを運用し、機構に関する情報の提供を行った。
・政府の方針に沿ってオープンデータを推進し、「e国宝」「ColBase」の運用を継続した。なお本案件は、7月1日発足の文化財活用センターへ引き継いだ（処理番号1321HA参照）。
・機構共通の各事務システム（グループウェア「サイボウズ」、財務会計システム「GrowOne」、人事給与統合システム「U-PDS」、web給与明細システム「U-PHS HR」）及びその基盤ネットワーク「機構VPN(Virtual Private Network)」を継続運用した。
・各施設が共通事務システムへ接続する際に利用する回線である、本部・東京国立博物館のインターネット接続回線を100Mbpsから1Gbpsに増強した。(6月25日)
・グループウェア「サイボウズ」のサーバーを更新した。(31年2月22日)
・段階的メール統合の一環として、メール用ストレージを導入し、本部運用を開始した。(8月1日)

【補足事項】
・統合メールシステムの導入を段階的に進めており、29年12月導入の統合メールゲートウェイ（クラウド）と、8月導入のメール用ストレージ（クラウド）について、本部運用を開始した。また、31年度導入予定の統合メールサーバ（クラウド）に向けて必要な準備・検討を行った。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	機構ウェブサイト、及び機構共通事務システムの運用を継続するとともに、必要なサーバー更新・回線増強を適宜行うことができた。

【中期計画記載事項】
機構に関する情報の提供、オープンデータの推進、業務・システムの最適化等を図ることとし、ＩＴ技術を活用した業務の効率化に努める。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	また、29年度から31年度にかけて段階的に進めているメールシステムの本部統合とクラウド化について、予定通り30年度導入分まで運用開始し、31年度導入分の準備を進めることができた。

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 6300

中項目	３．予算執行の効率化
事業名	予算執行の効率化

【年度計画】
運営費交付金収益化基準として業務達成基準が原則とされたことを踏まえ、収益化単位の業務を設定するとともに、収益化単位の業務及び管理部門の活動と運営費交付金の対応関係を明確にする。

担当部課	本部事務局財務課	事業責任者	課長　香取雄太

【実績・成果】
「独立行政法人の中期計画、中長期計画及び事業計画に係る予算等について」（中央省庁等改革推進本部事務局 平成12年4月策定，平成27年3月総務省行政管理局修正）の記載（「業務経費については、中期目標等、中期計画等の業務運営の効率化に関する項や業務の質の向上に関する項において具体的に記載される業務内容との対応関係が明らかになるように定めるものとする。」）に基づき、収益化単位と中期目標、中期計画記載事項とを一致させ、法人業務の成果を予算的にも国民に分かりやすいものになるよう継続して取り組んだ。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	計画どおり取組を実施している。

【中期計画記載事項】
運営費交付金収益化基準として業務達成基準が原則とされたことを踏まえ、収益化単位の業務ごとに予算と実績を管理する体制を構築する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	計画どおり取組を実施している。

【書式A】　施設名 法人全体　処理番号 7110

大項目	Ⅲ　財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置
中項目	１．自己収入拡大への取組
事業名	（１）自己収入拡大への取組

【年度計画】
機構全体において、展示事業等収入額について前中期目標の期間の実績の年度平均を上回ることを目指す。

担当部課	本部事務局財務課（取りまとめ） 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京文化財研究所研究支援推進部管理課、奈良文化財研究所研究支援推進部総務課	事業責任者	事務局長　山下登

【実績・成果】
展示事業等収入については、下表のとおり1,917,262千円となり、目標を上回った。

	目標値	平成 30 年度
展示事業等収入	1,538,510 千円	1,917,262 千円

※目標値は、前中期目標期間の実績の年度平均。
※受託研究・受託事業を除く。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
自己収入額 （展示事業等収入）	1,917,262千円	1,538,510千円	A		1,730,218	1,817,119	1,714,563	2,260,173

【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり取り組みを実施しており、目標を上回ることができた。

【中期計画記載事項】
展覧事業の集客力を高める工夫による来館者数の増加に努め、自己収入の確保を図るとともに、賛助会員等への加入者の増加に継続的に取り組み、寄附金の獲得を目指す。また、（略）競争的資金の獲得等財源の多様化を図り、機構全体として積極的に自己収入の増加に向けた取組を進めることにより、前中期目標の期間の実績以上の自己収入を得ることを目指す。

【中期計画に対する評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり取り組みを実施しており、目標を上回ることができた。

【書式A】　施設名 法人全体　処理番号 7120

中項目	１．自己収入拡大への取組
事業名	（２）外部資金の獲得

【年度計画】
機構全体において、寄附金等の外部資金獲得により財源の多様化を図る。

担当部課	本部事務局財務課（取りまとめ） 東京国立博物館総務部経理課、京都国立博物館総務課、奈良国立博物館総務課、九州国立博物館総務課、東京文化財研究所研究支援推進部管理課、奈良文化財研究所研究支援推進部総務課	事業責任者	事務局長　山下登

【実績・成果】
寄附金については、下表のとおり 827,718 千円となり、目標値を上回った。

	目標値	平成 30 年度
寄附金	439,574 千円	827,718 千円

※目標値は、前中期目標期間の実績の年度平均。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
寄付金等額 （その他寄付金等）	827,718千円	439,574千円	A		789,808	795,744	753,812	732,210

【年度計画に対する総合評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり取組を実施しており、目標を大幅に上回ることができた。

【中期計画記載事項】
展覧事業の集客力を高める工夫による来館者数の増加に努め、自己収入の確保を図るとともに、賛助会員等への加入者の増加に継続的に取り組み、寄附金の獲得を目指す。また、（中略）競争的資金の獲得等財源の多様化を図り、機構全体として積極的に自己収入の増加に向けた取組を進めることにより、前中期目標の期間の実績以上の自己収入を得ることを目指す。

【中期計画に対する評価】 評定：A	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり取組を実施しており、目標を大幅に上回ることができた。

【書式A】　施設名 東京国立博物館　処理番号 7130A

中項目	1．自己収入拡大への取組
事業名	（3）保有資産の有効利用の推進

【年度計画】
（博物館4施設）
①講座・講演会等を開催する。
②講堂等の利用案内を関係団体、学校等外部に対し積極的に行う。
③国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサート等を実施し、施設の有効利用を図る。

担当部課	総務部総務課	事業責任者	課長　竹之内勝典

【実績・成果】
（博物館4施設）
①講座・講演会等を様々な年齢層に向けて開催した。
②施設の貸し出しについては、ウェブサイトでの周知とともに、リピーターを増やすべく会場の下見対応、当日利用時などできめ細やかなサービスを心がけるなど、利用者の満足度向上に努めた。
③30年度も入館者層の拡充と施設の有効利用を目的として、コンサートや寄席、野外シネマ、ビアガーデンなど29件のイベントを実施し、約16,000人の参加があった。また国際交流イベントとして「留学生の日」を実施し無料観覧（総合文化展のみ）のほか、茶会、英語ガイド、ガイドツアーなどを行い、803人の来場があった。

【補足事項】
① 企業等のパーティー、撮影（映画・ドラマなどのムービー、雑誌等のスチール）、茶室・講堂の有効利用を図った。
・企業等のパーティーなどユニークベニューの収入は、14 件 51,288 千円であった。（29 年度実績 14 件 43,077 千円）
・撮影による収入は 298 件 25,687 千円であった。（29 年度実績 336 件 25,865 千円）
・29 年 4 月より、業務効率化と民間の接客対応を取り入れるため、撮影業務に加え、講堂と茶室の貸し出しについても外部委託を開始した。
② 新規来館者の獲得を図るため、29 年度に引き続き「博物館で野外シネマ」と「トーハク BEER NIGHT!」を実施し、それぞれ 5,125 人（2 日間実施予定のうち雨天のため 1 日中止）、11,286 人（4 日間実施予定のうち雨天のため 1 日中止）の来場者があった。さらに、この 2 つのイベントに不可欠なレジャーシートを、当館公式キャラクターを使用し制作・販売した（販売実績：743 枚、344 千円）。

「博物館で野外シネマ」実施の様子

「トーハク BEER NIGHT!」実施の様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
施設の有効利用件数	781件	－	－		664	652	747	866
うち有償利用件数	485件	－	－		402	434	529	581

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
施設の有効利用については外部委託した民間業者とも緊密に連携し、より積極的な受け入れ体制を整えることができた。特にロケーション撮影については、建物別の撮影実績を分析し、ウェブサイトでの周知方法を定期的に見直すなどの対応を行った。
ユニークベニューについても大型案件の受け入れに成功したことにより、施設の有効利用収入は、29 年度以上の収入を確保することができた。

【中期計画記載事項】
（略）保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施するなどの施設の有効利用の推進、競争的資金の獲得等財源の多様化を図り、機構全体として積極的に自己収入の増加に向けた取組を進めることにより、前中期目標の期間の実績以上の自己収入を得ることを目指す。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
重要文化財を含む伝統ある博物館の施設、広大な敷地を有効に活用するべく、広報、リピーターの確保等積極的に行った結果、30 年度も堅調な実績を上げることができた。

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 7130B

中項目	１．自己収入拡大への取組
事業名	（３）保有資産の有効利用の推進

【年度計画】
（博物館４施設）
①講座・講演会等を開催する。
②講堂等の利用案内を関係団体、学校等外部に対し積極的に行う。
③国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサートなどを実施し、施設の有効利用を図る。

担当部課	総務課	事業責任者	課長　數馬厚人

【実績・成果】
（博物館４施設）
①　展覧会に関する講演会、土曜講座を開催したほか、対談イベントや映画上映会（解説つき）を開催した。
②　外部サイトにロケーション撮影の案内を掲載したほか、明治古都館・グランドロビーなどの施設貸出や貸切鑑賞会の利用案内（利用時間、料金等）を当館ホームページに掲載した。
③　従前の「京都・らくご博物館」のほかに、留学生を対象に日本文化への理解を深めるため、「留学生の日」を設け、特別展「京のかたな」の割引観覧やグッズの無料配布を実施した。また、大学・企業・近隣地域等と連携し、講堂や庭園でイベントを開催した。

【補足事項】
①　講座・講演会等
・「森見登美彦氏、京都国立博物館で語る」　場所：平成知新館講堂　参加人数：178 人 応募者数：720 人
小説家の森見登美彦氏をお招きし、対談形式で作品に登場する京都の名所と博物館の繋がりを紹介した。
・「映画上映会「羅生門」」　参加人数：84 人
淺湫毅連携協力室長による羅生門に関する文化財の紹介を行った後、映画上映会を開催した。
・「明治古都館特別公開」　参加人数：2,500 人
②　外部への会場提供
・映像(ドラマ、CM 等)・商品カタログ等の撮影(平成知新館、庭園、茶室)、茶会の開催(茶室)、会議・講演会等の開催(講堂・会議室・研修室)、式典・パーティ等の開催(平成知新館グランドロビー、庭園)。
③　コンサート等のイベント
・「京都・らくご博物館」４回　場所：平成知新館講堂　参加者数：675 人
・「留学生の日」　場所：平成知新館　参加者数：39 人
・「京都女子大学ファッションショー・プロジェクションマッピング」　場所：庭園・水盤テラス　参加人数：300 人
・「いけばなパフォーマンス」 場所：明治古都館中央ホール 参加人数：232 人
・「芸舞妓 春の舞」　場所：講堂 参加人数：364 人
・「日中平和友好条約締結 40 周年記念特別企画「中国近代絵画の巨匠　斉白石」開催記念「中国茶会」 場所：茶室 参加人数：192 人
・「堪庵　春の呈茶席」　場所：茶室　参加人数：250 人
・「陶磁器マルシェ」　場所：庭園　参加人数：2,461 人

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
施設の有効利用件数	165件	－	－		63	112	105	122
うち有償利用件数	143件	－	－		57	104	93	86

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	ロケーション撮影については、「ロケスポット京都」などの外部サイトに案内を掲載したほか、パンフレットを作成し、ホテルや映像制作会社に送付した。明治古都館や平成知新館グランドロビーの施設貸出や貸切鑑賞会の利用案内を当館ホームページに掲載し、外部に対して積極的に広報を行った。ロケーション撮影については30年度から規則が適用されたこともあり、利用金額・件数ともに29年度と比べ大幅に増加した。 入館者拡大のために、無関心層を取り込むための新たなイベントを試みた。30年度は特に、平常展・庭園開放日の集客を図るため、講堂・庭園・茶室において展覧会や文化財に関連したイベントを実施した。

【中期計画記載事項】
（略）保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施するなどの施設の有効利用の推進、競争的資金の獲得等財源の多様化を図り、機構全体として積極的に自己収入の増加に向けた取組を進めることにより、前中期目標の期間の実績以上の自己収入を得ることを目指す。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	ウェブサイトでの周知等の新たな広報手段の活用や規則の整備に取り組むとともに入館者数拡大のための新規イベントを企画し、本来業務に支障のない範囲で実施した。その結果、中期計画どおりに順調に成果を上げている。

【書式Ａ】　施設名　奈良国立博物館　処理番号　7130C

中項目	１．　自己収入拡大への取組
事業名	（３）保有資産の有効利用の推進

【年度計画】
（博物館４施設）
①講座・講演会等を開催する。
②講堂等の利用案内を関係団体、学校等外部に対し積極的に行う。
③国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサート等を実施し、施設の有効利用を図る。

担当部課	総務課	事業責任者	課長　臣守常勝

【実績・成果】
（博物館４施設）
①公開講座、サンデートーク、正倉院展ボランティア解説、特別鑑賞会、文化財保存修理所特別公開等を開催した。
②小学生を対象に世界遺産学習を実施した。
③地元自治体等と連携し、入館者の拡大を目的とした各種イベントを実施した。

【補足事項】
①講座・講演会
　公開講座(14回)、サンデートーク(12回)、正倉院展ボランティア解説(77回)、特別鑑賞会(8回)、文化財保存修理所特別公開（3回）等
③イベントの実施
・講堂：「あおによしならのみやこでヒストリア」、「親子で学ぼう奈良の仏像」、「夏休み親子新聞教室ではがき新聞づくり」、「第70回正倉院展親子鑑賞会」、「文化財保存修理所特別公開」、「お水取り展鑑賞とお松明」
・地下回廊：「オリジナル手芸作品展示」、親子ワークショップ「織ってみよう！糸のみほとけ」、親子ワークショップ「オリジナルうちわ作り」
・会議室：ワークショップ「天寿国繡帳の繡い方を体験しよう」
・写場：「仏像を撮ってみよう！」
・展示室：「朝活　心静かにみほとけを観る」、「綴織実演」
・庭園・茶室：「庭園散策ツアー」、「お水取り講話と粥の会」
・敷地内：「せんとくんが奈良博にやってくる」、「第70回正倉院展記念音燈華スペシャルコンサート」等
○会場提供
・講堂：「奈良学園大学新入生オリエンテーション」、「奈良シニア大学記念講演」、「なら国際映画祭」
・仏教美術資料研究センター：CM撮影
・庭園・茶室：「第六回珠光茶会」、「なら瑠璃絵」
・敷地内：「なら燈花会」、「第3回春日野音楽祭まちなかステージ」、「奈良市アートプロジェクト」等

第 70 回正倉院展記念コンサート

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
施設の有効利用件数	112件	－	－		117	117	113	111
うち有償利用件数	18件	－	－		34	33	21	19

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 それぞれの展覧会の内容に即したイベントを多数行うことができた。特別展「糸のみほとけ」の関連イベントとして展示室内で実施した「綴織実演」では、実際に技術者が織機で作業している様子を来館者に見学していただくことで、展示品に関する知識を深めていただいた。

【中期計画記載事項】
（略）保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施するなどの施設の有効利用の推進、競争的資金の獲得等財源の多様化を図り、機構全体として積極的に自己収入の増加に向けた取組を進めることにより、前中期目標の期間の実績以上の自己収入を得ることを目指す。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 コンサート会場として施設を利用したり、地元自治体等と連携してイベント実施することで博物館の認知度を向上させることができており、順調に施設を活用している。また、旅行会社と連携して、解説付き展覧会鑑賞ツアーや仏像館の夜間貸切見学を実施することで自己収入を獲得することができた。

【書式Ａ】　施設名　九州国立博物館　処理番号　7130D

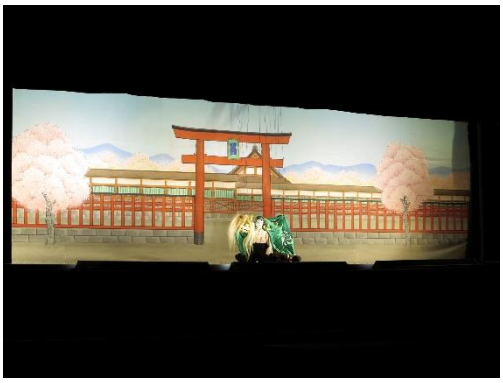
中項目	１．自己収入拡大への取組
事業名	（３）保有資産の有効利用の推進

【年度計画】
（博物館４施設）
①講座・講演会等を開催する。
②講堂等の利用案内を関係団体、学校等外部に対し積極的に行う。
③国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサートなどを実施し、施設の有効利用を図る。

担当部課	交流課 総務課	事業責任者	課長　山野孝 課長　國谷勝伸

【実績・成果】
（博物館４施設）
①特別展及び特集展示等に関する講演会・講座等を開催した。
②ミュージアムホール、茶室及び研修室等の外部団体への貸出を積極的に行った。
③落語家による「みゅーじあむ寄席」の開催や、ミュージアムコンサート等を行い、施設の有効利用を図った。

【補足事項】
①展示関連の講演会等の開催
1）特別展及び文化交流展（特別展示）関連イベント
・特別展「至上の印象派展 ビュールレ・コレクション」関連講演会
「印象派の至宝を楽しむ ビュールレ・コレクションの名画の数々」（5月19日開催　参加者数：210人）
※上記を含む特別展関連講演会　計5回開催
・特集展示「京都仁和寺観音堂 千手観音像とその仲間たち」記念講演会「京都仁和寺の歴史と観音堂」（7月22日開催　参加者数：80人）
※上記を含む特集展示関連講演会　計7回開催
②外部団体への施設の貸出
・ 9月16日　太宰府市民茶会（太宰府茶道文化連盟）
・10月28日　筑紫地区未来フォーラム2018（一般社団法人つくし青年会議所主催）
③国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサートの開催
・ミュージアムコンサート「弦に想いをのせて」（4月21日　参加者数：150人）
・江戸糸あやつり人形劇（8月18日　参加人数：296人）
・みゅーじあむ寄席（31年1月19日　参加者数：250人）
・これまで有償貸与の対象ではなかったエントランスホールの貸出についての制度化の検討を開始した。


「江戸糸あやつり人形劇」の様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
施設の有効利用件数	328件	－	－		321	392	355	280
うち有償利用件数	75件	－	－		120	118	116	96

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 会議・昼食利用のための会議室の貸与及び展示・講演会のためのミュージアムホールの貸与など、有効利用の推進を順調に履行できた。

【中期計画記載事項】
（略）保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施するなどの施設の有効利用の推進、競争的資金の獲得等財源の多様化を図り、機構全体として積極的に自己収入の増加に向けた取組を進めることにより、前中期目標の期間の実績以上の自己収入を得ることを目指す。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 会議室に関しては会議や昼食利用等の貸与を定期的に行い、有効利用の推進を順調に履行できた。一方、ミュージアムホールに関しては特別展「ビュールレ・コレクション」の待機列整理のために6月から7月にかけて長期間使用することができず、貸与件数は伸び悩んだ。31年度以降も引き続きコンサートや講演会等を積極的に受入れることで、施設の有効利用の推進に取り組む。

【書式A】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 7130E

中項目	１．自己収入拡大への取組
事業名	（３）保有資産の有効利用の推進

【年度計画】
（文化財研究所２施設）
　セミナー室、講堂等一般の利用の供することが可能な施設の有料貸付を実施するとともに、展示公開施設におけるミュージアムショップの運営委託等、施設の有効利用の推進を引き続き図る。

担当部課	研究支援推進部	事業責任者	部長　外間尹隆

【実績・成果】
・セミナー室、会議室等を利用することにより、施設の有効利用の推進を図った。
・研究成果を広く一般にも公表するためのオープンレクチャーを30年度も開催した。この事業は台東区との連携事業として毎年開催されている「上野の山文化ゾーンフェスティバル」に東京文化財研究所のオープンレクチャーを同事業の講演会シリーズとして実施している。また、本事業はbeyond2020プログラムとして認証を受け実施することができた。
・当研究所の本来業務に支障のない範囲で外部機関へ施設の有償貸付を実施した。

【補足事項】
・第52回オープンレクチャー「かたちからの道、かたちへの道」
・有償貸付例：「伝統建築工匠の技」の保存、活用及び発展を考える（第1回）
（4月21日、「伝統建築工匠の技」の保存、活用及び発展を推進する会）

オープンレクチャーの様子

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
施設の有効利用件数	198件	－	－		164	186	185	200
うち有償利用件数	13件	－	－		12	7	9	10

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	施設の有効利用の促進を図るべく、当研究所の会議室及びセミナー室の有償貸付を実施した。例年開催しているオープンレクチャーについては、beyond2020プログラムとして認証を受けて実施することができるなど、施設利用の拡大を図ることができた。なお、外部機関への有償貸付は13件実施した。

【中期計画記載事項】
　（略）保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施するなどの施設の有効利用の推進、競争的資金の獲得等財源の多様化を図り、機構全体として積極的に自己収入の増加に向けた取組を進めることにより、前中期目標の期間の実績以上の自己収入を得ることを目指す。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	今中期計画期間3年目である30年度は、29年度に引き続き、beyond2020プログラムとして認証を受ける事業として第52回オープンレクチャーを実施することができた。31年度も同様に、当研究所の保有資産の有効利用を推進する予定である。

【書式Ａ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 7130F

中項目	１．自己収入拡大への取組
事業名	（３）保有資産の有効利用の推進

【年度計画】
（文化財研究所２施設）
セミナー室、講堂等一般の利用の供することが可能な施設の有料貸付を実施するとともに、展示公開施設におけるミュージアムショップの運営委託等、施設の有効利用の推進を引き続き図る。

担当部課	研究支援推進部研究支援課	事業責任者	課長　菊本恵二

【実績・成果】
（文化財研究所２施設）
当研究所ウェブサイトに講堂等の一時使用について、掲載し、広く周知して、利用者の獲得を図った。

施　設　名	30 年度
平城宮跡資料館　講堂	80　件　（内　有償貸与　6　件）
平城宮跡資料館　小講堂	142　件　（内　有償貸与　6　件）
飛鳥資料館　講堂	5　件　（内　有償貸与　0　件）
その他　（仮庁舎・収蔵庫棟）	20　件　（内　有償貸与　17　件）
合　　計	247　件　（内　有償貸与　29　件）

【補足事項】
29年度実績

施　設　名	29 年度
平城宮跡資料館　講堂	137　件　（内　有償貸与　7　件）
平城宮跡資料館　小講堂	136　件　（内　有償貸与　11　件）
飛鳥資料館　講堂	54　件　（内　有償貸与　0　件）
その他　（仮庁舎・収蔵庫棟）	20　件　（内　有償貸与　17　件）
合　　計	347　件　（内　有償貸与　35　件）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
施設の有効利用件数	247件	－	－		286	256	296	347
うち有償利用件数	29件	－	－		26	43	52	35

【年度計画に対する総合評価】
評定：Ｂ

【判定根拠、課題と対応】
・奈良県のイベント（天平祭等）の内容の見直しで利用されなかったこと等が原因で講堂、小講堂の利用件数が減少したが、他の施設においては、29年度同様、貸与を積極的に実施し、自己収入の獲得に貢献した
・31年度以降については、30年度の減少理由の改善案を検討し、利用者のニーズ等、に沿った施設の有効利用の推進を本来業務の支障の無い範囲で実施する。

【中期計画記載事項】
（略）保有資産については、その必要性や規模の適切性についての検証を適切に行うとともに、映画等のロケーションのための建物等の利用や会議・セミナーのための会議室の貸与等を本来業務に支障のない範囲で実施するなどの施設の有効利用の推進、競争的資金の獲得等財源の多様化を図り、機構全体として積極的に自己収入の増加に向けた取組を進めることにより、前中期目標の期間の実績以上の自己収入を得ることを目指す。

【中期計画に対する評価】
評定：　Ｂ

【判定根拠、課題と対応】
・30年度も29年度に引き続き、一般利用申し出に対する有効利用の推進等を行い、自己収入の増加を図った。今中期計画においても、本来業務に支障の無い範囲で実施しながら、前中期目標期間の実績以上の自己収入を得ることを目指す。

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 7300

中項目	３．決算情報・セグメント情報の充実等
事業名	決算情報・セグメント情報の充実等

【年度計画】
独立行政法人会計基準に従い、引き続き適切な決算情報・セグメント情報の開示を実施する。

担当部課	本部事務局財務課	事業責任者	課長　香取雄太

【実績・成果】
29年度に引き続き、29年度決算（30年度実施）についても、「独立行政法人会計基準」（27年1月改訂）に従い以下のとおり公表情報の充実を図った。
・財務諸表附属明細書「セグメント情報」については、「臨時損失等」「行政サービス実施コスト」欄を設け、公表情報を充実化している。
・決算報告書については、機構全体の決算報告に加えてセグメント（事業区分）毎の情報を公表した。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	計画どおり取組を実施している。

【中期計画記載事項】
機構の財務内容等の一層の透明性を確保し、活動内容を政府・国民に対して分かりやすく示し、理解促進を図る観点から、事業のまとまりごとに決算情報・セグメント情報の公表の充実等を図る。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	計画どおり取組を実施している。

【書式Ａ】　施設名 本部事務局　処理番号 8000

大項目	Ⅳ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画
中項目	１．予算　２．収支計画　３．資金計画
事業名	予算、収支計画、資金計画

【年度計画】
１．予算　別紙のとおり
２．収支計画　別紙のとおり
３．資金計画　別紙のとおり

担当部課	本部事務局財務課	事業責任者	課長　香取 雄太

【実績・成果】
・30年度当初予算について、29年度中に予算配分を実施し、早期に業務を遂行できる体制を整備した。
・人件費予算は本部一括管理とし、無駄のない効果的な活用が図られた。
・不測の事態に備え本部留保した予算を、7月から9月にかけて発生した台風被害に対応する経費に充てるなど、法人全体で機動的な予算管理を実施した。
・精算払の外部資金により資金繰りが困難となる施設に対し、あらかじめ資金の貸与を行うなど、法人全体として効率的な資金管理を実施した。
・博物館総務課長会議を開催し、予定されている消費税率改定に伴う各種料金変更に関する検討を行うなど、自己収入の増加に向けた各博物館の取り組みについて情報共有を図った。
・四半期ごとに入金される運営費交付金について、国に対し各期の必要額をあらかじめ伝えておくことにより、計画的な資金管理を実施した。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 概ね当初計画に沿った管理が行われている。また、年度内に起こった不測の事態にも速やかに対応した。

【中期計画記載事項】
管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化並びに積極的な自己収入の増加に向けた取組を踏まえた予算及び収支計画による運営を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 計画どおり取組を実施している。

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 9100

大項目	Ⅴ　その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置
中項目	１．内部統制
事業名	内部統制

【年度計画】
内部統制委員会、リスク管理委員会を開催する。また、内部監査及び監事監査等のモニタリングを実施し、必要に応じて見直しを行うとともに、各種研修を実施し、職員の意識並びに資質の向上を図る。

担当部課	本部事務局総務企画課 監査室	事業責任者	課長　伊藤進吾 監査室長　清水功

【実績・成果】
（内部統制委員会、リスク管理委員会の開催）
・内部統制委員会を3回開催した。（9月18日、11月20日、31年2月25日）
・リスク管理委員会を3回開催した。（9月18日、11月20日、31年2月25日）
・洗い出したリスクの内、新たに3件についてリスク管理計画を策定した。
・29年度に策定したリスク管理計画の運用を進めた。
（内部監査及び監事監査等のモニタリング）
・監査室の機能強化として30年度から専任室長1人、室員2人の計3人を配置した。なお室員の併任は従前どおりとした。
・内部監査を以下の日程で本部事務局及び各施設を対象に順次行った。
　会計監査　10月22日～11月27日（全施設）
　給与簿監査　10月23日～10月31日（京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館）
　法人文書管理監査　31年1月（各施設による自己点検結果を基に、機構全体について書面監査を行った）
　情報システム監査・情報セキュリティ監査　31年1月8日・9日、1月17日（京都国立博物館、奈良文化財研究所）
　保有個人情報管理実地監査　31年2月14日、26日～3月1日（京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館、奈良文化財研究所、アジア太平洋無形文化遺産研究センター）
　ソフトウェア等監査　各施設で実施し会計監査の際確認を行った。
・監事監査を以下の日程で行った。
　定期監査（業務）　6月19日
　定期監査（会計）　決算時の監査　6月19日
　臨時監査（業務）　8月9日～10日　奈良国立博物館、奈良文化財研究所
　11月6日　東京国立博物館、東京文化財研究所
　31年2月13日～15日　京都国立博物館、アジア太平洋無形文化遺産研究センター、九州国立博物館
（研修の実施）・職員の啓発や能力向上による内部統制能力強化のため各種研修を実施した。（処理番号9430参照）

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 30年度より内部統制委員会とリスク管理委員会を年2回から四半期ごとの開催と変更し、第2四半期から各3回開催した。内部統制とリスク管理の運用状況を把握することで計画の確認、見直しを行い、新たに3件のリスク管理計画を策定した。 監査室の機能強化として30年度から専任室長1人、室員2人の計3人を配置した。 また、内部監査及び監事監査等・各種研修を積極的に実施した。

【中期計画記載事項】
コンプライアンスの徹底、理事長のマネジメント強化、リスクマネジメント等を含めた内部統制環境や規定を整備し、運用する。また、内部監査等により定期的にそれらの整備状況・有効性をモニタリング・検証するとともに、監事による監査機能・体制の強化に取り組み、必要に応じて内部統制に関する見直しを行う。さらに、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取組の改善を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 今中期計画の3年目として、28年度及び29年度に策定したリスク管理計画の運用を進めることができた。30年度に新たに策定された計画についても運用を進める。 併せて、監査室については、専任職員配置により監査体制の強化が図られた。内部監査や研修については、第3回の内部統制委員会で審議し承認された計画に従って、31年度以降も取り組みを行うこととする。 31年度以降も事業継続計画の策定を引き続き行う。

【書式Ａ】　施設名 本部事務局　処理番号 9210

中項目	２．その他
事業名	（１）自己評価

【年度計画】
運営委員会、外部評価委員会の開催等、外部有識者の意見を踏まえた客観的な自己評価を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。

担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長　伊藤進吾

【実績・成果】
・29年度の当機構における各事業及び調査研究等について自己点検評価を行い、報告書にまとめた。
・上記自己点検評価報告書を外部評価委員会（研究所・センター調査研究等部会：5月16日／博物館調査研究等部会・総会：5月29日）に提出し、外部有識者による評価が行われた。
・外部有識者の意見等を踏まえ「平成29年度自己評価書」を作成し、文部科学大臣に提出した。
・運営委員会（7月30日）を開催し、機構の管理運営の重要事項について理事長への助言がなされた。また、29年度の運営委員会で挙がった意見について、組織・事務・事業の改善状況を報告した。

【補足事項】

外部評価委員会 研究所・センター調査研究等部会（5 月 16 日）

外部評価委員会 総会（5 月 29 日）

運営委員会（7 月 30 日）

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ｂ	（判定根拠、課題と対応） 外部評価委員会及び運営委員会を開催し、外部有識者の意見を踏まえた客観的な自己評価を実施した。

【中期計画記載事項】
外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年１回以上事業に関する自己評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 自己評価の在り方を検討し、国立博物館における調査研究項目の取り扱いを再整理した。また、自己点検評価実施のほか、外部評価委員会及び運営委員会を開催し、自己評価の結果を組織・事務・事業等の改善に反映させることができた。 31年度以降も、事業評価の在り方について検討を進めるとともに、引き続き自己評価を実施し事業等への反映を図る。

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 9220

中項目	２．その他
事業名	（２）情報セキュリティ対策

【年度計画】
情報セキュリティ対策については、政府機関の統一基準群・ガイドライン等を踏まえ、情報セキュリティをとりまく環境の変化に応じて機構として必要な対応を検討し、規定等を適時適切に見直すとともに、これに基づき対策を講じ、不正アクセスや標的型攻撃等のリスクに対する対策、攻撃に対する組織的対応能力の強化に取り組む。
また、自己点検、監査を実施し、その結果に基づいて情報セキュリティ対策を改善する。

担当部課	情報システム・セキュリティ委員会	事業責任者	最高情報セキュリティ責任者(CISO)

【実績・成果】
・情報システム・ネットワークにおける情報セキュリティ対策については「政府機関の情報セキュリティ対策のための統一基準(平成26年度版)」に沿って28年度に改正した情報セキュリティ関係規程等に基づき、政府や関係機関からの情報に注視しながら適宜必要な対策を講じた。機構内各施設における情報セキュリティ対策の実施にあたっては、NICH-CERT連絡会にて情報共有、検討を行った。
・平成30年度版政府統一基準が公表され、規程等の改正検討を進めたが31年度に持ち越しとなった。31年度前半の改正を予定している。
・情報セキュリティに関する研修を全役職員を対象に、Eラーニングにて実施した。(31年1月15日～2月27日)
・情報セキュリティ監査は、外部機関に委託して実施した。(31年1月8日、9日、17日)
・セキュリティ向上を目的としたメールシステム統合の一環として、メール用ストレージを導入した。(8月1日)
・監査法人による監査の一環として、システム監査を実施した。(12月18日)

【補足事項】
・情報システム・セキュリティ委員会を1回開催した。(31年1月21日)
・NICH-CERT連絡会を2回開催した。(第1回：6月7日、第2回：12月6日)
・情報セキュリティ監査は、30年度は関西2施設（京博・奈文研）のシステムを対象に脆弱性診断を行った。
・情報セキュリティ対策の自己点検は、31年度より実施方法を変更するため、30年度はその検討準備期間とした。
・監査法人によるシステム監査では特に指摘事項はなかった。

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	計画どおり、政府統一基準に沿った機構の情報セキュリティ関係規程等に基づき、必要な情報セキュリティ対策を実施した。特に、メールシステムの機構内統合について、計画通り進めることができた。

【中期計画記載事項】
情報セキュリティ対策については、政府機関の統一基準群を踏まえ、情報セキュリティをとりまく環境の変化に応じて機構として必要な対応を検討し、規定等を適時適切に見直すとともに、これに基づき対策を講じ、不正アクセスや標的型攻撃等のリスクに対する対策、攻撃に対する組織的対応能力の強化に取り組む。
また、自己点検、監査を通じて情報セキュリティ対策の実施状況を毎年度把握し、その結果に基づいて改善する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	中期計画どおり、政府統一基準を踏まえて28年度に改正した規程・体制にて運用を継続し、情報セキュリティ対策を適切に実施した。

【書式Ａ】　　施設名　本部事務局　　処理番号　9300

中項目	３．施設設備に関する計画
事業名	施設設備に関する計画

【年度計画】

別紙のとおり施設設備に関する計画に沿った整備を推進する。

（別紙）　　施設設備に関する計画（単位：百万円）

施設設備の内容	予　定　額	財　　源
・東京国立博物館	762	施設整備費補助金
仮収蔵庫等整備	289	
本館リニューアル（緊急修繕）	473	
・奈良文化財研究所	116	施設整備費補助金
本庁舎建替工事	89	
飛鳥資料館煙突（冷暖房機用）取替工事	27	

担当部課	本部事務局環境整備課	事業責任者	課長　城山美香

【実績・成果】

（東京国立博物館）

・仮設収蔵庫等整備は、29年度から引き続き建物本体工事を実施中である。（31年10月完了予定）

・本館空調機整備他工事の入札を実施した。

（奈良文化財研究所）

・30年3月に新庁舎が完成したことに伴い、仮庁舎から新庁舎への移転、仮庁舎解体及び現状復旧を実施した。

・飛鳥資料館の冷暖房機用煙突について新たに煙突を設置し、既存の煙突を封じ込めた。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	概ね所期の目標を達成している。

【中期計画記載事項】

施設設備の老朽化度合い等を勘案しつつ、別紙４のとおりの計画に沿った整備を推進する。

（別紙４）　　施設設備に関する計画（単位：百万円）

施設設備の内容	予　定　額	財　　源
・東京国立博物館	18,657	施設整備費補助金
仮収蔵庫等整備及び本館リニューアル工事（平成 28 年度～32 年度）	18,612	
柳瀬荘黄林閣屋根茅葺工事　（28 年度）	45	
・京都国立博物館	992	施設整備費補助金
本館収蔵庫等改修及び本館免震改修等工事（平成 28 年度～32 年度）	992	
・奈良文化財研究所	1,530	施設整備費補助金
本庁舎建替工事　（平成 28 年度～29 年度）	1,530	

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	概ね初期の目標を達成しているが、今後の施設整備計画と予算確保の不一致等の諸課題について一層の取組が必要である。

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 9410

中項目	４．人事に関する計画
事業名	（１）中長期的な人事計画の策定 （２）評価制度の導入

【年度計画】
（１）中長期的な人事計画の策定を検討する。その際、理事長の裁量によって、一定数の職員を配置できる仕組みを併せて検討する。
（２）職員の能力向上と組織のパフォーマンス向上を目的とした評価制度を導入する。

担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長　伊藤進吾

【実績・成果】
（１）中長期的な人事計画の策定
・事務系職員の人事については、9月に各施設の副館長等にヒアリングを行った。また、交流機関と9月から10月にかけて31年度以降の人事交流について打ち合わせを行った。
・研究職の人事に関して、採用については、理事長、理事、施設の長で構成する研究職員人事選考委員会において、採用の必要性、緊急性等を考慮のうえ、採用を必要とする専門性（分野）、採用時期等を審議し、決定している。また、人事異動については、研究調整役が各施設の長と調整し、理事長が決定する仕組みを設けている。
・人件費管理の観点から、雇用経費を外部資金等の運営費交付金以外を財源とすることで、人員の確保を図っている。

（２）評価制度の導入
・29年10月より常勤職員を対象として評価制度の試行を開始し、30年度も引き続き試行を実施した。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
事務系職員の人事について、各施設・交流機関との協議により、人事交流も含めた人事計画の策定を推進した。研究職の人事についても、人事選考委員会を通した採用の実施や理事長の決定による人事異動など、組織としての包括的な人事計画に向けて取り組んでいる。
評価制度については、29 年 10 月から試行を開始し、30 年度も引き続き試行を実施した。

【中期計画記載事項】
中長期的な人事計画等を策定し、理事長の裁量によって一定数の職員を配置できる仕組を導入する。また、国家公務員の制度改革や社会一般の動向を勘案しつつ、職員個々の能力向上を通じて、組織のパフォーマンスを高めるための制度を導入する。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
事務系職員の人事について、各施設・交流機関との協議により、人事交流も含めた人事計画の策定を推進した。研究職の人事についても、人事選考委員会を通した採用の実施や理事長の決定による人事異動など、組織としての包括的な人事計画に向けて取り組んでいる。
評価制度については、31年度も試行期間として引き続き施行し、課題等を洗い出す。

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 9420

中項目	４．人事に関する計画
事業名	（３）能力や適性に応じた採用・人事の実施 （４）女性の活躍の推進

【年度計画】
性別、年齢、国籍、障がいの有無等にとらわれない、能力や適性に応じた採用・人事を引き続き行う。

担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長　伊藤進吾

【実績・成果】
（３）能力や適性に応じた採用・人事の実施
・28年度に、60歳を超える優秀な人材を採用することができるよう、任期付職員制度の改定を行った。
・29年度は、係員相当の職以外も担当できるよう再雇用制度の改定を行った。

（４）女性の活躍の推進
・6月に中間層（係長級～課長補佐級）を対象とした外部講師よる集合研修を実施し、当該研修のなかでダイバーシティを取り上げ、ダイバーシティの推進についての理解を深めた。
・1月から2月にかけて全職員向けにＥラーニングによるハラスメント防止研修を実施し、ハラスメントに対する理解を深め、発生防止に向けた意識の向上を図った。

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 機構発足時より、採用にかかる様々な制度設計を行うことにより、能力や適性に応じた採用・人事を着実に実施できている。 また、ハラスメントについて社会的に頻繁に問題が取りざたされる情勢の中で、集合研修、Ｅラーニング研修等を実施し、ハラスメント防止の理解を深められるよう努めた。

【中期計画記載事項】
②性別、年齢、国籍、障がいの有無等にとらわれない、能力、適性に応じた採用及び人事配置を行い、職員の多様な働き方を促進する。
③多様性を受容できる組織風土の醸成を図るため、例えば女性や障がいのある方の活躍を推進するなどし、それを支える就業環境の整備や教育・研修を実施する。

【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 30年度も引き続き、性別、年齢、国籍、障がいの有無等にとらわれない、能力や適性に応じた採用・人事を引き続き行う。また、就業環境の整備やハラスメント防止の注意喚起、ダイバーシティの推進に関する研修等を引き続き実施する。

【書式A】　施設名 本部事務局　処理番号 9430

中項目	４．人事に関する計画
事業名	（５）職員のキャリアパス形成のための研修

【年度計画】
職員のキャリアパスの形成のため、職位に応じた研修の実施を企画・立案する。

担当部課	本部事務局総務企画課	事業責任者	課長　伊藤進吾

【実績・成果】
本年は以下の研修を実施した。なお、係長級～課長補佐級を対象とした中間層研修は、30年度に新規に実施した。

研修名称	日程	受講対象者	受講者数
＜階層別＞			
中間職研修	6月1日、6日	係長級～課長補佐級	55人
新任職員研修	7月18日～20日	29年度以降の新任職員等	44人
＜分野別＞			
研究倫理教育研修 (e-ラーニング等)	10月12日他（各施設で実施）	研究者番号を持つ研究員、事務担当者等	216人
会計事務研修	11月8日～9日	機構内の会計系職員	24人
施設系職員研修	9月27日～28日 3月7日～8日	機構内の施設系職員	12人 14人
＜能力開発＞			
ハラスメント防止に関する研修	7月19日	29年度以降の新任職員等、ハラスメント防止等委員会委員及び相談員等	47人
健康管理に関する研修	7月19日	29年度以降の新任職員等	47人
情報セキュリティ研修	7月19日	29年度以降の新任職員等	43人
接遇研修	7月20日	29年度以降の新任職員等	22人
コンプライアンス教育研修 （科研費説明会と併せて実施）	9月18日他(各施設で実施)	研究者番号を持つ研究員、事務担当者等	371人
＜e-ラーニング研修＞			
ハラスメント講座、情報セキュリティ入門講座	31年1月15日～2月27日	機構全職員	676人

【補足事項】

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
30年度は機構発足後初めて中間層研修を実施した。職位に応じた研修を実施することにより、職員のキャリアパス形成に寄与することができた。

【中期計画記載事項】
④職員のキャリアパスの形成に寄与するために、研修・人事交流等を多角的に企画・立案する。特にグローバル化・多様化する社会に対応できる人材の育成を図る。

【中期計画に対する評価】
評定：B

【判定根拠、課題と対応】
中期計画に沿って新たに管理職研修を実施することで、職員のキャリアパス形成に寄与することができた。31年度以降も引き続き、職員のキャリアパス形成のため、各種研修や人事交流を企画・立案・実施していく。